

AC

Gunsho ruiju

145

G855


1939

v.13

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY



Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

<http://www.archive.org/details/gunshoruij13hana>

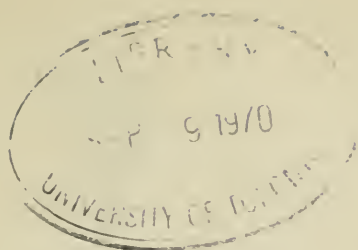
昭和五年六月出版

羣書類從

第拾參輯

東京

續群書類從完成會



AC
145
G855
1939
v. /3

群書類從第拾參輯目次

和歌部歌合

卷第二百五

永福門院歌合嘉元三乙巳年正月四日
後二條院御在位……………一

歌合嘉元三年三月……………三

外宮北御門歌合元亨元年冬……………六

新玉津嶋社歌合貞治六年三月廿三日……………一六

卷第二百六

五百番歌合天授元年……………二九

卷第二百七

內裏九十番御歌合應永十四年十一月廿七日……………八七

仙洞歌合寶德二年十一月……………九七

卷第二百八

百番歌合寶德三年八月十一日……………一五

內裏歌合康正元年十二月十七日……………一三〇

卷第二百九

按察使親長卿家歌合文明五年十一月七日……………一三九

卷第二百十

武州江戶歌合文明六年六月十七日……………一六一

文明九年七月七日七首歌合……………一六五

文明十年八月二日歌合……………一八〇

文明十年九月盡歌合……………一八六

卷第二百十一

將軍家歌合文明十四年六月十日……………一九二

將軍家歌合文明十四年閏七月……………二〇五

殿中十五番御歌合……………二〇九

三十六番歌合文龜三年六月十四日……………二一一

卷第二百十二

蜷川親孝家歌合大永三年六月……………二二一

十五夜三首歌合永祿六年八月……………二二七

秋十五番歌合永祿六年八月廿三日……………二三二

後陽成院御歌合文祿三年八月……………二三五

卷第二百十三

近江御息所歌合……………二四一

源順馬名合……………二四二

一條大納言家歌合……………二四四

多武峯往生院歌合正月庚申夜……………二四五

西國受領歌合……………二四六

源大納言家歌合一日之内合之……………二四八

播磨守兼房朝臣歌合……………二四九

祿子内親王家庚申夜歌合……………二五一

祿子内親王家櫻柳歌合……………二五二

祿子内親王家夏歌合……………二五三

山家三番歌合……………二五五

源宰相中將家歌合……………二五六

雲居寺結緣經後宴歌合……………二五八

爲兼卿家歌合……………二六二

卅番歌合……………二六六

卷第二百十四

公武歌合……………二七一

武家歌合……………二七八

地下歌合……………二八八

卷第二百五

前十五番歌合……………二九六

後十五番歌合……………二九七

時代不同歌合……………二九九

新時代不同歌合……………三一一

卷第二百十六

定家家隆兩卿撰歌合……………三二九

閑窓撰歌合建長三年閏九月盡……………三三二

三十六人大歌合弘長二年九月……………三三七

女房三十六人歌合……………三四七

卷第二百十七

御裳濯川歌合作者西行法師
判者俊成卿……………三五〇

宮河歌合作者西行法師
判者定家卿……………三五七

卷第二百十八

慈鎮和尚自歌合……………三六五

日吉社歌合嘉禎元年十二月廿四日奉納之……………三八四

卷第二百十九

後京極殿御自歌合……………三八七

卷第二百廿

後鳥羽院御自歌合嘉祿二年四月廿二（乙）日
家隆卿賜之判進云々 四〇三

定家卿自歌合四十八首歌合 四〇六

家隆卿百番自歌合 四〇九

隆祐朝臣百番自歌合 四一九

卷第二百廿一

永福門院百番御自歌合 藤原鐔子 四二九

慈照院殿御自歌合 足利義政 四三九

堯孝法印自歌合 四四八

道堅法師自歌合 四五一

卷第二百廿二

豐原統秋自歌合 四五六

十市遠忠自歌合 中原遠忠 四六二

細川左京大夫自歌合 四六九

卷第二百廿三

元久詩歌合 四七五

內裏詩歌合建保元年二月廿六日 四八三

卷第二百廿四

現存卅六人詩歌建治二年 四八九

五十四番詩歌合康永二年 四九二

詩歌合 守遍 四九九

卷第二百廿五

文安詩歌合 五〇三

詩歌合文明十四年九月廿八日 五一二

詩歌合文明十五年正月十三日 五一六

卷第二百廿六

寬平菊合 五二七

上東門院菊合和歌 五二八

朱雀院女郎花合 五二九

內裏詞合康保三年八月十五夜大盤所
にて前裁合せたまふ 五三一

東三條院瞿麥合 五三二

後冷泉院根合 五三三

郁芳門院根合 五三五

備中守仲實朝臣女子根合康和二年
五月五日 五三九

圓融院扇合 五四一

堀川院艷書合 五四三

正子內親王繪合永承五年四月廿六日……………五四五

小野宮右衛門督家歌合精本載在續篇十五輯上故從省略……………五四七

同家歌合……………五四七

卷第二百廿七

顯昭陳狀……………五四八

蓮性陳狀……………五七〇

群書類從第拾參輯目次終

群書類從卷第二百五

檢校保己一集

和歌部六十歌合廿六

永福門院歌合

嘉元三乙巳年正月四日
後二條院御在位

戀十首

一番

左將

中將

みる人も物を思はぬさまなれは心のうらをたれにかたらむ

右

從三位親子

幾たびかもの思はしとすつれともこゝろの下に戀しき物を

二番

左將

永福門院内侍

まことかと嬉しかりつる一言にさらなる思ひまた色そそふ

右

新宰相

人を只恨ることそなかるへきそれによらすはさそいかにせん

三番

左

親子

一すちにこひたつ夜半のそのうちは待より外の事もましらす

右將

中將

いかゝあらん今夜さてももの行ふより空なる月そ常にみらるゝ

四番

左將

新宰相

あらぬ方にきゝ果るこそ悲しけれ空しきまてに頼まゝしよを

右

内侍

恥しやおもへはいかに思ふらむ心のまゝにうらみつることを

五番

左將

中將

けふの日よいかなる日そと人もうく身も恨めしく人も戀しき

右

親子

思ふことの慰ますのみなりゆけはあるましきかと身を哀なる

六番

左

内侍

見るもうく聞るゝもうき同し世といとふかはては父そ悲しき

右將

新宰相

思へかし哀ならてもいかゝあらん馴てひさしきなかの契りそ

七番

左將

親子

いつはりはかくれぬ物をさらはたゝまたとも何と人のいふ覽

右

中將

うき事もくやしき事もさこそはと思ひし方そたかはさりける

八番

左

新宰相

人も我を思ひつらむと思ひせは嬉しくやあらん悲しくやあらむ

右

内侍

思はずと恨みし人のあやにくにわれしたのめは又うくそなる

九番

左將

中將

戀しきぞ思ふそとのみいひしかとそのしるしなる一言もなし

右

親子

しのはれす思はれまさるはてはたうき身の上も忘れそ行

十番

左

内侍

變るか人けしきの見えゆくにたまさまにそふ思ひ哉

右將

新宰相

つらきあまりおもひとむと思ふ程の心に過て何か悲しき

十一番

左將

親子

うき世にはなからへんともおもはねと命のまゝに哀ゆく身を

右

中將

うきかうきは易くやはあらむ人は唯哀なるこそ猶うかりけれ

十二番

左將

新宰相

何故にとはさりつるといはんより思ひながらと聞はうらめし

右

内侍

いましたゝ哀かけなむ行末をみはつるまでは身のあらはこそ

十三番

左將

中將

あはぬまは今をあはしと思へ共あふとしあへはあはんとぞ思

右

親子

おひみんといふともよもや道もあらし我に知れぬ偽も哉

十四番

左將

新宰相

さりとともとおもふ心を過ゆけはなにしかゝりて思ひしもせん

右

内侍

今さらに思ふことこそおもはるれ雨のふるにも風の吹にも

十五番

左將

親子

かはりはてし人は残らぬいにしへを忍ぶ心に忘れかねぬる

右

中將

世々へても哀なりしそわすられぬうきを久しと誰かいひけん

十六番

左將

内侍

あきからす見えし情の程もへぬされはかくこそなる世也けれ

右

新宰相

しりぬれは我こそ心悲しけれどうきふしはきかしと思ふ

十七番

左

中將

よそなからその傍をみるかこと心のうちをしることもかな

右將

親子

ありしうちかあらす成ぬる今のみかされは一方は夢かと思ふ

十八番

左將

内侍

ためしなのうさやつらさやこのきはゝ侘てやしたゝ恨てやのく

右

新宰相

恨みてもなけきてもけに果はたゞ我を思へといはまくほしき
十九番

左勝

親子

思ふ事にあまたの時を移すなかよいつの逢日をまちたにもせず

右

中將

おもひいて又思ひのみ出くれはいかにも人を忘れかねぬる

二十番

左勝

新宰相

君にかくなれすは何に慰まむうきおりことはくやしけれども

右

内侍

いかにとは君を心にますと思ふあすしらぬよの定めなきにも

嘉元三年正月之頃。於三永福門院御所。各十首詠之。判詞
點持明院殿震筆也。希代之重寶尤比類少者歟。容易不レ可二
外見一者也。

右永福門院歌合以百花庵宗固本校合

歌合嘉元三年三月

題

寄花春

寄月戀

寄雲雜

作者

左

女房

新宰相

右中將藤原朝臣範春

正四位下行右近衛權中將兼春宮權亮藤原朝臣清雅

從一位藤原朝臣敦良女

正四位下行右近衛權中將藤原朝臣俊兼

右

從三位親王

中將

宮内卿

永福門院小兵衛督

生覺

永福門院内侍

講師

讀師

判者

一番 寄花春

左

女房

猶もこのうきよの色そ捨かたき花のなきけのはるになれても

右

從三位親子

九重の池のみきはの花さかり馴しその世の春そ戀しき

二番

左

新宰相

あさほらけ長閑きいろもこもりけり春の心や花にひらくる

右

中将

春やさかり野山を見ればおしなへて梢は花のさかぬしもなし

三番

左

範春

おりをえて四方の櫻もさくなれは春は名たかき時にそ有ける

右

宮内卿

花を惜み春をしたふととにかくに彌生はいつも物をこそ思へ

四番

左

清雅

あかなくのなかめの程にかへさは花よりさきの春の日數を

右

小兵衛督

なへて世の花てふ花は咲ぬらしはるも盛になりぬとおもへは

五番

左

藤原朝臣女

ちらぬまの花に詠むる春のとき幾夜もかくてあらはと思ふ

右

生覺

よそになる身をは忘れて此春もむかしのまゝに花になれぬる

左	俊兼	春をしらん我身よいつは時しあれは四方の梢に花もさきけり	右	内侍	よも由は霞のとけみをしてゆく春にかなへる花の色かな
左	女房	うらめしくつれなの月やなき愁へこひかこてとも同じ影なる	右	親子	見る月に哀のいかゝそはさらむうきにあらしとおもひなる頃
左	新宰相	獨のみたゝ夜とともに月をみてかこつかたなき事をしと思ふ	右	中将	こよひ我いかさまにしてなくさまむ月は哀に人は戀しき
左	範春	まつ人はむなしき床のひとりねに頼めぬ月の影のみそさす	右	宮内卿	またしとは思へとも猶月影のふくるをみればまたそかなしき
左	清雅	うき今の泪のうちになかむれば月も其夜にかけそかはれる	右	小兵衛督	うれへ盡す心を月はしるらめは人にかたらぬ友とたのまむ
左	藤原朝臣女				

わすられぬ月を哀とおもひいて、落る涙のやかてとまらぬ

右勝

生 覺

よなくの月をかたみと思へとも見し世にかへる俤はなし

十二番

左勝

俊 兼

こぬ人をなとかすゝめぬ戀しさもつらさも誘ふ夜半の月かけ

右

内 侍

常よりも人はこゝろに戀しくて向ふこよひの月そかなしき

十三番 寄雲雜

左持

女 房

うきてふる身のはかなさも悲しきはたゝめのまへの夕暮の雲

右

親 子

荒き雨は軒の檜はらにしたゝりて向ひの山も雲にかくれぬ

十四番

左

新 宰相

かけつらく暮ぬと見つる大そらの雲のたへまにまた日影さす

右勝

中 將

山きよく雨ははれぬる夕くれのふもとの杉にくもそのこれる

十五番

左持

範 春

見るまゝにほしの光もきよくなりて雲を晴行曉のそら

右

宮内卿

むら雲に夕ひのかけは匂ひくれて向ひのやまの色そうつろふ

十六番

左

清 雅

はるくといくへ雲路にへたつらむ忍ふこゝろにちかき都を

右勝

小兵衛督

けふも又たゝ大そらの雲にのみわかなかめをはつくしぬる哉

左

藤原朝臣女

夕暮のくもの行そらいつよりもさまゝものを哀れとぞみる

右勝

生 覺

返り見るたにゝ一むら雲をりてあらしにこゆる峯そはるけき

左

俊 兼

雲のゆくそなたの空をみやことではかなくしたふ旅の夕くれ

右勝

内 侍

山かけやゆふへの眺めしつかにて谷より雲ののほるをぞ見る

右嘉元三年歌合以一本校合

外宮北御門歌合 元亨元年冬

題

落葉

冬月

朝雪

不逢戀

待戀

恨戀

山家松

懷舊夢

神祇

作者

左

右

禰宜度會神主常良

禰宜度會神主朝棟

禰宜度會神主家行

藤原憲家女

禰宜度會神主貞蔭

權禰宜度會神主延明

權宜度會神主貞香

權禰宜度會神主延誠

權禰宜度會神主延良

權禰宜度會神主秀長

權禰宜度會神主行俊

權禰宜度會神主雅蔭

權禰宜度會神主富行

權禰宜度會神主盛行

權禰宜度會神主延親

權禰宜度會神主雅冬

權禰宜度會神主朝名

藤原家業

講師

讀師

判者

小倉中納言入道

一番

落葉

左

禰宜度會神主常良

もろく散木の葉はかりや横の屋に過る時雨の音のこすらん

右

うき雲のはれても猶そ時雨ける木のはをさそふ峯のあらしに

左右哥。心詞尤同。可レ爲レ持。

二番

左

とひすくる跡にももろき泪かなこのはの音はよそに時雨て

右

浮雲ははれ行跡の山風に猶時雨るゝや木のは成らむ

右哥。姿似レ宜。尤爲レ勝。

三番

左

吹よはるかたにやふかく積るらん嵐にもろきみねのもみち葉

右

ちりしくも又さそはるゝ朝かせに霜のとたえを見る木の葉哉

左哥。いさゝかまさるへきにや。

四番

左

ふきさそふ風のまゝなる木の葉にも己れと散や猶ましらん

右

時雨かと聞はかりにや吹風にさそふこのはも袖ぬらすらむ

兩首幾の無三勝劣一と申侍らん。

五番

左

定めなく時雨るゝ頃とおもはすは何にこのはの音まかへまし

右

吹かせにもろき木の葉を時雨かときゝまかへてもぬるゝ袖哉

爲レ持。

六番

左持

權禰宜度會神主行俊
もろくちる程もしられて吹風の絶まにも猶散このはかな

右

權禰宜度會神主雅蔭
音たてし木のはやうすくなりぬらん誘ふにつけてよはる風哉

右。結句よは／＼しく侍。左まさると申へし。

七番

左持

權禰宜度會神主富行
しくれつる音はつれ行山風にまたをとつてふる木のは哉

右

權禰宜度會神主盛行
横の屋に時雨でもらぬ音つれや嵐にたくふ木のはなるらん

左右のをとつれ。持とすへし。

八番

左持

權禰宜度會神主延親
ふく風のさそはぬひまをのつから心ともろくちる木の葉哉

右

權禰宜度會神主雅冬
聞たゆむひまこそなけれ木のは散やとは時雨の幾めぐりとも

左哥。かやうのらた見侍しやうに侍る。右歌また勝へき歌

にあらず。

九番

左持

權禰宜度會神主朝名
とひすつる時雨の跡の山風にまたをとつて散木のはかな

右

藤原家業
さそひ行風の跡の山のはに残るもみちの色そすくなき

勝負不三分明。

十番

冬月

左持

しくれつる雲まに出て定めなきそらのならひは月もしりけり

右

家の業
山の端に時雨るゝ雲の吹すてゝ風の跡よりいつる月かな

右。下句見る心地し侍。左。聊勝とや申へし。

十一番

左持

延親
さやけさは秋にかはらぬ月影のこほるそ冬のしるし也ける

右

雅親
影までも秋にかはりてこほるよの月のかつらに霜や置らむ

左右同科なから。霜には所をき侍へきにや。

十二番

左

富行
さゆる夜のひかりを霜に置そへてひとつにこほる冬の月かけ

右持

盛行
しくれぬる雲をはよそに吹すてゝ嵐にこほる冬のよの月

右。下句すこしはまさり侍らん。

十三番

左

行俊
更るよのあらしにこほる池水にやとらぬ月の影そさえゆく

右持

雅蔭
とひなれし露の名残をしたひてやかれ野の月の霜にさゆらん

同前。

十四番

左持

延良

冬ぞ見し秋のかたみを淺茅生のそてに残して冰る月かけ

右

秀長

しくれけるもりの木葉の跡とめてもりくる月の影の淋しさ

左。勝とすへし。

十五番

左持

貞香

霜むすふ尾花はくちて我袖の涙をつゆとやとる月哉

右

延誠

しも結ふおはなかそてをよすかにて露の跡とふ野への月かけ

左右の袖おなし。爲レ持。

十六番

左持

貞蔭

見るまゝにさえこそまされ山風のこほりて更る冬のよの月

右

延明

木のまもるこゝろつくしの秋よりも猶さえまさる冬の夜の月

兩首同じほととの事にや。

十七番

左

家行

露ならて玉とそ見ゆるをく霜のこほれは移るあさちふの月

右持

憲家女

木からしの雲ふきさそふ山のはにさえて残れる冬の夜の月

左。露ならぬ玉霜にて侍よし。おほつかなし。右難なくい

ひくたし侍。尤かち侍へし。

十八番

左

常良

この葉のみ嵐のつてに時雨きてくもらぬ空に冴る月かな

右持

朝棟

淺茅生の露の跡とふ月のみや霜にもかれぬ秋の面かけ

右哥。下句めつらしく見え侍返々勝と申へくや。

十九番

朝雪

左

常良

はらはねは朝たつ袖も白妙の雪をかさぬる旅衣かな

右持

朝棟

水くきの岡のやかたは跡もなしねての朝けの雪のふかに

猶右尤よし。可レ爲レ勝。

二十番

左持

家行

わか跡を人もとめてや歸るらん今朝ふみ分る雪の下道

右

憲家女

夜のまより雲のみふかくかさなりてまた一重なる今朝の初雪

左哥には雪の下みち聞ならはす。老老之故郷。無_レ左右_二不_レ

能_レ付_二勝負_一。

二十一番

左

貞蔭

霜かれしあとさへけさは絶にけり雪の下なる野へのみとりは

右持

延明

今朝のまをとふへき人は誰なればたのめぬ跡を雪に待らん

右の下句。左にはまさりてや侍るへからむ。

二十二番

左持

貞香

明わたる外山も雪のふかしとや出る日影の猶こほらん

右

延誠

うき宿の習ひになさぬ雪ならはとはるゝ跡もけさやまたれん

左右爲レ持。

二十三番

左勝

延 良

今朝も猶人のとはすは庭の雪に我あとおしむかひやならむ

右

秀 長

とはれねは我出かての跡をのみけさはつけつる庭の雪哉

右。第二句如何にとよめるにか。不レ得レ心。いか様にも。左

勝とすへし。

二十四番

左

行 俊

今朝はまた庭にやつまぬ雪なれとはれはいかゝ跡も厭はん

右勝

雅 蔭

けさも猶とふ人をそき庭のゆきにまたぬ日影の跡やいとはむ

右第四句。こゝろ有さまに侍にこそ。

二十五番

左

富 行

終夜つもれる程もかつ見えて雪にそしらむ窓の朝明

右勝

盛 行

ゆきのうちに心かよはゝとふやとて我をも人のけさや待らむ

左。結句不ニ庶幾。以レ右爲レ勝。

二十六番

左

延 親

旅ころも朝たつ道の行末もまよふ計の野へのしら雪

右勝

雅 冬

いつくをか干かたともみん朝朗なみにつゝきて積る白雪

兩首。いつれと申かたく侍れと。右。聊風情ありて侍にこそ。

二十七番

左

朝 名

草のはら朝たつ野邊の行末を誰にとはまし雪の下道

右勝

家 業

いつのまに人のとはぬもうらむらん今朝こそつめれ庭の白雪

右まさり侍へし。左結句の事先に申。

二十八番

左勝

朝 名

うき身をは人もゆるさぬ命もて逢にかへはと何頼むらん

右

家 業

つれなさもうき身もたえてなからへは等閑なりと人や思はん

左。例風情に侍れと。爲レ勝。

二十九番

左

延 親

何こともむくひとならはうき人のつれなさも又みにや歸らん

右勝

雅 冬

つれなさのうつゝに限る中ならは夢にや人のあふと見えまし

右爲レ勝。

三十番

左勝

富 行

ことの葉の情もあらはをのつからうきにや残る涙ならまし

右

盛 行

數ならぬ身をかこてとや偽の情にたにもなをもらすらん

左哥まさり侍へし。

三十一番

左持

行 俊

こひしなん命より猶なき跡におしかるへきは憂名也けり

右

雅 蔭

かひなしや後の世とたに逢事を契らぬ中にすてむ命は

左右よろしく侍る。勝劣不_レ辨。

三十二番

左

延 良

つれなきをしたひ忘ぬとし月のつもれる程は人もしるらん

右持

秀 長

逢事にかへはと思ふあらましの末もたのまぬわか命哉

右。いさゝか勝侍にや。

三十三番

左持

貞 香

こりす猶したふ心よつれなきのはてもや有と何たのむ覽

右

延 誠

つれなきの程をしらすは同じ世になからへはとも頼れやせむ

左右。幾勝劣見え侍らず。

三十四番

左持

貞 蔭

等間のつれなさならは数ならぬ身を忘てもしたはれやせん

右

延 明

いたつらにうき名なかつて妹せ川へたつる中は逢せたになし

同鉢。

三十五番

左持

家 行

待戀

右

憲家女

までといふ誰あらましになからへてうきに命の猶残る覽

つれなさやおもひよはるとなからへて待みる程の命とも哉

左右哥。心詞無_三勝劣_二侍へし。

三十六番

左持

常 良

つれなきもはてしあらはと頼身の心なかきや命成らん

右

朝 棟

つれなきをいつまでとてかしたふらん命は人のかきり有世に

此兩首。とりく_二に優に侍歟。

三十七番

左持

常 良

かはるやと人をうたかふ心にてとはて更るもいと、かなしき

右

朝 棟

待よひも誰あらましに更ぬとてとはれは人の憂になすらん

左。聊可_レ勝歟。

三十八番

左

家 行

更てうき影ともなるはまつ事のまた身に残る山のはの月

右持

憲家女

宵のまは待に頼みもあるものを更るもつらき月のかけ哉

右聊勝へし。左第三句より下。戀哥としも不_レ聞歟。

三十九番

左持

貞 蔭

偲のつらさにこりぬ心かなちきれば人の猶またれつゝ

右

延 明

うき人の偽しるく更る夜に猶まちすてぬ程もつれなし
兩首爲レ持。

四十番

左持

貞香

せめてなと來ぬ夜あまたの偽をまたしとたにも思はさるらん

右

延誠

とはれけるいつの夕へのならひとて契れは人の猶またるらむ

又爲レ持。

四十一番

左持

延良

偽もいつの限にたのめとて今よひも更る契なるらむ

右

秀長

宵のまとおもはせめて偽の契もたのむかたやあらまし

兩篇なをつきかたく侍へし。

四十二番

左

行俊

たのめぬを我あらましに待よひの更るは人の偽もなし

右

雅蔭

いつはりとおもふ心も誰なれは猶まちすてぬ夕なるらん

此左右。心々可レ爲レ持之處。右哥。聊心ある舛に侍けり。

四十三番

左

富行

さりともとまづに頼みを残す夜の更もつらき鐘の音かな

右

盛行

とはれすは後のつらさとなりやせむこよひは頼む人の言のは

右。心々敗さまに侍へし。

四十四番

左持

延親

まちあかす我あかつきの鐘の音をたか別れにかなして聞らん

右

雅冬

有明の月は雲ぬに出ぬれとまたれてとはぬ人そつれなき

右。有明のつれなきみゝなれ侍。左のかね。勝ときゝなき

れ侍る。

四十五番

左

朝名

とはるへき頼をなにゝ殘してか思ひもすてぬゆくゑ成らむ

右

家業

偽はなか／＼うしと思へとも契れはたのむゆふくれのそら

右は。猶心有て侍へくや。

四十六番

左持

朝名

慕ひてもかひなき身こそかこたるれ人の心のつらきのみかは

右

家業

身の程をおもひしりてもうき人のつらさにたへぬ我なみた哉

兩首宜舛に侍。しゐて勝負を決かたし。

四十七番

左持

延親

しらせはやまくすか原の秋風にたへぬ恨のありと計に

右

雅冬

つらからは思ひもたえて何とたゝしたふ恨の猶のこる覽

此左右。さることに侍。おなし程に申へし。

四十八番

左持 富 行
人をのみつらきになして恨るや身のとかしらぬ心なるらん

右 盛 行
こゝろにはのこる恨のありとたにことに出ねは知人やなき

同前。

左持 行 俊
四十九番 かくくらす涙にまけてつらさをも思ふ計はいひそしらせぬ

右 雅 蔭
うき身そと思ひしりぬる心をは誰になしてか又うらむらん

此題 面々うらみノ、と侍に。左。まかされて侍珍敷や。勝

と申侍へし。

五十番 左持 延 良
ことほりをおもひしらすは數ならぬみを忘れてやなを恨まし

右 秀 長
身をしれは人の心のつらさをも恨るまでの言の葉そなき

左右こゝろく 不レ可レ有ニ勝劣ニ歟。

五十一番 左持 貞 香
心にやさても残るらん言の葉にいひ盡すへきつらさならねは

右 延 誠
さのみとていはぬ日數の移をもうらみよはると人や思はん

左、勝侍にや。

五十二番 左持 貞 蔭
身

身

身

身

身

身

身

身

身

身

身

右 延 明
身の程をおもひもしらはせめてなと人のつらさを忘さるらん

左右。心詞不レ替にや。

五十三番 左持 家 行
よしやたゝ風のたよりの眞葛原うらみしかひも有みならねは

右 憲 家女
恨みわひ涙に袖そ朽ぬへき我みひとつの憂になせとも

此番も。無ニ獲勝劣ニ侍。可レ爲レ持歟。

五十四番 左持 常 良
つらさをもたへて命のなからへは世にためしあス恨とやせむ

右 朝 棟
うきを身の咎とはかりはしりなからつらさそ人に猶残りける

兩首。心々とりくゝに侍る。

五十五番 左持 常 良
とふ人は絶てあらしの音信て松にのみきく山かけの庵

右 朝 棟
たえてすむ友としきけは淋しさもうきになされぬ峯の松風

此兩首。とりくゝに侍。よろしき持と申へし。

五十六番 左 家 行
馴なと思ひしよりも淋しきはしのふみ山のまつの夕風

右 憲 家女

身

身

身

身

身

身

身

身

身

身

身

身

としをへていく世の夢を残しけん枕になるゝ峯の松かせ
左。しのふみ山。何とよめるにか。右はおほつかなき所な
く。優に侍にや。

五十七番

左持

心をもすめとてしめし宿なればさひしき松の風もいとす

右

松風の吹ぬたえまも淋しさの猶かこたるゝ山かけのいほ

兩首。持に侍へきか。

五十八番

左持

たえすとふ松の嵐の音つれはなれてもさひしやまかけの庵

右

なれなはと何思ひけむ淋しさはおなしみ山の松の夕風

又無二勝負一や侍らむ。

五十九番

左持

さひしさをいかにしのへとまつ風のとひも忘れ軒はなるらん

右

山里のならひとおもふ淋しさもわけてしらるゝまつ夕風

勝負猶不分明。

六十番

左持

やま蔭の柴の庵はしはしにて軒はの松や千年をもへむ

右

淋しさをうきになしても山さとに聞すてられぬ松のゆふ風

左。祝言珍敷心。勝侍へくや。

六十一番

左持

ならひそとおもひなすにも山里の猶さひしきは松の夕かせ

右

たゆむまはしはしまきるゝ淋しさもなを忘れぬ軒の松かせ

左右。初五字おなし程に聞ゆるにや侍らん。

六十二番

左持

庵はまた身をもかくさぬ山里に心こそすめ軒のまつ風

右

いつとてもとふ人はなき山さとに心と誰をまつゆふ風

左右おなしかるへし。

六十三番

左持

なれなはとおもひし峯の松風になを淋しさをかこつ宿哉

右

さひしさはさらても同じやま里に松のあらしを何かこつらむ

同前。

六十四番 懷舊夢

左

たのますよみるもはかなき夢路より面影はかり通ふ昔は

右持

ぬるかうちの夢には道もかひそなき現にかへる昔ならねは

兩首。心同といへとも。右少し勝と申へくや。

六十五番

富行

盛行

延親

雅冬

朝名

家業

朝名

家業

左

延親

今更にむかしを忍ふね覺哉なこりを夢のすゑにのこして

右持

雅冬

遠さかる昔を今と見る夢の覺るたゝちも現なるかは

右持。結句いかゝとみえ侍に。左。夢のする。なを聞ならは
す侍。右勝とすへし。

六十六番

左

富行

はかなしやさむれはもとの古に又立かへるゆめのをも影

右持

盛行

をのつからみる儂もとまらぬは昔にかへる夢路也けり

右は殊にやすらかにて。勝侍へし。

六十七番

左

行俊

なき人の面かけみせてぬるかうちの夢はむかしも隔さりけり

右持

雅蔭

ゆめ路にもかよふたよりやなからまし現にしたふ昔ならすは

又以右可レ爲レ勝。

六十八番

左持

延良

さめぬれは又今さらにしのふ哉夢を昔の儂にして

右

秀長

面影もありしはかりに見る程のゆめを昔のかたみ也ける

左右。下句大畧同哥なり。特に侍へし。

六十九番

左持

貞香

みても猶はかなきものは思ひねの夢ちにかへる昔なりけり

右

延誠

夢のうちにかなふ計の儂は見るもはかなき昔なりけり

是も兩首心詞同。不レ可レ有レ勝劣一歟。

七十番

左持

貞蔭

儂の人たのめなるむかし哉みてもとまらぬ夢にかよひて

右

延明

いにしへをかへしてみつるうたゝねの夢の名残を又したふ哉

右第二句。夜の衣かとみえ侍。左は戀のこゝろかと見ゆ。

不レ可レ有レ勝劣一歟。

七十一番

左持

家行

ありとても猶行すゑそたのまれぬ過にし方を夢と見るにも

右

憲家女

いま更に覺ても落る涙かな昔にかよふゆめの名残に

左初五字。何と詠るにか。我身の事ならは。ありて世にな

と侍らは。よろしく哉侍へし。但し同事歟。右。優に侍。但

し戀の哥にや侍らん。女うたなれは可レ爲レ持。

七十二番

左持

常良

はかなしとおもひなからもたのむ哉昔は夢のほかに見えねは

右

朝棟

面かけはさらでも残るいにしへを猶忍へとや夢にみゆらん

兩首よろし。爲レ持。

七十三番

神祇

左

常良

みしめ繩たのみをかくるかひあらは神の心もさそなひく覽

右

朝棟

あめの下まもる誓ひも神風のおさまれる世の恵にそしる

左下句。近可侍歟。右神風宜。爲勝。

七十四番

左持

家行

天てらすみかけや更にうかふらむ心のみつのすむにまかせて

右

憲家女

五十鈴川きよきなかれにすむ月の影にもふかき恵をそしる

左殊に宜侍。右五十鈴川月も。難し葉や侍らん。

七十五番

左持

貞蔭

ますかゝみいまま曇ぬ御かけこそ神代をうつすかた也けれ

右

延明

跡たれて流たえせぬいすゝ川ふかき誓ひの程もかしこし

神代をうつす鏡。あきらかに侍へくや。

七十六番

左持

貞香

あま照すかみの恵は久かたの月日とともにつきしと思ふ

右

延誠

君か代を常盤にいのる櫛葉に木綿四手なひくいせの神垣

此兩首皆宜。いづれ勝とも申かたくこそ。

七十七番

左持

延良

ちかひをは神もへたてしみつ垣の内外にかはる宮ぬ也とも

右

秀長

岩戸明しよもの神わさなかりせは光あまねく世を照さめや

左右、又いづれとも申かたし。但右。結句少きゝよからず

侍歟。

七十八番

左持

行俊

うきなき下津岩根の宮柱いくたひ同し跡にたつらん

右

雅蔭

つかへても神の恵はしらゆふのかけて心にたのむ計そ

左の宮柱。力入て聞ゆ。尤かち侍へし。

七十九番

左持

富行

神代よりめくみはしけき芦原の國のさかへは今もかしこし

右

盛行

いすゝ川かみ代久しくすみそめてなかれの末を限しられぬ

左は。あしはらの國いままもさかへ。右は。五十鈴川の流か

きりなく見え。可レ爲レ持歟。

八十番

左持

延親

まことある人をや神も守らむめくみは同しちかひ成とも

右

雅冬

内外とて分へき神の誓ひかはおなしめくみにてらす月日を

左右のちかひ。神恵。不レ及ニ是非一歟。

八十一番

左持

朝名

やはらけて光を塵にましへしや世を照すへき始也けり

右 家業

みつかきのそともの宮ふりぬれと神の恵そ猶あらたなる
兩首。神なり妙なり。爲レ持。

常良	持六	負三	朝棟	勝三	持六
家行	持五	負四	憲家女	勝四	持五
貞蔭	勝二	負一	延明	勝一	負二
貞香	勝一	持八	延誠	持八	負一
延良	勝二	負一	秀長	勝一	負二
行俊	勝四	負四	雅蔭	勝四	負四
常行	勝一	負四	盛行	勝四	負一
延親	勝一	負三	雅冬	勝三	負一
朝名	勝二	負三	家業	勝三	負二

右外宮北御門歌合以村井敬義本校合

新玉津嶋社歌合 貞治六年三月廿三日

題 樞中納言爲秀卿

浦霞 尋花 神祇

作者

左方

二條殿
關白從一位藤原朝臣良基公

北山
右大臣正二位藤原朝臣實俊公

三條
從一位藤原朝臣前内大臣公忠公

洞院
從一位藤原朝臣前内大臣實夏公

三條
正二位行陸奥出羽按察使藤原朝臣實繼

今小路前内大臣
正二位藤原朝臣良冬

九條殿
正二位行權大納言右近衛大將藤原朝臣忠基

征夷大將軍正二位源朝臣義詮

雙小路前中納言
正二位源朝臣重資

關前中納言
從二位藤原朝臣基隆

中山前山前
從二位藤原朝臣定宗

富小路前左衛門將
從二位藤原朝臣實名

四辻宮
正二位行左近衛中將源朝臣善成

近衛前關白時忠
從三位行左近衛權中將藤原朝臣冬貫

北山公卿公卿
西園寺內大臣女

菊心母
大納言公直母參議俊高女

後醍醐院女藏人万代

正四位下行左近衛權中將藤原朝臣家尹

正四位下行左近衛權中將藤原朝臣行輔

從四位下行左近衛權中將藤原朝臣為邦

藏人正五位上行左少辨藤原朝臣仲光

正五位下行右馬頭源朝臣氏賴

前伊與守正五位下源朝臣貞世

僧正法印大和尚位慈能

散位從五位下三善朝臣資連

法務僧正法師大和尚位光濟

權少僧都法眼和尚位經賢

權律師法橋上人位則祐

沙彌心省

沙彌光威

舊名加賀守人道
沙彌仍海

本體近大夫
沙彌照覺

從一位藤原朝臣九條前關白總教公

右方

從一位藤原朝臣近衛前關白經通公

從三位宣子日野人道大納言資名綱女

從三位資子日野人道大納言資名綱女

從四位上行右近衛權中將藤原朝臣為重

沙彌觀意人道大納言松殿忠綱

權中納言為秀女

正三位行權中納言藤原朝臣為秀

參議從二位行侍從兼備中權守藤原朝臣行忠

權中納言從三位兼行右衛門督藤原朝臣忠光

正三位藤原朝臣實遠

權僧正法印大和尚位杲守

從二位行權大納言藤原朝臣公豐

參議從三位行右兵衛督藤原朝臣為遠

正三位藤原朝臣爲忠

僧頼阿

從四位下行左近衛權少將藤原朝臣嗣定

權中納言經定女

徽安門院小宰相九條二位藤原朝臣女

散位從五位上藤原朝臣爲敦

前遠江守從五位上三善朝臣信方

散位從五位上源朝臣氏光

正六位上行左衛門少尉平朝臣貞秀

僧正法印大和尚位桓覺

從三位行大藏卿兼越中權守菅原朝臣長綱

小比叡綱宜從四位下行中務權大輔祝部宿禰成光

散位從四位下賀茂縣主雅久

沙彌導譽

沙彌性威

散位從四位下安倍朝臣宗時

太政大臣從一位源朝臣通相公

講師

冷泉中將爲邦朝臣

讀師

冷泉中納言爲秀卿

判者

同前

一番 浦霞

左

紀のうみや浪もかすみも立まよひそら吹上の春のうらかせ

右

霞のみたつとはみえて難波かた浪しつかなるはるの明ほの

二番

左

和歌のうらや風おさまれる御代なれはいくへ霞も立渡るらむ

右

もしほ焼なにはのみつの朝かすみ煙をこめてたちやそふらん

三番

左

ゆふ日かけかたふく浦のなみまより霞もはてぬ松のむらたち

右

みくまのや浦こく舟のほのかにもみえすかすめる波の遠かた

四番

左

たちこむるすゑは雲ちのうら／＼にかすみて遠きおきの釣舟

前内大臣源朝臣實家公

從三位資子

關白二條良基公

〔右大臣〕

内大臣二條師良公

前内大臣二條公忠公

從三位宣子資名卿女

前内大臣源朝臣實家公

從三位資子

わかのうらや雲と浪との末とほくかすみもやへの春の明ほの
五番

左

按察使實繼

あけわたす浦のはつ嶋はつかにもみえぬや深き霞成らむ

右

右近權中將爲重朝臣

みとりなる霞の色にかけてけりまたはつ草のわかのうら浪
六番

左

前大納言良冬

へたてしな浪ちの末は霞むとも心をよするわかの浦舟

右

沙彌觀意松入道大納言

浦なみはたえくみえてわたの原春は霞の色そはてなき
七番

左

右近大將忠基九條御意

こく舟のゆくゑもみえすかすむなり遠き浦ちの春の曙

右

權中納言爲秀女

あさなきのうら路のとけき八重霞波はこゑさへ立へたてつる
八番

左

征夷大將軍義隆

明石かたせとのしほ風吹にけり霞もはてぬ奥津しら浪

右

權中納言爲秀

和歌の浦やみちくる鹽はみえわかつて霞のまより波はいさよふ
九番

左

前中納言重資

いくうらのちさとの波もうつもれて霞そやへの鹽ち也ける

右

權中納言時光

わかのうらや松こそ春の色ならめ浪さへかすむみとりそふ覽
十番

十番

左

前中納言基隆

わかの浦や鹽のみちひもみえぬまであしへはるかに霞む頃哉

右

參議行忠

和歌の浦やあしへのたつのこゑはかり浪にきこえて立霞哉
十一番

左

前參議定宗

ふみ迷ふわかの浦なみ代々かけしあとゝもみえすなと霞む覽

右

右衛門督忠光

あさみとり立そふ春の色みえて松よりかすむ和歌の浦なみ
十二番

左

前參議實名

白妙のはまのまさこを吹上や霞をよするはるのうら風

右

前參議實遠

すみよしのうらふく風もあさみとり松にはあへず霞春かな
十三番

左

左近中將善成

春といへは猶しほかせのふきあけに霞もはてぬわかのうら松

右

權僧正泉守

なみかゝるよとのつきはしたえくに霞もはてぬまの浦風
十四番

左

左近權中將冬實

ゆふなきのはるの浦なみはるくとかすみをわくる蟹の釣舟

右

權大納言公豐

よさの浦やなきたる朝にみ渡せはたえく霞むあまのはし立
十五番

左

浪とをくゆきかふ舟もほのく／＼とみとりに霞むわかの浦まつ

右

西園寺内大臣女
右兵衛督爲遠

和歌の浦やつゆくむころのあしへより霞そ渡る春のみとりに
十六番

左

汐かせものときき浦のゆふなきにかすみより立奥津しらなみ

右

大納言公直母
前參議爲忠

わたつ海やしほのひるまのはまひさき霞のみをや父埋むらん
十七番

左

もしほ焼けふりもおなしかすみにて雲井につく浦の松原

右

後醍醐院女藏人万代
頼阿

きよみかた霞吹しくうら風にこそそはるゝみほの松原
十八番

左

紀のうみやいく浦かけてかすみらんゆらの湊の春のあけほの

右

左近權中將家尹朝臣
左近權少將嗣定朝臣

はしたてや霞わたれる曙にをとのみよするよさのうら浪
十九番

左

はる／＼と霞へたてゝ今は身のよるかたしらぬわかのうら浪

右

左近權中將行輔朝臣
權中納言經定女

春くれはけふりも波うつもれて霞のみ立しほかまの浦
二十番

左

左近權中將爲邦朝臣

かすみてそなをかきりなきわたの原やへの鹽ちの奥津しら浪
右 徽安門院小宰相

なみのうへにゆきかふ舟もきえはてゝ霞にのこる淡路嶋山
二十一番

左

左少弁仲光

もしをやく浦のけふりの末ならてたちそふころの朝霞かな
右 散位爲敦

和歌の浦や浪ちの末もはる／＼とをきにつけて猶霞むらし
二十二番

左

右馬頭氏頼

朝かすみたつとはみねとわたのはら猶うら風のさゆる春哉
右 前遠江守信方

須磨のうらやなみの千里は立こめて霞にのこる淡嶋山
二十三番

左

前伊與守貞世

春の色のいまひとしほやこれならむみとりに霞むわかの浦松
右 散位氏光

吹かせものときき春の朝なきに霞をよする和歌のうら浪
二十四番

左

散位資連

はる／＼と明行よさのうらなみに霞そ渡るあまのはし立
右 左衛門少尉平貞秀

難波かたしほ焼けふり立こめていまはたかすむ春のあけほの
二十五番

左

前僧正慈能

わかのうらやみきはの松の春の色に浪のいつくもかすむ頃哉

右

今朝はなを霞にけりな曉霞のうらの煙もわかぬはかりに

二十六番

左

僧正光濟

みとりそふ松のみ春はあらはれて木のまにかすむわかぬの浦浪

右

大藏卿長綱

和歌の浦やせくる浪はのとかにてかすみ計そ立とみえける

二十七番

左

權少僧都經賢

よそにたにこきゆく舟はみえわかつてそらよりをちにたつ霞哉

右

小比叡禰宣成光宿禰

紀のうみやそこともしらすたちこめて霞たゆたふわかぬの浦風

二十八番

左

權律師則祐

霞のみたつとそみゆるわかぬの浦浪と風とのおさまれるよは

右

散位雅久縣主

あさほらけおとはへたてすきこゆ也霞にのこる和歌のうら浪

二十九番

左

沙彌心省

うら風の吹上のはまもなのみして霞にこもる春のあけほの

右

沙彌導譽

ひのいつるおきつそらより明そめてそらの霞によや残るらん

三十番

左

沙彌元威

わかぬの浦浪はへたてしをともしいかになちそふ霞成らん

右

沙彌性威

うら／＼のなきたる朝もふく風に霞のこせる松のむらたち

三十一番

左

沙彌仍海

きのうらや音はかりして浦風のよはれはかすむをきつしら浪

右

散位宗時朝臣

浦なみのみきはに遠くなり行や立そふ春のかすみなるらむ

三十二番

左

沙彌照覺本告天夫人道

とをさかる浦半のまつの色なからみとりをそへて立霞かな

右

蓮堅

わたのはらのこる日かけもくれなひの霞にかゝる奥つ白浪

三十三番

左

前關白九條經教公

久かたの空こそ春にかすむとてたちなへたてそわかぬのうら浪

右

太政大臣久我通相公

はる／＼とおきつ浪間はうつもれて霞にうかふわかぬの浦松

三十四番

尋花

左

關白

花とみる雲のよそめにあくかれてきにし心のはるの山みち

右

前關白近衛

みよしのはしのふの山にあらねとも花に分入おくのかよひち

三十五番

左

右大臣

山深みかきりもしらすわけいらん花よりおくに花もありやと

右

内大臣

このもとにけふはくらしつ明はまたあらぬ山ちの春や立らむ

三十六番

左

前内大臣

あくかるゝ心を花のしるへにてやまちの雲をいくこゆらん

右

從三位宣子

山さくらあかぬこゝろをしるへにていくへもわけむ峯の白雲

三十七番

左

前内大臣實

かへるさは道まよふとも山櫻かつさくみねを猶やたつねむ

右

從三位資子

わけわけぬこゝろ計はさきたてとしらぬ野山を花にまかせて

三十八番

左

按察使實繼

たつねきて千代もへぬへき山路哉のとけき春の花し匂はゝ

右

爲重朝臣

山ふかくわけつる花のかけなれやさくらにうつむ跡のしら雲

三十九番

左

前大納言良多

いくたひか花にまかへて白雲のかゝるやまちに尋ねきぬらん

右

觀意

さくらかりはなかとみゆる白くものいくへの峯に人さそふ覽

四十番

左

右近大將忠基

見ぬかたも花をたよりにきつる哉歸る山路のあととるまで

右

權中納言爲秀女

櫻狩くれなはけふそかへらましまれなる花のかけはたのまで

四十一番

左

征夷大將軍義詮

行まゝに山はさくらにあらはれて花よりつゝ峯の白雲

右

權中納言爲秀

いたつらにゆきては歸る日數へてまたみぬ花に猶やまよはぬ

四十二番

左

前中納言重資

まかひつるよそめを道のしるへにて花にわけなす峯のしら雲

右

權中納言時光

けふいくかよそめははたと峯の雲わけてもこりぬ心なるらん

四十三番

左

前中納言基隆

木の本にけふはくらさむ櫻花かへさをおくれ山のはの月

右

參議行忠

たつねこしあとはいいくへの霞としらぬ山路の花にくらしつ

四十四番

左

前參議定宗

分すきて行衛の道に咲はなをかつみよし野の奥そゆかしき

右

右衛門督忠光

ゆくすゑは花をかきりの山ちともみえぬおのへの山のしら雲

四十五番

左

前參議實名

みやこふといつれを花のさかひとしらぬ山路の雲やわく覽

右

前參議實遠

わけいれははなにもうつむあとなくて猶立まよふ峯のしら雲

四十六番

左近中將善成

みよし野はいつも花の影なればわきてしほりの跡も尋ねず

右 権僧正杲守

咲にけりたつねぬさきの日影さへけふはくやしき山さくら哉

左 左近中将冬實

わけきつる心つくしはやま櫻うき身ながらも哀とをみよ

右 權大納言公豊

分まよふ花の所のしるへして雲より匂ふ春のやまかせ

左 西園寺内大臣女

たつね入道も梢のさかりにてはなゆへ花のかけやくれなむ

右 右兵衛督爲遠

まかひける雲に山路をさそわれてけに咲花のところをそしる

左 大納言公直母

雲とのみよそにみえつる山櫻わけ入まゝに花になりゆく

右 前參議爲思

しをりせし道はたのまで山さくら花のかにのみまかせてそ行

左 女藏人万代

よそにそ尋ねもゆかし身のうきを花に任せて見る世ならすは

右 頼阿

花ゆへにいまさらとはゝ我宿とたのも道やたと覽

左 家尹朝臣

けふははやたつねくらして山櫻あすのためなる春のしたふし

しら雲のしらぬ山路は花の香の風をたよりにたつねてそ行

右 嗣定朝臣

たつねゆく末に心のいそかれて花ゆへ花をしつかにも見す

右 權中納言經定女

白くものかさなる峯はとをくともこえてや花をみよし野の山

左 爲邦朝臣

咲花のこのもとちかなりぬらしにほひそふかき春の山風

右 小宰相

ふきさそふかせのさきにとあくかれて花よりあたにちる心哉

左 仲光

山ふかく分入はなのおもかけを霞をそむるみねのしら雲

右 爲敦

あくかるゝ心を花のしるへにてまたみぬ山のおくもまよはす

左 氏頼

山深みわけこしほともしられぬは花にやうつるこゝろ成らん

右 信方

きのふまで分こしやまをよのまにも花咲ぬやと又たつねつゝ

左 貞世

けふも猶うはのそらにやまよはまし花みて歸る人しあかすは

右 氏光

木のもとにこよひかさねん行末の雲をはあすの花にのこして
五十七番

左

資連

しるへなき山のかすみにわけ入てまた見ぬ花に道たとなるなり

右

平貞秀

分ゆかは花のところとなりやせん山ちのすゑにかゝる白雲

五十八番

左

前僧正慈能

あくかるゝ花のころをしるへにて山路たとらぬ花さかり哉

右

僧正桓覺

咲そむるこすゑやあると花ゆへにけふもやまちを尋ねつる哉

五十九番

左

僧正光濟

山ふかみまたみぬ方をたつねきて心をはなに迷ひつる哉

右

大藏卿長綱

にほひくる風をたよりに白雲のかゝれるかたに花やたつねん

六十番

左

權少僧都經賢

日數へてはなにそこゆる雲井路の遙けき程とみえたかねを

右

成光宿禰

わけこすは花ともしらていたつらにさてやはつせの峯の白雲

六十一番

左

權律師則祐

いつくともしらぬやまちの花の香にやへ立雲を分やつくさん

右

雅久縣主

みよし野や雲のおくまでしるへせよ花のか深き春の山かせ

六十二番

左

心省

けふも猶はなにはなくていたつらに雲のみわくる春のやま道

右

導譽

花かとして木のもとに立よればたゝ雨雲のよそめ成けり

六十三番

左

元威

山櫻またみぬかたのしるへには風そまたるゝあふ人はなし

右

性威

よそめにはたれかはわかむたつねくる山ちも春に迷ふ白雲

六十四番

左

仍海

あすもなをたつねやせまし吉野山けふみぬ方に春や残ると

右

宗時朝臣

そことなき春の山路をたとるかな人たのめなる風の匂ひに

六十五番

左

昭覺

あかす猶わけてやみまし山ふかみ花よりおくのみねの白雲

右

蓮堅

分つくす花にこよひも旅ねしてあすはいつくの山ちくらさむ

六十六番

左

前關白

花かともとひてそみまし山の端の雲ににほひはあらしく也

右

太政大臣

麓までけさにほひつる花のかや夕こえかゝる山のしたかせ

六十七番

神祇

左

關白

たのむかな我ふちはらの都よりあとたれそめし玉つ嶋姫
前關白折衝

やはらくるひかりも道をてらすらむ今はたみかく玉津嶋姫
観意

みつかきのみかゝれしよりやはらくる光そまさる玉津しま姫
右大臣

こゝのへに宮ををいまもうつしきて昔にかへる玉つしまひめ
右近大將忠基

左

右大臣

言のはの露もみたれぬあしはらやひかりをそふる玉つ嶋姫
内大臣

おろかなる心は神そてらすらん我ふまよふしきしまの道
權中納言爲秀女

右

内大臣

たまつしまものと光にまさるらし都にうつす神のみやは
左

みかきなす玉つしまひめ君か代の光そへとや跡をたれけん
征夷大將軍義詮

左

前内大臣

幾千代もまもりはすてし敷嶋のやまとしま根は神のくにとて
從三位宣子

神もさそひかりをそへむ玉津嶋あらたにみかく時をまちえて
權中納言爲秀

右

從三位宣子

ことの葉をいかてみかゝむ玉津しまめくみしらるゝ神の光は
左

えにしありてうつる光も玉つしまたゝ我道のしるゝ也けり
前中納言重資

左

前内大臣

あまてらすかけをみかきてたまつ嶋神よのあととは猶守るらし
從三位資子

波の下にしつみはてしをもしほ草神そ手向のかすもいれつる
權中納言時光

右

從三位資子

今もかもみかきやそへむたまつ嶋神のしるしの跡もかはらす
左

いく千代も猶まもるらし玉つしま曇らぬ君かおなしひかりを
前中納言基隆

左

按察使實繼

いと猶ひかりをみかく玉津嶋みちをも世をもさ照すらし
爲重朝臣

都にも光をわけてたまつしまくもりなきよをさそ守るらむ
參議行忠

右

爲重朝臣

さゝかにの蛛の糸すちよゝかけてたえぬことはの玉つ嶋ひめ
左

君かよにふたゝひみかく言のはの光もそひぬ玉つしまひめ
前參議定宗

七十二番

左

前大納言良冬

右 右衛門督忠光

いにしへもかくやはみかく玉つしま光をそへよ今のみやみに
七十八番

左 前參議貫名

和歌のうらや浪のしらゆふ代々かけて我道まもる玉つ嶋姫
前參議貫遠

右 前參議貫遠

ゆふしてのなひかむ木もあつさり澄に照せ玉つしま姫
七十九番

左 左近中将善成

いさなとる海のはまにあらはれて心をよせしまつしま姫
權僧正景守

右 權僧正景守

あとたるゝ名もあらはれて和歌の浦やもに埋もれぬ玉つ嶋姫
八十番

左 左近權中將冬實

神かきもあらたにみかく玉つ嶋あきらけき世の程はみえけり
權大納言公豐

右 權大納言公豐

千早ふる神しうけすは玉津嶋たまならぬ身の名をかけめやは
八十一番

左 西園寺内大臣女

萬代もさそやまもらむ玉津嶋みかきそへぬる神のひかりに
右兵衛督爲遠

右 右兵衛督爲遠

うつもるゝ宮ゐはこゝにあらはれて光もそひぬ玉つ嶋ひめ
八十二番

左 大納言公直母

たまつしま花の都にあとたれて君をやちかく猶まもるらし
前參議爲忠

玉津嶋たえぬ浪ちにうかふ淡のうたかた守る神もたのまし
八十三番

左 女藏人万代

みやゐして君をそまもる玉つ嶋光をそふる萬代までも
右 頼阿

右 頼阿

めにみえぬ神のあはれむ道を猶わきてそまもる玉つしま姫
八十四番

左 家尹朝臣

さそなけに神もうくらむ和歌の浦にあつむる玉の光あるよを
嗣定朝臣

右 嗣定朝臣

世々へぬるあとはあれとも玉つ嶋けふの手向やわきてうく覽
八十五番

左 行輔朝臣

さらにまたひかりそふらし玉つ嶋みかきかさぬる神の宮みに
右 權中納言經定女

右 權中納言經定女

和歌のうらにあとたれしより世々をへて光そまもる玉つ嶋姫
八十六番

左 爲邦朝臣

今そ猶ひかりはまさるたまつしまこゝも昔の宮ゐなれとも
右 小宰相

右 小宰相

よる浪のつての藻くすももらすなよみかく言葉の玉つしま姫
八十七番

左 仲光

和歌のうらの道あるみ代の光にそ跡をもたるゝ玉つ嶋ひめ
右 爲敦

右 爲敦

いにしへにかはらぬあとやしらるらむうつす光の玉つしま姫

八十八番

左

氏 頼

たまつ嶋きみかみかける神垣にやちよの末をさそ照すらむ

右

信 方

たまつ嶋みかける君を萬代と神のこゝろにさそ守るらん

八十九番

左

貞 世

九重にちかきまもりと玉津嶋光をわけて神やすむらん

右

氏 光

やはらくる光をそへて玉つしまかみの宮もみかくとそ見る

九十番

左

資 連

あらたなる神のみかきの松かえに君か千年はかねてしるしも

右

平 貞秀

こゝにまたみやみせしよりやはらくる光やうつす玉つ嶋姫

九十一番

左

前僧正慈能

いとゝしくみかくひかりに敬嶋の道をやてらす玉つ嶋ひめ

右

僧正桓覺

玉つしま宮みをこゝにうつしてや猶この道のひかりそふらむ

九十二番

左

僧正光濟

玉つしままたむくるからに言のはの露にもみかく色や見ゆらむ

右

太藏卿長綱

こゝに又あとをたれよとやはらくる光をうつす玉つ嶋ひめ

九十三番

左

權少僧都經賢

千はやふる神よの道をそのまゝにのこして守るたまつ嶋姫

右

成光宿禰

君か代にみかく道とや玉つ嶋いまのみやみひかりそふらん

九十四番

左

權律師則祐

よろつよの君かひかりと宮はしらたてゝそみかく玉つ嶋ひめ

右

雅久縣主

今さらにみかきそへよとひかりをはみやこにわくる玉つ嶋姫

九十五番

左

心 省

おろかなる我ことのはもたまつ嶋みかくひかりをたのむ計に

右

導 譽

この道の言葉をみかく玉津嶋ちかひやよゝにたえせさるらん

九十六番

左

元 威

おなしくはみかく心のかひも哉露のこと葉の玉つしま姫

右

性 威

和歌のうらにひろへとつきぬ玉つ嶋よゝの光は神のまに／＼

九十七番

左

仍 海

いとゝ猶光やそへんたまつしま世のあきらけき時にあひつゝ

右

宗時朝臣

跡たれてこゝにそ今はきの國やそのなふりにし玉津嶋姫

九十八番

左

昭 覺

玉つしまみやこのちりにましはるや猶道まもるちかひ成らむ

右

蓮 堅

おさまれるよにみかゝれて玉つ嶋なをあらたなる光そふらん
九十九番

左

前關 白

みかきえぬこと葉の露のたまつ嶋神も光をそへきらめやは

右

太政大臣

まもりける道もあらたに玉津嶋みかきあつむるやまと言の葉

冷泉爲邦朝臣以三眞蹟二令三書寫一校二畢。假名眞名不違二
一字也。

右新玉津嶋歌合以百花庵宗固本校合

群書類從卷第二百六

和歌部六十一 歌合二十七

五百番歌合天授元年

一番 春一

左勝

女房

出る日の影も神代にかはらねは我國よりや春はたつらん

右

源資氏

久堅の雲ゐやなへて霞むらんけふあら玉の千世の初春

天照す神代の春もしらるゝは雲ゐにたかく出る日のかけ

二番

左

無品法親王寺仁

萬國民を榮へん我君のめくみあまねきみよの初春

右勝

太宰帥親王親式部卿雅房親王

春やとき空に嵐の猶さえて霞もやらぬあまのかくやま

みよの春民はまちえて仰くらし霞に高き天のかく山

三番

左

辨内侍

天の戸の明れはやかて霞むなりけふたちかへる春のしるしに

右勝

關白

たをやめの御陪に出るけふよりや雲井に千世の春はたつらん

春くれは霞もともに立のぼる雲の梯又上もなし

四番

左勝

前關白入道前關白左大臣

春來ては同じ雪けに風さえてかすみもあへぬ遠近のやま

右

權大納言實爲

しら雪は猶ふるさとのよし野山霞はかりに春やたつらん

春來てもかすみそやらぬ遠近の同じ雪けのみよしの山

五番

左

春宮大夫顯統

春きぬとふりさけみれはいとはやも天の原こそ霞初けれ

右勝

前大僧正賴意

よそに見し雲もさなからうつもれて霞にけりなかつらきの山

天の原霞のうへやかすみむらし雲よりたかき葛城の山

六番

左勝

前大納言光有

梓弓はるの日數は浅みとり入野の原ははやかすみつゝ

右

中納言光實

春ははや久米ちの橋の中空にけさは霞やたちわたる

立わたる霞も同じ空なれは入野の原も春や知らん

七番

左勝

權大納言公長

いとはやも春きにけりと天の原横雲なからたつ霞かな
右 前中納言具氏

奥謝の海や浪まにたてる松の葉のみとりも見えず霞こめつゝ
浪間なる松は沈みてよきの海の霞のうへにかゝる横雲
八番

春のくるそなたの空の朝日影出るをみればはや霞つゝ
左持 左衛門督長親
右 春宮權大夫師兼

むへしこそ春さりくらしこもりくの初瀬の山の今朝は霞める
朝日影そなたの空にこもりくのはつせの山そはや霞ける
九番

霞立おのへの春のあけほのにおもかけはかり残る松か枝
左持 權中納言實興
右 源賴武朝臣

立こむる山のいつこは見えわかけて霞そふかきみよし野の奥
霞はつる山の奥よりゆかしきはおのへにたてる松の面影
十番

よさの海や霞をわたる春風にと絶もはてぬあまのはしたて
左持 藤原經高朝臣
右 源成直

棹姫の霞の衣立そめてけふやほすらん天のかく山
さほ姫の霞立きてほす衣浦ふく風にしほたれぬへし
十一番 春二

なれに先誰かをしへし鶯のなく音よりこそ春はしらるれ
左持 藤原經高朝臣
右 源資氏

春來てはふしの裾野そ霞むなる高根は雪のさえかへれとも
霞立裾のゝ春をしらするも鳴鶯の高根ならすや
十二番

仕へこし人にやならふ鶯のあしたをいそくこゑきこゆなり
左 權中納言實興
右持 源成直

敷嶋の道ある御代の鶯ややまとことはのはなになくらん
仕へこし人はふりにき鶯の花めつらしき聲を聞はや
十三番

緑そふおのへの松の春の色の今ひとしほは霞也けり
左 左衛門督長親
右持 源賴武朝臣

雪消る谷の戸出て初春のはつ音をけふと鶯そなく
鶯の谷より出る初ねの目松はふりにしためしばかりそ
十四番

誰か又袖ふりはへて春の野に雪まのわかなけさは摘らん
左 權大納言公長
右持 春宮權大夫師兼

清見湯霞やふくなりぬらん遠さかりゆくみほの松原
清み湯ゆたにそ霞む若な摘雪まははるの色もすくなし
十五番

徒に老にけるかな春の野の若なととも年をつむ身は
左持 前大納言光有
右 前中納言具氏

春きぬとたれか告けん雪ふかき谷の戸かけの鶯のこゑ
春の野に誰も若なを出て摘ん谷の戸影はよしや住らし

十六番

左

みしふつき植し門田のそれならて若なつむにもぬる、袖かな

右持

春宮大夫顯統
中納言光資

春やときをのか羽風の寒けさにまた出やらぬ谷のうくひす

袖ぬるゝ若なはつまし鶯のはかせも寒き谷の小川に

十七番

左持

そことなく霞にけりた棹姫のかつらき山のはるのあけほの

右持

前關白
前大僧正賴意

白雪のふりぬる身さえしめし野にけふ珍しく若なつむ也

棹姫のかつらき山は陰高し思ひかけめやねせりつむひと

十八番

左持

春きても猶谷風のさむからし古巢なからのうくひすの聲

右持

辨内侍
權大納言實爲

諸人の日影も春と野へに出てけさ七種の若な摘なり

珍しや日影も春の野へを見よ聲はふるすのまゝの鶯

十九番

左持

立のぼるふしの煙の行末は空もひとつに打かすみつゝ

右持

無品法親王
關白

むさし野はいつくを春のかきりと山の端しらて立霞かな

武藏野もふしの煙の行すゑも霞はてゝはしる人そなき

二十番

左持

女房

主や誰ととへとしら浪春立は霞に染るぬのひきの瀧

右持

太宰帥親王

立渡る霞へたてゝ春は猶ゆくすゑ遠し武藏野の原

むさし野も猶數ならす霞つゝ空にはてなき布引の瀧

二十一番 春三

左持

女房

鶯の花まつほとんやとりかも春くるかたの庭のくれ竹

右持

關白

うくひすは何のうれへに我君の春待えてもねをはなくらん

鶯のうれへもしらす吳竹の春くる方もおほつかなしや

二十二番

左持

無品法親王

理りや谷には春も白雪のふるすを出てうくひすのなく

右持

權大納言實爲

匂ひくる風をしるへにたつねはや梅さく宿の花のあるしを

物うさや今わするらん鶯も梅さく宿のあるし尋ねて

二十三番

左持

辨内侍

心にも袖にもうつる梅かかをさそふそつらき春の夕かせ

右持

前大僧正賴意

谷の戸の雪やけぬらし朝日影出るふるすのうくひすの聲

梅か香をたくへてさそふ春風に谷の戸出るうくひすの聲

二十四番

左持

前關白

我爲にくる春としはなけれとも先聞そむるうくひすの聲

右持

中納言光資

吹送る軒はの梅の下風に手枕にほふはるのうたゝね

我爲に誘ひきぬとや鶯の聲ふきいるゝ梅の下風

二十五番

左持

春宮大夫顯統

咲しより絶すとほるゝ我宿の梅花こそ主なかりけれ

右

前中納言具氏

臘夜の月にもまかふ梅かえの匂ひや花のしるへなるらん

臘なる月と花とを春はとへあるしは宿の梅はかりかは

二十六番

左持

前大納言光有

かた數の袖にあやなくうつるなりぬぬよの床に匂ふ梅か香

右

春宮權大夫師兼

今しはや野原の雪は消なゝん八十氏人も若なつむへく

梅かえに我袖ならす此ころは若菜もつます成にし物を

二十七番

左持

權大納言公長

さほ姫のたつや霞のうす衣はるとも見えす雪はふりつゝ

右

源賴武朝臣

若なつむ我跡見えて春の野の雪そ家路のしるへなりける

梓姫の霞の袖や白妙の雪ふりはへてわかなつみつゝ

二十八番

左持

左衛門督長親

消初る雪まの草のうすみとりまたはつかなる春の色哉

右

源成直

消初る雪まあれはと飛火野にけふ里人や若なつむらん

消初る雪まの草の春の色に今一しほはこゝろ染つゝ

二十九番

左持

權中納言實興

かすめとも猶空寒したをやめの袖の春風心してふけ

右

源資氏

谷陰はなをかきくらしふる雪にをのれ春しる鶯の聲

谷かけは寒くあるらしたをやめの袖の春風に心せよ

三十番

左持

藤原經高朝臣

心なきわか袖にしも誘ひ來て梅か香やつす軒の春風

右

太宰帥親王

袖ふれし人のかたみと匂ふらしはるやむかしの軒の梅かえ

梅か香も春や昔とおもひ出は我身ひとつの袖はやつさし

三十一番 春四

左持

藤原經高朝臣

をのつから涙くもらて見し世たに春は臘の袖の月かけ

右

關白

春さむき袖うちはらひ白雪のふる野の若菜誰か摘らし

はる寒き袖打拂ふ雪よりもみしよの月そ心ありける

三十二番

左持

權中納言實興

難波女かこやのしのやの浦風に隙こそなけれ匂ふ梅かゝ

右

太宰帥親王

池水のみとりにうつる陰見れは猶色ふかき春の青柳

なにはめかこや吹風の隙もなし誘ふ梅かゝなひく青柳

三十三番

左持

左衛門督長親

またれこし軒はの梅の花さかり風こそかよへとふ人はなし

右

源資氏

時しもあれかすむ習の春そうき花のこのまのいさよひの月

霞つゝ木の間いさよふ月よりは花のさかりに風はふく共

三十四番

左

權大納言公長

春風のにははさりせは梅の花咲にけりともいかにてしらまし

右

源成直

咲つゝくあまた梢の梅かかを一つになして誘ふ春かせ

梅かかを空に合せて匂ひけり一木をすくる風はものかは

三十五番

左

前大納言光有

出るより臚は春のならひそとおもふにすきてかすむ月影

右

源頼武朝臣

梅かかを我袖まではさそふともよそになすきそ春の夕風

我袖のたくひしらぬ梅かかを霞める月にいかて比へん

三十六番

左

奉宮大夫顯統

棹姫のかすみの衣春やとき猶かせさえて淡雪そふる

右

奉宮權大夫師兼

古郷の軒端の梅も春をへてそめし心の色なわすれそ

三十七番

左

前關白

いとほしよよその匂ひをさそひこはみるは一本のむめの下風

右

前中納言具氏

春やとき猶風さえて天つ空かすみもやらす雪はふりつゝ

見る程は一本の梅の色かもちればや風に雪とふりつゝ

三十八番

左

辨内侍

かすむらん空はかりかは影やとす袖のうへにも臚夜の月

右

中納言光資

誰ゆへにつもれは老のなみたさへかすむとしるや春の夜の月

かすむらん空はかりかは老か身の袖も涙に臚夜の月

三十九番

左

無品法親王

散かゝる花はまかはぬ雪なからはらふ袂に匂ふ梅かか

右

前大僧正頼意

春風もかよふは夢の手枕におとろくはかり匂ふ梅か香

梅か香の夢の枕にかよふ夜はまかはぬ雪もまかふ春風

四十番

左

女房

亭はや名におふ花も咲ぬらし梅津の里の春をいかにと

右

權大納言實爲

立よりてみてをゆかなん露結ふ遠方のへの青柳の糸

名にしるき梅津の里にさそはれて立もかくれぬ青柳の糸

四十一番

春五

左

女房

春は又我佳かたに急くなりあし屋の海士の衣かりかね

右

前大僧正頼意

いとはやも縁をそえて春雨の古木の柳露むすふなり

なへて世のたくひもあらし芦の屋の鹽焼蛋の衣かりかね

四十二番

左持

無品法親王

をしなへて吹とは見えぬ遠方の柳になひく春の夕かせ

右持

中納言光資

舟よはふ河せの浪やかすむらん宇治のわたりの春の曙

舟よはふうちのわたりは見えもせて霞の上になひく青柳

四十三番

左持

辨内侍

いつも見る同じ空にはかはらねと心にそめし春のあけほの

右持

前中納言具氏

淺緑いと染かけて柳かけ立よる袖に春風そふく

淺みとり心は染しあけほのゝかすみて残る柳かけかな

四十四番

左持

前關白

さひしさをたへてみ山の松の戸に影さへふくる春のよの月

右持

春宮權大夫師兼

したはしな雲むのかりの歸山ありとはかりの秋のたのみは

遠さかる雲むのかりの歸山こゑさへふくる春の夜の月

四十五番

左持

春宮大夫顯統

鹽竈の煙になるゝ浦人はかすむもしらて月や見るらん

右持

源賴武朝臣

越路には春ともいかてしら山の消あへぬ雪にかへる鷹かね

春のきていつくはあれと鹽竈の煙にかすむ月をこそ見め

四十六番

左持

前大納言光有

古郷を見はてぬ夢の手枕に涙をそへてかへる鷹かね

右持

源成直

我思ふ人をはしるやふるさとにいさことつてんはるの鷹かね

歸る鷹夢はかひなし玉章を現にひとめ人につたへよ

四十七番

左持

權大納言公長

さすか又花に名残やとまるらんくそ行春の鷹かね

右持

源資氏

たえく軒の玉水音はしてふるとも見えぬ春雨の空

歸る鷹なくく立し別れより涙絶せぬ春雨のそら

四十八番

左持

左衛門督長親

はては又雲もひとつに成にけりめかれぬ物をかへる鷹かね

右持

太宰帥親王

さほ姫の霞の袖にやとる夜は月もおほろの影やそふ覽

さほ姫の霞の袖の月影も雲と一つにかへる鷹かね

四十九番

左持

權中納言實興

風吹は梢をよそに青柳の亂るゝ蔭やはるの糸ゆふ

右持

關白

そのかみに誰植置て我門の柳はよゝに蔭なひくらん

我門の梢あまねき青柳をよそまてかけて誰たのむらん

五十番

左持

藤原經高朝臣

秋にのみそめし心の色もまたうつりにけりな春の明ほの

右持

權大納言實爲

おほつかな越路の春のいかなれは花を見捨て鷹の行らん
春にこそ秋の心もうつるなれ花を見すつる鷹はうらめし
五十一番 春六

左持

藤原經高朝臣

何と又越路の花に急ぐ覽みやこも同じ春のかりかね
右 前大僧正賴意

思ひ出る春やむかしの事とへは老のなみたのかすむ月影

古郷と越路を急ぐ鷹かねの春やむかしの月に鳴也

五十二番

左持

橘中納言實興

むかし思ふ心つからやかすめるとなみたにかこつ臚夜の月

右

權大納言實爲

忍はるゝ春やむかしのなみたゆへ分ても袖にかすむ月かな

月影のむかしは同じ春なから心つからそ身にはしみける

五十三番

左持

左衛門督長親

かすむよの花の木の間をもる月は心つくし秋にまされる

右

關白

歸るてふつらさを花にかこちてもたか名はたゝし春の鷹かね

歸る鷹面影かすむ月の夜の心つくしは猶まさりけり

五十四番

左持

權大納言公長

遠近の書のおくは明やらて櫻にかゝる峯のよこ雲

右持

太宰帥親王

時しもあれいかにちきりて春の鷹花さく頃はかへり初けむ

花に歸るかりかねしたふ時しもあれ別なみせそ峯の横雲

五十五番

左持

前大納言光有

咲初る花かあらぬか足曳の山のはつかにかゝるしら雲

右持

源資氏

古郷はまた寒からし都にて日數かさねよころもかりかね

鷹かねの歸る山路に花見せて日數かさねよ峯の白雲

五十六番

左持

春宮大夫顯統

つらからん後をはしらて尋ね行花のしるへに風を待かな

右持

源成直

人しれぬ涙にのみそ霞けるはるやむかしの袖の月かけ

後しらぬ花の香をのみ身にしまてむかし忘るゝ袖の月影

五十七番

左持

前關白

春のかり歸る名残はつきせねと聲そ雲井のよそに成行

右持

源賴武朝臣

春のよの月は臚の名とり川霞に沈む瀬々の埋木

歸る鷹聲も臚のなとり川月にも見えすせゝの埋木

五十八番

左持

辨内侍

諸ともに越路の春や急ぐ覽立をくれしとかへる鷹かね

右持

春宮權大夫師兼

尋來て後そ傳しき峯の雲まかへしほとの花と見ましや

鷹かねの歸るもしらす峯の雲花より外のよそめなければ

五十九番

左持

無品法親王

曉夜のならひを更にたとるかなやつしなれたる袖の月影

右

前中納言具氏

澄月の雲井は同じ影ながら春しもいかに霞そめけん

雲井にけ霞むはかりの月なるを詠る袖に影なやつしそ

六十番

左

女房

霞行浦の鹽屋の夕けふりその色となく春そさひしき

右

中納言光資

うはの空に音つれ捨て行鷹の數さへ見えすかすむ春かな

聲はかり音つれ捨て行鷹も同じ霞の浦の夕くれ

六十一番

左

女房

きのふまで見さりし雲の立田山夜はにや花の咲はしめけん

右

前中納言具氏

春といへば霞の衣たちかへり秋こし空に急くなりかね

立田山よばに花咲けさのまをまたても歸る雁はつらしな

六十二番

左

無品法親王

吉野山みねの岩かとふみならし花の爲にも身をは惜ます

右

春宮權大夫師兼

匂ひ来る風をは何かいとはましなへて櫻のちらぬ世ならは

なへて櫻ちらぬ世ならは吉野山誰か岩根の道もいそかん

六十三番

左

辨内侍

またしらぬ山路のおくも尋ねみん花にはおしき我身ならねは

右

源頼武朝臣

君すめは八重立雲も九重のみかきか原と花咲にけり

またしらぬ山は尋ねし九重のみかきか原の花をのみ見て

六十四番

左

前關白

散はてん後をはいかに咲花にしはしなくさむ身のうれへかな

右

源成直

住吉の神代に植し松ならて浦はの櫻年ふりにけり

住吉の松に相生の花はなし散なん後の身よいかにせん

六十五番

左

春宮大夫顯統

吉野山岩本櫻うつろへはちらても花の浪やたつらん

右

源資氏

待とは同じ木末にたつねきて花ゆへなるゝ春のやま守

まつ程は同じ梢そよしの川色なき花のあた浪やたつ

六十六番

左

前大納言光有

思ひきや三代に仕へてよしの山雲ゐの花に猶なれんとは

右

太宰帥親王

咲ぬとはよそにもしるく匂ふなりかつらき山の花の下かせ

衰なり三代に仕へてみよし野の雲ゐの花にあかぬ心は

六十七番

左

權大納言公長

吉野山木末あまたに咲初て花になりゆく峯の白雲

右

關白

出てたに心つくしの影なれやかすむ木のまの春のよの月

咲添て花に成ゆくよし野山よしや木の間の月も見すとも

六十八番

左勝

花遅き我身の春のしるへせよ頼むみかさの山のさくら木

右

左衛門督長親
權大納言實爲

君すめはこゝも雲ゐのよし野山なれてそみつる花の盛を
みよし野の雲ゐになれや花遅き憂身の春そ猶哀なる

六十九番

左勝

古郷にかへるはやすき習かとまてこととはんはるのかりかね

右

權中納言實興
前大僧正賴意

故郷にいそく心をしるへにて我をもさそへかへる鷹かね
誰も皆しるへとならは忘れしな同し心のかへる鷹かね

七十番

左勝

咲なはと頼めし人は問もこて花こそ春を忘れさりけれ

右

藤原經高朝臣
中納言光資

立こむる霞の色も紅のほひをそふる山さくらかな
立こむる霞の花のくれなゐも問こん人に色はそふへき

七十一番

左勝

春八
藤原經高朝臣

山川の岩本さくらちりにけりあらしにまさる水のしら波

右

前中納言具氏

けふも又遠山櫻たつね來てくれなは花の宿やからまし
たつねつる遠山櫻ちりにけり岩まにまさる水の白浪

七十二番

左

權中納言實興

此春もかはらぬ色にとはれ來て花には人の偽そなき

右勝

中納言光資

うつるは、いかにせんとか山櫻あたる花にあひみそめけん

新葉合下

人心變らぬ色はさもあらはあれ移るふ花よ我いかにせん

七十三番

左勝

左衛門督長親

にほはすは花ともいかゝしら雲のたなひく山のみねの春風

右

前大僧正賴意

春霞へたてなはてそ山櫻花の都に立かへりなん
白雲の棚引遠の山櫻花の都の色もひとつに

七十四番

左

權大納言公長

櫻花庭をさかりとみるからに木末に春の色そすくなき

右勝

權大納言實爲

よしさらは庭を盛と見るはかりそをたにつもれ花の白雪
花の色に雪にふかさやまさる覽庭の盛は同しけれとも

七十五番

左勝

前大納言光有

うつり行日数につけてちる花のつらさをそふる春の山風

右

關白

吉野山名もかひありて三代までのみゆきかさなる花の白雪
移り行みよのみゆきの花の蔭おしさやまさる春の山風

七十六番

左

春宮大炊頭統

枝かはす花や散らん立田山松の木のまそ見えす成行

右勝

太宰師親王

櫻吹高ねにかゝるしら雲やさながら花の色と見ゆらん

半の松木の間の花はちり果て櫻はかりにかゝるしら雲

七十七番

新下左

忘れしな久出ぬともよし野山なれてみとせの花の下蔭

右

源資氏

よしの山若木のさくら咲にけりまた見ぬかたにかゝるしら雲

みとせ見し花蔭ふりて古野山わか木の櫻めつらしき哉

七十八番

左

辨内侍

昔の葉も及はぬ色をみよし野や霞に匂ふ花の夕はへ

右

源成直

紅のうす花そめの山さくらなとしら雲にまかへきぬらん

紅のうす花染はあかねかな猶幾しほそ夕はへの色

七十九番

左

無品法親王

さそふをはいとふ物から春の風ふかすはいかゝ花も匂はん

右

源頼武朝臣

あかなくにはるの目影を長しとも思ひもはてぬ花のころ哉

春の目の永きをあかね花の蔭匂はすとても風はふかせし

八十番

左

女房

みよし野の雲の櫻名にしおはゝはやも都の春を見せなん

右

春宮大夫師兼

みよしのゝみゆきの春の山さくら花も雲の名こそふりぬれ

八十一番

春九

左

女房

春もちるといふ事はしら雲のこゝの重ねの花さかりかも

右

源頼武朝臣

ねぬるよの夢かと思えて散花をいやはかなにも誘ふ春風

白雲の九重ねの花さかり散といふことは夢になしてよ

八十二番

左

無品法親王

これまでも心とむると散花を思ひもしらす猶うしたはん

右

源成直

一すちにたかうき名をも立しとや散ゆく花に春風そふく

春風の科にはなさて恨はや心とむなと花そちりける

八十三番

左

辨内侍

陰うつす池の汀の藤の花波のそこにも咲匂ふなり

右

源資氏

霞む野の目影のとけみ見すもあらずみるとしもなき春の糸ゆふ

糸ゆふのあるかなきかもよししはし心に移る池の藤なみ

八十四番

左

前關白

風さそふ木末の花は跡なくて庭に又ふる春のしら雪

右

太宰帥親王

花さそふ春の嵐や吹ぬらし山のは遠く消るしら雲

雪とたに今は残らず庭櫻消るも同じ山のはの雲

八十五番

左

春宮大夫顯統

松の葉に亂れてまじる藤の花若紫の色にさくなり

右持

關白

治れる我身世にふる思ひ出に花には風もいとほてそ見る

此比の風もいとはぬ花を見ん松には藤も色亂れけり

八十六番

左

前大納言光有

田子の浦や汀の松に咲にけり波に色かす藤のはつ花

右持

權大納言實爲

しからみも花にやかゝる山吹の陰は流れぬ井手の川水

咲藤の波にうつれる陰よりもふかき色にや井手の山吹

八十七番

左

權大納言公長

吉野川岩こす波も早き瀬にしからみかけて咲る山ふき

新巻上 右持

前大僧正頼意

馴來つる八十の春も哀しれ三代のむかしの花の面影

吉の川しからみかけて花も咲三代の昔の陰やとまると

八十八番

左

左衛門督長親

山高みかゝれる雲の消行はみつゝ我こし花やちるらん

右持

中納言光資

したへともとまらてかへるはるの色をうら紫に咲る藤なみ

紫の藤に心や移さましみつゝわかこし花もちりなは

八十九番

左

權中納言實興

花ははや散過にける木末にもつらきなこりの山風そふく

新巻下 右持

前中納言具氏

枝よりはあたにちるとも木の下にしはしは残れ花のしら雪

山風のつらきかたみはよしやたゝ消なて残れ花の白雪
九十番

左持

藤原經高朝臣

種しあれは同じ岩根の松のはに千とせをかけて咲る藤なみ

右

春宮權大夫師兼

いはぬ色にならはてしもや山吹の下行水に蛙なくらむ

岩根にも松と藤とおふなるにいはぬ色なる種や交らぬ

九十一番

春十

左持

藤原經高朝臣

行春の同じ道とはちきらねとしたふに絶ぬ身とや成南

右

源頼武朝臣

夕日さすときはの山の岩つゝしからくれなゐの色やそふらん

春したふ心の色にくらふれはから紅も物のかすかは

九十二番

左持

權中納言實興

山吹の花もいつまでゆく春を暮ぬといはぬ色にさくらん

右

春宮權大夫師兼

棹姫の袖の月かけかすめたゝいくかもあらぬ春のなこりに

山吹も中々いはぬ色なれやいくかもあらぬ春と思ひて

九十三番

左持

左衛門督長親

行春のゆかりの色と見るはかり夏までかゝれ池の藤なみ

右

前中納言具氏

口なしの名におふ色も山吹のいはての里に春やさく覧

紫の藤はゆかりそ山吹のいはぬいろをは何としらまし

九十四番

左持

くれて行はるの名残とあすも見ん猶さきかれ池の藤浪

右

權大納言公長
中納言光資

いかにせん數ならぬ身の命にもまさりておしき春の別を

藤浪のあすをかけてもかひなきは命にかふる春の別ち

九十五番

左

前大納言光有

いかにせん思へはおしき名残さへいくかもあらぬ春の暮かた

有持

前大僧正頼意

紫の花のゆかりにあらねとも松のみににかゝるふちなみ

紫のゆかりの春も今はなしみとりをたのめ松の藤浪

九十六番

左持

春宮大夫顯統

まともまでいさおしみ見ん曉のかねきくまでの春の名残を

右

權大納言實爲

限ある春こそあらめ花鳥の色音をいかて猶とゝめまし

花鳥の色音にあらぬ曉のかねには春の名残やはしる

九十七番

左持

前關白

かすか山松のみにかけしより北の藤浪はるそひさしき

右

關白

山里の花のさかりを見る度に都の春を猶いそくかな

かすか山久しく匂へ立かへる都の春をまつ藤波

九十八番

左持

辨内侍

年を経て同じおもひのかひなきはくれゆく春の別れなりけり

右

太宰帥親王

今更に何かはしたふ年をへておしむかひなき春の別を

わきて又恨もあらし年をへて同じおもひの春の別を

九十九番

左持

無品法親王

したひこし春も今はのくれはとりあやなくきぬ入相の鐘

右

源資氏

山吹の咲てふ井手の里人や花より後の春をしるらん

花の色も残らぬ春の呉はとりあやしとや見んゐての山吹

百番

左持

女房

山吹の花さきぬれは池水のいひ出かたき色そうつるふ

右

源成直

花鳥の色音もとめすゆく春のかたみに残れ有明の月

山吹もいひいてかたき春の色を猶有明のかすむ池水

百一番

夏一

左持

女房

をしなへて山も青葉に成ぬなり花見し春は昨日とおもふに

右

源資氏

あかさりし花のかたみと成にけり青葉の山の峯の白雲

花を見しきのふの夢の名残たに猶なくさまぬ峯の白雲

百二番

左

無品法親王

夏山のみとりにまじる遅さくらまかはぬ色は時そともなし

右持

太宰帥親王

あかさりし花染衣立かへて袂にしるく夏はきにけり

折にあへはよそに見る哉遅櫻たかぬきすてし袖の名残そ
百三番

左

辨内侍

けふよりの習ひならすは夏衣花の袂にかへん物かは

右

關白

問人もなきにや名のる時鳥朝くら山の明ほののそら

花に今はかへんとそ思ふ時鳥朝倉山の明ほのの空

百四番

左

前關白

夏衣かへても猶そ忍はるゝきのふの花の袖のなこりは

右

權中納言實爲

白ゆふの色を重ねて櫛とる神のいかきに咲る卯の花

神垣に咲卯の花のしら重ねきのふの袖の名残しもなし

百五番

左

春宮大夫顯統

玉川にさらす調布主やたれとへとかきねにさける卯の花

右

前大僧正頼意

隔こし春のかたみやよし野の高根に残る花の白雲

時にあふ賤を垣ねはさもあらはあれ隔てし春の花の形見に

百六番

左

前大納言光有

老か身の空日や月の影ならんくるゝ籬にさける卯の花

右

中納言光資

いつしかにはや立かへて蟬の羽のうすき袂に風をまつかな

卯の花の空目に月の影を見て風や身にしむ蟬の衣

百七番

左持

權大納言公長

うの花の咲初しより玉川のまさらぬ水に波そ立そふ

右

前中納言具氏

雪の色にまかへてや見ん卯つき垣花し句はぬ夕へなりとも

自妙の浪と雪とを分兼てうの花垣の色やまかはん

百八番

左持

左衛門督長親

別れこし春の契りのうす衣袖にも花の色はのこらす

右

春宮權大夫師兼

けふやきは花色衣立かへんそをたに春のかたみとおもふに

今はよし春の契りのうす衣かたみの色もかへしてそきん

百九番

左

權中納言實興

此くれにきなかすとても時鳥さてややむへきむら雨の空

右

源頼武朝臣

村雨をなみたにかりて時鳥たか衣手のもりになくらん

むら雨の同し空にも時鳥わきて問みし衣手のもり

百十番

左

藤原經高朝臣

あやにくにつれなきよはの時鳥中々またぬ人やきくらん

右

源成直

ほとゝきす心つくさぬ初音をやみ山の里のおもひ出にせん

時鳥またぬにたにもきくなれはみ山の里もよしや尋ねし

百十一番

夏二

新皇

左持

むかしたれ花橋に忍へとて袖の香なからうつし植けん

藤原經高朝臣

右 源資氏

待になとつれなき物と契りけん心もしらぬほとゝきすかな

うつし植し花橋の袖の香もけにまたしらぬ時鳥かな

百十二番

左持 權中納言實興

治れる世にたつ民やうきふしもしらぬ竹田のさなへとの覽

右 源成直

ふりすきふしはしを雨の晴まにてさ月の月は見るよはもなし

五月雨の月まち出る晴間かな竹田の早苗よるはとらしを

百十三番

左持 左衛門督長親

聞てさへ夢かとそおもふ時鳥つれなき頃の心ならひに

右 源頼武朝臣

若の浦や鹽干もそこ見えわかてかたを波たつさみたれの頃

時鳥聞つる夢やかたをなみ苜邊のよるの五月雨の頃

百十四番

左持 權大納言公長

まち佞ぬうき身からにや時鳥同しはつねもつれなかるらん

右 春宮權大夫師兼

村雨の雲まの月にほとゝきすたのめすとても猶やまたまし

杜鵑おなし初音そ待わふる雲まの月の空はかはれと

百十五番

左持 前大納言光有

さのみなとつれなかるらん時鳥忍ひはつへき初音ならぬに

右 前中納言具氏

部にはいまた木末の郭公はや山人や初音きくらん

心ある人にそ忍ふ時鳥よし山かつよきかけきくとも

百十六番

左持 春宮大夫顯統

杜鵑はつねや神に手向山ぬさも取あへぬほとゝ鳴なり

右 中納言光資

いかはかりうき時なれやほとゝきす山より里に出て鳴らん

里に出る聲をは神もたとるらしぬさと手向の山時鳥

百十七番

左持 前關白

むかし又誰かをしへし郭公まつにつれなきならひ有とは

右 前大僧正頼意

幾度か老のね覺にまちかねし我にかたらへ山ほとゝきす

昔よりつれなかりしも時鳥おなしならひの老のねさめか

百十八番

左 辨内侍

待わふる山ほとゝきす心あらはねぬよかさなる宿を問なん

新雪夏 右持 權大納言實爲

終によも忍は果しほとゝきす心つくして初音きかせよ

ねぬ夜のみ重ねはつらし時鳥心つくさぬ初音きかはや

百十九番

左持 無品法親王

山深き住居にかへてほとゝきすことしはまたぬ初音をそきく

右 關白

村雨の露吹おとす夕風に涼しく匂ふ軒のたちにはな

むらさめの夕風よりも時鳥またぬはつねに猶増りけり

百二十番

左持

あま雲のよそにふりなて時鳥我ゐる山のかひになく寛

右

女房

太宰師親王

待わひてねなまし物を時鳥明る雲間に聲きこゆなり

柴の戸の明る雲間の時鳥我ゐる山のかひに鳴なり

百廿一番 夏三

左持

女房

立田川わたらぬ水も濁けり三室の山のさみたれのころ

右

關白

さみたれに峯の眞鶴雲とちて衣もほさす天のかく山

五月雨はいつれも雲の中なれや三室の高ね天のかく山

百廿二番

左

無品法親王

夢にたに晴るとは見すけふ幾日雲にくもそふ五月雨の空

右持

權大納言實爲

かりてほす玉も、波に朽やせんとしまか磯の五月雨の頃

五月雨の雲にくもそふ頃なれや磯の玉も、朽まさるらん

百廿三番

左持

辨内侍

世渡るもくるしきわさの大井河鶴舟のかゝりうきしつみつゝ

右

前大僧正頼意

有明の月かけなから松の戸になれもつれなき時鳥かな

夕やみの頃と契りてあり明の月はう舟のかゝり火のかけ

百廿四番

左

前關白

ほとゝきす心つくさてきく度そ住うき山のかひもしらるゝ

右持

中納言光資

山かけはいとゞ晴行空も見すなつみの川のみたれの頃

ほとゝきす待聞頃やなつみ川山かけまさる五月雨の空

百廿五番

左持

春宮大夫顯統

目をふれは水かさそまさる河内女の手にまく糸の五月雨の頃

右

前中納言具氏

きのふといひけふとくらして徒にはれぬ雲間のさみたれの頃

日をへつゝ手にまく糸の心ひけは空も隙なき正月雨の頃

百廿六番

左持

前大納言光有

咲にけり花橋もこゝのへの右のつかさの袖匂ふまで

右

春宮權大夫師兼

心なき人きけとてやほとゝきす岩木の山に音を鳴らん

橘の右のつかさの花の香を左の袖にふかくとめつゝ

百廿七番

左持

權大納言公長

さらてたにかはく間もなき海士人の袖や朽なん五月雨の頃

右

源頼武朝臣

かけしあれは猶敷そふる池水のそこらに見えてとふ螢かな

飛螢そこらに燃るかひもなしあまの袖たにほさぬ五月雨

百廿八番

左持

左衛門督長親

みよし野の山ほとゝきす今しはやみやこに出る聲きこゆ也

右

源成直

植をきし人はむかしのふる里に袖の香残る軒のたちはな

みよし野の山時鳥出る也世にたち花の花のしるへに
百廿九番

左勝

権中納言實興
行水の數ならさりし谷川の岩に波こそさみたれのころ

右

源資氏
我も今はつねときくを時鳥鳴ていくかの夕くれのそら

ゆく水のなを數しらぬはつ番哉なきて幾日そ山時鳥

百三十番

左勝

藤原經高朝臣
茂りあふは山かみねにもりかねて待出ぬ月の有明の空

右

太宰帥親王
たち花の花と共にやちりぬらんむかしを忍ふ袖の上露

橋の花より上に見ゆるかなは山をいつる月の有明

百三十一番

左勝

藤原經高朝臣
淺き瀬にせかれし波は岩こえて川音絶るさみたれの頃

右

關白
難波江や秋くるかたの汐風にあしの葉亂れとふ螢かな

芦の葉も下に成つゝ淺きせの岩こそ波の増る五月雨

百三十二番

左

權中納言實興
くれてゆく野への螢は旅人の

右勝

玉かと見えまかひつゝ
高ねには夕立すらしよし野川瀧津岩波音まさるなり

くれて行野へまでしらぬ夕立を岸よりおろす瀧津せの音

百三十三番

左勝

左衛門督長親
ゆふ立のなこりの露の玉さゝに宿かる月の影のすゝしさ

右

源資氏
きのふけふみかさまりてあすか川淵瀬もわかぬ五月雨の頃

昨日けふふりし雨ともしらぬは名残の露の玉さゝの月

百三十四番

左

權大納言公長
日にみかく光りも清しゆふ立の過ぬる跡の軒のたま水

右勝

源成直
なつみ河う舟の簀敷をひて山かけのほる夕やみのそら

夕立の今はなこりもなつみ川山かけのほるうかひ舟かな

百三十五番

左

前大納言光有
よし野河みかさまりてわたるせも淵と成ゆくさみたれの頃

右勝

源頼武朝臣
吉野河岩波はやく涼しきは日敷をこえて秋やたつらん

よしの川同しはやせの岩波も秋こそ瀬より風ぞ涼しき

百三十六番

左勝

春宮大夫顯統
心ありてするわさならし夕かほの花もてふける賤かき座

右

春宮權大夫師兼
いと又岩波高し落瀧つよし野の川のさみたれの頃

落瀧津波の花さへ色見えて夕かほしろきみよしのの里

百三十七番

左勝

前關白
ふるほとは結ひもあへす夕立のあとの草はにしけき露哉

右

前中納言具氏

打なひき草のしけみをふく風に露もたまらぬ夕立の空

いづれとも分そ兼つる野へはみな同じ草はの夕立の露

百三十八番

左

辨内侍

音に立ぬ夜はの螢の誰ゆへに身をこかすまで物おもふらん

右

中納言光資

ともしするは山か峯に入鹿は音にこそたてねみをやおしまぬ

ともしするは山か峯の火の影にのへの螢も如何をよはん

百三十九番

左

無品法親王

誰袖のなこりもしらぬ橘のなとなつかしき香に匂ふらん

右

前大僧正頼意

をく露の玉江のあしのよることにほす隙そなき五月雨の頃

誰袖とよそふるからに橘のみさへふりぬるさみたれの頃

百四十番

左

女房

あつめては國の光と成やせん我窓てらすよはのほたるを

右

據大納言實爲

水の面にもゆる澤邊の螢何にけつへき思ひなるらん

かすかなる澤の螢もあつむれは國のひかりと成ける物を

百四十一番

左

女房

住吉の松に涼しくひゝきて夕立すくるむこの山かせ

右

前大僧正頼意

軒近き花たち花の露なからわか袖かけてにほふ夕かせ

いかてかは袖の夕風及ふへき高き梢の松のひゝきに
百四十一番
左

左

無品法親王

ゆく年の半はこえてみそき川早瀬の浪の立もかへらす

右

中納言光資

立よれば袖そ涼しき秋ちかくなるおの浦の松の下かけ

秋ちかくなるおの浦の松よりは半こす浪立かへれかし

百四十三番

左

辨内侍

わすれては秋かとそおもふ山陰の岩井の清水松風の聲

右

前中納言具氏

なにはかたあまのたく火の影なれや浪間にもゆる夜半の螢は

螢とふなにはの水も山かけの岩井も秋をまつの下風

百四十四番

左

前關白

みそき川五串の四手の打なひきふくる波間にかよふ秋風

右

春宮權大夫師兼

いひしらぬおもひにもえて口なしの名におふ里にとふ螢かな

御歌談

百四十五番

左

春宮大夫顯統

くれぬるか鳴音もよはる蟬のはのうすき衣に風そ涼しき

右

源頼武朝臣

行末も終によるせやありす河みそきになかす浪の白ゆふ

身にならす空蟬のはの薄衣よるせ涼しき河風そふく

百四十六番

左

夕立はこの里遠く過にけりすゝしき風を跡にのこして

右持

源成直

御板して河せになかす麻のはにいつしかかよふ秋のはつ風

百四十七番

左持

權大納言公長

松かねの岩もる清水むすはねと音きくからに袖ぞ涼しき

右

源資氏

立よれば櫓の廣はの茂りあひて夕日ももらぬ陰ぞ涼しき

百四十八番

左持

左衛門督長親

新かり集ありあふ櫻か下の夕すゝみ春はいとひし風そまたるゝ

右

太宰帥親王

立かへり又やむすはん松かねの岩間おちくる水のしら波

風を待櫻か下の夕すゝみ花の時よりめつらしき哉

百四十九番

左

權中納言實興

かはるへきあすをもまたて秋にはや涼しさかよふならの下風

右持

關白

奥津風波ふきたてゝ紀の國やゆらのとわたる夕立の雲

秋も早あすをもまたてきの國やゆらのと渡る風ぞ涼しき

百五十番

左持

藤原經高朝臣

石間ゆく水のしら玉敷えひて瀧つ河瀬にとふ螢かな

右

わきて猶風そすゝしきなつみ河夏をもしらぬ山陰にして

夏をたにしらてや果ん石ま行水のしら波山陰にして

百五十一番 秋一

左持

女房

難波江や秋立波の打つけに涼しくもあるか奥津汐かせ

右

源資氏

けきははや軒の下萩かたよりて風の吹しく秋は來にけり

いとゝしく秋立波を吹しくはなにはの里の萩の上風

百五十二番

左持

無品法親王

何となく心うかれて身にしむはたかならはしそ秋の初風

右

太宰帥親王

吹かふる音こそあらめいかにして身にはしむらん秋のはつ風

いつくにも吹秋風は變らぬにうかるゝ人の身にやしむ覽

百五十三番

左

辨内侍

けさも猶空にははれる色はなし風こそ秋のしるへなりけれ

右持

關白

立かへる習ひもつらし天津風雲ふきとちよ星合の空

やかて吹契の秋の風はうしけふ待えたる星合の空

百五十四番

左持

前關白

七夕の涙の雨とふるからにわたしやそめしかささきの橋

右

權大納言實爲

風の音のおとろくまてはふかねとも秋そとみゆる袖の白露

七夕のたま／＼むすふ夜はの夢涼しき風やおとろかす
左持 権中納言實興

左持

春宮大夫顯統

いつはとはわかぬ常盤の松風もをとこそかはれ秋やきぬ
右 前大僧正頼意

秋のくる方こそ空にしられけふめつらしき三日月の影

常盤なる松たにかはる夕風に山のはしるき秋の三日月

百五十六番

左持

前大納言光有

けさよりは身にしむはかり吹かへていはぬにしろき秋の初風

右持

中納言光資

秋といへはむすほふれ行心かな草葉の露も袖の涙も

草の露袖の涙の秋をしれ風はさやかに見えはこそあらめ

百五十七番

左持

權大納言公長

七夕の天の川せの岩まくらかはすこよひも袖やぬる覽

右持

前中納言具氏

あけは又天の河原の岩枕かたしく袖やかたみならまし

いかにねてかはす河瀬の岩枕左の袖やぬれ増るらん

百五十八番

左持

左衛門督長親

七夕の妻むかへ舟こきよせはあまの河風夜は更ぬらん

右持

春宮權大夫師兼

こよひこそ五百機をれる七夕のみけしのころも裁重ぬらん

今夜とてさそ急くらん七夕の五百機衣つまむかへ舟

百五十九番

いとふへき袖の露かは秋來ぬとおもふ心にむすひそめつゝ
右 源頼武朝臣

右持

源頼武朝臣

夢たにもさたかに見えす秋きぬとおとろかしにし萩の上風

風かよふ萩のは近き夜床ねは夢にやかへて露結ぶ覽

百六十番

左持

藤原經高朝臣

秋やくる物おもふみのならはしに猶過てをく袖の上露

右持

源成直

時しあれはけふかけそめつ神まつる秋は立田の森のしめなは

秋の立身の習はしはなかりけりゆふかけ初る森のしめ繩

百六十一番

秋二

左持

藤原經高朝臣

誰をかはは見はてぬ夢にかこたまし我うへてきく萩の上風

右持

源資氏

しはしたに舟手急くな七夕のかへるあしたの天の河長

七夕の見はてぬ夢をかこつ哉舟出を急く天の河長

百六十二番

左持

權中納言實興

閑遠なる契りなからも秋をへてぬる夜數そふ星合の空

右持

源成直

夕くれは風のやとりとなりはてゝ露こそなけれ庭の萩原

ほし合の契りの數にむすひをけは露もまれたる庭の萩原

百六十三番

左持

左衛門督長親

風の音は軒端の萩を過ぬなり袖に涙の露をのこして

右

源頼武朝臣

秋萩の花の錦のぬきをうすみ風も立あへず露そこほるゝ

吹亂す萩のは風にちる萩や猶ぬきよはき錦なるらん

百六十四番

左

權大納言公長

をく露も色こそかはれ朝なゝ花の数そふ庭の秋萩

右

春宮權大夫師兼

したにのみかよひ馴こし秋風もはやほに出る庭の萩はら

萩の上の露は数そふ朝なゝ下葉にかよふ風そ色なき

百六十五番

左

前大納言光有

月日のみよそに過して七夕の一夜はかりをなとちきりけん

右

前中納言具氏

風ふけは野への白露玉ちりてむすひもあへぬ秋の夕暮

七夕の一よはかりのうき契りむすひもあへぬ袖のしら露

百六十六番

左

春宮大夫顯統

萩のはにふけはや萩は物うきと風より外の夕くれもかな

右

中納言光資

としにありて一よを何か契らまし七夕つめの我身なりせば

七夕の契りしよりやたか秋のゆふへの風も物うかるらん

百六十七番

左

前關白

秋風の身にしむくれの哀さは萩の葉よりや聞ならひけん

右

前大僧正頼意

いつしかにうきは夕へと聞からになみたをさそふ萩の上かせ

身にしむと思ひしまてはいかゝせん涙をさそふ秋の初風
百六十八番

左

辨内侍

七夕のあまのは衣かさねつゝ袖のひるまやこよひなるらん

右

權大納言實爲

しら玉といかゝいはれの野へにさく小萩か露は紫にして

七夕の袖のひるまはいさしらす露そ色こき萩のむらさき

百六十九番

左

無品法親王

たなはたのいかに定めて一年にひとよをかきる契りなるらん

右

關白

ぬるとてもいかゝ拂はん袖の露分るすその萩か花すり

ぬるとても一よはかりは七夕にかさはや袖の萩か化すり

百七十番

左

女房

淺からぬ契りもしるし天の川はしは紅葉の枝をかはして

右

太宰帥親王

偽もあらしとおもふたのみにやたへてまちけんほし合の空

偽もあらしとおもふ契りには紅葉の色も猶淺きかな

百七十一番 秋三

左

女房

萩の戸の花もや忍ふ置露のことしけかりし秋の昔を

右

關白

松むしの鳴音もよはの初霜に色こそかはれ野への淺ちふ

虫の音も忍ふ計そ萩の戸のことしけかりし露の昔を

百七十二番

左持

無品法親王

吹しける野分の風はよはれとも露に又ふす庭の萩原

右

權大納言實爲

旅人の分て入野の初尾花まねく袖にも露そこほるゝ

露にふす萩の契りも結ふらん尾花はまねく人はとまらず

百七十三番

左

辨内侍

あたに吹風になひく女郎花蓼よむすはん露の契そ

右持

前大僧正頼意

宮城のの木の下露に色添て分ゆく袖は萩か花すり

萩か上に落て染ける宮城野の木の下露の色そ増れる

百七十四番

左持

前關白

秋もはやよきむになれは虫の音もかことはかりの庭の蓬生

右

中納言光資

ふく風の先音つるゝ萩のはや秋をしらすつまとなるらん

虫の音もかことはかりの蓬生に風やうらみのつまと成覽

百七十五番

左

泰宮大夫顯統

かり衣袖そうつるふ露分て入野のま萩花やちるらん

右持

前中納言具氏

風わたる野ちの玉川色みえて波間をくゝる秋萩の花

衣手にうつろふよりは秋萩の波間をくゝる野ちの玉川

百七十六番

左

前大納言光有

さらてたになみたはもろき夕くれの袖より外の萩の上風

右持

春宮權大夫師兼

咲匂ふ花も時ある萩の戸のむかしにかへる朝まつりこと

萩の戸の昔にかへる秋をえてもろきは老の袖の白露

百七十七番

左持

權大納言公長

淺ちふの露のやとりのいかなれは秋にはあへす虫のなくらん

右

源頼武朝臣

なにとなくゆふへを露にかこつ覽身はならはしの秋の袂を

秋にあへぬ淺茅か虫もことはりよ身も習はしの露の夕暮

百七十八番

左持

左衛門督長親

さひしさを秋の習ひとかこちても唯宿からの夕くれの空

右

源成直

暮行はくさむらことに鳴むしのおもひや同じ心なるらん

佗ぬれば床は草はの虫の音を宿からとたにきかて寒けき

百七十九番

左持

權中納言實興

うしときゝ哀といひて此秋も又なれそめつ萩の上かせ

右

源資氏

吹過てわれをはまねく袖もなし風や蕙の心なるらん

軒の萩の上はも共になひけともお花によける風の音哉

百八十番

左持

藤原經高朝臣

何ゆへと我身にしらぬ涙さへ袖にこほるゝ秋のゆふくれ

右

太宰帥親王

行過る人はとまるを花すゝき又たれありと猶まねく覽

人招く草葉は物か花すゝきなみたこぼるゝ袖にくらへよ
百八十一番 秋四 藤原經高朝臣

ねにたてぬ思ひをよそにしらねはやをのれはかりと虫の鳴覽
左將

鹿の音をさそひて過る秋風の又たか袖に涙そふらん
右 關白 白

あちきなく鹿の音虫の鳴度に袖はひとつや涙わけつる
百八十二番 左將 權中納言實興

玉章のありやなしやも白雲に翅をかはす雁の一つら
右 太宰帥親王

秋のよの更行まゝに霜やをく鳴音もかるゝ野への松虫
鳴雁の露の玉章かき絶て霜のみかるゝ松虫の聲
百八十三番 左將 左衛門督長親

隔ける契りもつらし山鳥の尾上の鹿の妻戀のこゑ
右 源資氏

秋よたゝかゝれとてこそうかるらめ夕へは袖の露もいとほし
袖の露もよその哀に置そふは我にや鹿の鳴増るらん
百八十四番 左將 權大納言公長

さゝわひぬ秋のね覺も深きよの哀をそふる棹鹿の聲
右 源成直

いつくとも聞そ定めぬ吹風のたよりに過るさほ鹿の聲
ね覺とふ哀はかりと聞つるに又秋風のたくふ鹿の音
百八十五番

まねきわひたかつらさとて秋の野のお花の袖の露けかるらん
左將 前大納言光有

小男鹿のかけたる萩のしからみを尾花波こす野への秋風
右 源頼武朝臣

棹鹿の涙の色はもらさしなお花か袖の萩のしからみ
百八十六番 左將 春宮大夫顯統

妻かくす恨をたれにかこつらん矢野の神山鹿そ鳴なる
右 春宮權大夫師兼

さひしさもゆふへにかきる秋そとはたかならはしそ袖の白露
妻かくす恨や鹿はまさるらんゆふへをかこつ秋霧の空
百八十七番 左將 前關白

おく山の松ふく風にたくひ來て軒はに近きさをしかの聲
無窮秋上 左將

右 前中納言具氏

秋さむくなりゆく風の夕くれやむしもうらみの音をは鳴らん
鹿の音をたくへてきつる松風に淺茅か虫のなと弱るらん
百八十八番 左 辨内侍

秋ふかき枕の下のきり／＼すをのか夜さむの露に鳴らん
右將 中納言光資

秋のよは更行まゝにさほしかの聲すみのほる遠山のかせ
夜やさむき枕の下の葦鹿のなく音はすみのほるなり
百八十九番 左將 無品法親王

山陰の秋にはたへぬさをしかやねにあらはれて妻や戀らん

右

前大僧正頼意
秋もはやよきむの風の吹たちて衣かりかね雲になくなり

うはの空によきむとひくる雁よりも哀は鹿の妻戀の聲

百九十番

左持

かすか山裾野の霧のたえまよりおのえにたかき棹鹿の聲

右

權大納言實爲
つれもなき松をしらてやよもすから我妻のみと鹿の鳴らん

かすか山松もつれなし鹿の音のおのへに高き秋霧の空

百九十一番

左持

女房
新風秋上
風はやみしくるゝ雲も絶々にみたれてわたる鷹の一つら

右

前大僧正頼意
くもりなきみよのしるしに今も引むかしなからの望月の駒

峯こゆる鷹かねわたる梯に引をくれたるもち月の駒

百九十二番

左

無品法親王
和かの浦の波にひかるゝもくつ迄もらさぬ月の影やみかゝん

右持

中納言光資
なれまでも哀は秋のね覺とやかたふく月に鶉なくらん

わきて猶哀もらさぬ月影も鶉の床に澄まさりけり

百九十三番

左持

辨内侍
更ゆけは枕に近くかよひきてねさめもよほすさを鹿の聲

右

前中納言具氏
たつた山おろす嵐にさそはれて麓にちかきさをしかの聲

よはに聞是や立田の鹿の聲ふもとにちかき旅衣かな
百九十四番

左持

前關白
これまでも晴ぬおもひの数なれや月待山の峯の秋霧

右

春宮權大夫師兼
月にこそ秋の心をなくさむをなと夜と共にむしは鳴らん

右

春宮大夫顯統
月に鳴むしの恨や秋霧のはれの思ひのかきり成らん

左持

夕されはいつくはあれときりくす蓬か袖に鳴音かなしも

右

源頼武朝臣
月影はよるとも見えずみよし野のたのむの鷹は何となくらん

右

前大納言光有
月影のよるとも見えぬ蓬生に鶉鳴まさるきりくす哉

左

源成直
をくら山月はまたしき夕くれに先出てなく棹鹿の聲

右持

吹しほる松の木のままの秋風に心つくさぬ月を見るかな

右

權大納言公長
月たにも木のまくもらめ松風に心つくさぬ鹿の音そうき

左

源資氏
いかにせんゆふへは秋のならひとて物おもはてぬるゝ袂を

右持

から衣日も夕くれを待てもこめ妻戀に鹿やなくらん

右

物思はぬ人たに袖のぬるなるにことわりなれや鹿の妻戀

左

影やとす露も涙にまかひけり野へのお花の袖の上の月

右

左衛門督長親
太宰帥親王

いとひつるゆふへの雲や晴ぬらんくまなき月に秋風そふく
袖せはみ蕙か末の露よりもくまなき月を空にやとさん

百九十九番

左

時しらてあれなとおもふみ山への奥にまつ聞さをしかの聲

右

權中納言實興
關白

くもはるゝ山は三笠の秋の月誰もろこしの空に見るらん
もろこしの月は遙けしつらくともみ山の奥の鹿を聞てん

二百番

左

あはてこし涙や露と結ふらん妻とふ鹿の道の篠原

右

藤原經高朝臣
權大納言實爲

秋風に鶉の床やあれぬらんゆふへは露も深草のさと
露しけき鶉の床の秋よりも篠分る色にふかき鹿のね

二百一番

左

みよし野のすゝ吹風の音絶てきさの小川にすめる月影

右

藤原經高朝臣
前大僧正賴意

小山川の庵もる月に聞わひぬね覺よふかきさをしかの聲
さほ鹿の夜深き聲も及はぬはすゝ吹風にみよし野の月

二百二番

左

末とをき田つらの庵をめにかけていそけははるゝ秋の村雨

權中納言實興

右

くもりなき我君か代は久方の空にもしるくすめる月影

左

民のすむ田つらも晴るゝ村雨にくもらぬ月と君あふく也

二百三番

左

いたつらに見る人そなきあすか風ふくる川瀬の秋のよの月

右

左衛門督長親
關白

かた敷の袖の初霜打はらひ月や見るらん宇治の橋姫
徒らに契らぬ月をみんよりはまつを習ひの宇治の橋姫

二百四番

左

雲はらふ比良の山風さよ更て月のくまなる幸崎の松

右

權大納言公長
太宰帥親王

秋のよはもしほもやかてあま人のけふりいとす月や見る覽
鹽やかぬ浦はの月はくまなきに煙とみゆるから崎の松

二百五番

左

秋風に雲ものこらぬ山のはの梢をわけていつる月影

右

前大納言光有
源資氏

すみのほる光りもしるし名にしおふこよひそ秋の中空の月
山のはの梢を高め分出て月もなかはの空の秋風

二百六番

左

袖にこそしはしやとらめ村雨の雲よりうへの月はくもらし

右

春宮大夫顯統
源成直

清見かた月みよとてやとゝむらん心ありけるなみの關もり

村雨はよそに過れと行月の清見か關に影とゝむなり

二百七番

左

前關白

有ふとも身をは歎かし秋のよの月見るほと心のなりせは

右

源賴武朝臣

秋をへて飛火の野もりをのつから契るとなしに月やみるらん

秋をたゝ契るとなしに契る哉月見るほと人の心は

二百八番

左

辨内侍

つくくゝと更行よはの空見れは月もこゝろもすみ増りつゝ

右

春宮權大夫師兼

つかへとてなれぬる秋もあまたへぬ友とはみすや雲の上の月

秋をへてなれぬる雲のうへ人や月に心のすみ増るらん

二百九番

左

無品法親王

かそふれは秋の日數も中空にすむ月かけのおしきよはかな

右

前中納言具氏

出てはや月も高ねの雲はれて空にふけゆく秋風の聲

たくひなき月はこよひの半天にうたてふけゆく秋風の聲

二百十番

左

女房

かつらきや高まのあらしさよ更て雲なき峯に月そいさよふ

右

中納言光資

片敷の袖に氷やむすふらん月すみわたる宇治の橋姫

かた敷の袖に氷やしもとゆふかつらき山の峯の月影

二百十一番

秋七

左

女房

いつもすむ月を見るにそよしの山我身の秋をしはしわするゝ

右

前中納言具氏

名にしおふ春こそあらめうき身には秋さへ月のなと霞むらん

照しそふ月の光りをみよし野にしはしは曇る影は眺めし

二百十二番

左

無品法親王

いくめぐり同じ空ゆく月影にかはるうき身の秋をしるらん

右

春宮權大夫師兼

難波江やあまの小舟は分過て芦間の浪に月ひとりとすむ

月かけにかはるうきみを尋ぬれは蜚の小舟そ同じ秋なり

二百十三番

左

辨内侍

身にはまたしらぬ昔の秋までも月に何とてこひしかるらん

右

源賴武朝臣

あれぬれは守人もなし不破の關軒の板まの月にまかせて

あれてみる不破の關屋の秋よりもしらぬ昔や月に戀しき

二百十四番

左

前關白

宿るとて月はしるらん我袖にむかしを忍ふなみたありとは

右

源成直

難波江や芦の下おれしけゝれと宿れる月の影はさはらす

いつくにも月はやとれと袖の上の涙をわきて哀とや見る

二百十五番

左

春宮大夫顯統

この頃はななの鹽やきいとまあれや煙も絶てする月影

右持

源資氏

長月の今夜の月は數嶋のやまと嶋ねや分てすむらん

月清みやまと嶋ねを見渡せは灘の鹽ちも物の數かは

二百十六番

左

前大納言光有

ふけぬるか間の秋風さむしろにもりくる月の影そかたふく

新巻下 右持

太宰帥親王

夜もすから吹つる風やたゆむらん村雲かゝる有明の月

山のはにかたふくはうし村雲にまた有明の月としらすや

二百十七番

左

權大納言公長

見るまゝにあくかれはつる心かな月やいつくにさそひ行らん

新巻下 右持

關白

澄のほる雲の月にいとふかな衛士のたく火のよはの煙を

あくかるゝ心はなくて御垣守雲井にたかき月になるらん

二百十八番

左

左衛門督長親

雲霧もいかゝおほはんすむ月の秋津しまねの同じひかりは

右持

權大納言實爲

なれしよの秋こそあらめ佳よしの松の木のままの月はかはらし

大方にあまねきかけは秋津しま月は木の間に佳よしの松

二百十九番

左

權中納言實興

見るからにうき身の秋のわすられて我心よりする月かな

右持

前大僧正頼意

立かへり夜居につかふる袖までももらさてやとれ雲の上の月

さもこそは憂身忘れて詠むらめ仕ふる夜居の雲の上の月

二百二十番

左持

藤原經高朝臣

影やとすあらいそ波のよるゝは月も岩こす秋のうら風

右

中納言光資

ことゝひし人は軒はの月影をくるゝ夜ことの友と見るかな

あら磯の月かけなからこす波に笠屋の軒も下にこそなれ

二百廿一番

秋八

左持

藤原經高朝臣

風わたる外山の松はあらはれてふもとにくたる秋のゆふ霧

右

前中納言具氏

秋風のふけゆくまゝにから衣きぬたの音やよさむなるらん

風わたる外山の里やさむからし松の木のに衣うつ聲

二百廿二番

左持

權中納言實興

露は猶やとりもはてぬ秋風にたへて淺茅の月そ残れる

右

中納言光資

里人のよさむかはらぬしるしとや同じね覺に衣うつらむ

風さむき淺茅か月の残るよにおなしね覺と衣うつなり

二百廿三番

左持

左衛門督長親

さゝ竹のみ山のさとの秋風にねぬよかさねてうつ衣かな

右

前大僧正頼意

柴の戸やかりにも人は問もこて友とみ山の秋の夜の月

月をのみ友とみ山の篠の庵ねぬよしらせてうつ衣哉

二百廿四番

左

秋霧にそことも見えす大井川山はあらしの音はかりして
權大納言公長

右持

をのつから月見ぬよはも遠近の碯の音にいこそねられぬ
權大納言實爲

二百廿五番

左持

秋風のよさむしられてから衣打もたゆまぬ音そきこゆる
前大納言光有

右

さゝ竹の大宮人にあふ坂の關路にいそく望月の駒
關白

秋風のよ寒しらるゝあふ坂の關路をいつる望月の駒

二百廿六番

左持

秋はたゝ隴の清水名のみしてうつれる月の影もくまなし
春宮大夫顯統

右

立こむるひらの高ねの夕霧に浪さへむせふしかの辛崎
太宰帥親王

二百廿七番

左持

曉のしきの羽かきそれよりも我ね覺こそ數つもありぬれ
前關白

右

心あてにそれかとはかりほの見えて山のは遠き秋の夕霧
源資氏

霧ふかきね覺の空の心あてにそれかとぞ聞鳴の羽かき
二百廿八番

左

ふもとをを猶立こめて吹風のとよりはるゝ峯の秋霧
辨内侍

右持

をしなへて同しよ寒の秋風を此里のみとうつ衣かな
源成直

(獨歌)

二百廿九番

左持

遠近の碯の音の身にしむやよさむの風のたより成らん
無品法親王

右

難波かたあまの燒藻の我からや立るけふりを空に恨みん
源賴武朝臣

なには湯月に恨の色よりもよ寒をそふる風の音かな
二百三十番

左持

秋をへて月やとれとや雲の上に露の臺の名を残しけん
女房

右

里人の碯の音もたゆむよに又打そふるころもかりかね
春宮權大夫師兼

月やとる露の臺の雲の上にかゝ聞らん衣うつ聲

二百三十一番

左持

(秋九)

夜寒なる月の桂の里人やねられぬまゝの衣うつ覽
女房

右

みよし野のすゝ吹風はよ寒にてふもとの里に衣うつなり
源賴武朝臣

なへて吹秋風なれは衣うつさとはいづくも夜寒成らん

二百三十二番

左

けさまでもしくるゝ雲の立田山よはにもみちの色や添けん
無品法親王

右持

消は又うつろふ色やあらはれんまかきの菊にむすふ朝霜
源成直

立田山よはに時雨し紅葉よりうつろひまさる霜のやへ菊
二百三十三番

左

辨内侍

山姫はたか爲とてか秋をへてもみちのにしきをりつくすらん

右

源資氏

くれ竹のふしみの里のよもすから夢もゆるさすうつ衣哉

紅葉はの錦もしはしくれ竹のふしみにうつは麻のさ衣

二百三十四番

左

前關白

染つくす紅葉をぬさと手向山秋にや神も心ひくらん

右

太宰帥親王

橋姫の袖の秋風更るよにころもうつなり宇治の里人

橋姫のかた敷袖による波のぬさと手向てうつ衣哉

二百三十五番

左

春宮大夫顯統

夜を重ねぬぬも我身のか衣打たゆみてや夢もみるへき

右

關白

月のこる遠山鳥のしたり尾のなき夜すからうつ衣哉

衣うつわさは苦しき長きよにしはしもたゆむ方は増れり

二百三十六番

左

前大納言光有

たつた山松より外の紅葉はをいかに時雨のわきて染けん

右

權中納言實爲

定めなき時雨や染るうすくこく色こそかはれ木々の紅葉は

うすくこき色こそあらめ立田山松に紅葉をいか時雨し

二百三十七番

左

權大納言公長

秋ふけて夜寒しらるゝ月影にいく里人のころもうつ覽

右

前大僧正頼意

千々の秋を契りをくらし九重の玉しく庭の菊の下露

ちの秋を幾里人も契るらん恵あまねき菊の九重

二百三十八番

左

左衛門督長親

諸人のいたゝくほしにまかふらし天津雲の庭の白菊

右

中納言光資

時雨するしつはた山の山姫は今や紅葉の錦をるらん

九重にもみちの錦重ねきてほしをいたゝく雲の上人

二百三十九番

左

權中納言實興

をのつから砧の音のたゆむ間はあれとも夢をみるよはそなき

右

前中納言具氏

夕日影うつろふ山の紅葉はや時雨ならても色はそふらん

時雨より猶秋ふかくきこゆるは山風さむく衣うつこゑ

二百四十番

左

藤原經高朝臣

衣うつ音にもしるしあすか風いたつらにねぬ秋のさと人

右

春宮權大夫師兼

から錦秋の紅葉の手向山ちるこそ神のかへす成けれ

秋の色や只いたつらのあすか風紅葉に優る色しなけれは

二百四十一番

秋十

左

藤原經高朝臣

泊瀬女か袖の時雨の下紅葉手染のかたや猶まさるらん

新撰後下 右 源頼武朝臣

しくれ行磯山かけの下もみちいくしほまでとさして染らん
はつせめか袖の紅葉そ色はこき時雨し山は木々の下染
二百四十二番 左持

山のははさなから霧につゝめともかくれぬ色の峯の紅葉は
右 春宮權大夫師兼
とゝめあへす歎く心をしらねはやしかもつれなく秋の行らん
止めあへす秋はいぬ共紅葉はを霧に包みて形見とや見ん
二百四十三番 左

立田山ふもとの雲の初しくれ染も及はぬ峯のもみち葉
右 前大納言具氏
紅葉はをぬさと手向の山越てくれゆく秋を神よとゝめよ
もみちはの染も及はぬ錦をはぬさと手向る袖や返さん
二百四十四番 左持

みれは又しくれぬ山もなかりけり染る紅葉の色はかはれと
右 權大納言公長
秋ははや末野の尾花打しほれまねかぬ袖にむすふ夕霜
色々の紅葉は山のさかりにて末野の原は打しほれけり
二百四十五番 左持

新撰秋上 右 前大納言光有
もしは焼煙の末も見えそめて空よりはるゝ浦の秋霧
秋ふかき色は見えけり露時雨染るやしほの岡の紅葉は
前大僧正頼意

秋深き浦路の霧の朝明に八入の岡もみねはしられす
二百四十六番 左持

霜のたて露のぬきもて織てけり秋のにしきの衣手の森
右 春宮大夫顯統
年をへてとまるならひのなきそとはおもへとしたふ秋の暮哉
霜のたて露のぬきさへよはければとまらぬ秋の衣手の杜
二百四十七番 左

くれて行秋の宿りを尋ねれはこゝとや風の松にこたふる
右 前關白
しくれつる紅葉はよそにあらはれて雲もうつるふ葛城の山
くれて行秋のやとりはしらねとも雲をうつるふ峯の嵐に
二百四十八番 左持

暮やすき日影さへこそうかりけれけふのみと思ふ秋の名残に
右 辨内侍
夜のほとに時雨や染る朝霧のはれて色そふ峯のもみち葉
二百四十九番 左持

くれて行秋の日数のすくなさにその名はかりや長月の空
右 無品法親王
小倉山朝ある雲やしくれけんやかて色つく木々の紅葉は
をくら山時雨るゝ雲の立かへり名残の秋の色をそへつゝ
二百五十番 左持

左聯

女房

春をきて時こそありけれ吉野山さくらの梢色かはる頃

右

源成直

露霜をたてぬきにして錦をるしつはた山の秋の紅葉は

折にあへは花より色や増る覽櫻か枝の秋のくれなゐ

二百五十一番 冬一

左聯

女房

水くきの岡のやかたも打時雨朝けの空に冬は來にけり

右

中納言光資

一村の雲吹はらふ木からしに時雨もつるゝ冬の山もと

水窟の岡の時雨をはしめて四方の山里かきくもりつゝ

二百五十二番

左聯

無品法親王

くもるとも照ともいはんかたそなき日影なからに打時雨つゝ

右

前中納言具氏

露結ふ秋は昨日とおもひしにいつより袖に霜のをく覽

露むすふ秋はきのふの袖の霜とけて朝日に又時雨つゝ

二百五十三番

左

辨内侍

村雲にもるゝ日影はさしなから同し空にもふる時雨かな

右

春宮權大夫師兼

つくねは嵐吹らしみなの川なかれてくたる瀬々のもみちは

時雨かと聞迄もなしみなの川ちりて流るゝせゝの紅葉は

二百五十四番

左聯

前關白

かき曇り時雨るゝことの隙なきは雲のよゝより冬やきぬらん

右

源賴武朝臣

木の葉ちる頃とはしるし日に添て聲もすくなき山下風のかせ

わく方もなくて時雨を開つるは雲のよそより山嵐のかせ

二百五十五番

左聯

春宮大夫顯統

木の葉ちる峯のあらしの吹音や空にしられぬ時雨なるらん

右

源成直

眞木の屋に音さへ今朝はかはれるや木の葉にましる時雨成覽

雲の外嵐もくたる山下は雨も木の葉もさそ時雨らん

二百五十六番

左

前中納言光有

晴くもる空にうつろふ冬の日の影さたまらずふる時雨かな

右聯

源資氏

袖の上や空をもまたて時雨らんきのふの秋の露の名残に

晴曇る空より袖のしくるゝはきのふの露の名残成けり

二百五十七番

左

權大納言公長

聞からにもらてもぬるゝ袂かな木の葉しくるゝ冬の山さと

右聯

太宰帥親王

散はてゝ残る紅葉もなきものを何を染へき時雨なるらん

木葉ちる跡の時雨は涙そふ袂の色を染るなりけり

二百五十八番

左聯

左衛門督長親

一村の雲のたよりの夕時雨はるゝ跡より月そほのめく

右

關白

風にゆく雲のとたえやをのつからしはし時雨ぬ山路なるらん

一村の雲の跡より月出てしはしと絶る夕時雨かな
二百五十九番

左持

權中納言實興

時雨行あらしにたくふもみち葉はちるまでも猶色やそふらん
右

權大納言實爲

空はまた時雨もあへぬ神無月手向るぬさとちる木の葉かな
神無月空に時雨やたむくらんちりて色そふ峯のもみちは

二百六十番

左持

藤原經高朝臣

ね覺までしつか篠屋の村時雨もらぬ夜半さへぬる袖かな
右

前大僧正賴意

秋染し名残をみせて神無月時雨とともにふる木の葉哉
秋染し木葉より猶色そこき賤か篠屋の袖の時雨は

二百六十一番

冬二

左持

藤原經高朝臣

ふりまよふ四方の木葉や色々にあらしを染る時雨なるらん
右

中納言光資

和歌のうらやみちくる鹽のあら磯に跡付かねて鳴千鳥かな
磯山や積る木の葉の跡みればみちくる汐に千鳥鳴也

二百六十二番

左

權中納言實興

水上や瀧津岩波氷るらんせかてもほそき山川のすゑ
右持

前大僧正賴意

曉の夢をはさそふあらしたにはらはぬ袖の霜のさむしろ
川雪のとたえ果たる夜の夢を結びかさぬる霜のさむしろ

二百六十三番

左

左衛門督長親

冬枯の芦邊の鴨の羽音さへまた色かはる今朝の霜哉
右持

權大納言實爲

色かへぬ松こそあらめ三の徑あれでものこる菊の一もと
霜をけは鴨の青羽もいさしらす松と菊とそ色は残れる

二百六十四番

左

權大納言公長

いろ／＼に秋見し花はかれ果ていつれも同じ霜のした草
新葉多

右持

關白

散かゝるよその木葉の時雨にやつれなき松も色かはらん
散かゝる木葉時雨るゝたひことに松も千入の色を添けり

二百六十五番

左持

前大納言光有

山ははやあらはに成ぬ木葉ちるこすゑは風の音はかりして
右

太宰帥親王

難波江や春見し程の色もなし霜に枯行あしの村立
木葉ちる山こそあらめ霜枯のうらもあらはの芦の一村

二百六十六番

左

春宮大夫顯統

霜こぼる袖の白妙色添て月をかさぬるよはのさ衣
右持

源資氏

山風や紅葉の錦さそひきて古郷いそく人にかすらん
重ねても月と霜との色はなし袖の紅葉を錦ことなる

二百六十七番

左持

前關白

山かけや木葉吹まく風の音に幾夜か絶し夢の浮橋

右

源成直

さそはれて梢にまたやかへらん嵐にたくふ四方のもみちは

木葉ちる夢の浮橋中絶て嵐にまかふ嶺のよこ雲

二百六十八番

左持

辨内侍

吹たひに四方の木ノ葉のさそはれてあらしに秋の色も残らす

右

源頼武朝臣

ふる程は時雨ににこる池水のすめはすみぬる冬のよの月

月のもる四方の木葉を吹たひに嵐にくもる冬の池水

二百六十九番

左持

無品法親王

浮雲をさそふのみかは木葉さへ跡もさためす山風そふく

右

春宮權大夫師兼

霜氷る入江の芦の夜とともに鹽風さやく音の寒けさ

川上の木葉を遠くさそふ波の芦間にさはる舟の鹽風

二百七十番

左

女房

さそひ行風の音さへかはりけり日數ふりぬる庭のもみちは

右持

前中納言具氏

立田山峯は夕日の影なから麓の雲や猶時雨らん

残りなき木々の紅葉の山嵐ふもとの雲や時雨そふらん

二百七十一番 冬三

左持

女房

うつろはぬ人の心のためしとやこの山路まてのこるしら菊

右

春宮權大夫師兼

浦遠く鴨や千鳥のをのか妻まつにも今夜波やこゆらん

秋をきて此時なれやうつろはぬ人の心のしら菊の花
二百七十二番

左持

無品法親王

芦鴨の浮ねも絶て氷る夜は月たにすまぬ庭の池水

右

源頼武朝臣

友千鳥立ましりてもまよふ哉我道ならぬ和歌の浦浪

芦鴨の浮ねもさゆる浦衝我道ならぬ跡はしられす

二百七十三番

左持

辨内侍

さよもはやふけゐの浦の汐風に聲さえわたる友千鳥かな

右

源成直

冬の夜は雲のみをさへ氷てや空行月も影よとむらん

さよ千鳥聲さえわたる冬のよの雲のみをとて氷る月影

二百七十四番

左持

前關白

みつ汐の高師の浦に風さえて夕波遠く千鳥なくなり

右

源資氏

難波江や芦間の波の立ゐにも聲はさはらて鳴千鳥かな

みつ汐の高師の浦に波かけて芦間さはらす立千鳥かな

二百七十五番

左持

春宮大夫顯統

風吹は浪も岩ねをこゆるきの磯立ならし千鳥なくなり

新歌冬 右

太宰帥親王

さえくらす雪けの雲をたよりにて先ふり初る玉霞かな

衝鳴あら磯波による玉のあられ亂て浦風そふく

二百七十六番

左持

前大納言光有
乙女子かかさしの花とみよし野のよしの、宮の雪のあけほの

關白

波あるゝよさのふけ井の浦風に松原遠く立千鳥かな
松原に立や千鳥も跡ふりて花のかさしをみよしのゝ雪
二百七十七番

左持

權大納言公長
和歌の浦やふりにし跡をそれなからよるへも波に鳴千鳥哉

右

權大納言實爲
和田の原そこもしらす立波になく音あらそふさよ千鳥哉

わかのうらに鳴音争ふ友千鳥ふりにし跡にいかゝ及はん
二百七十八番

左持

左衛門督長親
夜舟こく由良のみ崎の鹽風に聲を帆にあけて鳴千鳥哉

右

前大僧正頼意
みたれ芹のは風もさむし水鳥の波の浮すやはや来るらん

夜舟こくゆらの湊も水鳥の波の浮すも寒き汐風
二百七十九番

左持

權中納言實興
夕汐にまたやなるみの浦千鳥かはる干潟に聲うつるなり

右

中納言光實
衣手の田上川をきて見れは網代の氷魚もよるへ有けり

田上や網代にひたす衣手はかはるひ潟もあらしと思ふ
二百八十番

左持

藤原經高朝臣
すまの海士の波の枕に鳴千鳥幾夜の夢の關と成けん

右

前中納言具氏
霜さゆる入江にすたく水鳥や芹の枯葉の下に鳴らん
千鳥なく浪の枕をかたふけてまたなき浦の哀をそ聞
二百八十一番 冬四

左持

藤原經高朝臣
夕されけ霞みたれて吹風にぬきあへぬ玉のをのゝ篠原

右

春宮權大夫師兼
風寒み氷にむすふ瀧のうへのみ舟の山は雪つもるらし

瀧の上にぬきあへぬ玉とみゆる哉波に吹しく風の霞を
二百八十二番

左持

權中納言實興
くれ竹のよふかき雪の下をれにみぬよりつもる程そしらるゝ

右

前中納言具氏
夜もすから心くたけて玉篠の葉分の風にあられちるなり

吳竹のたえぬ心の下をれにまたくたけそふ霞玉さゝ
二百八十三番

左持

左衛門督長親
けぬか上に猶ふり添て白雪のつもる日數そ庭にしらるゝ

右

中納言光實
朝戸あけておとかれけりさゝ竹の一よのほとにつもる白雪

夜もふる雪の朝戸を明てみればけぬか上にそ猶積りける
二百八十四番

左

權大納言公長
ふみ分て誰かとひこん徒につもるもおしき庭の白雪

右持

前大僧正頼意
燈にかへてそ猶も集めつる今深き窓につもるしら雪

我ために集むる窓の雪なれはふみ分てとふ人もまたれす
二百八十五番

左

前大納言光有

夜を寒み片敷袖の浦千鳥波のまくらに音をや鳴らん

右

權大納言實爲

うらにあひて先たつ小忌の衣手に霜をかさぬる夜半の寒けさ

夜半の霜をかさぬる袖の浦千鳥鳴音も氷る浪枕かな

二百八十六番

左

春宮大夫顯統

狩暮し道こそ見えね箸鷹のたかへる鈴は音聞ゆなり

右

關白

雲間もる夕日にみかく白玉の空にみたれてふる霞かな

かりくらし霞に音やまかふらむたかへる鷹の鈴の篠はら

二百八十七番

左

前關白

絶さらん跡をしそおもふ身にははや二度こえし關の白雪

右

太宰帥親王

奥津風ふけみの浦の夕波に聲も消ゆく村千鳥哉

藤川の流ひさしき跡なれは猶またたへよ關の白雪

二百八十八番

左

辨内侍

かきくらしふる白雪のつもりな人をよとはん我やまたまし

右

源資氏

よそよりは積りにけりた浦風の吹上の濱にふれる白雪

浦風の吹上につもる雪みても人をやまたん鳴千鳥哉

二百八十九番

左

無品法親王

春はなをつれなく見えしをはつせの檜原も雪の花やさくらん

右

源成直

見るまゝによせてはかへる波もなしくへ氷の志賀のから崎

時ならぬ花の雪にはしかの浦の波の氷や立まさるらん

二百九十番

左

女房

跡とめし岩のかけ道埋れて雪にさひしきみよし野の奥

右

源頼武朝臣

白雪のふるの神杉それとたに見えぬやつもるしるし成らん

年月をふるの神杉分入は猶みよしのゝおくもしら雪

二百九十一番

左

女房

星うたふ聲にもしるし千早振神の鏡はたゝ爰にます

右

源成直

かきくらしふれと浪にはかつ消てつもれるかたや雪の白濱

くもらねと君かあたりに増鏡神代うつして星うたふなる

二百九十二番

左

無品法親王

徒らに過にし方の悔しさもさらにおとろくとしの暮かな

右

源資氏

木葉ちり雪降つもる山里にとすれはたゆる岩のかけ道

年月の行衛もしるし木葉にも雪にも絶る岩のかけ道

二百九十三番

左

辨内侍

珍しき春に心はいそけともさすかにおしき年の暮かな

右

太宰帥親王

今朝そまつ我跡つくる庭の雪に道分佐る人もありやと

珍らしき春をそいそく白雪の道分わひてわかき山は

二百九十四番

左

前關白

暮てまた我身の老となる年を人なみくにいそきつるかな

右

關白

道しあれば關の白雪ふみ分て仕へし代々の跡を見るかな

ふりぬれはかはらぬ跡と我そみる仕へしまゝの關の白雪

二百九十五番

左

春宮大夫顯統

奥津風音こそ立ね濱松のすかたをみせてつもる白雪

右

權大納言實爲

篠のはのみ山なればや夜の程に降よりも猶つもる白雪

み山より猶ふかゝらしはま松の雪をかさねてつもる姿は

二百九十六番

左

前大納言光有

今はやおほえすとしも暮にけり身を忘れつゝ仕へこしまに

右

前大僧正頼意

白雪のふるきにかへる道有てさかのゝみかり今やいそかん

身をわすれ仕へし道は白雪のふるき跡にも猶そまれなる

二百九十七番

左

權大納言公長

里の名はとはてもしるし年寒き煙數そふ小野の炭竈

右

中納言光實

徒らに暮行年のおしきかなまたかへるへき月日ならねは

二百九十八番

左

左衛門督長親

今も猶ふりぬる道をしたふかなあつめし代々の跡の白雪

右

前中納言具氏

名のみして終につれなき色もなし雪ふり埋む嶺の松原

軒の松もうつもれぬ名を残すらん集めし窓の代々の白雪

二百九十九番

左

權中納言實興

さのみまた積れば人のいとふをもしろてや年の行かへるらん

右

春宮權大夫師兼

うつもるゝ磯の筥屋は見えわかつて雪の下焼あまのもしほ火

埋もるゝ筥屋はことに哀なりいつくも雪のつもる日數に

三百番

左

藤原經高朝臣

ふる雪のつもるにつけてよはる也はけしかりつる松風の聲

右

源頼武朝臣

待としは思はぬ春もあすか風身はいたつらに老となれとや

松にふく音こそかはれ飛鳥風あすをは春と人も告ねと

三百一番

戀一

左

藤原經高朝臣

夜とてもつゝまぬ袖の涙かなたかしるへゆへ月はとふらん

右

源成直

分初る人たにあらは問てましならはぬ戀の道はいかにと

うきを知人たにあらは問てまし誰ゆへに今涙そふらん

三百二番

左持

おもひ入末いかならん戀路ともしらぬ心にまよひ初ぬる
權中納言實興

右

よそにのみ峯の白雲いかにしてかゝる心のありとしらせん
源頼武朝臣

三百三番

左持

はかなしや霞のうちにさく花のほのみし色にうつる心は
左衛門督長親

右

知やいかに石間かくれを行水のたへぬ思ひの有とはかりに
春宮權大夫師兼

三百四番

左

行末の猶いかならん戀ころもおもひたつよりぬる袖かな
權大納言公長

右持

しられめや袖のなみたの初時雨おもひそめても色に出すは
前中納言具氏

三百五番

左持

しらすなよ落る涙のたえずとも何ゆへぬる袖のうへとは
前大納言光有

右

いかにせんならはぬ袖に落そむる涙の露の色に出なは
中納言光資

三百六番

左持

もらさしとあふさきるさにつゝむかなとすれは餘る袖の涙を
春宮大夫顯統

右

思ひかねほに出にけり初尾花袖のなみたを人のとふまて
前大僧正頼意

穂に出るあないひしらす花薄とすれはかゝる袖の白露
三百七番

左持

歎くそとあらはれてたにえそいはぬ我身につゝむ人の契りは
前關白

右

またしらぬ戀の道芝ふみ分てまよふ心を誰にとはまし
權大納言實爲

三百八番

左

紅の初花染の袖のうへにいつならひける涙なるらん
辨内侍

右持

萌出る雪間の草のはつかにやおもふ心の色をみせまし
關白

三百九番

左持

行衛なき戀路とかつは知なから心ひとつにまよひ初ぬる
無品法親王

右

見しまゝにその面影もかきくもりやかて時雨る袖の上かな
太宰帥親王

三百十番

左持

尋はや思ひ入野の初尾花なひくはやすき習ひなりやと
源資氏

女房

野に立る松は風にもつれなくてなひきまされる初尾花哉
三百十一番 戀二

左持

忍ひかね夕の雲にまかへても戀のけふりや空にしられん
右 女房

うかるへき行末しらぬ今たにもなとかくはかり袖のぬるらん
うかるへき身の行末を空にそへ戀の烟を立まさりける

三百十二番

左持

つゝむさへ一かたならぬ心かな人のためにもうき名と思へは
無品法親王

右

人しれす袖にかけても歎かな忍ふる原の露のみたれを
いかにせん忍ふる原の下露の一方ならぬ袖のみたれを

三百十三番

左持

忍ひねの涙は淵となりぬともうき名なかさぬしからみも哉
權大納言實爲

右

忍ひねの袖の涙をいかにして我ゆへとたに人にしられん
忍ひねの涙の色はかはらぬにたかうき名をか分て立へき

三百十四番

左持

ことに出ていふよりあまるおもひとは消ん煙の末やしるらん
前大僧正頼意

右

人しれぬ心のおくのみたれをいつまでさのみ忍ふもちすり
みたれける心のおくもしらるれば消ん煙そ猶もかなしき

三百十五番

左持

言の葉に中々いかていつみ川そこをふかめておもふこゝろは
春宮大夫顯統

右

いつまでか忍ふの山の峯の松つれなき色に思ひみたれん
かはらした忍ふの山の松の色も底をふかめていはぬ心に

三百十六番

左持

はかなくも猶こそたのめ契りをく人の心の末はしらねと
前大納言光有

右

もらすなよおさふる袖の泪川下行水のせきはかぬとも
人心上には頼む契りにて涙は袖の下のうらみそ

三百十七番

左持

富士の根の絶ぬ煙にくらへはや我下もえにくゆる思ひを
權大納言公長

右

せきかへし心につゝむ涙ゆへ袖より先に身をやくたさん
せき返す涙の袖や田子の浦ふしの煙を上にててつゝ

三百十八番

左持

しらせはやこもの若葉のみこもりにおもふ心の下のみたれを
左衛門督長親

新盛戀一 右

涙川袖のしからみせきかねはもらさぬ先に身をやしつめん
水隠りの思ひを深くせきかねて漏さぬ淵に身をや沈めん

三百十九番

左持

權中納言實興

右

源成直

煙たに立ものぼらて埋火の下にくゆるをしる人そなき

埋火も苔の下にそくゆるなる此世の外や立はまさらん

三百二十番

新集二 左持

藤原經高朝臣

しぬばかり思ふ心や見えさらん同し世にふる我身なりせは

右

源資氏

いつまでかしられぬ中にみたれまし忍ふの山の露の下草

同し世のうらみや猶も深からん忍の山も露のした草

三百廿一番

戀三

左持

藤原經高朝臣

はかなしな契らぬ中になからへてあらはあふよのたのみ計は

新集一 右

太宰帥親王

かくとたにいはせの森の下露のしらてや消ん事をしそ思ふ

はかなしなあらは逢よの契りさへなしといはせの森の下露

三百廿二番

左持

權中納言實興

待なれし心習ひにこよひさへ聞へもいらて又あかしつる

右

源資氏

忍あへぬ涙を露にまかへてもあまりしほるゝ袖のうへかな

待なれし心習ひにねぬ夜半もあまりなる迄袖をしほるゝ

三百廿三番

左持

左衛門督長親

水上を人はいはし涙川袖はかりこそしらはしるゝとも

右

源成直

酬あることはりならは先の世に我も人にやつれなかりけん

三百廿四番 涙川袖に流れし水上や我先の世のむくひなりけん

左

權大納言公長

神もなとつれなかるらん御稗川あふせにかけよ袖のしからみ

右持

源頼武朝臣

逢と見てしはし慰む夢もかなさめて悔しき契り成とも

御稗川逢せを神にかくるよの夢や現に猶まさるらん

三百廿五番

左持

前大納言光有

契りけん百夜迄こそなけれともまたれしくれの数そつもれる

右

春宮權大夫師兼

海士のかるみるめ計を契にてうらみん程のたよりたになき

契りける百夜の数はあまのかるみるめ計のたより成けり

三百廿六番

左持

春宮大夫顯統

後の世とたのためぬ程や逢迄の命もかなとみを思ひけん

右

前中納言具氏

くれなはと契りしよひの村雨やこぬ人たのむ涙成らん

後の世と契りし事そ村雨の空たのためにはせめて増れる

三百廿七番

左持

前關白

人しれすおもふ心は空蟬の木かくれてのみ音はなかれけり

右

中納言光資

鳥の音のつらき例もしらぬ身を誰ならはしにおとろかすらん

空蟬のつらきためしも唐衣たかならはしの鳥の音もなし

三百廿八番

左侍

辨内侍

我中はあはての浦のかたし貝むなしき波の下に朽めや

右

前大僧正頼意

山鳥のをろの鏡の面影もへたつる中はいつか逢みん
雲かくる遠山鳥の契りたにあはてのうらの浪を隔つる

三百廿九番

左

無品法親王

年をへてつゝむ心にゆるさねはおもひ有やと問人もなし

右

權大納言實爲

相思ふ心までこそかたからめうき名をせめてもらさすもかな
もらしても誰爲ならしせめて身の浮名計をあひ思はなん

三百三十番

左

女房

また人の袖にやとらは月もみよかゝる涙のたくひやはある

右

關白

夏かりの芦火の煙下にのみ思ひこかれて立雲もなし

左

戀四

よそに猶立雲もなき煙哉袖の涙はたくひあれとも

左

女房

しるらめや岩間に茂る芦のねのねもみぬ人にみたれ佐とは

右

權大納言實爲

つゝめとも涙の色やくれなみのふり出てよそにうき名立らん

左

無品法親王

三百三十二番

左

戀しなん身をは惜まし後の世に思ひあはするむくひ有とは

右

前大僧正頼意

同じ世に猶佳よしのみつかきや久しく祈るしるし成らん

戀しなんとさのみ唧つな同じ世に猶佳吉の恨めしければ

三百三十三番

左

辨内侍

我はたゝ低しらぬこゝろにて人の契りを猶たのむかな

右

中納言光資

しらせはや吉野の川の瀧つせのせきあへぬ迄思ふこゝろを

吉野川よしや川波はやければ人の心を猶やたのまん

三百三十四番

左

前關白

浪かくる磯邊の松を見てもしれつれなきもねに現れやせぬ

新皇三 右

前中納言具氏

人もまたたのめしまゝの暮ならば同じ心に月やまつらん

波かくる松はつれなき色なれば頼めし儘の月をこそ見れ

三百三十五番

左

春宮大夫顯統

朽ねたゝ祈るもつらしあふ事は終になきさの杜のしめ纏

右

春宮權大夫師兼

さのみまた人のとかとやかこつへきうき我からの心つよさを

逢事の渚の森の名をきけは人のとかにもさのみかこたし

三百三十六番

左

前大納言光有

さりとともと猶もあふせを松浦川よるへも波のうき身なれとも

新皇三 右

源頼武朝臣

たのましといひてもさすかまたるゝや我偽のゆふへなるらん

それは猶心つくしそ松浦川我いひをきしあふせたのまん
三百三十七番

左持

權大納言公長

うかりける我中川よいかなれはわたらぬ先に袖のぬるらん

右

源成直

もかみ川人の契のあさきせをしはしはかりと何たのみけむ

かはらしな我中河にもかみ川わたらぬせゝもしはし計そ

三百三十八番

左持

左衛門督長親

をろかなる涙と人やおもふらむ見せはや袖に落る瀧つせ

右

源資氏

へたて行人のこゝろの關守にあふ坂山の名をやかふらむ

袖に落る涙の瀧や相坂の關の清水に音増るらん

三百三十九番

左持

權中納言實興

關守の心もしらてあふ坂といひしはかりの名をたのむ哉

右

太宰帥親王

たれゆへにしられぬまでを契にて忍ふにあまる我涙かな

關守の心しられぬ道なれと先あふ坂といふをたのまん

三百四十番

左持

藤原經高朝臣

あふ事はたかうき世々の報にて神さへうけぬ御殺成らん

右

關白

天雲のたゝ半天に消はてはさすかに人の哀とや見ん

逢事を神もうけすは天雲の只半天に身をやなさまし

三百四十一番

戀五

もろともにおなしかきりの命にて後の世までの契ともかな
藤原經高朝臣

右持

權大納言實爲

同じ世に有とはかりにならふる我命さへつれなかりけり

何せんにつらき心の同じ世に同じかきりの命なるらん

三百四十二番

左持

權中納言實興

哀をもかくへき人はあら磯の波にこゝろを何くたくらん

右

關白

いかにせんうき名は立て春駒の綱引見ても同じつらさを

よしさらは人の心のあら磯になはたつ春の駒にくらへん

三百四十三番

左

左衛門督長親

夕されは草葉を袖の上と見よ露に涙の色はなけれと

右持

太宰帥親王

忍かね袖にみたるゝ白露のしらすやいかに思ふ心を

夕暮は袖にみたるゝしら露そ草葉にまさる涙なりけり

三百四十四番

左持

權大納言公長

かくはかり憂事しけくなけかめやあふにしかふる命なりせば

右

源資氏

今はかくうきにたえても忍はましあらはあふよの契なりせば

あふ事にたへても命惜かなあらはあふよの契まつとて

三百四十五番

左持

前大納言光有

神もまた御殺をうけはかたそきの行あふよはのなとなる覧

右

源成直

吹風のたよりもあらはしらせはや身をうき舟のこかれ侘ぬと

（新撰）

三百四十六番

左持

春宮大夫顯統

あふと見ん夢路はゆるせ立わふる現のうさもわする計に

右

源頼武朝臣

忘すは思ひも出よ逢事に命をかへて我はななくとも

逢事はけに又かへし我ならは夢も此世の夢を見ましや

三百四十七番

左

前關白

露ならてむすふ契もなかりけり人を忍ふの

（新撰）

山の下みち 春宮權大夫師兼

こりすまに又たのまるゝ夕かな人のまことも身にはしらねと

身にたえぬ忍ふの露もいかならん猶こりすまの浦の松風

三百四十八番

左持

辨内侍

偽はつらきものとしらせはや我まつ人にひとをまたせて

右

前中納言具氏

消かへりおもふ心の下もえのけふりやよそにうき名たつらん

消かへり思ふもつらしよしやたゝ我まつ人に心かへせむ

三百四十九番

左持

無品法親王

偽になれぬ心や行末を契るにつけて猶たのむらん

右

中納言光資

かこつへき其節々を數へてそあふよあらはのあらましにする

あふよあらはうき節々も忘れねよ契につけてたのむ心は

左持

女房

今は世になしともせめてきかれはやさてたに人の哀しるやと

右

前大僧正頼意

月たにも心つくしの夕哉つれなき人をまつ

今は世になくて哀の増る身を木のまの月よまつとしうすな

三百五十一番 戀六

左

女房

年なみの猶こえゆくはいかゝせんいひし契のすゑの松山

（新撰）

中納言光資

なからへはかはりもやせん契りをく行末またぬ我身とも哉

契置末の松山まつにこそけにこそ波のうきもしらるれ

三百五十二番

左持

無品法親王

つれなさの限もさすかみるやとて幾夜むなしく待あかすらん

右

前中納言具氏

わか袖はみしまかくれの苜なれや思ひ亂れてかはくまもなし

あはてうきみしま隠れの亂苜いく夜空しき袖ぬらすらん

三百五十三番

左持

辨内侍

三輪の山しるしの杉をたのむ哉おもふ心を神にまかせて

右

春宮權大夫師兼

君こすは衣かたしきはつせ風かつ吹夜半をひとりかもねん

君こすは初せもよしや三輪の山神もしるしの杉を頼まん

三百五十四番

左

前關白

何ゆへにふかき思ひと成ぬらん契は淺き山の井の水

新關白
右勝

源賴武朝臣

せく袖にあまればやかて流れけり涙の川やうき名成らん

山の井の淺きためしを何故かふかき涙の川にくらへむ

三百五十五番

左勝

春宮大夫顯統

現にて難面き人はねぬる夜の夢にもあふと見えん物かは

右

源成直

逢事もかへなはせめていかせんかひなく立はうき名成けり

つらきをも夢なりけりと慰めてあはぬ現にこれを増れる

三百五十六番

左

前大納言光有

いかにせん思はぬ中のみた川立あた波のかゝるうき身を

右勝

源資氏

我方に靡もはては夕けふり空に立名はさもあらはあれ

我方になひくけふりの末を見て思はぬ中とたれか恨みん

三百五十七番

左勝

權大納言公長

契をく心もしらすなからへは逢よ有やと何たのむらん

右

太宰帥親王

逢事は波のみこえていたつらに朽ぬる袖やすゑの松山

逢事は波のみこえて契をく心もしらぬすゑのまつやま

三百五十八番

左勝

左衛門督長親

低にふけぬとたにも思ははやちきらぬ夜はの庭の松かせ

右

關白

おくの海の鵜のある石の色となくぬれてかはかぬ袖のうへ哉

奥の海のうのある岩の波よりは契らぬ夜半の袖ぬらし鬼

三百五十九番

新關白
左勝

權中納言實興

あま人のたくもの煙いたつらになひかてたえん名こそ借けれ

右

權大納言實爲

いつまでそあはての浦のあた波を袖に懸てもすぐる月日は

夕煙靡に立や月日ふるあはての浦のおきつしら波

三百六十番

左勝

藤原經高朝臣

忘れぬやかはるやいかに松の風ふけはてゝとは契らさりしを

右

前大僧正賴意

海士人の汐波袖にくらへても我涙こそたくひしられね

あま人の汐くむ袖の恨みには松風のみやふけまさるらん

三百六十一番

左勝

〔戀七〕

藤原經高朝臣

せく袖にあまる涙の末なれやうき名をさそふ中河の水

右

中納言光資

たのめぬを我のみ待てよひ／＼につらしと人を何おもひけん

中川のうき名も浪やたてつらん頼めぬ人はあふせ待とて

三百六十二番

左勝

權中納言實興

かくとたにいひ出ぬ身の涙をはたかこゝろよりもらし初けん

右

前大僧正賴意

宵々にかよふ心もかひそなきなこそその關のつらきへたては

わか袖に忍ふ涙もるといへは猶そなこそこの關はかひなき
三百六十三番

左持

左衛門督長親

思ひ侘ねなましものを何とたゝまつ夜の月を詠そめけん

右

權大納言實爲

人心うき田の森のみしめ纏くる夜もなしと歎く比かな
人中心うき田の杜の木の間にも待夜の月の影はななめき

三百六十四番

左持

權大納言公長

よしさらはまたしと思ふ今宵さへ心ならひにねられやはする

右

關白

たのめつつ待夜むなしき鳥の音にきぬくよりもぬるゝ袖哉

うかりける心習も鳥の音の曉まではまたれやはせし

三百六十五番

左持

前大納言光有

年もへぬいつまてとてかつの國のなからへて猶物やおもはん

右

太宰帥親王

さもこそは現のうさの儘ならめ夢路にさへやつれなかるへき

夢もうし現もつらしつの國のなにはれかたく存へもせん

三百六十六番

左

春宮大夫顯統

戀しん後はさすかに哀ともいはいへかしいきてある世に

右持

源資氏

さはる夜もさこそはあれとまたれけり又偽の身にもなれねは

いきてうき猶偽をたのまはや後の哀も何にかはせん

三百六十七番

左持

前關白

神にこそかけても祈れ常陸帶のかくるしるしの末の契を

右

源成直

偽の有ならひをもしらぬこそまつ夜の更るたのみ成けり

神かけてむすふ契の常陸帶けに偽のあるならひかは

三百六十八番

左

辨内侍

年月をかさぬる袖の涙かなつれなきものは我身なりけり

右持

源頼武朝臣

偽と歎きながらも慰みし空たのめさへ今はたえぬる

徒に涙なかれし年月を空たのめにもなとやすこさぬ

三百六十九番

左持

無品法親王

せきかへす袖に涙のいづもりて物おもふ色のよそに見えけん

右

春宮權大夫師兼

わか袖にまた此暮も浪こえぬうき偽のすゑのまつやま

袖にせく涙もさこそ忍しか松こそ波のあたし習ひを

三百七十番

左持

女房

何とたゝとはれぬ宿の松風は猶うき事の音をはそふらん

右

前中納言具氏

なからへてあひみんまての限こそつれなき中の命なりけれ

徒にちきらぬ宿の松の風あひ見んまての限とそきく

三百七十一番

戀八

左

女房

なよ竹のよをや隔てんと思ふにそうき節よりも袖はぬれけり

右

所歌第一
長き夜を音にのみ鳴て庭津鳥かけの垂尾のみたれ佐つゝ

なよ竹のうきふしよりも庭つ鳥かけのたれ尾の長き夜哉
三百七十二番

左

無品法親王

定めなき世に習はすはいかはかり人のかはるも猶うからまし
右

源頼武朝臣

うきまゝに恨ははてぬしかりとてそむかれなくに人そ戀しき
誰故にうき世の中そしかりとてそむかれぬ身の涙添つゝ

三百七十三番

左

辨内侍

引かへす心もよしや梓弓もとよりなれぬちきりとおもへは

右

源成直

時の間の夢に夢みる逢事を現のうちのうつゝともかな
梓弓もとより何になれつらん現のうちのうつゝなければ

三百七十四番

左

前關白

見し事はいつ袖山にとふさたて木に切かへんあはぬつらさを

右

源資氏

さても我うきせにかけし涙川逢よりおなし袖はぬれけり
つらさをそ木に切かへて流すなる猶袖川は袖やぬれなん

三百七十五番

左

春宮大夫顯統

所歌第二
つらきをも憂にもたへてこふる身を猶つれなしと人やみる覽
右

太宰帥親王

淺からぬ心のほとはよなり、の夢のたゝちにおもひあはせよ

難面しと人やみる覽よなり、の夢のたゝちの契しられは
三百七十六番

左

前大納言光有

戀々てかさぬる夜半のから衣うらめつらしき身の契かな
右

關白

所歌第三
歎き佐なをこそたとれあひみても見し夜の夢に似たる現は
から衣重ねなからも打かへし見し夜の夢を猶やかこたん

三百七十七番

左

權大納言公長

めくりあふ袖にも月はくもりけり又いつかはとおもふ涙に

右

權大納言實爲

偽の有世なりとしゐて猶人の契をたのみこそせめ
偽の有世なればや契ても又いつかはとうたかはるらん

三百七十八番

左

左衛門督長親

いつまでかたへて慕はん戀しねとする業しるき人のつらさを

右

前大僧正頼意

いもせ山隔る中のつらさにや涙は瀧と落はしめけん
戀しねとするは心のわさのみか身なくなる瀧も淺瀬成けり

三百七十九番

左

權中納言實興

命をも逢にかへはとせしみそきをたに神のゆるすよまし

右

中納言光資

いとほし我をは神もうけしとや契はよそに三輪の山本
我祈る御稔もうけぬ神ならはいつこを三輪の杉のしるしそ

三百八十番

左持

さても又忘られなはと思ふにそあひみぬよりは袖はぬれけり

右

藤原經高朝臣
前中納言具氏

年月の恨につもる涙にそをさふる袖も終に朽ぬる

年月の涙の数も何なれややかて忘るゝ袖のうらみは

三百八十一番 戀九

左持

藤原經高朝臣

きぬゝの袖の涙に影とめて月もわかるゝ有明の空

右

春宮權大夫師兼

人もさそ同じ心にいとふらん戀しなぬ身の命なかしは

衣々の袖にわかるゝ月かけや人のつらさを猶もそふらん

三百八十二番

左持

權中納言實興

重ねても袖こそぬるれいひやらぬ本のつらさをかこつ涙に

右

前中納言具氏

待侘ぬ難波の芹間ゆく舟のさはりあれはやとはて過らん

重ねても袖やぬれなん漕かへり同じ芹間を分る浦舟

三百八十三番

左持

左衛門督長親

錦木の千束の後もつれなくはあはぬためしの名をや立まし

右

中納言光資

偽もつもれはいとゝしたふかなさのみはよもおもふ心に

偽の名をそ立まし錦木の千束も過ることよひ成せは

三百八十四番

左持

權大納言公長

俤の残るかたみやきぬゝのなみたにうつる有明の月

右

前大僧正賴意

逢事は間遠の衣きても猶すまの浦波そてそぬれそふ

俤のかたみを残す月をみてま遠の衣袖はしほれぬ

三百八十五番

左

前大納言光有

有明の月さへ袖にやとりきてわかれを残す面影もうし

右持

權大納言實爲

たへて猶待そつれなき頼めつゝとはぬつらさの今宵のみかは

有明の別れを残す影もみすとはぬつらさの夜のみ重て

三百八十六番

左

春宮大夫顯統

しほなるゝあら磯崎の岩根松終につれなき色もうらめし

新巻三 右持

關白

心をはあかぬ袂にとめをきてかへるともなき明暮のそら

鹽なるゝあら磯松にかゝる波かへる恨や猶まさるらん

三百八十七番

左持

前關白

思ひ出人の心もいさや川なみたをきそふとこの山かせ

右

大宰帥親王

待宵の更ゆくのみか別れにもつらさは同じ鐘のをとかな

更てうき涙の床の山風におなしつらさのかねひゝくなり

三百八十八番

左持

辨内侍

下紙のとけてぬる夜もから衣おもひならひし袖そぬれける

右

源資氏

曉のわかれもしらてみしものをけにうかりけるありあけの空

下紐のとけてぬる夜や曉の袖のわかれにならひそめけん
三百八十九番

左

無品法親王

またいつと契るたよりもなき中のわかれや今に限なるらん

右

源成直

なからへてまた有明の空までもいきはや月をかたみとはみん

かたみとや我たにたへぬ別路になからへまさる有明の月

三百九十番

左

女房

したひ侘なからふへくもあらぬ身に又よと契る程のはかなさ

右

源賴武朝臣

更にまたよそに成てやいひそめん有し身とたに忘れはてなは

よしらは忘れぬ先にきかれはや長らふへくあらぬ我身そ

三百九十一番

戀十

左

女房

夢とのみ思ひなしてもあるへきを聞しに似たる鳥の音そうき

右

源成直

今朝よりそ我偽に成にけるあふにかへんといひしいのちは

夢現聞定めてやあふ事にかへし命も偽にせん

三百九十二番

左

無品法親王

衣々にわかれの袖の涙こそ又ねの床のかたみなりけれ

右

源資氏

いかにせんまでもやみると思ひつゝ又ねの夢に面影もなし

かはらした佛そへてわかれつる同し又ねに夢はなくとも

三百九十三番

左持

辨内侍

かこたはや人のつらさも有明の月には誰かわかれそめけん

右

太宰帥親王

露分し袖とも人にいふへきをいかて涙のいろにいつらん

有明の月にも人やわかれけん袖に色こき道芝の露

三百九十四番

左

前關白

又いつとたのめしまゝに日數へて塵のみ積る床のさ菰

右

關白

契りしはそのよはかりの現にて忘れぬ夢を猶なけゝとや

さ菰や拂はぬ床のちりの上に其夜はかりの夢そ残れる

三百九十五番

左

春宮大夫顯統

うき名のみよそにちらして色かはる心木のはになと習ふらん

右

權大納言實爲

いきてこそ逢みる夜半も有けれとおもへはおしき我命かな

命にも増りておしき木の葉哉いきてうき名の散と思へは

三百九十六番

左

前大納言光有

たのみしもはかなかりける我身哉替るはやすき人の心を

右

前大僧正賴意

したひつる袖の別れの其まゝに立もはなれぬ今朝の佛

別れても猶其まゝの面影に替る心やつらさ添らむ

三百九十七番

左

權大納言公長

人しれす思ひしものをいかにしてもれける袖の涙なるらむ

右

せき佐し涙はほしつ今よりの立名におほふ我袖もかな
かくはかりもれける袖の涙をは又せき返し誰かほすへき
三百九十八番

左持

惜まれし命を今は急くなあふにかへはとおもふ計に
左衛門督長親

右

うかりしを思ひ出ては自糸のくる夜さへ又ぬる袖かな
覺つかなくる夜もいかて自糸の逢にかへてし命ならすは
三百九十九番

左

したふそとおもふからにや中々につらきわかれを猶急くらん
權中納言實興
思ひ出はたか涙にもくもるらん契りし月の同しかたみは
春宮權大夫師兼

別れにし其俤のかはらねは契りし月そつらさ添つる

四百番

左

いつのまにまた跡たえて相坂の關のこなたに猶まよふらん
藤原經高朝臣

右持

いささらは袖をたむけん戀衣涙にあかぬ神やうくると
源頼武朝臣
逢坂の關守神の手向にはにしきにまさる涙なりけり

四百一番

左持

逢みても夢なりせはと歎きしやうつゝのうさに習はさるらん
藤原經高朝臣
源成直
數妙の枕に残るうつり香やあひみし夜半のかたみなるらん

手枕に残る形見もあたなれはみしを中々夢になさはや
四百二番

左持

年經たる其通ひちは君やこし我や行しとたとらるゝかな
權中納言實興
歎あまりみもせぬ夢を語りても思ふ方には誰かあはせん
源頼武朝臣

四百三番

左

替りゆく人の心の淺きせにとすれは絶る中川のみつ
左衛門督長親
あはぬまの數かくしちの百夜にもあまり程ふる中の年月
春宮權大夫師兼

右持

かはりゆく人の心の淺きには數増りけりしちのはしき
四百四番

左持

契りきや見し夜はかりの現にて夢にも人のつれなかりせは
權大納言公長
今よりは夢をそ頼む逢事の現ともなき夜半のちきりに
前中納言具氏

右

夢よりはさすかみし夜や増るらん現ともなき現ながらも
四百五番

左持

名もつらし關のこなたの音羽山又あふ坂の隔てなりせは
前大納言光有
中納言光資
曉も何かうからんまてといふにかへらてとまる別れなりせは
まてといふに歸らてとまる相坂の關の此方を何か頼まん
四百六番

左持

春宮大夫顯統

契りしもかはれは是もかはるやととはれぬをさへ又たのむ哉

右

前大僧正頼意

とはぬ夜を有明の月にかこちつゝ別れしよりもぬるゝ袖かな

契りしも替れは是もかはる世におなし空なる有明の月

四百七番

左持

前關白

忘れてそ身にならしつるあふ事は間遠の衣うらみける名を

右

權大納言實爲

鳥の音をさのみは如何かこつへきさうてもとまる別ならねは

またもきくつらき恨を身にならせ間遠の衣名はかこつ共

四百八番

左持

辨内侍

朝露のをき別れつる我床に残るかたみとぬるゝ袖かな

右

關白

今は又かけさへ見えす山の井の淺き契りを何たのみけん

山の井の淺き契りを結ふ手の雫もおなし袖の白露

四百九番

左持

無品法親王

夢かとよたゝうたゝねの手枕にうつる匂ひもさたかならねは

右

太宰帥親王

またよとて別れし夜はの月のみや空しき空にめぐりあふらん

我袖に只うたゝねの移りかも其夜の月もさたかならぬを

四百十番

左持

女房

かきくもり袖の涙の玉ゆらにみし面影は身をもはなれす

右

源資氏

驚ろかは又もみし夜に歸るやとうきをさなから夢になさはや

面影よ身をやはなるゝ玉ゆらもよるはさなから通ふ夢哉

四百十一番 戀十二

左

女房

しるしなきねのみなかれてうき人の心の花そ色かはりゆく

右持

太宰帥親王

かはるとも先逢みんと思ひしやうきにならぬ心なりけん

行末をしらてたのみし身のうさや心の花に猶増るらん

四百十二番

左

無品法親王

あたにみし其面影は夢ながら覺ぬうつゝに猶なけくかな

右持

關白

たのめこし契りはよその夕暮に猶かきたえぬさゝかにの糸

夢よりもまたはやさらはさゝかにの糸絶々に懸し頼みを

四百十三番

左持

辨内侍

別れにし其面影をかたみにていく有明をひとりみつ覽

右

權大納言實爲

逢見しは夢かとたとる手枕にはらはぬちりのなと積るらん

倂の幾有明になりぬらんふりし枕にちり積るまに

四百十四番

左持

前關白

浦波の懸し契りも絶ぬれはくゆるかひなき海土のもしほ火

右

前大僧正頼意

契こそうはの空なる頼にて身を浮雲のはてそしられぬ

藻鹽火のくゆる煙もひとつにて身を浮雲の果としもなし
四百十五番

左

春宮大夫顯統

異方に心引とも梓弓おもひかへしてとふよしもかな

右

中納言光資

言の葉のうつるふ色の見えしより袖に時雨のふらぬ目もなし

梓弓契りし末の秋の色に袖の時雨やふりまさるらん

四百十六番

左

前大納言光有

よしさらは人をも今はうらみしうき我からに厭はるゝ身は

右

前中納言具氏

あひ見すは中々さても有へきに夢の契そ今はあたる

かく計人をも身をも恨むるにたかしるへとて夢は見ゆ覽

四百十七番

左

權大納言公長

またれこしつらさをそへてたまさかに逢夜も袖は猶そ乾かぬ

右

春宮權大夫師兼

其まゝにかけたに見えて山の井の浅き契りの末もはかなし

山の井の影離れなはと思はれて逢夜も袖や猶ぬらすらん

四百十八番

左

左衛門督長親

おもひ出て心に忍ぶ面影や人のちきらぬかたみ成らむ

右

源頼武朝臣

行末の頼みもいさやしら露の玉の緒はかり残る契りは

倂を人のちきらぬかたみそと思へはいとゝ頼みなの身や

四百十九番

新撰 異方 左持
うつろはん後忍へとやなをさりにあらぬ心の色を見せけん
權中納言實興

右

源成直

いかにしてをのか物から心にもまかせぬ袖のなみたなるらん

心にもまかせぬ色やなをさりにあらぬ袂の涙なるらん

四百二十番

左

藤原經高朝臣

厭はるゝ身のことはりを思ふにもたゝうきふしは賤のをた卷

右

源資氏

異方に花色衣うつれはや重ねしまゝの契りなるらん

あたに移る花色衣みるよりは心なからや賤の小手卷

四百廿一番

左

藤原經高朝臣

忘らるゝ我身の末の世かたりをおもふにつけてうき契りかな

右

太宰帥親王

つらきをもしゐてたにこそしたふ身を何ゆへ人の忘れ果らむ

うきなから我身の末の世語りを忘れし人にせめて傳へよ

四百廿二番

左

權中納言實興

忘れすはわれもといひしことの葉そ替る心のはしめなりける

右

源資氏

契りこしものと心はむかしにて人はふる枝の秋はきのはな

今更に替るとみるもはかなしや本の古枝の秋萩の花

四百廿三番

左

左衛門督長親

うかりける身のならはしの夕かな入相の鐘にもわすれせて

右

源成直

なをきりに思ひけりとや思はれん忘らるゝ身のいきて有せは

忘れしないきてある世の思ひ出は入相の鐘の夕暮の空

四百廿四番

新撰 左勝

權大納言公長

何とたゝみし倂の浮ふらんわすらるゝ身の袖のなみたに

右

源頼武朝臣

つらくてはよも山科の音羽川音には立し袖はぬるとも

音羽河音に聞てもいとゝ猶みし倂や目にうかふらん

四百廿五番

左

前大納言光有

いかなりし世々の契のむくひそと忘らるゝ身を誰にとはまし

右勝

春宮權大夫師兼

伊勢の海士のうけ繩くるとあくゝ絶ぬ恨に萎れてそふる

よしや其酬はしらしいせの海士の深き恨に身は沈めても

四百廿六番

左勝

春宮大夫顯統

人はさて軒端にすかくさゝかにの厭はるゝ身に何をまつらん

右

前中納言具氏

忘らるゝ身はうき雲のはれやうて袖さへくもる月の影哉

わすらるゝ身のうき雲の絶行は人も軒はのさゝかにの糸

四百廿七番

左勝

前關白

わか戀は風吹小野のまくす原うらみて後や枯も果なん

右

中納言光資

契りこしことのはのなとかはる覽其おもかけは忘れぬみに

契りこしことの葉秋の風ならはをのゝ葛原をのれ恨に
四百廿八番

左

辨内侍

其まゝにとはれぬ人のつらさをはわすれはやたゝ同し心に

新撰 右勝

前大僧正頼意

逢見しは一夜の夢の名残にてうつゝにつらき年そへにける

忘るへきつらさにかへて思ひなん一夜の夢の名残計りは

四百廿九番

左勝

無品法親王

忘れ行人に恨や残らまし身のうきほとおもひしらすは

右

權大納言實爲

忘れしといひしは夢に成ぬれと我思ひのみさむる間もなし

我思ひさむる間もなき心哉人のつらさを身のうきにして

四百三十番

左勝

女房

をき所なくゝ返す言の葉のその數ことに忍ひかたさよ

右

關白

つらきをも身のうき科に啣ちつゝいはて忍ぶも袖はぬれけり

名残たになくゝ返すことのはの其數毎に袖そぬれそふ

四百三十一番

左勝

女房

秋果る三室の山の葛かつら恨みし程のことの葉もなし

右

權大納言實爲

今も猶袖こそぬるれ其まゝに渡り絶にし中川の水

音高き三室の葛の山風にぬるとも袖は恨さらまし

四百三十二番

左勝

無品法親王

身ひとつに積る恨のふかけれは中々いはん言の葉もなし

右

前大僧正頼意

色かはる人の秋そときくからに吹こそやまね葛のうら風

色替る人の秋にそ身ひとつのうらみはいと深く成ぬる

四百三十三番

左勝

辨内侍

我のみと恨ても猶かひそなきよそこにこかるゝ海士のつり舟

右

中納言光資

あたなりし我中河の末かとよおなしあふせに又まよひぬる

逢瀬なき我中川の末かとよしらぬ湊にまよふあま舟

四百三十四番

左勝

前關白

うき人のさてもたえなは戀忍ふわか心をやかたみとはせん

右

前中納言具氏

明ぬとてまた夜をふかみ急しやいとるゝ身の恨なりけり

別路は身をこそ厭へわか心人のかたみとせめてなれかし

四百三十五番

左勝

春宮大夫顯統

年月は移りにけりな忘らるゝ身のうきまゝの歎せしまに

右

春宮權大夫師兼

我やあらぬ人やあらぬ待なれしゆふへは同じ入相のかね

我やあらぬ人やあらぬと唧ちても移りに鬼なよその年月

四百三十六番

左

前大納言光有

右

源頼武朝臣

絶果ぬかひこそなければ今も猶つらさはもとのまゝの繼橋

風渡る垣ほの葛やうらむらむこれは絶にしまゝの繼橋

四百三十七番

左

權大納言公長

かりそめの言の葉にたにかゝらねはうらむる袖の露も乾かす

右勝

源成直

はかなしや積る恨をかきくときいはゝとおもふ頼みはかりに

ことの葉に懸てしるしも猶なくはいはゝと思ふ程や増覽

四百三十八番

左

左衛門督長親

うき身ゆへ急し鳥のおなし音をたか衣々に君かこつらん

右勝

源資氏

せきかぬる涙をみても思ひしれいはれぬ程のうらみありとは

鳥の音のうき衣々の別にもいはれぬ程のうらみやはある

四百三十九番

左

權中納言實興

さりともと思ふ頼みにかへるこそ我等閑のうらみなりけれ

右勝

大宰帥親王

うらむともかひやなからん頼めしにかはりのみゆく人の心は

等閑の恨や淺きかくはかりかはりはてたる人のこゝろを

四百四十番

左勝

一藤原經高親王

數ならぬ身にも恨はある物をいはゝや人の思ひしるまで

右

關白

里の海士の波懸衣いつまてかほさぬ恨にしほりかさねん

數ならは恨も誰か里のあまの波懸衣ほす隙もなき

四百四十一番 戀十五

左

藤原經高朝臣

蓬生の露の契りはかれはてゝ本の心をとふ人はなし

右

樞大納言實爲

恨ても年月へぬるみな河なみたのはてや淵とならまし

蓬生の露は數かと年月の積る涙の淵となりぬる

四百四十二番

左持

樞中納言實興

何ゆへにと絶そめけん有し世のおふせは又も中河のみつ

右

關白

身をさらぬ俤はかり留置て我をはなにとふるしはつらん

忘めやあふせは又も中川のなかれてふりし人の面影

四百四十三番

左

左衛門督長親

逢事はさて山姫の秋の袖はしあへんものか露も時雨も

右

太宰帥親王

さりとともと思ひし程の頼みさへはやたえはてゝゆく月日哉

哀なり露も時雨も秋更て月日計におなしよの中

四百四十四番

左

樞大納言公長

葛城の久米の岩はし絶ぬとや懸ても今はとはれさるらん

右

源資氏

逢事の絶にし後もかよひきて人頼めなる夢のうきはし

葛城のくめちはいさやまたもみはたゆとも絶し夢の浮橋

四百四十五番

左持

前中納言光有

ふみ分て問こし人の音信も絶てほとふる庭のかよひち

右

源成直

今は又袖に懸てもなけくかなかよひ絶にし道しはの露

かひなしな絶て程ふる露霜に枯にしまゝの庭の通路

四百四十六番

左持

春宮大夫顯統

偽とおもひなからも頼みしや猶絶はてぬちきりなりけん

右

源頼武朝臣

替りゆく人の心のたねよりや忘るゝ草はおひはしめけん

忘草心の種は急くとも猶絶はてぬ契りとをしれ

四百四十七番

左持

前關白

俤も隔果てや山鳥のはつをのかゝみかけしかひなし

右

春宮樞大夫師兼

是も又いつまてかはとかなしきは絶にし中に残るおもかけ

山鳥のおろの鏡もうかるへし絶し面影猶もへたては

四百四十八番

左

辨内侍

渡りこしまゝの繼橋と絶してむなし朽ん名こそ借けれ

右

前中納言具氏

何ゆへに我うき中の絶ぬらんありて別れしまゝの繼はし

我中に渡してさらはたのまはや其名も同しまゝの繼橋

四百四十九番

左

無品法親王

徒にすくる月日をかそへしは猶もちきりのある世なりけり

右

難波江の深き恨のかさなるや身に淺からぬむくひなるらん

難波江の深きにおふる芦の根の猶契りある世をや頼まん

四百五十番

左持

あふ事はさて山陰の柴の庵しはしはなとかすます成ぬる

右

前大僧正頼意

かき絶て問もとはれす玉章の通ひしまてやたのみなりけん

柴の戸の暫しもなとか待てみぬ問とはるへき道はたえぬに

四百五十一番 雜一

左持

女房

皆人の心の種もかはらねは今はむかしの和歌のうらまつ

右

中納言光資

今はまた爰も吉野の都鳥ふるきにかへる道やとはまし

昔にや心の種も及ふらん今はよし野の人のことの葉

四百五十二番

左持

無品法親王

をこたらぬ曉起の身になれて鳥の初音はまつとしもなし

右

前中納言具氏

見渡せば松に鹽風吹たてゝ波のはなちるいそのまつはら

鹽風の松に吹はやめもあはてあかつき起の數つもるらん

四百五十三番

左

辨内侍

長きよもきすかに今は更ぬらんほのかにのこる閑のとし火

右持

春宮權大夫師兼

身をてらす影とそ頼む苜垣のひまもるよその窓のとし火

長きよに閑の燈消ぬともよその光や猶てらさまし
四百五十四番

左

前關白

住なれし都へたつる旅衣たちかへるへき月日しらはや

右持

源頼武朝臣

いにしへの乙女のかさし今そみる玉ぬきちらすみよしの里

旅衣月日重ねてみよし野の瀧の白玉數まざるらし

四百五十五番

左持

春宮大夫顯統

仕とて起なれにける曉を何ゆへ鳥のしりてなくらん

右

源成直

行暮ぬ今夜はさねんしはつ山ならの下柴嵐ふくとも

檜の葉を片敷山の旅ねにも仕へしまゝの曉やまつ

四百五十六番

左持

前大納言光有

残る夜も明かた近し庭つ鳥八聲の後のそらにしられて

右

源資氏

山里はいつも旅とおもふこそ都にいそくこゝろなりけれ

山里に都を急く心をや八こゑの鳥も空にしるらん

四百五十七番

左持

權大納言公長

嶺の嵐谷の清水も聞なれぬ君につかふる山路かさねて

右

太宰帥親王

きけははやゆふ付鳥のこゑに明ぬと告る逢さかの山

峯の嵐谷の清水も關の戸の明るはしるき逢坂の山

四百五十八番

左

仕へても入ける物をよしの山そむかはとのみ何おもひけん

右持

吳竹の末々までもあふかれていひしにかなふ御代のかしこさ

吳竹の末々までも残りなく仰は高き御よし野の山

四百五十九番

左持

をのつから鳥の音きかて明す夜も身は習はしのね覺をそする

右

相坂のゆふつけ鳥はいつよりか明を告て鳴はしめけん

關守も身をならはしのね覺して鳥の音またぬ相坂の山

四百六十番

左持

仕へき道にいそかは誰もかく明つけ鳥の音をやまつらん

右

君か代をいのるかひあれ結ふ手の曉起のやまの井の水

仕へき人や待らん君か代のあけつけ鳥もすてに鳴也

四百六十一番

雜二

左持

さひしきは同じ太山の松風を聞なれなはと何おもひけん

右

幾夜我かた敷袖のみなと舟浮ねの夢に都みつらん

湊舟浮ねの波もさひしきは同じみ山の松風のこゑ

四百六十二番

左

いとふなと誰をしへけんとても猶身をおく山にすまぬ心は

右持

夕汐や磯山かけてみちぬらん浪間に見ゆる松のむら立

奥山にすまぬも人の心にてしほたれまさる松のむら立

四百六十三番

左持

都出てきつゝなれ行旅衣なとやあまりにぬるゝ袖哉

右

故郷そ猶隔行岩根ふみかさなる山の峯のしら雲

岩ね踏かさなる山の旅衣さそしほるらん年もへぬれは

四百六十四番

左

故郷は涕をさへへたてきぬ分つる山のあとのしら雲

右持

君か代のやすきにゐてもくるしきはあやうき民の心なりけり

分のほる程やくるしき君か代のやすきにゐたる嶺の白雲

四百六十五番

左持

こととはん人は音せて柴の戸をたゝくや峯の嵐なるらん

右

徒に人は問こて柴の戸の明ぬくれぬと松かせそふく

峯の嵐松の風にて月日へぬ柴の樞の明ぬくれぬと

四百六十六番

左

都にて音にそ聞しあさなけになれけるものを軒の松風

古里の俤うかふ月みれば秋そ旅ねのときとなりける

前大僧正頼意

左衛門督長親

權大納言實爲

權大納言實爲

權大納言公長

關白

前大納言光有

前大納言光有

太宰帥親王

春宮大夫顯統

源資氏

源資氏

あさなけになれける松の風の音旅ねの秋やうさは添らん
四百六十七番

左持

前關白

衰さの限りはすみて知ぬれと心をかぬやまのおくかな

右

源成直

風ふけは行かふ人のまねくらん尾花をかこふ野へのかり庵

もろ人や心をきて過ぬらんまねく蕙の垣ほわたりを

四百六十八番

左持

辨内侍

山里の都に替る住居には軒端に峯の雲をかゝれる

右

源頼武朝臣

都にはいかにねし夜か通ひちと草のまくらをさためかねつゝ

山里は軒端に嶺の雲閉てみし都路に夢もかよはず

四百六十九番

左持

無品法親王

いつくをか常のやとりと定めけん旅をはたひと急くなるらん

右

泰宮權大夫師兼

かりねする猪名野の小篠風過て夢もあたる露の手枕

小篠ふく風の宿りのかりの世はいつもおなし露の手枕

四百七十番

左持

女房

今こそあれ住へき代々の都鳥我ゆく末の事やとはまし

右

前中納言具氏

馴て聞松の風やしら雲のかゝるみ山のともとなるらん

白雲のかゝる山にも都鳥有やなしやと昔をそとふ

四百七十一番

雜三

左 女房

しつかなる心は猶そなかりける世を思ふ身の山の住居に

右持

泰宮權大夫師兼

和歌の浦やまよふ波路に年もへぬ哀はかけよ玉津鷗姫

いと、數浮世を思ふことわさの猶數そふる和歌の浦波

四百七十二番

左持

無品法親王

御芳野の山の奥には入ぬれと猶世をいのる名をはのかれす

右

源頼武朝臣

岩根ふみあやうき峯をこえ過てやすきにかへる道はまよはし

岩根ふみ危き峯のすゝ分て身のためならぬ世を祈るらし

四百七十三番

左持

辨内侍

旅衣あさたつ人をまちつれてともにや越んさやの中山

右

源成直

秋はつる小田のなる子は引たえてあせもる水の音のみとする

こえかぬるさやの中山うき物を又秋はつる小田のあせ道

四百七十四番

左持

前關白

我忍ふ心は今もかはらねとなれしむかしの人そすくなき

右

源資氏

難波かたうら浪かすむ夕暮に行とも見えぬあまの釣舟

我忍ふ昔はそれと難波潟うら波遠くかすむ夕暮

四百七十五番

左

泰宮大夫顯統

古郷にゆきかふ夢を吹あらしあなかまたき覺もこそすれ

右

大宰帥親王

けふも又しらぬ野原に行幕であたにも結ふ草まくら哉

行幕に野原に結ふ草まくらあなかも風いとはれそする

四百七十六番

左

前大納言光有

うかりけりならはぬ旅の露の床草はのまくら野へのかり臥

右

關白

たらちねの取はしめにし梓弓是さへ家の風となりぬる

梓弓取はしめたる家の風を旅ねの床の草をなひかす

四百七十七番

左

権大納言公長

住吉のうらははの波の夕なきにみれはほとなき淡路嶋山

右

権大納言實爲

しはしこそさひしかりしか馴ぬれは吹いとはぬ軒の松かせ

淡路嶋あはやとみゆる夕なきに松の木のまの風ふかす共

四百七十八番

左

左衛門督長親

民やすく國治れと臥ておもひ起ていのるもたゝ君のため

右

前大僧正頼意

故郷にたれ植置て窓の竹よゝにかはらぬ友となるらん

植置て離の竹のふして思ひ起てそいのる君か萬代

四百七十九番

左

權中納言實興

假初のあらましにのみ年もへぬ扱いつまでそひなの住居は

新歌集 中納言光資

仕へ來てをこたらぬ身の名をたにも後にはとめよ關の藤川

假初のあらましならぬ木なれは名さへとめけり關の藤川

左

藤原經高朝臣

篠枕伏うき夜半をかさね來て夢も都に遠さかりつゝ

右

前中納言具氏

篠まくら夜半に風をかたしきてふしみの里は夢もむすはす

さゝ枕伏見より猶哀とはみやこに通ふ夢路をそきく

四百八十一番

雜四

左

藤原經高朝臣

身のうさも限あれはとなくさめて見ぬ行末をたのむはかなさ

右

春宮權大夫師兼

かこ山の峯の眞櫛枝しけみ掛し鏡や世をてらすらん

身のうさもよしや歎かしかこ山の峯の正木の陰を頼みて

四百八十二番

左

權中納言實興

君かため身を忘れすは吉野川さのみうき世の浪を分めや

右

前中納言具氏

あすか川七瀬の淀のいたつらにすくる月日のしからみもかな

君かため身をたに安く忘る也まして月日のゆくも覺えず

四百八十三番

左

左衛門督長親

やはらくる光をそへよ和歌の浦に此たひみかく玉つしま姫

右

中納言光資

何をかは外にもとめんむねにすむ心の月のひかりならては

和歌の浦に磨く心の玉やこれさらすはすまん胸の月かは

四百八十四番

左

何事を忍ふにしもはあらねとも過にしかたそ面影にたつ

右

權大納言公長

松の風寛の水の音までもこゝろすみける谷かけの庵

松の風寛の水よこれならぬむかしの庵の面影はなし

四百八十五番

左

前大納言光有

五十餘りめてこし月のつもるをは老と成ぬる身にしらけり

右

權大納言實爲

数々に物忘れて忍ふかなさてもかへらぬむかしかりを

積りける昔語のこととへは五十めてこし月も數かは

四百八十六番

左

春宮大夫顯統

昔こそふりゆく身には戀しけれまして老なん年のくれかた

右

關白

春日野の露のめくみの廣前に身を忘れても世を祈るかな

今更にむかしかけめや春日野の露のめくみの事繁き世に

四百八十七番

左

前關白

身を歎く涙とともにさすらへていつちよるへの水のうたかた

右

太宰帥親王

曇りなき御代のしるしと神風や御裳すそ川に澄る月影

神風や寄邊しらせよさすらふる御裳濯川の水のうたかた

四百八十八番

左

辨内侍

かち枕かひの帯に袖ぬれて波のよる／＼浮ねをそする

右

住吉のきしかた遠く忍はれて忘るゝ草の名のみなりけり

袖ぬるゝ里のよるへの浮舟も及はぬきしの忘草かな

四百八十九番

左

無品法親王

位山今一坂をこえかねて代々に及はぬ身をはつるかな

右

源成直

和歌の浦の玉を磨ける人なみにもくつはかりをかきや置へき

和かの浦の猶人なみに立乍ら代々に及はぬ身と思はめや

四百九十番

左

女房

さらぬたに苗代水の濁る世を心の川にいかゝまかせん

右

源頼武朝臣

武士の八十字治川の瀬を早み身をこそたてね浪はたてとも

心ある八十うち川の波なれと苗代水に猶やひかまし

四百九十一番

左

女房

峯高き龜の尾山の瀧つせのなかれは絶し萬代までに

右

源成直

神代より絶せぬあまつひつきとてけにくもりなき君は我君

天津日嗣絶せず照す龜の尾の瀧の流の君も我君

四百九十二番

左

無品法親王

松か枝も千世とそ契る我君のさかく末を何にたとへん

右

源資氏

千早振神のまもりと仰く哉天てらす日の影をみるにも

松かえの千年さかふる梢より天てらす日の影は高しな
四百九十三番

左持

辨内侍

神風の吹つたへたる君か代にみもすそ川もさそな澄らめ

右

太宰帥親王

吾君の千世の数かもみよし野の山より落る瀧のしら玉

神風のみもすそ川も我君のよし野の瀧もかけはくもらし

四百九十四番

左

前關白

きしかたに又千世添てゆくすゑを君としきれ住よしの松

右持

關白

玉椿二たひかけはあらたまり松は花さく御代の久しき

佳吉の神めつらしく思はまし松も花さく御代にあひつゝ

四百九十五番

左

春宮大夫顯統

御長田の稻も八束の秋つはのすかたの國はたのしかるへし

右持

權大納言實爲

住よしの東遊も勅なれはかしこき御代を神そまつらん

秋つはの姿の國にすみよしの神かきなれは勅もかしこし

四百九十六番

左

前大納言光有

我君の豊原の中津國治まる時と民そさかゆく

右持

前大僧正頼意

やはらくる光もしるき春日山くもらぬ御代をさそまもらし

やはらくる光を君に春日山くもらぬ御代は神のまに／＼

四百九十七番

五十鈴川絶ぬ流や萬國治る御代のためしなるらん
左
權大納言公長

右持

中納言光資

千代ませと君をさしてそ祈る覽三笠の森の神の宮つこ

治むへき御代のためしと我君をさして三笠の杜の宮つこ

四百九十八番

左持

左衛門督長親

神の代の三種の寶つたへます我すへらきそ道もたゝしき

右

前中納言具氏

今もかも天てる神のいすゞ川清きなかれの御代の久しき

唯たのめ神代たゝしくつたへます三種の寶又上もなし

四百九十九番

左持

權中納言實興

君守る神路の山を出る日もあまねき御代の光とそ見る

右

春宮權大夫師兼

我君のあふけはいとゝ高てらす天つ日つきそくもる時なき

五百番

判教關

左持

藤原經高朝臣

君守る神の宮居も代々ふりてしたつ岩根に苔むしにけり

右

源頼武朝臣

五十鈴河波立かへるみつかきの久しき末そ世々にこえ行

いすゞ川浪立かへる末までも下つ岩根はかはらさらなん

右五百番歌合以百花庵宗固藏本書寫得一本校

群書類從卷第二百七

和歌部六十二歌合二十八

内裏九十番御歌合應永十四年十一月廿七日

題

寒月

浦雪

神祇

作者

左方

御製後小松

崇賢門院

入道前太政大臣女

爲定卿女

關白從一位藤原朝臣經嗣公

入道前太政大臣夏公

從一位行左大臣藤原朝臣良嗣公

右大臣正二位藤原朝臣公行公

征夷大將軍從一位行權大納言兼右近衛大將源朝臣義持

沙彌常空

正二位行權大納言兼左近衛大將藤原朝臣公俊

正二位行權大納言藤原朝臣公宣

正二位行權大納言藤原朝臣實信

正二位行權大納言藤原朝臣忠定

沙彌清寂

正二位行權大納言源朝臣通宣

從二位行權大納言藤原朝臣資藤

從二位行權中納言藤原朝臣宗氏

沙彌常永

參議正三位藤原朝臣隆直

沙彌宗標

正四位下行左近衛權中將藤原朝臣基親

正五位下行左近衛權少將藤原朝臣雅清

沙彌中鑑

小比叡彌宜祝部成胤

法務前大僧正法印大和尚位道意

前大僧正法印大和尚位尊經

僧正法印大和尚位道尋

僧正法印大和尚位滿濟

二品法親王末勅

右方

准三宮義勝公

二品親王義仁

正二位行權大納言藤原朝臣實永

經定卿女

從二位藤原朝臣公敦

沙彌宋雅

内大臣正二位藤原朝臣藤原基公

參議從三位右近衛權中將藤原朝臣公雅

正三位行權中納言藤原朝臣爲尹

正二位行權大納言兼左衛門督藤原朝臣重光

從二位源朝臣具言

從四位上行右近衛權中將藤原朝臣實秀

參議從二位行侍從兼安藝權守藤原朝臣行俊

從二位行權中納言兼左兵衛督藤原朝臣兼宣

參議從三位藤原朝臣滿親

從四位上行刑部卿藤原朝臣爲盛

權中納言從三位藤原朝臣經豐

藏人頭正四位下行右近衛權中將藤原朝臣宗量

沙彌祐信

權大僧都堯尋

權大僧都慶成

從三位加茂縣主脩久

侍從從五位下藤原朝臣爲員

沙彌釋念

從五位下行左近將監津守國清

前大僧正法印人和向位應辨

正二位行式部大輔菅原朝臣秀長

正四位下行右近衛權中將藤原朝臣公種

正四位下行右大辨藤原朝臣豐光

二品法親王義仁

講師

讀師

判者

一番 寒月

左勝

霜かれのころさへ月のやとりにて千年のかけそ松にのこれる

右

御 製

つかへつゝよはひもたかき雲のうへの月の水を袖にみるかな

二番

左勝

崇賢門院

さえ渡る影そこほりてみかは水ともにすむ夜の月そくまなき

右

義仁親王

小夜ふかき庭の木のはの霜の上に光をそへて氷る月哉

三番

左勝

入道前太政大臣女

さえわたる影もあまねき月よりや色もひとつの霜はをくらん

右

權大納言實永

ふくる夜の月にのころぬ雲きえてさてもや影の猶こほるらん

四番

左勝

爲定卿女

やとれ月露よりなれしおも影をさゆる霜よの袖にのこして

右

經定卿女

更行は空にあらしの音さえて雲まの月の影そこほれる

五番

左 關 白

雲井まで氷れる月や河竹の夜はなかしにさえわたるらむ
右勝 前大納言公敦

今はや露をは霜に置かへてあらぬやとりの月の影かな
六番

左勝 入道前太政大臣

ひはらふく外山のひゝきさえくれて月の氷をまつあらしかな
右 沙彌宋雅

氷るそとみるより空は猶さえて霜にへたてぬ月のかけかな
七番

左勝 左大臣

むら雲をはらひつくせる山風になをさえまさる冬のよの月
右 内大臣

さえわたる雲ゐの月をみかは水うつれる影や猶こほらん
八番

左勝 右大臣

霜さゆる嵐は松に音ふけて月は雲ゐに影こほるなり
右 右近中将公雅

更行は猶かけさむしあさちふの霜にこほれる冬の夜の月
九番

左勝 右近大將義持

さゆる夜は氷かさねてみかは水猶すみまさる庭の月かけ
右 權中納言爲尹

今はやしきたつ澤のかけもみす氷にむかふ冬のよの月
十番

左 沙彌常空

をのつからたゝよふ雲もさゆる夜のあらしに晴てすめる月哉
右勝 權大納言重光

有明のこほれる影をさきたてゝあらしふけ行山のほのそら
十一番

左勝 左近大將公俊

山のはも霜夜にさゆる松かえのあらしをわけていつる月かけ
右 前大納言具言

あきらけき君か光を猶そへて雲ゐにさゆるふゆのよの月
十二番

左勝 權大納言公宣

吹はらふ雲はあらしにとゝまらて空にさえ行冬のよの月
右 實秀朝臣

あまつ空霜も氷もむすふそと影よりみえてさゆる月かな
十三番

左 權大納言實信

うちとけてねられぬ夜半の袖の霜むすひそへてや月も宿れる
右勝 參議行俊

吹風のゐなの笹原夜はふけて置そふ霜にこほる月かけ
十四番

左勝 權大納言忠定

ふけぬるか猶影さむしをく霜のこゝのかさねの冬のよの月
右 左兵衛督兼宣

さゆる夜はいかなる霜の光にて秋より月のすみまさるらん
十五番

左勝 沙彌清寂

空までも霜をかさねてすむ月の更行まゝに影こほれる

右

參議滿親

みるまゝに夜ふかき空の霜さえて袖にも月の影そこほれる

十六番

左

權大納言通宣

霜さゆるみかきの竹のよとともにかはらぬ月の影そこほれる

右

爲盛朝臣

よそにゆく雲の波まで氷けりさゆる霜夜の月のひかりに

十七番

左

權大納言資藤

さゆる夜のほともしられて山端にこほれる雲を出る月かけ

右

權中納言經豐

鐘の音もあらしとともに更行は霜夜の空にこほる月かけ

十八番

左

權中納言宗氏

さゆる夜はあらしの音もたかさこやおのへに氷る月のかげ哉

右

宗豐朝臣

影にたにをくそとみえし霜の色の眞砂にふかき冬のよの月

十九番

左

沙彌常永

くれ竹のき枝にやとる月更であられ吹まく夜半のこからし

右

沙彌祐信

風さゆる雲の衣にかけとめて氷かさぬるふゆのよのつき

二十番

左

參議隆直

久かたの雲にさえてみかは水氷かさぬる千世の月かけ

右

權大僧都亮尋

天津空霜にみちぬる夜はとてや月にさえ行かねの音かな
廿一番

左

沙彌宗儼

影こぼる月をは袖にしきわひぬとけてねぬよの霜のさむしろ

右

權大僧都慶成

さえわたる月の氷もみかは水なかれひさしき御代てらすらし

廿二番

左

基親朝臣

さゆる夜も更行袖の霜の上に氷かさぬる月のかげかな

右

從三位脩久

あけぬるか霜夜の鐘の聲よりも猶さえまさる月のかげ哉

廿三番

左

雅清

すみのほる影よりやかてさゆる夜は霜をもまたて月を氷れる

右

爲員

さむしろやねられぬまゝにみつる哉霜もかさなる庭の月かけ

廿四番

左

沙彌中鑑

天津空おさまる空(雲)の波間より光をそへてこほる月かな

右

沙彌釋念

夏の夜も霜かとみえし玉敷の庭のまさこの冬の月かけ

廿五番

左

小比叡禰宜祝部成胤

時雨つる雲ものこらぬ山のはに月さえほるみねのまつかせ

右

津守國清

ふけ行はあらしも霜もさゆる夜に氷て月のかげそさやけき

廿六番

左

久かたの空には月の氷る夜も雲の波たつかせのをとかな

右

前大僧正道意
前大僧正應辨

右

うき雲ははらひつくして山風の更行まゝに月やさゆらむ

三十番

左持

風さえてはれ行ほとこのうき雲にこほりさためぬ月のかけかな

右

二品法親王 氷助
堯仁法親王

久方の空もひとつにすみのほる御はしの月の影のさむけき

左持

御 製

強てふる我名もかけよ和歌の浦の玉もの雪の跡の白波

右

准 后

きゝしより名もむつましく思ふなり足利の浦につもる白雪

左持

崇賢門院

みわたせは波もひとつに白妙の雪にこきゆく浦のつりふね

右

義仁親王

松かせも音しつまりぬふる雪のつもりの浦の明ほのゝ空

左持

入道前太政大臣女

しら波の關吹こゆるをとほして雪をそくるすまの浦かせ

權大納言實永

ふりにけりみほの松原それから浦波しらむ雪の朝あけ

左持

爲定卿女

和歌の浦やくち木の松に降雪のつもれる年も今そかひある

右

經定卿女

波かゝるしつえはかりは嵐晴て松につもりの浦のしら雪

左

關 白

あゆの風吹こしの海もなきてけり雪にこきいつるなこの浦舟

右持

前大納言公敦

けさはなをきのふのうへに降そへて名さへつもりの浦の白雪

左持

入道前太政大臣

佳吉のうら地明ゆく波まより雪にかくれぬあはちしきやま

右

沙彌宋雅

なるみかた浦風とをし吹しきてしほひにつもる雪の明ほの

左

左大臣

十かへりの花とみよとや和歌の浦の松の梢にふれるしら雪

右持

内大臣

あけてみは猶やつもらむ玉くしけふたみの浦のよはのしら雪

左

右大臣

和歌の浦の道榮へゆく御代にありて雪分そむる跡やのこらん

右

右近中將公雅

三十九番

左持

もしほくむ浦のとまやも埋れて雪をそわくるあまのかよひち

右

右近大將義持
榊中納言爲尹

四十番

左持

風さむみ末こす波とみしほとに雪そつもりの浦のまつ原

右

沙彌常空
榊大納言重光

四十一番

左持

吹よはるほともしられて降雪のやかてつもりのうらの松かせ

右

左近大將公俊
前大納言具言

四十二番

左持

志賀の浦さゝ波よするみきはとやふりつむ雪もした氷るらん

右

榊大納言公宣
實秀朝臣

四十三番

左持

木末にはつもりもあへす松風のふけゐの浦の雪の明かた

右

榊大納言實信
參議行俊

四十四番

難波かた岸邊をしなみふる雪のすゝろに積る浦のしら波

左持

降つもる雪のひかりの明かた(と歌)しはしはくれぬうらの遠方

右

榊大納言忠定
左兵衛督兼宣

四十五番

左(和欠)

あま人のしほくむたこのうら風に袖にも雪はなをつもりけり

右

沙彌清寂
參議満親

四十六番

左

浦ちかくなれて汐くむかよひちも雪にやたとるすまのあま入

右持

榊大納言通宣
爲盛朝臣

四十七番

左持

浦遠きしほのひかたもしら波の又よするかとつものしらゆき

右

榊大納言資藤
榊中納言經豐

四十八番

左持

あま人の衣ほすまもしら雪のつもればかゝる袖のうらなみ

右

榊中納言宗氏
宗量朝臣

夜もすからしかの浦波音たてゝあくる渚につもるしら雪

左持

沙彌常永

浦遠くふりくるほととをまつしやをしまは雪のかつうつむ也

右

沙彌祐信

あけわたるよさの浦波ほのく雪よりしらむ天のはしたて

五十番

左

參議隆直

みくまの浦にふれとも濱夕のいくへつもれるほともしら雪

右

權大僧都堯尋

關の戸は雪よりあけて須磨の浦や猶雪ふかしあはちしまやま

五十一番

左

沙彌宗傑

難波かたことうらよりも芦ふきのこやにはふかくつもる白雪

右

權大僧都慶成

白雪のふるかひありて和歌の浦の松にや千世のあとを残さん

五十二番

左

基親朝臣

明わたるよさのうら風吹しきて雪になり行天のはしたて

右

從三位脩久

しきたへのとこの浦風しつまりてよのまは積る雪のあさあけ

五十三番

左

雅清

きよみかたしほのみちひもみえわかて雪と波とに浦風そ吹く

右

爲員

和田のはら八十嶋かけてふる雪にさらにかきりも波の上かな

五十四番

左

沙彌中鑑

さゝ波や釣するあまの袖までも雪にそかへるしかのうらかせ

右

沙彌釋念

ふる雪のつもればいと浦風のをともおさまるみほの松原

五十番

左

小比叡綱宜祝部成胤

うちよするおきつしら波をとさえて雪になるみの浦風そふく

右

津守國清

ふりつもるみきはの雪を吹たてゝ波もたかしの浦の夕かせ

五十六番

左

前大僧正道意

すみよしの浦ふく風もしつかにて濱まつかえにつもるしら雪

右

前大僧正應辨

あとつけてまたふみなれぬ敷嶋や和歌のうらはの雪をみる哉

五十七番

左

前大僧正尊經

ふりはるゝひかたの雪をふきたてゝまたかき曇るおきつ瀧風

右

式部大輔秀長

松にふくしほ風までもうつもれて雪にのこるやみほのうら波

五十八番

左

僧正道尋

よさの海やうら風わたるはしたての雪もたえゝみゆる松原

右

公種朝臣

浦ちかくこきくる舟の笛しろくなにもかけてみ雪ふるらし

五十九番

左

僧正滿濟

松は猶きたかにみえて波風もおさまる浦の雪の明ほの

右

豊光朝臣

ふる雪の積りもあへず難波江の芦のかれ葉にかゝる浦かせ
六十番

左持

永助法親王

和田のはら雪にへたてし浦々もさたかにみゆる雪の明ほの

右

堯仁法親王

をしなへていつくの浦もかはかりや風しつかなる雪の明ほの

六十一番 神祇

左持

御製

芦牙とみえしかたちをはしめにてくにつ社の神のかしこさ

右

准后

今は身のとしも五十鈴の川波を千たひ百たひわたらへの宮

六十二番

左持

崇賢門院

君そすむかけをはうつすいはし水幾代のかすを数へかさねて

右

義仁親王

いはし水ゆく末遠き君か代を神もあらたにさそまもるらん

六十三番

左持

入道前太政大臣女

春日山ときはの松のかけにゐて猶すへらきの千年いのらん

右

權大納言實永

君守る千代のためしといはし水なかれもきよみ神やすむらん

六十四番

左持

爲定卿女

我君のおふくに神も老松の千年の友と猶やまもらむ

右

經定卿女

行末を思ふもひさしあとたれていく代へぬらんすみよしの松

六十五番

左

關白

六かへりのもゝ年あまりみ笠山あたとれし神のまもる此御代

右持

前大納言公敦

かすかやま六十の老の坂こえぬ神と君とのめくみある代に

六十六番

左

入道前太政大臣

男山ちとせの坂もこえぬへし君かめくみの道にまかせて

右持

沙彌宋雅

いく千代か神ちの山のうちにみて外にあらはれ君まもるらん

六十七番

左

左大臣

八しまもる神の宮ゐをこゝのへの浦にいつより祝ひそめけん

右持

内大臣

たてかふる春日の神の宮柱千たひやちたひ君そみるへき

六十八番

左持

右大臣

石清水たえぬなかれをくむ君の千代もすむへき影やみゆらん

右

右近中将公雅

天の下くもらぬ御代とみかさ山さしてや君を猶まもるらん

六十九番

左持

右近大將義持

千代ふへき神のちかひやすみよしの松をためしのしき嶋の道

右

權中納言爲尹

松たにも久しときくを住吉の神は幾代かまもりきぬらん

七十番

左

沙彌常空

やはらくる光もたかし男山さかゆく御代をさそてらすらん

右持

權大納言重光

あめつちの神代もきかすあし原や今ほと國のおさまりしとは

七十一番

左持

左近大將公俊

いはし水神のなかれの末遠くまもるにすめる君か御代哉

右

前大納言具言

男山神のちかひもあらはれてさかゆく御代の末そひさしき

七十二番

左持

權大納言公宣

いはし水そこにあふかめておもふ哉君かすむへき千代の久しき

右

實秀朝臣

八百よろつかけてそすまむ石清水にこりなき代を神に任せて

七十三番

左(側欠)

權大納言實信

あふきみん君に頼みをかけまくもかしこき神の恵みある世に

右

參議行俊

跡たれてまもるも久しいはし水にこりなき世と神やすむらん

七十四番

左持

權大納言忠定

上下の賀茂の社のゆふたすきかけてそいのる千代のゆくすゑ

右

左兵衛督兼宣

石清水すみはしめける代々をへてたくひはあらし君か恵は

七十五番

左持

沙彌清寂

神かきもいま色そへてすみよしの松にや君か千世はみゆらむ

右

參議滿親

神もさそみもすそ川の末とをくたえせぬ御代を猶まもるらん

七十六番

左持

權大納言通宣

代々にこえまもるもしるし石清水君か千年のかけを移して

右

爲盛朝臣

おさまれる御代にそいとゝしられる神は正しき道守るそと

七十七番

左持

權大納言資藤

あめつちのひろき恵を三笠山あまてる神や代をまもるらん

右

權中納言經豐

やはらくる光を神もさしそへてさしてそまもる君かよろつ代

七十八番

左持

權中納言宗氏

石清水きよき流のたえせねは君か千年のかけそすみける

右

宗量朝臣

ちはやふるみかきの森のゆふたすきかけてそたのむ神の恵を

七十九番

左(側闕)

沙彌常永

天津空ひかりをことにあふく哉てる日のみこと月よみの神

右

沙彌祐信

かすゝの神もまもれば君かへん八百萬代の末そひさしき

八十番

左

參議隆直

神もさそ心よすらんかすかやま今たちかふるにゐなみのみや

右勝

まもるらむ道をも代をもすみよしの宮居におなし玉津嶋姫

八十一番

左

權大僧都堯尋

右勝

君か代に今たてかふる宮柱てらすひかりの日のくまの神
權大僧都慶成

八十二番

左勝

基親朝臣

君かため幾代か神もすみよしの松のよはひをちきりをくらん
從三位脩久

右

八十三番

左勝

雅清

千代かけて松に契りを住吉の神やかはらす道まもるらん
爲員

右

八十四番

左勝

沙彌中鑑

君か代に千度うつさん神ち山瑞殿のみや宮つくりして
沙彌釋念

右

八十五番

左勝

小比叡綱宜祝部成胤

かすくゝに君をそいのるさき草の三葉よつはの七の玉かき
津守國清

住吉の神につかふる身にしあれば君をそいのる萬代までと
八十六番

左勝

前大僧正道意

右

おさまれる御代の千年をみくまのゝ神にまかせて猶いのる哉
前大僧正應辨

八十七番

左勝

前大僧正尊經

右

いはし水神の誓のそのまゝににこらぬ御代をさそまもるらん
式部大輔秀長

八十八番

左勝

僧正道尋

右

もろ神のまもるしるしと君か代もともにさか行しきしまの道
公種朝臣

八十九番

左勝

僧正滿濟

右

やはた山神のいかきのみしめ繩なかくれとのみ代をいのる哉
豐光朝臣

九十番

左勝

永助法親王

わきて猶千代とそいのるいはし水なかれ久しき君かめくみは
堯仁法親王

右

天地のひとかたならす君をまもるほしのくらゐや七の神かき

仙洞歌合 寶徳二年十一月

題

河落葉

曉千鳥

遠嶺雪

忍逢戀

松歴年

作者

宰相典侍鑒

式部卿親王

右近大將實量

太宰權帥實雅

沙彌淨空

權中納言責任

權中納言公綱

右衛門督雅親

前中斐守明茂朝臣

散位伊忠朝臣

左近中將爲富朝臣

左近中將經秀朝臣

左近中將季春朝臣

右近少將公澄朝臣

民部權大輔行秀

判者

關白兼具公

飛鳥井中納言入道祐雅

一番

河落葉

二條

按察使公保

權大納言宗繼

沙彌祐雅

左衛門督持季

權中納言敦季

侍從持爲

參議政賢

左兵衛督有俊朝臣

權右中弁親長朝臣

左兵衛佐永親朝臣

右近中將房郷朝臣

右近中將實右朝臣

法印堯孝

藏人式部丞源政仲

左 宰相典侍

うちいつる波もえならぬ色なれや木のはしくれし跡の山川

右 沙彌祐雅

波のをともひとつになりぬ落葉せしならのを川の木枯のかせ

左 右兩首とり／＼におかしく社侍れ。恩恵みわつらひ侍

ほとに。右の上下の句の初の子。おなしく侍りけり。これ

はふかき難には侍らねと。歌合の例として。かやうの事を

こそ吹毛にも申侍れは。左勝とや申侍るへからん。

飛鳥井中納言入道

左歌。うち出る波もえならぬといひ。この葉しくれしあ

のなと侍る。心詞相叶て。首尾相應せり。右のならの小河

の波の音は。かけても及かたうや侍らん。尤以左爲勝。

二番

左 持持

もみち葉の錦をしける大の川くたす筏になかやたえなん

右 按察使公保

このころは木のはしくれて山河のいはまの水は色かはりゆく

みかとのおほんめには錦とみ給ける立田川のもみち。玉

しきたひらの宮古の大井河にまちかくみなし侍れは。君

も臣も身を合せたる昔を今になすにやと。たのもしく

おほえ侍れと。木のはしくれていはまの水の色かはるな

と。始終りたしかにて。ことによりしく聞え侍れは。しは

らく持にもとや申侍らん。

左はかのもみちみたれてなかるめりとあるを。大井川下

すいかたに中や絶なんと侍るも。みところありてきこえ

侍るに。右もこの葉しくれていはまの水の色かはる。心宜侍れは。なすらへて可_レ爲_レ持。

三番

左

式部卿親王

瀧の菰もあめとふりそふ山河にまさらぬ水や木のはなるらん

右持勝

右近大將實量

山かせのこの葉せきいるゝ音は川秋にもみゆる波の色かな

左は射恒か。雨と降ても水はまさらしといへる歌をおもひ。右はいせか。せきいれて落す瀧つせにとりて。左は本歌の心とおなしやうに侍るにや。またたきの音もあまりて聞え侍り。秋にもこゆるなみの色なといへるわたり。今すこしまさると申へきにや。

左の歌。宜は侍るを雨とふる木のはに水のまさらぬ心。常にきゝなれたるやうに侍り。右やま風のこの葉せきいるるといひ。秋にもこゆる波の色なといへるわたり。今すこしまさると申へきにや。

四番

左持勝

權大納言宗繼

ふく風も山かけ深くみえてけりもみちによとむ谷川の水

右

太宰權帥實雅

大井川波にちりしくもみちははさそふあらしの山めくるらし

左の歌。上句。聊心えぬやうに侍れと。もみちによとむなと優に侍るにや。右ことなる難はみえ侍られとも。さそふあらしの山めくるや。しくれなとの心し侍らん。左かちに侍るへし。

左の。もみちによとむ谷川。右の。波にちりしく紅葉。ともによろしくみえ侍れは。いつれをふかく淺しと。わきまへかたくや侍らん。

五番

左持勝

沙彌淨空

山本の河せによとむもみちはやくたしもやらぬあけのそほ舟

右持勝

左衛門督持季

からにしき秋みし水のかゝみさへ落葉にくもる冬の山川

左。あけのそほ舟に。もみちをたとへられ侍るすかたは。珍らしくきこえ侍れと。順徳院の御製に。この心み及侍しやうに覺侍る。玉葉集などにもや入侍らん。ひかおほえにや。右歌。かの花の鏡のおもかけなとおもひ出られ侍て。優には侍れと。からにしきの五文字。もみちはさる事に侍れと。たゝまくおしきなとやうのことはのよせなくては。なをいかゝとおほゆるやうに侍るにや。

左。もみちの色を。あけのそほ舟にまかへたる心。みし心地し侍り。しからは右珍きふしは侍られと勝へきにや。

六番

左持勝

權中納言責任

散かゝる山の木のはや大なる川みせきの水も行なやむまで

右

權中納言教季

山かせやしからみとめぬ早瀬河つもりもあへすゆく木のは哉

右歌。はやせ川のもみち風のしからみかけかねたる心にととは。をしはかられ侍れと。しからみとめぬと侍ること

はつかひ。もみちの外に別にしからみとて。あるやうにも聞え侍らん。左は。やすらかにいひくたされ侍り。勝れ

るにや侍らん。

左はゆきなやむ水のあさからぬ木のはにこゝろをとゝ

め。右は山かせのしからみかけぬもみちの積りもあへぬ

色をおもへり。其心ことなりとはいへとも。歌の科おなし

ほとにや。

七番

左持

ちりかゝる色は錦の名とり川やなせの波もそむるもみち葉

右持

なかれあふせゝのもみちはせきとめて昔にかへる谷の埋れ木

左歌。水海に秋の山へうつしては。はたはりひろき錦とそ

みると侍れは。水をにしきにたちなされ侍る心詞。おかし

くはきこえ侍るを。色はにしきのとほへる色の字。猶いつ

れとわかれぬさまに侍にや。右歌は。昔にかへるなと侍る

は。この埋木むかしのもみちにや。疑ふ詞をも殘され侍ら

ぬこそ。なにをしるしと聊心もとなきやうには侍れ。いか

さま二首の鉢等同に侍り。持にこそ侍らめ。

左右ともに心あるさまに侍るを。むかしにかへる谷のう

もれ木。いま少まさると申へきにや。

八番

左持

大み川水底にみし影たえてあらしにうかふせゝのもみち葉

右持

立川散しもみちの梢のみうきてなかれぬ山かせそふく

右歌。もみちをはさしをきて。枯木の梢を賞せられ侍る心。

おほつかなく覺侍り。又うきてなかれぬも。今さらことあ

右衛門督雅親
參議政賢

たらしくや聞え侍らん。左の歌。第二の句さゝへて聞え侍

れと。心すかた優に侍るにや。

左。底なるかけはたえて。せゝにうかふもみちの色。見所

ありて聞え侍るに。右又。梢のみうきてなかれぬと侍る。

いつれもすてかたき心なるを。散しくもみちといひて。の

こるこすゑのみうきてなかれぬといはんことは。冬ふか

くなりてもあるへきか。落葉とあらん題には。祇今散たる

所をみる心あらまほしく侍る也。然らば今すこしたしか

なるにつきて。左可勝にや。

九番

左持

山川や波にかたよるあし鴨の羽色もそめてちるもみち哉

右持

みかの原山かせ吹はいつみ河もみちそ色にわきてなかるゝ

左歌。金葉に。はゝそちるいはまにかつくかも鳥はをのか

青羽もみちしにけり。同心にや侍らん。右。もみちそ色

になと。おかしからさるにあらすや。可レ爲レ勝。

右。わきてなかるゝ泉河と云歌をおもひて。もみちそ色

になといへる。いとよろしく侍めり。左。波にかたよるあ

しかものと侍るは。あしくもきこえぬを。萬葉の詞には侍

れとも。羽色もそめてといへるつゝき。不レ被レ庶幾一侍れ

は。右の勝へきにこそ。

十番

左持

なこりさへあらしの末も山川にさそふ水ありとちるもみち哉

右持

右。散位伊忠朝臣
權右中弁親長朝臣

ちりしけは色も朽木の袖川になかれておしきせゝものもみちは
左なこりさへあらしといひて。下にさそふ水ありと侍る。
同心の難までは侍ねと。聊きにくくや。右色も朽木と
なりはてたる落葉。おしみとめても。そのかひなくや侍ら
ん。

左右ともによろしく侍るを。右の末の句。いますこしよは
く聞え侍にや。

十一番

左將

大み川山はあらはに木枯のさそふゆくゑそ波にせかるゝ

右

左近中將爲富朝臣
左兵衛佐永親朝臣

ちりしきておち葉によとむ山川の水をもさそふあらし吹なり
山はあらはに木からしのさそふなと侍れは。まかふかた
なくは聞え侍れと。歌合などには。たしかならぬとかや。
のかれかたく侍らん。右ちりしけとありて。又おちはと
侍る。いかゝ。筆の誤にもや侍らん。大方歌のやうは。いつ
れと申かたくや。

右。水をもさそふといへるや。心えかたく侍らん。左まさ
ると申へし。

十二番

左將

波のをる錦とそみる立川河水もちしほのせゝものもみちは

右將

右近中將經秀朝臣
右近中將房郷朝臣

山かけにうかふちしほや水無瀬河袖つく色にまかふもみち葉
左右のちしほ。淺深わかれかたく侍り。左はあまり題にす
かりて侍にや。袖つく色にまかふなとは。少心あるさまに

きこえ侍り。勝へきにや。

左右のちしほ。いつれとわきかたく侍にや。

十三番

左將

埋もれて波さへたゝぬからにしき秋のかたみの大井川かな
右將

右將

左近中將季春朝臣
右近中將實右朝臣

ちりかゝるもみちの色にをりはて波のあやさへ染川の水
左歌。波さへたゝぬは。秋のかたみをたゝぬ也けりといへ
る本歌の心とは聞え侍るを。題のもみちや不足に侍らん。
又終句も。よはく聞え侍り。右歌。大み川立田などをさし
をきて。遠きそめ川までたとりゆきけんも。あやしくや侍
らん。大方ことなり勝負もみえ侍らぬにこそ。

右。波さへたゝぬからにしき秋のかたみなと侍れは。もみ
ちのことにこそとは。をしはかられ侍るを。末の句。猶不
レ被ニ庶幾ニにや。よりて右の勝とす。

十四番

左將

山河や木のは吹しく風なれば色の千種に波もたちけり
右將

右將

右近少將公澄朝臣
法印堯孝

にし河やふかきみゆきの俤にもみちもうかふ水のしらなみ
有歌。なにかしのおとゝの。いま一たひとをしへられけん
亭子院の昔を想へるにや。いと珍しく聞え侍れと。俤にう
かふなと。みぬ世のことも申侍るへきにや。大井の逍遙
などの事につきては。いさゝか便も侍らんかしとそおほ
え侍る。左歌。色の千種に波もたちけりなと。もみちの色
も今一しほそめまして侍るや。

西川の御幸。世にふりたることなれと。歌のさま左にはま
さるへくや。

十五番

左持

秋の色はさそふあらしにいぬかみやとこの山河紅葉みたれて

右

民部權大輔行秀
藏人式部承源政仲

橋姫のまつ夜なからの袖かけてもみちふきいるゝ宇治の河風
左。さそふ嵐にいぬかみや。詞のつくき優に侍り。右まつ

よなからの袖かけて。又妖艶に侍れば勝劣を決せずや侍
らん。

左右。いづれも心あるさまにみえ侍れば。可_レ爲_レ持歟。

十六番

左持

宰相典侍

むれてたつまさこの千鳥かけみえて有明さむし吹上のはま

右

式部卿親王

霜さける沖のしらすに立千鳥かけまで跡の有明の月

兩首の千鳥左は。濱の眞砂の月をかけを弄し。右は。沖洲
の霜にあとをのこせり。寒暁の景氣如_レ在_二眼前_一。是非已迷
優劣難_レ辨。

眞砂のちとりかけみえてといひ。沖のしらすにたつ千鳥。

また有明さむし。有明の月。ともに僞空にうかて。まこ
とに宜侍れば。勝劣わきまへかたく侍り。

十七番

左持

一條

さよ千鳥空に聲して有明のかたふくかたにとをさかりゆく

右

有近大將實量

あくるまてなれぬる月や友千鳥かたふくかたに浦つたひして

かたふく方にとをさかりゆく。かたふく方に浦つたひし
て。姿かはれる所侍らぬにや。

左右ともに。姿詞いひしりて。おかしくは侍るを。さよ千鳥

うらつたひゆく波の上にかたふく月もとをさかりぬると

いふ歌に。心詞相似侍るにや。

十八番

左持

按察使公保

難波かた浦風さむき有明の月も入江に千鳥なくなり

右

權中納言資任

さらぬたにきけは心もすまの浦の有明の月に千鳥しはなく

此兩首。脂燭一寸などの歌とや申侍らん。右初句もいひお

ほせぬにや侍らん。又可_レ爲_レ持。

有。須磨の關有明の空に鳴千鳥かたふく月はなれもかな

しやと云歌。聊思ひ出られ侍にや。左。月も入江とは。波に

やとれる心にや。又山のはに入ぬるならはふくるしも有

明の月をまち出づる哉とこそよみて侍るに。有明の曉に

いらん事や。いかんと覺侍れと。猶左の勝とや申へから
む。

十九番

左持

權大納言宗繼

小夜千鳥波をしきつの衣手にうらふれてなく曉のこゑ

右

權中納言公綱

さそひても友やこぬみの濱千鳥うらむる聲の有明のそら

この千鳥。しきつこぬみの名はかはり侍れと。うらふれて

なく恨むる聲のなと。すかたことは。ひとしく侍にや。

左右の歌。いづれもよろしく侍り。持なとにや。

二十番

左持

太宰権帥實雅

さよ千鳥つままちこふる曉はなみたやみつのほまになくらん

右

沙彌祐雅

たつとみし夕波千鳥かへらん有明の月の落しほになく

左歌。みつの濱につままちこふるなと。和歌の心優に聞え侍り。勝へきにや侍らん。

みつの濱にまちこふる心。さゝふりにたるやうには侍れ

と。萬葉の古語もすてかたく侍れは。可レ爲レ勝。

二十一番

左持

侍従持爲

老の波よるのね覺にこととへはもろき涙の川千鳥かな

右

右衛門督雅親

有明の月をかたみの浦千鳥つまもつれなくわかれてやなく

左。老のなみよるのねさめ。あはれにもよほし侍るにや。月をかたみの浦千鳥。俯さひしくは侍れと。下句なといさ

さか左まされるやうに侍れは。勝と申へきにや。

老の浪よるのね覺もろき涙まで。身にしられ侍り。また月

を形見のうらちとりつまもつれなくなといへるも。心な

きにあらざるにや。仍爲レ侍。

二十二番

左持

沙彌淨空

あま人のね覺とふなりくさかえの入江のちとり友なしにして

右

法印堯孝

なけやなけなれそせめては友千鳥ひとりねさめの浦の笛やに

左。萬葉の古風をおもはれ侍れと。上句なとうちやりさ

まなるにや。右。思ひ入ては侍れと。なれそせめての詞。い

さゝか優ならざるにや。持にこそ侍らめ。

左。くさかえの入江にあさるあし田鶴のと云歌をおもひ。

入江の千鳥友なしにして侍るに。右。又。なれそせめては

なといへる。ともに優にきこえ侍れは。これも可レ爲レ侍。

二十三番

左持

左衛門督持季

友千鳥よそにそわたる浦風のあらき濱への明方の空

右

左兵衛督有俊朝臣

うらかせもおつる潮にさそはれて千とりとわたる曉のそら

左。あらき濱へのあけかたの空なとは。まさりてきこえ侍

るにや。

明かたの空。曉の空。いづれもおなし科にや。

二十四番

左持

權中納言教季

なく千鳥そなたに友や有明のかたふく沖に遠さかりゆく

右

右近中将經秀朝臣

有明の月にしはなくさよ千鳥あはれやとまる須磨の關守

左歌。末の三句十七番の歌と同様に侍るにや。かたふくお

きもいかゝとおほえ侍る。右は。平頭聲韻二の病侍り。と

かめぬ事も侍れと。これはあまりなるにや侍らん。但左か

ちまてのことはおほつかなく侍り。

此番は。いづれも宜は侍るを。左は十七番に申出つる歌の

心にかよひ。右は十八番にしろしつけ侍りし歌に相似侍

る歟。なすらへて持にこそ。

二十五番

左持

參議政賢

有明のかけもこほれる玉河の波をのこして たつ千鳥哉

右

散位伊忠朝臣

うら風に有明の影もこほるなりいつくの波に千鳥なくらん

左右の歌 河浦のかはれるはかりにて。有明の波にこほれる心姿など。同やうに侍れは。をしこめて持と申侍て。こ

とたりぬへく覺侍れと。たまゝ判者のやうなる事をうけたまはるにつけては。つたなき心におもひよる一筋を。

はゝかりながら申侍るへし。左歌。波をのこしてと侍る。ちとりは必波をつれてたつへき事のやうにきこえ侍り。

右のいつくの波も。その所となくきこえ侍にや。磯にもはまにも立居なくとこそ讀ならはし侍るに。是は波をはな

れてはなき侍ましきやうに。こと葉つかひの侍るも。いかゝと覺侍る。まめやかに管見の愚案。草跡の僻事に侍

へし。

左右。同科に侍るを。浪をのこしてといへるよろしく侍れ

は。左の勝にや。

二十六番

左持

前甲斐守明茂朝臣

月をさへをしまのあまの管やにや心ありけに千鳥鳴らん

右

民部権大輔行秀

千鳥なく磯山かつらほのゝと波もたちくるあけほのゝ空

左。月をさへの字。いかに心えわくへき事にか。中のにや

の字も。さゝへて聞え侍るにや。右の磯山かつら。これも

このまじからぬ跡にや侍らん。

右ほのゝといひて。あけほのやいかゝ侍るへからん。然らは左の勝へきにこそ。

二十七番

左持

左近中将爲富朝臣

おもひたに和歌の浦はのさよ千鳥たゝいたつらに鳴れさめ哉

右

左近中将實右朝臣

有明の月もおちくる鹽あひにうかふ淡路の千鳥なくなり

左。思ひたにわかのかの浦は。言葉のつゝきいかにそや聞侍る。右うかふあはちの千鳥も。きゝよからぬにや侍らん。

なすらへて持と申へくや。

左。おもひたにわかのかのうらはと侍る。なにことをおもひわかぬとも。聞えすや侍らん。右も宜は侍を。あはちの千鳥

といへるつゝき。かの吹上のちとりなく也といへるには

おとりてや聞ゆらむ。なすらへて爲侍。

二十八番

左持

權右中弁親長朝臣

友千鳥いまやわかれをすかのねのなかるの浦の明方のこゑ

右持

左近中将季春朝臣

あか月の霜も沖津の濱風に眞砂を寒み立千鳥かな

霜もおきつのといひて。眞砂をさむみなといへる。いひし

りてきこえ侍にや。長井の浦のあけかたの聲も。あしから

す侍れと。今や分れをなといへるわたり。頗おもひたくや

侍らん。右かち侍らんかし。

右歌。宜は侍るを。曉と云題に。初の句にあか月のといへ

るや。少おもふへく侍らん。左今や別れをすかのねのなといへる。聊まさると申へくや。

二十九番

左勝特

左兵衛佐永親朝臣

有明の月はさし出のいそかくれこゑのみさえて鳴千鳥哉

右

藏人式部丞源政仲

さえわたるよさの松原明やらて千鳥なくなり天のはしたて

左勝

左聲のみさえてと侍りては。月はさゆましきやうにや聞

え侍らん。右さえわたるよさも。夜のさゆる心にや。霜と

も風ともなくて。猶ことたらすや侍らん。この番。又お

なしほととの事にや。

三十番

左勝

右近中將房郷朝臣

しかの浦や空に千鳥の聲すみて氷にのこるあり明の月

右勝

右近少將公澄朝臣

あり明の月もいてその濱風に聲すみのほる千とりなく也

兩首ともに。千鳥の聲すみてはきこえ侍れと。すみのほる

なとは。同事のいさゝかかはり侍るへきにや。すなとりの

ふえ。賤かきぬたの聲なとこそ。すみのほるなと申ならは

し侍れ。氷に残る有明の月なとは。まさるにや侍らん。

左右の千鳥。まことに何も聲すみたる舳。さひてはきこえ

侍るを。友さそふみなとの千鳥聲すみて氷にさゆる明か

たの月と云歌のおもかけ。おもひ出られ侍れは。右の勝と

や申へからん。

三十一番

左勝特

二條

(み賊)

やよしはし雲なかくしそ峯の雪晴まをふしのおもかけにせん

右

沙彌祐雅

ふりにけるよゝのむかしもかく山や梢にたかきみねの白ゆき

右かく山たけありて聞え侍れと。遠嶺のこゝろみえ侍ら

ぬにや。左は題の心たしかなるにつきて。勝侍らんかし。

左はれまをふしのおもかけにみんと侍る。心めつらしく

侍めり。右かく山のみねの雪。ふりたる事なるへし。仍以

左爲勝。勝。

三十二番

左勝特

宰相典侍

まかひにし雲のよそめの花さくらおもひそいつるみねの白雪

右

侍從持爲

けさそしるあけほのいそく横雲は雪にわかれしたかね也けり

右のよこ雲。まことに雪の色も心にわけかたく侍り。左の

花櫻のすかた。詞艶に侍れは。可勝にや侍らん。

右歌心あるさまには侍るを。左雲のよそめの花さくら。ま

ことに優なるやうにみえ侍れは。勝に侍るへし。

三十三番

左勝

式部卿親王

ふり積る雪も八重たつ雲まよりさゆるよ河のみねの遠方

右勝

法印堯孝

嶺たかみ雪のひかりも月影もおなし雲まに明ほののそら

みねの遠かたは。遠方の嶺なと申侍るには。いさゝかかは

り侍らんかし。おなし雲まにあけほのゝ空なとは。優に侍

れは。右勝へきにや。

左右ともに。宜は侍るを。左。雪も八重たつ雲まよりさゆ

るよ河のなといへる。詞のよせもさる事ときこえ侍れは。

可爲勝にや。

二十四番

左持

按察使公保

かつらきやたかまの山をけさみれは雲はよそなる峯の白雪

右

權大納言宗繼

雲は今よそにみえても葛城や雪にたかまのみねぞ明行

兩首のかつらき山。雪中の景色。雲外眺望。ことなる勝劣も侍ぬにや。

兩首のたかまの峯の雪。淺深難辨侍にや。

三十五番

左持

右近大將實量

遠方や山たちかくす白雪のたえまに今そみねのはつ雪

右

左衛門督雅親

いく山かふらぬ雪けの雲さえてこし路の嶺に積りそむらん

左歌。心詞難なくきこえ侍り。右歌の終句。いつはかりを

積りそむなといふへきにやと。いさゝか覺束なく侍れと。

心すかたはおかしく侍り。又持とや申へからん。

たえまに今そみねのはつ雪といひ。こしちの峯に積りそ

むらんなど侍る。いつれもあしからす侍れは。左右の新

三十六番

左持

太宰權帥實雅

此ころは天のかく山雪積りたかねのむすきそれとしもなし

右

權中納言資任

風はやみなをかきくらしふる雪にへたてはてたる嶺の松かえ

このあまのかく山。又遠き心のみえ侍らぬは。いかにそ

や。雲ゐにみゆるなとよみならはし侍れは。かならずあま

のかく山とたにいひ出侍りなは。遠望のあるへき事にや。管見の翁。いまた證歌をみ侍らぬにつきて。是非にまどひ侍ぬ。右歌は。傍題を犯し侍り。この番しはらく一決せずもや侍らん。

右かきくらしふる雪に。嶺の松かえのへたてたる跡。さる

事には侍れと。遠望雪とは。とをくふり積たる景氣なり。

猶本意成へきと思給へられ侍れは。左のかちにこそ侍ら

め。

三十七番

左持

沙彌淨空

みねたかみのこれる月も遠かたのひかりにたくふ雪の色かな

右

左近中將爲富朝臣

よそめにはつゝ高根をふりわけて隔つる山そ雪にしらるゝ

左歌。をちかたのひかりも。たとらるゝやうに侍り。右つ

つくだかねの。分かたくや侍らん。又なすらへて可レ爲

レ持。

右。初の五文字。優にしもきこえ侍らす。左ひかりにたく

ふ雪の色。あしからすみえ侍れは。かちにて侍へし。

三十八番

左持

左衛門督持季

ふるほとは雲のいくへもしらねとも晴てそ嶺の雪の遠方

右

右近中將房親朝臣

すむさとの梢の冬にあらはれぬほとは雲ゐにみねの白雪

左歌。終句おもひたきにや侍らん。右歌。冬に雲井にのに

の字。さしあひては聞え侍らすや。又可レ爲レ持。

左右。同ほと事なるへし。

三十九番

左持

權中納言教季

しくれたる夜半もはけしき朝戸出は雪にそむかふ遠方の嶺

右持

右近少將公隆朝臣

かさこしの嶺につれなくみし雲や積れる雪のよそめなるらん

兩首の躰。やうかはりて。おなしほととの事にや。

左。夜半もはけしきなといは。あらしとも風ともありぬ

へくや。右はまさり侍なん。

四十番

左持

權中納言公綱

さたかにはかねてみさりし峯も今あらはれそむる雪の明ほの

右持

左兵衛督有俊朝臣

夕日さす嶺もさたかにみえそめて雪にはれ行遠方のくも

左歌。さたかにはかねてみさりしと侍る。その故おほつか

なく覺侍り。かひかねをさやにもみしかたと侍るも。さや

の中山をへたてたるにこそありけれ。右歌。夕日のかけ。

少さたかにみえ侍るにや。

左右。又勝劣わきかたく侍り。

四十一番

左持

參議政賢

はなならはこえても猶やみよしのゝ里よりをちのみねの白雪

右持

民部權大輔行秀

遠かたやさえしあらしの跡までもつもれはみゆるみねの白雪

みよしのゝ里よりをちのみねの白雪。かのふる里はよしのゝ山しちかけれはの本歌の心には。たかひ侍れと。うた

はさのみこそよみ侍れは。ことなる難と申かたきにや。

右初句の。をちかたと侍るも。題の心にひかされて。一首の所詮とも覺侍らぬにや。歌の姿は左まさり侍らんかし。

此番。又兩首の嶺のしら雪。等同にや。

四十二番

左持

前甲斐守明茂朝臣

なにはとややくる朝けに白雲のいこまかたけは雪降にけり

右持

權右中弁親長朝臣

はれゆけは雪のよそめもあらはれぬたなひく雲のおく深き嶺

右。終句さへて聞え侍にや。左。ふるめかしき躰に侍り。

しはらく持とすへし。

いづれもあしからす侍れと。いこまか嶺は。いさゝかまさ

ると申へくや。

四十三番

左持

散位伊忠朝臣

葛城や雲のよそなる明ほのにまかはぬ嶺の雪の白妙

右持

右近中將實右朝臣

たえてよも雲はまかはし吹かせのあらちの嶺や雪積るらん

左歌。かつらき山の雲めなれ侍り。終句も。いさゝかきき

にくゝや。右歌。三句そよはく聞え侍れと。思ひ入たるところの侍るにや。勝へきにこそ。

左。雲のよそなるなといへるわたり。あしくも侍らねと。

右いさゝか心あるさまなれは勝侍なん。

四十四番

左持

左兵衛佐永親朝臣

けふいくか遠山鳥のをのかねもたえてへたつる峯のしら雪

右

左近中將季春朝臣

いとゝなを雲ゐる嶺の白雪は賁りかさなる山とみえつゝ
有歌。雲ゐる峯の初時雨。思ひ出られ侍り。いかゝ。左歌。雪
などには。山鳥のねをたえぬことも侍にや。おほつかなく
侍り。いかさまにも姿詞。右にはまさり侍らんかし。
雲ゐる峯と云詞。いさゝかきたあるにや。然らば遠山鳥ま
さると申へし。

四十五番

左持

右近中將經秀朝臣

みよしのの峯のしら雪つもらすは春よりさきの花をみましや
右 藏人式部承源政仲

たれすみて軒端の花となかむらんはるけき嶺の雪の梢を
左歌。又遠嶺の心みえ侍らす。上句も古今の歌にいくは
くのかはりめも侍ぬにや。右歌。よそたにしろき雪の梢を。
木の木にて花とあやまたん事。いかゝと覺侍り。又定家卿
歌。たか里の雲のなかにくれぬらんやとかる嶺の花の
この木と侍る。かやうの心にて。をしはかり侍れは。たゝ
花のうたとこそみえ侍れ。

左右。いづれも雪を花にまかへたる心。聞ふり侍ぬるに
や。

四十六番

左持

忍逢戀

式部卿親王

かひなしや逢夜は夢とまきるとも浮世語りのうつゝなりせは
右 右衛門督雅親

猶たとの佛なからわすれしなほほろ月夜のふかきちきりは
左右ともに。源氏物語の心をおもへり。えんにこそ覺侍

れ。左歌。初句。かひもあらしなとやうのこゝろにてや。な
を始終の心には。かなひ侍らん。右も宜は侍れと。左はな
を心ありてきこえ侍るにや。勝とすへし。

左は世かたりに人やつたへんといへる歌の心にかよひ。
右はふかき夜のあはれをしるもといひし行ふをしたへ
り。いづれも光源氏の心をおもへる。ともに優にきこえ侍
れは。持なとにや。

四十七番

左持

二條

しのみそよ新手枕のむつことを涙なからに露ももらすな
右 權中納言資任

そよとたに音になたてそ夜ころへて忍ひにかよふ道のさゝ原
左。涙なからに露ももらすな。よろしくきこえ侍り。右。し
のひにかよふ道のさゝ原。一ふしなきにあらすや。心姿は
おなしからされとも。勝劣はひとしきにや侍らん。
左は露ももらすな。右はをとになたてそなといへる。とも
によろしく侍り。

四十八番

左持

宰相典侍

なかれてのうきなもくるし思ひ川あふせの水の泡と消はや
右 沙彌淨空

世かたりを思ふにそへて我心ゆるさぬ中にあふはあふかは
左歌。なかれてのうきなもくるしといひて。あふせの水の
泡ときえはやと侍る。はしめおはり相叶て。おかしくこそ
聞え侍れ。右の終句も。いかゝとおほえ侍り。無下のまけ
にや侍らむ。

左右ともに宜侍るを。左歌。あふせの水のあはと消はやといへるわたり。おもひ入て聞え侍れは。勝と申へくや。

四十九番

左持

左兵衛督有俊朝臣

あふほとも涙の床のちりならぬ名をはたてしと忍あまりに

右持

右近中将經秀朝臣

ちらすなよ忍か原のさゝ枕のちうきふしの露のみたれを

兩首歌。得失相交。勝負難分。

右。宜侍り。勝へきにこそ。

五十番

左持

右近中将實右朝臣

人とはゝあふせをあたにこたへしと我そ涙の川おさになる

右持

民部權大輔行秀

涙川人めつゝみのたか袖もこよひあふせの波ならしそ

兩首の涙川。滲深わかれかたたく侍れと。川長になると侍る。きゝよくも侍らぬにや。人めつゝみのたかそても。いかゝと覺侍れと。すこしまさり侍らんかし。

左右の結句。心ゆかす侍り。持なとにや。

五十一番

左持

參議政賢

人しれす逢夜の夢の俤に残る契もなをやしのはん

右持

左兵衛佐永親朝臣

うす氷とけてもつらし池水の鳩のかよひちありとしられは

左。常の事に侍れと。難なく侍り。右いさゝか珍きかたも侍るにや。但第。句つらからんなどいはまほしくそ覺侍る。なすらて持と。

左もあしからすは侍るを。右。鳩の通路。猶心あるさまな

左持

散位伊忠朝臣

いかにしてあひみる事をぬるかうちの夢かと計忍はてまし

忍わひぬ命にむかふ我中の夢の契はまたもむすはて

左歌。後拾遺などには。うつゝはかりの夢になさはやとこそ申侍れ。年月心の限りつくし侍りて。たまゝもあひみる事の。夢かとはかりたとらん事こそかひなからめ。いかにしてなとこひねかふ計のことは。古人の本意にもそむき侍るへきにや。右歌。命にむかふは。萬葉の詞にて。定家卿も。たひゝ讀侍しにや。但夢の契は人もむすはてなとは。あふてあはぬ戀とこそみえ侍れ。この題には心もとな

く聞え侍り。又爲し持。

五十三番

左持

權中納言教季

えそいはぬ憂も恨もあひみはと思ひしよはのしのふあまりに

右持

左近中将季春朝臣

相坂の關の清水はあさくともむすひそめつと人にもらすな

右。あふ坂の關の清水。むすひそめつとなと侍る。いとよろしくこそ聞え侍れ。勝とすへし。

左うた心は。さにこそときこえ侍れと。末の句など。今少事たらぬやうに侍にや。右も難なくは侍れと。持なとに

五十三番

左持

權中納言教季

えそいはぬ憂も恨もあひみはと思ひしよはのしのふあまりに

右持

左近中将季春朝臣

相坂の關の清水はあさくともむすひそめつと人にもらすな

右。あふ坂の關の清水。むすひそめつとなと侍る。いとよろしくこそ聞え侍れ。勝とすへし。

左うた心は。さにこそときこえ侍れと。末の句など。今少事たらぬやうに侍にや。右も難なくは侍れと。持なとに

五十四番

左持

とにかくに人めゆるさぬかよひちはこえてもくるし相坂の關

右

權中納言公綱
權右中辨親長朝臣

身をさらぬ心の外は逢事をしらせしと世につゝむくるしと

左。こえてもくるし相坂の關など。難なくきこえ侍り。勝

へきにや。

こえてもくるしといひ。つゝむくるしさと侍る。心はこ

なれと。歌の科おなしほとゝや申へからん。

五十五番

左持

右近少將公澄朝臣

しのふるにあはぬ月日を逢夜半はともにかそへてまつ歎誠

右

藏人式部丞源政仲

今宵さへ物をそおもふ逢事のあるにつけてもおしきうき名に

右。あるにつけてもなとは。たゝ詞にや侍らん。左の中の

五文字。おもひたく侍れと。ともにかそへてまつなけくか

なといへる。優ならざるにあらず。かち侍らんかし。

左歌。心あるさまに侍り。

五十六番

左持

侍從持爲

さもあらぬ俤のみや宇治の里まつらん人に聲はかよへと

右

法印堯孝

いつくにか留りもとらんあやにくにくらふの山のおくる東雲

源氏みさる歌讀は遺恨の事とこそ。俊成卿などは申侍り

しに。この兩首。かの物語の心をとれるにやと。おかしく

聞え侍るにつきて。左はうき舟の君の事にや侍らん。に

ほふ宮のはな心も。今更の名たてかましくや聞え侍らん。

右は又ふち壺の中宮の事にや。光君のうき身をさめぬ世

かたりも。ためしすくなくこそ覺侍れ。いづれも昔の事を

のみ。いひいたされたるはかりにて。我身に引かけたる戀

の心とも聞え侍ねは。しはらく持なとにや申なし侍らん。

左右の歌。これも源氏物語の心をおもへるにとりて。左の

歌のさま。くたゝしく侍れと。今少こゝろあるやうに侍

にや。勝へきにこそ。

五十七番

左持

按察使公保

しられすは又もやこえんと計をたのむしのふの山の下道

右

沙彌神雅

しられしとくたくは心むらさきのねすりの衣きつゝぬるよは

左は上句おかしく。右は下の句宜聞え侍り。又可レ爲レ持に

や。

左は。しのふ山をこゆるはかりにて。逢心いますこしきた

かならぬやうには侍れと。歌の様。優には侍るへし。仍爲

レ勝。

五十八番

左持

太宰權帥實雅

よひ／＼に人の心のしるへする我かよひちはせきもりもなし

右持

左近中將爲富朝臣

たつか弓つよき心もなひく夜はきの關守のひまたゆめつゝ

左歌。伊勢物語には。うちもねなゝんとこそ申侍れ。關守

のなからむにをきては。さはり所なく出やすく聞え侍と。

題の心には。いたくかなひ侍らぬにや。右の。たつかり。ふ
るき歌にも。ゆるす時なくなと申侍れは。もと末たかひて。
聞え侍らねと。終句なと不三庶幾にや侍らん。あまり秀句
にもまとはれ侍れと。左の歌。おほつかなきに付て。勝と
申へきにや。

左右の關守。おなしほととの事にや。

五十九番

左侍

右近大將實量

むすひそふる露も漏すなかけしつる枕はかりはよしやしる共

右

左衛門督持季

いかにせん涙もらさぬうき中につむむかひなき袖のうつりか

左右の歌。おなしほととの事にや。可レ爲レ持ッ

左むすひそふる露と侍るこそ。なにむすひそへたると

も聞え侍らね。右も心はさにこそと推はかられ侍れと。猶

たしかならぬやうにや。よりて持とすへし。

六十番

左侍

權大納言宗繼

されかつらくるしきものを人しれす相坂こゆる夜半の關ちは

右侍

前甲斐守明茂朝臣

相坂の關はへたてぬこひちにも人めもこそくるしかりけれ

ともに相坂の關をよまれ侍るにつきて。右は。とむこぼる

ところなくきこえ侍り。かち侍らむかし。

この番の相坂の關も。勝劣不分明にや。

六十一番

左

沙彌祐雅

和歌の浦の松に六十の老の波かけてそなれぬ道をしそおもふ

右侍

法印堯孝

七そちや千たひもこえん白川の波よりたかき松のよはひは

左は和歌のうらの松に六十の算をかそへ。右は白川の波

に七十のよはひをかけたたり。歌の勝劣は暫をく。かれは身

つからの途懷に侍り。これは君をいはへるにやと覺侍る

につきて。浪よりたかきなと侍る。承保のむかしにもたち

こえたるゆへも侍にや。よくもかそへられ侍るものかな

とおほへ侍れは。左右なく。勝の字をつけはへりぬ。

右。白川の波に。猶たちこえん松のよはひには。左歌のよ

しあしまても。をよはすや侍らむ。

六十二番

左侍

式部卿親王

君か代のゆく末とをくおもふには猶も二葉かすみよしの松

右侍

權中納言公綱

神世よりありとしきけはいくとせか今はつもりの浦の松かえ

左。猶も二葉かなと。いひおほせぬにや侍らん。右もめつ

らしからす侍れと。ことはり聞え侍るにや。いさゝか勝へ

きにや。

左。君か代のゆく末とをきをおもふあまりの心。めつらか

に侍るに。右又させる事は侍らねと。難なくきこえ侍れ

は。持なとにや。

六十三番

左侍

宰相典侍

君ならてたれかかそへん松のはのみとりの洞につもる千年も

右

太宰權帥實雅

かけたかみ峯に枝さす谷の松へにけん年そかきりしられぬ

峯に枝さす谷の松。あまりにこたかく聞え侍るにや。松の葉のみとりの洞。いひしりてよろしく侍り。以レ左可レ爲

勝。

有歌。いひしりては侍るを。左。松のはのみとりのほらの千年は。君ならてけにたれかはかそへつくすへきならねは。尤以レ左爲レ勝。

六十四番

左持

按察使公保

かけたかきはこやの山の松かえに幾世の霜をむすひかさねん

右

右衛門督雅親

なれてみよはこやの山の松のかけ君か千年も花も十かへり左右ともに。藐姑射の松なり。兩株の陰。いつれをたかしたも申かたく侍るにや。

左右の。はこやの山の松のかけ。いつれもすてかたく侍り。持たるへきにこそ。

六十五番

左持

右近大將實量

ふりにけりいく世の霜の色そとも神やしるらん住吉の松

右

權中納言資任

むかしたにふりぬといひし松かけにさていくとせか住吉の神すみよしの松。ともに神威をかれるにや。しはらく可レ爲

レ持。

ふりにける住吉の松。いくよのといひ。いくとせかといへる。ともによろしく侍り。

六十六番

左持

權大納言宗繼

おひそめし昔や遠き松かけにいはほの苔そみとりかきなる

右勝

沙彌淨空

我よはひふりさけみれはみかさ山松もいくよの陰そこたかきこの三笠山。永承の例にまかせて。左右なく勝の字をつけ侍るにやと思給れと。歌合に神威をいのる事は。貞永に沙汰ありし事也とおほえ侍れと。たゝ歌のおもてにまかせて。持と定侍りぬ。

左。松の昔をこけの色にみ侍る心。おかしく聞え侍るを。右も。かのみかさの山にいてし月かもといへる歌をおもひて。わかよはひふりさけみれはなと。宜聞え侍れは。勝と申へし。

六十七番

左勝持

左近中將爲富朝臣

ちきりきなみとりの洞に風かよふ松は雲井のよろつよのころふりにけりさゝれ石より契てしいはねの松も苔のむすまで

右

左近中將季春朝臣

兩首又無三勝劣二にや。

有歌。いひしりてあしくも侍らねと。みとりのほらのかせ。雲井の松の聲なとには。立ならふへくも侍ねは。左の勝にこそ侍らめ。

六十八番

左勝

權中納言敦季

十かへりの花かあらぬか住吉のうらはの松にかゝるしらなみ

右勝

左兵衛督有俊朝臣

うこきなき岩にねさして玉松のおひはしめけん世々そ久しき左右兩首。麥詞。とりくにおかしく侍れと。十かへりの

花かあらぬかなと。一しほありて聞え侍れは。まさるにや侍らん

左右。いづれも宜侍るを。右いさゝか心あるさまにきこえ侍るにや。

六十九番

左持

参議政賢

たねまきしその世なからの友なれや苦むす岩も高砂の松

右

右近中将經秀朝臣

心あらは神代のむかしとひてまし年をふりぬるすみよしの松
このあひ生の松。年の久近さためかく。又歌の高下も。
分かく侍るにや。

右歌は。ふりにける松ものいはゝとひてましむかしもかくや住吉の月といへる歌に。心もいくほとかはらす侍るにや。左歌。難なくは侍へし。よりてかちとす。

七十番

左持

左衛門督持季

かきりなく年をつもりの浦の松おひそめし世も神やしるらん

右

散位伊忠朝臣

へにけるははや十かへりの霜の松花さく後の萬代のいろ
左歌。年もつもりのとこそ。申ならはし侍れ。をの字いかか。右の初句も。きゝにくゝや侍らん。

左歌。年もつもりのとあるへくや。右も初の五字きゝよからす侍れは。なすらへて持たるへし。

七十一番

左持

前甲斐守明茂朝臣

君守る神路の山の松のかけあふく心も千世はへぬへし

右持

右近少将公澄朝臣

はこや山千年の坂を松も今君とともにやこえんとすらん

右。はこやま不三庶幾にや。左も。勝へきにたらずや。
左あふく心も千世はへぬへしといへるや。ふと心得かく侍らん。右は。まさり侍りなん。

七十二番

左持

左兵衛佐永親朝臣

あふきみる蔭もさかく松かえのみとりの洞に幾千代かへん

右

民部權大輔行秀

君か世はちよともなにかさゝれ石のなれる岩ねの松に契りて
左。松かえのみとりの洞。言葉のつゝきいさゝかおほつかなく侍り。右さゝれ石のなれる岩ねも。きゝよからすや。
又勝劣論するにいとまあらす。

右。千代ともなにかさゝれ石のといへるわたり。つゝきても聞えずや侍らん。左も。きゝふふりにたる事なれと。勝たるへくや。

七十三番

左持

權右中弁親長朝臣

をしほ山ふりぬる松はいかはかり神世にちかき木末なるらん
右。松かえの千世をや君に手向草さらに霜をく色も葉かへす
左。神代にちかき梢。心にわけかたく侍り。右。君にたむけ草も。このましからぬにや。たむけの麻など。旅のうたによむ心地そし侍るにや。

いづれもあしからす侍り。

七十四番

左將

右

まれのさくはこやの山の花の色も君にや契る十かへりの松

右近中將實右朝臣
藏人式部丞源政仲

としをへて君そきくへき榮行みとりの洞の松かせのこゑ
はこやの山の松花の色。みとりのほらの松の聲。またいつ
れと申かたくや侍らん。

はこやの山の松の花。みとりの洞の松の聲。何れもおなし
ほととや申へからむ。

七十五番

左將

二條

年つもる我たくひにもふりにけり碧のほらの松の老木は

右

侍從持爲

幾世へてさゝれはいはほ二葉より根をさす松のおひ登るらん

右歌。さゝれはいはほ二葉より根をさす松のなと。心姿
一ふし有て。おかしくはきこえ侍れと。左の我たくひに
もふりにけりみとりの洞の松の老木はなと侍る。上古の
風すなほなる姿とも。かやうのたくひをや申侍らん。芹原
の木の世といひながら。此道はまた残りけりと。感情極な
くして勝の由を申侍るなり。

抑歌合は寛平の古。ひたり右のつかひをむすはれて。天
曆のおほんとき。かちまけの詞をしるしをかれて後。あし
原の代々にかはらぬもてあそひ物として。敷嶋の家々に
絶さる事わざとなりになりといへとも。猶かの歌を判す
る事は。このさかひにたちいりて。ことの心にくらから
す。我もうたかはす人にもゆるされたるものからの。難
波江のよしあしをわかち。山の井のふかきあさきをくみ

はかるになん有ける。然に今北の藤浪の流をうけたりと
いへとも。家に傳る風にしもあらず。中葉の林のかけに
遊ぶといへとも。詞にさかすへき花もしらす。況此三とせ
はかりかほとは。よろつの政あつかり申といふはかりに。
紫の袖雲井の月をむかふるゆふへ。玉のをひものみきり
の露をしのくあしたは。身を稷契のあひたにやとし。君を
堯舜の卜にいたさむ事をのみ思つれば。纔に五日のいと
まをうといへとも。おさ／＼のなさけもわすれはて
にき。かゝりければ柿本のかせいよ／＼心にさかり。山の
への霞遙に望をへたてたる事をも。しろしめしなから。
おほん歌合の判つかふまつるへきおほせことをうけたま
はるにつけて。これを堅のかれ申せは。そのおそれまこ
とにふかし。なましゐにしろしつけ侍れは。この道かへり
て浅くおほえ侍り。かた／＼すゝみしりそくにきはまり。
いよ／＼よしあしもまとはれぬへく侍れと。白川のなか
れ千年すむへく。みとりの洞のかせ萬代ふへき道のさか
ひをよるこひ侍れは。面をかきにするはちをわすれ。時に
當れる勅を背さるはかりに。後の日の嘲をしらさるもの
ならし。

よしあしをわくる計りの言の葉も

世々の跡にはえこそおよはね

みとりのほらの松の老木。まことにいくとせつもるへき
かきりも侍らねは尤以て左爲勝。

宰相典侍

勝四 持一

式部卿親王

勝一 持一 負三

右近大將實量

勝一 持四

太宰權帥實雅

勝一 持一 負三

沙彌淨空

勝四 持一 負二

權中納言資任

勝一 持四 負二

權中納言公綱

勝二 持二 負一

右衛門督雅親

勝一 持二 負二

前甲斐守明茂

勝一 持三 負一

散位伊忠

勝四 持一 負二

左近中將爲富

勝一 持四 負一

二條

勝二 持三

按察使公保

勝二 持五

權大納言宗繼

勝一 持三 負一

沙彌祐雅

勝一 持四 負五

左衛門督持季

勝一 持四 負一

權中納言教季

勝一 持三 負二

侍從持爲

勝一 持二 負二

參議政賢

勝一 持三 負一

左兵衛督有俊

勝二 持一 負二

權右中弁親長

勝一 持二 負一

左兵衛佐永親

勝三 持一 負一

右近中將經秀

勝四 持一 負一

左近中將季春

勝二 持一 負一

右近少將公澄

勝二 持一 負一

民部權大輔行秀

勝一 持三 負一

右近中將房卿

勝一 持三 負一

右近中將實右

勝二 持三 負一

法印堯孝

勝二 持一 負一

藏人式部承源政仲

勝四 持四 負一

右應永寶德歌合共依不得類本不能按合

群書類從卷第二百八

和歌部六十三歌合廿九

百番歌合 寶德三年八月十一日

題

雨中萩 秋夕情
暮秋虫 忍淚戀
旅宿夢 名所鶴

作者

左

式部卿宮
前大僧正 齋
前大僧正 義
右大臣
權大納言
權大納言
太宰權帥實雅
沙彌祐雅
權中納言資任
右衛門督雅親
雅康

判者

松月幽 鹽屋月
契待戀 恨絶戀

右

關白
前内大臣公
内大臣
沙彌淨空
權中納言持爲
權中納言勝光
爲富朝臣
法印僧運
大僧都義觀
法印堯孝

沙彌祐雅

一番 雨中萩

左

風たゆむほとさへさひし秋の雨にしほれてたて庭の萩原

右

庭たつみとりすみて雨はらふかけをもうつせ萩のうは風

左歌。秋雨にしほれてたてる。おかしく見えたり。右の歌も心なきには侍らねと。雨はらふ。耳にたちてきこゆ。左

いさゝかまさると申へくや。

二番

左

秋風の音きくよりも萩のはの見るめさひしきゆふくれの雨

右

雨にのみなひくと見れば秋かせの吹にしまゝのつゆの下萩

左右ともに心あるさまに見え侍るを。右吹にしまゝのなといへる。よろしきにたり。可レ爲レ勝。

三番

左

雨そよく音をはをとゝ萩のはの露ふきあまる庭の秋風

右大臣

右

法印僧運

夕されは庭のをき原降雨に風もふきあへず露そみたるゝ
左歌。をとをはとゝいへるわたり。あしからずきこえ侍
る。露ふきあまる。いかにそや侍る。右させる難も侍らね
は勝にこそ。

四番

左

前大僧正壽

右

内大臣

風にふし雨にしほるゝ萩のはの露はいかなるひまにをくらむ
かせの音もさなから露にうつもれて雨にそなひく庭の萩原
左。露はいかなるひまにをくらむとかいへる。よろしきや
うにきこえ侍り。右歌も難なくははれとも。なをひたり
にはまけて侍りなむ。

五番

左

權大納言

右

關白

きゝわひぬははけの風は吹すてゝむら雨さやく庭の萩原
風の音のむら雨そよく萩のはもまきれぬ物を秋のおもひは
左右のむら雨さやくといひ。そよくとはへる。ともにおか
しく。この萩のかせ勝劣わかれず侍れは持と申へくや。

六番

左

沙彌祐雅

右

前内大臣

露と散零とおちて萩のはにむらさめかゝる秋風そふく
吹すさむ風はなかはのやとりにて雨にしほるゝ庭の萩はら
右歌。露零雨とりあつめたるやうにはへり右させる難も

七番

なければ勝へきにこそ。

左

太宰權帥實雅

なひきても末こす風の音はなしむら雨おもき露の下萩
今そしるうれはの雨の夕ま暮風のみならぬ萩のつらさを
左。すゑこそかせのといひ。むらさめおもきなと侍る。優
や。右も難ははへらねとも。左にはおよひかたく

八番

左

前大僧正壽

右

法印堯孝

この夕へ萩のは風のふくなへに雨もふりつゝそよくなるかな
露をこそはらふはかりの萩のはに風も吹あへぬ雨の音かな
左。雨も降いてゝといひ。右かせも吹あへぬなど。あしか
らすはへり。左右の萩のかせ。ともにきゝすてかたく侍れ
は。おなしほととや申へからむ。

九番

左

權中納言資任

右

爲富朝臣

むら雨に露はなかゝたまらねとみたれそまさる庭の萩原
東屋の軒の下萩なひく也雨そゝきする露をやとして
左歌。露はなかゝたまらねとといへる。中々の詞そ。い
ひおほせてもきこえぬやうにはへる。右も第四句いさゝ
か耳にたちてきこゆ。頭の字もさたにをよひ侍らぬこと
もあるやうに侍れは不_レ及_レ申。なすらへて持なとにや。

十番

左

雅康

露とをく軒はの萩のむら雨やはらひもあへぬ風にあらそふ
大僧都義親

右

むら雨の音をそよと吹なして露にそなひく萩のうは風
左右ともにことなる難も見え侍られは。またもちにては
へりなむ。

十一番 秋夕情

左

前大僧正義

うきをしる心の外はかこつへきかたこそなけれ秋の夕暮
沙彌淨空

右

立歸り心にとへは身にあまるおもひもむなし秋のゆふへも
左歌。こゝろのほかにかこつへきかたもなし。右は心にと
へは身にあまるおもひをのへ侍る。妖艶にしておかしく
きこえ侍り。さのみ持に侍らんもいかゝとおほえ侍れと。
なをいつれをまさると申かたかや。

十二番

左

權大納言

なへて世に秋をしもうき時そとはゆふ暮にもやおもひ初けむ
右

右

權中納言持爲

身は老ぬ何にやとさむ心をもしはしやすめよ秋のゆふくれ
左の歌の下句。ゆふくれにもやおもひそめけむといへる。

誠におもひ入たるやうにきこえ侍り。右の上の句そふと
心えかたおほえ侍る。左の勝と申へくや。

十三番

左

雅康

秋風にたゞよふくもは空に消てゆふへさひしき袖の露けさ
右

右

爲朝臣

岩木こそ露はをきけれ心なき袖をしほらぬ秋の夕へも
左歌。ことなる難もきこえず。右心なき袖をもしほる秋の
夕へとこそあらまほしく侍るに。題の心も無念なるやう
にやきこえ侍るへき。これも左の勝にこそ。

十四番

左

權中納言資任

わきてなを夕へは秋としらぬ身もこゝろつきぬる入相のかね
右

右

法印僧運

むかしよりうきをならひとおもはすは猶いかならん秋の夕暮
左。心つきぬる入相さもときこえ侍るを。右うきをならひ
とおもはすはなといへる。歌のさま少しまさとや申へ
からむ。

十五番

左

沙彌祐雅

身をくたく恨はたれを主ならむ心つからのあきのゆふくれ
右

右

内大臣

うき物とおもひしるにもなかわるや心つからのあきの夕くれ
左右の心つからの秋の夕暮。いづれもおなしことなるに。

右はなを上句いひしりて侍れば勝へきにや。

十六番

左

式部卿宮

かはらしなたか夕暮もうしとおもふ心ひとつの秋のあはれは
右

右

副白

いかにせむおもふも物をおもふとて詠むればまた秋の夕暮

左歌。あしからすきこえ侍を。右おもふも物を思ふなど。
おかしく侍れは勝にこそ。

十七番

左

太宰權帥實雅
夕されは色のちくさに移り行おもひや秋の露とをく覽

右

法印堯孝
なかもつゝ春のものとてあくかれし空にかきらぬ秋の夕暮

左。色のちくさになとおかしく侍るを。右春の物とてな
めくらしつといへる歌をおもへるさま。よろしく見え侍
り。持とすへくや。

十八番

左

前大僧正 齋
しゐてたゞ忘れむとおもふ夕暮に秋といふものや浮を告らむ

右

前内大臣
なをさりにおもひなれにし哀さも老そまことの秋の夕暮

左歌。秋といふものやなとあしからすきこゆ。右また老そ
まことの秋のゆふくれも。身にしられ捨かたく侍れは持
にてはへりなむ。

十九番

左

右衛門督雅親
うきゆへもたれととはまし草のはら露ふく風も秋の夕暮

右

大僧都義親
それとなきくさ木の色も詠わひぬ我身ひとつを秋のゆふ暮

左右兩首。ひたりは袂衣といふ物語に。草の原さへ霜かれ
てたれにとはましといへる歌をおもひ。右は大江千さと
か。我身ひとつの秋にはあらねととよめる歌をとりませ

はへる。ともによろしきにたり。可_レ爲_レ勝。

二十番

左

右大臣
山ふかみ世をいとひても淋しさの秋はのかれし夕くれの空

右

權中納言勝光
いつはりもなき夕暮のうさなれは今更我を何かうらみん

左歌。心詞いひしりてよろしくは侍るを。かのいつくもお
なし秋の夕暮といひ。この里のみのゆふへとおもはゝと
いへるうたの心にやかよひ侍らむ。右も偽もなきゆふく
れはさることに侍れと。うさなれはといひ何かうらみむ
なと侍るわたり。よはくきこえ侍れはなすらへて持なと
にや。

二十一番

左

松月幽
をく山のははけにもる月やよそなる星の數にみゆらん

右

關白
すむ人は出てやよそにみ山への松のははけの月そすくなき

左右のまつの葉はけの月。いつれもかすかに見え侍るを。
右なを心あるさまなれはもつとも勝侍るへし。

二十二番

左

雅康
晴やらぬ心つくしの月なれやさたかにもなきまつの木の間

右

前内大臣
吹わくるあらしを松の木の間よりもれても月の影をすくなき
松の木の間。左右いつれもあしからす侍る。左は本歌の心
いたくかはらすや侍らん。右あらしを松のといへるわた

り。今少しまさと申へくや。

二十三番

左

權大納言

ふり出て木の問まれなる松かえにもるとしもなき月の影かな

右

内大臣

風わたるは山の松のほのくとなひくは月のいつるほとかも

左歌おかしく見え侍り。右もうたのさま優ならざるにはあらねと。なひくは月の出るほとかもといへる。欲出月なとの心にも成ぬへきなりと覺侍る。題のこゝろたしかなるにつきて左の勝と申へし。

二十四番

左

前大僧正義

住人のこゝろもさそな月のもる木の問すくなきまつの下庵

右

權中納言持爲

ひと本の松さへ月にさはる夜の旅寢はいかにたかさこの山
右歌。おもひやる高砂の旅ねはさることながら。松の月にさはるはかりにて。題のこゝろいかゝときこえ侍る。幽の字心を侍るへきかとおほえ侍るに付て。左の木の問すなき。見る心ちし侍れば勝と可レ申。

二十五番

左

右衛門督雅親

絶々にすむとはかりの松の戸はさこそ木の間の月もとひけれ

右

沙彌淨空

待こひてみつといふへき光かははま松かえの木の問もる月
左歌。すむとはかりの心。松の戸あしからす侍るを。さこそといひ。とひけれと侍る。いかにそやきこえ侍る。右見

つといふへきひかりかはといひ。はま松かえの木の問もる月といへる。優にきこゆ。尤勝侍るへし。

二十六番

左

右大臣

夜半の月はのほるかけは木の本になかく見ゆる峯の松原

右

法印堯孝

くれにけり松ほのかなる岡野へに風さへほそく月そいさよふ
左。よろしくきこえ侍り。右もあしからず。さるにとりてかせさへほそくといへる。源氏もの語に風ほそく吹てなと見し心ちし侍れと。これならずともとおほえ侍れば左勝にこそ。

二十七番

左

式部卿宮

紅葉せぬ松にやならふ木のまゐる月のかつらはてる年もなし

右

大僧都義觀

松風ももらぬ木の問はみすもあらずみもせぬ月の影をほのめく
左右ともにことなる難もきこえ侍らす。持と申へし。

二十八番

左

權中納言資任

松高きははけの月はかすかにて木の問さためぬ秋風そ吹

右

權中納言勝光

もるとしもなきまで月にさはるなり軒はの松やは山しけ山
左右いつれも題の心はたしかにきこえ侍り。さしたることも侍らねは同じしほとのことによ。これも持にて侍りなむ。

二十九番

左

前大僧正齋

月はたゞ秋のよなから照もせずくもりもはてぬみねの松原

右

爲富朝臣

更ぬらむ立いてゝみむもるかけもうす月夜なる松の下庵

右のうす月よ不被_レ三_レ庶幾_一。左てりもせずくもりもはてぬ

春の夜といへるうたをおもへる心。おかしく侍れは勝と申へし。

三十番

左

太宰權帥實雅

紅葉せぬ松の木のまをもりかねて月さへ秋の色そすくなき

右

法印僧運

かけふかみ軒はの松をもりかねる月に物をもふ秋の山さ

左。月さへ秋の色そすくなきといふ。右月に物おもふ秋の

山さとなといへる。ともに優美にして勝劣わきまへかたし。可_レ爲_レ持。

三十一番

鹽屋月

左

式部卿宮

秋もなをけふりにかすむおもかけの月には春やちかの鹽かま

右

内大臣

月も今くみてしるらしやくとしも見えぬしほやのあまの心を

左歌。月には春やちかのしほかまといへる優に侍るを右

も月もいまくみてしるらしなとすてかたく侍れは。また持にて侍りなむ。

三十二番

左

沙彌祐雅

心あれやくむとは見えし夕しほのけふりなひかぬ軒の月影

右

法印堯孝

煙たになをうとまれぬ夜はの月にもしほくむなり秋の浦人

左右のけふり。右はたちまさりて見え侍り。

三十三番

左

右衛門督雅親

更にけりなしたのしほ焼やきすてゝ芦屋ののきに月をみるまで

右

關白

須磨の蜚しほくむ袖にやとる月はてはけふりのくもる成けり

左。なたのしほ焼やきすてゝ月をおもふ心。右しほくむ袖

の月にけふりをいとひ侍るも。とりく_レにきこえ侍り。な

をさやかなるにつきて左まさるとや申へからん。

三十四番

左

前大僧正齋

けふりさへ空にみちぬる鹽かまの浦のとま屋の月そくもれる

右

權中納言持爲

月そとふ鹽やくけふり亂れてもすらぬしのふの蜚のたもとを

左。そらにみちぬるしほかまの浦の月。右すらぬしのふの

蜚のたもと。ともにおかしくきこえ侍れはもちたるへし。

三十五番

左

右大臣

かけをくむあたら夜しほの月をさへ煙にうつむさとのあま

右

爲富朝臣

月やつすみるめはつらきけふり共しらてしほ木をはこふ蜚哉

左歌。あたら夜しほ。庶幾せられす侍るに。右また月やつ

す耳にたちてきこえ侍れは、持にこそ侍らぬ。

三十六番

左

權大納言

たきすきむもしほの煙たちきえて月も軒はにすまの浦人

右

前内大臣

いつかさてきやけきよはの月はみむ煙をたぬなたの鹽やき

左。させることはなけれと歌のすかた優にきこゆ。右けふ

りをたぬなたのしほ屋も。あしからす侍れは。持たるへ

き歟。

三十七番

左

雅康

もしほやく煙の色やかはるらんかけさやかなる月をへたてゝ

右

法印僧運

心なき名にのみたちて蜚人のしほやく煙月に絶ぬる

左。けふりの色かはり侍らむいかにそやきこゆ。右させ

ることも侍らねは。また同じほとのこととや申へからむ。

三十八番

左

太宰權帥實雅

もしほ焼けふりは空にたち消てとまもる月に浦風そ吹

右

大僧都義觀

もしほやく煙をすまの浦人やみるめも月にまとを成らん

左。とまもる月にうらかせそふく。右みるめも月になとい

へる。ともに難なくきこゆ。持にて侍るへし。

三十九番

左

前大僧正義

月にうき煙をまたやこりすまの蜚のしはさももしほ焼寛

右

權中納言勝光

あやなしなたの鹽やきたてそふる烟にやつす軒の月かけ

左。煙をまたやこりすまの蜚のしはさも。いひしりておか

しくきこゆ。右けふりにやつす軒の月も。見所なきには侍

らねとも。左なをまさるとや申へからん。

四十番

左

權中納言資任

もしほ焼いせをのあまの蓬屋かた軒もる月のかけもやつるゝ

右

沙彌淨空

煙たて月をはめてぬ蜚人もやくやもしほのからく老ぬる

左歌。いせをのあまのとまやかたなとあしからす聞ゆ。

右はしめの五もしのけふりこそ。いさゝか耳に立てきこ

え侍れ。左の勝にや。

四十一番

暮秋虫

左

權大納言

絶々にむしの音よはきゆふ日影さひしくくるゝ秋の色哉

右

沙彌淨空

ふりすてゝ秋もわかれとなるみ野になきやはとめぬ鈴虫の聲

左。むしのねよはき夕日影なといへる。いとさひしくきこ

ゆ。右も優ならさるには侍らねと。なを虫の音よはき日

影。餘情もあはれにきこえてまさと申へし。

四十二番

左

太宰權帥實雅

秋寒み夕霜まよふ草のはらかるれはかるゝむしのこゑかな

右

關白

行秋のたむけの錦をるはたをのめせにいそくむしのこゑかな

左。かるれはかるゝなとあしからすきこえ侍るを。たむけ

のにしきおかしくきこゆ。勝と申へし。

四十三番

左

うらむなり尾はな波こす野分して秋さへすゑの松虫の聲

右

右衛門督雅親
法印堯孝

聞もうき老のねさめのむしのかゝ残りすくなし秋の霜よに

左歌。尾はな波こすといひ。秋さへすゑの松むし。心たくみ
なるやうに侍り。右もあはれるなるやうにはきこえ侍れと。

老のねさめのむしのかゝまかけてもはへれかし。

四十四番

左

前大僧正義

きり／＼す老のまぐらの露になけ秋よりのちも猶も残らむ

右

内大臣

行秋の霜のあさちとむしの音といつれか先にかれむとすらむ

左歌。老のまぐらの露に秋より後もなをそのこらむなど。

心ふかくいひしりて。老のなみたもおさへかたく侍り。右

もかの扇と秋の白露とと侍る歌をおもひてよめる歟。あ

しからすはきこえ侍るを。ゆく秋のしもよりも。左露ひか

りそふ心ちしはへれはかちにこそ。

四十五番

左

右大臣

長月の月は秋なき霜にたに露を残してむしのなくらむ

右

權中納言持爲

秋はいぬ音をなくむしのふるさととあらしなはてそ野風山風

左。いひをほせてもきこえずや。右はしめのもし不三庶幾一

やうに侍り。持と申へくや。

四十六番

左

暮て行秋のともしひ影更てかへなる虫のかゝもすさまじ

右

沙彌祐雅
大僧都義觀

きり／＼す秋のすゑはの淺ちふにあらそひかれて聲そかれ行

秋のすゑはのあさちふにあらそひかれてなといへるよろ

し。かちたるへし。

四十七番

左

式部卿宮

野邊ははや露霜ふりて行秋の名残りをいかゞ鈴虫のかゝ

右

爲富朝臣

草にさく頃よりなれて行秋の霜のはなにもむしそなく成

左。なこりをいかゞすゝむしといひ。右霜のはなにもなと

いへる。難なければ持たと申へくや。

四十八番

左

權中納言資任

秋ふかきまかきの草もうらかれて虫の音よはき庭のあさちふ

右

前内大臣

行秋のわかれを慕ふきり／＼すをのこなく音や先よはるらん

右。させることもきこえず。左下の句優にはへれは勝に

こそ。

四十九番

左

雅康

かれにけり秋はいなはの山風もかよふふものと松むしのかゝ

右

權中納言勝光

暮行とめには見えねとなく虫のよはるに秋そおとろかれぬる

左。秋はいなはといひ。かよふふものとまつむし。よろしき

ににたり。右さしたることも侍られは左のかちたるへし。

五十番

左

前大僧正實

秋の行野はらの草の露霜に残れるむしのこゑもかれめや

右

法印僧運

秋もはやすゑ野の草の霜の下にのこるもかるゝむしのこゑ哉

左歌。花こそちらめといへる歌の心をおもへる。おかしく

きこえはへり。右のこるもかるゝなとよろしくは侍れと。

五十一番

忍涙戀

左

太宰權帥實雅

あやにくに人めはかりておちやせむ我身はなれぬ涙なれとも

右

權中納言持爲

人めにはせきやる水も心してほにあらはるゝ袖のみなとに

左。ひとめはからてと侍るぞ。いかにそやきこえ侍る。右

心はめつらしくとりなし侍れとも。人まにはとをける歌

の跡。優にしもきこえ侍られはもちなとと申へくや。

五十二番

左

沙彌祐雅

涙川いつを瀬にとかせきとめむ袖にとちむるうき名ならすは

右

法印僧運

つゝむをも人にみえしとひとかたにをさへもはてぬわか泪哉

右。ひとに見えしといひおさへもはてぬなと。おかしく

見え侍り。かちにこそ。

五十三番

左

權中納言責任

右

法印堯孝

涙こそ袖をたよりにつゝむともうきなを何と忍ひはつへき

色にさへくたくる露を人とはゝはきかる秋のそてとこたへん

左歌。させることもなし。つねに此跡侍るやうにきこゆ。

五十四番

左

式部卿宮

しられしな袖より外の水上もすゑもなみたのたきつ心は

右

前内大臣

何そともとはれぬ先にはらはなむ袖のなみたの露の白玉

左右の袖のなみた。右は何そとひとのひし時といへる

歌をおもへる心。よろしきやうに侍るを。左にまさるとま

ては申かたければ持と申へくや。

五十五番

左

右衛門督雅親

きゝはては夜の涙にくちぬとも人になつけそつけのをまくら

右

爲富朝臣

袖のうちは淵となるともたへてみんあらはに流す涙ならすは

左歌。はしめの五もし。ふと心えてもきこえ侍らず。右も

心ことはいひしりても侍るを。たへてみんといへるや。い

かにそきこえ侍れは持たるへし。

五十六番

左

前大僧正實

洩してやあらぬ泪にまかへましせく袖をこそあやしともみめ

右

白

我袖に清見か波のせきすへてくるしや人のもらぬ日もなし

左右ともによろしくは侍るを。あらぬなみたと侍るや。いかなる泪にかとおほつかなくきこえ侍り。右。清見かなみたちまされるかたも侍りなむ。

五十七番

左

雅 康

せきあへぬ泪の露をもらさしとしのふ袂のくちやはてなん

右

内大臣

いささらは露とこたへてやとしみむ月にとはるゝ袖の白玉

左右いつれもさせることもなく。さしたる難も見えず。持たるへき歟。

五十八番

左

権大納言

せくかたにむせふ泪の川瀬とやまれぬ先より聞え

右

権中納言勝光

心からおつる泪やつゝめなをあまるたもとは身にせはくとも

左。もれぬさきよりなといへる。よろしきになりに。右も

下句のわたりあしからぬさまなるをなを。左のなみたの

川。ふかくきこえ侍れば勝と申へし。

五十九番

左

前大僧正蔵

とにかくに袖行水をもらさしと人めつゝみのひまもなきかな

右

沙彌淨空

流れ出ん人のうき名を思ふにもせくはわかみのなみた也けり

左。ひとめつゝみ。あしからすきこゆ。右も人の名をおも

ひて我なみたをせく心今少しまさと申へし。右の勝にこそ。

六十番

左

右大臣

もらさしな我袖のみの下そめを人は木すゑのしくれ成とも

右

大僧都義観

袖に行泪の川のみこもりやせきあへぬ時のわかみなるらん

左。我袖のみといひ人は木すゑのなと侍る。あしからすき

こゆ。右の歌も難なくは侍れとも。左にはまけても侍り

なむ。

六十一番

左

雅 康

契待戀

ちきりをきし人の心のいかなれは待夜むなしき色をみすらん

右

〔關 白〕

今こんと夕への色もさたまらすひとのこゝろのそらのうき雲

左歌の下句。待そら戀とやきゝなされ侍るへき。右させる

ことは侍らねと。左にはまさと申へくや。

六十二番

左

前大僧正蔵

たゝにこそまつへかりけれ更る夜の契となれは猶そくるしき

右

権中納言勝光

今こんとたのめぬほと折々もまたてやはありし夕暮の空

左右ことなることも侍らす。またてやはありしよりも待

へかりければ。まさとや申へからむ。

六十三番

左

権中納言資任

人しれす契りしことをたのむ身はたゝ大かたにまつ夕へかは

右

権中納言持爲

かたしきてくちぬ契をたのむ夜も心のうらはとふのすかこも

左歌。下句心あるさまに侍り。右も心のうらはとふのすか

こもといへるもよろしく侍るを。左なをまさると申へくや。

六十四番

左

前大僧正義

たのめぬをもしやと侍し夜はたにも更行空はおもひわひてき

右

大僧都義親

言のはにかけて待まもあたりやたのめし露の契りひとつを

左歌。心こまかにきこえ侍り。右もさせる難なければ持なとにや。

六十五番

左

沙彌祐雅

こむといひまたんといひし言のはを一方ならす頼まさらめや

右

爲富朝臣

操返しちきりをく夜もいたつらに更なはいかに賤のをたまき

有。しつのをたまき。めつらしきふしは侍らねと。左にはまさりはへりなむ。

六十六番

左

太宰權帥實雅

とはつはと待よひ過るかねことを思ひかへせはぬる。□かな

右

沙彌淨空

頼めつゝこぬよのかすはあまたあれと心にたゆむ夕暮々なき

左歌。をもひかへせはといへる。おかしくきこえ侍り。右もこゝろにたゆむ夕暮々なき。あしからす見え侍れは。い

つれまさると申かたし。持なとにや。

六十七番

左

權大納言

たのめしをたのみしまゝに待更て心も鐘もつきはつるまで

右

法印堯孝

ちきりきた時もたかへぬ鐘の音かならずさそへこよひ過さて

左右のかねのころ。左は耳にとゝまる所まさるとや申へからむ。

六十八番

左

式部卿宮

われをたにとはせしとてや月影の更行程とちきりをく覽

右

法印僧運

契りしは偽そともおもはぬにつらくもふくる夜半の月かな

左。我をたにとはせしとてやといへる心。たくみにきこゆ。右歌。させることも見え侍らねは左の勝にや。

六十九番

左

右大臣

うきちきりこりすや人は椎柴のしみておもひにたへぬゆふ暮

右

内大臣

頼めをく今宵さへ又空しくはさていつかはとなをそまたるゝ

左の椎柴そおもひかけぬ心ちし侍れと。こりすまやといひ。しみてなといはん爲にや。上句も心えわきかたくや。

七十番

左

右衛門督雅親

やかて身そうきになれ行契そめ待よひ過るかねのころ

右

前内大臣

今宵たに待れぬほとにとひこかしたのめし月も影そ更行

左の待よひ過るかね。右のたのめし月。ともにおかしく侍
れはまた持にて侍りなむ。

七十一番 恨絶戀

左

前大僧正義

恨みこし言のはさへにくちはてゝ思ひまくすの風もかよはす

右

大僧都義親

うらみしやつらさに歸る眞葛原はや吹たゆる風のためしは

左右の眞葛。左はことのはさへにくちはてゝといひ。右
はつらさにかへると侍る。ともにあしからす侍れはなを
持と申へし。

七十二番

左

前大僧正義

恨みてもあかぬ心はますらおか引やゆつるのかけはなれつゝ

右

爲富朝臣

行ななきその佛そたち歸るつらさわするゝこゝろよはりて

左歌。題の心ふかくとりなせり。右の下句なとあしからす
侍るを。うらみの心そ。つらきはかりにてはいかゝ侍るへ
き。左にはまけても侍りなむ。

七十三番

左

式部卿宮

誰ゆへのつらさにたへぬ恨とてかこつをとかに忘れはつらむ

右

法印堯孝

身をうらにたきてし繩も朽にけりいさきたにせず物思ふとて
右の歌左歌の心おかしきこえ侍るを。下句そ優にし
も侍らぬ。左たれゆへのつらさにたへぬといひ。かこつ

をとかになと侍るわたり。いさゝかまさるとや申へから
む。

七十四番

左

太宰權師實雅

へたて行里のしるへのあま衣うらみしほとやちきり成けん

右

前内大臣

煙さへさてもたえなは蜚のすむ里のしるへになにをととはまし

左右のさとのしるへ。題の心たしかにきこえて。ともに心
なきにあらされは持と申へし。

七十五番

左

沙彌祐雅

終に今かけはなれけりうきことの末や恨みしまゝのつきはし

右

沙彌淨空

ひとすちかけはなれぬる葛かつら長き恨になしはてむとや

右のくすかつらには。まゝのつきはしかけてもおよひか
たくや。右のかちにこそ。

七十六番

左

右衛門督雅親

恨しをことほるほととの情たになかりしよりそおもひたえぬる

右

權中納言勝光

恨みつるゆへと思はゝさもあらて絶ゆくなかをなをなけく哉
左。うらみしをことほるほとなのといひ。右歌。ゆへとおも
はゝさもあらてと侍る。ともにおかしく聞え侍るを。ひた
りなを心あるさまに侍れは勝とや申へからむ。

七十七番

左

權中納言資任

かこちしをかこことになしてとはれねは恨に増るうらみ成けり

右

内大臣

思ひきやおもはぬをこそかこちしかそをたに今は忍べしとは
左右ことなる難も見え侍らぬを。左のかこちし恨なと重
疊してきこゆ。右おもはぬを社といへるや。いさゝかまさ
ると申へからむ。

七十八番

左

右大臣

露はさも誰ゆかりとかむすふらん絶てふみ見ぬ中の道芝

右

關白

ゆらの戸の里のしるへもかひやなきかちをたえたる沖つ舟人

左。露はさも侍る。いかにそやきこゆ。右かちをたえた
るなとよろしきやうに侍れは勝へきにこそ。

七十九番

左

權大納言

わか中のかきほの眞葛かれはてゝめに見ぬ風の音つれもなし

右

法印僧運

かひなしや契のはては終にたゝうらみをそへて思ひたえぬる
左右。ともにさせる難も侍らす。左かきほの眞葛かれはて
てなといへる優にきこえ侍るを。右ことなる難なければ
持なとにや。

八十番

左

雅康

恨こし言のはさへにかきたえてまくすの風のをとつれもなき

右

權中納言持爲

立かへり思ひまさ木のつなひきてみせしは絶る中そくやしき

左歌。めつらしきふしも見え侍らす。右も思ひまさ木のといひ。みせしはたゆるなと。くたけたる様には侍れと。心あるさまにや。かちとすへし。

八十一番 旅宿夢

左

右大臣

たひ衣かきさなる峯にかたしきて雲路にかゝる夢の浮はし

右

前内大臣

故郷を草のまぐらにしのふ哉夢ちはせきのなきをたのみに

左の夢のうきはし。右の夢ちのせき。ともに難なくきこゆ。
持なとにや。

八十二番

左

沙彌祐雅

さめてこそかきりしらるれ草枕夢のうちなるむさしの原

右

權中納言持爲

臥わひぬ我ふるさとおもひ草おはなかもとの夢もつたへよ
左。夢中の旅行はさることなから。作者の心せはくもと
なし侍りけるときこゆ。右わかふるさを思ひ草なとい
へる。あしからさるへし。右の勝と申へし。

八十三番

左

大宰權帥實雅

見るほとにあしたゆからぬ草枕行もかへるも夢のたゝちは

右

爲富朝臣

雲にふしうきねになれて海山の夢も幾夜かむすひきぬらん
左歌。あしたゆからぬおかしくきこゆ。右もさせる難は侍
らねと。左の勝とや申へからむ。

八十四番

左

故さとを忘れぬ夢もおとろけと松かねまくら風そはけしき

右

故さとの夢にも又や見えつらなひねのやまの露のころも手

左右させる難も侍らねは持たるへき歟。

八十五番

左

行すゑをいそくとすれと草枕あとにそかへる夢のかよひ路

右

ぬるかうちに見はてぬものを故郷の傍のみそさむる夜もなき

左。あとにそかへるといひ。右おもかけのみそさむるよも
なきと侍る。ともにおかしくきこえ侍り。勝劣わきかたけ
れはまた持とや申へからむ。

八十六番

左

日數ふるたひにしあれと故さとをひと夜の夢に歸りみし哉

右

しはつ山しはしかりねの夢ちにも通ふとそ見るたななし小舟

左歌。ことなる難も侍らぬを。右しはつ山。左歌の心もき
こえてあしからす侍れは勝と申へくや。

八十七番

左

たひねにもあはれやかくる古さとの傍かよふゆめのうきはし

右

見る夢をさそひてかへる松かねのまぐらのあらし又も吹こせ

左。あはれやかるといひ。おもかけかよふといへる。よ

權中納言資任

關白

雅康

沙彌淨空

前大僧正藏

法印堯宇

右衛門督雅親

内大臣

ろしきになたり。右。下付のわたりも。あしからすきこえ
侍を。なを左の夢のうきはしめにかゝるやうに侍れは勝
と申へし。

八十八番

左

うつゝまで名残をとむる故郷の人や旅ねの夢の關守

右

夢もたゝなれこしたひの草枕うちぬるまゝになくさめそなき

左右いづれもよろしくは侍を。左なをこゝろあるさまに
見え侍れはかちたるへし。

八十九番

左

故さとを見まくほしきの思寐に行てはきぬる夢のかよひち

右

へたてこし我ふるさともかりねする夢や夜毎に行かへるらむ

行てはきぬるゆめのかよひち。よろしく侍り。

九十番

左

いつくにか嵐は夢をさそふらむ草のまぐらにつゆをのこして

右

夢ちさへかよひそかぬる草まぐらとをき日かすを故郷の空

左右ともにことなることきこえず。右そ夢にもとありた
く侍る。持と申へし。

九十一番

左

わかか浦やかたかき松の影しめて千世をそ契るたつのもろ聲

權大納言

名所鶴

雅康

權中納言勝光

式部卿宮

前大僧正義

法印僧運

右

法印亮孝

二たひの例をまなつる君か代につきてかそへよわかのうら波
左歌。めつらしきふしも侍らねとさせる難も聞えず。右ふ
たたひの例。この頃耳なれ侍るやうなり。但老の僻覺にや。
持と申へからむ。

九十二番

左

沙彌祐雅

わかぬ浦や身をおもふにも子を思ふ鶴の心はたれかしるらむ
右
すなほなるすかたを君もわかぬ浦にさそまな鶴の千代の行末
權中納言勝光

左歌。判者のつたなき詞に侍り。心のやみはあはれとおも
ひしる人も侍らめと。直なるすかたをまなふ君の行すゑ
には。なすらふへくも侍らす。もつとも以_レ右爲_レ勝。

九十三番

左

太宰權帥實雅

玉の浦にむれゐるたつのよはひもて千代を千度も君そ數へむ
右
天の下おさむる君に契をけるたみのゝ嶋のたつのよはひも
内大臣

左。玉のうらに君そかそへむなと。いひしりてよろしく侍
り。右もあめの下にたみのゝしま。おかしくきこえ侍れは。
持にてはへりなむ。

九十四番

左

權大納言

わかぬ浦によりくる波の友鶴もともにあらそふ聲きこゆなり
右
爲富朝臣

かけたのむ松の言のは君か代にしけきをあふくわかぬうら鶴

左。ともつる友になとよろし。右させることも侍らねと。
まつのことのはしけきをあふくなといへる。時にあたり
てきこえ侍れは持なと申へくや。

九十五番

左

前大僧正義

高砂の尾上の鶴よ君ならて千とせの友とたれにちきらむ
右
前内大臣

年へぬるあしへのたつもかゝる世に逢やうれしきわかぬ浦波
左右ともにあしからすきこゆ。持と申へし。

九十六番

左

式部卿宮

あま人やしほひのかたにあさるらむ松にむれぬるわかぬ浦鶴
右
權中納言持爲

眞砂にはあとつけ玉のかすひろふ君になつさへわかぬ浦つる
左右のわかぬうら鶴。ともにいひしりては侍るを。右第二
三句優にしもきこえ侍らねは下句難なく侍り。なすらへ
また持とすへし。

九十七番

左

權中納言資任

人なみにたちはよれともいつまでか沙ちたとらんわかぬ浦鶴
右
大僧都義觀

ちきりあれや君か八千世を松かえに齡あらそふわかぬうら鶴
左右ともにさせることもなし。なをおなしほとゝや申へ
からむ。

九十八番

左

右衛門督雅親

内裏歌合 康正元年十二月十七日

法印僧連

右

波たゝぬ世を嬉しとやあしたつも安きたみのゝ嶋にすむらん

すゑとをくなをみち契れわかの浦にむれて數そふ千代の友鶴
左右の鶴。なみたゝぬよをあふき。すゑ遠きみちをおもふ
心とりくゝにきこえ侍り。これもなを手にや侍らむ。

九十九番

左

右大臣

わかぬ浦や君かよはひも雛鶴の千代をはしめんこゑきこゆ也

右

沙彌淨空

友鶴の數はかりなる音をそなく六とせひろひし玉つしま江に

右六とせひろひし玉津しま江と侍るは。此度の撰集の
ことにや。歌人として六とせの春秋をおくりむかへし事
おもひしれて侍り。左歌もさせる難は侍らねと。右にはを
よひかたくや。

百番

左

前大僧正藏

松かねのこけもみとりの龜山に鶴の毛衣千代やかさねむ

右

關白

君か代のなきためしに契るらし玉のを山の鶴のよはひは

左。みとりのかめ山につるの毛衣。みとりけをおもひよせ
侍る歟。おかしくきこゆ。右もなきためしに。玉のを山
をとりよせ侍り。いづれもあしからず。持にて侍るへし。

寶徳三年八月十一日

判者 沙彌祐雅

右百番歌合百花庵宗固本按合了

題

庭殘菊

水鳥

松雪深

忍久戀

祝言

左方作者

女房

雪三 負一 持一

關白

負三 持二

入道前内大臣

勝一 負一 持三

太宰權帥實雅

勝一 持一 負二

左近權中將雅康

負四 勝一

右方作者

准后

勝二 負一 持二

右大將義政

勝四 持一

權大納言親通

前内大臣 勝三 持一 負一
前大納言資任 持二 負三

沙彌淨空

權大納言勝光 右兵衛督爲富
權少僧都忠雅

前大僧正義連

左方勝十四

持十六

讀師

右方勝廿首 持十六 負十四

講師

判者

左衛門督雅親朝臣

一番

庭殘菊

左勝

女房

逢にあひてうつろふ菊や見し秋の色にも増る紫の庭

右 准后

冬きてもまたうつろはぬ庭の菊もとの雲々の秋を戀ふらむ
左歌。あひにあひてうつろふ菊の色。あきにも増る心おか
しくきこえ侍り。右の歌。時にあたりておもふ心あるにや。
しかれとも左には及かたし。仍以左爲勝。

二番

左 關白

紅葉せしかきほの鳥は色かれて猶花ならぬ菊そうつろふ
右勝 右近大將義政
をしなへて庭の籬の霜かれに残るも淋し菊の一本

左。菊のうつろふ外には。はななからといへる詞は。なくとも
ありなむとやきこえ侍るへき。右籬の霜かれに。一本の
これる菊のすかた。誠にさひてきこゆ。勝へきにこそ。

三番

左勝 式部卿親王

見し秋に花はうつろひをく霜の色もまかはぬ庭のしらきく
右 前内大臣

萩の戸の花は残らぬ冬かけて移ふ菊やむらさきのに
左。菊うつろひて霜の色まかはぬ心。おかしく見え侍り。
右萩の戸のはなの色。うつろへる菊に残るすかた。よろ
しく侍れと。なを左まさと申へくや。

四番

左 右大臣

雲の上の明れはまれに残るてふ星のためしに庭の白菊
右勝 沙彌淨空
ちり過し紅葉かけの庭ふりておらぬかさしに残るしら菊

左。敏行か。雲のうへにて見るきくはとよめる歌をとりて。
殘菊のまれなるを。あけゆくそのほしにたとへ侍る心。

たくみによるしくきこえ侍るに。右。源氏ものかたりのも
みちのかの巻に。散すきたるかさしのもみちに菊を折て
さしかへらせしことおもへるにや。歌のさま優にきこえ
侍れは爲勝。

五番

左勝 前大僧正滿意

庭の面に秋なき時も更にまた移ひかはる霜の白菊
右 前大僧正義蓮

逢にあひて雲々の庭もむらさきの色を盛に菊に残れる
左。秋なき時など。これも古今集のうたよりいてたること
はにや。うつろへるきくの色霜にかはる心。おかしく見ゆ。
右させること侍らねと歌のすかたよろし。持なとにや。

六番

左勝 入道前内大臣

花をさへしくれや染る神無月籬の菊の色そうつろふ
右 前大納言資任

木葉さへうつみはてたる霜の下に秋を残せる庭の白菊
左歌しくれ。右の霜。ふりにたる下旬なるへし。木のはさ
へは木の葉をさへの心にや。下旬猶無下におもひ入たる
所も見えず。はなは木のはにまさり侍らん。

七番

左 左衛門督雅親

千代ふへき花の所やこゝのへの霜よりのちも匂ふしら菊
右勝 右兵衛督爲富

菊のみそ色も匂ひも霜の下に秋のまゝなる九重の庭

左庭の心もたしかならず。歌とのみおもひて。そのさま
しらぬ作者のつかうまつれるにや。右しもの下に秋を残
せる心もおかしく聞えはへる。爲し勝。

八番

左持

大宰權帥實雅

霜もなをこのひともとやよきぬらん冬枯しらぬ庭のしら菊

右

權大納言勝光

しら菊の花にこほれる露の間に千とせのかすや庭の眞砂ち

左。この一本やよきぬらむなど。いひしりて聞ゆるに。第四
句聊優ならずや。右又第三句ふとしたるやうなり。まさこ
ちの地の字。なくともと見え侍れはなそらへて爲し持。

九番

左持

權大納言公綱

霜まよふ淺茅か庭の冬枯に秋こそましれ菊の一もと

右

權大納言親通

白菊のうつろふ庭を冬きてもまた咲花の有かとそ見る

古歌をとるに。句のをき所をかへ。あるひは五七の句をさ
なからもちゆるも。心を引かへ。と。さま／＼によみなら
はし侍るにとりて。此右の歌。古今集に。色かはる秋の菊
をはひとゝせにふたゝひにほふ花とこそ見れと侍るに。
一首の心かはる所もなくや。但自然によみあはせられた
るか。いかさまにも無念にそ侍る。左ことなることも侍ら
ねと。勝に侍らんかし。

十番

左

左近權中將雅康朝臣

秋よりも人めそかれぬ薄くこく移ふきくのはなのまかきに

右持

權少僧都忠雅

うつろふもまたふかからぬ冬なれやわかむらさきの庭の白菊

左歌。ひとへに移ふきくをのみ賞して。秋よりもなを人め
かれぬよし。めつらしからむとにははへれと。なをいかに
そやおほえ侍る。右歌。移ふ色もふかゝらぬなとよろし。
勝たるへし。

十一番

水鳥

左

左衛門督雅親

月残る池の玉藻の床のうへに明行夜はやをしのもろこそ

右持

前大僧正義連

汀より氷ゆくらし池の面にうきねの鴨のとをさかるこそ

左歌。めつらしからず。右の歌。小夜ふくるまゝに汀やこ
ほるらむ遠さかりゆく志賀の浦なみとある歌をおもへる
にや。流を池になし。浪のをとを水とりの聲にかへたるは
かりにて。本歌の作意にいたくかはらずや侍らん。家隆卿。
こほりていつる有明の月なとよめるこそ。あらまほしき
やうには侍れ。いかさま左歌はおよひ侍らし。

十二番

左

太宰權帥實雅

風寒み氷のひまを夜床にてうきねさためぬ池の水鳥

右持

沙彌淨空

氷けり友なきをしの思ひわひさそふ水あらはとたのむ入江に
左歌。させることなく難もきこえ侍らぬにや。右小野の小
町か。わひぬれば身をうき草のといへる歌をとれり。第四
句なかきこえ侍れと。俊成卿女。さそふ風あらはとおも

ひけるをはとよめるも。撰集に入られ侍りしにや。歌のさ
まひたりにはまさり侍る歟。

十三番

左侍

入道前内大臣
あし鴨のさはく入江のうす氷とけてぬぬ夜のこゑの寒けさ

右

准后

鷺すらもとれはとられし我君の玉の御池になるゝをし鳥

左。あしかものさはく入江。ふるきことはにて。よろしく
きこゆるに。この風情。集の中なにも見をよふ心ちし侍
るはいかゝ。右の鷺。聖代にかゝることの侍りしやらん。
をしにとりよせられたる心は。めつらしく侍れと。歌のさ
ま優美にあらず。なそらへて持とや申へからん。

十四番

左侍

式部卿親王

思ふとち友寝の床のさゆる夜はたゝまくをしをしの音にやなく覽

右

權少僧都忠雅

池水につかはぬをしをしの契までうすき水のくたけてやおもふ

左。たゝまくをしをしの音にやなくらむなと。おかしく侍る。
右も難なくきこゆれと。歌のさま猶よろしきにつきて以

左爲勝。

十五番

左

女房

夜を寒みと侍すも物を思ふらむつらゝの床のをしのひとりね

右侍

右近大將義政

霜はらふ鴨の羽かひのいかならん芦邊の水も氷ぬる夜に

左。夜を寒みと侍るより終の句にいたるまで。秀逸のすか

たなるに。續拾遺集に。かたしきのしも夜の袖におもふか
なつらゝのこのをしをしのひとりとねと侍るにや。むかしよ
り撰集かすつもりて。今の世に同類など。さること難治に
侍るにや。右の歌。萬葉集の古風より出て。すかたすなを
につよくきこゆ。もつとも可レ爲勝。

十六番

左侍

前大僧正滿意

夜もすから床も定めぬ水鳥は氷らぬ方を尋てやなく

右

右兵衛督爲富

うきてすむ方も定す風ふかは浪にしたかふ池の水鳥
右。方もさためすは。貫之か。風ふけはかたもさためすと
いへる二句をとれるにや。左床も定めぬ。ともに心はかよ
ひ侍れと。こほらぬ方をたつめるは。いますこし心きたか
にきこゆ。以レ左爲勝。

十七番

左侍

雅康朝臣

はらひえぬ霜たにあるに水鳥のこほるをいとゝ浮ねとや鳴

右

權大納言親通

いつれなをたえずとかなく水鳥のうは毛の霜と下の氷と

右。千載集に。此比のをしをしのうきねそあはれなるうは毛の
しもよしたの水よとやらむ侍る。左たやすくきこえなか
ら。勝侍るへし。

十八番

左侍

權大納言公綱

友寝する夜床の水のあやにくに氷へたてゝをしや鳴らん

右

前大納言資任

さゆる夜の池の水をふみしたきむれあるこそしのけき芹鴨

左 上句不_レ優 右 下句平懷也。勝劣難_レ決歟。

十九番

左

右大臣

山水の秋のとまりかと計にすたく川瀬の鶯のこかれ羽

右勝

前内大臣

冬川やこほりて浪はたぬ日にわたるあきさのこそ寒けさ

左 不_レ應幾_二所あり。右 歌のさまなたらか也。勝へきにや。

二十番

左

關 白

芹原や霜うちさやくなかれ江に風をしきねの水鳥のこそ

右勝

權大納言勝光

芹鴨の青羽の色そ山川の音はしくれてつひにもみちぬ

あしはらやとおかれたる。なとやらんことくしくおも

ひなされ侍るに。第二句霜うちさやくは。つねのことに

侍りけり。風をしきね。又非_二尋常之詞_一芹鴨の青羽。あま

りに風情を凝さむとのみよめるにや。歌のすかた優にし

もきこえずなから。ひたりにはまさりはへるへし。

二十一番

松雪深

左持

式部卿親王

下折の梢はさらにあらはれてうつもれかはる雪の松か枝

右

右近大將義政

下折のひゝきに雪や落つらむまた音たつる軒の松風

左。下句いさゝかくたけたるやうに侍れと。おかしくこそ。

右ひゝきをとあひ似たることはにや。しかれとも六百番

歌合に。響ねをと三をよめるも侍るにや。此内ねをとと、

は。猶いかにそやおほゆるをたに。万人判者ともに難せず。

兩方の雪の下折。何れ浅しとも見え侍らす。持と申へくや。

二十二番

左勝

前大僧正滿意

松をさへとしの寒きにあらはきていくへかつもるけきの白雪

右

權大納言親通

おきつなみひとつにみえて住吉の松をさなからうつむしら雪

左。歲寒貞松も。ふかき雪にはあらはれぬ心めつらしく。

下句そよはくきこえ侍る。右下句。題の心ことくしくこ

もり侍るものから。不そくなるやうにおほえ侍れは以_レ左

爲_レ勝。

二十三番

左持

關 白

吹きほる風をもき山松の青葉にかへるゆきの下折

右

前大納言資任

けさはなを雪に風の音たえて松はしつ枝も見えず成ぬる

左歌。あらしもをもきと侍る。短慮不_二思得_一。山松も優にし

もきこえずや。右歌も難なくは見えなから。勝へきさまに

もはへらす。持とすへきにや。

二十四番

左持

權大納言公綱

うつもるゝ松にも音のきこゆるや嵐にはあらぬ雪の下折

右

右兵衛督爲富

はらひかね松のあらしも今はとや降そふ雪に吹たゆむらん

左右また等同にして無_二勝劣_一。

二十五番

左

雅康朝臣

雪折の聲こそ残れ埋れて嵐はよそに軒の松か枝

右勝

権大納言勝光

降つみて嵐はよそに立わかれいなはの山の松のしら雪

兩首の歌。松のあらし雪にたえたる風情。たひくになり

侍れはにや。いとめつらしくもきこえず。さのみ持と申

さむもいかゝにて。たちかへり見侍れは。いなはのやまの

二十六番

左勝

右大臣

かきりあれば枝にも葉にも餘りつゝ獨こほるゝ松の白雪

右

権少僧都忠雅

けさみればすゑの松山うつもれぬ夜半にやこえし雪のしら波

右の歌。うら近く降くる雪はとある歌に。心いたくかはら

すや。左歌すゑつむはなの巻に。松の木のおのれとおきか

へりてさとこほるゝ雪なとあるも。思ひいてらるれば。末

二十七番

左持

太宰権帥實雅

はらひかねなひく梢は窓とちて猶雪をもし軒の松かえ

右

前内大臣

埋れぬ比より見すは雪ふかき松をまつともいかにてしまし

左。軒端の松の雪。窓をとちたる心。おかしくきこゆ。はし

めの五もしそ。風なくてはいかゝと申す難もやとおほえ

侍れと。これはうちはらふ心にて侍るにや。さもありぬへ

し。右歌もよろしく見え侍れは爲し持。

二十八番

左持

入道前内大臣

雪にのみ埋れはてゝ池水のそこにそ松の色は残れる

右

前大僧正義連

はらひかねいくへともなき雪のうれに松を忘れて行嵐かな

左歌。池のほとりの松。雪にうつもれて。下葉の色わつか

に水底に見ゆる心。おかしく侍り。右歌。松を忘れて行あら

二十九番

左

左衛門督雅親

埋めとも猶松の葉のしるきかな降雪さへに散うせすして

右勝

准后

しら鶴のかへるふるすやたとるらむ雪折かはる高砂の松

左。松の葉のちりうせすしてといへることはをとりて。よ

めるとは見え侍れと。優にしも侍らす。右高砂の松にすむ

つるの。雪おれにふるすをたとる心。おかしく見ゆ。かへ

三十番

左持

女房

あらしこそ尾上の雪のひとむらやむもれし松の梢なるらん

右

沙彌淨空

わたつ海の千ひろはしらす松かえにみるめふかくも積雪哉

左。白雪一村。右蒼海千尋。歌聲共甘心。勝劣不二分明。

三十一番

左勝

右大臣

人しれすかそふれは又つもり行年のへたてを打なけくかな

右

前大納言資任

我身さへしらすかほして月日へは誰ゆへ落るなみたならまし
右下句言おほせられぬにやあらん。心得かたし。左。年序
のつもるをかそへて。ひとしれすなけくらむさま。あはれ
に侍れは可^レ爲^レ勝。

三十二番

左

雅康朝臣

幾とせか古川のへにたつ杉の上は難面敷のみして
准 后

右勝

わかおもひ神さふるまでつゝみこし玉のをくしも涙成けり
左。うへは難面といへることは。しら露のうへはつれなく
をきゐつゝとよめるも。萩の下葉の色にかけ。はちす葉の
上は難面と侍るも。うらなる事をいへるにや。此杉の下
葉いかならん共おほえず。さためてその證なと侍らむか
し。右わかなの卷に。秋好中宮より。さしなからむかしをい
まにつたふれはとありしやらむ。縮合の卷よりは。ひさし
く成にけることにや。左は不審残れり。以^レ右爲^レ勝。

三十三番

左持

太宰権帥實雅

しられしな絶て忍ふのあま衣うき年波のかけてこふとは
右 権大納言親通
いつまてかさのみ忍ふのすり衣妻にはあらて年を重ねむ
しのふのすり衣。しのふのあまころも。ともにきゝなれ侍
り。歌の科もをなしかるへし。

三十四番

左持

式部卿親王

幾かへり我身を秋の露とたに物をもふ袖に忍ひきぬらむ
右 沙彌淨空

年月を忍ふのおくにかかるすけのしらしな長きねのみ鳴とは
左。身を秋の露に袖のなみたをまかへて。としををくる心
詞。おかしく見ゆ。右しのふのおくにかかるすけのなかきね
をしらしとつゝけ侍るまで。よくいひくたされてきこゆ。
左は艶ならんとよみ。右はつよからむことをおもへるに
や。勝劣さためかたし。

三十五番

左

關 白

うち出る泪の海のはまひさししもつゝみし袖もあらはに
右勝 右兵衛督爲富
うき月日さらにかさねはいかならん袖の外には見えぬ泪も
左。打出るなみたとをけるより。下句みなあらはるゝ戀の
心とそ見え侍る。右。さらにといへる詞。其詮なく侍れと。
題の心たしかなるに付て可^レ勝敷。

三十六番

左勝

女 房

あちきなくつもるおもひも空蟬の世はいつまてと音を忍らん
右 前大僧正義連
今さらにたゝん名もうしいつまでも忍心をおもひよはらし
左。つもるおもひもうつせみの世はいつまてなど。よろし
くこそ。右も難なくきこゆれと。なをひたり爲^レ勝。

三十七番

左

左衛門督雅親

心もて猶せきかへすなみた哉さすか人めもおもひなるれば

右勝

右近大將義政
逢ことはかきりしられす年月を絶て忍ふのみたれわひても

左歌。おもひなるれはにて。ひさしき心をもたせたるも。

かすかによはくきこゆ。右歌。逢ことはかきりしられすと

侍るは。あふことを待かきりのことにや。しのふのみたれ

本歌の心たしかに妖艶なるすかたにも侍る哉。可レ爲レ勝。

三十八番

左

つゝみしは幾年なみそおもひ川なかれての世の浮名ひとつに

右勝

權大納言公綱
思へともいはかきふちのそこひなく幾よつもれる涙とかしる

左。下句なとよろし。右きくのしら露けふことにといへる

歌をとれるにや。難なくきこゆ。可レ爲レ勝。

三十九番

左勝

しらせはや今は心も月日のみつもりはてぬる下のおもひを

右

權大納言勝光
とけぬへき心のおくはまたしらていくとし月を忍ひきぬらむ

右歌。心のおくなと侍るにつけては。しのふといはまほし

くそ。但作者みちのくまては。おもひやられぬことにて侍

るを。せはき心にてをもへるなるへし。左つねのことなれ

と増り侍るにや。

四十番

左

入道前内大臣
としふれは軒のしのふのかるゝまで我戀草は色そつれなき

右勝

前内大臣

年をつむおもひもくるし世の中に絶て忍ふの種なくも哉

左。としをふる軒端のしのふ草は。しけさも増りぬへきこ

とにこそ。かるゝまでといへる。いさゝかおほつかなし。

右年をつむ忍ふのたね。なたらかなれは爲レ勝。

四十一番

左勝

祝言
女房
むへしこそ我世になひけ芹原やおさまる國の民の心は

右

右兵衛督爲富
今そしる神代もおなし日の光さしてくもらぬ君か爲とは

左。非二凡俗之所_レ及。もつとも爲レ勝。

四十二番

左持

前大僧正滿意
大内やよなくことにいのるてふ法のしるしは君か萬代

右

沙彌淨空
きみかためおなしことのみ祈る身は老ても千世の影をしそ待

左。二局夜居しるくきこえて。萬代の寶算をいのる法のし

るしもたのもし。右父老のこゝろあはれに千世までとき

みを思ひたてまつれり。心はひとしく。ことははとりく

なり。勝劣わきまへかたし。

四十三番

左持

式部卿親王
あし原やみたれぬ人の國までもひとつ我世と君おさむらし

右

權大納言勝光
君はめくみ臣はあふきて芹原や昔にこゆる御代のかしこさ

左右のあしはら。あしからすきこゆ。爲レ持。

四十四番

左

右大臣

龜のうへにふみ見る道も絶すして君萬代のあとならへとや

右

右近大將義政

神代より三種のたから傳へきて今もうけつく君かかしこさ

左歌。尙書洪範篇。洛書事賦。然者治世之法。雖相叶祝

言。右歌。三種神器。我朝無双之靈寶也。尤爲勝。

四十五番

左

關白

代をおさめ身をおはせてや君と臣道の道たる契とはなる

右

准后

うこきなき大和嶋ねの外までもなを靜なる四方の浪風

左。右。同科に侍るへし。

四十六番

左

太宰權帥實雅

つかへつゝ祈る身のみか君か代を久しかれとそ神もまもれる

右

前大納言資任

君々のふへきよはひはなな濱の眞砂のかすを千たひかそへむ

右歌。君か代はかきりもあらしなな濱の眞砂のかすはよ

みつくすともといへる歌をとれるか。あまりにかはれる

心もなくや。左歌。させることも侍らねと。勝はへりなむ。

四十七番

入道前内大臣

鶴かめは數限あるよはひにて猶君か代を何にたとへむ

右

權大納言親通

天地の長くひさしきことはりは我大君の御代の爲かも

かすかきりあると侍る。つる龜も千とせののちはしらな

くにといへる歌などをおもへるにや。天長地ひさしく。誠にことはりかなひ侍りぬ。歌の勝劣弁かたし。

四十八番

左

左衛門督雅親

梓弓やふしもわかすあふく也治まる代々にかへるときかも

右

權少僧都忠雅

我きみのよはひといつれわかの浦や濱の眞砂も松のはかすも

右。きみのよはひに和歌のうらのまさこをたとへ侍る。よろしくきこゆ。左あつさゆみやふしもわかすなと。いやし

きさま也。右尤爲勝。

四十九番

左

權大納言公綱

岩ほまで君か見るへきさゝれ石も猶ぞ數そふ玉しきの庭

右

前内大臣

へたてなく君かひかりも玉かきのうちなる國を幾代てらさむ

左。さゝれいしの岩ほ。めつらしけなし。たまかきのうち

なる國。無爲に侍れば勝へきにや。

五十番

左

雅康朝臣

きみになひくみかきの竹の幾代とも限しられぬ數そこもれる

右

前大僧正義蓮

月日さへしらてや照す君かへむ千世萬代を幾めぐりとも

左。竹めつらしきふしも侍らす。右月日さへしらてやてらすなと。いひしりて。終の句までよろしく侍り。可爲勝。

右康正元年内裏歌合以古本書寫以一本校正

群書類從卷第二百九

和歌部六十四歌合卅

按察使親長卿家歌合

文明五年十一月七日

題

野外霞

暮山花

郭公

曉荻

海邊月

原雪

不逢戀

顯戀

山家夢

述懷

歌人

左

前右大臣源朝臣

權大納言兼右近衛大將藤原公敦卿

權大納言藤原敦秀卿

權大納言藤原實淳卿

右衛門督藤原季春卿

權中納言藤原宣胤卿

參議左大弁藤原廣光卿

散位中原師著朝臣

左近衛權中將藤原季經朝臣

彈正少弼藤原俊通

藏人左少弁藤原政顯

杉原 伊賀守平賢盛

豐尾 大和守三善元連

右

西園寺 前內大臣藤原朝臣實

權大納言源通秀卿

權大納言藤原信量卿

按察使藤原親長卿

前中納言 正三位藤原高清卿

從二位和氣明茂卿

沙礪春譽

左大史小槻長典宿禰

左近衛權中將藤原爲廣朝臣

左近衛權少將藤原實隆朝臣

藏人右少弁藤原元長

安藝守平長恒

加賀守三善爲信

判者

一條禪閣

一番 野外霞

左持

花とりの色音もよしやあつま野の千里にかすむ春の曙

右持

前内大臣藤原朝臣實

山の端はさらても見えす春霞たてるやいつこむさしの、原
左歌。東野の煙の名残千里をこめてかすめるあけほの、
けしき花鳥におもひかふるほととの事。おほつかなきにや。
京極中納言の。花鳥のにほひも聲もさもあらはあれゆら
のみさきの春のひくらし。作意は同事なれと。ゆらのみさ
きは。名を聞よりおもしろき所と聞えたれは。花鳥の匂ひ
も聲もと詠せるにこそ。右歌。山のはさらても見えぬは。
かすみたる故にいよくみえぬ武藏野の風景也。さる時
は。いつこの三字自語相違にや。古今の歌は。吉野の山は
春なからまた雪のふれは。霞はいつこにか立らんとうた
かへる。其謂あるにや。作者をも知侍らぬゆへに。僻案の事
を不敵に書載侍り。許否は作者の貴許に任すへし。いかさ
ま持たるへし。

二番

左持

むさし野はわけつくすとも春霞立行末のはてやなからん

右持

権大納言源通秀卿

春はまたあさの、草の霜枯にみえぬみとりそ空にかすめる
左の立行すゑの詞。猶おもひたきにや。霞ならはたちゆく
空とあらまほしきにや。右見えぬみとりは。霜枯ゆへに見
えぬを。空のみとりにかすめる心にや。右聊まさると申侍
るへし。

三番

左持

三笠山みねの日かけもはる／＼とさしてそかすむ春日の、原

右持

権大納言藤原信暲卿

春日山神代の春もへたてなく三かさの野へに立霞かな
左歌第四句。さしての詞。日影の事にや。又野をさしての
心にや。詞をへたてたる故に。ふたつにわたりて聞え侍る。
日影の事なれば。峯の日かけはさしなからはるかにかす
むと。なとか詠したまはさりつらん。乍去。春日野は三笠
山の麓なれば。はる／＼の詞いかとおほえたれと。霞た
る故に近きもとをく見ゆる習なれば。それは難になるま
ての事はあるまじきにや。右の歌。ことなる難なし。祖神
の事に侍れば。この一首は判者の得分に。又右の勝と申た
きにこそ。

四番

左持

春日野や時をたかへすかすむこそ曇りなき世の春と見えけれ

右持

権大納言藤原實淳卿

いつくより立ともみえずはてもなし霞のこさぬ野への曙
左。時をたかへすの詞は。春日野によれる子細有や。老老
の身。證歌なと覺悟に及はす。大方は春は必かすむならひ
なれば。世の治亂にはよるまじき事にや。さのみなるやう
なれと。これも右は勝るにや。さりなからかすみのこさぬ
は。只霞にこもるとありたきにや。

五番

左持

右衛門督藤原季春卿

あは雪のふるともみえずあらち山やた野の末や今かすむらん

正三位藤原高清卿

たちわたる霞も松の一しほに色をやわきて春日野の原

左右ともにことなる事なし。只今まで左の勝なき事。判者の誤に成ぬへければ。人丸の古風に優して。左の淡雪の。

松の一しほよりも色まされるとや巾侍らん。

六番

左持

權中納言藤原宣胤卿

おもひやる心はかりはかすか野の霞を袖にかけぬ日もなし

右

從二位和氣明茂卿

春はまたあさ野の霞消かての雪のうへにや立かさぬらん

左。春日野をおもひやる心。何故にかとおほつかなし。又霞を袖にかくるも。春日野につきたる事にや。謠歌隨に覺悟せず。右。消かての詞。霞と雪とにまちあひて聞ゆ。又春はまたあさ野も以前出現せり。さのみ可勝にあらされ

は。なすらへて持たるへし。

七番

左持

參議左大弁藤原廣光卿

立こむる霞の末をかきりにて春ははてあるむさしの、原

右

沙彌春譽

長閑にそまつかすみけるむさし野や限も知ぬ御代の初春

左

霞の末は可_レ有_レ限とも不_レ覺。右歌。むさし野は限しらぬ枕詞なるやうにて。題の心は次になれり。さらては又。むさしのかきりにて御代の初春を祝すへき事。いか。又持たるへし。乍_レ次僻案の事を可_レ申。左歌。霞の末を關になされたらは。むさし野にたよりありて。はてある心にも

相應すへきにや。

八番

左持

散位中原師著朝臣

むさし野やかすみにももる春風の音はかくれすのこる萩原

右

左大史小槻長典宿禰

あけわたる雲井の春もそこなくうち野をこめて立霞哉

左。萩原は未焼原の事成へし。音あるへしとも不_レ覺。右。内野は新撰六帖に爲家卿初て讀侍るほかは。未見及す。大

内炎上以後の事このまじからず。暫勝負をさしをきぬ。

九番

左

左近衛權中將藤原季經朝臣

春きてはいくかもあらぬとふ火野に深きみとりや霞なるらん

右勝

左近衛權中將藤原爲廣朝臣

大江山雪けの雲はうち消ていくの、末や今朝かすむらん

左右ともにことなる難なし。右は聊雪氣のくも。たちまさ

れるにや。

十番

左持

彈正少弼藤原俊通

朝日さす野へのみとりに色はへてくれなむさをき春霞哉

右

左近衛權少將藤原實隆朝臣

たちまよふ霞そゆらく玉たれのこすのおほの、曙の空

左

左第四句。筆の誤あるにやいか。右歌。ゆらくは。玉のを

にたよりあるへし。玉たれにはかゝるなとこそ縁の詞に

は世常は詠し侍れ。ゆらくはななき心なれば。霞にはいか

かとおほゆ。左の歌の心末「覺悟」。勝負を論するにいとま

あらす。

十一番

左

藏人左少弁藤原政顯
幾とせかふる河野邊の春ことに霞もたてて二木の杉

右脇

藏人右少弁藤原元長

もえいつる野への草はの煙まで空にまかへて立霞哉

左ふる河野へは邊の心なり。野にはあらず。落題のうへは

不_レ及_二是非_一。右かちたるへし。

十二番

左脇

伊賀守平賢盛

春きぬとかへりみすればあつま野の煙をさらに立霞哉

右

安藝守平長恒

玉きはるうち野の春の世々のあとちりの名にのみ立霞かな

右うち野の事。さきにしるし侍りぬ。ちりの名も未_レ及_二

覺悟_一。左。萬葉の古風をおもへり。勝へきにこそ。乍_レ去煙

をさらにの詞。猶おもひたきに似たり。いか。

十三番

左

大和守三善元連

若草のつまならなくに春日野やかすむいつこに立こもるらん

右脇

加賀守三善爲信

おさまれる都の春の野へみれば霞も四方になひく空哉

左。若草のつまは。則春日野の事也。ならなくに。又いつこ

などの詞。いひおほせず。右之祝言。時にあたりて諸人の

本望なれば。しはらく勝に侍るへし。

十四番

左脇

前右大臣

白妙の花のひかりは猶みえてよにくれ行みねの松原

右

權大納言通秀卿
入相の聲こそいそけさく花のかけやはくるゝ小はつせの山

兩首の心詞等同也。猶おもひたき所なきにあらず。準て可

レ持や。

十五番

左脇

右大將公敦卿

かすめとも匂ひをそれとわきもこか袖ふる山の花の夕かせ

右

權大納言信量卿

月もかな長き日かけのいと山くるゝはおしき花の木かけに

左。ことなる難なし。右十首題の月。未いてさる事なれば。

傍題ををかける難もや侍らん。暫左の可_レ爲_レ勝。

十六番

左脇

權大納言教秀卿

かへるさはやくれはてぬ吉野山よしや一夜は花のしたふし

右

按察使親長卿

奥まではたつねみるともくるゝとてと山の花の蔭はかへらし

右第二句。たつねみすともとありたきにや。かけはかへら

しも思たきにや。詠歌の道。心の事はなかゝ不_レ及_二申。

詞てにはにて艶にも聞え。俗にもなること也。いかさま左

は可_レ勝にや。但よしや一夜はの字。さゝへてきこゆ。たゝ

ひと夜といひすてたらは。餘情あるへきにや。

十七番

左脇

權大納言實淳卿

くれにけり一樹のかけもちきりそと山路の花に宿やかまし

右

正三位高清卿

をのつからねくらもとむる鳥の音も長閑き山の花のかけ哉

左歌。第三句よはく聞ゆ。陰を契にてと有たきにや。右第一句なとをきかねたるやうに見ゆ。花の題には。いかにも花を賞翫して可讀事にや。此一首鳥のねにとられたるやうなり。いかさま左の勝とす。

十八番

左持

右衛門督季春卿
物と思ふあかぬよそののくれかゝる高根の花の雲のはたてに

右

從二位明茂卿

うへし世をとへとこたへぬあらし山花吹くらす音計して

左。本歌をはとられ侍れと。第二三の詞のつゝきいかにそや聞え侍り。右うへしなとは。吉野山の花には使あるにや。又嵐の吹くらしたるも。花のため無念なるにこそ。持とす。

十九番

左持

權中納言宣胤卿

芳野山尾上の雲はくれやらて花の木末の色そのこれる

右

沙彌春樂

たよりなき山路くらしつ下臥を契もをかぬ花をそふとて
左第三句は。くれはてゝとありたきにや。右便なきはたつきなきにや侍らん。又二ののを字も。さへてきこゆ。又持たり。

廿番

左持

左大弁廣光卿

夕日かけいりぬる山の櫻花みらくすくなき色をしそおもふ

右

長典宿禰

葛城やたか根の花の色はれて入日によその雲そくれ行
左右ともに本歌をはおもへるやうなれと。色をしそおも

ふ。色はれてなといへるわたり不_レ宜に似_レた_レり。作文の道に。意到句不_レ到と云事あり。いかにも詞のつゝきくた_レくたしからず。妖艶に餘情ある様に。沈吟あるへきにや。句つくりわろければ。いかに意はいたりたれと。歌とは申かたきなり。在中將は其心あまりて詞たらずと云るは。能中にてのよくな_レは_レよりなるへし。あしきてたらぬにはあらざるにや。はゝかりなから僻案を申者也。

廿一番

左持

師著朝臣

あすしらぬ世をなけくらし小泊瀬の花も露けき晩鐘の空

右

爲廣朝臣

吉野山まかへし雲の色はくれてこゝろにのこす花のおもかけ
左の歌の旨趣は。あすしらぬ世を。入相の空か歎を傍にて。花も感涙をもよほしたる由見及給へり。いかにも花の題にては。花をもとゝよむへき事なり。哀傷の心又不_レ好。かやうのことは。事により時に隨て可_レ有_二斟酌_一にや。右まかへしはまかひしとあるへきにや。又色はの字のひて聞ゆ。は文字を畧せらるへし。抑又一首の跡は花散ての後の心なり。花に對しては無念なり。後京極攝政歌。泊瀬山うつろふ花にはるくれてまかひし雲そみねにのこれる。此歌に倂相似て。しかもにさる事はいかにそや。

廿二番

左勝

季經朝臣

いかにせん家路はとをし山櫻なを夕はへのみまくほしさを

右

實隆朝臣

なをさりの見るめにはあらずあま小舟泊瀬の山の花の夕はへ

左歌。ことなる難なし。第二句は家路はとをき山櫻とつゝ
けたきにや。右のあま小舟は。初瀬の枕詞なり。後にみる
めなとあれは。海邊のやうに聞えし。但夫も一首の舛によ
るへき事也。いかさま左はたけありてみえ侍る。まされる
と申へし。

廿三番

左持

俊通

さきおもるたかねの花の一さかり夕ゐる雲の色そまかはぬ

右

元長

吉野山花のまとゐにはやくれぬいつらはなき春の日かけそ
左右等同也。勝劣難し弁。辭案には。左第一句は咲匂ふ。右
第三句はくれぬめりとありたきにや。但右は古今の俳諧
の舛也。被_レ難時もあるへきにや。

廿四番

左

政顯

このくれそまことしられて山櫻まかひし雲のかゝる色なき

右持

長恒

おりかさしたかゆふくれに歸らんふもとにくたる花の白雲
左右ともに花を雲に譬れたり。右は聊巧に聞ゆ。可_レ勝に
や。

廿五番

左持

賢盛

吉野山花よりひゞく晚鐘のかねのみたけにはる風そ吹

右

爲信

雲ははやかへると見ゆる山のはにまかふ方なき花櫻かな
左の春風。ふかすともものやうに侍れと。花に縁して見聞に

ふるゝ所を云つられたれは無難にや。右の歌。雲のかへ
るはかりにて。夕の心有へき事。證歌なと不_レ及_二覺悟_一。但
歌はさのみある事なれば。くるしからしとおほゆる。乍
去右の心は度々出來せり。左たけありて聞えたれは。勝
るにやあらむ。

廿六番

左持

元連

あらしのみにほひにくるゝ花の色かへらぬ雲の山のはの空

右

前内大臣

山ふかみさしもいそきし夕くれをこの比しらぬ花のかけかな
左歌。詞のつゝき。くた／＼しく聞ゆ。右夕くれをいそく
心も。何故とおもひわきかたし。準て持とすへし。

廿七番

左持

前右大臣

待えても心つくしの時鳥木のまの月のあけほのゝ聲

右

權大納言信量卿

したふそそよや待つる時鳥とはかりきゝし夜半の一聲
左の月の傍題。さきにも出來せり。右の第一二句このまし
からず。持とすへし。辭案には。左歌まちえての心つくし
やとありたきにや。

廿八番

左

右近衛大將公敦卿

いつれ猶鳴まさらん時鳥むら雨の空ありあけの月

右持

按察使親長卿

いてかてになとかなくらん郭公かとさせりともきかぬみ山を
左の下句のひて聞ゆ。其上村雨は有明の空にもよみ侍る

へし。一首の心ならは。よひの村雨月のあり明とあるへきにや。右本歌をおもへり。可レ勝にや。但これも出かてに猶や啼らん。かとさせりともみえぬといひたきにや。たゝ太山にて聞たるこゝろ。しかるへくや侍らん。

廿九番

左持

村雨の名残の雲のたえまより月もほのめく山ほとゝきす

右

をちかへり鳴にもまさる一聲は月さへいつる山ほとゝきす

兩首の月。句の倣も相似たるにや。持とすへし。僻案には。村雨の月は。ふるうちにも雲間はありぬへし。名残の雲は。五月雨などに可レ然にや。時鳥はをちかへりなけとこそ。古歌にもよめるに。月はさる事なれと。一聲のまさるらん

もいかにそや。

卅番

左持

ほとゝきす雲のはたてに聲す也あまつ空にもまつと知らん

右

時鳥なくやと待し夕くれも空たのめなる村さめの雲

有歌。世常の心詞也。左は本歌たしかなるにつきて。勝へきにこそ。但僻案には。左の下句。人や聞らんと可レ有にや。

いかゝ。

卅一番

左持

まてしはし人にもつけん時鳥われのみきくはをしき初音を

右

右衛門督季春卿
沙彌春譽

權大納言教秀卿

正三位高濑卿

權大納言實淳卿

從二位明茂卿

右衛門督季春卿

沙彌春譽

たつねいるかひにこそきけ山とよみ空もとゝろになく時鳥
右歌。山とよみ空もとゝろになと。おもしろくもなき詞を
とりあつめられたり。左聊艶に聞ゆ。可レ勝にこそ。

卅二番

左持

一聲にさたかにそ聞ほとゝきすかならずとまつ村雨の空、

右

いさよひの月の雲間の一聲は山の端いつるほとゝきす哉

右の月こそ。さし出たる様なれと。歌の舛に優して持とすへし。左歌。下の詞によらは。さたかにきかんとそありたき。右第三句も。一聲もとあらまほしきにや。

卅三番

左持

たか中のうきにならひて時鳥まつよひことにつれなかるらん

右

たへてまつ心の色のくれなひにふりいてゝなけ山時鳥

左右ともに。ことなる難なし。左聊艶に聞たり。可レ勝にや。

卅四番

左持

老にうきならひなからも時鳥まつにねさめそよすか成ける

右

待えても雲井のよそになら柴のなれはまさらぬ時鳥哉

左のよすかは。便の心にては侍れと。人の所縁をもよすかといへるにや。ことゝによりてつかふへき詞なるへし。

右のなら柴も。狩場なともなくて。おもひもかけぬ出所にや。なすらへて持たるへし。

權中納言宜胤卿

長典宿禰

左大弁廣光卿

爲廣朝臣

師著朝臣

實隆朝臣

卅五番

左

季經朝臣

むらさめもはやふりいてゝ時鳥くれ行空の雲に鳴也

右卿

元長

村雨の夜半のまきれの時鳥きゝやもらすと餘所をとけゝや
兩首の村雨。同程の事に侍れと。はやふりいてゝのことは。
聊不_レ宜。右はその心まされり。勝へきにや。但夜半は。よ
るとそいはまほしき。

卅六番

左

俊通

時しもあれやよ時鳥またるゝもあまりつれなき村雨の空

右卿

長恒

なきぬへし聲のかきりを時鳥をのか五月の夜なゝの空
左のやよの詞。古今のやよまで。慈鎮和尚のやよ村雨な
とは。そのものに對合して言る詞也。耳にも聞ぬ時鳥に。
やよといふへき事おほつかなきにや。右はまされるとい
ふへし。第二句は聲の限はとあらまほしきにや。

卅七番

左持

政顯

待なれし日數とともにふる聲をかさねてきなき山子規

右

爲信

一聲にあけ行月はこのれとおもかけとめぬ時鳥かな
左歌は。またいひおほせず。右は歌めきて聞侍り。但月は
いかゝ。暫持たるへし。

卅八番

左持

賢盛

時鳥わかれしおやのふるすよりかへるかひある聲の色哉

右

前内大臣

月をたにおもひかへつゝ子規まつたよりの村雨の空

右

村雨の月にさはるほととの事。心もとなくおほえ侍り。

左のわかれしおや。聊俗に聞ゆ。持たるへし。辭案には。左
の第三。それにつけてしなと侍らは。鶯のふるすにはなる
へきにや。不_レ然は花に木つたふなとはいかゝ。

卅九番

左持

元連

きかぬまの心こそあれ時鳥なくねを空に猶まかへとや

右

権大納言通秀卿

あか月の夢をかけつゝ一聲にうつゝすくなき時鳥哉

左第一句。右の第四など。同程の事にや。持とすへし。

四十番

曉萩

左持

前内大臣

ありあけの月の下萩うちなひき光こほるゝ露の秋風

右

按察使親長卿

聞すくす時こそなけれ老か身はいつもね覺の萩の上風

左の月。他の季の事は。少々みゆるす所も有なん。同季の

月の題を。前にあてゝ出来は。ことに無念なるにや。右も

かちまでの事はいかゝ。さりながら第二句夜はこそなけ

れとありたきにや。

四十一番

左持

右近大將公教卿

萩のはにあかつき風の音せずは秋のあはれや夢に過なん

右

正三位高清卿

たか袖にあまる涙そきく人のね覺は同じ萩の上風

左。あかつき風も。きゝならはぬ心ちす。右第二句も。おもひたきにや。持とす。

四十二番

左持

ね覺せぬ人はあらしなすむやともならふ軒端の萩の上風

右

風にのみまかせて聞は萩のはに曉露のをかんまそなき

左。二三句のつゝき。よはく聞ゆ。又やとはなくともとお

ほえ侍り。右の露。萩の葉にをかせたく思ひつる。その露おほつかなし。又持たるへし。

四十三番

左

たらちねのいさめにならふねさめまでつらしとそ聞萩の上風

右語

あき風にね覺のそては露そひて軒端の萩の音かはくなり

左歌。おやのいさめは。うたゝねの事にや。ね覺をもいさめたる事あるにや。不覺悟。右ことなる難なし。勝へきにこそ。

四十四番

左持

吹風を萩のうへとはきゝなからね覺の袖も露そこほるゝ

右

あけやらぬ窓のあらしを敷妙の枕の萩に夢そかれゆく

兩首共にことなることなし。左は常に見及躰也。右。窓の風。枕の萩などは。くたけて聞え侍れと。強難にはあらず。

なすらへて持とすへし。

四十五番

左持

秋風の吹たにこすは萩のはもね覺さひしき音やなからん

右

ねさめにはあはれかすそふ萩の音やみはてぬ夢の名残成らん

左歌第二の句。ふく夜ならすはとありたきにや。右初句も。只ね覺してと社いはまほしく侍れ。又勝劣難し弁者歟。

四十六番

左持

あけかたの庭の萩原ふく風に露こそあらめ夢も結はす

右

夕まくれおきふく風をつらしとはね覺にきかぬ人やいひけん

左右等同なり。勝劣難し弁歟。

四十七番

左持

ゆふへにははきさらりけりしのゝめの袖も露ちる萩の上風

右

いとゝしく秋のあはれに吹そへてね覺ものうき萩の上風

兩首の心。世常聞ふるし侍り。左は聊まされるにや。

四十八番

左持

萩の葉のそよくはつらしうき秋を忘れんと思ふ夜半のね覺に

右

秋の夜のめさまし草に風すきて枕露けき萩の音哉

右のめさまし草。秋の夜にとりなされて。曉の心そへられ

たる。萬葉の古風尤可レ然にや。左もことなる難なし。まぐへきにあらざるをや。

四十九番

左持

俊通

聞はまつ枕そしめる萩原や曉露をはらふ秋かせ

右

爲信

おりしもあれのきはの萩の音たてゝね覺の空の月を見よとや

右の月。先度愚意の撫巾單。左歌。暫勝とすへし。

五十番

左持

政顯

ふく風の一かたならぬねさめかな軒はに近き松の下萩

右

前内大臣

明かたは月も木葉もかたふきてをく露深き庭の萩原

左歌。下句連歌の跡也。右。月の字さし出さずは。勝へきにや。

五十一番

左持

賢盛

身にそしむ露をね覺の枕にて萩の葉しほる秋のさよ風

右

權大納言通秀卿

あり明の月の下萩ふく風にたか見る夢かつれなかるへき

左の歌。連歌の上下の句の跡也。右の月先度に同。可爲

レ持。

五十二番

左

元連

しき妙のね覺の床におとつれて軒端を過る萩の上風

右持

權大納言信量卿

ね覺とふ鳴の羽かきへれよりも哀數そふ萩の上風
左。第一句いかにそや。右はいさゝかまされる。

五十三番 海邊月

左持

前右大臣

白浪のよわたる月は秋風にかけすみのほるあまのはしたて

右

正三位高清卿

浪までもひかりをそへて玉つ嶋紀のうみ遠く照す月哉

左の秋風は。ふかすともやうに聞え侍り。右の紀の海も。

あまりなるにやあらん。辭案ならは。みれともあかぬ夜半

の月など。萬葉の詞にかゝりてありたき心地とし侍なり。

五十四番

左持

右近大將公敦卿

しなか島あなのゝ海のよるゝは蜚のかるもに月やすむらん

右

從二位明茂卿

こゝろから鹽やくあまの袖の月輝にくもるかけもをしまし

左。あなのゝうみのよるゝのつゝき。浪のあらまほしき

にや。右第五句。不レ宜。かけなうらみこと。なとか讀さり

つらん。持たるへし。

五十五番

左持

權大納言敦秀卿

浪にてる月の桂やわたつ海のかさしにさせる紅葉なるらん

右

沙彌春譽

しほ煙おもはぬ方に曇らしなひけは月の須磨のうら風

左歌。月の桂やわたつ海のかさしになれる風跡宜にや。右

のおもはぬ方も。本歌をとられたるやうなれと。いまい

ひおほせぬにやあらん。左。勝へきにここ。

五十六番

左

わたの原雲路のかきり月晴て浪にのこれる 権大納言實淳卿

右

山のはに月も鏡をかけそふる松浦の浪のよるそさやけき 浦かせの聲

左

ことなる難はなきにや。右の松浦の鏡。光をましてみ 長典宿禰

五十七番

左

しほかまのうらはの煙かせに消て月の光そ空にみちぬる 右衛門督季春卿

右

たこの浦やけをも波に吹ませて月に音する富士の根おろし 爲廣朝臣

左

五十八番 兩首ことなる難なし。左の月の光は。猶見所有にや。可レ勝。 權中納言宣胤卿

左

心なきあまの袖にはをしてるや難波の月のかけそやつる 實隆朝臣

右

あけはまた浪にやいらん松浦かた月よりにしに山のはもなし 左の上月。右の下句。宜やうに聞ゆ。なすらへて可レ爲レ持。 五十九番

左

うら風にもしほの煙ひまはあれと松をくまなる磯の月かけ 左大弁廣光卿

右

心あれや浪のよるくこき出て月になるをの沖津舟人 元長

右

右の上月不レ宜。左可レ勝にや。但三句。立消てとあらまほ 右の上月不レ宜。左可レ勝にや。但三句。立消てとあらまほ 五十九番

左

しきにや。

右

心あれや浪のよるくこき出て月になるをの沖津舟人 元長

右

しきにや。

左

心あれや浪のよるくこき出て月になるをの沖津舟人 元長

六十番

左

松原の梢も遠くかけはれて月にとたえぬ天のはしたて 師著朝臣

右

山みえぬ沖津半天雲晴て月のやとりも浪のうへかな 長恒

左

松の事ならば。月にとたゆるとそいはまほしき。右の 下句。月のやとりもなきとそへたるやう也。沖津半天もこ

右

のましからず。勝劣を論せずもやあらん。

六十一番

左

伊勢の海に波のよるくもさやけき月にかひやひろはん 季經朝臣

右

ふけわたるよさの入海すむ月に松のはしらむ天のはしたて 爲信

左

馬樂の曲。歌からつよくおほゆ。勝とすへし。

六十二番

左

いとふへき山のはもなしわたの原八十嶋わくる波の月かけ 俊通

右

からるをすひゝきの灘のあまのこや舟出しぬらん秋の夜の月 前内大臣

左

左歌。山のはなくとも。八十嶋わくるは。嶋かくれと申 事侍。猶月のさはりに成ぬへくそ覺る。右勝可レ侍。

六十三番

左

わたつ海の千尋の底もくもらしな光をうつす浪の上の月 政顯

右

權大納言通秀卿

あはれそふもしほの煙一すしになにかいとほんなには江の月
右の歌。もしほの煙。月に哀をそふへき事。おほつかなき
にや。左はまされるなるへし。但第三句くもりなはとあら
まほしきにや。

六十四番

左

賢盛

あま人の袖ぬらせとて心ある月もすみけり松かうらしま

右

權大納言信量卿

むらさきのなたかの浦にすむ月のかけをよるくくたく浪哉
左歌松かうら嶋むへ心あるあま人のすみ所には侍れと。
一首の詞のつゝき。いかにそや侍る。右のなたかのうらの
月。よるくかけをくたくなくと宜にや。勝とす。

六十五番

左

元連

雲もなく浪さへゆらのみなと舟かちを絶てや月を見るらん

右

按察使親長卿

浪の下も木のまになりぬすむ月の影よりうへに浮嶋の松
右の浪の下といへるうへは。上の字はなくてもありなん
かし。左浪さへゆらのなと。聊おもひたきやうなれと。か
ちを絶たるみなと船。よるへある心ちし侍り。勝とすへし。

六十六番

左

前右大臣

その原や目數ふりにし帯木のありとはみえぬ雪そかたふく

右

從二位明茂卿

萩か花めてこし鹿のかよひちも雪にあとなき宮城野の原
左歌。目數ふりにしの詞のつゝき。雪そかたふくなくと宜か

らす。右めてこしは。すさめしといひ度にや。又俄に雪の
ふり出たるも心もとなし。持とす。

六十七番

左

右近大將公敦卿

不二の根もなみちの末もをしなへて雪になり行浮嶋か原

右

沙彌奉譽

まよふなり老ぬる馬はなつみつゝかちのゝ原の雪の通路

右。老馬の道をしれるかひもなきにや。左勝たるへし。

六十八番

左

權大納言教秀卿

夜もすからつもれるほとも白雪の朝の原を分やかねまし

右

長典宿禰

やすらへは木の下道もうつもれて雪ふみまよふ宮城のゝ原

左。つもれるほともしらぬならは。わけかぬへきにも一定
しかたきにや。右の第一句も心得かたく侍り。持たるへし。

六十九番

左

權大納言實淳卿

春までにきえずはありともたれとはんさむき野原の雪の下庵

右

爲廣朝臣

夜あらしの音はよはりてこもりえの初瀬のひ原雪つもるらし

左。歌の心は。いまたいひおほせす。又殘雪にもなりぬへ
し。右夜あらしの音はよはりてなと。このましからす。又
持たるへし。

七十番

左

右衛門督季春卿

うつもるゝその黒つかの名さへいまあたちか原にふれる白雪

右

右持

實隆朝臣

冬こもる三輪の山本人はこて雪やひ原のかさしおるらん
左歌。その黒つか不_レ宜。三四句のうつりも心えかたく侍
り。大方名所こそおほく侍るに。あたちか原の黒塚このま
しからず。しらまゆみなとは。雪にもたよりあるにや。鬼
拉歌の舂にをきては。又是非のさたに及へからず。右雪や
ひ原のかさしおるなと宜侍り。勝へし。第二三句こそ猶思
ひたきやうに侍れ。

七十一番

左持

權中納言宣胤卿

けふはまつたれふみわけてしるへせん朝の原の雪の通ち

右持

元長

柴人のゆききもたえぬ大原やみねよりはらふ雪のふゝきに
右歌。衆よりはらふなと。猶おもひたきにや。左さしたる
難なし。まさるにこそ。

七十二番

左持

左大弁廣光卿

見し秋のちくさはかれて白雪の花にうつらぶ宮城のゝ原

右持

長恒

をく見ゆる淺茅か原の冬かれに雪こそあるしたれか住らん
左の千種はかれて。おもひたきにや。右の歌。淺茅原にて
侍るやらん。雪こそあるし。いまた聞ならし侍らす。花月
なとは。あるしともいへるにや。まめやかに管をもて天津
空を窺。蛤にてわたつ海をけるたとへにて侍り。暫勝劣
を論せずもやあらん。

七十三番

左持

師著朝臣

ふるまゝにさやくあらしの音までも雪にしかるゝいな篠原
右持
ふしの根はひとつに見えて白妙の雪もはてなき武藏のゝ原
左。ふるまゝにさやくの詞つゝき。いかにそや聞ゆ。右は
聊まされるにや。但富士の根もとありて。雪にといはまほ
しきにや。

七十四番

左持

季經朝臣

ふみわくる人こそ見えね降つめるしきみか原の雪のあけほの
右持
ふりつもる朝の原のそのまゝに曇るとみえぬ雪の色哉

左右ともに。上句の詞のつゝき。心許なく侍り。可_レ爲_レ持。

七十五番

左持

俊通

ふれとまたつもらぬほとは風さえて雪にもさやく野への篠原

右持

權大納言通秀卿

松の葉のみとりは消て浪の上に雪そさなからうき嶋か原
左の第一句は。ふれといたまと。一文字あまるへき所なり。
又雪にもさやくおほつかなく侍り。風雪の音頗分別しか
たかるへし。右の縁は消ても。雪をへつらへる様也。又持
たるへし。

七十六番

左持

政顯

はゝ木々もありとはみえし冬かれのその原遠くつもる白雪

右持

權大納言信量卿

名にふりしあたちか原のくろ塚もみな白妙につもる雪哉
その原のはゝ木々。あたちの原のくろつか。いつれもさきに出来て。心詞も相似たるにや。持とす。

七十七番

左持

賢盛

吹おくるあなしの山もかき曇りひ原をかけて淡雪ぞ降

右

按察使親長卿

泉かは河なみあるゝ風さえてけふこそ雪をはやみかの原
左歌吹おくるあなしの山。聊珍やうなれと。下にかせのふるまひなければ。たゝまきもくといひても。一首の心は子細なきにや。右はやみかの原。つまりて聞ゆ。本歌の三かの原は。三日の心にもちひたるにや。これもその心にや。又みるこゝろによみたまへるやらん。いかさま持たるへし。

七十八番

左

元連

里遠く賤かふせやもをしなへて只白妙の雪のその原

右持

正三位高濑卿

みほか崎みこしの松はうつもれて浪にも雪やうき嶋か原
左の。里とをくは。あまりたる詞にや。ふせやにても事たりぬへし。右の。うき嶋か原。眺望はまさるへきにや。

七十九番

左持

不遇戀

思ひかねまつこひしなはあひみんと後の世迄も人やまたれん

右

前右大臣
沙彌春譽

後の世にむまれあはゝや戀しにしつらさをいひて心をもみん
左右ともに後世を契る心詞一やうなり。但此世にてたに

もつれなかるへきは。來生とても心もとなく侍り。まつこひしなは。戀しにしの詞。いつれもよろしからず。いかさま持たるへし。

八十番

左持

右近衛大将公敦卿

こひわたるあはれは神もしるらめや天のうき橋かゝる習ひを

右

長典宿禰

はてよいかほすまも浪に袖朽てあはての浦になるゝ憂身は
左。あまのうき橋は。みとのまきはひの根元にては侍れと。あまりにこと遠きにや。右はてよいかになとは。いかにもせんかたたえ忍かたき心もありたきにや。又袖朽ては。かつゝ涙のはてはあらはれ侍るにこそ。いかさま持たるへし。

八十一番

左持

權大納言教秀卿

つれなしや泪ふりそふ時雨にも染えぬ松の同したくひは

右

爲廣朝臣

おもひせく人の心のよと橋はわたらてつらきふしやつきけん
左歌。時雨もそめぬ。松のつれなき心は。いつもきゝふるしたる風情にては侍れと。此一首の鉢。いまたいおほせすやあらん。又忍戀の心にや。いかゝ。右。橋にふしのつきたる證歌不覺悟。ふしつけし淀のわたりなとよめる歌あれとも。それにては侍らし。暫勝劣を存畧する者也。

八十二番

左持

權大納言實淳卿

せめて今契をかけは後の世をあふへき中とたのみてやみん

右

實隆朝臣

おなし世になにへたつらんき玉をみし幻もありとこそきけ
左歌。契をかくるほととの事ならは。後の世を期するにおよ
はすやあらん。結語の詞もよはく聞ゆ。右の方□も勝まで
の事はおほつかなし。持たるへし。

八十三番

左持

右衛門督季春卿

いたつらにたえす心のひくあみをあはての浦に朽はてよとや

右

元長

このまゝにおもひ消なは露の身をつれなき人も哀とやみん

左右の躰等同也。懸隔の嘹劣も侍らぬにや。

八十四番

左持

權中納言宣胤卿

なからへてあふを限りと思ふ身に人もつれなき年やへぬらん

右

長恒

浪こゆる袖のゆふへは玉くしけかはるふたみのうら風そふく

左歌。めつらしからされとも。題の心たしかに侍り。右かは

るふたみのなとは。あはぬ心に宜やうに侍れと。浪こゆる

袖の句えんなるやうにて。聊きゝにくゝ侍り。暫可レ爲持

にや。

八十五番

左持

參議左大弁廣光卿

この儘に逢瀬ならすは水無瀬河ありてかひなき名をや流さん

右

爲信

夜ころへて思ひかけにしこすのといつまで獨立あかさまし

左の初句不レ宜。第二句も。逢瀬しらすはにてあらんかし。

右簾外にたちあかさん事も。退屈すへき心地す。可レ爲持。

八十六番

左

師著朝臣

おもひもやまさ木の露の玉かつらつらなる枝の色も名のみに

右

前内大臣

つれなさそたかひに見ゆる年ふれと靡かぬ人も慕ふうきみも

左歌。愚意おもひわけ侍らす。右は心詞露顯せり。可レ勝に

や。

八十七番

左持

季經朝臣

なひくてふならひもしらぬ槿の花に心をかくるはがなさ

右

權大納言通秀卿

あはれしれよし戀しなん逢ことにかへぬ命も人のためかは

左歌。源氏物語の齋院の事にやと推量し侍れと。一首のし

たては。ひとへに槿花の事のみ聞えたり。右歌もいたたい

ひおほせぬにや。僻案におもひよる分は。第一句はあはれ

しらはと。一もしあまされ所也。かへぬも。かふるとあり

たきにや。いかさま持たるへし。

八十八番

左持

俊通

おもはぬは慰めもせしたのめてふ偽をたにいかてきかまし

右

權大納言信量卿

逢事もなきみちのくのいつまでか心のうらをとふのすかこも

左歌。第二三の句の詞のつゝき。いかにそや。一首の躰も

不レ宜にたり。右もなきみちのく。おもひたきにや。又一

首のこゝろ。卜戀の心なるへし。又持とすへきにや。

八十九番

左持

政顯

あふせなき水のあはれと思ひしれわか中河のよとむはかりに

右

按察使親長卿

美まししちのはしき錦木もかきりありける日敷をそまつ

左の水のあはれ。一句の中の詞にては。顔聞にくきにや。

右の。しちのはしき句。百夜錦木の千束。誠にかきり

あるやうなれと。一首の始末。猶思惟ありたきにや。

九十番

左持

賢盛

さすはひの心よいかにもこそはわか紫におもひそむとも

右

正三位高清卿

別れちのうきしらぬのみなくさみに思なせとや人のつれなき

左。初句不_レ宜にいたり。又題のこゝろもたしかならず。右

のうきしらぬのみも。詞た_ラさる心ちす。持たるへし。

九十一番

左持

元連

つゐにさて秋まつ頃のおもひにも紅葉のつとを限とやみる

右

從二位明茂卿

つれなしと恨はつるけ前の世の契をしらぬ我身成けり

左歌。何事と弁出しかたし。伊勢物語に。君かためたおれ

る枝は春なからの歌をおもへるにや。又源氏の角總の巻

に。秋のけしきもしらすかほなる枝につけてやりし文の

事にて侍るやらん。いかさま不_レ逢戀の心には。ひとか

なへりともおほえす。右歌。契をしらぬは。むくひをしらぬ

にや侍らん。左の落居せさる間。暫勝劣を不定やあらん。

九十二番

左

顯戀

ゆく末のあふせともかな泪川せくにもれぬる袖はうらめし

右持

長典宿禰

名にそ立忍ふの里の夕けふりきえぬおもひもよにしられて

左歌の第四句。せくにせかれぬとありたきにや。忍ふのさ

との夕けふりは。立まされるにやあらん。

九十三番

左

右近衛大將公敦卿

〔涙川也〕

せかれぬ袖のあた浪よたつ名をせめて逢にかへなて

右持

爲廣朝臣

柏木やむすひし露のことの葉をあたにも風の何ちらしけん

左歌。あふにかふる立名ならば。戀の本意は満足せるにや。

せめての三もし。猶も不足なる事あるへくや。右の柏木の

ことは。茵の下の落文にや。艶なる事の例なれは。しはら

く勝とすへし。

九十四番

左持

權大納言教秀卿

名もしるきおほる月夜の契こそ世にもれいつる例成けれ

右

實隆朝臣

えそしらぬたつ名はきても等閑に我やつみし人やもらし

左。これも又彼物語をおもひつるにや。いかさま兩首の鉢。

勝劣も侍らぬものかな。

九十五番

左持

權大納言實淳卿

よしさらば浮名にかへて中々に人のとかめぬ契りともかな

右

元 長

あさはかにむすひはやらぬ水莖のなにとて跡は流いてけん
左歌。うき名にかへてとありて。人のとかめぬは。いかに
心得へきにや。右も水くきのあとゝつづけられては。聊こ
ころもとなきやうなり。持たるへし。

九十六番

左持

右衛門督季春卿

もらさしの人の契やかはるらんさらてはよもと思ふうき名を

右

長 恒

ぬれわふとおさへし袖を袖にて泪をめいたす秋の色哉
左。さらてはよもの詞聞にくし。又人の方よりうき名をも
らさん事も情なきにや。右の歌。巧妙には聞え侍れと。袖
を袖。おもひたきにや。然は只時雨にてとありても。こと
はりは聞ゆへきにや。持たるへし。

九十七番

左持

權中納言宣胤卿

いつのまにうき名ははやくみちのくの忍かひなき中と成けん
右

爲 信

あさかりし心しられて鳩とりのみかくれはてぬ浪のうへ哉

左歌。うき名のみつる事おほつかなし。右のあさかりしも。
いひおほせぬにや侍らん。持たるへし。僻案には。うき名の
みつるは。世にみちたる心にや。然は憂名は世にもみちの
くとあるへきにこそ。右の淺かりしも。水の淺にては戀の
心にかに心得へきそや。古今のなををし鳥の水をあさ
みかくるとすれとのやうに。理もやかてきこゆこそよく
は侍らめ。抑第一二句を。袖にをく心あさうはなとはいか

か侍るへき。我も人も稽古のため。所年を申侍るなり。比
興々。

九十八番

左持

參議左大弁廣光卿

せきあえぬ袖よりあまる涙こそなかれ行名のしるへ成けれ

右

前内大臣

いささらは同じ心にいひ出てかこつかなきうき名ともみん
左。殊なる難は侍らねとも。朝夕みなれたる心し侍り。右
は。あまりに芳心なきやうなり。持たるへし。右のうたの
心。たとひ我名はたつとも。人のためにはいひかくさんこ
そせめての情にはなり侍らめ。又終には本意をとくるた
よりにもなりなんかし。次なから愚意の通を申侍るなり。

九十九番

左持

師著朝臣

とし月は忍ふになしてなくさみぬつれなき程を顯てしる

右

權大納言通秀卿

さても猶たれにかこたんせきかぬる我涙よりなかつうき名を
左歌。未いひおほせず。大方忍ほととの事ならは。あらはれ
ては中々なく。おもひをたつへき中なるへければ。人の
つれなさも。とかなるまじきにこそ。右も前番の左の心に
同じ。持たるへきにや。

百番

左持

季經朝臣

かはり行人の心のおくよりもしのふのさとの名をもらしけん
右

權大納言信量卿

左。里の名をもらすとは。いかに心得へきそや。里の字はな
くとも。おくの忍ふとはしられ侍らんかし。右もくたゝ
しきやうなり。持たるへし。

百一番

左將

俊通

下葉にそ露はむすひし柏木のあやしきまでの色は恨めし

右

按察使親長卿

うしやたゝ櫻につけし言のはゝ世にちりそむる初めと思へは

左の柏木。是も物語をとられ侍るにや。あやしきまでの色。

おもひわかれぬ心ちし侍り。右又おなし物語の心にや。但

百二番

左將

政顯

こひわたる人に心をそめ河の深くも色にいてにけるかな

右

正三位高清卿

霜ならてなみたの露にあらはれぬおもふ心の松のみさほは

左。ことなる難なし。右歌。露はかりにても事たりぬへし。

霜のをき所詮なきにや。左勝たるへし。

百三番

左將

賢盛

うき名さへなかれ出けり泪川おもふ心の底もあらはに

右

從二位明茂卿

いかにせんねにあらはるゝいその松我袖かけて浪はこえつゝ

兩首の舳同條也。持たるへし。管見には左歌初句。うき名

にそはてはなかるゝなどありたきにや。右も第一句。うら

みかれ。終詞浪もこえけるなとやあらまほしき。いかゝ。

百四番

左將

元連

うきしつみおもひ亂れて難波江や浪によるもの跡を見すらん

右

沙彌春譽

はかなしややかてうき名にたち花の小嶋に契る末はとをらて

左。題の心はおほつかなきやうなれと。一首の舳歌めきて

聞え侍り。右も彼うき舟の君の事にや。首尾の詞このまし

からす。左のかちとすへし。

百五番

左將

前右大臣

夢にさへ又もうき世をみせしとや枕におつる軒の山かせ

右

爲廣朝臣

山かけはあらしも瀧も聲なれや心とさむる夜半の夢かな

左。右とも。ことなる難なし。左は卿まされるにや。可レ爲

レ勝。

百六番

左將

右近衛大將公敦卿

きゝなれて夢のうちにね覺にも只やま里は松風の音

右

實隆朝臣

夢路さへ身をうき草のたくひとやさそふ水ある山川の音

左歌。夢のうちに松かせを聞む事。おほつかなし。右は山家

の心たしかならず。持たるへし。

百七番

左將

權大納言敦秀卿

山さとにかりねしてたに世のなかをかけはなれたる夢の音橋

右

元長

おとろかて夢むすふらん山深みあらしに馴る夜半の枕は

右歌。二三句の詞つゝき。このましからず。又おとろかても
剩語なるへし。左勝れるにこそ。但第二句は。かりねせ
しよりとあらまほしきにや。

百八番

左持

山深みすむともしらていかなれは夢ちにかよふ人め成らん

權大納言實淳卿

右

長恒

やすく身をおく山住の夜の夢にさそはぬ友の見えてくやしき

左右の歌。ともに夢中に人のとふを厭却せる心なり。
一首の射も等同也。いかさま持たるへし。抑夢といふ事は。
夜のおもひなれは。我心にみゆるものなり。すむともしら
てなど。人のとかのやうに難心得。又山深き住家までも。
友を待心はあるへきそかし。人めをいとふも。心もとなき
にや。右やすく身をとうち出たる詞。穩便ならず見えてく
やしきも。わざとみたる夢のやうに聞え侍り。いか。僻
案の至也。恐惶々々。

百九番

左持

松の戸にさすかうき世を思ねの夢をはかなみあらし吹也

右衛門督季春卿

右

爲信

すゑかけよ心のいほを山ふかくむすふとみつる夢のうき橋

左。松の戸にさしこもる身の。うき世をおもひねにせん事
は。無道心に侍るにや。又松の戸をさすかとつゝけたきに
やあらん。右歌もいまた夢中の事にて。しかと山居のこゝ
ろは侍らぬにや。いかさま持たるへし。

百十番

左

故郷の都にかへる夢をたにさそふのきはの山風そうき

右持

權中納言宣胤卿

山里のとはれしにはを今朝みればあとなき夢の夜はの通路

左。古郷の都。一にて事たりぬへきにや。右頗宜。勝へきに

や。但雪などのありぬへくこそおはえ侍れ。

百十一番

左

山里にたえてすむ身は夢ならて浮世にかへる道やなからん

右持

參議左大弁廣光卿

をのつからうき世の夢も山ふかみまた住なれぬ程や見ゆ覽

左右ともに浮世を夢に見るにとりて。左は世にかへらま

ほしき心あり。山住しても益なくや侍らん。右はことほり

にかなひ侍り。まされるにやあらん。

百十二番

左持

いとひすむ心にもにす山里の夢はうき世になにかよふらん

卿著朝臣

右

のかれはとおもひしものを山里もすめは浮世にかへる夢かな

左右のこと葉同躰也。持たるへし。

百十三番

左

うつしには人めも草もかれにけり夢たにみえよ冬のやま里

右持

季經朝臣

夢かよふあとはありとも山ふかみ憂世にかへる道はのこさし

右 沙彌春譽

峯の庵に九かさねの雲消て夢もあらしの風を聞ゆる

左 世をいとふにいたりては。まれにみても無益なるにや。

又よきよの言葉は。ふるめきたり。をき所によりて。よくも

あしくもなる事なり。右歌。忠孝か長歌をおもへるにや。夢

雲の故事。巫山の神女の事にも思なざるゝ様にて。聊憚あ

る心地す。持たるへし。

百十七番 左 侍 元 連

山里にとひこし人をおもひねの夢ちもたゆる 峯の松風

右 長典宿禰

奥山のあらしや宿にねても猶うき世にかよふ夢のあはれさ

左右の歌。をのゝおもふすちをよまれ侍り。いづれをよ

し。いづれをあしともいひかたし。しはらく持たるへし。

百十八番 左 侍 述懷

いかにせん定めなき世になくさめとうきはかはらぬ老の泪を

右 前右大臣

あすか川名にこそたてれ世にすめは心の水之淵は瀬になる

左歌。世間の無常。老後の述懷。事あたらしきやうなれと。

七句餘の拙翁。泪もろき事につれて。双袖をうるほすもの

ならし。右あすか川名にこそたてれば。聊心得かたく侍り。

心の水淵をも。短慮未思わけす。左勝へきにや。

百十九番 左 右近衛大將公敦卿

遠からぬむかしと今はたち花になれし雲井のみはし戀らし

左 賢 盛

まれにみる枕はよきよ夢の世をいとふみ山のあらし成とも

百十六番 左 賢 盛

左 冬。山里。人めも草もかれん事は。本歌の心異論におよ

はす。さらんからに。夢にたに見えよとねかへる事。おほつ

かなし。又人目はさも社侍らめ。草をも夢みたき心あり。

百十四番 左 俊 通

流のをと松の風やすてゝすむうき世にかよふ夢さそふらん

右 正三位高清卿

九重の雲井をみてし夢は覺て軒はの山にのこる松かせ

左。ことなる難なし。但世の常の心なり。右。九重の雲井を

みつる夢。子細あるやうなれと。たとへは忠臣の君をおも

ふ心。夢中に早朝せん事。先蹤の有無にはよるへからす。し

はらく勝とすへし。但第三句。文字をあまされたるゆへに。

さへて聞えたり。只はもしをのそかるへきにや。

百十五番 左 政 顯

遭れきてすむなる山の奥までは浮世の夢の見えすもあらなん

右 從二位明茂卿

吹夜半もさすかとたえて山里のあらしやみする夢の浮橋

右。上の句のつゝき。いかにそや。作者は夢のとたえにこそ

詠せられけめ。あらしのとたえにもまちあひて聞え侍り。

左のうた。こゝろさし叶ふるによりて可爲勝。

百十六番

右勝

元長

いつまでそくになれはひとりぬて身のうき事をなけく心も
左歌。いかさま。右のつかさの所詠とはみたまへと。一はう
の匂つくり。いまた沈吟のたらぬとおほえたる所あるに
や。右貫之が長歌の心。すてかたく侍り。勝へきにや。

百二十番

左勝

権大納言敦秀卿

とし浪のよるくなくかひもなし雪も螢もあつめぬみは

右

長恒

さきかゝる色をそたのむ人ことのことは花のかげの朽木も
左。よるく歎はいかにそや。十二時中此うれへはあるへ
きにこそ。右歌。他人の詞花をかけの朽木のうらやむ心に
や。いまたいひおほせぬ心地し侍り。心は花になさはなり
なんとこそ古人もよみ侍れ。かけの朽木とおもひくつを
れん事は。うたであるへきにや。たとひ赤人丸の神妙の
風にこそ。くひすをつかすとも。定家家隆の妖艶の姿に肩
をならへむ事は。たゝ心さしのなすわさなるへし。

百二十一番

左勝

権大納言實淳卿

仕ふべき我身ひとつと頼ますはうきにまかせて世をや厭はん

右

爲信

おろかなる身は歎くともいにしへに立もめつらし和歌の浦波
左は。一流斷絶せん事をなけく似れとも。その心たしか
にきこえず。右は數代秘歴の跡をおもへるに似れとも。そ
の詞いまたいひおほせず。なすらへて可爲侍。

百廿二番

左勝

右衛門督季春卿

位山代々のあとまてのほりきて年たかき身そおとろかれぬる

右

前内大臣

すこしかねて月日そ遅きわひ人は老せぬ門にすむみなねと
左の位山。いさゝかおもひたき事も侍れと。大方子細なき
にや。右不老門の日月遲事。さる事に侍れと。初五字な
と俗に聞ゆ。近日の暮たらく。たれもさこそおもひ侍れと。
歌におきては左まされるにや。

百廿三番

左勝

権中納言宣胤卿

身をたひと思ひそわふるとしをへてすむ宿とても主ならねは

右

権大納言通秀卿

なをたのめ神もわすれし天地とともにといひし君か代なれや
左歌。これも近日借屋の一所不住の事をなけき侍るにや。
三かさ山のふもとに。數年ををくる事なれは。おもひしら
れ侍り。右天地とともにといへる神代のみことのり。誠に
さりとともたのみをかくるはかりなり。なすらへて持と
すへし。

百廿四番

左勝

參議左大弁廣光卿

更にまた日に三たひもやかへりみん一かたならす愚なる身は

右

権大納言信量卿

いつまでそうきふし繁きしけ糸の苦しやかゝる亂れあるよは
左。三省の工夫。曾參かあとをつくへき。頗有かたかるへ
し。右。あまりに糸の秀句にまとはれたり。又持たるへし。

百廿五番

左持

わかのうらや世々にのこせしあともなく沙千の千鳥浪に鳴也

右

師著朝臣
按察使親長卿

四とせまてなかくふへしとおもひきや君に別し時の心は

左歌。和歌の浦の千鳥。此風情は耳なれ侍り。世々にのこせしもあるへきにや。又世々の詞はかりにて。我みの事になるへき事も。いさゝか心もとなし。右歌。その身にとりての思をのふるうへは。是非をつけかたし。暫勝劣をさためすやあらん。

百廿六番

左持

季經朝臣

あまてらす神そしるらし君か世をいつる日ことにいのる心は

右

正三位高清卿

いたつらに光のかけををくりきて愚なる身よ誰にかこたん

左。君か代をいのる心。普天の下誰かをとることは有へき。乍去神かくるまでの事はことゝしきにや。それとても又各の志なるへし。右光陰可レ惜。時不レ待人。まことにわれも人も油斷のみにてあかしくらす。なけきてもなけくへき事也。持とすへし。

百廿七番

左持

俊通

うしといふたゝ大方の世の中も人にはなにとかはる思ひそ

右

從二位明茂卿

老の世におもひこそをけ我家のみちをつきては誰かつかへん左。大方の世のうさも。貴賤貧富によりてかはる心にや。さもありぬへし。右は家業の斷絶をなけくとおほえたり。

力なきこととはいひなから。老嫗の泪。袂をうるほすものなるへし。持とす。

百廿八番

左持

政顯

雲井にそいそきつかふる天の戸のあけの袂の數ならぬ身も

右

沙彌春譽

すつる身やきすかあはれと三笠山釋迦牟尼佛の出し世なれは左。天の戸のあけの袂など。一ふしあるににたれとも。雲井にそいそきつかふるなといへるわたり。宜もはへらす。右の佛號おもひもよらぬ事の出來せるにこそ。かよふの經文佛名などは。獨吟の五十首百首などには。雅意にまかすへし。歌合などには。いかにも詞の中に詞をえらひ。心の外に心をたつぬへきにや。歌の本意にあらされは。よくとも勝ことはありかたかるへし。殊に祖神第一の御殿の垂迹をあらはされたる事なれば。判者の身にあたりて。是非をいはす勝たるへきよし申たきやうなれと。和歌のみちにつきて。持と申侍るへし。

百廿九番

左持

賢盛

しるへせよ清き洛にことの葉の玉ひろふてふわかの浦人

右

長典宿禰

世のおさめ正しき道をあふきても猶すて難き身ををろかなる左。しるへすへきわかの浦人も。としき時節なれば。心元なくおほえたり。右。治世安樂の時にあたりて。堪忍にをよはさること。誠に不便にはおほえ侍れ。又持たるへし。

百三十番

左

元連

右勝

爲廣朝臣

とにかくに限りある身をいとはしな愚かなるにもよらぬ憂世は今更に心くたけて和歌のうらやかへらぬ浪の跡をしそ思ふ

左。有涯の境界。賢愚をえらはぬ心にや。右かへらぬ浪なと。舊跡をおもへり。歌合一巻の結句に優にして。しはらく勝とすへし。

右親長卿家歌合以百花庵宗固本及古寫一本按合

武州江戸歌合 文明六年六月十七日

心敬判

一番 海上夕立

左勝

平盛

うちさやき夕立雲もはや船はをくれてそ行興津しほ風

右

心敬

しくれめく雨のあら海秋はまた遠嶋かけてめくる雲哉

左

孝範

しほをふく興のくしらのわさならて一すちくもる夕立の空

右勝

道灌

海原や水まくたつの雲のなみはやくもかへす夕立の雨

左持

瑞泉坊

とにかくに舟路そつらき夕立のはれてはくもる興つしほ風

右

資常

見るまゝに日かけかたよる遠嶋やかゝりもはてぬ夕立の雲

四番

左勝

好繼

めにかゝる山さへあらぬ海原やなみにたゝよふ夕立の雲

右

卜巖

興津なみしほひを遠み色消て雲そみちくる白雨の空

五番

惠仲

海原やまきをく舟の笛さへにとりあへぬまの夕立の雨

右 音 響

音あらかなたの波路のしほ風に歸れはむかふふたちの空
六番

左持 資 俊

たのみこし山の端さへにかきくもる興津舟ちの夕立の空

右 資 雄

きおひきぬ汐かせはやみ雲かけていそく小舟のあとの夕立
七番

左持 長 治

いかりうつほともなくてやゆふたちの跡よりかゝる沖つ舟人

右 快 承

海士小舟夕立波にかへりかね入江をよそにぬるゝ雨かな
八番

左(側關) 珠 阿

海原やつりの小舟になるかみのうをの命をやすめぬるかな

右 宗 信

見るくも猶かさなりて松陰の海すこしある夕立の雲
九番

左持 ト 巖

み山ちやむすはぬ水もをのつからこぼるはかりの袖のしほ風

右 瑞 泉 坊

身にしめと秋夜はまたんみ山邊の夕の陰に櫓の下かせ
十番

左 資 常

風かよふ道さへたゆるしけ山も我からならずすゝの篠原

右持 好 繼

風のをと水のひゝきも笹の葉のみやまは夏のかけとしもなし
十一番

左持 長 治

かけふかく横立山の高ねより落くる水の音ぞ涼しき

右 惠 仲

奥はたゝむすふともなき山の井の浅くはおもひいらぬ物から
十二番

左持 音 響

いかにせん又そとひこむ夏の日ももらぬ深山の櫓の下庵

右 資 俊

夕まくれしらぬみやまのやすらひに夏をわするゝ櫓の下風
十三番

左持 平 盛

世中をおもひとらても山ふかみいてかてにする木々の下かせ

右 道 灌

なをさりのすゝのあみめをならせとも嵐の枕秋とたになし
十四番

左持 快 承

わすれてそ秋におとろく篠のはのみやまかくれの露の夕くれ

右 珠 阿

うつり行月日もわかぬ山なから秋やゝちかき櫓のした風
十五番

左持 資 忠

夏の日をよそにみやまのから衣たもとすゝき瀧の音かな

右 資 雄

こぬ秋に露もこぼれてさゝの葉の深山のあらし面かけにたつ
十六番

左

心 敬

春も猶松の雪たに消さりしみ山はまたき秋かせそ吹

右

孝 範

さゝのはに霜こそあらめみしかよをいつとみやまの月の下風
十七番

左

宗 信

恨めしなさても一夜のへたてなくまつと計りの月日へよとや

右

瑞 泉 坊

誰ために名をはとゝめん夕月夜有明までに影をならへて
十八番

左(判調)

好 繼

さりともと待に聞こそかなしけれこぬ夜つもり浦風の聲

右

資 雄

いきてよにあすやはまたん恨てもいく有明にこりぬ命そ
十九番

左

惠 仲

有明の月はかりたにつれなくはふくるよことの空もかこたし

右

音 譽

いつをさて限ならましよなくを月にかこては有明のそら
廿番

左

資 俊

夜をかされ待しかひなくこぬ人は我なみたこそかたみ成けれ

右

ト 巖

今こもとほのかたらひしみか月を有明の空に待ならへとや

廿一番

左持

長 治

敷妙のしのふの衣よることにまつをならへてとかぬひもかな

右

快 承

夜を重ねくつるはかりの小夜衣いかゝは夢にかへしてもみん
廿二番

左

珠 阿

習ひこし心の程もわすられてあすとうらみんわか身ともなし

右

資 忠

山のはにいく夜むなしき涙ともわか有明は人しれすして
廿三番

左(判調)

道 灌

かきくとき數へし夜はの心さへいかによはりて言の葉もなき

右

心 敬

有明にめくるやいくよ小車のしちをむなしき床の月影
廿四番

左持

孝 範

今夜はと月のすかたのかはるまてたのめぬ空を詠なれぬる

右

平 盛

いくめぐり有明になる月そとも見さらん人は猶やまたまし

心 敬 持一 負二

平 盛 勝二 持一

道 灌 勝二 持一

孝 範 勝一 持一 負一

資 雄

音 譽

珠 阿

資 俊

負三

持一 負二

持一 負二

持一 負二

西山室志

好繼 勝二持一

快承 持三

卜巖 勝一持一負一

資常 持一負二

宗信 勝一持一

瑞泉坊 持一負二

惠仲 勝二持一

資忠 勝二

長治 持二負一

判者

心敬

講師

平盛

陪翁云。種桃無李實。夫太田道灌者。源三位賴政十代之後胤也。左文右武之美譽芳聲尤喧于世。故於武城一張行於此歌合。招心敬法印一仰判者了。自歌英雄拔群也。而今從灌公六代之孫枝。太田備中守源朝臣資宗。令臆寫之次。八番右之和歌一篇漏脫可補之云々。寔雖似續貂尾。此番當持歟。若依レ之可免其罪。但後生胡處可笑耳。

寛永十三年五月十八日

光臣
亞槐 藤角

右武州江戸歌合以屋代弘賢本按

群書類從卷第二百十

和歌部六十五歌合三十一

文明九年七月七日七首歌合

題

海邊七夕

折草花

晴夜月

歎無名戀

不憑戀

山家雨

砌下有松

作者

左

後土御門院

女房

仁科寺
入道親王道永

入道前左近衛大將藤原公數女

按察使藤原親長

參議左近衛中將藤原季經

藏人頭右近衛權中將藤原實隆朝臣

右

後土御門院

前左大臣

亮胤法親王

內大臣

伏見

式部卿邦高親王

前左大臣空

權大納言藤原季春

勾頭內侍

西三條

後北河院女

安禪寺宮

後土御門院

入道前左大臣女

權大納言藤原教秀

海住山

從二位藤原高清

左近衛權中將藤原爲廣朝臣

判者

一條禪閣兼良

一番 海邊七夕

左持

心なきあまも今夜は藻鹽草かきて手向よ星合のはま

右

鵲の翅にかけよ七夕の今よひ行あひの天のはしたて

左ふ月七日はよの中の事として星合の空を詠め水か

け草のことの葉におもひの露をしたてつゝ手向にかふ

る目なりけり心なき浦のあま人も世にしたかふ習ひな

れはとはたる船のかちのはに思ひをよせて藻鹽草かき

あつむる程のしわさはなとかなからんとなるへし右あ

まの橋たては神代のむかし女神おかみのあまくだり給

ひしあまのうきはしといへる一説有しからは二の星の

行あひのかよひちたよりありといふへし鵲のはしは

二の鳥の翅をならへて橋とせるにや又橋は別に有て翅

御泉

參議右大弁藤原量光

右近衛權中將藤原實興朝臣

に是をかくるにや。いつれとさためかたければ。詞のたよりにしたかひて。ともかくもよからむは。有かたかるへしとも覺えず。またかさゝきは。まづは鳥を申侍れと。さむきすさきの驚をも。源氏物語に鶴と名付侍にや。是によりて家隆卿歌にも。鶴のわたすやいつこ夕霜の雲井にしろき峯のかけはしとよみ侍にこそ。

二番

左

浪こさむ恨はあらし七夕の絶ぬちきりのすゑの松山

右

安禪寺宮

星あひの手向に須磨のあま衣かすてふ事もまととなるらん
浪こさむうらみはあらしと侍る。彼あたし心もなき星のちきりを。松山のなみにかけてよまれ侍り。又かすてふまととなるは。須磨のあまの鹽焼衣おさをあらみといへる歌をとられ侍れと。手向とありて。又かすと侍れは。同じ事のやうに聞え侍り。かすてふ事のまととなる心に取なされ侍しは。君かきまさぬといへる和歌の心にかゝりて。歌の餘情も侍らんかし。思なる心には思ひよる一ふしを申侍るなり。左ことなる難なきにや。

三番

左

けふといへと手向はよその星^{鮎イ}鮎やあらぬかちとる秋の舟人

右

堯胤法親王

人なみに袖をかすてふけふのみやあまの衣もほしあひの空手向はよそのほし鮎や。作者の心には。手むけは爰のほし鮎にはなき心によまれ侍れと。詞のうつり。いかにそや聞

え侍り。又手向には袖をきるなと。古人も讀れ侍れと。此歌に取ては。袖はかりをかすやうにきこゆ。如何。持たるへし。

四番

左

心なきあまもや今夜人なみに鹽たれ衣ほしにかすらん

右

入道前左大臣女

七夕はいかに契て松山にこそてふ波のなきよなるらん
人なみにあまの心をかす衣は。うへにもみえ侍れと。心なきあま人と侍れは。人なみにかす心は同じ事なから。いひおほせて聞え侍り。又鹽たれ衣星にかすらむも宜侍り。松川のなみも。すきつる番に打出侍れは。此歌にとりては。かならず波のこゆへきやうにきこゆ。本歌の心に相違し侍り。左まさされとや申侍らむ。

五番

左

七夕に今夜かしてやしほたるゝあまの衣も片時ほすらん

右

内大臣

星あひのやすの川原に伊勢の海の神代の昔思ひ出らん
左。有のまゝに云くたされて。思ひ入たる所侍らぬにや。右。神代のむかしは天照太神のそさのおの尊。あまの八十川原をへたてゝ。いせの海にもよりきたらぬことに侍れは。よもさまでは侍らし。かの國に星あひの濱といふ所のあるにつきて。もし子細ある事にや。もとよりつりをもて。あまつくみをはかる事にて侍れは。それまでの事もいまた及侍らず。左。たしかなるにつきて。しはらく可^レ爲

六番 レ勝哉。

左持

星あひの空にはたれか鶴のよりはににたる天の橋たて

右

權大納言藤原敦秀

暮ぬとて釣する海士はかへる也今やいつらむ天の川船

天の橋立。かさゝきのよりはに似たる事は。空にはかりか
たかるへし。にたるの文しにては。なくともありなんかし。

又天川は。かた野にちかき名所にて。業平朝臣も。七夕つ
めに宿からむとは。おなし名につきてよみ侍り。七夕のこ
ころなくは。ひさかたのなとゝいはすは。なを名所のあま
の川にや成侍らん。しはらく持とすへし。

七番

左持

按察使藤原親長

けふといへは名にもあひあふ星嶋特イや鹽なれ衣海士もかすらん

右

從二位藤原高清

四方の海の波にもイや今夜七夕のとわたる船のかけを漕らむ

左。一二句よろしからす侍り。右かけを漕らむも。誰にて
もこきてをいはすは。猶大やうにや侍らん。勝負わきまへ
かたし。

八番

左持

勾當内侍

伊勢のあまも茹て手向よ七夕の年に稀なる中のみるめを

右

參議右大弁藤原量光

名にしおふ空にかよひて星合の濱へ涼しき秋のはつかせ
左。としにまれなる中のみるめを。右。濱邊涼しき秋の初

九番

左持

參議左近衛中將藤原季經

浦風や浪のをすけてからことを手向にすらん星あひの空

右

左近衛權中將藤原爲廣朝臣

袖の上やこよひほさまし七夕の逢瀬の浦の秋のはつ風

浪のをすけてからことをなとは。和歌の詞といひ。一首
の舳もあしからす聞え侍り。七夕の逢瀬のうら。みもとを
き名所にては侍れと。よりきたれるやうには侍り。たゝし
七夕のあふせのうらによる浪のよるとはすれとたちかへ
りつゝ。中務卿宗尊親王の歌と。ある草子に見及び侍り。
作者はしらすして。讀合侍れと。歌合なとにけ引出さるゝ
か不幸とも申。又高名になることの侍るなり。すてに同類
あるうへに。始の五七もいかにそや聞え侍り。左無難につ
きて勝へきにや。

十番

左持

藏人頭右近衛權中將藤原實隆朝臣

枯はてぬ江にこそありけれ難波かた芦のひとよの星の契りは

右

右近衛權中將藤原實興朝臣

手向とや空に聞えし星合の折からことの浪のしらへは
芦はかるゝ草なれば。枯はてぬ江には。いかてかはり侍る
へき。からことの調も。さきにはや耳にふれ侍れと。是は
調子もひきく聞ゆ。亦二句のてにはも。聞えんにてあるへ
きにや。しはらくなすらへて持とすへし。

十一番 折草花

左持

邦高親王

秋風のさそはぬさきと折袖に露はみたすな花の萩原

右

入道前左大臣女

おらは落とらはけぬとも萩か枝のつゆ外にみん花の色かは
折は落ぬへき萩の露。源氏物語の詞には侍れと。詞のつゝ
き。いかにそや聞え侍る。つゆほかにみむも。よろしから
ざるにや。左ことなる難なかるへし。

十二番

左持

女房

月草の花も咲野の女郎花移るこゝろに手折佐ぬる

右

堯胤法親王

秋萩の色に心を盡してもあかすや袖に猶手折まし
月草のはなに移ふ心ながら。女郎花を手折かね侍り。兩人
を思ひ。こひの心にかよひておかしからざるにあらず。右
も。さしたる難はみえ侍らねとも。珍しからぬ心地し侍れ
は。月草の色は猶そめまして侍るにや。

十三番

左持

前左大臣室

いつれとも折そわつらふ花の色千種にみゆる野への錦は

右

前左大臣

まてしはし萩かるおのこ一枝を折たに惜き岡のへの秋
千種の花のにしきは。折わつらふ心。まことにいひおほせ
侍。右かの岡に萩かるおのこは。戀の心なるを。季に取な
され侍。又おるたにおしきなとは。花にめてたるこゝろ。
わりなく聞え侍り。持とすへくや。

十四番

左持

入道親王道永

手折てもたゝ露の間の色やけにやかて移ふ榎の花

右

安禪寺宮

手折ともつきしとそおもふ武藏野や限もみえぬ花の千種は
左の榎。源氏の移るてふ名はつゝめともなと侍し事。おも
ひ出ぬには侍らねとも。露のまの色と有て。やかて移ふ
は。同じ事のやうに聞え侍り。右むさし野のかきりも知ら
ぬ千種は。たとひ朝な夕なに。あけまきなとを入てかると
も。つきぬへきことにあらざるを。手折ともつきしとそおも
ふなど。あらましことにいふへきことにあらざるに
や。經信卿の。君か代に此ことはをよみ侍る。かやうの事
は。まことにことほりにかなひ侍るへし。

十五番

左持

季經卿

過かてに折てそみつる女郎花つよき心もあらしと思へは

右

量光卿

手折より風にしらせぬ秋萩のちらて移ふ色やみてまし
つよからぬは女の心なれば。女郎花によそへられ侍る。一
ふしなきにあらず。ちらて移ふも。其ことはりなきにあら
ず。なすらへて持とすへし。

十六番

左持

親長卿

置露はみたれにけりな誰しかも認て折つる秋萩の花
右
をのつから分る野風に袖かけてなひけは手折女郎花哉
内大臣

誰しかもとめて折つる秋萩は。古今の歌を思へる。そしりと
ころは侍らねと。もとめての詞。かの本歌は。春霞たち
かくすと侍れは。認てことほりきこえ侍り。是も其心。上
の詞に有たきにや。又女郎花なひけは手折は。心ならず。
ゆくてに手折やうにきこゆ。さらすとも。名にめて。は手
折へき花にこそ侍らめ。

十七番

左持

入道前左大將公數女
袖ふれて手折まかきの萩か花残すかたえは露もちらさし

右

教秀卿

落ぬへき露のかすく心地して其まゝ手折野への秋萩
左。のこすかた枝はおふのうらなしなとの心ちす。露もち
らさしも。いかゝとおほえ侍り。右歌。折ては落そしぬへ
きとこそ。萩の露をはふるくも讀侍るを。露のかすく、お
とさす折へきことは。よにありかたかるへし。又萩の露玉
にぬかむととれはけぬとも申侍るは。いかにも折らてこ
そ露の見所は侍らめ。

十八番

左持

實隆朝臣

白妙の袖に手折は女郎花尾花こきませかきすとやみむ

右

爲廣朝臣

折からにきえなむとする玉さゝのあられもしるし萩の上の露
花すゝきは。ほに出てまねく袖とはよみ侍れと。白妙の
袖。なくはこそあらめ。それを尾花と見なさむ事いかゝ。又
尾花はかさす程のはなにも侍らぬにや。右消なんとする
玉篠のあられ。萩の露なとは。かの物語に。いたくかはりた

る所も侍らぬうへ。あられもさしいて聞え侍り。いかゝ。

十九番

左

季春卿

百敷の花の錦になをさりの我袖ふれて折もはつかし

右持

高清卿

手折きてうき名やたゝん女郎花はなの心もしらぬ物ゆへ
左。なをさりの袖は。たとへは大貳三位か。たかなをさり
の袖かふれけむと。梅の歌によめるに。おもひなすらへ侍
れと。はつかしの詞。是又松のおもはむ事もと。古へも讀
侍れと。このましからぬうへ。此一首にとりては。恥かし
と侍らすとも。其心はきこえ侍るへきにや。右女郎花仇の
名にやたちなんと侍れは。うき名やたゝんは。さもこそ侍
らめ。心もしらぬなとは。いひおほせぬやうに侍れと。歌
めきて侍れは。増るとや申侍らん。

二十番

左持

勾當内侍

立よりてさのみ手折は秋の野の花の錦の色やつすらん

右

實興朝臣

今日といへは分ても手折ひこほしの其名にかよふ。權の花
秋の野の花のしきは。いくはたはりともいふへきかさ
りにあらぬを。色のやつるゝはかり手折ん事は。いかゝと
覺え侍り。さきにむさしのゝ花の千種の歌と。其心おなし
きにや。牽牛花は朝かほの名に侍れと。七夕の題侍りし上。
又ひこほしを出され侍りしは。傍題をおかすとや申侍ら
ん。

廿一番 晴夜月

左勝

入道親王道永

清見湯空のみとりもひとつにて雲こそなけれ秋のよの月

右

實興朝臣

かくはかり空さへはるゝ夜半はあらし秋とて月の又は澄とも
左歌。空のみとりもひとつにては。秋水共長天一色なると
いへる心に叶侍り。右空さへの詞。心得かたく侍り。秋と
て月の又はすむともと。今夜ならては晴る事のあるまし
きやうに聞え侍。左勝に侍るへし。

廿二番

左勝

前左大臣室

あきらけき光ならへて雲の上にいく夜の月の影かすむへき

右

内大臣

秋風に晴る雲井の月はなをすむ空たかく行としもなし

あきらけきひかりならへて雲の上には。わか君の明徳て
らさぬ方もなき心にや。亦いくよの秋は月もすむへきとい
ひすてられ侍る。たけたかき舩なるへし。右の雲井の月も。
同じやうに侍れと。下の句なとは。左まされるにや侍らん。

廿三番

左勝

女房

一むらの雲も残らぬ久堅の空の限や月はすむらん

右

高清晰卿

代を照す君か光もをのつから空に曇らぬ秋のよの月

左。一村の雲も残らぬ空のかきりは。清光何處にか無と作
れる詩の心。おもひ出され侍り。右。代をてらす君か光も。
祝言なれば負へきにあらぬにや。

廿四番

左

邦高親王

秋よいかに隈なき影の添ぬらん同じみ空に月はすめとも

右勝

前左大臣

照もせすくらぬよりも秋の月さやけき影そしく物もなき
秋よいかにくまなきかけの添ぬらんとありては。末の句
に。月はすめともとは。有ぬへくも覺えぬてにはに侍るへ
し。右照もせすくらぬもはてぬ臚月夜を。さやけきかけに
とりなされて。しく物そなきと侍。まことに可レ然にや。さ
はありとも。春を好心に。おほる月夜を。なをしく物もな
しと申人もや侍らん。それも八月九月の空の光にたいし
ては。同心する人こそ有かたく覺え侍れ。

廿五番

左

親長卿

身には今心のくまの有なしもしらてさやけき月にめてつゝ

右勝

量光卿

大空は雲こそなけれ千里にも心のまゝの月やみるらん
左。心の隈なからむたにも。おほつかなく侍に。有なしも
しらぬやいかゝ。さやけき月にめてしも。心もとなくこそ
覺え侍れ。右。一天に雲なくして。千里の月あきらかなる
心。おもふさまにて。めてたくこそ覺え侍れ。

廿六番

左

勾當内侍

秋かせのあたりの雲を拂ふよは心もはるゝ月をみるかな

右勝

爲廣朝臣

みる儘に心の隈もなかりけり月やうきよの外にすむらん
心もはるゝも。心の隈なきと。おなしほと月のひかりに

侍れと。うきよの外に澄らんは。聊歌のたけありて聞え侍り。

廿七番

左持

實隆朝臣

さはるへき雲なきよは、月のうちのかつら計そ隈と見えける

右

敦秀朝臣

月のうちのかつらも今夜なかりけりた、浮雲の晴るのみかは杜子美か詩に。研却月中桂。清光應更多作るは。桂をきらは月のひかり増らんと。いへるこゝろなれば。隈となるへき事は。もろこしの詩歌の心に叶侍るにや。又古き歌に。紅葉すればや照増るらんと。いひ。光を花とちらすはかりをなと。よめるは。月の桂のあるへきうへにて。さま／＼に風情をめぐらし侍り。然に天地と共にねさしそめし久かたの中の樹の。今夜しもなかるへき事。頗理にそむき侍るへし。左の桂は。折えたる家の風も吹ぬへくこそ覺え侍れ。

廿八番

左持

季春卿

浮雲は跡なき空に澄月をさそひ残して秋風そふく

右

安禪寺宮

今夜猶隈なき月にあくかれて千里の外も思ひやるかな誘引残して秋風そ吹。又千里の外もおもひやるかな。とものにことなる難なきにや。持とすへし。

二十九番

左持

入道前左大將公數女

秋風のふけゆく儘に詠れは月に消ぬる四方のうき雲

右

入道前左大臣女

影たのむ人の爲とやみかさ山さしてくもらぬ月の光は

左。ふけ行とあらは。秋のよにや侍らん。右。影と光とはふるくも病に申侍れと。かけは山のかげにみなし侍らは。三笠の月。判者の身にあてゝ。まくへしとは申かたし。暫く持とすへし。

三十番

左持

季經卿

かねてよりひはらの末もくもらぬに積る雪みる秋の夜の月

右

堯胤法親王

雲風もおさまる夜半はをのつから遅くも月の更にけるかな檜原の雪。家持歌。まきもくの檜原もいまたくもらねは。小松かはらに淡雪そ降と侍る俤あるやうに覺侍れと。兼てより五文字。第四句つまりて聞え侍り。右。遅くも月の更にける哉は。をそくふくるを。ほいなきやうに聞え侍り。いか。

三十一番

左持

歎無名戀

前左大臣室

あやしとや猶も涙を人のみむ無名に朽る袖としらすは

右

爲廣朝臣

つらしともうしとも誰と夕けふりたつな計のむろのやしまは左の歌。おもひ入たるさまにて。よろしく侍るにや。右。たつ名計の室の八しまは。是は。名にまちたるはかりにて。いまたその實もなけれと。誰をかこつへきとも覺ぬ心なり。しからばたゝ名の立戀の心なるへし。無名とは一向に人をこふる事もなきを。其人々こそ。心をかよはし侍れと。虚名をいひつけらるゝをいふへきにこそ。但證歌なとも。

心中に覺悟し侍らす。抄物なども。座右に安置し侍らす。ひとへに僻案をもて申侍れは。必しも信用し給へきにあらざるへし。

三十二番

左勝

入道親王道永

なき名のみ浦のもしほの夕煙おもはぬかたにたつそくるしき

右

敦秀卿

契てふ言の葉のみか偽のうき名にさへも有世なりけり

左。おもはぬ方のけふり。本歌のことはをとられ侍りて。大方難なきにや。右。契てふことのはのみかなとは。はや偽のあるよをしれる心なれば。是も無名の戀とは申難かるへし。

三十三番

左持

邦高親王

せめて其あふにかへても慰さまはうき名計は歎かさまし

右

内大臣

身のとかなけくうちにも慰まむ契し人に立名なりせは
左右ともに。ひたゝけたる戀の歌なり。無名の心は分明ならぬにや。

三十四番

左持

女房

身にしらぬ歎にぬらす袂さへいとゝ立名にいひやなすらむ

右

入道前左大臣女

かはかりの名に立へしや吹風も餘所なる花の袖に匂ふを
左歌。三十一番の左歌と。其心同じやうに侍れと。下句など思ひたき所や侍らん。右よそなる花の袖に匂ふによりて。

名にたつへき事おほつかなか侍り。人の移香なと思ひよそへられ侍るにや。思ひわき侍らす。持とすへくや。

三十五番

左勝

季春卿

何とかくあふせもしらぬ陸奥に有てふ川よ袖ぬらすらん

右

前左大臣

いかゝせむ戀しなは又うき命あふにかへつといひやなされん
右のうき命あふにかへつなどは。虚名とはいいかゝ申侍るへき。左みちのくにありといふなる名とり川。本歌たしかなるにつきて勝とや申侍らむ。

三十六番

左

實隆朝臣

あふ事のあるになしてもつらき名の立をは人の歎く習ひを

右勝

高清卿

神よけにあはれと思へすか原やふしみぬ中に無名立身を
左の歌。是も無名の心たしかならざるにや。右なき名かなしむ人そきこえぬと侍る聖作を思へるにや。勝へきにこそ。

三十七番

左持

勾當内侍

身ひとつにいかにせましと思ふこそあひみぬ中に立名也けれ

右

堯胤法親王

一かたに歎し物を別ての後のあしたにたつ名なりせは
左のあひみぬ中。右の別ての後、共に無名の戀とは申かたくや。

三十八番

左持 季經卿
我戀の心つくしにたのむかな無名かなしむ神のちかひを

右 實興朝臣

あふ事の有世に責てなけかはやとてもなくても立名也せは

我戀の心盡しにたのむかなは。虚名とはいひかたきにや。
右あふ事の有にせめては。是も名たつ戀の心なるへし。持とす。

三十九番

左勝 親長卿

思ひ住きえなはつゐになき名ともたれにいはせの山の端の雲

右 安禪寺宮

浮名のみ立ともせめて一よたに逢にかへなはなけかさらし

誰にいはせの山の端の雲。心詞優美に。題の心たしかに侍り。爲勝。

四十番

左勝 入道前左大將公數女

いかなりし世々のむくひの残てか無名たつ身をかく歎くらむ

右 量光卿

ふしのねにたくふおもひの煙ゆへ空しき名のみたつ空そうき

右。むなしき名とは侍れと。ふしの根にたくふ思ひとありては。是も無名のこゝろたしかならざるにや。左歌。第三の句よはく侍れと。しはらく勝とや申侍らん。

四十一番 不遇戀

左持 親長卿

仇にちる人の心の花よはやかねておもひし春風そふく

右 實興朝臣

今更にうきをもいかゝ恨へき頼むともなきあたし契は

かねておもひし春風は。心のはなにといかゝ吹侍へきやらむ。いまた案し得侍らす。秋風なとも。戀の歌によみ侍るへきには。かはり侍へきにや。小町か歌に。色みえて移ふ物は心の花と侍れは。風をも移ふ心にをしこめてみなし侍るへきやらむ。右今更にうきをもいかゝうらむへきも。戀の本意をうしなひ侍り。持とすへくや。

四十二番

左勝 季春卿

よるとなく音にこそたてね行末をたのむの雁にあらぬ我身は

右 爲廣朝臣

たのめても頼まぬ中や偽のかねてしらるゝちきりなるらん

左右ともに。ことなる難は侍らす。よるとなくたのむのかり。むかし物語の心。聊まされるにや侍らん。

四十三番

左勝 勾當内侍

偽の言の葉さへも絶やせむ頼まぬほとを人にしられは

右 安禪寺宮

偽のかすのみ積る夕暮を頼るとてもなにかまたまし

右。偽とおもひなからも。人の言のはゝ。猶きかまほしく思ふ。哀にこそきこえ侍れ。右たのむるとてもなにかまたまし。あまり情なきにや侍らむ。是も左。増れるにや。

四十四番

左勝 實隆朝臣

ありとしも頼まむ物かかけろふのはかなくみえし人の契は

右 堯胤法親王

此くれとちきは身にやたのまゝしあすはしらねと行末の空

源氏宇治のまきに。浮舟の君。物に氣とられて。ゆくすゑ

もしらす成てのち。かほる大將の。ありとみて手にはとら

れすみれは又ゆくゑもしらす消しかけろふ。とよみ侍る。

左の歌はこの心をよまれ侍るにや。猶無常の歌にや叶

侍らん。右此暮とたのめは。よきなく頼へき事にこそ。あ

すしらぬ行衛までおもひあつかひては。益なき事にや侍

らん。

四十五番 左 女 房

さためなき世にはまことの言のはも思へは仇の中にたのまし

年月を思ひくらへて頼まめやかはらしといひこぬと契るも

左歌。定なき世なれば。人はまことをいふ共。世にひかさ

れて。心ならずかはる事もやあらん。されは頼がたきこゝ

ろにや。右かはらしといひ。こんとたのむるうへには。年

月をおもひくらふへき事。前後の相違こそ侍れ。前の番の

右と心同じきにや。左勝に侍るへし。

四十七番 左 前左大臣室

偽のある世ならすは一かたにたのみやせまし人のことは

かはすより心をかゝるゝ言の葉の露のかことはいかゝたのまん

左。本歌たしかなるうへ。下の句なと優に侍る。右第一句

このましからす。左まされるにや。

四十八番 左 季 經 卿

身のほとをおもひしるにもいとゝ猶たのまぬ物を人の偽

たかまこと頼まむ身共しら雲の靡くを見るもあとしなければ

左。よのつねの心ことは。又ことなる難も侍らす。右たか

まことをか今はたのまむの本歌。心おかしくは侍れと。下

の句なと上にかけあはぬやうに侍り。然とも思ひかけぬ

白雲立いてゝ。餘情あるやうに侍れは。なすらへて持とす

へくや。

四十九番 左 入道親王道永

さらに又何かたのまむ偽もおもひもわかぬ身とや知るらん

右 高 清 卿

ちきりても身にたのまれぬ夕暮をかならずと待人や有らん

左右の歌。何かたのむる。身にたのまれぬ。大畧同じほと

の事にや。歌合の判の詞。ほめもそしらすと。古人の申侍

れと。しはらく持とすへし。

五十番

左勝

邦高親王

偽にならふよころの秋風は身にさむくともいかに頼まん

右

教秀卿

契こそうつるひかはれ泊瀬川人の心の花の形見に

左歌。身にさむくともいかにたのまむ。素性が歌をおもへり。心詞おかしからざるにあらず。右。題のこゝろたしか

ならぬにや。左勝に侍るへし。

五十一番

左勝

山家雨

季經卿

人はこて軒のかけひの水はかり音信増る雨の暮哉

右

内大臣

柴の戸は雲のみ閉て奥山に雨さへ見えぬ音のさひしき

かけひの水の音信まさり。柴の戸の雲のみとつるさひしき。いつれとわかちかたきやうに侍れと。雨さへみえぬの

詞。雨をみたくおもひても。詮なき事にや。しからは左の

雨の音は猶心すみてや侍らむ。

五十二番

左勝

勾當内侍

詠やる向ひの山も雲閉て施さひしき雨のうちかな

右

高濤卿

聞佐ぬ桐の葉さそふ秋風にふけ行山のよはのむら雨

前山の雲の色。一庵の望をこらし。桐の葉の風のこゑ。半

夜の聞をいたましむ。いつれをよし。いつれをあしとも。

申かたきにや侍らん。

五十三番

左勝

季春卿

すみやらぬ心の水に山の井のにこりを添ふる雨のうち哉

右

量光卿

世をうしと思はてすまは秋の雨夕よいか山かけのいほ

夕よいか山かけの庵。未いひおほせすやはんへらむ。心

の水のにこりは。すまさはすむとや侍らん。いさゝか勝に

や。

五十四番

左勝

入道前左大將公數女

世のうきにかへて住てふ山里も堪て聞へき夜半の雨かは

右

安禪寺宮

山かけや暮行雨にさひしきまといとまはしはの庵の内かな

左右ともに難なく侍る。勝劣わかちかたきにや侍らむ。

五十五番

左勝

實隆朝臣

夕ま暮軒端の山にかへりくる雲も其まゝはれぬ雨かな

右

入道前左大臣女

山ふかみ軒端も雲に埋れて降空さへもみえぬ雨哉

棲山の雨。主人谷の軒端をならへ。雲にほとなれる閑寂の

すまひ。いつれとおもひきたためかたく侍れは。しはらく持

とすへくや。

五十六番

左勝

女房

うき世にてきかはさひしき雨の音を思ひもいれぬ山陰の庵

さしおほふ山の岩尾の下庵に音せぬ雨も猶そさひしき

右勝

教秀卿

きくはさひしき雨の。音せぬ雨もさひしきなど。大かた同し類ひのことはにや。たゞしきおほふは。みかさの山のこすゑなどの心地は。右聊勝にや。

五十七番

左持

前左大臣室

さひしかれと世をのかれこし柴の庵になを袖ぬらす夕暮の雨

右

實興朝臣

山の端も面かけもみす降雨に晴ぬふもの雲のした庵

山の端もおもかけも見する雨といひては。はれぬ麓はあまりたる詞にや侍らん。又鏡山などの歌の心ちして侍れは。かた／＼左のよをのかれこし柴の庵は。雨のきゝ所もあるにや侍らむ。

五十八番

左

邦高親王

さひしきは馴て住こし山にてもなをうきときかふかき雨のよ

右持

爲廣朝臣

山ふかみ柴の戸たゞくよるの雨を袖にこたふる我泪かな

山にてなをうき時。本歌の置所をかへられぬ。無念にや侍らん。ふかきよの雨も。さゝへて聞へ侍り。袖にこたふるわかなみた。おかしくこそ侍れ。

五十九番

左持

親長卿

雲はなを立こそ残れ山ふかみ軒端の雨はよそにすきても

右

堯胤法親王

あらしたに音せぬ柴の戸を閉て雨降くらす嶺の庵かな
左歌。詞あまりくたけて聞所侍らぬにや。右の柴の戸。嶺

の庵。かさなり侍るにや。持とすへし。

六十番

左

入道親王道永

うき世をはいとひすむ身の柴の戸に又袖ぬらす夕暮の雨

右持

前左大臣

いにしへも思ひのこさす山陰に夜るの雨聞草の庵かな

右歌。大賓客の身にかはりて思ひ給へは。關省花時錦のとはりのたのしみは。さこそ思出にても有けめ。それに引か

へて。廬山の雨の夜草の庵。物さひしきは。いかにも古をこふる心なるへしとも覺えず。さりながら俊成卿の郭公の歌。ふとおもかけにたちて侍り。歌はさのみこそ侍れは。同類まではなり侍るましきにや。左歌。ことなる難は侍らねとも。夜雨のさひしきは。なを身にしみて覺侍り。

六十一番

砌下有松

左持

入道前左大將公數女

千年へん友とちきりて植置や君かみきりの松の行末

右

實興朝臣

千代のかけを玉の砌と契つゝいや木たかくも松そふりゆく
君か砌の千とせの色。玉の砌のちよのかけ。歌のたけも木たかさ同し程のことなるへし。

六十二番

左持

親長卿

限なきよはひありとは君をこそ知る人にせむ庭のたま松

右

入道前左大臣女

末とをき君か砌にうつし植は千とせの後を松も限らし
兩首のてには。左は知人にせめと有へきにや。右は千世の

後も松けとありたきにや。

六十三番

左持

季經卿

千々にしく玉の砌に聲添て君よるつよとよはふ松風

右

教秀卿

玉敷の庭の玉松ちとせへん君かひかりの花も十かへり

君かひかりの花の色よりも。君萬代の松のこゑは。目をい

やしみ。耳をたたふるとや申侍らん。

六十四番

左持

入道親王道永

底きよき玉の砌の池水に風のかけみる松のすゝしき

右

量光卿

移しうふる君か砌の松風ややかて千とせの聲よはふらん

移しうふる程の松ならは。いかにも二葉なとにてこそ侍

らめ。やかて千とせの聲よはふへき事いか。風のかけみ

る。いさゝかめつらしく聞え侍るにや。

六十五番

左持

邦高親王

陰たかきみきりの松の深みとりいく萬代の霜をへぬらむ

右

高清卿

陰たかき雲井の庭も年ふりて空に聞ゆる松風の聲

いく萬代の霜を経ぬらむ。空にきこゆる松風の聲。共に陰

たかき詞の色かはらぬにつきて。しはらく優劣をさため

六十六番

左持

勾當内侍

仕へつゝたちよる人も千世やへん君か砌の松のした陰

右

内大臣

百敷やふるき砌にとしをへて君をや松の木たかからん

左は新皇居の松陰にして。千よまでつかへん事思。右は舊

内裏に木たかきをみて。百敷の古をしたへり。なすらへて

持とすへし。

左持

女房

住すてし雲井の松のとしを経て木たかき色は餘所にみえけり

右

爲廣朝臣

砌にやなれてかそへん君も臣も世にあひ生の松のゆくすゑ

住捨し雲井の松。たゝうち人のいふへき言のはにも侍ら

ぬこそあやしく思ひ侍れ。もし女房の歌なとに。御製を

やとりませられ侍つらん。木たかき色も。よそに見えけり

なとも。當時の御在所。さこそと思ひやられ侍れは。老涙を

をさへて。かくそ思ひつゝ侍。いかなれば千よをは君か

身に添て松を雲井のよそになすらん。抑此十八公霜のの

ちのさかへをは。かへり見すして。風の庭のおち葉の塵を。

朝清めして。君か御幸を待奉らは。心なき草木にてはある

ましきを。いたつらに木たかき色はかりを。雲井のよそに

みせ奉るは。人の思はむ事を。恥かしくは思ひ侍り奉らぬ

にやあらん。右のうたの是非は。さたに及はす。左の勝に

六十八番

左持

季春卿

松かえも露や置らむ言のはの玉をつらぬるけふの砌に

右

堯胤法親王

色かへぬ砌の松にたちなれて千代よろつ代のかけやたのまん

千代よろつ代の聲。いくたひきゝても。あくましく侍れと。

餘に耳にみちて侍り。左の結句も。砌はとあるへきにや。

六十九番

左侍

實隆朝臣

雲のうへや砌にたかき松か枝のみとりそ空の色にかよへる

右

前左大臣

いつのよの庭の眞砂のたねならん薺むすいはほ松そふりぬる

左。みとりそ空の色にかよへる。右薺むすいはほ松そふりぬる。共によろしく侍にや。

七十番

左侍

前左大臣室

萬代の君かよはひに及はめや千とせふる木の庭の松か枝

右

安禪寺宮

吹風も治る御代に立かへり君そみきりの松にちきらん

左歌。よろつよと。千とせとは。同じ事のやうに侍れと。萬代を松にそ君をいはひつる千とせのかけにすまむと思へ

は。といへる歌の侍れは。とり分たるも。ぐるしからさるへし。右も。祝言にては侍れとも。左はなを歌のすかたつよく侍るにや。

一巻の奥に。白紙の二ひら三ひら残ければ。筆のつかとる次に。長歌のやうなる物をそかきつけ侍ける。

あはれいかに ふう七日の 雲のうへ 光さやかに

ほしまつるてふ ともし火の

あはれいかに ふう七日の 雲のうへ 光さやかに

ほしまつるてふ ともし火の

あはれいかに ふう七日の 雲のうへ 光さやかに

ほしまつるてふ ともし火の

あるへきに

むかしを忍ふ

よのなみは

かゝりしほとに

夜半なれと

折にもあはぬ

おほみきの

あふかぬ人こそ

ひとたひの

ねてあかさむも

えらひつゝ

ほの／＼よめの

人々は

かきあつめてそ

わたのはら

なかむるあまも

とるとたに

けにこゝろある

けふのため

うしひく名ある

あはせける

星か川邊の

みかくれて

かくはありとも

かきくもり

かゝくる人も

もしすりの

はやいくとせに

いとたけの

秋のしらへも

閑居とて

そのみこゝろの

なかりけれ

行あひのよを

さすかにて

けふの日數の

勅なれは

和歌の浦半の

たてまつる

星合のかけを

なきさなる

しらぬ事こそ

しわざにて

手折もてきて

はなをさへ

かくても中の

ほたるかと

月ばかりこそ

ものおもふ

我身にしらぬ

なきまゝに

亂れたちに

成ぬらむ

手向にかふる

中々に

とゝめたまひし

かしこさを

さりとしてしゝ

いたつらに

甘の人を

やまとうた

仰をかしこみ

もしほ草

其か中にも

うつせとも

ふねのかちのは

うらみなれ

野への千種を

かめにさし

女郎花にそ

はるゝよは

見えし光も

そらにすめ

袖のなみたは

名とり川

恨もたえず

戀しさに
またてもあらぬ
よし野川
いもせの山に
ららそへる
袖をぬらさぬ
身なからも
君ちよませの
祈りける
みかける玉の
いろ／＼に
これを七十に
あらそへは
たけき心は
あふ坂の
永きよまでや
國のうち
人のなくやは
やまかけの
ころもの玉を
鳥のあと
難波のうらの
はりまなる
しるしつけよの
またしらす
思ひほとけは

頼まぬものと
夕くれは
よしやよの中
のかれても
木の葉の時雨
夜半もなし
玉のみきりを
ことの葉を
かゝる情の
こゑ／＼に
聞みる人を
つかひつゝ
文のみちにも
有ぬへし
山ちにはへる
つたはらむ
我敷嶋の
有へきに
柴の庵に
かけまくも
此ひとまきに
よしあしを
しかまの市に
御ことのり
つら／＼つはき
いなみのゝ

いひなから
せむかたなみに
今はとて
瀧のひゝきに
松のあめ
薪こるてふ
わすれぬは
松にかけてそ
おほかれは
をれるにしきの
おとろかす
左右にと
ものゝふの
是を時代に
さねかつら
さてしもひろき
道しれる
みかさの山の
すみそめて
かしこき君か
巻そへて
こゝろに分て
かちまけを
いかにせむとも
つら／＼に
いなみ巾さん

道なくて
森のくちはを
水くきの

人のみるめけ
ひろひあつめ
跡にまかせて

はつかしの
さほの川行
かくとしらなん

右七首歌合。年代所藏也。少々雖有不審依無類本不能按合

文明十年八月二日歌合

題

江月

紅葉

秋祝

作者

左方

女房

權大納言季春

實隆朝臣

内大臣

右方

從三位基綱

按察使親長

元長親長子

勾當内侍

判者

禪閣

一番

左方

玉をしく光とみえて津の國の堀江の浪に月やとるなり

右

御舟漕し跡はむかしの堀江にも猶玉敷てすめる月影

右方申云。萬葉集の古風を思へり。よろしき歎。左方申云。

左方のおなし本歌をとれり。無殊難。左右の堀江の月に

玉しける心詞。本歌といひ。風舳といひ。いたくかはりた

二番

左方

影やとるなこの入江の秋の波夜はすからに月そくたくる

右

打出て誰かみさらん曇なきたこの入江の浪の月影

右申云。秋の浪はてつなり。

左陳云。秋の波。讀て耳にたゝす。秋水漲來など。古詩の詞

にもいへり。秋浪可レ爲三淮據二歟。

左方申云。田子のうらにうち出てみればといへる本歌を。

田子の入江にとりなされたる。おほつかなし。又曇りなき

田子の入江も。つゝきこゝろゆかす。

右方陳云。月を詠せんには。いつくをも曇なきといはん。

有ニ何難一手。

秋の浪は。古詩をひかるゝまでも有へからず。あなち聞

にくきまでの程はあらしとこそ覺え侍れ。右くもりなき

の詞も。此一首に取ては。あしからず侍り。月そくたくる

こそ猶おもひき(た)難きやうに侍れと。まくるまでの事は

あるましきにや。仍持とすへし。

三番

左方

松風のこゑ打そへて更る夜に猶住の江の浪の上の月

右

埋もるゝ雪かとみれば住の江の松はさたかに晴るゝ月哉

權大納言季春

按察使親長

右申云。無^二別難^一歟。

左申云。埋もるゝ雪かとみれはと侍る。雪をうつみたるやうに聞ゆ。又松はさたかにも。みのゝお山。から崎の松ならて。木ふかき住の江の松など。さまでさたかならん事もいか。

左歌。躬恒か歌を思へり。三代集の作者にあらすは。取すこしたる難もあるへきにや。右の歌も。ことなる難なし。但初の五文字の。降つもとありたきにや。いかさま是も持たるへし。

四番

左持

權大納言雅行

夏かりの比よりは猶露深き玉江のあしに月そ隈なき

右

公教卿女

やとれ猶光かはしてをく露の玉江に清き秋の夜の月

右方申云。雖^二故有心之舛^一聲韻病之難侍云々。

左方申云。かはしての詞。先達聊加^レ難歟。第三句。露のをき所。又おほつかなし。聲韻病なんふるくは申侍れと。中比よりは。事により時にしたかひて。そのさたも侍らぬにや。かはしての詞も。枝かはすなとは子細なきよし。定家卿も申侍り。

左。夏かりのあしも。さし出たるやうに聞ゆ。右歌のをき所もいかゝと覺え侍り。さのみなるやうなれと。これも持たるへきにや。心きたなき判者に侍るへし。

五番

左持

實隆朝臣

更にけりあちの住江の冷しくあら磯てらす浪の月影

右

元長

時雨つゝ過ゆく跡に色そふやつたの細江の波の上の月
右申云。あちの住江のすさましく。いひしりて聞ゆ。但江の外にあら磯無用。無念。

左陳云。すみの江にあら磯を詠すと云々。

左申云。色そふ鶯の細江とそへられたる傍題に。紅葉をきて。猶おもひたきにや。月の時雨に色そふもいか。

右陳云。紅葉とも。不^レ詠之上。強不^レ苦乎。

左。あちのすむ江いか。手つゝに聞え侍り。あちのすむ崎の入江などは。いくたひよむとも。はゝかるへからさるにや。右歌。傍題を犯すまでの難は侍らす。色そふは。月の事とこそ覺え侍れ。第一句つゝの字あまりたる詞也。さ夜時雨なとあらまほしきにや。さのみ持とのみ申へき事やいかゝ覺え侍り。

左。萬葉の古風に倣して。しはらくかちと申侍るへし。

六番

左持

權大納言典侍

浪の上ははるかにみえて住の江の松をくまなる秋の夜の月
右

難波人入江の芦のほのくゝとあくるまでみる浪の上の月

右申云。無^二殊節^一無^二殊難^一。

左申云。殊無^二可^一難申^二之事^一。

住の江の松。難波の芦。所に付たる名木なるへし。兩首の舛もあしからず。勝劣を論するに違あらす。

七番

左持

内大臣

鐘の音に夜舟を近き山下風ねられぬ月の江に更にけり

右

勾當内侍

浪の玉みかきそへつゝ難波江の藻に埋もれぬ月の影哉

右方申云。海寺の氣氣。古詩の風躰などを思へるにや。但

第三句在所思之。上句くたけたる躰に見ゆ。

左方申云。千載集俊賴朝臣の歌を。本歌とて詠之歟。

然者於二歌合一猶いか。

右方陳云。堀川院百首作者歌。猶以執用。近代連綿之事歟。

詩の詞を用る事は。照もせずくもりもはてぬなど。まゝよ

む事ははへれと。あなかもこのみよむへからさるにや。鐘

の音。山おろしも。あまり耳かましく聞え侍るにや。江に

更にけりも。ありくて落題にならしと讀るやうにみえ

侍り。俊賴歌堀川院の百首までは。ことによりて本歌にと

るべき事勿論也。浪の玉と。第一句に打出され侍る。頗是

も手つゝなるにや。月の影を藻にうつもれぬなども。事あ

たらしきやうに侍り。なすらへて持とすへくや。

一番 紅葉

左

權大納言典侍

織かくる錦とみれと時雨のみしつはた山に染るもみち葉

右

元長

枝かはす松も煙の龍田山峯の紅葉の色やこかるゝ

右申云。しつはた山の紅葉参らしからず。

左陳云。時雨のみしつはた山のつゝき。珍しからぬまで

は侍らぬにや。

左申云。松も煙も。文字心ゆかす。又火といふ事なくては。

こかるゝといふ事。もとより紅葉に讀ならはしては侍れ

と猶慥かならずや。

右陳申云。も文字は枝かはすにて。道理かなひぬへし。上

句の松の煙にて。下句こかるゝ火の心。こもるへきにや。

志豆機山の紅葉。珍しからぬなんはいかゝとおほゆ。たつ

田はつ瀬のもみちは。いくたび詠せり共。難たるへからさ

るにや。但時雨のみの詞こそ心得かたく侍れ。又もみちに

こかるゝとよむ事は。たとひ火とも煙共いはす共。もみち

のうへはかりにても。子細あるましきにや。松の煙は。なか

な紅葉の色をけつかたもや侍らん。

二番

左

女房

此比はしくるゝ雲のはてもなしいつを限りと染るもみちそ

右

勾當内侍

ふかく我心にそめし紅葉はを時雨のみとは何おもひけん

右方申云。古今集。わか戀はゆくゑもしらすはてもなし。

といへる歌を思ひて宜由を申。

左方申云。無三指難。但第二句染しの過去の詞いさゝかお

もひたき也。左歌。山めぐりする時雨なれば。雲のはても

なしと侍る。所詮あるに似たり。右歌。そめしの過去の詞。

誠に左の難におち侍るへし。又露霜などは。しくれにあら

そふ事は侍るへし。心の染るはかりにて。紅葉の色のまさ

るへき事もいかゝ。左勝たるへし。

三番

左

内大臣

木の葉こそ時雨降出て行秋の末摘花の色に成ぬれ

右

從三位基綱

みる人のこゝろの花はもみち葉のふかき梢そうつりはてつゝ

右方申云。木の葉こそその五文字聞よからす。又暮秋落葉の舛猶無念歟。

左陣云。紅葉の時節。暮秋に相當の上は。不_レ可_レ及_レ難_レ歟。

左方申云。心の花秋によまん事いか。秋の心は大かた愁を本としたるにや。

右陣云。心の花け。只こゝろのみをいへるなるへし。木の葉はちらぬ時も申侍るへし。是くるしかるへからす。又心の花。秋なれはとて。いふましきにもさたまるへからす。秋このむ人にをきては。かならずしも愁の時とは申侍へからす。但兩首の舛は。いつれをいつれと申かたく侍り。

四番

左

實隆朝臣

あたにをく露より色に出そめてもろかりけりな秋のもみち葉

右

按察使親長

心なきいは木の山はいつのまに時雨をかけて紅葉しぬ覽

右申云。風舛よろしく聞えなから。紅葉に落葉のおもむき。頗無念。

左陣云。此歌紅葉の始終を讀り。紅葉にかきけるへからす。

左申云。時雨をかけて。様ありけにきこゆ。紅葉しぬらんも。近代好士時により。事にしたかひ。斟酌する詞にや。

左。第四句のけりなの詞。頗好ましからす。右こゝろなきいは木の山。しくれをかけて紅葉する心。殊なる難は侍らぬにや。しぬらん。しにけりなの詞は。時によりて難にもなり侍らん。右はいさゝかまされるにや侍らん。

五番

左持

參議左中將季經

いかてかはたちもさらまし時雨つゝ錦織なす山の木陰を

右

公數卿女

立田姫四方の梢を紅におるや錦の色をふかめて

右方申云。山のしきにて。紅葉を顯す作例連綿歟。但歌合にをゐては。からにしき枝にひとむらといふ歌を。紅葉たしかならずと難すと云々。但證歌あらは可_レ被_レ出_レ歟。

左申云。右歌。さしたる難なく。又さしたるふしなし。兩端の錦の色。老眼のふるゝ所。あやめもわかす侍れと。左歌。木陰を立さらぬ子細は。時雨にぬれしとの心にや。又錦をもてあそふゆへにや。いさゝかまちあひて聞え侍り。右の第五句の。ふかめての詞も。あまりて侍るにや。又立田姫のにしきそむる事。紅葉にとりては珍しからぬ風情にや。さのみなるやうなれと。是も持と申侍るへし。

六番

左

參議左中將季經

しくれても松は強顔き岡野へにまじる紅葉や錦なる覽

右

民部卿忠富

龍田山過る時雨の跡晴て紅葉の錦色そてりそふ

右申云。無_二殊難_一歟。

左申云。風情珍しからさる上。過る時雨の跡はれて。重疊したるやうに聞ゆ。

左。時雨に松のつれなき事も。もみちをにしきになす事も。珍しからぬ事にや。右。過るも晴ても。誠に重疊したるやうに侍れと。照そふの末の句にて。日影をふくみたるやうの心も侍れは。右いさゝかまされるにや侍らん。

七番

左勝

露霜の染るもみちの色みてもふかく成ゆく秋そしらるゝ

右

權大納言季春

露霜も染あかすとや立田姫時雨を急く紅葉成らん

右申云。無三別子細。

左申云。後京極攝政。立田姫今はの頃の秋風に時雨を急く

人の納かな。といふ歌。第四句をき所かはらす。いかい。

左歌。第五句いさゝかよはく侍れと。殊なる難なし。右。立

田姫の時雨を急ぐ心。かの攝政の歌のおもかけ。誠に侍り

ければ。しはらく左可勝にこそ。

一番

秋祝

左

内大臣

君か代は猶長月の秋津洲の外まであふく恵とそきく

右勝

公數卿女

幾秋も老せぬさくの花の色を君か千とせにたくへてそみる

右方申云。本文髓に侍り。無じ失乎。

左方申云。殊咎なく又珍しからず。

左歌。本文は古今集眞名序の事にや。聞の字は。作者の心

は外國の事をきくとよまれ侍るやうなれと。現量に取て

はいかゝと覺え侍り。只恵みなるへしと侍らは。一首の舛

もしつよくや侍らん。

右歌さしたる難なし。まさると申すへきにこそ。

二番

左

權大納言典侍

あひにあひて君か齡は長月のいくめぐりともかそへしらまし

右勝

元長

くくりあはん限もしらす我君の御代なか月のきくの盃

右申云。一ふしの難も侍らす。一ふしのよろしき事も侍ら

す。

左申云。めぐりあはんかきりもしらすとうちいてたる。末

をうけ給はらぬほとは。いかにそやと聞ゆ。

左右の歌。君かよはひの長月。御代長月。又いくめぐり。め

くりあはんなどの詞。つくりあはせたる舛にこそ侍れ。去

ながら左歌。初句。終句。おもひたきやうに侍り。右は。か

きりもしらしとあるへきにや。いかに勝侍らん。

三番

左勝

權大納言季春

星とみる雲井の菊や行末もはるけき君かかさし成らん

右

勾當内侍

秋毎に波て齡を延よとや菊の下水なかれいつらん

右方申云。星をかんさしにするなどは。漢語には申侍れと。

和歌には。よみならはさゝるにや。但歌のさま。あしから

さるにや。

左陳云。星はむかしより菊にたとへ侍れは。あなかに。

異朝の作例にもをよはさるにや。

左方申云。殊難なし。但第三句猶思たきにや。

右ほしをかんさしにする謬難は。心得かたく侍り。菊を

かさしにせさらんにをきてこそ此難は侍らめ。右第三句は。

あしからす侍り。出らんの詞。事あたらしきにや。なかれ

絶せぬと侍らは。秋毎の道理も。猶立侍るへきにや。左こ

となる難なし。星とみるくもゐのきくなとは。よろしく侍

り。勝たるへし。

四番

左

四方の國堪ぬ田面も更に今年ある秋とくらしつくらし

右勝

實隆朝臣
從三位基綱

我君の惠の露を分てまつ色こき稻に民やうけゝん

右方申云。秋祝に。不堪田奏無三子細。

左方。よろしきよし申。

左。堪ぬ田面は。證歌侍るやらん。つくるにたへぬと。申侍

らては。不堪田のこゝろ覺つかなく侍り。次には。下句の有

年。は。さる事に侍れと。好土なきにはしかしと申侍れは。

祝の題に。不堪の愁を申出しては。無益とこそ覺え侍れ。右

うけゝんの過去のこゝろいかゝ。うくらむとありたきに

や。いかさま不堪の愁なきにつきて。右を勝とすへくや。

五番

左

權大納言雅行

いく千世そ惠みの露の数々に君か齡も長月の空

右勝

民部卿忠富

幾秋を契をきてか草木にも惠の露の色をそふらん

右申云。詞無三殊旨。

左。さして申旨なし。

兩首の惠み露ふかさあさ。思ひ分かたく。一般の思風。

かちまけ定めかね侍れと。右。契りをきてと侍りて。露の

色をそふるは。よろしく侍るにや。但第三句。草木も木もと

侍らは。草木といへるよりは増るへきにや。

六番

左勝

斧のえの朽し所や九重の秋をし千度おくりむかへて

右

女房
權大納言教秀

をく露は民の草木も打なひき惠あまねき御代の秋かな

左方申云。をく露はのはの字。にの字たるへき歟。

左。をのゝえの朽しところ。友則か歌を思へり。右初句。は

の字。にの字。ことなる勝劣あるへしとも覺え侍らす。持

七番

左勝

百敷や砌にうふる菊の花千年も君か袖やふれまし

右

參議左中將季經
按察使親長

君か爲九かさねにつむ菊の句ふよはひや萬代の秋

右申云。禁中祝言之外。無三珍氣。

左申云。存三古跡二歟。指無下可三難申一事上。

左右共に禁中の祝言也。勝劣を申さは。慮外の怨言もあり

ぬへし。仍これも持と申侍らんかし。

勝負付

左方

女房

參議左中將季經

權大納言季春

權大納言雅行

實隆朝臣

權大納言典侍

勝二 持一

持三

勝二 持一

持一 負二

勝一 負二

持一 負二

内大臣

持二 負一

右方

從三位基綱

勝一 持一 負一

民部卿忠富

勝二 持一

按察使親長

勝一 持二

前左近衛大將公數卿女

勝一 持二

元長

勝二 負一

權大納言教秀

持二 負一

勾當内侍

持一 負二

右文明十年八月二日歌合以奈佐勝泉本按合

文明十年九月盡歌合

題

遠山鹿

暮秋

寄弓懸

作者 匿名

左方

宮御方

遊野井

從二位藤原朝臣敦國

新大納言典侍

入道前左大臣女

權大納言典侍

勸修寺

權大納言藤原朝臣教秀

姉小路

從三位藤原朝臣基綱

甘露寺

權大納言藤原朝臣元長

大以門

左近衛大將藤原朝臣信量

白川

民部卿源朝臣忠富

右方

式部卿親王

權大納言藤原朝臣季春

勾當内侍

女房

左衛門佐橘以量

甘露寺

按察使藤原朝臣親長

冷泉

從三位藤原朝臣爲廣

廣田

權大納言源朝臣雅行

西三條

參議右近衛權中將藤原朝臣實隆

參議左近衛權中將藤原朝臣季經

講師

元長

讀師

勸修寺大納言

判

衆議

一番 遠山鹿

左持

宮御方

棹鹿の聲きたまらず聞ゆなりあらしはけしき山のをちかた

右

式部卿親王

山深みいまやをしかの歸るらん遠さかりゆくあけほのゝこゑ

左右歌。讀申之後。各可レ申所存之由有レ仰。

右方申云。左歌。姿やすらかにてよろしとす。

左方申云。右歌。心詞優美のよし申て。被レ定レ持記。

二番

左

從二位藤原朝臣教國

さそひくるかたはあらしの山風もにしこそ秋とをしかなく聲

右持

權大納言藤原朝臣季春

そなたそと思ひこそやれ春日山かすかに鹿の聲をきゝても

右申云。左歌も。よろしきやうに侍れと。右歌。藤氏の輩お

ほく侍りしかは。あらし山。春日山。あひならふるにつき

て。いかてか春日山まけ侍るへきよし。つりのり申によりて。

勝とさためられ侍りぬ。

三番

左持

權大納言典侍

棹鹿のなく音よいかにたかまとの山より遠のさとにきくまで

右

勾當内侍

心すむゆふへにそきく小男鹿のつまとふ山のはるかなる聲

右歌。遠山鹿にはるかなることと侍るあまりに平懷にや。

左歌。なくねよいかにたかまとのなといへるわたり。いさ

さか心こまかなるやうに侍りとて。勝になり侍りぬ。

四番

左持

入道前左大臣女

つまやうき身をうらみてや思ひ入山もととをき棹鹿の聲

右

女房

こやたかき山のかひとてさをしかの幾里かけて聲のおちくる

右方申云。思ひ入山とはかりこそあるへきに。山本のもと

の字そあまりてきこえ侍る。又思ひいる山のおくにもと。

いへる歌に。いたくかはらす侍にや。

左方申云。右歌。五文字こそ思ひたく侍れ。但左。重疊の難

五番

左持

新大納言典侍

すむかたの山ちや遠きさを鹿の霧にこもれるこゑほのかなる

右

左衛門佐橋以量

つれもなきつまを尋て山遠くかよふか鹿のこゑもきこえず

左歌。第四。第五句。終の字重疊。いかゝのよしを申。

右歌。遠山鹿の題にて。こゑもきこえずとよまむ事如何。

山遠くも。此題にてはあまりに無レ其詮。仍猶持とすへし

とさためられぬ。

六番

左

權大納言藤原朝臣教秀

秋さむき嵐のつてに聲はして太山はるかに鹿そなくなる

右持

按察使藤原朝臣親長

なく鹿や曉までもこぬつまを遠山かつらかけてこふらん

右歌。あかつきまでもこぬつまをといひ。とを山かつらか

けて無らんなど。詞のつゝきいひしりてきこえ侍れは。左

にはまさり侍へきよし各申レ之。

七番

左持

從三位藤原朝臣基綱

里遠くもみち吹おろす山風に身にしむ色をさそふ鹿の音

右

從三位藤原朝臣爲廣

まつ山のすゑこすなみを吹風にうきてなかるゝ棹鹿の聲

左歌第二句。禁中にて可_レ斟酌の一のよし有_二申出人々_一。そのうへ。此本歌。をき所もいたくかはらずや。

左方申。右歌。うきてなかるゝといへる。あまり風情にや侍らんとて持と定め。

八番

左

藏人左少弁藤原元長

里近きわさ田はかりて棹鹿のをしねかけほすと山未鳴

右持

權大納言源朝臣雅行

鳴聲はとを山鳥にあらねともおのへへたつる鹿のつま戀

右申。左歌。をしねかけほす外山。所からあまりにことゝしきやうに侍り。

左申。鹿のつま戀といひはてたる優ならず。しかれとも左にはまさり侍るへきにて。勝の字を付られぬ。

九番

左持

左近衛大將藤原朝臣信量

山鳥の尾上をなれもへたてゝやつまとふ鹿の聲のはるけき

右

參議右近衛權中將藤原實隆朝臣

奥ふかくこもれるつまやこひ衣かさなる山のさをしかの聲

右申。山鳥のをのへたつる事。みゝなれ侍り。

左申。上句に。おくふかくといひて。又下句に。かさなる山といへる。重疊したるやうにきこゆるうへ。こもれるつま

やといへるは。つまもこもれりなといへるよりは。きゝにくく侍り。仍山鳥勝になり侍り。

十番

左持

民部卿源朝臣忠富

あり明のかけとともにや入ぬらん山の端遠きさをしかのこゑ

右

參議左近衛權中將藤原朝臣季經

をのかつまとを山もとの花すゝきまねくかひなき鹿の鳴らん

右申。在明のかけのいらん事いかゝ。たゝ月とこそいはまほしく侍る。下句も平懷に侍り。

左申。花薄まねくと侍れと。鹿のまねくやうにきこゆ。鹿をこそまねけとも。きたらぬものには申侍れと。勅定もありしやらん。仍持になり侍りぬ。

十一番

左持

女房

暮秋

右

爲廣卿

したひえぬ秋の名残も水瀬川いつくにしはしありてゆくらん

右

爲廣卿

慕ふとてかく言のはや草も木もかれゆく秋のかたまならまし

左方申。右歌。したふとてかくことのはといへる。ふとしたるやうに侍り。

右方申。左歌。本歌といひ風舩といひ。みなせ河。河のなかれきよく聞えて。よろしく侍るよし一同に定申。

十二番

左

信量卿

秋も今歸る道をやしたふらんはひまつはるゝ野邊のまくす葉

右持

新大納言典侍

有明のかけものこらてゆく秋の別れはなにをかたみなるらん

左第四句。ふるき詞には侍れと。おもはしからざるうへ。秋かかへる道を。したふやうにきこえ侍り。いか。

右かけものこらてゆく秋のといひ。別はなにをかたみならんなどといへる。優なるよし方人申て。勝にさたまり侍り。

十三番

左

季經卿

ゆく秋の名残とみれば道のへにはらひかねつる草のうへの露

右

親長卿

なをさりにおしむゆへかと行秋の別をよその人にとはしや

左右方人。をの／＼右まされるよしを申て。是も勝になり侍り。

十四番

左

季春卿

限りありてとまらぬ秋よもろ人のおしむ残やさすか苦しき

右

基綱卿

草も木もうつろひはてゝ哀てふことはいろにもくるゝ秋かな

左は。心あるさまにみえ。右は。も文字かしこましく侍るよし申いたす輩侍りしかとも。本歌をおもへりとて。持に侍るへきよしを申す。

十五番

左

式部卿親王

なこりのみ我身ひとつにしたはれて千々に物思ふ秋の暮哉

右

權大納言典侍

いかにせんうらむるかたも浪こえてかへらぬ秋のするの松山
右申。くれゆく秋をしたはん事。我身ひとつと侍る。心せ

はきやうに聞ゆ。本歌の詞もおなし秋と侍る。無念にや。右すかたよろしとて。勝とさためらる。

十六番

左

雅行卿

ちり浮ふ谷のを河のもみち葉をくれゆく秋のかたみとやみん

右

勾當内侍

うきことも淋しき事も今は身になれつゝ秋のくれしたふ哉

左下句。きゝふりたるよしそのきたあり。右いさゝか左にはまさり侍るへきよしさためられし。

十七番

左

入道前左大臣女

見るからにに心なき空までもあはれしられて秋や行らん

右

敦秀卿

けふのみと思ふもつらしくれぬれはとまる習ひも長月の秋

なに心なきといへる。物語などの詞のやうにて。きゝにくきにや。長月の秋。心ゆかす。空などにて侍るへきにや。第三句くれぬれはも想たきにや。いかさま歌の様。おなしほとにやと人々申されし。

十八番

左

實隆朝臣

あかてこそ秋は別るれこれその思はん中にあらぬものから

右

宮御方

花すゝきまねく袂そしほれゆくとまらぬ秋の露の名残に

右方申云。本歌をとれるとはきこえ侍れと。終句のつき。思はしからす侍るうへ。右首尾相應。優美のよし各定申す。

十九番

左勝

以量

さま／＼の千草の花もくれてゆく秋には残る色をすくなき

右

忠富卿

くれてゆく秋をとまれとまねきてもお花か袖は霜かれにけり
左は。とかなく侍るへし。右は。お花のかれて後。まねかん
こと不審のよしきたありて。左に勝の字すくなきにより
て右まけ侍り。

二十番

左勝

教國卿

うき物と思ひなれにし夕暮のこゝろのはてや秋の別路

右

元長

うしといひおしといひつゝゆく秋を心ひとつに定めかねぬる
右歌。古今集に。いせの海につりするあまのうけなれや
心ひとつをさためかねぬると。いへる下句おなしと云々。
左歌。新古今集に。恨むひまたしいまはの身なれとも思ひ
なれにし夕ぐれの空と。いへる下句を。上に引なしたる。
いかゝと。申出す輩ありしかは。後日に禪閣に尋ねられし
に。二句つゝきては。本歌にとりたるやうにきこゆ。かや
うの事は。當座思ひ出されて難申侍れは。陳答にをよはぬ
事なり。但し左歌。聊まさりたるやうなれは。可し爲し勝歟
と申されて。治定畢。

廿一番

左勝

新大納言典侍

寄弓戀

つらきにも思ひよはらて梓弓をしかへしてもひくこゝろ哉
右
實隆朝臣

うき中の末は名にのみたつか弓人めを關と引へたてつゝ

右歌第五句。ひきへたてつゝと侍る。いかにそや。心えか
たし。左は第一第四句の終のめ文字。十四番の右の歌にさ
た侍し。よりて持とさたまり侍り。

廿二番

左勝

宮御方

つれなしと人の心はしらまゆみ思ひよはらてなにしたふらん
右
權大納言典侍

をしかへし契れはととも梓弓末の世かけていかゝたのまん

左右とかなくきこゆとて。又持になり侍りぬ。

廿三番

左勝

季經卿

契りつる末こそかはれあつさ弓たれにひかるゝ心なるらん

右

信量卿

うきにしも思ひよはらて梓弓やよいかにしてこゝろひかれん
右下句よろしからず。左の弓つよくきこゆるよしさため
らる。

廿四番

左勝

元長

又いつのちきりもしらすしらま弓引とゝめはや今朝の別路

右

忠富

いかゝせんなひきもやらて梓弓心つよくもする月日を

兩首申二同等之由。

廿五番

左勝

爲廣卿

末つゐに我名はかりやたつか弓ひくてあまたの人はよはらて

右

親長卿

いかにせん人のつらさもしら眞弓つよき心のひくによらすは
左。光明峯寺攝政家戀十首歌合に。人心あたちのま弓たの
ますよひくてあまたにかはる契はと侍るを。判者定家卿。
弓にひくてあまたとつゝ侍らん事。理かなはすと難し
侍るよし。李部王申いたさるゝむねあり。右。人のつらさも
しらま弓。いひおほせられてもきこえず。

廿六番

左

季春卿

いかにせんしのひく／＼にひきみれとあたちのま弓つよき心を
右。入道前左大臣女

我方によるとはなしに梓弓なとか心のひかれそめけん

右。古今集の歌をおもへるにや。左第二第三の句のつゝ
き。おもはしからさるよし申て。右勝にさたまりぬ。

廿七番

左持

以量

いつかさて思ひよはらんあつさ弓ひくにつれなき人の心は
右。雅行卿

をしかへー思へはつらしあつさ弓又よそ人にこゝろひくやと
左右同科之由。定申。

廿八番

左持

女房

よそにみる人の心もしら眞弓をしてはいかゝいひもいつへき
右。式部卿親王

つらしとは思ひとりても梓弓もとのあはれにひく心かな
右。もとのあはれいかにそやきこゆ。左。詞のつゝきよる

しくきこえて侍るよし。をの／＼さため申す。

廿九番

左

基綱卿

ことかたに心つよくはいひよれと誰に弓弦のかけはなるらん
右。敦國卿

契のみあたちのま弓引かたの心あるともしゐてたのまん
左。上句きゝ心えかたく侍るうへ。たれにゆつる。また誹

諧の舁に侍るへし。右のみの字。あまりてきこえ侍れとも。
詞のつゝきよろしく聞ゆるよしさため申す。

三十番

左持

敦秀卿

人しれぬ契もあらしうちならすゆつるの音のたえぬよ比は
右。勾當内侍

末かけていかゝたのまんあつさゆみ引もあたる人の心を
左。定而思三故事一歟。無三殊難。右又風舁無三過失。仍持と定

申畢。

右文明十年九月盡歌合以奈佐勝舉本校合

群書類從卷第二百十一

和歌部六十六歌合三十二

將軍家歌合 文明十四年六月十日

題者中納言入道宋世

原上霞

見花忘耻

麓納涼

田早秋

月似鏡

芦間水

不叶心戀

互恨戀

山家戸

祈世神祇

作者

左方

前關白二條殿

權大納言義一堀方御所

天台座主尊應清通院

前大納言爲富治泉

入道前左大臣轉後輪三修實量公

右衛門督爲廣治泉

前内大臣大炊御門俊成量公

權中納言實隆三修西殿

散位源尚氏土能前部少輔殿

釋正廣

右方

三	三	三	三	四	三	一	三	勝
四	三	三	四	三	一	六	八	負
四	四	四	三	四	五	一	一	持

關白近衛

沙彌宋世爲局非中納言入道雅康

前大僧正道興聖護院殿

前大僧正增運實相院殿

左大將冬良一條殿

按察使親長甘藷寺

權大納言高清

參議基綱

左衛門大尉藤原政行

沙彌宗伊

判者

大納言入道榮雅

一番 原上霞

左

右

霜かれの尾花かすゑの春風にかすむ浪よるむさし野の原
いつまてかありとは見えしその原や春は霞にきゆる筈木
此歌合。判申へきよし承に。ことなる難も侍らす。しかれ

二	五	三	五	三	三	一	四	五	六
四	二	三	三	三	四	五	二	四	
四	三	二	四	三	四	四	四	一	四

前關白

關白

は左右のかたはらに。勝負の字を付侍るへきにやと。おもひたまへと。さすかことたらぬ様にやはへらん。例なきにしもあらねは。假名の五字を句の上にきて。三十一字をつらね侍りて。雌雄をあらはし侍るへし。尋常の歌をたに。はか／＼しくつゝけ侍らぬ身に。まして句ことに文字ををかんとはかり。かたのやうに書侍るなるへし。凡おろかなる心に。和歌の浦のよしあしを分かつきのみにあらず。浪のしはにおほゝれはへれは。かたはらいたきひかことのみそおほかるへき。

二番

左

權大納言義一

ふるさとは霞にこむるみよしのゝみかきかはらに春や立ちむ

右

沙彌宋世

春といへば霞も八重のあしふきにひまこそみえね小屋の松原

我園にきなく鶯かへるなよ竹のまかきのしはしすみかに

三番

左

天台座主尊應

来る春のすかたや遠きみかの原久邇のみやこの山はかすみて

右

前大僧正道興

ゆふしめの外にみたれてたなひくやしのふか原の霞なるらん

雪は猶ふる野の澤に袖はへてかたみをおもみつむ若菜哉

四番

左

前大納言爲富

泊瀬路やあけゆく春の色もなし霞にくもるひはらまきはら

右

前大僧正増運

春やたつきのふは雪もふる里のみかきか原のうちかすみつゝ
嶺の雪かつや春とて消ぬらん霞そ今朝は千重にみえける

五番

左

入道前左大臣

そことしもわか松原たつの鳴しほひも遠く立霞かな

右

左大將冬良

わたの原立ともしらぬ浪の上にかすむこすゑの浮嶋の松

六番

左

右衛門督爲廣

ありとたに春は見えなてその原や霞のよそにきゆるはゝき木

右

按察使親長

みとりなる色をふかめてかすむなりのときき春にあふの松原

まやの軒月こそかほれ春の夜はかきほの梅の近き匂ひに

七番

左

前内大臣

花のいろにうつりし袖も春といへば霞にすれるまのゝ萩原

右

權大納言高清

その原や程をしちかみはゝき木のなか／＼見えすたつ霞かな

鳩の海やくるゝ霞に暫しこそ見えつる船のきてて跡なき

八番

左

權大納言實隆

春の色はまたあさちふの霜かれに霞みもはてぬ小のゝしの原

右

參議基綱

もえ出る淺茅に見えし春の色のつゝきの原は今朝やかすめる

咲花に埋もれゆけはおく山に猶ぞ分いるるもしらぬも

九番

左

散位源尙氏

吹よはるしのふか原の春風にみたれもはてすたつ霞かな

右

左衛門大尉藤原政行

みかの原ふるきみやこの春霞はるをいく夜かへたてきぬらん
かくはかりちり行花に春風と峯にも尾にもきくは恨めし

十番

左

釋正廣

春のきる衣を空にみかの原ひとつに山もたつ霞かな

右

沙彌宗伊

山かつら霞をかけてまきもくの檜原に春の空そ夜ふかき

みな人のきてもとへかし山にても櫻うゑをく柴の庵を

十一番

見花忘耻

左

權大納言義一

山櫻春はいかなるならひとて人めもしらぬ花の木のもと

右

前大僧正道興

人なみにたちまじるへき身ならねはうき名にかふる花の影哉

とはれねは物さひにけり庭の花よし我のみと靜にそみん

十二番

左

天台座主尊應

かつらきや山分衣よるはきてあくもしらぬ花の下かけ

右

前大僧正増運

今はわれはつへき老の姿をもわすれては又花になれぬる

をる枝をいかてか暫し残さまし風し誘へはちらぬ花なき

十三番

左

前大納言爲富

はらひえぬかしらの雪の姿をもわすれてくらす花の下陰

右

左大將冬良

山かつも花の陰にはやとれともをのか姿のえやはかくるゝ

夢なりやき

のふ盛の花の陰

かつけ移るふちり

はてねとも

十四番

左

入道左大臣

花見ればせはき袂もわすられておほふ計におもふ比かな

右

按察使親長

かすならぬ身をはいかゝと思ひしも花みぬさきの心なりけり

しめし野に中空たかくひはり立床やいかなる芝生なる寛

十五番

左

右衛門督爲廣

まなふさへおろかなる身を春はなと花に光のかけおくるらむ

右

權大納言高清

數ならぬ身をはつかしの杜の名もわするゝ花の影になれつゝ

年積るうき身の春はとにかくに恨てそ見るかすむ夜の月

十六番

左

前内大臣

移ろはん後よいかにと身のうさの見るに忘るゝ花もはつかし

右

參木基綱

身に積る年のおもはんことわりもわするゝ花の雪の木のもと

行儘にきゝす立なるのへの草かくろへかねて妻やとふ寛

十七番

左

權中納言實隆

朽木にもたくふ姿はさもあらはあれ心は花にうつしはてにき

右

左衛門大尉藤原政行

心なき身には過たる花そともしらていくとせ春になれなん
すめる夜の門田の水にたくひきて蛙の聲を近くきこゆる
十八番

左

散位源尚氏

おろかなる心の色も春はたゞ我身わすれてむかふ花哉

右

沙彌宗伊

またもこん春をそちきるなれくし命なさを花に忘れて

池の面はのときき風に塵もなくまつ藤浪すめるかけ哉

十九番

左

釋正廣

人なみに我立いて、高砂のまつのおもはん花のかけかな

右

關白

人なみにたちよるへくもあらぬ身を忘れて花の影にくらしつ
なれもまた峯のつゝしを折そへて名残の春と柴に付ぬる

二十番

左

前關白

いろもかも我ことのはにしらぬ身を花に忘るゝ春の木のもと

右

沙彌宋世

心たにあかすはよしや咲はなのかけのくち木と人はみるとも

よしの川しはしは春をやとしけり水に移ろふしの山吹

廿一番

麓納涼

左

天台座主尊應

高根よりおろすま柴の涼しさはあらぬあらしを麓にそきく

右

左大將冬良

松たてる麓の里の夕すゝみ秋にもあらぬ秋風そふく

都人きかへてけりなはな衣よはみな夏としらかさねして

廿二番

左

前大納言爲富

夏山の麓のましはをりしきて風まつかけのゆふすゝみ哉

右

按察使親長

外山より麓の里に吹おちてすゝしきわくる木々の下風

早苗まつ植渡せるはわきたそとかつく見ゆる末の秋風

廿三番

左

入道前左大臣

山の名の朝日はとをくかたふきてふもとすゝしき宇治の川風

右

權大納言高清

小倉やま麓の野へはゆふ日かけかたふくかたそわけて涼しき

みはしにてなれし橋おもひ出てかこそこのころね

廿四番

左

右衛門督爲廣

陰ふかみこゝや氷室の山風と麓につくる聲のすゝしき

右

參議基綱

かけふかき山の麓の夕すゝみ袖におちくる風そ露けき

五月雨に埋もれはてゝ日をふれととふ人もなき柴の庵を

廿五番

左

前内大臣

里遠くすゝむ麓の夕くれに山口しるくかよふ秋かせ

右

左衛門大尉藤原政行

山風のかよふ麓のたらしはのなれまさるへき夕すゝみかな

見渡せは清くすゝしく軒はまでかゝらて咲る露の夕顔

廿六番

左

權中納言實隆

立よるは麓なからもすゝしきやまたうへもなく通ふ山かせ

右

沙彌宗伊

風の聲は秋をもまたぬならのはのそよく麓にしかはなかねと

廿七番

左

散位源荷氏

すゝしきは麓のまはしはしなを折しく袖にかよふあきかせ

右

關白

日の入し山のあなたは秋なれや麓の野へのまたき涼しさ

廿八番

左

釋正廣

音羽山ふもとのたきつなみかけて都の袖そかくなりぬる

右

沙彌宋世

しはしとてすゝむ麓のなら柴のなれはまさらぬ秋風そ吹

廿九番

左

前關白

山人のかへるふもとに分入てまはしは折しく夕すゝみ哉

右

前大僧正道興

山水も初つるふもとの岩かねにすゝしきそへてまつ風そ吹

三十番

左

權大納言義一

風かよふ麓の野へのくすかつらうらはの露に秋そちかつく

右

前大僧正増進

一とほり峯行雲に雨落てふもとすゝしき野への夕露

くりかへしすゝく心も底清き川へのはらへ千年いのらむ

三十一番

田早秋

左

前大納言爲富

稲葉ふく音は今朝とてかはらねとしよりなひく小田の秋風

右

權大納言高清

きのふ今日色こき稻に露落て秋を告こすをのゝ山風

三十二番

左

入道前左大臣

をく露もほにあらはれてみたる也なひくいな葉の秋のはつ風

右

參木基綱

秋の色もほに出てをくしら露の分てなひくやわきたなるらん

三十三番

左

右衛門督爲廣

浦風の色になり行みなと田やほに出てくる秋を見すらん

右

左衛門大尉藤原政行

いなは吹音かはりぬるみなと田に浦風ながら秋はきにけり

三十四番

左

前内大臣

わきたこそほにはいつれと白露のをくてもなひく秋の初風

右

沙彌宗伊

植し田のいなはの山路秋くれはまつ穂に出る松風の聲

我せこかきぬにをすらんかるな草ねての朝けの露の萩原

三十五番

左

つくは山けさはたしけくちる露のしつくの田井の秋の初風

右

穂にも出ぬ小田の稻葉に昨日までかくやはきし秋の初かせ

鹿やふすつれなき妻はくる夜はも稀なる野への草の庭に

三十六番

左

秋やまつ松にをとして住よしの小田のいなはになひく初風

右

つくはねの嶺より落る一葉にやすそわの小田の秋をしるらん

漣やうかへる月に音すみて猶かけみかく志賀の山風

三十七番

左

露のほる岡へのわさ田いかならんねてのあさけの秋の初風

右

夜もすから稻葉を風に分させてあくる門田に秋はきにけり

あま人もとそな月みる烟たえ夜半の空すむしほかまの浦

三十八番

左

秋の風稻葉になひく露のまにきのふのさなへ色そかはれる

右

このねぬる夜のまに露やをかへなるわさ田色つき秋はきに鬼

三山へにきくも悲しな月みれば夜はすからに鹿のなく聲

三十九番

左

權中納言實隆

關白

散位源尚氏

沙彌宋世

釋正廣

前大僧正道興

前關白

前大僧正増運

權大納言義一

今朝みれば露をき初る小山田のかりほの庵に秋は來にけり

右

左大將冬良

小山田のいなはそよきて吹風も身にしみそむる秋そきにける

水さむくきりの晴行野澤よりかすし、鴨の月にたつこゑ

四十番

左

鳥はまたしらてをとせぬ小山田にはつ穂を渡る今朝の秋風

右

天台座主尊應

風渡るわさ田の稻のうちなひきいろつきそむる秋はきにけり

峯の雲きえてのこらぬ空なからかすかになりぬ月の有明

四十一番

左

月似鏡

入道前左大臣

山の端にかゝれる月や見る人の影をうつさぬかゝみなるらん

右

左衛門大尉藤原政行

ますかゝみ岩戸にかけしかけとめて幾夜かてらす久かたの月

横ひ原杉たつ山の葉をしけみまた影みせすくるゝ夜の月

四十二番

左

右衛門督爲廣

まさかきかけしかゝみの面影も月にそのこるあまのかく山

右

沙彌宗伊

秋はたゝ空行月の舟の内にみかき出せるますかゝみかな

限りなく千里くもらて望月のなかはの秋はしるき影かな

四十三番

左

前内大臣

さかきにはかけし鏡もかく山のこのまをのほる秋のよの月

右

關白

雲間よりも月影はあまをとめ袖をかゝみにおほふとやみん
一本にたくひまれなるりうたんのかれ行花につきて咲比
四十四番

左

權中納言實隆

山鳥もねにやたてまします鏡それかと月のすめるおのへに

右

沙彌宋世

むかへともしらぬ翁かますかゝみかけて出たる月ひとおとこ
夜やあくる砧の音は千聲して庭鳥もはや八たひ鳴也

四十五番

左

散位源尙氏

心あれやくもらぬ月のますかゝみひかりをみかく夜はの嵐に

右

前大僧正道興

月そとて夜はにむかへは影きよくすめる鏡そ空にかゝれる
折見はやもみつる山の目にそへて枝染喰ねする時雨を

四十六番

左

釋正廣

かたみとてのこすかゝみをすまの浦の波より出す秋の夜の月

右

前大僧正増運

くもりなき玉嶋川の月見れはいまもかゝみの影そのこれる
徒に誰かいをねんすむ月に松風すさひくるゝ秋の夜

四十七番

左

前關白

なれきつるむかしの秋の面影もうかふを月のうらみとやみん

右

左大將冬良

誰ためそわれしかゝみの面影を月にもうつす秋の夜の空
散はてゝとまらぬ秋の宿の花せめては残る虫のねもかな

四十八番

左

權大納言義一

み空ゆく月は鏡とみえなから手にはとられぬ物にそ有ける

右

按察使親長

いかゝせん月をかゝみとみるたにも人の心のくもりやはする
したへとも長月は早はやおおいくりきてなかゝなれや東雲の月

四十九番

左

天台座主尊應

いかにみて手にとるはかりむかふらん鏡をかくる月の宮人

右

權大納言高清

くもりなき昔おほゆる世かたりに月をますみの鏡とそ見る
砌なる菊の白露葉にをくはまたその色のけちめ見えけり

五十番

左

前大納言爲富

水の面にむかふかゝみの曇らぬはてりそふ月の光なりけり

右

參木基綱

むかふうちに涙そくもる月はたかのこすかたみの鏡なるらん

神な月ちかき空とて初時雨みちゆきふりにきほふ山風

五十一番

左

右衛門督爲廣

あしの葉は冬かれはてゝ行舟のさはる入江や氷こまなるらむ

右

關白

風渡るあしのかれ葉にのこりけりこほる入江の浪のひゝきは
冬たつやねぬる朝けにはけしくて風のおとそひ散木葉哉

五十二番

左

前内大臣

浦風のこほりはてたる入江にも苜のほなみそかれてのこれる
右 沙彌宋世

冬をあさみ入江にかかるゝ苜つゝのひとへはかりに凍る比かな
見し秋の木毎の色ははかなくてよにも空しく時雨ふる也
五十三番

左

權中納言實隆

池の面は苜まをせはみ行なやむ水よりまつや氷そむらん
右 前大僧正道興

右

前大僧正道興

しほれ苜のほすゑかたより風吹は氷の上にさはくしら浪
とこ 浮寝の鴨もせはしとやむれて立らんかるの池水
五十四番

左

散位源尙氏

難波江や汀のなみのこほるより苜の葉風の音そまかはぬ
右 前大僧正増運

右

前大僧正増運

難波江やこほりを蟹のいとまにて苜かり小舟こきもかへらす
興津風なには江さはき白波のほか行千鳥ともしたふ聲
五十五番

左

釋正廣

苜芽のうすきを冬にあらはして今朝かつこほる浪の上哉
右 左大將冬良

右

左大將冬良

池水は汀のほかもこほるらむあしめのなみの遠さかる聲
うす雪や末葉の風のきこえしもよふくる儘に下おれの聲
五十六番

左

前關白

浦風にかれはそよきて藻江のあしまはなみの音そこほれる
右 按察使親長

右

按察使親長

苜のはにかくれてすめる鳥もなしこやのひまなく氷る入江は
道は雪になきまでみ山かきくれぬたれ迷ふらん松の下陰
五十七番

左

權大納言義一

みしま江や霜にかれふす苜のはまなひかぬまで氷る比哉
右 權大納言高清

右

權大納言高清

こほらすはありとも見えし白妙にあらはれ出るあしの下水
戸さしせて物凄ましき庭の月よなくそ見る師走なれ共
五十八番

左

天台座主尊應

よる舟も日をへて遠く三嶋江やあしねの氷とちやまされる
右 參木基綱

右

參木基綱

みなと川なかれ入江のしほあひに凍りこほらぬ苜間をそ見る
峯の雪猶ふりつめは時をえてまなくもたか炭かまの山
五十九番

左

前大納言爲富

難波江やをきそふ霜にしほれ苜の下ねも見えず氷とちつゝ
右 左衛門大尉藤原政行

右

左衛門大尉藤原政行

さよ風や入江の苜に吹つらんみたれてむすふ朝こほり哉
まて暫しけふくれぬとも歸らしよ御狩の原は雉の猶たつ
六十番

左

入道前左大臣

冬かれのあし分小船よを寒み江にしさはるや氷なるらん
右 沙彌宗伊

右

沙彌宗伊

氷ゆくかれはの霜もとちそひて苜間のみつの音そすくなき
哀わかしらすことしも又暮ぬかくしつゝのみ積る老かな

右

沙彌宗伊

六十一番 不叶心戀

左

前内、臣

右

前大僧正道興

人心おもひかけてもたまたすきいかてむすはん契りならまし
せく袖に浮ふ涙の深ければ名そたちける忍ひきぬれと

六十二番

左

權中納言實隆

今は身のこひしねと思ふ命たに心にもあらすなからへにけり
右 前大僧正増運

ことはりと思ひもなさて數ならぬ我につらきをなと歎くらん
いかにして後ともせめて契り置ん影ふむ計近きかひなき

六十三番

左

散位源尙氏

戀しなんと計り思ふ命さへつれなきなかのたくひとそなる
右 左大將冬良

須磨の浦のもしほの烟いつかさて思ふかたには立なひくらむ
よしさらはきてとふことは難く共なと哀共かけぬ言のは

六十四番

左

釋正廣

いかにせん花にあらしのこととはりはしれとももらす我涙かな
右 按察使親長

つらからは思ひたえねと歎くたに心かなふ世ならぬそうき
思ひをはなしとそいはん忍ふれと外にやはしる床の涙も

六十五番

左

前關白

したひわひなにか別のふることは戀よはる身も思ひいてつゝ
右 權大納言高濤

つらきをもさのみ歎かし心には我身のうへもまかせやはする
しられしたくひや思ふ日に添て影社見えぬつきぬ歎は

六十六番

左

權大納言義一

つらくともあふをかきりと思はすは人に命をなにかかへまし
右 參木基綱

うきなかにいかゝたへまし思ふには情たにこそ仇になりぬれ
みしめひく貴船の神の守あらはけちね玉散よはの思ひを

六十七番

左

天台座主尊應

夕霧のはれぬおもひに消わひぬ雲井の雁の聲をへたてゝ
右 左衛門大尉藤原政行

なとてかく人は心に任せつゝいとへは厭ふ身になりけん
かくつらき契の程をはちやせん身の報にや君かつれなき

六十八番

左

前大納言爲富

人をおもふ我心さへかなはねはいきてあふへき頼たになし
右 沙彌宗伊

いふことはいはてもあらん思はしと思ふ心そせんかたもなき
みま草を君かためにと菊をけと契たかへはかひもなき哉

六十九番

左

入道前左大臣

心たにこゝろにかなふ身なりせば人もしたはし物もおもはし
右 關白

つれなきに思ひたえなんとはかりの心も身には任せやはする
陸奥のなき名取川よしさらはきまさぬ君かか言にもせん
七十番

左

右衛門督爲廣

忘れなんとはかりおもふ心たに身をやいとひて猶したふらん

右

沙彌宋世

猶たのめ人のつらさもかくて世にありはつましき習と思へは

見し夢におとつれつるもやかて早さめて淋しき敷妙の床

左

互恨戀

せめてさはなかにことわる人もあれな恨むるふしの誰か優れる

右

權中納言實隆

まくす原ふきかふ音もつらきかなわかなかきに通ふ秋かせ

又いつのくる夜頼みにすかはらや稀に伏見の今朝の別路

左

散位源尙氏

へたて行心くらへのうらみをはたかつらさよりおもひ初けむ

右

按察使親長

まくす原我かたにのみしけりしに人の庭にも秋かせそふく

ともすれば恨をふかみせく涙むかしの袖はかゝる色かは

左

釋正廣

最上川ともに心はいな船ののほれはくたるなとなりけり

いかにせんかたみにふかく恨てもしたにはさすかよはき心を

右

權大納言高清

忘草きしを尋てかつゝまはたれ住の江にしるへたにせん

七十四番

左

前關白

くらへ見よ鹽やくあまの里の名もかゝるおもひにたつる烟を

人もさそ我なかゝきにはふ葛のつゆのへたてをしほる秋風

亂る共きかせてしかな遙けえぬよるの涙の忍ふもちすり

七十五番

君とわれ二見の浦のうらみゆへ波かけ衣ほすひまもなし

右

權大納言義一

我袖もかはらず波はこすとみよく夕くれかよその浦風

深き夜に誰とかむへき道ならす通へる夢は近きゆきゝと

七十六番

吹よはる風こそなければまくす原我なかゝきのかなたこなたに

左

天台座主尊應

くらへ見よめかり颯くみかた／＼にほすよもしらぬ袖の浦人

右

沙彌宗伊

しはしたにほさぬ袖哉月影もよはる思ひのしる人にして

七十七番

左

前大納言爲富

つれなさの心もおなし心にてうらむれはまたうらみられぬる

いつかたに恨はいろもふかゝらんわか中垣のまくすしら露

右

關白

宵のまにきてたに歸れかた時もみそなくさまん君か面影

七十八番

左

入道前左大臣

いつかたか恨みよはらん人はまた我ことわりと思ふならひも

右

沙彌宋世

いかにせんよその恨ははるけても我をことはる心ならすは

身の歎き聞せん便まつ程にけふくれまたやよはも明なん

七十九番

左

右衛門督爲廣

よしさらは恨みもはてし恨むるや我身にならふ人のことは

右

前大僧正道興

うしといへはつらしとかこつ我中の心つかひそ休むまもなき

おき出る名殘も悲し忍はすはしはしと袖を猶やひかへん

八十番

左

前内大臣

まとふてふ同し心の恨を誰とかそともよひとさためよ

右

前大僧正増運

人もまたかこつは同しことの葉にふかき心をいかてしらせん

かき分て言とひけりな露深み蓬生ふかくしけるやとりに

八十一番

山家戸

散位源尙氏

おのつかから松の戸たゝく嵐をもうき世の外の聲にきく哉

右

權大納言高清

住人のありとは見えす雲にとち嵐にあくる 柴の戸の中

横雲のきえ行かたの其まより峯より明るきはみえけり

八十二番

左

釋正廣

我たれをまつのとほその夕嵐むかしをかたれしる人にせん

右

參木恭綱

雲にとち嵐のたゝく松の戸に浮世のつてはいつかきくへき

八十三番

塵ひちの年積る山に杉村のへにける世をはしる人もなし

左

前關白

山陰の竹のあみ戸のひまをあらみ浮世へたゝて住は見えけり

右

左衛門大尉藤原政行

夕まくれ峯のあらしは柴の戸をたゝくにしもそさし籠りぬる

見れはまた絹をも岩にかけてけり千ひろに落る布引の瀧

八十四番

左

權大納言義一

さらてたにあれまよくおしき山里の柴の戸たゝく峯の松かせ

右

沙彌宗伊

さしこむる峯のとほそも苦むして問人かたくなる山路かな

身は浮世きても距つる山深みさし籠りぬる篠のあみ戸に

八十五番

左

天台座主尊應

稀にきてたゝくにあけぬ柴の戸や嵐になるゝ山かけの庵

右

關白

あやにくに嵐そたゝく世のつかひいとふみ山の松のとほそを

かりはてし千町の山田もる人もなくて庵はしもむすふ比

八十六番

左

前大納言爲富

たゝくとて誰をかさてもまつの戸に人たのめなる山風の聲

右

沙彌宋世

山深く住る心をとちはてはしはのあみ戸はあはらなりとも

朝夕に峯の嵐のとふ宿はかゝれる雲のつきぬ窓かな

八十七番 左

柴の戸のあけてもくらき山陰は雲ふたかりて露しくれつゝ

右

入道前左大臣

ましてしはし柴のあみ戸の明くれもいくよ嵐の山かけにして

露分て行野の末そはるかなるかりの枕に月やまたまし

八十八番 左

右衛門督爲廣

たゝきぬるをのへの嵐たゆむまは明ても雲のとつる柴の戸

右

前大僧正増運

山深み住身のたれをまつの戸にたゝく嵐をさゝもまかへす

見る夢はきくにたえけり袖かへす枕も波のくたく浮寝に

八十九番 左

前内大臣

誰かはと立出て見れば山風のたゝく音のみのこる柴の戸

右

左大將冬良

住わひぬ世のうきふしにきゝかへむ竹のとほその山水の聲

白妙に浪も立きてひかたより時のまにさすしほ風そ吹

九十番 左

權中納言實隆

山里は立出てとはんかたもなしとちていくかの草の戸さしそ

右

按察使親長

しはしとも思はてかこふ松の戸にをくりてけりな明暮の空

汀よりきこゆる音は濱風に松の波そふ志賀のから崎

九十一番 左

新世神祇

釋正廣

朝な／＼天照神にむかひても君千代まてと手をそあはする

右

左衛門大尉藤原政行

千代ませとおもふ手向は君かため同しことをや神もうくらん

嶺の寺きえ行かねそ山かつらかけてそ月のちかく落ぬる

九十二番 左

前關白

春日やま老木の松の朽やらて君千代まてとまた祈るかな

右

沙彌宗伊

神代よし人の世よしとつき／＼に猶まもりませあし原のくに

我むかし君に仕へしかす／＼は立ぬにつけて忍はるゝ哉

九十三番 左

權大納言義一

君か代も猶すくなれと祈るそよたゝすの竹に賀茂の瑞籬

右

關白

天下いのるを神もまもれとやみかさの山にあとはたれけん

松のはしら竹あめる垣同じくは猶奥山にしのひはてめや

九十四番 左

天台座主尊應

代をいのる心ことはの玉津嶋たま／＼あへる法のしるしに

右

沙彌宋世

祈るそよ神のましはるちりひちの山となる迄よをすなをにと

身にあまる君か恵の春にあへとよしあししらぬ敷嶋の道

九十五番 左

前大納言爲富

君か代を猶すてやらてすなほにと祈る心や神もうくらむ

右

前大僧正道興

諸人のいのるしるしに春日山くたれる代とも見えぬ時かな

かくらこそ宋榮えめれ神に祈る世の人心しろしめすまで

九十六番

左

入道前左大臣

いのるてふ昔にこえておとこ山さかゆく今の代こそおさまれ

右

前大僧正増運

天地の神にいのれは君か代やなく久しく猶さかへまし

世の中をきゝてそ較る塵のみはとてもかくても墨染の袖

九十七番

左

右衛門督爲廣

守れ猶かしこところのかしこさは千代もといのる君か日嗣を

右

左大將冬良

まもれ猶世も住よしのみやはしらすくなる道も神そしるへき

見ても思ひきくも危しそむきえぬ世を渡る身は木その倅

九十八番

左

前内大臣

石清水ひとつ流を神もまもり君もちきれる代々のかしこさ

右

按察使親長

やすかれと代を祈ることちはやふる神も心にまつかなふらん

日本に頼む初瀬の利生あればかのもろこしに傳てやきく

九十九番

左

權中納言實隆

しきしまの道につけても君か代を猶すみよしといのる神かき

右

權大納言高清

君か代はいのらすとても石清水すまなかきりは猶そまもらん

忘れすそ聞より思ふかの國やたゝこゝのつの品に漏しと

百番

左

散位源尚氏

神もしれ四方の國まで君か代をいのる心の隔てなきをは

右

參木基綱

男山松のみさほの千代の影君になひけと神はみそなへ

四方の國君になひきて月も日もかきりはあらし久方の空

將軍家歌合 文明十四年閏七月

一番

左將

梅香留袖

親王御方

我袖に色こそみえね手折つる名残はしはし梅かかそする

右

萩音近枕

前關白

軒近くうへしもつらし手枕の外にはきかぬ萩のうはかせ

右方申云。聲韻病いかにそや侍る。

左申云。無可難申之旨。

右方人難申。聲韻病。さる事には侍れと。春の夜のやみは

あやなしといへる歌を思ひて。わか袖にとをかれたるい

とおかしこそ。左方人。難なきよし申さる。しかれとも

第四句なと優にしもきこえず。左は。そしりあれとも。歌

のさまおかし。右は。とかなけれとも其跡不庶幾。なす

らへて持とや申へからん。

二番

左

水郷柳

關白

青柳の岸におふてふ淀川のよとむ計にうつるかけ哉

右將

故郷萩

前大僧正道興

むかしたれきて歸りけんさく萩のにしきを残す露の故郷

右方申云。青柳の岸に生てふよと川と侍る。つゝき如何。

左方申云。朱買臣か故事耳なれ侍るうへ。露もそのたより

なくきこえ侍るか。いかゝ侍らん。

左の柳。すみよしの岸の忘草の心ちそし侍る。下句も心ゆ

かす。右の萩。朱買臣か故事耳なれて。露もそのたよりな

三番

左

春曙

天台座主尊應

わかるなよ曉月の雲にあふ雲は花なるあけほの、山

右將

秋夕

前大僧正増運

大かたの秋をいつまでかこちけん老のなかめのゆふくれの空

右方申云。曉と曙の句をへたて侍るいかゝ。五文字もす

ゑにかけあひ侍らぬにや。

左申云。平頭の病歌合の例として難申歟。又大方。なかも。

ともに先達有申旨一哉。

左の歌。難あるよし申さる。右の歌も平頭病なきにはをと

り侍るへし。大かたといへること。正治の比歌合にありし

をは。ことはよろしなと判せられたる。ありしやうに侍れ

は。さてもありなん。又なかもといふことのさたわすれ侍

り。六百番の歌合に。有家卿歌に。春ともみえぬなかも哉

と侍るを。倭成卿判に。なかも哉といふ詞の近來見え侍る。

未廿心一と侍る歟。か様の事にや老のなかもをは。歌のさ

ま優なるにつきて。勝と定申へき事いかゝ侍らん。

四番

左將

盛花

入道左大臣

昨日まで雲のとたえに峯の松のあらしをうつむ花の明ほの

右

明月

前内大臣

空の海や迷ふ雲なくいはれて月のみるめそさらにはれたる

右申云。一首躰。大方便に侍り。但聲韻の病。さきの番におなし。いか。

左方申云。第三句きゝよからす侍るにや。本歌は最暗の字ながら。壓の心したにもふくみ。うへにもよまれて侍り。今暗の心のみにて。頗詞不優美一歎。

左は。嶺松雲にうつもるゝをみて。花のさかりなる事をしり。右は空海雲のつきぬるによりて。月のあきらかなるにむかへり。春の花。秋の月。心をまとはし侍て。勝劣わきたしといへとも。曙の雲は。面影いさゝかたちまさる心ちし侍り。

五番

左勝

暮春鶯

權大納言義一

暮行は身をうくひすのねにたてゝなく計にもおしき春かな

右勝

晚秋鹿

權大納言教秀

つま戀のつれなきのみかくれて行秋のなこりををしかなく聲

右方申云。殊難なく宜く侍り。

左方申云。下句。ちかき歌に見をよふ心ちし侍り。

左歌。右方人無難宜よし申さるゝにもすきて。暮春の名残を黃鳥のかなしむによせて。なく計にもなと侍る。心詞おかしくも侍るかな。右歌。これも首尾よくいひしりて。

よろしくきこえ侍るに。ちかき歌に見及よし左方より申さる。定たしかなることにや。凡撰集の外。とりわきたる歌ならすは。事によりて。さのみさるへきにもあらさるか。いか様左には及へからず。

六番

左勝

早苗多

權大納言高清

苗代にとりこそ残せさなへ草千町をひろみうへわたしても

右勝

寒草少

左大將冬良

冬かれのまかきの菊の霜の色は花にそうつむはな的一本

右方申云。同字の病侍り。いか。

左申云。さもとは推せられ侍れとも。いひおほせても聞えさる歎。

右歌。殘菊の白妙の光にうははれて。霜の色きゆる心さもとときこえ侍り。題の心そ猶思ひたく侍る。左の歌は同字の難有よし申さる。仍右可レ爲勝歎。

七番

左勝

雲間郭公

按察使親長

入日さす山ほとゝきすなのるらしとよはた雲に聲のきこゆる

右勝

雪中待人

沙彌宋世

埋れぬこゝろの松もふる雪に色し見えねはとふ人もなし

右申云。ことなる難なくきこえ侍り。

左方申云。ことなる申詞なし。

左の。とよはた雲なとやらん。ことゝしく聞ゆるとあるも。大かた勿論なる様にや侍らん。右の心の松。ふるき詞にて。しかも色みえぬことを雪中によそへられたる心もすかたも。左にはまさり侍へし。

八番

左勝

照射

權大納言廣光

よひよりもほくしきしつゝ山かつら曉かけて鹿やまつらん

右勝

網代

權大納言實隆

あしろもる袖いかならん川かせのふかぬ程たにさける霜夜に
右方申云。殊難なし。

左方申云。題を五文字にいたせる無念にや。又第五のに文字。いかにそや侍。

左。山かつらあかつきかけて鹿や待らんなど。心もことはもよろしく侍るに。第一第二句や。いさゝかいやしくきこえ侍るへき。右初の五文字に題を打いたせる事を難せらる。さもあることなから。これも作例不可勝計。但第四句。猶おもひたく侍り。持なとにや。

九番

左時 曉蚊遣火

參議永繼

たてそふる賤かふせやのかやり火のけふりにおしき有明の影

右 深夜埋火

參議政爲

うつみ火はあさきのみさや闇の内に残るも難くふくる夜半哉

右申云。ことなる難なく侍り。

左申云。いさゝか誹諧の舛に侍るにや。

左さしたる事なく。又めつらしからず。右爲誹諧舛之由

左方より申さるゝ。頗風情のすきたる故也。左いさゝかまされり。

十番

左時 貴賤夏秋

參議基綱

數ならめ淺茅か露のみそきとてすかぬくわさを神はへたてし

右 都鄙歲暮

右衛門督爲廣

としなみはみやこより先こえ行やつもる日かすのすゑの松山

右方申云。

左方申云。殘事なし。但歲暮の題には。ことしも今は末の

松山と。いへる歌にあひにたる歟。

左歌。貴の字の心。事たらぬよし難申さる。數ならめ露の

身。賤心にて侍らは。それをもへたてしと侍らんは。貴のかたを專とせられたるかとも見えぬへし。右歌。ことしも今はと侍る。歌の同類を申さる。又春從東來といへる様に。都より年のくれぬへき事もおほつかなし。たとひ貴の心かすかなりとも。左は勝侍るへきにや。

十一番

左時 寄風戀

尙氏

人しれすおもふ心の松になとさはきいつらん秋の夕かせ

右 松風入琴

高秀

聞からに心もすむや引ことのしらへにかよふ松かせの聲

右方申云。第四句不甘心二歟。

左方申云。めつらしけなし。

右歌。まことにめつらしけなし。又無氣力一心ちす。左第

四句。俄なる様に侍れと。右にまさり侍るへし。

十二番

左時 寄煙戀

政行

うき名たつけふりの末をおもふにそ我下もえの空にくるしき

右 遠村煙戀

貞頼

たかやとにたつるけふりの末ならん山もとめくる雲の一すち

右方申云。うき名たつ煙のすへのつゝきおもひえさる様に侍る歟。

左申云。ことなる事なし。但第一第二句のたもし。病にや

侍らん。

左。うき名たつけふりのすゑのつゝき。おもひえさるよし

侍れと。下句なと心ふかきに似たり。右は。さしたること

なし。猶左の勝と申へき歟。

十三番

左持 寄山戀

政 茂

分迷ひ思ひ入よりさはるらん身をつくはねのこのもかものもに

右 山路旅行

玄 就

つたかゝる木々の下みちくれ初て露分かぬるうつ山のこえ

右申云。初五文字不ニ甘心。ことはつゝきおもはしからず

侍る歟。

左方申云。平頭の病の外殊なることなし。

左。筑波根。右宇津山。共以五文字不ニ庶幾ニ歟。

十四番

左持 寄草戀

宗 伊

ちきりしはあさはの野らの霜枯にくれなむふかくなる袂哉

右 草庵貽夢

賴 行

あたに見る身をうき草の庵なればさそふ道ありとかへる夢哉

右申。一首の鉢。やさしく聞え侍り。

左申云。絶無下可ニ難申一事。

左あさはの野ら。萬葉集より出たり。紅はすゑつむ花なる

へし。なみたの見する色にそ有けると云歌侍れと。これは

契あさはのとつゝけられて。紅ふかくなるたもと哉と。い

へるすかた。よろしく見え侍り。右さそふみちありとなと

いへるわたり。はかなけにきこえて。艶なるさまには侍れ

と。猶左は。つよき所も侍り。可レ爲レ勝歟。

十五番

左持 寄鏡戀

明 親

かひそなきたえにし後の面影は我身をさらぬかゝみなれとも

右 對鏡悲老

光 清

よしやなを泪にくもれます鏡さてもや老のかけもかくれん

右方申云。殊難なく侍り。

左方申云。無レ可無ニ不可一。

左右鏡可レ爲ニ同科一。

榮雅上

此歌合 文明十四年七月上洛之時。自ニ大納言殿ニ給ニ短冊卅

枚。可レ獻レ題之由蒙レ仰之間。則進レ之。俄被レ與ニ配卅人ニ被

レ成ニ歌合ニ云々。後七月於ニ比叡山東坂本旅宿ニ依レ仰早速加ニ

判詞。不レ及ニ思案ニ任レ筆。恐怖々々。

殿中十五番御歌合

判者 前大納言入道榮雅

一番

左春 會坂關

近衛前關白

杉むらはうつもれはて逢坂も春は霞の關と見えけり

右 小鹽山

沙彌榮雅

小松原はやほのくともえてけりをしほの山の春の明かた

左歌。相坂の關の杉むら埋れて。かすみの關の名に立ぬる

こゝろ。首尾よくとゝのほりてよろし。右うた。指燭一寸

までもなき歌様なり。ことに小松原小鹽。小の字なるへ

し。かたゝ是非に及ふへからす。左の勝にて侍るへし。

二番

左 芹河

式部卿宮

せり河やみゆきも今は遠き世のはるをのこしてたつ霞哉

右 老曾森

左大臣

今年猶わかしおいその森のかけ一しほはなの名残をそおもふ

左。せり河の御幸。ゆへくしく侍り。下句やかけあはす

侍らん。右これも下句同前の心地す。なすらへて持にや。

三番

左 鳥羽

左大將冬良

春はたゝ花のふかみやそことなく鳥羽田のみなみたつ霞かな

右 志賀花園

左衛門督爲廣

さくからに浦半のなみの面影もむかしに匂ふしかのはなその

左の歌。下句いかにそやきこゆ。右のうた。五文字そ。ふと

四番

左 野路

徳大寺前内大臣

連とこれも見えけり野ちのさとや風ふきたつる春のあは雪

右 神山

沙彌宋世

あふひくさひくてあまたに神山の椎柴かくれ誰かさすらむ

左歌。よのつね也。右うた。さ衣に。神山のしゐ柴かくれし

のへはそと侍るか。第二句。おもひたく侍れと。勝侍るへ

きにや。

五番

左 清瀧河

宗 山

夏衣織てやきまし清瀧のなみのしらいと風そすゝしき

右 辛崎

權大納言致秀

夕風やなみのちさとにかよふらむ一木もすゝしからさきの松

左の清瀧河。夏衣織てやきまし。かの山分衣に思ひそへら

れたるかよろしく侍り。右のうた。ことなる難は侍らねと。

左勝侍るへし。

六番

左 鴨川

前内大臣

秋にはやたゝすの木末うつろひて月も色なる加茂の河なみ

右 眞野入江

按察使親長

たつ波もとすさましき夕かなまのゝ入江をわたる秋風

左右共。無レ可無二不可。勝劣難レ決乎。

七番

左 嵯峨野

周 全

色にそむ衣の玉のをみなへしなひくさか野の露の明ほの

右 小倉山

沙彌常祐

出ぬまのほとはかけのみ小倉山ふもとの野への月のさやけさ

左。衣裏眞珠の緒に女郎花をそへられて。あたるさか野

の露の明ほのになひくすかたを。いさむる心も侍るや。右。

小倉山のふもとの野へに光を先たて。山本に月を待こ

ころ。さも侍へし。しかはあれとも。玉の光は月にもいさ

さか増り侍ぬへし。

八番

左 栗栖野

雅 俊

かり人やいまかへるらむ鶴なくくるすの小野のあきの夕くれ

右 桂里

堯 盛

すむ月のかつらの里の秋風やところからなを雲はらふらむ

栗栖のとの、秋の夕くれ。桂のさとの秋のよの月。いつれ

も景氣おなし侍り。

九番

左 宇治川

尙 氏

見わたせはうちの河風ふきならし霧わけいつる秋のしはふね

右 高嶋山

權大納言高清

なかぬ日は雪に積て棹施のかよふ跡見るたかしまの山

右。なかぬ日はと打出されたる。如何と聞え侍り。左。聞に

くき所も侍らす。勝侍るへきにこそ。

十番

左 田上河

權中納言政爲

聞あかすあしるの床の友ちとり田上河にいく夜なくらむ

右 比良山

尙 俊

今朝よりは氷にとつるさゝ波もかへるをとなきひらの山風

左右歌躰。但同科。

十一番

左 打出濱

政 行

いかにせむつゝむとすれと打出のはまの名もうき袖の漣

右 床山

權中納言實隆

はらはしな我近江路と待し夜も今はむなしき床の山かせ

左は。打出濱の名を袖のなみたにかこち。右は。近江路の

名をむなしき床にうらむ。其躰ひとしく無差別。

十二番

左 方田浦

參議基綱

逢みるも片田の浦によるふなのはかなきえにも身をや捨まし

右 守山

宏 行

いかにせむ浮名はよそに守山のやまぬ思ひのかひもなき身を

右。うき名もる山。めつらしけなし。左。歌の躰やさしから

ねとも。勝侍るへし。

十三番

左 篠原

平貞頼

夕まくれ袖よりあまる白露のしのにみたるゝ野ちの篠はら

右 伏見野

左近中将宣親

たれと又ふしみの里に馴にけむわか床のみのあれまくもおし

左歌。かさねる詞。かやうにも侍れとも。猶しのにみたる

る篠原なとつゝけたる。よくそ侍るよし聞侍し事也。右歌。

誰と又ふしみのさと。よろしく侍。可レ爲レ勝歟。

左 井手里

參議左大弁政顯

つゝみえぬおもひも今は我袖のなみたの色に井出のさと人

右 波都賀師杜

才法師

人めなを身ははつかしのもり始て露きえかへる袖もうらめし

左うた。めつらしきふしは侍られと。右にはまさり侍なむ。

左 安川

藤原尙隆

袖のなみなをせきかねて安河や數かく水に戀わたりつゝ

右 浮田杜

右大將

露もうし時雨もつらし身を秋のうき田の杜に袖はくつとも

左歌。やす河やと侍るよりしもつかた。いさゝか思ひえさ

るやうに侍り。右うた。露もうし時雨もつらしなといひし

りて。上句艶にきこえ侍れは。尤可レ爲レ勝。

文明十八年三月十六日。各々詠進之。仍後日較書進判詞。作者之書様等事。勸修寺大納言家于時傳奏被(ホマ)之畢。

三十六番歌合 文龜三年六月十四日

題

樹陰夏月 水邊納涼

作者

左方

右方

後柏原院

伏見

女房

式部卿親王

折備政家

亮井宮

准后致

亮胤法親王

入道親王道永

前關白

德大寺實厚

亮左大臣公

前左大臣實

參議左近中將義澄

三條近

亮民部卿政爲

權大納言實隆

權大納言宣胤

左衛門督爲廣

右衛門督季經

按察使俊量

沙彌宋世

權中納言宣親

參議雅俊

權中納言季種

權中納言政顯

權中納言元長

左近中將爲孝

左近少將爲和

講師

判者

左衛門督藤原朝臣爲廣

一番 樹陰夏月

左

女房

蟬の聲しくれし跡に待出て木の葉色つく月そもりくる

右

式部卿親王

明やすき空たに有を豊山の木の間の月は見る程もなし

右歌。聽_二聲_一於_二瓊樹_一疑_二時雨_一之在_二枝頭_一見_二月影_一於_二瑤

林_一誤_二秋色_一之入_二葉間_一其詞妖艶而其心甚深者歟。右歌。短

宵早明_一僅望_二殘月_一之掛_二林梢_一風鉢雖_二異_一他餘情難_レ及_二左

者歟。

二番

左

准后

吹分る風ならねとも木の間よりもりくる月の影の涼しさ

右

亮胤法親王

影ふけぬ木の間わつかにをく霜のをのれ移るふ短夜の月

左。納涼の題有に涼しさと侍る。傍題とや申へからん。

右。をく霜のをのれうつるふと侍るに。月の霜を結び侍る

こと。月照_二平沙_一夏夜霜なと侍るは。沙に影の映したる心

にて。面白く侍るを。木の葉の色つくなともいはて。月の

霜其意なく見え侍れと。左は傍題ををかけるうへ。歌か

ら。右は増り侍るもの歟。

三番

左

入道親王

半天にしはしやすらへ短夜の月は木の間に下陰

右

前關白

茂りあふ山はみとりの玉簾すきま求むる月を見るかな

左歌。しはしやすらへなと侍る。短夜と計侍りては。夏の

餘情少く侍る歟。又ならの木の間は。いつかたにか侍らん。

すへて一首の心。ことはり叶ひても聞え侍らぬにや。右の

歌。みる哉といへるわたり。少思ひたく侍れと。山爲_二碧玉

簪_一と。からの歌にも侍るうへ。玉簾おなし縁にたをやめ

のなと。定家卿も讀侍るを。思ひよそへられけるにや。一

首のしたて。いひしりて侍れば。勝へきにこそ。

四番

左

前左大臣

ならの葉のはもりの神はうけすとも手折てや見ん夏のよの月

右

左大臣

茂りあふ木の間を分る小夜風やもりくる月の光なるらむ

左。うけすともと侍る。後撰集の歌の心は。しらてそ折し

たよりなさるなと侍れば。懇望のかたも侍るを。此歌は。

をして手折んと侍る歟。神慮計かたくや侍らん。右は一首

のすかた宜見え侍り。可_レ謂_二勝_一。

五番

左

前左大臣

茂りあふ木の間の月はみすもあらずみもせて明る夏の夜の空

右

參議左近中將義澄

影やとす岡への松よいつとかは分て木の間も夏の夜の月

左歌は。見すもあらず見もせぬ人のと有をと。右の歌

は。夕月夜さすや岡邊のといへるを思へり。いづれも古今

集より出たるに取て。右の歌。いつとかはといへる。いさ

さか分別なきやうに覺侍れと。つらく見給へるに。松は

ときはの色なれば。木の間にかくるゝ月。四時も同事なれ

は。分て夏としもなき心にこそ。持なとや申侍らん。

六番

左持

權大納言實隆

待出る月もこふかき夏山に猶暮かたき日くらしの聲

右

民部卿政爲

暇なきをしたふもつらし短夜の月をはよしや木の間にのみむ

左。待出る月もと侍る。もてにをは。月をはひ出したる計にて。夏山の日暮しの聲。おもてにや聞え侍らんうへ。

歌合にとりては。暮月の心も少いかもや。右くまなきをしたふもつらしと侍る。かくはいつも申侍らんすれは。短

夜はかりにては。是も夏の月の色うすくや侍らん。又木の間の月をは。かならずしもしたふましき事にや侍らん。心

つくしの秋は來にけりなと讀るも。木の間のうへにて猶月を思ふ風情の。さま／＼に侍るへきにや。なすらへて持

とすへし。

七番

左持

左衛門督爲廣

幕木の影いかならんさらてたに有にもあらぬ短夜の月

右

權大納言宣胤

夏衣かるき袂のひとへ山月も影すく松のしたみち

右歌。夏衣といひて。月も影すくなとは宜様なるを。影すくにて侍らは。一重なる計にて。ことたるへきを。かるきと侍る。其詮なきうへ。衣の秀句。かるき。一重。すくなど。

あまりに重疊せる歟。左歌。拙き判者かにて侍り。源氏物語は。歌よりは詞をとれなと沙汰有事に侍れと。歌をとる

例。めづらかならざるをや。は／＼き／＼の月。まことにあるにもあらす侍れと。千五百番歌合の判に。釋阿。自歌の事

を申侍るとて。たま／＼判者にあたり侍るにより。勝負を付すなと侍れは。先賢後愚の差別は。すへて侍るへけれど。彼芳躅にまかせ。雌雄を決せすや侍らん。

左持

按察使俊量

蟬の羽のうすき衣の袖の露に月もうつるふ木々の下陰

右

右衛門督季經

茂りそふ程もしられて夏木立もりくる月の影そすくなき

左右ともに。ことなる見所もなき月にて侍るうへに。左袖の露。分て詮有とも見え侍らす。右月影なにも。すくな

しといはんやと。いさ／＼か思ひ給へれと。微月なとのかたに見侍らは。それもさも有ぬへくや。又夏木立。少沙汰有

事に侍れと。新拾遺集に。鶯のわすれかたみの聲はあれと花は跡なき夏木立哉と侍れは。是もさも有つへけれと。左

に勝までの事は。いか／＼と思ひ侍れは。持ふと／＼にや。

九番

左

權中納言宣親

夏の夜の霜を梢にをきながら檜の下葉そ月につれなき

右持

沙彌宋世

茂るなり秋にはいつかならの葉をならし顔にも月ほりこす

右歌。後撰集に。我宿をいつならしてか檜の葉をと侍る歌をとれるにや。かの柏木の巻にも。此歌をとりて。人なら

すへき宿の梢かなとも侍り。なにかほと云ること。六百番歌合判に色かほと云る。尤不三庶幾一よし申侍る。但文永の

夏。仙洞の御歌合に。爲家卿有かほなと云歌を不難例も侍れは。すへて歌からによるへきをや。此ならしかほは。

本歌の詞にて侍れは。六かた難有ましくや侍らん。左歌。月を霜に似せ。檐の下葉そ月につれなきと云る。いひしりて侍るを。初五文字に。夏の夜の霜とふと云出したる計にて。末に夏の餘情侍らす。月の霜はいつも有へきにこそ。又此歌。平頭病にて侍り。千五百番歌合に。はかなくそ朝ゐる雲にまかへけるとある歌を。上下の初五文字をとかわる時も侍れと。さまでをもき難にはあらざるへしとて。結句勝侍る例もあれと。又は同歌合に。ふかき難にてはあらねと。少の勝劣をもとむる時はとかに申よし侍れは。右は。本歌をおもへるうへ。その難あさきにつきて勝たるへし。

十番

左

いかせん千里はれ行月たにも影は木の間に短夜の空

右

鳴蟬のは山の梢暮初てもりくる月もうすき影かな

權中納言季種
參議雅俊

左。千里晴天月木間に短夜を歎心。さもやと思給れと。月たにもと侍るたにのこと葉。心ゆかさる歟。只月もの心にて侍るやらん。右鳴蟬のはやまといひて。うすき影なと侍る。させる見所なく侍うへ。暮月の心も。前に申たる事にて侍れと。又はさもやと思給ふるにつき。左よりは。いさ

さか歌から増るへくや。

十一番

左

短夜は一本の陰にかくるふもしはしの影とおしき月かな

右

權中納言元長
權中納言政顯

茂りあふ青葉もつらし木間より光を花の夏の夜の月
右歌。光を花とちらす計そと侍る歌を取て。一首のしたておかしき様に見え侍る所に。新拾遺葉やらんに。かすむ夜の月の桂も木間より光を花と移ろひにけり侍る歌。ふと思出侍る。春夏の差別計にてこそ侍れ。等類なとにもや成侍らん。左歌。陰影同調の詞。さためて作例も侍るらん。されと耳に立て聞え侍り。又かくろふと云るこゝ葉も。さまで不れ好思給るはいかゝそや。持とすへし。

十二番

左

枝茂みもりこぬ月も橘の花やしたてる光みすらむ

右

夏の夜の月。霜より秋の色に移ろひ初る杜の下風。

右。夏の夜の月。霜より秋の色にうつろひ初る杜の景氣。おかしからさるにしもあらす侍るに取て。此秋の色。紅葉

か。又は秋の明月の心にやと。いさゝか思給れと。いつれにてもあらんかし。左萬葉集に橘の下でるなと侍る歟。夏木立の枝茂きにより。もりこぬ月の光を橘の花の光に見せたる作意。いひしりて侍り。持なとにや。

十三番

左

涼しきは底むしらぬ廣瀬川袖つく計何思ひけむ

右

結ふ手にはやくの夏そわすらるゝこむ秋風もいさらぬの水

左歌は萬葉集に。廣瀬川袖つく計淺きせや心ふかめて我思ふらんと侍る歌を取。右歌は源氏物語に。いさらぬはは

爲廣
義澄

やくのこともわすれしをもとのあるしやおもかはりせると侍る歌を思へり。左は。例のかたくななる判者かつかうまつりける歌也。廣瀬川よりも淺くや侍らん。右は。心詞美麗にして。首尾相應せり。尤以勝たるへし。

十四番

左勝

准后

夕涼みいつくに夏をやり水のあたりは秋のこゝろ成らむ

右

宋世

流れをそ枕にすらむ楸おふる清き河原の陰に暮して

左 彼中川わたりの心も。何となくうかみ出て。いつくに

夏をやり水なとゝいへる詞つゝき。宜様にこそ。右枕流漱

石とやらん侍ること葉をとれり。歌からはいひしりたる

様に侍るを。枕にすとうけ侍らんと計にて。枕にすらむと

侍る詞つゝき。尤不_レ好歟。又楸おふる清き河原にと。ふ

るくよりつゝきたる詞にては侍れと。前の題に樹陰とあ

るに。楸おふる陰いひ出すともありなんかし。以_レ左爲

勝。

十五番

左勝

元長

夏そとは只ぬれ衣にいひやせん結ふいつみにあつき日もなし

右

季經

夏衣袖にかきたる浪のあやは涼しきものと浦風そふく

左右。さしたる事なきつかひにて侍るに取て。右歌。風雅

集に。早苗とる田面の水のあさみとり涼しき色に山風そ

吹と侍る歌。下句さまで不_二相替_一歟。左歌も下句。あまり

にはよく聞え侍れは。なすらへて可_レ爲_レ持。

十六番

左勝

前左大臣

夏はまたこゝをやしめん水結ふこの手かしはの陰の涼しさ

右

宣胤

立よれば波の露ちる濱楸夏をわするゝ浦風そふく

雨首の樹陰の心。さきに申をはりぬ。ことに左歌。近き世

の御製に。水むすふ兒の手柏の木陰こそとにもかくにも

涼しかりけれと。侍るやうに承及は。ひか覺にて侍るやら

ん。右も第二第四の終の文字。いさゝか不_レ好思給るう

へ。歌からよはく侍れは。かちまてはあらしかし。持なと

にもこそ。

十七番

左

道永

涼しさのかきりをいかて岩波の瀧の白玉數にとりても

右勝

堯胤法親王

心より瀧つ岩波音立てわかまつかひの秋かせそふく

左歌。瀧の白玉數に取てもと侍る。君か代のかす。我戀の

數なといふことは聞なれて侍れと。涼しさの數。とりかた

くや侍らん。右歌。伊勢物語に。涙の瀧といつれたかけん

と侍る歌をとれり。左の岩なみよりは立まさりてや侍ら

ん。

十八番

左

前左大臣

田子の浦や夏ともいはず秋の風さそふ浪よりたゝぬ日そなき

右勝

式部卿親王

驚のゐる川邊の白洲末遠み入目をくる水の涼しさ

左。するかなる田子の浦なみたゝぬ日はと侍る歌を取て。
夏ともいはす秋の風なと侍る詞つゝき。艶なる様に侍る
を。(右)入目ををくる水の涼しさと侍る。水邊遠望おかし
くこそ侍れ。以レ右爲レ勝。

十九番

左侍

瀧の音は山風なからはけしくて打ちる程の波そ涼しき

右

前關白

落瀧津たきの白淡に夏消て秋をそ結ふ水引の糸

左歌。瀧の音は山風なからはけしくてなと侍る。涼氣はな
はたしく。心詞尤妖艶に見給へるを。右又後撰集やらん
に。水引の白糸はえて織はたはなと侍る歌を思ひて。瀧の
白淡に夏消て秋をそ結ふ水引の糸といへる。尤いひしり
て聞え侍れは。よき持と申へくや。

二十番

左侍

實隆

詠やる夕浪涼し川風の舟は一葉の秋をうかへて

右

左大臣

山陰や岩まをつたふ水の音もめに見ぬ秋の外に涼しき

左。舟は一葉の秋をうかへてなと侍る風舳は。いひ知たる
やうに侍るを。歌と童とは。いづれも類宜かるへしと。先
達申ならはし侍るに。なかめやるといへる。常に有こと葉
にては侍れと。此歌に取ては。少思ひ度や。千五百番歌合
に。なかめやる花やいづれそ白雲の立田の山の曉の空な
といへるやうには見え侍らぬ歟。右めにはさやかにみえ
ねともと侍る歌をとれりと聞え侍り。ことなる難なくは

侍れと。又ことなる事も見え侍らねは可レ謂二同科一。

廿一番

左

季種

夕暮は水音すみて涼しさもこゝをせに聞川風の聲

右侍

政爲

夏むしも思ひけたれてよなくの涼しき影や庭のやり水

左歌。涼しさもこゝを瀨になと。大方いひしれるやうに侍
るを。音聲上下句に侍る事。千五百番歌合に。たえくの木
葉か下の音信も霜にとちたる虫の聲々。あるは六百番歌
合に。谷水の岩もる音は埋れてすたく蛙の聲のみそする
なと侍るを。いづれも判者不レ難レ之歟。しかはあれと。
歌合の例。吹毛の難を申ならひにて侍れは。なきにはしか
さるへし。また水をとゝ云へる。いさゝか沙汰し侍れと。玉
葉集に。庭の上の水音ちかきうたゝぬに枕涼しき月をみ
る哉と侍れは。是は不レ苦哉。右歌。かの物語の中川の宿な
との事歟。夏虫も思ひけたれてなと侍る。涼しきやり水の
さま。有し昔の心までさしくまれ侍る。但第四の句いさゝ
か思ひ度侍れと。これはかくも有へくこそ。以レ右爲レ勝。

廿二番

左侍

俊量

水結ふ契もあれや爰にきて涼しさあかぬ中川の宿

右

政顯

吹音も聞えぬ水の涼しきや岩まを風のいつみなるらん
右。第四第五句のうつり。岩間を風のおとにや。しかれば
風の音水の聲。いづれも耳に遮り侍らぬを。聞えぬと侍る
いかゝそや。若又納涼の心。ひたすら風のこゝく。水はな

きに涼しきとにて侍らは。風のかた面に成て。水邊の題ほ
いなき歟。それもいつれに音は有ぬへくこそ。左水結ふ
契もあれやは。源氏の君と。空蟬の君との事歟。一姿には
侍れと。第三句思度侍るうへ。第四句のあかぬなども。此
歌にとりては少詞よはく聞え侍れと。岩まよりは。中川
のやとりとらまほしくや侍らん。

廿三番

左持

袖かけて夕浪涼しいつみ川秋の心やわきてなかるゝ

右

雅俊

結びあへす袖を涼しき池水の心の秋や先かよふらん
右歌。無殊某摸之上。澄池亭納涼之淺。酌三山水遠流之
深。宜然哉。左歌。取三筆輔卿泉川綺語。而其舛俊逸也。匪
レ拘古家之遺流。刺得三洗暑之風味一者乎。

廿四番

左

涼しきは秋もやくると行水にとへとしら玉いはそゝくなり

右持

宜親

すゝしきよ猶いつくとして行水のさそふ心そせくかたもなき
左。ぬしやたれとへと白玉いはなくにと。侍る歌を取て。
下句なとおかし。但定家卿歌に。夏か秋かとへと白玉岩ね
よりはなれて落る瀧川の水と侍れは。等類たるへき歟。右
も初五文字いさゝか思ひ度侍れと。心やさしく可レ爲勝
哉。

廿五番

左持

寄道祝言

道永

ことの葉の盡ぬ種もや君か代のためしを契る敷嶋のみち
右 式部卿親王

家の風吹つたへきて道々の塵をつきける御代のかしこさ
左歌。ことの葉の盡ぬ種を。君か代のためしといへる。筑
波山の陰よりも高く。ありその濱の眞砂よりも數あるへ
く覺え侍るに。右歌。家々の風吹傳へ。道々の塵を繼ける
心。御代の賢もいやまさりに侍らんと思ひ給れは。なそら
へて持とすへし。

廿六番

左持

代は千世のはしめと思ふ石上ふるきにかよふ道も有けり

右

前左大臣
堯胤法親王

君か代にひろはん數か玉鐙の道はかたゝ和歌のうら人
左歌。代は千世の初とおもふをなといひくたし。すへて一
首のしたていひしりて。延喜天曆の昔にもかよはむ道に
こそ(と)思ひ給るを。右下の帶のみちはかたゝわかる
ともと侍る歌を取て。道はかたゝわかぬ浦人といへる。
又宜侍るうへ。樗才の判者なからも。大樹の陰廣きおほん
めくみの露にかゝり。和歌の浦浪昔に立かへる宗匠の識。
勅令いともかたしけなく侍れは。此御代になとか。撰集を
もなからんと思給へられ侍る。仍又無勝劣。

廿七番

左持

今そみむ大洋の宮の定め置し天つ日嗣の道のためしも

右

實隆
前關白

よくふせきよく守るこそ君か代をたすけし道の始成けれ

右歌。日本紀神代卷に。天照太神天兒屋根命に勅まし〜
ける詞に。善防護と侍る事にや。いひしりて聞え侍り。左
歌。大津の宮のさためおきし天日嗣と侍る。昔天智天皇近
江の大津宮にうつり住せ給ひ。是にて御即位なとをこな
はれしと承侍る。即位と書て。あまつひつきとよみける
とかや。抑御即位のおこりを申は。神武天皇橿原宮に御位
につかせ給ふをこゝに瀛陽とも申へきに。大津宮に定をき
しと侍るは。彼御時に正敷儀式など定おこなはれたる事
の侍るやらん。日本紀なとをさへ委うかゝひ侍らねは。今
の宣命の詞にも。近江の大津宮にはしめ給ひ。定給ふ法の
まゝにと侍れは。ことはりたかひては侍らし。凡君臣の
道。父子の儀も。禮にあらされはならずとかや侍るに。是
はさしもの大禮にて侍れは。世中にありとしある人。たれ
かとくみたてまつらざらんことを。こひねかひ侍らざら
んや。然に第二三の句。彼宣命の詞にては侍れと。歌に取
ては。いさゝか平懷なるやうに覺え給れと。今そみむな
と侍る。當時相應し侍れは。是も又持とすへき歟。

廿八番

左卿

宣親

いにしへにかへるとハレは萬代の末にも遠き君か道かな

右

左大臣

立かへる聖の代々のまつりこと君にしらるゝ道のかしこさ

論「兩首之君道」於「復」堯風舜日之舊規「者。共雖」无「優劣」至「期」萬歲千秋之寶祚「者。左可」謂「勝」。

廿九番

左卿

爲和

木こりにもことゝふ道をためしにて千歳の山や君か行末

右

宣胤

八隅しる君か代よしと國栖等もつかふる道に今や入らむ

右歌。國栖等とあるは。神武天皇。又は應神天皇より始り侍
るなど（中一歟。萬葉集などにまゝ見え侍り。くらまでも
出てつかへ奉らん事。まことに八隅しる君か代のしるし
成へし。新撰六帖やらんにも。十津川や吉野の國栖等いつ
もかもつかへまつらん春の初になとゝよめり。左歌。木こ
りにもことゝふ道と侍るは。毛詩やらんに道詞「蒹葭」と
侍る。蒹葭の字の心を思ひて。木こりといへるにつき。千歳の
山なと侍る。首尾相應せり。國栖等もつかふる道は。さる
ことに侍れと。君を千とせの山といはひ侍れは。勝とや
申へからん。

三十番

左

准后

のかれすむ人やなからん誰も今道ある御代に出てつかへは

右卿

政爲

さまゝの道をいさむる君か代を身にわきて今や誰も仰かむ
左。賢人の世に出てつかへむこと。傳説呂望かたぐひ。今
も侍るへきにやと思ひ給へり。右君のおほんいつくしみの
いさめ。さまゝのみちなるを。誰も身にわきて仰かむ
事。ことはり聞え侍り。可い爲勝。

三十一番

左

前左大臣

まつり事道ある君か代にしあれはしめていはいはむ祝言そなき

右卿

季經

家々のたのしむ道もくからし千世もと仰く君かひかりに

左歌。句をは隔て侍らねと。有の字二あり。自然此作例も侍らんすれと。わきとつゝけてよめることゝは見え侍ら

ねは。このましからさるに。第四句も。いさゝか思ひ度や。有歌。道もくからしと侍て。君か光〔に〕なと侍るうへ。

難なきにつき。勝とや申へからん。

三十二番

左持

季種

我君の恵をうけて國廣く道ある時やよもにしるらん

右

政顯

道を知り人を知世の治りて君になひかぬ草も木もなし

左右。さしたる儀なく侍るにとりて。右草尙風則必偃と。君子の徳にたとへたる詞を思へるにや。しかはあれと下

句など。常に聞馴たる様に侍るうへ。第三句。殊思度侍り。左難なきにつき。勝侍らんかし。

三十三番

左持

爲廣

すなほなる君をしるへと千世の坂こえてつかへむ敷嶋の道

右

宋世

時しあれは絶たるをつきすたれたる道おこす代に逢か嬉しき

左歌。例の管見の判者〔か〕にて侍り。邂逅の御歌合にて侍れは。至愚の身なからも。唐秋津嶋のいかなる古き道を。尋出しつかふまつらん事は。さもありつへけれと。幾度も

家業にはしかしと。君を嘉瑞にことよせ。心緒を述侍る計也。有歌。繼絶興廢と侍る故事。あまり耳馴侍るうへ。本文をとり過したる様に思ひ給るはいかゝ。是も七番に申侍

ることく。勝負をつけすや侍らん。

三十四番

左持

元長

世にひろくあふかさらめや古に又立かへる敷嶋の道

右

雅俊

神も人もやはらく國の姿にはいつれの道かしき嶋の道

兩首の敷嶋のみち。いつれもさしたる事なく侍るに取て。右は。少いひしりて侍れは。勝の字をつけ度思給れと。左

歌。いにしへに又立かへる敷嶋の道と侍る。作者は只歌の風躰。昔に歸復するとそ。詠し侍るらん。されと當時身に

あたりては。何となく思ひあはせらるゝ事侍れは。無下に負とは申かたくや。持にても侍れかし。

三十五番

左持

女房

かくてしも我世は經なんふりにける人にたゝ敷道を殘して

右

義澄

もろ人のつかふるわさも安かれやたゝ敷道を君に任せて

左。かくてしも我世は經なんと侍る。何となく凡人の詞とは見え侍らぬうへ。ふりにける人にたゝ敷道を殘してなと侍る言葉つゝき。いひしりて優美に聞え侍り。述而不

作。信而好。古といへる心なとにや侍らん。又ふりにける人と侍る。當時者老などの事にもかよひ侍りて。いかさまにもおかしきやうに侍り。右。君にまかせてと侍る。左に

贈答の姿。態とよめるらむやうにて。尤宜も侍る哉。抑聖明の御上にて。猶賢佐を用給ふ御心をきては。いともかしこく思ひ給へられ侍りなから。尙御みつからつとめお

こなはせ給はんは。正治の道も彌あらはれ。衆人帶をゆるくして。關雎麟趾の化をうたひ。理世太平の聲。陸周の昔のことくならんと侍る事。誠に君も臣も身をあはせたる御契りは。此道の言葉にも思ひ合られて。あやしくおもひ給へ侍るはかりにて。難波江のよしあしをわかつたなり侍りぬるにこそ。

三十六番

左

あふくそよをしへし跡の庭に生る草も其名の道し有世を

右

しらぬ代の遣きを忍ふ道もあらしあへるを時と君に仰きて

俊量
爲孝

左歌。例の短智。少分明ならず侍り。をしへし跡の庭は。庭調の心歎。又鯉趨過庭なといへる心を思へるか。草もその名のみちしある代をと侍るは。伯魚か義などに付ては。何事とも不聞歎。あるは指。俊草。あるは堯の時の蓂莢のことなとをいへるにやと。思ひ給れと。これらにてもよも侍らし。つら／＼思給ふるに。催馬樂曲に。庭におふるからなつなはよき榮なりと。侍る事なとをとり出せりけるにや。庭におふるはかりにて。聞え侍るへきに。草もその名のと引出さるゝは。草の名に付て。子細有けに聞え侍る。もしからなつなはよき榮なりと侍るを。善名の方へ文字を取なしけるにやなと愚推をやり侍る。大方歌からは。いひしりて侍れと。くた／＼しくや侍らん。右歌一首のしたて。さもと覺え侍るうへ。逢期時なと侍る心。よくことはり聞え侍り。以。右可爲し勝。

左

右

女房	持二勝一	式部卿親王	持一勝一負一
准后	負一勝一持一	式部卿親王	勝二持一
入道親王道永	負二持一	前關白	勝一持二
前左大臣	負二持一	左大臣	勝一持一負一
前左大臣	持二負一	參議義澄	持二勝一
權中納言實隆	持三	民部卿政爲	持二勝一
左衛門督爲廣	持二負一	權大納言宣胤	持二負一
按察使俊量	持一勝一負一	右衛門督季經	持二勝一
權中納言宣親	負二勝一	沙彌宋世	勝一負一持一
權中納言季種	負二勝一	參議雅俊	勝一負一持一
權中納言元長	持三	權中納言政顯	負二持一
左近少將爲和	持一勝二	左近中將爲孝	持一勝二

群書類從卷第二百十二

和歌部六十七歌合卅三

蜷川親孝家歌合

一番 夏月易明

左 親孝

みしか夜はかやか軒はも柴の戸もあけなからなる月をみる哉

右 昭淳

なかもてもあかぬ心はなかも月の月さへあるをみしか夜の空

左歌 あけなからなる月をみるかな。柴の戸はかりにて。

ことたりぬへし。かやか軒はや。なくともと見え侍らん。

右は月をおもへることろふかしといへとも。歌合のなら

ひ。一番の左は。おほくは勝ことのやうに申侍るにつきて。

二番

左 景郁

入かたの山のはにけはとはかりもみるへき月のみしか夜の空

右 定祐

夏の夜の庭のまさこにをく霜をはらひもあへす明る月影

左歌第二句。伊勢物語をおもへるにや。但彼は座にあた

ての逸興に侍るへし。歌合の歌などには。すこし誹諧にこ

とよりて。とり用かたぐや。殊ににけはと詞を替たる。無

三番

レ勝。

左 親順

またよひのひかりなからにたま手箱とりあへす明る空の月哉

右 家藤

浪のうへも光はいつらたましくしけ明るふたみのみしか夜の月

玉手箱。玉匣ふたかたなから。捨てたきにとりて。左は下

句はるかにまされりと申へし。

四番

左 職行

月影は山のはなからあけにけりいてしもよひのみしか夜の空

右 親忠

夏かりのあしわけ小舟さすさほの雫にみるもみしかよの月

雨方の月。さほのしづくよりも。山のはのかけは。たかく

五番

左 長頼

空のうみや涼しき比はあかなくいとみるめも短夜の月

右 重 嗣

扇をもとりあへぬまにあくる夜のなにととへん山のはの月
右は。の轡をおもへるにや。よしなからさるには

あらず。左の歌。そのうみのすゝしき色をもてあそぶら
へに。みるめほとなき月をかこてるこゝろ。なをみところ
あるへし。

六番

左 有 康

鐘のをともしや明ぬとて難波湯あしのかりねのみしか夜の月

右 親 世

またよひのそらに明行ほとみえて雲井にのこる月のみしか夜

右歌。初五字よひと侍るに。結句のみしかよ。同字甚不レ可
レ然。左の鐘のをとそ。きくことにたかゝるへし。

七番

左 重 祐

短夜の月のみふねもこきあへすさほなくなるまにあけわたる空

右 長 悦

たちはなの名残すくなきみしか夜は月の昔もあけやすき空
左歌。さほなくなるまとは。物織をさといふ物を。かなたこ

なたへなくなるまの。ほとなきにつきて。流年一擲後など。
唐人の詩にもつくれるにや。それをふねのさほにとりな
さむは。おほきにことたかひてや侍らん。右又月のむかし
もあけやすきそら。心得わきかたし。なすらへて持とす。

八番

左 景 郁

水邊納涼
風わたる柳のいとに袖ふれてむすひもあへぬみねの下水

右 宗 藤

ゆふすゝみ枕をたれかむすふらんつと秋との中川の水
左歌上句は。はるのけしきをみる心ち侍るに。むすひもあ

へぬみねの下水。そのほとありても覺す。右中川の宿は。
榮花物語。源氏物語などにも。方たかへのやとりにて。納
涼も其寄ありぬへし。但夏と秋との中川の水といへるに
は。上句かけあひてもみえずや。ともにおもふところある
につきて。しはらく勝負をさためす。

九番

左 親 順

かゝみ山風そすゝしきこぬ秋のおもかけさそふ水のさゝ波

右 親 忠

あふ坂やせきのし水はゆく人もこゝろをとむる夕すゝみ哉

兩首優美。よき持に侍るへし。

十番

左 職 行

手にふれてむすはぬ水も山の井のあかなくなるゝ夕すゝみ哉

右 重 嗣

涼しさの秋はくるともわすれめやむすひなれにし山の井の水
左第四句。手つゝなるやうにきこえ侍り。右は。ことなる

ことなくよろし。

十一番

左 長 頼

たちよれば川そひ柳かけうつす水のみとりそみえて涼しき

右 昭 淳

よそめさへなをすゝしさやあまるらん暮て舟さす袖の川かせ

水のみとりそみえて涼しき。よくいひなされて。感情あさからす。可レ爲レ勝。

十二番

左

有 康

ゆく水の音もすゝしきゆふ浪はたちかへりてや又もむすはん

右

長 悦

うたかたそきえて涼しきたかねには雪みな月の谷川の水

右の初め五字。鶯のきなく秋冬うたかたも。はなれそにて

てるむろの木。うたかたもなど。ふるくいへるやうにはあ

らて。はしめにふとうちいてたる。いかゝと覺え侍る。左

は。石間ゆく水のしらなみたちかへり。といへる本歌につ

きて。あかすむすはんとの心。覺に侍り。勝へくや。

十三番

左

重 祐

しけりあふ山下水のなみたえてむすひて涼し木々の下風

右

親 世

せきいるゝ庭のやり水かせたちて秋にはあらぬ音のすゝしき

左歌。中の五文字。さゝへてきこえ侍り。右は。まさり侍る

へし。

十四番

左

親 孝

山かけに遠きなかれのすゑ落て池水すゝしよするさゝなみ

右

定 祐

むすふてもすゝしく成ぬまたれつる秋もや水の中川の宿

秋もや水の中川の宿よろし。可レ爲レ勝。

十五番

夏草露滋

左

親 順

さゆり花さくやなてしこましりあひて露も色ある野への夏草

右

重 嗣

ゆくかたも猶夏草のしけき野をいく一むらに露のをくらん

左歌。色々とりましりたるや。かへりてみところすくなか

らん。右のうたかなにとなくよろしく侍るを。しけき

野をいく一村に分なしてさらにむかしをしのひかへさ

んといへるは。西行法師か歌なり。本歌にはとりかたく侍

るにや。二句のつゝきいかゝと覺え侍れば。持とさたむへ

し。

十六番

左

職 行

しけりあふ草はみなから夕露のをきかさねたる色そ涼しき

右

昭 淳

朝な／＼うれ葉ををもみ置露のむすふはかりになひく夏草

左歌。幽玄にみえ侍り。

十七番

左

長 頼

夕立はこわたの山にくもきえて涼しき露のふか草ののへ

右

親 世

朝な／＼夏野の草のしけりあひてはことにをける露の白玉

左歌末句。野へととまれる不レ可レ然也。連歌なとにさへ嫌

事にや侍らん。右めつらしからすといへとも。難すへき所

なきによりて。爲レ勝。

十八番

左

有 康

しけりあふ草葉に秋のうつるかとみえしは露の深きのみかは

右 定 祐

秋の野もかくやはをかむ夏草のはするたはにやとる白露

左歌。草葉に秋のうつるかと。は。秋のうつりきたるかとう

たかへるにや。しかれば。たゝ露のふかきにて事たりぬへ

し。かはといへる其心得かたくや。右は。題の正中には侍

るへし。歌から常のものなから。左にはまさるへきにこそ。

十九番

左 重 祐

夏ふかき野もせの草のした葉までをきものこそぬ露の朝あけ

右 親 忠

みるたひに花のさゆりは露ふかみ野嶋かさきの波やよすらん

左歌。あさあけといふ詞。此比人々よむことに侍り。ふる

くはあさけと三字によみきたれり。四字になしてよむこ

とは不二庶幾一のよし京極黃門も申されしとや。これは

ことにあさあけといひとゝめたる可。然とも覺えず。野

しまかさきのなみは。かへるゝもたちまさりてこそ見

廿番

左 親 孝

かよひちは夏と秋との色ふかみつゆより露のしけき草むら

右 宗 藤

きゝそふるむしの音あらは露深き夏野の草や秋の夕くれ

右歌。むしのねそはん秋おもひやらるゝとかいへる。物語

の詞も覺えて。なにとなく艶なる心ちし侍り。左右なく。

勝とさたむ。

廿一番

左 景 郁

ほにいてむ秋にしもやは涼しさはつらぬく露の玉のをすゝき

右 長 悅

草ふかみわけゆく露の玉はゝきはらひもあへぬ袖のすゝしき

左。つらぬくつゆのといへる詞のつゝき。ふつゝかなるや

うにきこえ侍り。右の玉はゝき。彼初子のけふのといへる

は。優にも侍るを。これはいかなる掃除のためにかと。用

意のほともおほつかなくこそ侍れ。持とすへし。

廿二番 夢中契戀

左 有 康

すゑたえすうつゝにかよへ今宵まつかけし契りの夢の浮はし

右 親 世

むは玉のよるの契のゆめたにもわかれはおしき人のおもかけ

兩首殊難なく。よき持に侍るへし。

廿三番

左 景 郁

あふとみし夢はさめても藤はかまおもかけ残す袖のうつり香

右 定 祐

人めをもよきさらましを夢とたにしらてさめぬる曉はうし

左は。夢斷戀婉曉枕薫といへる詩の心をおもへるにや。右

はおもひいたる所あるににたり。但題は契戀に侍るを。

契心かすかなると申へくや。左も。あふとみしにて。契心

は勿論たるへしといへとも。逢契戀と題をわかつ時は。歌

合にとりては。其差別をも。すこしはとかめいてつへき事

にや侍らん。此たくひ末にもあまたみえ侍れは。吹毛の申

状態なしといへとも。こゝにて愚作の一はしを申述はかりなり。いかさまにも。先以レ左可レ勝。

廿四番

左

親 孝

したひものとする一夜のかり枕いかに結ひし夢にかあるらん

右

親 忠

うつゝには思ひたえぬるあふせとてかけしもはかな夢の浮橋

左歌は。只逢戀を詠せるに似たり。夢中戀とはみえ侍らねは。夢のうきはしには。かけてもおよふへからすや。

廿五番

左

重 祐

うたゝねに契りし人はみすもあらずみもせて覺る夢を儚なき

右

(名調)

おもひねの人をなみたのさよ枕ねさしとゝめよ夢のうき草

右。一ふしあらんと。ふるまへる風情にこそ侍りけれ。第二句。人をなみたのとは。つゝき。いかにをかれけるか。左は。よのつねの歌にて。めをとろくふしも侍らす。穩便なるにつきて勝とすへくや。

廿六番

左

長 頼

忘るなよ忘れしといひしことの夢にかはらぬ現ともかな

右

長 悦

袖ひきてまたいつかはとたのめしはなかくつらき夢の面影

右歌。やさしくきこえ侍るを。初五字無下に俗にちかく。おもひこめたる所なくみえ侍り。此五文字なたらかならましかはとぞ覺え侍る。左は。五條三品の。わすれしよわ

するなよとたにいひてまし雲井の月のこゝろありせはといへるは。人の口にある歌にや。かゝることは尤思慮あるへし。かれこれをかよはして持とすへし。

廿七番

左

職 行

末かけておなし心に契りつる夢のたゝちはさめさまましや

右

重 嗣

夢の中にかはせし露の言葉もおきあへぬまにきえんとやする
右第二句。いかにそやきこえ侍り。左。題のこゝろたしかにて。殊なる難なし。宜可レ勝。

廿八番

左

親 順

ゆくすゑをかけてたのまむ契とはさためかたしや夢のうき橋

右

(名調)

夢にさへみすはいかにと慰めてたのむ契そいやはかななる
左歌。させるとかなく侍れとも。右のうた。いやはかなにも成まさるかなといへる。心艶に侍るへし。爲レ勝。

廿九番

左

長 頼

そことしも宿はわかねと君かあたり便もかなとうかれてそ行

右

親 忠

里の名も忍ふらんこそかなしけれ心のみたれみえしとやすむ
左は。たゝありに。右は。こゝろふかけにみえ侍り。勝劣辨しかたし。

卅番

左

景 郁

頼めても蜚の子なればあた波のよるへいつこと尋ねわひぬる
右 昭 淳

ゆき歸りそこもしらてたとる身をこぬよ數多と人や恨みん

左歌。あまの子なればとは。そのぬしの卑下のことはなる

へし。されは源氏物語夕かほの上も。我身のうへになして

いへるにこそ。此歌は。人をさして。あまの子といへるは。

侍るへきにか。但作者の心はかりかたしといへとも。右は

趣向一ふしあるに似たり。まさると定申さんはいかゝ。

卅一番

左 親 順

蜚の子のたくひになしてそことしも定めぬ宿をいかにとはまし

右 定 祐

あはしとの心のおくはしりなからしらぬは忍ふ宿りなりけり

此あまの子は。ことはり尤可レ然。右も過失なしといへとも

も猶以レ左可レ勝。

卅二番

左 親 孝

住かへて千里の外に隔つともありかさたむときかはたのまむ

右 宗 藤

蜚のすむ里とひ侘ぬみをつくし深きえにしものしるしともかな

左は。歌さまおとなしく見え侍り。右にはまさるへくや。

卅三番

左 重 祐

たつぬでも君かゆくゑは白糸のひくかたみえぬさゝかにの跡

右 重 嗣

さしこもるすみかやいつこ白雲のたちうかれゆく夕くれの空

左歌は。三輪の明神の本縁などをおもへるにや。右のしら
雲。たちをよひかたきにこそ侍らぬ。

卅四番

左 有 康

あたにのみたちまよふらんあま雲のわか入山と君しつけねは

右 親 世

たつねてはありかをたにも白露のきゆる思ひに袖そしほるゝ

兩首同科にや。左第四句。わか入山の風はやみなりは。居
の字に侍り。入の字もし書生の失錯にや。

卅五番

左 職 行

花とみてやとりたつねん人もなし身を驚の音にはなけとも

右 長 悦

君かすむ宿りをそことつけこすは蜚や夜半のしるへならまし

左歌。はなとみては。何を花とみるへき心にか。おほつか

なし。右のほたるも。さして光ありともみえず。持とすへ

し。

判者

逍遙院殿

左

親孝

景郁

親順

勝一 持一 負三

勝一 持二 負二
勝二 持二 負一

主計民部 六人

職行

酒井 三人

長頼

有康

重祐

八橋 三人

昭淳

定祐

宗藤

親忠

重嗣

親世

長悦

大永三年六月日

右 蛇川親孝家歌合得一本按合

勝三 持一 負一

勝二 持二 負一

勝二 持二 負一

勝二 持一 負二

勝二 持一 負二

勝二 持一 負二

勝三 持一 負二

勝一 持一 負三

勝二 持二 負一

勝一 持一 負三

勝二 持二 負一

勝一 持一 負三

勝二 持二 負一

勝二 持二 負一

持四 負一

十五夜三首歌合 永祿六年八月

題

月前松風

湖上月明

月前鴈

作者

左方

右方

中納言

權大僧都兼俊

沙門宣僧

少納言

大和

僧意洵

法橋紹正

判者

一位日野大納言

一番

月前松風

左持

月にうき雲たに拂へよしや身にとほるとてしも軒の松風

右

松にのみ風は残りてはらふへき雲もかゝらぬ峯の月影

左歌。月にうき雲たにのこと葉。文龜三年の御歌合。いかゝ

せん千里はれゆく雲たにも影は木のまにみしか夜の空。

判者月たにもとはへるたにのこと葉。(心)ゆかさるか。た

た月もの心にて侍るやらんと難^レ之。此歌も。月吹はらへにてあるへきか。右は新古今に。雲はみな拂ひはてたる秋風をまつに残して月を見るかなと。いふ歌に其心おなし。但松にのこりて。雲もかゝらぬと侍れは。前後相違のやうに聞えはへり。仍なすらへて可^レ爲^レ持歟。

二番

左持

松に吹風の音より秋更て身にしみ初る夜はの月影

右

権大僧都兼俊
覺源

すみわたる空もひとつに峯の松更ゆく月の秋風のこゑ

左。秋更とありて。身にしみそむる月影。時分いさゝか相違にやはへらん。身にしむは。また初秋のころよりも讀ならばせり。秋更ては。八月末つかたのことにこそ侍れ。右も。第四の句よはくて。今少しおもひたくはへれは。是又可^レ爲^レ持にや。

三番

左飛

詠あかぬ空なりけりな松風も月にはさらに音のさやけき

右

沙門宣僧
小弁

月よりはなかもむる友もなき物を誰まつかせの絶す吹らん

月よりはなかもむるとも。今すこしいひ仰せても聞え侍らざるにや。又詠なといふ事は。六百番歌合の判にも。すへて詠は強不^レ可^レ二庶幾一にやと有。されは此詞小點にても侍れは。心あるへきか。但さしつめての難にはあらざれは。左可^レ勝歟。

四番

左

ふる宮の月のはるかに影おちてひとり更ゆく庭の松風

右持

少納言
郁宗玄

月影のうすき軒はの松か枝を吹わく風の音そさやけき左。古宮のと有て。其よせすくなきうへ。新古今のうたに。今は又ちらてもまかふしくれかな。ひとりふり行庭のまつかせ。下句かはることなし。月影にてや侍らん。右月影のうすき軒端のまつ。見所侍らねとも。よく思ひいれられたるところはへれは。勝るとや申侍らん。

五番

左持

大和
釋玄孝

くもりなきかけは木の間に住の江の月を更ゆく松風のこゑ

右

釋玄孝

さらてたに月に寝られぬ秋のよを猶まつかせの吹すふらん左。影は木のまにすみの江のとありて。松風の聲。これは。まつの木のもの心にや。此事六百番歌合に。木のまより日影やはるをもらすらむ松のいはねの水のしらなみと讀るを。俊成卿判に。木のまよりとをきて。まつの岩ねは。やかて此松の木のまにや。何れにても病たるへきよしをしるせり。このころと同じ義理。右ことは聞え侍り。但すさふに兩説あり。右は。風のふきいてたと聞ゆ。月にあらまほしき風の音。その感すくなく侍れとも。難なきによりかちとや申侍らん。

六番

左持

僧意洵

峯高みなかむる月のしはしたに雲もかゝらぬ松風を吹

右

僧光祐

吹はらふ空にもくまや残らん月のかつらにまつかせのこゑ
左。なかむる月のしはしたに。是もたにの詞。よくかなひて
も聞えさるか。定家卿の歌に。時雨つゝ袖たにほさぬ秋の
日にさこそ三室の山はそむらめ。これらにて分別あるへ
きか。杜子美か詩に。祈却月中桂。清光應交多とつゝれる心
に。月のかつらやくまとなるらんとは侍れと。松風のこゑ
と。いひ捨たる所。事たらぬやうに侍り。仍父可爲レ持敷。

七番

左

法橋紹正

雲ならぬ夢さへたえて松風にひとり更行月をみる哉

右

源頼辰

うしと聞風たにもなし松原やおとに晴ぬる夜はの月影
右。うしときく五文字。何事のうきにや。又風たにもなし
と有て。音にはれぬる。此音。風ならて何の音とも聞えさ
るにや。左くもならぬ夢さへ。是も夢路もと有たきにや。
但優美に聞ゆれば左勝とす。

八番

湖上月明

左

宣 僧

鳩のうみやいつくはあれと囁

さゝなみのかけ

右

玄 孝

いかばかり吹はらふらん秋風の月にくまなき鳩の海つら
左。みちのくはいつくはあれと囁の歌をおもへるにや。
宜侍るを結句のさゝなみのかけ。つまりて聞ゆ。右は。こ
ともなくてよろし。勝にや侍らん。

九番

左持

意 洵

右

宗 珙

鏡山うつる光もにほてるや月にみかける 志賀の浦波
天津空なみのうへまてくもりなき月すみわたる鳩の海つら
左は。月にみかけるといひ。右月すみわたるといへる。に
ほの海つらのくもりなき眺望のさま。いつれおとりまさ
るともわきかたければ。よき持にはへるへし。

十番

左

紹 正

さゝ波やにほてる月にさそはれて急かぬ旅をしかの浦舟

右

光 祐

今宵とて照そふ月を水底にうつるも 清き鳩の海つら
こよひてりそふの詞。八月十五夜のうたの心地し侍り。左
は。月にさそはれていそかぬ旅をしかのうら船。いひくた
してよろしく侍れば可レ勝。

十一番

左持

少 納言

辛崎やにほてる月のうす氷音せぬなみに秋風そ吹

右

頼 辰

照そふや比良のねおろし今宵しも月吹拂ふさゝ波のこゑ
左歌。月の薄氷と分別のうへにては音せぬ客侍り。秋風の
波の音に。さては月のうすこほりにて有けるよと。さとり
しるへきことにては侍らぬにや。右も。比良のねおろしも。
今宵しものもの字むつかしく聞ゆ。なすらへて可レ爲レ持。

十二番

左持

權大僧都

海かけてさらににほてる鏡山なみよりみかく月はさやけき

右

法印兼智

場のみやうつるも清き月影に秋なる波の花も咲らん

左。海かけての五もしもいかにそや。右は。秋なる波のはな

宜はへるを。新古今家隆の歌に。にほの海や月のひかりの

うつるへは波の花にも秋は見えけり。心こと葉相似たり。

同類にてこそ侍らめ。しかれば持なにてや侍るへき。

十三番

左侍

中納言

空のみと見しはおろかや鴈の海のなみち遙に照す月影

右

覺源

よせかへる鴈のうら波いくたひかうかへる月の影そさやけき

左第二句。見しはおろかや。聊俗にちかきやうに侍れと。

秋水共長天一色といふ心になへり。右は。にほの浦波い

くたひかのこと葉。其詮なきやうに侍れと。眼前の景氣さ

もとをしはかられ侍りぬ。仍不_レ決_二勝_一負_一。

十四番

左侍

大和

秋のよのなかはを近み照月の波にうかへるにほの海面

右

小弁

隈もなくにほてる月の影なればよるとは見えぬしかの浦波

左。秋のよのなかはをちかみといひて。末にちかきこととは

りなきか。をしはかるに。たゝ月の清光をいはんためとそ

おほえ侍る。右よるとは見えぬなといふわたり。金葉集歌

に。有明の月もあかしのうら風に波はかりこそよるとみ

えしかと。よめる歌おもひ出られ侍りぬ。但にほてる海。

志賀のうら同事にや。作例有とも歌合にはいかゝとおほ

え侍れは。左まさるとや申侍らん。

左侍

少納言

秋風に雲は残らて天つ雁月を翼にかけて鳴なり

右

少弁

飛雁のはかせに雲も晴やせん空すみわたる秋のよの月

左。歌からは宜はへれと。聲韻の病有。昔は四病八病とて

きらひしかとも。今は平頭聲韻はかりを病とするにや。右

羽風に雲もはれやせんも。うたかひて空すみわたる月。い

かゝと覺え侍り。愚意。はかせに雲もはれぬらんにては。

無_二相違_一もやはへらん。又持とすへくや。

十六番

左

意洵

月見つゝ昔おほゆる床のうへに天とふ雁も音信て行

右侍

賴辰

行雲にみえみえすみ雁かねの猶おも影や有明の月

右。月に有明のさたあることなから。近ころはさしてとか

め侍らぬなり。雁金おなしくは鳴かりのと有たきか。左。

月みつゝとは侍れと。あまとふ雁の音つれのみにて。月の

餘情すくなく侍れは。是にて右勝へくや。

十七番

左侍

宣僧

影更て月も夜寒の山のはに落くる雁の聲のさやけき

右

覺源

出やらてきた影つすし鳴わたるかりのは山の月の夕暮

左。月もよさむの山のはにわたる鷹のは山の月のゆふくれ。中秋中は夜の美景さもおほえ侍りぬ。右も。歌からは宜はへるを。月前といふ題にて。出やらてまた影つすき夕の月。うた合にはいかゝにや侍らん。左も。下の句。紙燭一寸の歌などのやうに侍れと。咎むへきふしなきにより勝と申へきや。

十八番

左持

中納言

月更て影すまましき袖のうへに涙そへつゝ雁そなくなる

右

光祐

跡さきになるをも月に數みえてわれ一つらと渡る雁かね

あとさきになるをもは。たゝなるも月にかす見えてにて侍らんか。しかれは。をの字あまりて聞え侍るか。左月更て影すまましきも。前のものゝ影あるやうに侍れは。すむ月のにてあるへきか。泪そへつゝなといふわたり。俊成卿郭公の歌に似たり。されとも。是は月の感情相かはり侍れは。左の勝にてこそ侍らめ。

十九番

左持

紹正

秋の夜の哀をこめて月になく雁の泪そ袖に露けき

右

玄孝

大かたのこゑもあやしき雁金のわたる影さへ月にくまなき大かたの聲もあやしき。こゝにて寢様のこゝろにや。大かたは月をもめてしのうた。業平朝臣の秀歌にて侍り。惣して。大かたといふ五文字にては。一首の首尾大事なるよし。先達しるしをかれ侍りぬ。しかれは是も小點にてそ侍る。

左。なきわたる雁の泪のおちつらんの歌に似たり。しかれとも置ところかはり侍れはくるしからず。月夜のかりのこゑには。袖の露けきも。さもとと思ひ給ふれば。以て左爲し勝。

廿番

左持

大和

月清み雲も残らぬ秋風にさそはれ渡る初雁のこゑ

右

兼智

契りしも雲井の月にはからすも秋はたのむの雁はきぬらん左。いさきよき月のひかりに。天とふ雁のこゑ。さやかなる風の明けしき宜侍る。右も。秋をたのむのかりは來ぬらんといへる。しかるへきにや。但契りしやを。ちきりてやとありたくおもひ給ふはいかゝ。此番又正鵠の雌雄をわきまへかたくて。筆をさしをき侍りぬ。

廿一番

左持

兼俊

くる雁の翅かはさん雲もなく晴わたるよは月のさやけき

右

宗玄

聲なくは一行わたる雁金を月にかゝれる雲かともやみん左。晴天の月。しつかなる夜の空。ことなること侍らす。右も。よろしくはへるを。聲かりかね病たるへきか。但六百番歌合に。谷川のいはもる音はうつもれてすたく蛙の聲のみそすると侍るを。判者不難之歟。しかれとも歌合のならひ。吹毛の難に及ふ時は。なきにはしかさるへき。左の歌も。第四の句。いさゝかおもひたらすはへれば。是又持にて有へきか。

秋十五番歌合 永祿六年八月廿三日

題

秋花

秋戀

秋祝

作者

義俊

義景

顯生

覺阿

立好

宗因

俊世

親秋

永純

吉仍

判者

老法師

一番 秋花

左騎

義俊

右

義景

いとみつる春より秋は咲花も花さかぬ野も色つきにけり
わけなるゝ花の野もせの袖の露しほれもはてよ秋のかたみに
左の歌。凡春秋のあらそひは。古來優劣を決しかたきに
や。これはひとへにかたぬきたり。花さかぬ野へまでも。
一もとゆへの心やさし。五文字すこしこはしくきこ
え侍る。右の歌。秋の花ゆへ野もわけそめて。秋のすゑつ
かたまでおもひいれて。なさけふかくみえけり。すてかた
くは侍れと。歌合のならひ。一番の左なれは。勝の字をつ

此一巻。ある人のさりかたきすゝめにより。難波津のよし
あしをわきまへ。敷嶋のみちしりかほに。荒涼の卑詞をく
はへはへる事。まことに。つゝをもて。そらをうかゝひ。は
まくりをもて。わたつ海を計ることにて侍るうへに。よは
ひ七十のおいの波に。しつみぬれは。朝に見きく事も。夕
には跡なくわすれはてゝ。さなから。くらき闇ちをたとる
心地し侍れは。春のあら田のかへすゝ。とりあけ見給ふ
へきことならねと。さすかに。いなみ野のいなみ難くて。
いさゝ川の。聊思ふ心のかたはしを。印つけ侍ること。道
の冥鑒もおそろしく。かたへの人の思はんも。はつかしく
て。汗顔に極なきことにこそ侍れ。

判者

日野一位大納言

右十五夜三首歌合以奈佐勝臯本校合

け侍るうへ。歌からもよろし。以_レ左爲_レ勝。

二番

左勝

顯生

一とせの四方の眺めは秋の野のさける千種の花にそありける

右

覺阿

野邊の露分ものこさす折花の千種にあまる袖のかへるさ

左の歌。これも前のことく。秋をのみとこゝろさせり。右の歌。花にのみ食着の心わけものこさすおらん事。なさけなくや。梵網の一草不與取戒のいましめともや成侍らん。左勝ぬへし。

三番

左持

立好

秋風に尾花なみよる野へみれば錦をひたす江にこそ有けれ

右

宗因

ぬれつゝも猶わけゆかむ咲花は千種なからの野への夕露

左歌。尾花なみよる野邊を。濯錦江にとりなされたる。興ありとみえたり。されと尾花を錦とも云へくこそあらめと。紅葉萩のやうにはありかたくや。右歌千種なからの詞。草はみなかななどの心はや。聊いひおほせさるやうにや。よき持たるへし。

四番

左持

俊世

にほはすはそれともいさやしら菊の花の籬は露こめてけり

右

親秋

わきてなをめかれもやらし咲て又花もなこりの秋のしら菊
兩方のきく。左。露にこめられたるさま。風情もなくみえ

五番

左勝

永純

露わけておらはやおらん花のえに宿れる虫のねはたえぬとも

右

吉仍

小萩原色こきませてなひく野のうす花すゝき露やわく寛
左歌。大かた虫は草根などにある事とのみおもひしに。草の枝にてなく事眼前にはあることなからめつらしくや。右色こきませてと有て。うす花すゝきと候は。濃淡の心にとりなされたる。たくみにはきこえけり。但うす花薄。常にきゝなれすやありけん。左。歌からよろしとや申へき。

六番

左勝

義景

夢路とふ月もうらめしかきつめて物おもふころの秋のね覺は

右

俊世

秋は猶物おもへとのゆふへかなをきこふまゝの袖のうへの露

左歌。かの落月満三屋梁なといへる餘情。思ひいてられて感慨ふかし。右は。就中斷腸是秋天と吟したる心もうかひてあはれなり。左は。歌のさまたけたかし。仍以爲_レ勝。

七番

左

立好

うきまゝに眺むる空そかこたるゝ思ひは秋のわきならねとも

右勝

義俊

うき秋と思ひなしたる夜なかさはわかひとりの心なりけり
兩方のうき秋の心。右歌。今夜郎州月。閨中只獨看なとい

八番

へるさま。あはれふかし。尤右爲勝。

左

秋はきぬ小鹿はつまに聲たてつしのふる袖やよりはりゆかまし

右

夢もやは人の心のあきの風身にさむくなるよるのころも手

左。鹿をさきて。しのふる袖をなけくよりは。右。身にさむ

き秋風のおもひは。まさるへくや。

九番

左

待わひて夜ななき空を秋の虫の鳴こそあかせねにはたてねと

右

雲井よりうきをしりてや飛鷹の涙も月も袖におつらん

むしの音よりも。鷹のなみたはふかゝるへし。右。下句。なみ

たも月もといへる。優にして秀逸の趣あり。尤勝ぬへし。

十番

左

月もわか袖にうつれはかきくもる涙あやなき夜なくの空

右

大かたの夕さへうき袖の上に秋は一しほの露なみたかな

右。下句。頗平懐也。左。歌からよろし。

十一番

左

木すゑみな秋の色なる中にしも一樹の松の千世をふるかけ

右

君かへむよはひに契れときは山千秋萬世の霜をかさねて

十二番

左

仙人のたをれる菊をそのまゝに老せぬ君かかきしにやせむ

右

秋の夜の月こそしらめ高砂の松より後の君かよはひは

左。祝の心よろし。右は。いま行末は秋の夜の月。名歌候哉。

おなし事とおほゆ。左勝とすへし。

十三番

左

千世の秋を宿に契て露霜の後も葉かへぬ庭の松かえ

右

天津空めくる月日を君か世にかそへてとをき秋そしらるゝ

左右よき持にや。

十四番

左

から人のひしりをまつるむかしにも立かへるなり九重の空

右

明らけき御代はかきりもしらま弓ひくやためしの久かたの月

左。から人の聖をまつるとは。釋奠の心にや。うるはしく

先聖先師の道ならては。まさしき治世の術はなき事なる

を。此比の都なとは。あけくれのことわざは。力をもちて

あらそふ事のみにて。數ならぬ此判者の老法師までも。

白頭時節見千戈一とやらんにて。なからふるも物うく侍

に。聖人の道にたちかへる事を。あけくれのねかひなるに。

後陽成院御歌合 文祿三年八月

題

虫 月 戀

一番

左持

御製

初霜にうらみはてたる虫の聲をきそふまで絶しとやする

右

内大臣

飛ぼたる思ひにもえし跡も又ほにあらはるゝ野へのむしの音

右申云。聞虫聲以初霜怨知字秋幽。心詞珍重之由滿座申

之。左申云。飛と云。ほにあらはるゝ心このもしからすや。

判云。左。初霜に恨る虫の聲絶さらん。行衛を思ひやれる

心。不可思議に詞とゝこほらす。姿やさしかるへし。右歌。

左方申狀相當せり。歌さまもことのほのことにこそ不

レ及ニ沙汰。以レ左爲レ勝。

二番

左

雅教卿

身にあまるゆふへの露をむしの聲尾花か袖をたのみてやなく

右持

重保卿

露なから分こし野へはむしの音も袂にのこる心地のみして

右申云。第二第四の末のを耳にたつ。尾花か袖をたのみ如

何。左申云。心地のみしてといへる。いひおほせず。判云。左

歌。尾花をたのみて。身にあまる露を置く。あまりなく侍る

へし。右歌。結句なと云とめぬ。さりながら。聊勝はへらん。

十五番

左持

義俊

誰もまつ世をいはふらし豊年の新嘗いそく秋をむかへて

右

覺阿

いく秋かとをつ國より目をさしておさる御代に出る駒ひき

左。以ニ新嘗ニ祝ニ豊年。右。以ニ駒迎ニ知ニ治世。共以可爲レ持

左

右

義俊 勝二 持一

義景 勝二 負一

顯生 勝二 負一

覺阿 持一 負二

立好 持一 負二

宗因 勝一 持二

俊世 持一 負二

親秋 勝一 持二

永純 勝二 負一

古仍 勝一 負二

右以屋代弘賢所藏古寫本按合畢

三番

左持

公遠卿

たれしかも道の行てに分出てむしの音遠き野への夕くれ

右

經元卿

としをへてとはれぬかけの蓬生にさてもよはらぬ松むしの聲

右申云。道のゆくてにと云。むしの音とをきこゝろ。いひお

ほせず。左申云。頗無念。判云。左右一手にして。なれたるや

うなから。さしたる難はなかるへし。但いさゝかともに無

念の所侍り。よき持にや。

四番

左持

永相卿

露をさへいとゝうらむる名にしおはゝ霜にもたえず松虫の聲

右

兼成卿

分る野の道一すちやをく露もむしのなく音もたへなるらん

右申云。此心めつらしからざるものなり。左申云。第二句

連歌詞のさま歟。判云。左右申狀ともに相當せるなり。持

とす。

五番

左持

基孝卿

野を分し小鷹かり入駒なへて歸るにまかふくつはむしかな

右

言經卿

虫の音のるや錦の萩ちりてはたものをたつこゝちこそすれ

右申云。多能虫を置て。譬むし何の故ともなし。左申云。故

事の心不二相應。歌様も不_レ宜。判云。歌様左右分かたくし

て又爲_レ持。

六番

左

重通卿

夕まくれさそはれ出し道分てむしの音あかね野へのかへるさ

右持

親綱卿

ゆふ露をあかすやしたふなく虫の聲もはのほるをのゝ淺芽生

右申云。なにゝさそはれるにか。左申云。葉のほる露にむし

の音も末葉になれる心宜歟。判云。左歌。つねのみなれたる

やうなり。右歌。露と虫との心おもしろく見いたされ侍り。

此夕暮のむしを我心にもしたひつゝ勝と申へし。

七番

左持

光宣卿

うらかれのまくすか下のきりくす秋の恨にかつよはりつゝ

右

輝資卿

籠のうちに霜をは知しむしの聲秋をへたてぬ恨をやなく

右申云。常にみる心地し侍り。左申云。霜をへたてぬといひ

て。秋をへたてぬ如何。判云。左常のことながら。難はな

るへし。右心えぬ所侍り。負侍れかし。

八番

左持

兼勝卿

長夜の更行まゝにをく露もふかきうらみの虫の聲々

右

爲仲卿

我からのなく音はしらす海士のかるもにすむ虫の秋はしる覽

右申云。無下におもへる所なし。左申云。もにすむ虫。秋た

るへき例おほつかなし。右陳云。もにすむ虫も秋はしるら

んといへる。ひとつ作意なり。たのむの雁たにもといへる

類なるへし。判云。左歌無下におもへる所はなかるへし。右

に。もにすむ虫を。わりなく秋によみなせるよりは。左まさ

ると申へし。如何。

九番

左持

尊雅僧正

風の色もはつかなりけり虫の音のよをまつほと初秋の空

右

爲滿朝臣

露分し跡はさか野のむかしにて残れはのこる虫のこゑ哉

右申云。むしの音の夜をまつ心。月のこゝちす。左陳云。初秋なとは書はなかもめ也。仍初秋のこゝろを云へり。右又申云。此こゝろおほつかなし。又時節不三相應。左申云。下句

いかゝ。判云。左歌。右方申狀尤歟。右もまた左方申所相當せり。持とや申へからん。

十番

左

時通朝臣

さしこもるかた山陰の柴の戸のこゝろもしらぬむしの聲哉

右持

永孝朝臣

露も袖にしたひやきぬる野への虫を砌にうつすやとの夕暮

右申云。一首の趣向。月花などの心地す。左陳云。松虫の心をとりに。右申云。その心さたかならず。いかゝ。左。申云。露の袖をしたふこゝろわりなし。判云。左。心詞分かつたし

て。おもへる所なし。右勝侍らむ。

十一番 月

左持

御製

雲の上の背にあらぬ影みても我身ひとつの秋のよの月

右

兼成卿

ふり残る跡は水無瀬の秋の月すみこしまゝの影としもなし。右申云。雲上の明月。猶舊時をしたひ。こゝろことは相叶尤

宜歟。左申云。右歌。仙洞の舊事不レ加レ難。判云。左は。文武の徳をそなへても。猶堯舜の化をしたふ。是則聖王の習ひなるへし。歌にをきて。六儀相叶。尤珍重成へしと申侍るも忝なむ。右又水無瀬の月。緑の洞のむかしも。今の月かけにかはらん事。誠にあはれもふかゝるへし。作者も老の徳をのへ侍らむ程。情あらはれ侍れば。むかしの皇居に優して。持と定申侍らんはいかゝ。

十二番

左持

雅教卿

雲のうへの影をも袖にやとしきぬ我老らくの秋の夜の月

右

爲滿朝臣

ひとりあへる今宵の月をしるへにて昔にかへれわかの浦波

右申云。無二指難。左申云。定而おもへる所有そ。判云。左過こしを思ふ心。老若優せらるへし。右又故侍らむかし。依不レ加二勝負字一。

十三番

左持

公遠卿

待出し心にかゝるやまの端や月みるほとんうき世なるらん

右

重保卿

雲のうへの秋はありともみとせみし御池の月の影はわすれし

右申云。待出し心にかゝる山の端。ふりにたり。左申云。可相思所。判云。左ふとしたることにおもひより成へし。又うき世成らんなど。述懐もいかゝ。右又おもふ所侍れば。勝負定めかたくこそ。

十四番

左持

永相卿

はなかなほる御階は花の色のみか月も名高き雲の上の秋

右 親綱卿

三笠山ト草かけてやとれ月恵の露にもれぬ御代とて

右申云。左月の名高は勿論。花何の用にか。左申云。三笠山

の月難なし。判云。左玉階の月をよめり。右三笠山の神威をかる。ともに准て持とす。

十五番

左 基孝卿

月影も身にしむ床におきみつゝねられぬまゝに明す長き夜

右 經元卿

ます鏡神代をかけて照らす也高まの原を出る月影

右申云。おもへる所なし。左申云。ことゝしきさまなり。

判云。左。誠とおもへる所なし。右ことゝしきやうなから。神代のさま勝はへらん。

十六番

左 重通卿

なかもつゝ嶋かくれ行舟の中に月も明石のうらつたふ也

右 内大臣

こゝろをはいく千里までさそふらん長きかきりの秋のよの月

右申云。船中の何ことにか。左申云。無難事。判云。左。墓三

柿本古風。右。思。千里月影。ともにあしからす持にや。

十七番

左 光宣卿

君か代のくもらぬ空の月なれば光も露の玉しきの庭

右 爲仲卿

天地とわかれしよりやさため置てすめるを月の光ともせし

右申云。無三申旨。左方。無指難。判云。左歌。祝の心甚しく。右負侍らん。

十八番

左 兼勝卿

松風も身にしみけりな高砂の尾上の月にかねひゝく空

右 永孝朝臣

露むすふ軒のしのふの秋風にみたるゝ月もかきりしられす

右申云。無三指難。左申云。みたるゝ月のかきり如何。判云。

右歌。いと艶なる様なから。第四の句誠にこゝろゆかすや。

左。たけ高き躰なり。勝と申へし。

十九番

左 尊雅僧正

秋といへは心つくしの空ならし夜をまつ月も月をまつよも

右 輝資卿

身をてらす影こそなけれ秋の月桂を折しあとをへたてゝ

右申云。宜敷。左申云。違懷也。但心よろしき敷。判云。左歌。

右方宜とてさも侍りなむ。但右歌。家業廢之後。折桂の跡

をへたゝりて。身をてらさぬ心。やさしくつかうまつれり。

勝とそ申へき。

廿番

左 時通朝臣

萩の葉の音さやかなる秋風にねさめよふかき月をみる哉

右 言經卿

もろこしをおもふも西の北海や月の入さのわけてことなる

右申云。無三巨難。左申云。心おほつかなし。判云。右。西湖

の月ことゝしけに侍れとも。左は。いさゝか身にしむこ

こちす。

廿一番 無

左 膝

御 製

ほのかなる軒はの萩を吹風のをとに聞ても露そこほるゝ

右

親 綱 卿

しるへする人は有こもしのふ山こゝろの奥をいかにとはまし

右申云。源氏物語敷。顔珍重に候。左申云。右歌殊宜。判云。

左歌。参詞妖艶にして見ところ侍る。右の歌も。あしから

すつからまつり侍れと。左なをまさるへし。

廿二番

左

雅 教 卿

今は又袖の泪も色に出ぬ木々の時雨をしたそめにして

右 膝

爲 仲 卿

しられしな野分する野の夕露の消かへるとも色しみえすは

右申云。無指事。左申云。宜敷。判云。木々の時雨の下染よ

りも。野分の露こゝろくたけ侍り。

廿三番

左

公 遠 卿

秋といふ中に時雨の名もつらし松につれなきならひなりせば

右 膝

兼 成 卿

たのましとおもひぬる夜の俤もつれなき床の上にきえつゝ

右申云。此しくれふりたり。左申云。無殊事。判云。左歌。

ふりたる條は勿論。歌さまもことなる事なかるへし。右こ

ころやさし。勝侍らん。

廿四番

左

永 相 卿

我戀は秋の林の色とりの色には出しなにはたつとも

右 膝

重 保 卿

つれなきもきうも昔の契りにてなにをえにしに思ひそめけん

右申云。色とりの色に出しとはいいか。左申云。無難。判

云。右歌いとおかし。左の色とりめつらしけには侍れと。右

の方の申ことく。第四句いかにいへるにか。又右の爲勝。

廿五番

左 持

基 孝 卿

ふみ分てゆく末まよふ戀の道なにをしるへに思ひ入れむ

右

永 孝 朝 臣

なにゆへにうき夕そとなかむれは袖に泪の色そこたふる

右申云。顔舊事敷。左申云。色のこたふる如何。判云。左右

之狀相當せり。よき持成へし。

廿六番

左 持

重 通 卿

なをさりゆふへもかゝる露や置と物思ふ袖を人にみせはや

右

經 光 卿

身のほとおもひきゝたる袖の上に己つれなき夕暮の露

右申云。ふるし。左申云。無難。判云。左歌。ふりたりと

も。かゝるこゝろつねに詠する事。難にはあらさるへし。右

又難なけれは。能持と申へし。

廿七番

左 膝

光 宣 卿

ひとりぬる袖の泪と秋ふけて身にしむ程の比そかなしき

右

内 大 臣

まくすはふ同し岡へのおもひ草こゝろつくしの秋風そふく

右申云。甘心。左申云。無難。判云。左歌。右方人甘心々々。
右又無難。たゝしこゝろは聊ふりたるにか侍るへし。左。
下句など宜侍れば。右方人申狀にまかせて。左爲勝。

廿八番

左

兼勝卿

海士のかるみるめもあらぬものゆへに秋にそかる袖の浦波

右卿

爲滿朝臣

祈りてもかひなかるへき行衛かと契りむすふの神にとはゝや

右申云。有。病氣。左申云。古舁也。判云。右歌。古舁なから。

病氣有にはまさり成へし。

廿九番

左卿

尊雅僧正

天地とわかれしよりの戀の道いのるに神もしるしあらなん

右

言經卿

かきなかつためしをと思ふ御講水秋の一葉にあとをのこして

右申云。天地開てよりの戀のみち。いかゝ。以。二世并諸尊。二可

爲。三溢。舁。左申云。古事ことゝし。判云。左。歌。右方申狀

相當。右の歌も。戀のこゝろさたか成事ことゝしとは。

いかゝ。左方人申にか。但うたから勝る句はなかるへし。

三十番

左卿

時通朝臣

秋かけて色にな出そわか戀の松の下草露はをくとも

右

輝資卿

袖をまつ色にはいつる大かたの時雨は木々のこすゑなれとも

右申云。文字不審。左申云。別事。判云。松のした草。木々の

梢おなし色にて淺深難分者乎。

讀師
講師
判者

内大臣 三條西

右後陽成院御歌合以百花庵宗固本校合了

群書類従卷第二百十三

和歌部六十八 歌合卅四

近江御息所歌合

題

梅

やなき

花櫻

かにはさくら

棟

火櫻の花

庭さくら

なしのはな

もゝのはな

岩つゝし

梶の木花

山ちさのはな

さるとりの花

楓

山なしの花

岩柳

みつゝしの花

うきくさ

山ふきの花

ふちのはな

みやすところのさうしにて。宮の花といふたを

あはす。

右はあはせず。

梅

香をとめて折こそしけれ梅のはな春の霞はたちかくせとも

柳

いつれをか枝ともわかむ青柳の花もひとつにあさみとりなる

花櫻

花さくらちる山川ははるも猶ともまぢかほの雪かとそみる

かにはさくら

ふかれくるかには櫻そそひて散はるををくれぬ匂ひなるへし

あふち

鶯の木の花とのみいふなればあふちとりをはすへんともせず

火櫻の花

あつさゆみ春の山邊に煙たちもゆともみえぬ火さくらのはな

庭櫻

あるしとか我はく宿の庭さくらにはな散ほとはてもふれてみん

なしの花

春立はいつくともなし野はなりぬ若菜摘へくなりそしにける

もゝの花

咲しとき猶こそみしかもゝの花ちれはおしくそ思ひなりぬる

いはつゝし

枝しあれはおひそしにける岩つゝし花咲迄にならんとやみし

かちのきの花

わたつ海をこきゆく舟のかちの木の花とは更に波そたちける

山ちさの花

いたつらに散やしぬらん山たかみ人もかよはぬ山ちさのはな

さるとりの花

鳴こゑはあまたすれとも鶯にまさるとりのはなくそ有ける

かへて

春霞たちそめしより色かへて野はならしてよわかなつむへき

やまなしの花

よの中をうしといひてもいつくにかみをは隠さむ山なしの花

いはやなき

いはやなき花いろみれは山川の水のあやとそあやまたれける

みつゝしの花

君をおもふ心にみつゝ忍はなん戀しきおりはあまたすくれと

うきくさ

水のうへによるへ定めぬうき草もこのは流れておもふへら也

やまふきの花

いろにふかく思ひそめしをひとしほに咲そしにける山吹の花

ふちのはな

紫にいろあかりゆくふちの花こすゑたかくもなりにけるかな

四條大納言公任卿以ニ手跡本ニ寫留者也。

右近江御息所歌合以流布印本授合了

源順馬名合

一番

左

山葉緋サマノハノアケ

ほのくゝと山のはのあけ走りいてゝ木の下蔭を見てもゆか南

右

木下鹿毛コノシダカケ

山のはのあけて朝日のいつるには先木の下のかけそさきたつ

左

海河原毛アマノカハラケ

久堅のつきけそらよりわたるとも天のかはらけ草とゝめてん

右

比佐加多の月鹿毛ヒサカダノツキケ

雲まよりわけや出らんひさかたの月け空よりかちて見ゆるは

三番

左

葦原鶴駝アシハラツルフチ

波まよりとふあし原の鶴ふちは難波のあしけおひつかんやは

右

何葉葦毛ナニハノアシケ

いてかてにとふ葦原の鶴ふちはあしけの浦はくり見てそゆく

左

安佐千不之虎毛アサチフノトラケ

浅茅生の虎毛かみたるけし(きにはあなかくかたのい)みわかたのいとのかりけや

右

白糸の栗毛シライトノクリケ

白糸の栗毛ひきいてゝみるからにふす浅茅生のとらけなり鬼

左

烏玉黒ムハダマノクロ

かたきまづ縁のあをにくらふればかみとそみゆる烏玉のくろ
右 縁乃青ミトリノアヲ
みねのまつ縁のあけのなたかきをよる烏玉のくろやなからん
六番

左 神人之懸木綿鹿毛カミヒトノカケツルユフカケ

ゆふかみのなりて渡らは遅れつゝとりめは雲のよそに社みれ

右 相坂木綿付鳥毛アフサカノフツケトリノケ

ゆふ神のとくもあらしをなにし負は翔る鳥毛を合せさらまし

十番

左 梅花粧毛ムメノハナノカスケ

にけなくもくらふめる哉いちしるく匂すくれて早きかすけを

右 久留志木鼠毛クルシキニ、ケ

散にける花のかすけも色増るにけにしあなはかひなかりけり

八番

左 海乃積磯菜草アマノツムイツイソナクサ

すまのあまの朝けに摘る磯菜草今日かちふちは波そうちつる

右 天奈留鶴鹿毛アメナルヒハリカケ

なに立てふりて天なる雲雀かけいとあしこそ増るへらなれ

九番

左 無底井淵ソコヒナホッテ

栲繩のたえてやみね底ひなき淵にはかつくあまもあらしを

右 海乃多久奈者返淵アマノタクナハノクリケ

千早振神のくろといへとわたのはら白(き)雲の空にすてき

十番

左 和多都美乃腹白ワダツミノハラシロ

千早振神、ろてへとわたつみのしろきくもぬの空をすてゝき

右 千者也不留神墨チハヤフルノカミクロ

わたのはら白妙の波のうちてこし其神くろはかちはみえにき
或本 左右くらふる馬のあしはやみわかたにうつかちふちをみよ

右源順十番馬歌合。一卷傳云。端忠家卿俊成卿祖父奥俊忠卿俊成卿
祖父貞蹟。今觀其書。疑第四番。左歌以下俊忠卿手跡矣。寛政
五年癸丑春日撰之。即日一按加朱書於傍了。

藤原貞幹

正 右源順馬名合以藤貞幹本書寫雖不審不少依無類本不能按

一條大納言家歌合

題

石名取

左

數まさるかたに拾へる石なれはてにかゝりぬる千代にも有哉

右

底の石の顯はれてゆく水無瀬川みきはおとるしるしなり鳧

左

あまたたひひきつむ石の數はみな君か千年のためしなりけり

右

勝負を何かいふへきたちゐするまひのけしきを人はみよかし

左

とほく／＼に思ひこそやれなか濱の眞砂の中にすたつつるのこ

右

しら波のたちゐにいのるかひあれと玉津嶋ての神のしるらし

左

君か代の數にとり置きしれいしのうらふの山とまつなれる哉

右

天地のふくろのかすし多かれは思ふ事なきけふにもあるかな

左

みとりこの手毎にとれるさゝれ石の行末遠きためしなりけり

右

汀には石のみならずとりつめは濱のあなたはかひもあらしな

左

右

いとしくみにもやさりて見ゆるかな荒磯波も心よすれは

右 一條大納言家歌合以古寫一本校合

多武峯往生院歌合 正月庚申夜

題

家梅始開

池氷一倍殘

歌人

一番

家梅始開

左

美作

みちゆきの人もとひけり珍らしく梅さきそむる宿のかきねは

右

中務

二番

左

宣旨殿

春まちしかひも有かないつしかと我花そのゝ梅さきにけり

右

出羽

三番

左

武藏

我宿にひらけそめぬる梅花にほはん春そ數もしられぬ

右

左門

四番

左

讃岐

かは岸のわか枝の梅も咲にけり岡へにいまはゆきて折はや

式部

梅花さき初ぬれは我宿に鶯のねもとしからめや

五番

左

左門

ちりはかり咲そむるよりわか宿の梅の匂にしる物そなき

右

小馬

梅のはな匂ふさかりの宿なれは梢をのみそなかつゝをる

六番

池氷一倍殘

左

讃岐

春風やまたうちとけてふかさらむうすく氷の池にのこれる

右

出羽

曇りなき春のかゝみとみゆるかなひとへ残れる池の氷は

七番

左

美作

春の池にひとへ残れるうす氷あをもたまも隠れさりけり

右

武藏

うす氷のこりすくなく成にけり池のかゝみと冬はみしかと

八番

左

中務

春風やぬるく吹らむ池水のみきはの氷ひとへのこれり

右

左門

にほとりもみなそこ深くかよふめり池ほの氷むら／＼にして

九番

左

宣旨

こち風にとけゆく池の氷うすみをしのはふきも春めきにけり

右

式部

はる風の吹そめしよりいつしかと池の水のうすくもある哉
十番

左 美 作

春かすみ冬を隔てたちぬれと池の水そひとへのこれる

右 小 馬

こち風にとけはてねかし薄こほり池の藤浪あやかみゆへく

右多武峯往生院歌合以猪苗代謙庭本書寫一校了

西國受領歌合

題

盧橋 五葉 舊後 眞薦
田子 照射 神祭 蚊遣火
釣船 鹽竈

歌人 判者

西國の受領の館に四月はかりに庚申しけるに。ものゝ名
ともかきて。いたしたりけるを。歌よみけるに。いさあは
せんなどいひて。かきいたしける。

一番 盧橋

左 持

まちかうも花橋の木をうゑて古き年よりみそならしつる

右

なにまさる花橋を頭挿にてさかゆる君かみよとこそみれ

かみのみてきためたる。左は。ふるきとしよりみそならし

つると。いふおかし。右いはひのことは。よのつねなり。

我を祈る事はよのつね立花の年ふる程のかすはまされり

二番 五葉

左 持

峯をこえ吹くる程の松風は千とせとのみそとほく聞ゆる

右

千代の音をえたちならねと聞えける峯をこえ吹谷のまつ風

左右おなしころになんある。

遠近の峯の松風わかすしていつれの方も千代とふくなり

三番

薔薇

左（路殿舞）

ことし植てみるかおかしさうひに咲花の枝々くれなゐにして

右

色ふかくわきてか露の置つらんけさうひにさくはつ花のいろ

左。くれなゐの色ふかくよめり。右ば。色といふこと。もと

末に置して。かきあやまりてけり。

もと末にことのはをやはしたるへき紅色は深さまされり

四番

眞藨

左（路）

澤水になひくまこものすゑしけみゆく我駒のたちとまりつゝ

右

春駒のすたきはてゝしまこも草みきはも茂みおひにけるかな

左は。末なとおかし。右は。すたきはてゝゝしといひて。すゑ

にしけみいつる。なつみたることになん。

まこも草茂さそまさる春駒のすたきはてゝし汀おとれり

五番

田子

左（持）

我君の御代なかひこの苗をしもひきつらねてもうゝるたこ哉

右

常よりも今年は殊に手もたゆく苗ひきさふる田子のいとなみ

左は。君をいのり。右は。國をほめ。いつれもすてかたし。

ひきつれはゆふてもたゆくゝなるも田子のいつれもに

くからぬかな。

六番

照射

左（持）

おのかしゝ手毎に燈す御狩人のをたひ／＼のしるくもある哉

右

夏山はともしの松のたひことに鹿のたちとそさやけかりける

左は。手ことにともすといへるおかし。右は。ふるめきた

り。

鹿のすむたちとはふりて狩人の手毎に燈す数はまされり

七番

神祭

左

夏冬の神をまつるといそきしにはかなくきねの年はおいつゝ

右（持）

みな人のこのて柏をさゝけつゝまつらんくのに神そさかえむ

左は。きねのよをかけたるに。右は。神をかけたるにまさ

れり。

きねもいさこのて柏をさしはてゝ人の祭れる神は畏こし

八番

蚊遣火

左（持）

ひをみてはみなくる虫もある物をふすふ計りに疎むかやなそ

右

夕されはほのにふすふる蚊遣火の下こかれつゝ上はつれなき

左は。おかし。右は。ゆふされはみたれと。すゑさまになん

有ける。

夕されにされとみゆれと蚊遣火のふすふる人は思ひ増れり

九番

釣船

左

わたつみの神にとはゝや釣舟の浮たるよをはいつよりかへし

右

たなゝしのおまの釣舟波まよりとわたる程そはるけかりける

左はよけれと。はかなたちてそある。右は。とわたるほと

そなといへる。まされり。

うきてふる事ははかなし釣船の遙けき程の渡りまされり

十番

鹽竈

左

あま人のかたゝゝにやくしほかまの煙たえせぬ君か御代かな

右

あまたやく人やすむらんしほかまの煙たえせすみゆる浦かな

左のかたゝゝとあるも。右のあまたやくとあるも。おなし

(要也)こゝろなり。

あまたやく浦も遙けし鹽竈の煙たえせぬかたもおとらす

右西國受領歌合以山本甲斐權守季鷹本書寫一按了

源大納言家歌合一日之内合之

左 小忌衣

年をへてひかけにみれと小忌衣すりめことにもめつらしき哉

右

竹

きてなるゝとはなけれ共をみ衣ゆきすりにみて年そへにける

右

年をへて色もかはらぬ吳竹のふしにも千代をこめてけるかな

左 網代

節ことに千代をこめたる竹なれはかはらぬ色は君そみるへき

右

網代にてひをのみくらす宇治人は年のよるをそ歎かさりける

左 霞

ひをへつゝ散もみちはもこの里は網代によりてみるそ嬉しき

右

とふ人もなき山里の横のとはあられのみこそうれしかりけれ

左 水

降かゝる音はおとろく霞かな族のやとりのいたやなれはか

右

風さむみとこさへさゆる冬のよは池の氷もちやますらむ

左 (新門) 芦

おとは川遠かた人も袖たれてわたるはかりにこほりしにけり

右

つの國の難波わたりはしらねとも芦をしるへに尋ねてそゆく

弁のめのと

新衛門

こせち

宮内

中將

左 水鳥

なかつかさ

水鳥は河邊のかせと思ふらんおのかたちゐにさはく波おと

右

新衛門

川近き宿のすみかは水鳥のたちゐにつけて夢そさめける

左 (名題) 干野

五 節

花もみなかれぬる野へにはあらぬはまねくを花の心なりけり

右

(名題)

春秋の花の折にもまさりけり霜かれわたる野へのけしきは

左 鷹狩

弁のめのと

みかりの高く聞ゆる鈴の音にしのふるきしを思ひこそやれ

右

宮 内

はし鷹のとふ尾の鈴の音すなりのへの雉子はたつ空もあらし

左 待春

安 子

降雪はきえあへすともよしの山いつしか春の霞たちなむ

右

(名題)

梓弓はるこそひきてまたれつれ花にこゝろのいれはなるへし

右源大納言師房卿家歌合以一本校合

播磨守兼房朝臣歌合

題

高砂松

明石月

秋風

秋霧

萩

女郎花

鹿音

初雁

白露

紅葉

戀

祝

歌人

一番

高砂松

左 持

内記大夫

高砂の尾上のまつは君かへむためしにとてやおひはしめけむ

右

左 頭

たかさこの尾上の松にまつの□た君か代にこそ生そへにけれ

二番

明石月

右 京進

いにしへもかくみえければ久堅の月をあかしといふにや有覽

左

左 頭

秋のよの月をみつゝやいにしへの人もあかしの浦といひけむ

三番

秋風

左

藤内記大夫

まつ人のくるとそおもふ夕暮にすたれ吹いる、秋風のことゑ

右

藤大夫

萩の葉のはをふきみたる秋風はよふかくめをも覺しつる哉

四番

秋霧

左

観算君

逢坂の關はとめねと秋霧にたちこめられてこえそかねつる

右 法社君

朝きりに道はまとひぬたつた川いつれの程かわたりなるらん

五番 萩

左 源内記大夫

秋くれはいとよりかくる萩の枝はむらこに花そ咲みたれける

右 佐渡守

春はまつ我しめ置しみやきのゝ小萩に秋は花咲にけり

六番 女郎花

左 色に出て猶むつまじき女郎花こと花よりもなつかしきかな

右 清大公

女郎花猶なつかしみおもへとも我ひとりのみしぬそかひなき

七番 鹿音

左 武藏守

くる人もなき山里にあさゆふは鹿の音のみそみゝなれにける

右 右兵衛尉

秋はかり妻をこひつるさをしかは心みしかきこゝる也けり

八番 初雁

左 永好君

秋ことにくる初雁のこゑきゝてあはれといはぬ旅のなきかな

右 兼尊君

ふる里やおもひいつらむ雁金はさよふけかたに鳴わたるなり

九番 白露

左 源別當頼宗

かくなから消せさりせは白露を秋のかたみに置いてみてまし

右 藤先生惟實

朝またきおきてしみれは竹の葉によをこめてこそ露は置けれ

十番 紅葉

左 佐大夫

秋よりももふてしにける紅葉はを尋ねぬ人はまたやみさらん

右 弁君

たつたひめたつたの山の紅葉はをしくれて又も染てけるかな

十一番 戀

左 監物君

ま葛はふをのゝ篠原したにのみ人をこふるはくるしかりけり

右 新三源親宗

みの上になるへき事もしるかは戀せし人をもとかさらまし

十二番 祝

左 備前前司

君か代はから泉藍の深き色にやちとせつはき紅葉するまで

右 民部大夫惟連

君か代はかそへやるへきかたもなし濱の眞砂を数にとるとも

右播磨守兼房朝臣歌合以古寫一本校合了

祿子内親王家庚申夜歌合

題

春夜月

歸雁

蛙

吳竹

早蕨

莖菜

歸獨

歌人

左

小弁君宮の

中務

右

小式部

武藏

兵衛

一番

左

春夜月

曇りなく梢にうつる月かけの花の盛をみるこゝちする

右

小式部

みても猶おほつかなきは春のよの霞をわけて出る月影

二番

左

出雲

春のよの月に浮るゝたましひはいる山のはにおくれやはする

右

美作

君か代の久しかるへきしめの内はのとかに月の影もすみけり
三番 歸雁 中務

かきつらねかへる雁かね霞わけ花の都のはなをみすてゝ
右 (名聞)

霞たち立かへりゆく雁かねは花に心をとめぬなるへし
四番

左

宮の小弁

いつこをかすみかとは思ふ年ことにゆきてはかへる返かり金

右

小式部

霧わけておのかとこよはたちしかと霞のまよりかへる雁かね

五番

蛙

左

小弁

山吹の花や咲らむひまもなくかみなみかはに蛙なくなり

右

武藏

春のよはねられさりけりおとろかす蛙の聲にめのみさめつゝ

六番

左

中務

今よりは井てのわたりに家みせし蛙の聲に夢のさめけり

右

武藏

歸るへきみちもわすれて蛙なく井てにもやかてすむ心哉

七番

吳竹

左

甲斐

ふしことにちよをこめたる吳竹の末葉てもみゆる宿哉

右

美作

春雨も時雨もふれとむかしより色もかはらぬ宿のくれ竹

八番 早蕨

左 小式部

さわらひのもえ出る春のゆふ暮は霞のうへに煙たちけり

右 式部

いつしかともえにける哉早蕨の野へはいかなる思ひなるらん

九番 華菜

左 中務

ひまもなくすみれそ咲るしめのうちは庭紫にみえわたるかな

右 美作

日にそへて紫ふかきつほすみれふる春雨ははひにそありける

十番 躑躅

左 小式部

君か代をのとかに匂ふいはつゝし花のさかりに也にけるかな

右 兵衛

岩つゝし咲る盛は紅のいろにそみゆる春の山へは

右 禊子内親王家庚申夜歌合以百花庵宗固本書寫依無類本不能校正

禊子内親王家櫻柳歌合

題

櫻 柳

歌人

左

中務

右

小式部

甲斐

式部

美作

兵衛

三月十日。櫻のさかりに御前の香いみしうめてたく咲たるを。おなしうは。かたわきて。櫻柳あはせて御らむせさせんとて。ほかのも。めてたきともを尋て。植あつめさせて。

一番 櫻

左 中務

隈もなくたつねて折る山櫻ならふ匂ひはあらしと思ふ

右 式部

散こともならはてそさけ風ふけと梢のとけき宿の櫻は

二番

左 小式部

雪かとそよそにみつれと櫻花折てわきたる色のなき哉

右 美作

足引の山のはよりはいてねとも花こそ春のひかり也けれ

三番 柳

左 春ことにみる青柳のいとなれとかゝるなひきの枝はなかりき

右 兵衛 甲 斐

四番 くりかへし過にし春も行すゑもかゝる柳のいとやかならむ

左 小式部

玉ひかる糸かとみゆる青柳になひかぬ人はあらしと思ふ

右 美作

ねぬなはのこゝちこそすれ汀にて柳のいとはくれとつきせす

右 祿子内親王櫻柳歌合以古寫一本校合了

祿子内親王家夏歌合

題

時鳥曉聲

小鷹狩

晝の聲

擣衣

夕暮の聲

露

夜中聲

雁

歌人

中務

美作

宣旨
さいも

駒

小式部

式部

兵衛

播磨
出雲

武藏

一番

時鳥曉聲

左

ほとゝきす待あかしたる東雲に鳴ひとこゑは身にそしみける

右

郭公いかなる里に旅ねしてまたしのゝめに鳴て過らむ

二番

晝の聲

左

時鳥なきつる空を詠つゝ遠の山かけかたふきにけり

右

時鳥ひるねの夢のこゝちしてもりの梢を今そ過なる

三番 夕くれの聲

左 美 作

かたらふも中々也や子規たそかれときのあかね一こゑ

右 式 部

二こゑと鳴てを過よ子規たそかれときはおほめかれけり

四番 夜中聲

左 さいも

時鳥よはの一こゑきしよりやかてねかたき物をこそおもへ

右 出 雲

郭公ぬる程もなき夏のよをねさめよとてや鳴とよむらむ

五番 小鷹狩

左 小式部

故里の人はまつらんかりにきてけふは野へにもくらしつる哉

右 武 藏

あけくるゝ日數もしらて過に鬼たゝかりにとて出し野へにて

六番 櫛衣

左 美 作

ころも打宿のとなりにすむ人はまところむ事すくなかりける

右 兵 衛

あはれ今は峯のあらしにおとろきて衣うつなり遠の里人

七番 雁

左 小式部

朝な／＼ぬく白玉とみゆる哉千草の露もぬれぬかきりは

右 出 雲

花すゝきのきはにかゝる白露をやかてきえぬ玉かとそみる

八番 雁

左 小式部

かりかねはくる秋ことに草枕旅のそらにそあかしわふなる

右 式 部

ひきつらね旅の空なるかりかねは雲のうへにや宿はかるらむ

九番 霧

左 こ ま

おほつかな行ゑもみえず霧立ていかゝたつねん音たしのたき

右 さいも

秋霧のはれまもみえて山彦のことふるかたにわれはきにけり

右無類本不能校合

山家三番歌合

題

梅

歌人

池柳

歸雁

一番

梅

左

あさみとり春のそらよりちる雪に梢のむめのまかひぬるかな

右

梅かかは雪なからこそかほりけれしつれも花の色にみゆれは
二番

左

にほふ梅の花の衣にしら雪のあまたかさねてふりかゝるかな

右

梅の花ゆきけのそらににほひつゝちるにふりそふ春のやま里
三番

左

白妙の雪にまかへる梅の花くれなゐな□いろはみえまし

右

ふりきらす雪にちりかふ梅の花きえぬをみては人はわくとも
一番

池柳

春はなを柳の糸のたよりにや池のみきはに人もたえせぬ

右

春のくる柳のいとやぬきつらん池のちりなみ玉にみゆれは
二番

左

はるの池のみきはの柳いとよはみたえぬは糸の心なりけり

右

池水のなみはかゝれと青柳の糸のはなたはかへらさりけり
三番

左

春風に池の氷のとけしよりむすひかへたる青柳の糸

右

青柳の梢の糸は池水のきしのねにのみかへりくるかな
一番

左

玉つさはちりもやするとかりかねの聲に心をかけてやる哉

右

古郷をかすみへたては雁金のそなたの空にゆきやかへらん
二番

左

春くれはひきくらへつゝかりかねの歸る聲こそことに聞ゆれ

右

雁かねにかくる玉章いかならんゆく方は秋のたひをまつかな
三番

左

幾たひか行かへるらんかりかねの心をとむる春もあれかし

右

かへるかり聲こそ遠く過ぬなれつけてとふへき人はなけれと

右山家三番歌合以大納言忠家卿眞蹟書寫按合了

源宰相中將家歌合

一番 初戀

左(實男)

宰相中將

いろみえし心はかりはしつむれと泪はえこそ忍はさりけれ

右

刑部卿

二番

左

左京權大夫

風ふけはたちろく宿の板しとみやふれにけりな忍ふ心は

右持

前左衛門佐基俊

三番

左持

若狭阿闍梨

いはてたゝ思ひやりにてしらせはや人しれすのみこふる心を

右

備中守仲實

四番

左

筑前七郎

芦のやのしのゝ小塵ひまをあらみもらしてしかなかくる心を

右持

攝津三郎

五番

左

宰相中將

あひみても夜こそ戀は増りしかけふは晝をそくらしかねつる

右持

刑部卿

うたゝねの夢かとのみそ歎かるゝ明ぬるよはの程のなければ

左持

左京權大夫

契りありて渡りそめなは泪川かへらぬ水の心ともかな

右

前左衛門佐

月草にすれる衣の朝露にかへるけささへ戀しきやなそ

左持

阿闍梨

いつのまにひなとしらみて白波のかへる空より戀しかるらむ

右

備中守

しら波にほかくる船もあるものをけさの沖をは何にたとへむ

左

筑前七郎

くれまつと照日のかけを詠れはいるへき山のは社遠けれ

右持

攝津三郎

わかれぬるあしたのはらの忘水ゆくかたしらぬ我心かな

左持

宰相中將

あふ事も我心よりありしかは戀はしぬとも人はうらみし

右

刑部卿

中々に袖そ朽ぬる思ふともあはす泪のかゝらましやは

左

左京權大夫

こひしさに絶す流るゝ我袖のなみたを人のこゝろともかな

右持

前左衛門佐

たはれにし妹にあふやと道のへにとひし夕けそ人たのめなる
十一番

左

阿闍梨

こえなれし逢坂山のなそもかく戀路になりてまふなるらん

右

備中守

くみてし心ひとつをしるへにての中の清水わすれやはする
十二番

左(側)

筑前七郎

つれなくは戀てつれなく成はてゝまた更々につれなきやなそ

右

攝津三郎

いつとたにまた逢事を契せは目をかそへてもなくさめてまし
十三番

左

宰相中將

思ひあまり詠るそらのかき曇り月さへ我をいとひつる哉
(い)

右

刑部卿

あらし吹よさむの里のねさめにはいと人こそ戀しかりけれ
十四番

左

左京權大夫

よと共に玉ちる床のすか枕みせはや人に夜はのけしきを

右

前左衛門佐

波のよる岩ねにたてるそなれ松またねもいらて戀あかしつる
十五番

左

阿闍梨

戀わひてかたしく袖はかへせともいつかは妹か夢にみえける

右

備中守

我心ときそともなくみたるれと目たにくるれは戀そはりけり

十六番

左(側)

筑前七郎

わかこひはかたうら染のから衣かへしてぬるや色にみゆらん

右

攝津三郎

ねぬまゝに月を詠てあかすかなやみには戀もなくさましかし
十七番

左

宰相中將

年をへて落る涙を衣手にたまゆらかけぬ時のまそなき

右

刑部卿

おもふ事いやとしのはにつもる哉また打とくる人しなけれは
十八番

左(側)

左京權大夫

戀しさになるみの浦のはまひさきしほれてのみも年をふる哉

右

前左衛門佐

人こゝろ何をたのみてみなせ河せきのふるくわ朽はてぬらむ
(せ)

左

阿闍梨

年をへて戀に朽ぬる吾みこそみ山かくれの朽木なりけれ

右

備中守

つれなきをまけしと年のふけしかな我くら髪に霜のをくまで
廿番

左(側)

筑前七郎

しめくゝて岡邊にはやすくり芝の年にそへてもしける戀かな

右

攝津三郎

歎きつゝおほくの年をこゆるきのいそきあはむと思ひし物を

作者

左方

右方

宰相中將國信

刑部卿顯仲

左京權大夫俊賴

前左衛門佐基俊

若狭阿闍梨

備中守仲實

筑前七郎

攝津三郎

右宰相中將家歌合以一首寫授合畢

雲居寺結緣經後宴歌合

題

風

萩

菊

露

月

九月盡

歌人

左

右

皇后宮攝津君

基俊

大進君

左近中將師時

上人

散位忠隆

散位道經

三宮甲斐君

三宮相摸君

皇后宮少進兼昌

前越前守仲實

帥殿

散位顯仲朝臣

三宮甲斐君

筑前權守爲忠

上總君

覺勢入道

木工助敦隆

前下野守經兼

覺入道

琳賢

大貳君

皇后宮權亮顯國

常陸君

前木工頭俊賴

判者

前左衛門佐基俊

一番

風

左

おきの葉のそよともすれはまつ人に驚かれぬる秋の夕風

皇后宮攝津君

右

基 俊

秋にあへすこそは葛の色つかめあな怨めしの風のけしきや
萩のはの。まつひとかとおとろかるらんもこそあるさま
おかしうはへめり。右の。秋にあへぬくすの。まけぬらむ
も。まことにうらめしけに。いとをしうそはへる也。

二番

萩

左

大進君

おるからに袂つゆけき萩か花ころもすりきるなをやたちなむ

右

左近衛中將師時

朝またきたをらてをみむ萩の花うは葉の露のこほれもそする
ころもすりきむよりは。うはの露のこほれむも。おかし
ければ。まされるにやはへらむ。

三番

左

上 人

秋されは花の錦といはれのも小萩かうへにしくなかりけり

右

散位忠隆

萩か花もとのふるえに咲にけりみしにかはらす秋の夕暮

左は。いはれのもとよめる。めつらしき事はなけれども。
こ萩かうへにしくなかりけりといへる。歌の心そ。はな
はなしくしたゝかなるやうにはへるめり。右の。もとのふ
る枝にさきにけりみしにかはらすなとよめる。ひと通に
萩をよめる心にはあらて。むかしをおもひいつる心にて
そある。題の心ならは。ことしおひのはきにても。ありな
むとそおほゆる。みつねか。ふるえに咲るとよめるは。秋
のをゆきけるに。むかしのともたち逢てよめれは。こ
そのふる枝に咲るといへるも。ことはりにて。おかしけ

れ。これは思ひもかけぬやうなれは。左勝とや申へから
む。

四番

荊萱

左

散位道經

ふみしたきあさ行鹿や過つらんしとろにみゆるのちの荊かや

右

三宮甲斐君

のへことにみたしてみゆるるかやに露吹むすへ秋の山かせ
左の。朝ゆくしかやなといへる。いひしりておかし。但過
つらむ。すこし文字つゝき。いかにそやおほえはへる。
右の。野へことといひて。秋の山風といへる。ことたか
ひてそみえはへる。けにの山はちかきことにはへるに。む
かしもふもとの野へなとそよめるかし。女四の宮の歌
合。つゆ吹むすふこからしにとよめる歌に。いくはくもた
かはす。猶さやうのことは。さるへくやはへらむ。されは
いますこし。左は。増るにやはへらむ。

五番

露

左

三宮相摸君

夕されはお花をしなみ吹風に玉ぬきみたるのへしら露

右

皇后宮少進兼昌

稻妻の光にまかふゆふ露をひとる玉とも思ひけるかな
左のうた。すこしふるめきたるやうにはへれと。させる難
とすへき處なし。右の歌の。夕露のひとる玉とみゆらんこ
そことのほかの目に侍れ。ひとる玉はかりならん露は。す
くなきたとひには。ひきかたくや侍らん。又露はかりあら
ん玉は。ひとらむことかたくや侍らん。歌の詞も。あまり
あたらしければ。左のよきにや侍らん。

六番 月

左 卿

上 人

みるまゝに心もすみぬ天の河なに流たる秋のよの月

右

前越前守仲實

天のはらいさよふ雲も吹はれて光すみそふ秋の月かけ

こゝろもすみぬといへるは。吹はれてには。いますこし。
まさりてやはへらむ。

七番

左 卿

帥 殿

としをへていつも詠る秋なれといさまたかゝる月をこそみね

右

(名)

雲のゐるふもとに今宵きてみればなには月こそ隠れさりけれ

左の。いさまたかゝるなとよめる。すくれてはあらねと。

よみしりたり。右の。雲のゐるふもとにといへるは。山の

名にはあらで。里のなとこそ聞はへれ。なと山とよみて。

ふもととはいひ侍らはや。名には月こそかくれさりけれと

よめるは。みつねか。たみのゝ嶋を分行はといふ歌に。お

なしやうにも侍る哉。歌合のうたには。かゝる事はよまね

は。左の勝にやとこそ見えはへるめれ。

八番

左 卿

三宮甲斐君

ふく風やみそらのくもをはらふらん秋しも月のさやかなる哉

右

筑前権守爲忠

いつとなく同じ空ゆく月なれとこよひをはれと思ふなるへし

風は。春夏冬はそらにはふかて。たゝ秋のみ吹にやはへらん。又秋しも月の照まさるかなと。いへるふることに。か

はりてもみえはへらぬものかな。さて右の。こよひをはれ

と思なるへしとよめるこそ。誠にをかしく侍れ。月の一條

のおほちわたるにこそはへるなれ。思なるへしも。いとひ

そのことはにもあらねは。こよひの月にも。勝まけも。み

さためはへらねは。持とや申へからむ。

九番

左 卿

帥 殿

よもすから啼もことはり露寒みいかてか虫のいをやすくねむ

右 卿

上 總 君

聲たえず秋のよすから鳴虫はあさちか露そ泪なりける

左の。いかてかむしのいをやすくねむとよめる。いみしう

おかしけなり。されと。あさちか露そ泪なりけるとよめる

は。いますこしの。あはれさ増る心ちすれば。右まさると

や申へからむ。

十番

左 卿

覺勢入道

いはすとなをさてなけやきり／＼す花の宿りの枝移りすな

右 卿

木工助敦隆

眞葛はふよもきか宿のゆふ風にうらみもまさる虫のこゑかな

いはすとなをさて鳴やと。いへるわたり。ことはゆきて。

けにとみえす。花のやとりの枝うつりすなといへる。春

の鶯の。たかきにうつるこゝちす。右の。まくすはふよも

きかなといへる。よもき。くすもかさなりて。いふせく侍

れと。うらみもまさるむしのこゑかなといへる。あはれに

おほゆ。是はまさりてそみえはへる。

十一番

霧

左

夕霧にすまのわたりはみえねともふな人よはふこゑきこゆ也

右

前下野守經兼
散位道經

河霧にみせきもみえすゆふされはいはこすなみの音計して

左のかた。うたはあしうはへらぬに。すまのわたりとよめる

そなせけなきこゝちする。これは。業平の朝臣の。いさ

こととはむとよみて。かれいみに泪おとすとこなり。す

みた川のほとりにおりみてとそかきつかし。それに思ひ

そめて。おほゆるにやあらむ。右の。いはこす波。したゝか

にはへれと。ゆふされなくもあらましかはとそおほゆる。

されはとて。右は。今すこし増りてやはへらむ。

十二番

左持

覺入道

小山田や鹿の妻にもあらねともほに出る秋はかきほにそなく

右

琳賢

秋のよの露にそほつのみたやもりひた引ならせ稻葉そよめく

此歌。左も右もおなし程にこそみえ侍れ。持と申へし。

十三番

左

大貳君

きえかたみ雪かとみゆる白菊のうつろふときに花としる哉

右勝

皇太后宮權亮顯國

白菊も八へ匂ひけりこの里にうつろひぬへき心ちこそすれ

きえかたき雪とみゆらむよりも。やへにほふらむさとは。

十四番
九月盡

左持

常陸君

こからしのかせもとまらぬ山さとに秋も過ぬときくそ悲しき

右

前越前守仲實

秋くれぬよはのあらしも心あらはかたみにのこせ峯の樅葉

こからしのかせもとまらぬ山里は。かたみにのこらむも

みちよりも。物あはれにこそおほえはへれ。いますこし左

の方にそ。よりぬへく思ひたまふる。

十五番

左持

上人

からにしき幣にたちもて行秋もけふやたむけの山路こゆらん

右

前木工頭俊頼

あけぬとも猶秋風は音信てのへのけしきよ面かはりすな

から錦ぬさにたちもてゆく秋はとよめる。もみちすこし

あらまほしけれと。なをあきかせはをとつれてと。いへる

けしき。たをやかならねは。これも。かれも。おなしやうに

そみたまへ侍る。

右雲居寺結縁經後宴歌合以猪苗代謙誼本書寫校合了

爲兼卿家歌合

一番 春朝

左持

きたかには其色となき景色にもたゝ春めける今朝にそ有ける

右

前権中納言藤原朝臣爲兼

いつるひのうつろふ峯はそら晴てまつより下の山をかすめる
左歌 神妙之跡也 右うた。みる處ありて。又よろしき爲レ持。

二番

左持

風ゆるく春雨をやむ今朝のあさけ軒端の花は咲そめにけり

右

藤大納言典侍

なを残る月かとみれば山のはの花の梢のそらしらめる
左歌 委詞尤宜 爲レ勝。

三番 春夕

左

花かすみ色わかれつるをちかたは薫るはかりに暮る也けり

右持

爲兼卿

梅の花くれなゐふ夕暮にやなきなひきゝ 春雨を降

煙霞花前也望雖レ多餘興 梅柳雨中之粧 猶少ニ比類。

四番

左

くれかたを匂ふ日かけのうつろひて風しつかなる春の夕はへ

右持

爲相朝臣

ゆふへとも思はてみつる花のかけにうきこゑをくる入相の鐘

五番 春夜

左持

花しろき梢のうへはのとかにて霞のうちに月そ更行

右

爲相朝臣

花薫り月かすむ夜の手枕にみしかき夢そ猶別れ行

右 艶なる跡にて。おかしく侍るを。左、しろき梢のうへ。猶心うつり侍るによりて。勝と申へし。

六番

左持

かつ散も梢もいまをさかりにて月も庭の花の下かけ

右

爲兼卿

きたかにはみぬさへふかき情かなそこはかとなく霞むよの月
兩首ともによろし。可レ爲レ持。

七番 夏朝

左持

あさあけのまかきの竹の淺みとりなひくわか葉に露を涼しき

右

爲兼卿

よるの雨の名残の露にぬれしほれけさもまた□とこなつの花

わかはの竹の露。ことにけしきありて。みるころ侍るめ

り。右のうたこそ宜は侍るを。第四句。此跡見及事侍。古風
情同事に侍へし。但此作者存せずもや侍らん。そのとこな
つのつゝき。よせある様に侍れは爲レ持。

八番

左持

夏あさき青はの山の朝ほらけ花に薫しはるそわすれぬ

右

爲相朝臣

夏をあさみ露をくとしはみえねとも草葉涼しき朝明の庭

左右。いづれもいひしりて聞え侍り。又持と申へし。

九番

左持

さそはれていまきなけかし時鳥夕くれかけて月いつる空

右

爲兼卿

月よりも先さきたちて時鳥ゆふ山いつるむら雲のこゑ

これまたいづれも。とり／＼におかしく侍。猶爲レ持。

左持

經親卿

ちかくなる秋をしらせて風の音もかつ／＼涼し夕くれの空

右

爲相朝臣

みたれ行螢のひかりなさけみえて月におとらぬ夏の夕やみ

左。ことなる難なく侍へし。右も。おもへる所みえて。猶難

レ決ニ勝負ニ歟。

十一番

左持

庭しろく袖に涼しく影みえて月は夏とそ又おもはるゝ

右

經親卿

袖にうつる影をすゝしみはしちかく詠る月そ明る程なき

左右。袖の月。面かけ同じことに侍れと。下旬なと増るへくや。

十二番

左持

ぬれて鳴こゑそしほれぬ郭公さ月のあめのくらきよの空

右

爲相朝臣

打ふすもししはしはかりの夏のかゝけ盡きて残るともしひ

左歌。上下句ことによろし。右も。あしからぬ事に侍るを。猶左勝と申へし。

十三番

左

爲相朝臣

今朝よりは吹くる風もをく露も袖にはしめて秋をしらるゝ

右持

爲兼卿

あさ風は梢にあらく吹過てくもりもあへぬ秋のむら雨

左。よろしく侍るを。右まことにかゝるけしき侍りけりと。難レ有み侍れは。猶爲レ勝。

十四番

左持

藤大納言典侍

小倉山みねの朝きりたちしらみ松やもみちの色そみえ行

右

經親卿

山ふかき霧のあさけの朝露に草木の色もぬれしほれつゝ

兩首。朝の霧みなおかしく侍れと。左猶たちまされるにや。

十五番

左

經親卿

めくりあふうき身の秋の心よりおなし哀の夕をそ見る

右(勝配歟)

爲兼卿

左もおもふ處なきにはあらねと。右のかた宜にや。
十六番

左勝

さひしさの色のみ秋にあらはれて染あへぬ山のきりの夕暮

右

爲相朝臣
藤大納言典侍

鹿の音もむしのうらみも聞えてし秋にあきそふこの夕かな
左歌。上下句心詞ともにおかしく聞ゆ。可レ爲勝。

十七番 秋夜

左

藤大納言典侍

月みてはちゝにうれへし我心雨よの秋に又こほりぬる

右勝

爲兼卿

秋かせはしきく吹て月影のふけたるよはにきり／＼す鳴

左歌。宜侍るに。右歌。詞心よく。姿うためかしくして。し

かもやさしく。やすらかに聞え侍る。殊難レ有はへるへし。

尤可レ爲勝。

十八番

左

經親卿

鳴よはる落茅かはらの虫の音を秋更て聞よはそ悲しき

右勝

爲相朝臣

庭の虫よそのきぬたのこゑ／＼に秋のよ深き哀をそきく

左。やすらかに聞え侍れと。右の歌。庭のむしの恨。遠時

（所）のきぬたの音。ともに秋のあはれをすゝむる心。やさ

しく侍るへし。仍可レ爲勝。

十九番 冬朝

左

經親卿

ねぬるよのふけしまてには降もせて思ひもよらぬけさの初雪

右勝

爲兼卿

けさしはや雪は降きぬ山風のあれつるよはこれにそ有ける
左も心ありては聞ゆ。右詞つよくして。猶勝侍るへし。

廿番

左勝

爲相朝臣

しはしたく朝めくりする尾上より時雨をわけてさす日影かな

右

藤大納言典侍

降やらぬ雪をしまては朝な／＼めつらしけなき霜のいろかな

右。詞た／＼しく宜侍れと。時雨をわけてさす日影。なをめ

つらしく。まさるへきにや。

廿一番 冬夕

左勝

爲相朝臣

雲まなきゆふ山あらし吹たちてこよひや雪とみゆる空かな

右

爲兼卿

秋の名残なめしそらの有明に面かけ近き冬のみか月

左。心詞たくみなるさまにて。歌躰。誠に宜侍へし。右のみ

か月。風情めつらしく。思ひかたきさまにて。又おかしく

侍れは持と申へし。

廿二番

左勝

經親卿

霜かれの草や落葉に夕しくれふれとも今は色もかはらず

右

藤大納言典侍

あはれさは萩の葉そよく秋よりも木葉の庭の冬の夕風

右もおかしく侍れと。左歌の心。猶勝るへし。

廿三番 冬夜

左勝

藤大納言典侍

風のち霞一しきり降過てまたむら雲に月そもりくる

右

爲兼卿

こしかたのこひしきうちに戀しきは豐のあかりを月にみし頃
左歌。句ことに。心をふくみて。景氣あらはに面白く侍に。
右のうた。なへて戀しき中にも。わきてわすれかたく侍。
豐明のおもかけ。戀の心に。ひそかに通て。往事の泪。袖に
そゝき。懷舊の思。胸にみちて。勝負さたむるにも及びは
へらす。

廿四番

左

經親卿

深草のうつらの床もあらはれてかれのみさひし冬のよの月

右勝

爲相朝臣

今しはや霜をくらしもさよ更て星の光の窓にさやけき

左歌。無殊難一歟。右歌。殊尙可勝。

廿五番

左勝

爲兼卿

戀まさる心のまゝになかめしてしくれぬ時をけさうつしつる

右

爲相朝臣

きぬくもまた我しらぬみちしはに朝の露ははらふ日もなし

左歌。心誠に優艶にして。更におもひよりかたき處にも侍
かな。右も詞いひしりて聞え侍れと。しくれぬ時をうつせ
る心。可レ謂我群一歟。

廿六番

左

經親卿

かへりける今朝そ悔しき人めをも猶もわすれてそはまし物を

右勝

藤大納言典侍

夜のうちは猶もしやと頼みにて明はつる空を更になしき
左。心なきにはあらぬを。第四句。忘れて猶も。とやあるへ
かりけむとみえ侍。右勝に侍るへし。

廿七番

左勝

爲兼卿

暮かゝる空にむかひぬ物を我思はしとても入あひのこゑ

右

藤大納言典侍

うかれたる心のさらにあられぬをさそへやさらは夕暮の空
左。くれかゝる空にむかひぬといへる心。殊に。おほきに
たくみにて及かたし。右又戀の心。優におかしく聞え侍り。
勝負さためかたきにや侍らむ。

廿八番

左(側聞)

經親卿

まれにたに情もみせてこぬ人をさのみなとうき夕なるらむ

右

爲相朝臣

たか契り誰うらみにかかはるらむみはあらぬよのふるき夕暮
以下欠

右爲兼卿家歌合依無類本不能接合

卅番歌合

題

霞隔遠樹

霧中見花

雨後郭公

松下晚涼

山家秋月

湖上曉霧

嵐吹寒草

雪似白雲

逢不遇戀

寄神祇祝

作者匿名

左

伏

勝八 負

持二 點六

右衛門督法印

勝三 負二

持五 點一

大藏卿律師

勝四 負一

持五 點一

右

尊熊

勝二 負四

持四 點

三位法印

勝 負六

持四 點

兵部卿僧都

勝一 負五

持四 點

判者

頼阿

三十番歌合 當座

一番 霞隔遠樹

左勝

あさみとり色こそみえねをしほ山小まつかはらは霞こめつゝ

右

右 法

三 法

花さかぬ梢はよそにみえわかす霞むやいつこかつらきの山

右歌。小鹽山。こまつかはらの霞。ふるきおもかけも立そひ

て優に聞ゆるうへ。右第一句。心ゆかす侍は以左爲勝。

二番

左

大 律

高砂の尾上の梢をしなへて夕くれふかくたつ霞かな

右勝

兵 僧

高砂のまつはさなから埋れてふかくもたてる朝かすみかな

左右。朝暮の霞。いつれとわきかたく侍れとも。右歌。いま

すこしまさると申へくや。

三番

左勝

上

消やらぬ雪たにあるを高砂の松は霞そうつみはてける

右

尊 熊

かさしおる人もやたとるをしなへて槍はらも霞むみわの山本

右のうた。かさしおる三輪の槍はら。柿本の餘風。すてか

たく侍れとも。左。雪たにあるをと置て。松は霞そうつみ

はてけるといへる。ことはり相叶て侍は勝侍へし。

四番

霧中見花

左勝

上

花になをくるゝ山路をあくかれて春はたひねの宿も定めす

右

三 法

けふ幾日花に旅ねをかさぬらむあかぬ心のゆくにまかせて

左。心詞よろしく侍るへし。右花下忘歸ことをよめるにや。

霧中の心にはあらず。古先達の題をよくく心得へしといへるも。かやうの事にこそ侍らめ。又左爲勝。

五番

左持

過かてに行もやられす日は暮て花こそ春のとまり也けれ

右

右 法 尊 熊

ななき目もあかね色かに詠きてくるゝ山路の花の下ふし

左歌。旅宿を春のとまりといへる。いかゝと聞ゆ。古歌に。

はるのとまりはしらねとともと詠し。湊や秋のとまり成ら

んとよめる。今の心にはかはりはへらむかし。右又。暮山

路の花の下ふし。あまりにいきたなく侍るうへ。前番の難

と通かたく侍は准而爲レ持。

六番

左持

いそくへき道をわすれて旅人も花にやすらふしかの山越

右

大 律 兵 僧

逢坂の山の關守ゆるせとも花にそとまる春のたひ人

しかの山越。逢坂の關ち。花にやすらふ心。同じ様に侍へ

し。

七番 雨後郭公

左持

むら雨のすきぬる空の時鳥猶ふりはへてねをそ鳴なる

右

上 兵・僧

はれてたに猶きゝわかね郭公いくこゑ雨のうちになきけむ

右歌。下句あまりにたしかに侍るにや。左歌。めつらしけ

なく侍れとも。村雨のふることながら。勝へきにこそ。

八番

左持

右 法

雲はるゝ雨の餘波の夕くれは山子規またぬ日そなき

右

尊 熊

むら雨の過行空は子規しはしやすらふ程たにもなし

第五句。またぬ日そなきといへる。さのみゆふ暮ことに雨

の晴まにしもあらしとそ覺え侍る。右又。むら雨のそらの

子規。ことはりもまたかに聞えはへられは。勝負いつれと

申かたし。

九番

左持

村雨のはれぬるあととは有明の月にかたらふほとゝきすかな

右

大 律 三 法

かき曇りふれはまきれて五月雨のはれまになる子規かな

此番。又可レ爲レ持。

十番

左持

まつ陰のすゝしきまさる夕暮は夏もあらしの音そ身にしむ

右

右 法 兵 僧

ゆふつくひまつの梢にかたむきて下陰すゝし夏のした庵

左歌。夏のあらし。みにしまむことも。あまりなるやうに

聞ゆるにこそ。右歌。夏の下庵も。聞なれぬやうにはへれ

は。猶勝負不分明。

十一番

左持

涼しきは秋をもまたす夏衣目もゆふくれのまつの下かせ

右

上 尊 熊

夕付日いりぬるかたの松か根にあと吹をくる風そ涼しき

右ゆふ付ひも。涼風も、稍こそたよりありぬへく侍に。まつかねにと侍る。おほかなくこそ。左。詞やすらかにつつきて聞ゆれば。日もゆふ暮の夏衣。ひとへに勝と申へし。

十二番

左持

風の音はまつに残て涼しさの秋に先たつゆふくれの空

右

大 律
三 法

まつたかき木の下陰はたえくへに夕日へたてゝ風そすゝしき

左右の松。不_レ可_レ有_二高下_一矣。

十三番

左持

山里に又めくりあふ秋そとはあはれをそふる月にこそしれ

右

右 法
尊 熊

なめしやみ山の庵の秋の月またうきよにもかへる面かけ

右歌。初五文字。はなれて聞ゆるにや。童子のかふし。無下

にあれてこそ侍れ。左のうた。ことはりさたかに聞え侍ら

す。月日のうつりゆくもしらぬ山里に。月の哀より。秋を

おとろくよしをよめるこそ。如何様にも右にはまさり侍

るへし。

十四番

左持

これも猶こゝろそとまる山のおく月みる秋はすみやかへまし

右

大 律
兵 僧

とはれけるならひなければ終夜ひとりみ山の月そさひしき

左。依。楠摩之執着。刺抛。三山月之興味。隱遁のこゝろも。あ

らまほしくこそ侍れ。右も。ひとりみ山の月そさひしき。優に侍るに。けるければ。病にて侍けり。又爲左勝。

十五番

左持

なかもやる月に心のさそはれてわれさへ山のおくやいてまし

右

上 律
三 法

誰かまたおなしみ山に庵しめて我ことひとり月をみるらん

左右歌。ともに。心なきにあらず。よろしき持にや侍らむ。

十六番

左持

曉のうらのともふね漕わかれきりにやたとるしかのあま入

右

大 律
尊 熊

鳩の海やなみ路ひとつにたつ霧もそらのしるしは有明の月

左。無_二殊難_一。右。空のしるし。心ゆかす侍れは。左勝へきに

こそ。

十七番

左持

さゝなみやにほのわたりは霧こめて影かすかなる有明の月

右

右 法
兵 僧

にほの海やあかつきかけて舟人の霧の下行聲きこゆ也

左右等同。

十八番

左持

詠れは霧たちこめて鳩の海や波のいつくにあり明の月

右

上 律
三 法

さゝ波やよるたつ霧も有明の月にそみゆるしかのからさき

右。よるたつ霧。餘りにたしかにこそ侍れ。左。浪のいつく
に有明の月。景氣浮_レ眼。風情銘_レ肝。尤爲_レ勝。

十九番 風吹寒草

左勝

上

よをさむみ霜をきあまる篠の葉のみ山もさらに風吹也

右

兵 僧

霜もなをむすひそあへぬ萩はらやことのはもなきよはの風に

左歌。古風をしたひて。霜をきあまるさゝの葉。さら／＼

不_レ混_三凡俗_一者也。右歌。おきはらや。ことのはもなきとい

二十番

左

右 法

しら露は消ぬるあとのこからしに霜こそむすへ庵のあさちふ

右勝

尊 蕉

かれはつる軒はの萩をしゐて猶あきより後もとふあらしかな

左。木枯非_レ嵐。右第三句。雖_レ不_三珍重_一。聊爲_レ勝。

廿一番

左勝

大 律

あらし吹かれのゝ薄しもさえて秋みし色はおもかけもなし

右

三 法

すゑかるき枯のゝ尾花秋よりもなひきやすしと吹あらしかな

右歌第一句。不_三庶幾_一。ふくあらし哉と先達よむへからさ

るよし申さるゝうへ。近ごろまねきやすきは。秋よりもけ

にといふ歌の聞え侍りしに。心詞かはらさるにや。左かれ

のゝ薄。秋のおもかけも殊に思ひ出られぬへくこそ侍る

を。面かけもなしといへるぞ。おほつかなく聞ゆれと。せ

めても霜かれはてぬるよしにや。思ひなされ侍れは。すこ
し勝侍るへし。

廿二番 雪似白雲

左勝

上

朝ほらけ空ゆく雲のひとつにて山よりたかくつもるしら雪

右

兵 僧

きのふまで雲をいとひし生駒山おなしつらさにつもる雪かな

左歌。すかた高。詞艷に侍るにや。右古歌。雨は降とも雲

な隔そとよめるは。君かあたりみつゝもこえむため也。雪

のおなしつらさにつもらむこと。おほつかなくこそ侍れ。

朝ほらけの山の雪は。いろもさやかにあらはれて侍れは。

勝と申へし。

廿三番

左持

大 律

まかへても風には消ぬしら雲や尾上の雪の明かたのそら

右

尊 蕉

山風にうきたつ雲とみえつるや尾上の雪のふゝきなるらん

兩首ともに第五句。おもふへきにや。難_レ定_二是非_一。

廿四番

左勝

右 法

よそにみる高まの山に降雪はあらしにきえぬ峯のしら雲

右

三 法

しら雲のかゝるとみれは朝日かけさすやをのへの雪ぞ消行

右は春のうたにこそ侍れ。左爲_レ勝。

廿五番

左

右 法

遇不逢戀

慕はるゝ事を心にとゝめすはあはぬたえまのうさやならむ

右尊 熊

白露のむすふ契やあさかりしうつるもやすき月草の色

左のうた。上句いひおほせられす侍るにこそ。右も第三

句。艶ならす侍れとも。月草の色に心うつりて。増ると申

へし。

廿六番

左大 律

うきものといひし鳥の聲までもいまはかたみの有明の空

右三 法

つれなきは逢みて後も玉くしけ二度おなしみをそうらむる

右玉くしけ。ふたゝひおなしなといへる。明くれ聞こゝ

ちして。めつらしけなくや。左。今はかたみの有明の空。心

妖艶にして。詞花麗に侍れは。返々勝たるへし。

廿七番

左上

たちかへるいろをそたのむうき人の心の花のうつりやすさは

右兵 僧

をのつかまともむ程の夢にたにありしまゝなる情をはみす

左。小野小町か餘波。捨かたく侍るうへ。心の花のうつり

やすさは。中々たちかへる色をたのむよし。ことに聞え

て。まともむ程の夢よりも。みるかひある心地し侍れは。

左なを可し爲勝。

廿八番

左寄神祇祝

跡たえすをひえの杉のしるしあらは末のよまでも神を守らむ

右法

右尊 熊

まもるらし七の社の七度もかきらぬ千世の君かゆくすゑ

小ひえの杉。七の社。いつれと申かたし。

廿九番

左上

祈こし神のみむろの櫛葉にたちさかへ行君か御代かな

右三 法

神はみな曇りなきよを守れともわきて日吉の名にやいのらむ

左は。櫛葉によせて。榮行きみをいはひ。右は。ひよしの名

にかこちて。くもりなきよをいのる。ともに思ふ處なきに

あらず。よき持にや侍らむ。

三十番

左大 律

日吉山くらぬみ代にかけそへていやさかへなむ神の恵も

右兵 僧

萬代を神にいのれはから崎や猶かきりなき松かせのこゑ

左右。祝言勝負互に弃歟。匪三黃決三卅番之雌雄。剩合點七

首。令三金玉有三恐怖。不レ可レ痛面已。

右頓阿判三十番歌合以加賀美遠清本按合了

群書類從卷第二百十四

和歌部六十九歌合三十五

公武歌合

一番 湖上月

左

從二位藤原高清清俊作山

すはの海や浪路はれたる秋風に月のこほりをわたる 船人

右方申云。無三殊難_二左を勝とし侍り。

右

三善清房飯尾加賀守

にほの海やしかの山風吹おちて月のみふねをよするさゝ波

左方申云。下句きゝなれたる心地す。

抑一年撰集のみことのり侍し時。和歌の浦の波の。よりうとのかすにさたまり侍しに。おもひの外。九重のうちもしつかならさる世のさはきいてきて。上も下もをのかさまさまなるにつきて。撰者もみやこの外あふみのかしは木とかやにしろよしして。かりにいほしめ侍れは。いとこの道みたれはてゝ。たつきもなく侍れとも。なを大和歌のみに心をよせ侍る。余執もつきせさるゆへ。つはものゝまきれをもかへりみす。軍よはひのおりふしをもいはず。同じ心さしの人々をあつめて。この四とせはかり。月次のやうなることをおもひたちて侍るに。あるおりのつれつれの時々。褒貶なともましへて。愈けいこをはけまし

侍らはやと申すゝむる輩侍しを。一度は壁に耳ありて人のきかん事をはちていなみ。一たひは。石の物いひて。よそのそしりあらん事を恐れ侍れ共。道にふけるおもひをさきとして。同心せしめ侍りて。一兩度その席にそのそみ侍し例式は。左右の方人をわかちて。善あくをあらそひ侍れとも。これは座にあたりても。勝負をさたむへき道しれる人もなければ。たゞ札をうちて。をよはぬ心におもふところをのへ。かなはぬ詞に。あらはさぬ風情を。をのゝゝさたし侍りて。札の多くかたひき侍るを。勝とさため侍しやらん。しかはあれとも。同類をも病氣をもおもひより侍らすして。札をうち侍るを。ひとりもさかしき人の見出し。きゝもらさて所存をのへ侍れは。その方につき侍りて。勝負持をつけ侍りぬれとも。此まゝうち置侍らん事は。念なきよし申出すやから侍りて。御覽にかけて治定し侍りたきはしのおたまはゝ。かつうは老のなくさみとし。かつうはわかきともからの後のけいこにもなし侍らんといふ事しかり。

左の歌無三殊難_二之由被_レ申か。但米のかち渡勿論事なりといへとも。此一首にとりて。月を氷にのせられたる子細何

事をや。氷には舟のゆくゑも難_レ在。渡海の頃もなきにや。又秋風をそへられたるうへは。さゝら浪もたつへき歟。しからは月の氷ににたる。所詮おほつかなし。

右歌。下句きゝなれたる様に申さるゝ也。七々の二句全分同類事は覺悟に及はす。かやうの事は幾度も可_二出来_一にこそ。さりながら。上の詞に晩陰夜景の心なくして。俄に月の御舟を出されたこそ。如何とおほえ侍れ。愚存には。右歌。聊まされるやうに覺ゆ。辭案の至なるへし。

二番

左

三善元連覺尾

唐崎や松吹風による浪のあとにはひとり月そくまなき
右方申云。あとにはひとり月そくまなき。いひおほせてもきこえずや。陳云。なみのよせてあとに月ひとり隈なきこゝろ歟。

右

源則途

やとせ袖かち野の月を分すしてつゆもまたひぬ波の枕に
左方申云。やとせ袖。なみの枕。やとし物重疊歟。又野邊の月を貰して。湖上の心かすか也。持とさためぬ。

左の浪のあとこそ。汐干の跡などにいかけかり侍るへけれ。聊おほつかなきやう也。右の歌。袖と枕とやとし物重疊の由被_レ申歟。誠可_レ然。抑又勝野の波枕はいかにそや。近江一國の中なれば。いつくも湖水にとりをきたるにや。大方落花の歌こそ見え侍るに。持とさためられぬる覺束なきにや。

三番

左

按察使藤原親長聊甘壽等

松のみとおもひし志賀の唐崎にすむてふ月や又たくひなき

右方申云。一本の松に。又月のすむ心。たくひあるにてこそ侍れ。陳云。松のたくひなきにおほせて。又月のひとりすむ心を。又たくひなきといへるなるへし。

右

左大史小槻長貞宿禰大宮務

平の海や明ゆく空はをち方のたかねもなみにうかふ月かな
左申云。千載集にみし心ちす。又峯を浪にうつして。月を貰する心不足歟。左を勝と定め侍りぬ。

右歌。千載集に同類の侍らん事。覺悟にをよはす。左歌。一本といふ詞なくして。類なきはかりにては。不足なるやうにおほえ侍れと。勝と定められぬるうへは同心申者なり。

四番

左

法眼良世

すはの海や秋は氷を月影のまつしきそむるなみのうへかな
右方申云。秋は氷を月影のまつしきそむる。いかにそや。陳云。氷より先に月の氷を敷心也。又すはの海水規摸也。

右

樞大納言源通秀卿山陰殿

さのみやはにほてる月にうかれましふけゆく秋のよこの浦舟
左方申云。月を貰する心不足歟。右陳云。なとか月にあくからんといへは。賞心なり。又左申云。然はよろしき歟。

右歌。更行秋のよこの浦とは優に侍り。左さのみやはの詞。思惟の心まことにおほつかなし。月を貰する心不足申さるゝ歟。一往此理あるにいたり。左歌。無_二殊難_一にや。

五番

左 散位藤原俊通

鹽やかぬしかのから崎ひととの松の煙は月もくもらん

右方申云。しかのからさき一もとのつゝき。おもはしからさる賦。

右 沙彌寂譽

七度の秋そおほゆる葦原や國つみかみの浦の月かけ

左方申云。何事そや。本文の心ならは。歌の面たしかならさる賦。陳云。さのみ社よむならひなれ。子細きこえ侍る賦。左を勝と定め侍りし。

左歌。しかのからさき一本のつゝき。おもはしからさるよし沙汰ある賦。愚存には力量あるやうに覺悟をいたせり。定て僻接なる物賦。右。さゝ浪や國つみかみの浦とは聞及へり。あし原の詞おほつかなし。又七度の秋。下句よせある事にや。覺悟にをよはす。其子細承はらん間は。しほやかぬ松のけふり。たちまされりと申たきにや。

六番

左 三善爲信鹽屋

みちひなき鹽津の浦の秋のよに影もくもらぬ浪上の月

右方申云。無三殊事一。右衛門督藤原季春卿

波ちの月にあこかれてぬる夜かた田の浦の船人

左方申云。無三殊事申旨。右を勝とさため侍りぬ。

左。みちひなき鹽津の浦。右の。ぬる夜堅田の浦なと。ともに優美に覺侍り。左右の方八。無三殊事一のよし被レ申うへは。なとや持とつけられさるらん。

七番

左 藏人左少弁藤原元長甘藷寺殿御方

しかの浦や松の煙は見えながら浪路さやけき月の影かな

右方申云。無三殊事無三指難。權大納言藤原教秀卿龜修寺殿

右 蟬人の月にあかてもなをよるやおひぬ浦はのみるめなるらん

左方申云。題の心かすかなり。又こと葉つゝき。いと心得かたき賦。左を勝とさためき。

右歌は。粉骨をいたされて。あんしられたるとはみたまひつれとも。おひぬ浦はの詞。みるめよりさきに申出されたるによりて。前後して頗きこえにくゝ侍り。左は。あまりをさなましく侍り。なそらへて持とや申侍らむ。

八番

左 沙彌長光

鹽ならぬ浦のみちひとみえぬるや霧まに薄き秋の夜の月

右方申云。鹽のみちひ。霧間にうすき月。いひおほせてもきこえず。將又月にきりいひ出ん事無念賦。

右 權中納言藤原宣胤卿中御門殿

志賀の浦や月の氷を布妙の枕すゝしきとこのやまかせ

左方申云。無三指難。右を勝とさためぬ。

左歌。鹽ならぬ浦にさたまりぬるうへは。みちひのさた無用なるに似たり。右の歌枕。涼しの詞。いかにそや。志賀の浦に床の山をむすひたるは。同國の事にて侍れと。いさゝか覺束なきやうなり。歌枕。無案内なる事に候。さりながら決定勝とは愚按の分にては申かたきにこそ。

九番 禁中月

沙彌寂譽

宮人のおふきみるより月の名もいや高からしも、敷の山

右方申云。百敷の山きなれす。陳云。俊賴朝臣口傳抄云。百鋪山禁中なりと侍る敷。

右 高 清 卿

桂おる人をやてらす秋風にはるゝ雲井の庭の月かけ

左方申云。無_二殊難_一持とさため侍し。

百敷山まことに聞なれぬやうなれと。俊賴口傳抄にあらんには。異論に及さるにや。但歌合などには。か様の珍敷名所古事などをは。あなち規模とせさるにや。右。桂の事。御前の試に及第せる心にや。さるにても無偏の。忍光の折桂の人ばかりてらさん事も如何。持とさためられたる事。しかるへきにや。

十番

左 親 長 卿

あはれはや四十年雲むの秋になれぬ老となる物月もことはれ

右方一同申云。よそち雲むの秋になれぬ。あはれもふ

右 かんせいをもよほし侍り。 沙 彌 長 光

影めくる月にとはゝやすみなれしもとの雲井の秋はいかにと

左方申云。住なれしの詞。凡俗斟酌あるへき敷。左かちと侍し。

左歌。老となるものといふ七文字は。結句にならてはよみかたきやうに。愚意にはかくこせり。さらすは五七の二句にわけては。第一第三の句に置えて子細あるへからず。右もとの雲井の月。近日の風跡にはそのよせあるに似たり。但故知月などの題には可_レ然にや。愚案の所存はなを持た

るへきにや。

十一番

左 官 胤 卿

あふきみる九かゝねのうちにても空しへたてぬ月そさやけき

左方申云。九かさはかりにては。禁中の心不足敷。陳云。九重は凡禁中の事敷。

右 元 長

よそよりも影そさやけき九重や君かみきりの秋の夜の月

左方申云。無_二指難_一持と申侍りぬ。

九かさは。只このへ同事也。忠岑歌。九かさねの中にては嵐の聲もきかさりきは。禁中といへるなり。左右同品の歌なり。持とさためられたる。愚意同前なり。

十二番

左 爲 信

秋はなを君か光やいのるらしわきて照そふよるの月かけ

右方申云。二間夜居。護持の宣旨を蒙侍らてはいかゝと

覺ゆ。將又光と影と同心病敷。陳云。いのるらしと侍れ

は。護持の身をおもひやる心なるへし。光と影と。光は

月影各別事敷。不_レ可_レ爲_レ病敷。

右 長 貞 宿 禰

宮人の駒引わくる袖のうへに今宵そ秋も望月のかけ

左申云。駒迎を面にして。月の心不足敷。又八月十五夜にあらずして。明月を詠事も如何。持とさたまりぬ。

左。夜居の月。二間參候の人の所詠かと見たまふるに。その人にてなきよし。判詞にのせられたり。しからは夜居の僧と贈答には可_レ然。さらては無_二所詮_一にや。右歌も。駒ひ

きの題に似侍れと。禁中の事望月の比なり。難たるへからさる歟。今夜そ秋も望月などは。いひしれるにや。月の望は。十六日にあたる事も有にや。

十三番

左

俊通

久かたの雲のうへよりなれきて月もみかはのみつにすむ覽
右方申云。雲のうへよりなれきてとをきて。みかは水にすむらん。別の在所あるやうなるらん。みかはのみつも如何。

右

良世

秋はなをきものとのもりいとまあれや月のきよむる九重の庭
左申云。九重の庭の月。くまなきによりて。とのもりいとまあらむ事。あまりにや。持とさたまりぬ。

左。みかは水。まことに如何と覺え侍り。三河の國のなに混合せり。右とものみやつことは申侍れと。との殿守ききならはぬやうに侍り。又朝きよめとは申侍れと。夜までの掃除もいかい。持と判せる可レ然哉。

十四番

左

清房

名も高き雲井の庭の秋風に御はしの月や澄のほる覽

右方申云。無殊難二歟。

右

則途

袖にすむ月の柱の下紅葉おらてやかさすくものうへ人
左申云。汨なくて袖にすむいか。袖にすむ。あまりたしかにきこゆ。又月のかつらの下紅葉。かつらのうへとはきこえず。別の物のやう也。いかにそや。

右の下紅葉は。一本の木のうちへにても。梢下枝をわけて申せは。難たるへからす。すむの字。誠におもはしからす。袖にてるとあらまほしきにや。左歌。無殊難二之由。右方定申歟。愚意同前。

十五番

左

元連

神代よりかはらぬ空の秋の月かけも雲井の庭のさやけさ
右方申云。病氣重疊歟。右勝と侍りき。

右

季春卿

さやかなる月に色そふ萩の戸やよるとはみえぬ錦なるらん
左申云。月の事とはきこえなから。なを萩をせんにしたるやうにきこゆる歟。陳云。月故に萩の色そふかと侍れは。月を賞するにて侍へき。さたまりぬ。

右の萩のと月にいろそふとよめるうへは。月をよすかに花のいろもまさるにや。其段はさのみ難はあるへからす。これ又持とさためられしかるへきにや。

十六番

左

通秀卿

萩のとの露の月影ところえて猶光そふむらさきの庭

右方申云。萩のと紫の庭。月かけ傍になり侍る歟。陳云。所をえたるはかり也。又難云。影と光と同心病歟。

右

敦秀卿

百鋪やなかめあかしておしむ夜の月にもいそ朝まつり事
左申云。朝まつり事をいそく。臣下の歌に如何きこゆ。陳云。君臣ともに朝まつり事をいそかん事。有難難なり。又難云。題の心不足の上。詠あかすといひて。月にも

いそくと侍らは。一首の參差歟。左を勝とさため侍し。左。露の月影つまりて聞ゆ。又光と影と共にもつて月をいへり。同心の難あるへき歟。右おしむといひて。又月にもいそくは兩心あるに似たり。但君臣ともに朝まつりことをいそかむ事。不_レ可有_レ難之由陳答あり。こゝにいたりては筆を指をきぬ。衆議にまかすへし。

十七番 月下竹

左

爲 信

葉分もる影をさやかに河竹のなかるゝ月もななき夜の空
右方申云。な文字か文字につきて。病氣重疊歟。陳云。近代さたにをよひ侍らぬ事歟。

右

俊 通

植をきて月にそ契る秋のよの千夜を一夜のそのゝくれ竹

左申云。一首の首尾心得られず。持と申歟。

蜂腰鶴膝等之病。近來者不_レ及_二沙汰_一歟。左右歌。心詞おなし躰也。持_一可_レ然。

十八番

左

元 連

吹すく風に軒端のくれ竹も月にいく夜のかけなひく覽

右方申云。吹すく風に軒端の竹。月にいく夜のかけなひく。いひおほせても聞えず。陰なひくも有_二子細_一事歟。

右

良 世

影さむき玉の光をよることの月にそみかくそのゝ秋かせ

左申云。かけと光と兩所に侍る歟。陳云。玉のひかりならはくるしかるまじき歟。其上句ならひ也。又難云。異名をのみよむ事。歌合には如何。又陳。云つねの事也。左勝

とさたまりぬ。

右。竹の異名の事。不_レ及_二覺悟_一管窺の至也。玉のひかりなとは。夜光の玉とこそとり置侍りしか。寒玉などの詞。竹の異名にて侍るやらん。物の異名をも歌によむ事勿論也。とりもとめたる事。先賢このまさる事也。

十九番

左

元 長

吳竹のさ枝をよそに吹分て風にはれたる夜半の月かな

右方申云。さ枝をよそに吹わけてと侍る。けしからす侍り。陳云。強難にあらず。

右

寂 譽

くれ竹のもとくたちゆく秋風やをとなき月の雪の下折

左申云。下折のをとこそたてくれ竹の夜半の雪しく

秋の月影。家隆卿歌也。陳云。是ほとと同類つねの事也。持とさためき。

左の歌。よその字あまりて侍り。右雪折の竹。家隆卿の歌侍らは。誠に同類とも申へし。然はしらすしてよめらは。還て高名なるへきにや。但此うたにとりては。秋風を一首

の中にむすひいれられたり。幸の事なり。なとか。をとある月のとよまれさりつらん。しからは家隆卿のをとこそたてねの同類をものかるへきにや。

二十番

左

通 秀 卿

かすかなる光もさひし古さとのまかきの竹のさふたもる月

右方申云。故郷の月などのやう也。陳云。月下竹の題にては竹をよみ侍り。別のとほきこえず。

右 教秀卿

中空の月はさ枝のひまもりて影もすくなる竹の一むら

左申云。さ枝もる影のすくならん事如何。又さえた無益

歟。連歌を二句合たるに似たり。陳云。亭午の月なれば。

竹の陰の直ならむ事。有何事哉。右を勝と申侍し。

左歌。故郷の心。それはくるしかるへからず。竹月にてあ

らハ賢在所はよりくるにまかせ侍るへし。右歌。影もす

くなる竹。さもこそ侍らめ。衆議として勝に定けるうへは。

子細を申あらたむへきにあらさるへし。

廿一番

親長卿

吳竹のかけまて袖にうつる也まとのむかひに月めくるらし

右方申云。無殊難。

長貞宿禰

世々をふる竹の末葉にすむ月やとよらの宮の古のかけ

左申云。無指難。左方人おほくて。かちとさたまりぬ。

左歌。月めくるらしの詞。庶幾せさるにや。右いにしへの

影もいか。大方は兩首同品なりといへとも。方人おほく

て。左の勝に定るらん。しはらく衆議にまかすへし。比興

比興。

廿二番

季通卿

我友とみしもわすれて月影のさはれはいとふ軒の吳竹

依無右方人勝となりぬ。

則途

月をよまかくるへとは植をかしこくすみし竹の林に

左申云。七賢も自然竹の林にすみ侍るか。あなちうへ

侍らし。

廿三番

清房

くれ竹のかはらぬ色にをく露の光をうけてやとる月かな

右方申云。をく露の光をうけてやとると侍る月は。つき

にきこえ侍り。

高清卿

吹わくる軒端の竹をもる月や風にもきえぬ窓のともし火

左申云。月を灯にたとへむ事。あまりにや。陳云。燈にた

とへむ事有何難哉。右を勝とし侍り。

左。光をうけての詞。誠に心得られず。光をそへてとこそ

あるへき事なれ。右。月を灯にたとへ侍る事は勿論なり。

た。風にもきえぬなとは。月燈にいたりては不足なるに

や。左は。なへらかなる躰也。負まての事は如何。

廿四番

宣胤卿

吹わくる風にまかせてもる月の陰さためなき竹のした道

右申云。無殊難。

長光

月やとる竹の葉分の秋風になひくや影のくまとみえぬる

左申云。なひくやかけのくま。おもはしからず。左を勝

と申侍りぬ。

兩首の優劣衆議に同心訖。

都下兵亂之後。城南盤居之間。老耄相加。身如病兒。不携一
一巻之抄物。頗難忘。書儀之風。只依來。實難。默。撰注。
短慮所及。此一巻一覽後。於愚判愚詞。者早被削除。豈
不幸之甚哉。

南華老人

御判

武家歌合

一番 原上霞

左持

春きてはなをそはてなき朝な／＼霞にわくるむさしの原 前伊豫守源尚氏

右

伊豆守源政誠

雪きえぬ高ねも春になる澤や浪に霞のうきしまか原

左歌。むさしの原。霞になをはてなきさま。めつらしき

すかたは侍らねと。詞なたらかにいひくたされ侍る。右歌。

上句よくつゝき侍るを。下句いさゝかよはくや聞え侍ら

二番 左路

左路

遠江守藤原宗基

春はなを霞へたてゝまきもくの檜原かおくそふかみとりなる

右

大和守三善元行

若草のあをみか原の色もまた霞てうすき春のあけほの

左は。霞に檜原かおく。向みとりふかく。右は。若草の色も

こそかすみて。曙の景氣をかんせり。何れも心あるさまに

は侍れと。右の。あをみか原こそ。きよからす侍れ。たと

三番 左

左

散位藤原基雄

春きてもふしのねおろしさえかへりむら／＼霞む浮嶋かはら

右

權少僧都兼賀

みたるめり霞の袖のすり衣しのふか原の春のあらしに
左。首尾あひかなひて。きよけには聞え侍り。右かすみの
袖のすり衣、しのふか原と侍る。なをよろしく侍るにや。
かつへきにこそ。

四番

左

散位神貞説

春はまゝあさ野の原のかすめるや残る雪氣の雲の俤

右

越智康通

見わたせはいり海くらく立こめて霞に残るよさのまつ原
左。詞つゝきなひやかには侍れとも。春の淺きかたに淺野
を。かすかに。たまにきこゆ。可レ爲レ勝。

五番

左

右京進親祐

はるく見えし浪路も埋れて霞にたてるよさの松はら

右

左衛門尉宮道親孝

月残るあしたの原のおも影も春の名にのみ立かすみかな

左。かすみにたてるよさの松原。上句平懷なから。いひし
りてよろしく侍るに。右。月残る朝の原のおも影もといひ。

春の名にのみ立かすみ。詞といひ。すかたといひ。優にき
こゆ。左には勝へきにや。

六番

左

釋全藤

春は色にあまりてなひく曙や霞にわかぬ小野の篠はら

右

豊前守平頼亮

くる春の色を霞にさきたてゝなひきそめたる青柳の原

左

右

左歌。古今集にあさちふのをのゝしのはらと侍るを本歌
と定。やさしくとりなされ侍り。右歌。色をかすみにさきた
てゝなと。いひしりてきこえなから。青柳の原こそ。いたく
このみ詠へき名所ならねをのゝし原勝侍るへし。

七番

遠歸雁

左

右

左

右

ゆく鴈の聲のかきり

鳥の跡しはしはとめよ行鴈の雲につらなるものし關もり

鳥の跡もしのせき守など。悉皆鴈字を詮と作たてたる外。
ことなる心も侍らず。ゆく鴈の聲をかきりにといひ。名残
やみねの雲の一すちと侍る。わかれの鴈ゆくかたをした
ひて。なかめやる心もあさからす。聊勝へきにや。

八番

左

右

みるかうちに消て跡なく行鴈を霞にたとるはるのあけほの

別ゆくすかたのみかは天津鴈はては霞に聲もきえつゝ

左右の歸鴈。かすみにきゆるけしき。いづれもおかしく侍
れと。聊右は勝へきにや。

九番

左

右

委よりかすみそめつゝ見るかうちに聲さへきえて鴈かへる也

歸る鴈すかたは雲にかけろふのあるかなきかとうち霞つゝ

左歌。前の番の右の歌に心詞いたくかはらずや。右歌。か

右

左

右

左

右

左

文字七侍る歟。天の原ふしの煙の春の色の霞になひくあけほの、そらと侍る歌も。の字七侍れとも。か文字あまり多くや。歌合かやうの事難し申事にや。

十番

左持

親 祐

雲をわけ霞を分て姿をは誰にしのふのころも鷹かね

右

康 通

つれてこし秋もまとをに歸る也鹽やくあまの衣かり鷹(かね鷹)

左右とも下句優美。歌舛無二勝劣一歟。

十一番

左持

全 藤

ゆくかたもとこ世の鷹の跡とをみ身をなか空の春やうからん

右

親 孝

雲に入こゑには秋をおもひ出てかすめる月や鷹かへるらむ

雲に入聲には秋を思ひいて、といへる上句も。いかなるゆへともきこえず。下句。かすめる月や鷹かへるらむと侍るも思量にたへず。短慮のをよはぬにや。中空に春を恨る心たしかにきこゆれば。しはらく以左爲勝。

十二番

左持

基 雄

歸てふうらみはしるや天雲のよそに成行はるのかりかね

右

元 行

行鷹の聲をしるへにみし影もいやとをさかる夕ぐれのそら

聲をしるへにみしかけもと侍る。鷹の事にや。歌にはきかぬやうなれと。時には鷹影深とやらむ侍れば。さも侍らん。

天雲のよそにも人のといへる本歌も。たしかに

十三番

庵春雨

左持

親 祐

春雨はこけのみとりに色そへていはかきたのむ庵を露けき

右

政 誠

庵むすぶ草の根さしとおもふまで亂てかゝる軒の春さめ

左の。こけのみとりに。右の草のねさし。勝負分かつく侍り。

十四番

左持

尚 氏

よしやふれ松の下庵まつ人もうきみにうとき春雨の空

右

〔兼賀〕

露霜にあれにしまゝの草の庵を春降雨や又かこふらん

左。松の下庵の春雨の頃。まことにさひしくいひなされ侍り。右。露霜雨とり集めたるやうにきこえ侍れと。歌のすかたは。あしからぬにや。持にても侍れかし。

十五番

左

宗 基

をのつから霞の袖のいと雨にむすひそへたる草のいほかな

右持

親 孝

まはらなる草の庵の灯のひかりやしめる夜半の春さめ

いと雨にむすひそへたる草庵と侍る。いとよせてむすひそへたる。妖艶に侍れとも。いと雨よむへき詞ならすや。灯の光やしめると侍る。ことなる難なきにや。

十六番

左持

全 藤

春風の吹とはなくて草の庵まとうつ雨や霞なるらむ

右

康通

音さへもみたれにけりな春の雨のふるはしのふの草の庵に
左歌。蕭々暗雨打窓聲といへる詩をおもへる歟。猶第五
句。こゝろゆかす侍る。右歌。音さへもみたりにけりと侍
る。下句にしのふといはんため歟。春雨の音は如何。あらし
などの心ちし侍り。持にて侍るへし。

十七番

左

基雄

打しめりふきめもあはぬさゝの庵にもるとしもなき春の雨哉

右持

頼亮

草の庵はもる春雨にくれぬまも露のやとりも袖しほるなり

草の庵の露。詞くたけてはきこゆれと。かの藍山のふるき
むかしもおもひ出られて。おかしく侍り。うちしめりふき
めもあはぬさゝの庵。いひしりてはきこえなから。もると
しもなきといはむ事いか。春の雨はをともほのかにあ
りぬへく侍れと。もらすとはいふへからすや。

十八番

左持

貞説

冬かれしひまあらはなる軒に生る草のみとりも春雨の空

右

元行

時わかめすまゐなからもふる雨にみとりを春の松のした庵

左右とも。以二草色松色一添二春雨。美景歌一等同歟。

十九番

左持

基雄

春の夜はたゝ一時もおしめなを花の香こめてかすむ月影

右

政誠

明ぬとて月ふきをくる春風の峯にわかるゝ花のよこくも

月吹をくる春風。心あるやうに侍れとも。花の横雲さたか
ならぬ心地し侍り。春のよの一時をおしむすかた。猶心ひ
き侍るへし。

廿番

左持

尙氏

花さかり色も匂もふかき夜のあはれをこめてかすむ月哉

右

康通

あかなくに春の幾夜を惜きぬ月も折しる花の下ふし

左歌。ふかき夜のあはれをこめてと侍る。いひしりて聞え
侍り。右のうた。月も折しるなど。やさしくみえ侍れと。左
の霞には。あはれもおほくこもる心地し侍り。可レ爲レ勝。

廿一番

左持

宗基

吉野山月にはなにといはましかゝるは花の□のしら雲

右

頼亮

かすみあへす櫻に匂ふ春の月花にそむかて夜もみよとや

芳野山の櫻に月をさへよみくはへぬれは。春の景色たく
ひありかたくや。されと詞のつゝき。猶心ゆかす侍り。櫻に
にほふ春の月も。美麗には侍れと。花にそむかてといへる
詞。此歌にとりては。いかにそやさきこえ侍る。ともし火なと
詠くはへ。又捨身の述懐なとにそへては。おもしろく侍る
へし。そむくといふ字のあしきにはあらず。此歌に。いささ
か耳にたつやうなり。左右思ふ所あり。おなしほとにや。

廿二番

左

親祐

身にしむはいつれの色そ咲花の木間をわくるはるの夜の月

右持

元行

詠れは空こそかすめかけられて月にさはらぬ花の白くも

左。花と月との身にしむ色をあらそひ侍る。心あるさまに

は侍れと。右。月にさはらぬ花の白雲。なをたちまさりて
おかしく侍る。

廿三番

左持

全藤

天きるかとはかり月はおほるにて雪と見る夜の花にうつろふ

右

兼賀

さくらや

行月のかつらの花の下 侍る躰

左歌

廿四番

左

貞説

月影にわかれぬ花の色も香も吹てしらせよ庭の春風

右持

親孝

雲間より花の梢に影おちてにほひにやとるはるの夜の月

吹てしらせよ庭の春風と侍る。花の爲には無念にこそ聞
え侍れ。其上。月影に花の色香のわかれぬも。ことはりか
なはずや。句にやとる春のよの月花の梢にてりそふこゝ
ちし侍る。尤勝侍るへし。

廿五番

左持

全藤

河嶋や岩ほの苔も染かへて花色衣きしのやまふき

右

政誠

山吹の花の浪そふ嶋かけにほそき枝くふ池の水とり

左。いはほのこけを。花色ころもにそめかへられ侍る。と

へとこたへすといへる本歌の心はあしからねと。花いろ
衣きしの欸冬は。花をきたるとつゝけられたる賦。このま
しからずきこゆ。右源氏物語胡蝶の巻に。水鳥とものつか
ひはなれすあそひつゝ。ほそき枝ともをくひてとやらん。

物語に「やうにきこゆ。左右とも
におもふ所有。可レ爲レ持。

廿六番

左持

尙氏

立花のこしまの色を夏かけて匂ひに残せ山ふきの花

右

元行

春の色にさける小嶋の山吹はなにたち花の折たかへつゝ

左右橘小嶋。欸冬色香淺深難レ分。可レ爲レ持。

廿七番

左持

貞説

春をさそふ水や心をかは嶋にうつろひかゝる山吹のはな

右

頼亮

いろ／＼にさける小嶋の山吹はうへけん君や宇治のはし姫
春をさそふ水の心。やさしくきこゆるに。うつろひかゝる
といへる。こゝにてはかゝらすともと覺侍る。うへけん君
やといへる。ふるめかし侍る賦。又持にて侍るへし。

廿八番

左(判卷)

宗基

山吹の花色衣きてみれば染ぬ波なきうちの川しま

右

康通

春をしもうつしてにほへ橋の名をかる嶋に咲る山ふき
左歌。めつらしきすかたは侍らねと。下句なといひしりて
難なきにや。右歌。むかしをもうつしてにほへといひ。橋
の名をかる嶋と侍る。たくみななるやうなり。

廿九番

左持

基雄

川水のはやく暮行春の色を小嶋に残すやまふきのはな

右

親孝

河風や昔よりなまたち花の小嶋に匂ふやまふきのはな

左河水。右河風。又わきかたく侍へし。

卅番

左勝

親祐

うち河や岩こす波の花までもおなし小嶋に匂ふ山ふき

右

兼賀

心有てうへやをき釵山吹の花の籬かとをつ嶋ひと

浪の花までも。こしまに匂ふ心。いとおかし侍り。花のま

かきか遠つ嶋人と侍る下句。かのみちのくのまかきの嶋

をおもひそへられたるか。短慮慥に覺知し侍らす。遠つ嶋

人の。心なれてしらぬにこそ侍らん。左可レ爲レ勝歟。

卅一番

待空戀

左勝

宗基

さりととも頼めし人はとひもこてまたぬ八聲の鳥の音をうき

右

兼賀

我は待心はつきぬさりとものたのみむなしき鐘の響に

さりとともといひ。さりとものをかれ侍る。又とりのね。

鐘のひき。同科にはみえ侍れと。右。我そまつ心はつき

ぬといへる。いひかなへてもきこえず。左勝へきにや。

卅二番

左持

親祐

いつはりはまさしかりけり侍人の心のうらはあはて更ぬる

右

頼亮

さはるてふ又此夜半もなからへて身は有明の月もはつかし

左歌古今集に。心のうらそまさしかりけるといへる本歌

をひきかへて。僞はまさしく心のうらはあはてといへる。

心あるさまには侍れと。本歌も同戀の歌にて。無念なるや

うに侍る歟。右歌。有明の月。ふとしたるやうに侍れと。又

この夜半の長くて侍る。たひかさなれる空たのめもあ

はれにきこゆ。左右たかひに得失あり。勝劣難レ弁。

卅三番

左勝

尙氏

たのむ夜は波こす床に松山の待とはかりのあらましもうし

右

親孝

有明のかけはむなしき床のうへに猶かたしきの袖したふ也

左。波こす床にまつ山のといへるすかた詞いひしりて。首

尾相應せり。右。むなしき床に月影はかり。かたしきの袖を

したふといへる。やさしく侍れと。有明のかけはむなしき

やうに聞ゆれは。左尙やすらかなりと申へし。

卅四番

左勝

基雄

をおもひたへねと

右

康通

明ぬとてこぬよをつくる鳥のねは言葉残らてかことたになし

左歌。詞と、こぼる所なくよろしきにや。右。千夜を一夜に
といへる歌をとりてよまれたる。優美には聞えなから。か
ことたになしといへる終の句や。此うたにとりて。いひか
なへてもきこえず侍らん。左聊まさるへし。

卅五番

左持

せめてさは跡なき人の言の葉に曉露のむすふ身をはや

右

全 藤
元 行

たのみこし夜半もいまはの鳥の音を又別路に誰なけく覽

左歌。あしからすきこえ侍る。されと跡なき人のと侍る。

聊おもひたくや。右歌。夜半もいまはのなと。優に侍るを。

下句ちからなくそ侍る。持なとにや。

卅六番

左持

貞 説

かひなしやまつとせしまのやすらひに夢もたのめす有明の空

右

政 誠

鳥のねもおもひたえねとなく涙わかれにかゝる曉もかな

夢もたのめす有明の空。別に懸る曉もかな。ともにやさし

くきこゆ。よき持にて侍へし。

卅七番

左

尙 氏

おもかけの離れもやらぬ人よなと我身をよそに忘れはつらん

右持

頼 亮

我涙行衛はしるや忘れられぬ花の涕あをやきの眉

左。人よなと我身をよそにわすれはつらんとひて。我身

のわすれかたき愁つよく聞え侍りぬ。歌からも心有さま

に侍り。右。長恨歌の芙蓉如^レ面柳如^レ眉といへる句をおも
へるにや。尤力ありて。花の涕柳のまゆ。ともにみつへき物
にも侍らねは。左に劣と申かたし。

卅八番

左

基 雄

露の間も忘れぬ物を我中にあふことなしの草の名はうし

右持

政 誠

住吉のきしはむかしの袖ぬれてつまはや我も戀わすれ草

あふ事なしの草の名。いかにそや聞え侍る。作者いかにお

もひてよまれたるやらむ。ことなし草などいへるは常の

ことにや。ことなしの草。このみよむへからす。わすれ草。

下句ふるめかしく侍れと。左には勝侍るへし。

卅九番

左持

宗 基

かへりみる心も身をも忘れくさわすれぬかたに思ひみたれて

右

元 行

ともにみし影はかりたに忘れしの言の葉そへしあり明の月

この番。左も右も心ありてきこゆ。

四十番

左持

貞 説

人はさもあたしことはの契そと思ひしりてもえやは忘れん

右

兼 賀

いかにせんたつきもしらぬ玉鐙の道行ふりの袖の別を

玉ほこの道行ふり。深くきこえ侍り。題の心もたしかなら

すや。左。させる難もきこえ侍らす。

四十一番

左 齋

親 祐

我もきえんこむ世をかけて忘れしの契むなしき夕 貞の露

右

康 通

かへりかね心そひきし琴の音のほのかなりつる蓬生のやと

左は。ゆふかほの露にこんよをかけ。右は。蓬生の宿にこ

との音をしのふ。ともにかの物語のむかしをかりて。今の

わすれかたき戀にとりなされ侍り。されとなを左は心ふ

かきやうに聞え侍れは。勝へきにこそ。

四十二番

左 持

全 藤

たゆみなき思ひにかけて今そしる有し野分の夕くれの空

右

親 孝

袖ふれしそのうつり香や更になを忘れかたみの行衛ならまし

左歌。野分の巻に。かせさはき村雲まよふといへる歌をお

もへるにや。題の心にはかなひてきこえ侍り。たゆみなき

とをかれ侍るこそ聊耳にたち侍れ。右歌。袖ふれしうつり

香なといへる。難なく侍り。持なとにや。

四十三番

増恨戀

左

貞 説

つれなさをまけぬ心にこひ衣身にも恨の年やかさねん

右 齋

頼 亮

今はたゝねになけとてや空蟬のもぬけのきぬの恨そふらん

左。つれなさをまけぬ心にと侍る。いひおほせても聞えず。

右。源氏物語うつせみの巻に。かのもぬけをいかに伊勢お

のあまのといへる心にや。おかしくきこゆ。かち侍るへし。

四十四番

左 持

全 藤

あさりする汐干のかたにぬれそふや恨しかひも浪のたもと

右

元 行

初秋の色たにつらき眞葛原なを吹しほる露の夕かせ

源氏物語の心。たひくになり侍るに。伊勢嶋やしほひの

かたにあさにてもいふかひなきは我身なりけりといへる

歌をとる事。このましからさるにや。このしほかひ。くたけ

たる詞つゝきにも侍るかな。葛のかせもことなるめつら

しきふしも侍らず。同じほとにや。

四十五番

左 持

尙 氏

はや幾夜つもる恨となりぬらんなくさむ夢にかへす衣は

右

政 説

いとゝしく露ふきむすふ夕かな玉まぐ葛のよその秋かせ

露ふきむすふなといへる。あしからす侍るに。第五句いか

にそやきこえ侍る。かへす衣も。はやいく夜といへる五文

字。心ゆかす侍れと。風跡なたらかに侍る歟。持とや申へ

からん。

四十六番

左 持

基 雄

恨をはなをうちそへて歸る也かけもなさけの浅瀬しらなみ

右

〔康 通〕

せきそふる泪をとへは海も浅く山もほとなきわか恨かな

あさ瀬白なみと侍らは。河なとのたくひありたく侍り。恨

とをかれ侍るは。浦によそへられ侍らは。第五句いかにそ

や侍る。右拾遺集に。うみもあさしやまもほとなしといへ

る歌をとられ侍り。泪をとへはと侍る。心ゆかすや。依可
レ爲持。

四十七番

左持

宗基

今はなを恨にしける眞葛原人のつらさや種となりけむ

右

親孝

ことの葉やあたになりゆくいやましに積る恨を何とかこたむ

左右ともに。めつらしき姿も侍らす。又持なとにや。

四十八番

左持

親祐

袖の露ははらふたよりとなりもせて人の心の秋風そふく

右

兼賀

そのまゝにつれなきよりも中絶てかはる恨を限しられぬ

袖の露はらふばかりにや。恨をますこゝろいかゝ侍らん。

下句いかゝふきたる心ちと侍り。つれなきより

心ゆかす。同じほととや申へからむ。

四十九番

古渡船

左持

宗基

ありし事とへはいはせの渡舟こきゆくかたのよるへいそくな

右

政誠

こき消てよそになるとのわたし船そのみるめをたれ惜らん

左右の歌の心。さる事にてそとをしはからるゝ程には侍

れと。指むかひてよく聞ゆるやうに侍らすや。勝劣わけか

たし。

五十番

左持

尙氏

舟よはふ聲はかりして明やらぬよとのわたりにのこる月影
右

康通

さしとめて汀につなく船はあれとかちよりそゆく淀のつき橋

左。難なく残月の影も優に侍り。右かちより橋をゆくへき

に。便宜あらは舟を求へきにあらす。舟の題にて橋を詮に

せるも無念也。以_レ左爲_レ勝。

五十一番

左持

基雄

をひて吹風にまかせてゆらののとをきもしらすよする船人

右

兼賀

いつよりか舟出すらむこほりゐてかちわたりせしはの入海

ゆらののとをきもしらすと侍て。よする船人

おもへる。おほつかなし。又諏訪入海

なれ侍れとも。こほりてかち渡

とにてよむへしともおほえす。證歌侍らすは勝と申かた

く。持たるへし。

五十二番

左

全藤

まよふらしこのよは舟にあかし瀧とわたりはてぬ浪のゆく末

右持

頼亮

わたし守舟ないそきそ角田河すみうかれても都をそ思ふ

左歌。とわたりはてぬきよからす。たとひ先達よめる詞

にても。用捨あるへきにや。まよふらしこの世は舟にあか

しかたと侍るも。心ゆかすや。右歌。在中將の都鳥の名をと

ひけん心に。いたくかはらす侍れ。角田河すみうかれて

もなといへる。わたりよろしく侍る。勝へきにこそ。

五十三番

左持

貞 説

舟とむるよとのまこものかりまくら都にちかき夢やむすはん

右

親 孝

たひ人やけふもありその渡守浪に小船のつなてとくらむ

この淀のわたり。有磯のわたり。歌のしなおなしほとにや
みえ侍り。

五十四番

左持

親 祐

日もくれぬ人もわたらぬ程なれや舟さしかへる淀の河長

右

元 行

舟のさほのわたりの夕月夜さすかけ

薄暮の

さほのわたりきゝ

なれ侍らす。さためて證歌侍らん。よする白浪もよせなく
きこゆ。よとの川長勝侍るへし。

五十五番

左持

尙 氏

神やしる誰曉もわきてまつ世をいのるてふ事はかはらし

右

元 行

空はれて明かたちかき天の戸にあふけは高き月よみの神

左。たか曉も世を祈る心よろしくきこゆ。右。あまの月に月
よみの神。より所有て。あふけはたかきなといへる。あし
からず。共によき持とや巾へからむ。

五十六番

左持

全 藤

法まもるしらきの神の玉垣やその曉もかねてすむらむ

右

政 誠

雲のうへのとかにてらせ今も世に尙有明の月よみのみや

左。新羅の神詠。から舟に法まもりにと侍るをとりて。三會

曉にとりなされ侍る。よろしきにや。右。有明の月よみのみ
やきよけにみゆ。しかれとも左は猶首尾相應して。ゆゑし
けに聞え侍る歟。かちたるへし。

五十七番

左持

親 祐

宮人も神につかふる道とてや星をいたゝく夜半に出らむ

右

頼 亮

ひいつやはや曉

神につかふるみち。ほしをいたゝく

え侍り。岩戸のむかしをおもへる

しきにや。勝劣
わけ難し。

五十八番

左

宗 基

神代よりあつめし鳥の聲々にうたふ櫛はいまもかはらす

右持

兼 賀

いそけ猶七のみや人曉のときもうつきの神のまつりを

あつめし鳥の聲々にうたふと侍る。いかにそ聞え侍る。

七の宮人。日吉祭。曉の時も卯月なとそへられ侍るにや。難
なくや。かつへきにこそ。

五十九番

左持

基 雄

おもひいてぬ櫛葉うたふ聲ふけて天の岩戸のあけの玉垣

右

親 孝

白浪にあらはれそめし住吉の松に浦風あけわたるそら

左あけの玉かき。右あけわたる空。ともに以曉よりはあけ
過てきこえ侍り。歌合の例として。かゝる事吹毛の難なと
と申事にや。依持たるへし。

六十番

左

瑞籬のまつつ焔もほのくとしらむ庭火の明かたの影

右

貞説
明通

かつらいく世を

さへ鉢に

侍り。かちたえへし。

下句も。よくつゝき

作者

左方

前伊豫守源尚氏

勝三 持六 負一

遠江守藤原宗基

勝二 持五 負三

散位藤原基雄

勝三 持四 負三

散位神貞説

勝二 持四 負四

右京進平親祐

勝三 持五 負二

釋全藤

勝三 持六 負一

右方

伊豆守源政誠

勝二 持六 負二

大和守三善元行

勝一 持六 負三

權少僧都兼賀

勝二 持四 負四

越智康通

勝二 持四 負四

右衛門尉宮道親孝

勝三 持五 負二

豐前守平頼亮

勝四 持五 負一

地下歌合

一番

左持

泉夏栖

明充

たかむしろのへし岩ほに涼しさも猶まし水に暮すなつか

右

直定

夕日影松も命のなかれとつきぬ泉の木もとのやと

左。たか庭をいはほの上にのへ侍る事。古事なと侍るにや。
さらすは詮なし。右又松のいのちなかゝれと侍るも。何事
そや。いづれも相應しても聞えず。持とや申へからむ。

二番

左

正廣

せきなかす庭の泉やみなは川はやまもありて袖そすしき

右

良祐

瀧殿やよるさへ月にふしなれて此頃うとき間のうちかな

左。庭の泉にみなは川をとりいたされたる事ことかまし
く。右。月に臥して聞へもいらぬさま。誠に納涼にて。心引
侍る。

三番

左持

義春

すゝみとる淺瀬をふかくせきとめて結ひそなるゝ庭のやり水

右

信友

夕立のはれ間の月の影分て人やりならぬ庭のまし水

左。姿よくするゝと侍り。右。夕立の月のはれまより
出。人やりならぬなとは。その心をえす。先をろかなる心

にまかせて。左に勝の字を付侍る。

四番

左持

世のうさをおもふに似たる通路や山下水に涼とるころ

右

有盛

むすふより夏の日なみはやり水に秋の風せく松かけのやと

左の上下句。更に覺悟に不_レ及。右又させる事も侍らす。持と申へくや。

五番

左持

義直

我ならず秋をよせくとむかふらん千里を渡る庭のやり水

右

政照

袖ふれてむすふし水かもとつ葉のそよくや秋にならの夕風

左。上句は。おかしく聞えなから。下の句に。千里を渡る庭の遣水。ふと心え難し。風なとほしく侍る。右ならの葉の風にそよかん事。もとつ葉に限るへからす。これ詞の寄にや。

歌の肝要とすへき所はみえず。取合持になし侍る。

六番

左

直繁

いほしむるし水かもとの夕日影さなから秋をむすふそて哉

右持

直家

いつしかなれにし床を夏の日は清水かもとのこけの小庭

左。秋をむすふ心いかにそや。右其心あらはれ侍れは。勝へきにや。

七番

左持

宗伊

秋風もやとりけりなかり枕むすへは寒き山の井の水

右

直俊

むすふまに夏の日なみは立水や露ちる秋に庭の夕かせ

左。秋風とともにやとりをとり。右立水の露ちる秋に縁を結ふすかた。捨かたくおほえて。勝負をつけ侍らす。

八番

左持

伊忠

せきいるゝ庭の遣水袖はへてはしみに夏ををくる宿かな

右

元盛

くみあかぬし水に夏をわすれ草生る野へにやけふもくらさむ

左。袖はへての詞いかにそや。袖かけてと有たくこそ。右。忘草生る野へ。伊勢物語の歌にや。泉の題にては。庭のやり水。又瀧殿なとやよく侍らむ。野へなとは似あひても聞えず。左を勝とや申へからむ。

九番

左持

明猷

むすひきていてしとおもふ奥山に岩もるし水なかるゝもおし

右

重幸

わすれては秋とおもふ岩枕水せきなかつ庭のすゝしき

左。いてしとおもふおく山。ことかましく聞えて。下句さしたる事も侍らす。右又餘にやすく侍れは。いかゝにて勝負侍らす。

十番

左持

宗珊

ことの葉もかはす計に松かねの枕なれ行水そすゝしき

右

近員

やり水に涼しくすめる中川の宿から夏の目をやおくらむ

左。松にこと葉をかはすへき事如何。右。中川にむかしすみ
たらん人の詠したらんや。よく侍らん。さしても聞えず。又

持にこそ。

十一番

左持

桂 久

むすひよる庭のなかれに月おちて水のさなみの影そすゝしき

右

兼 統

松かけの水のさなみの玉たすき秋風かけてむすふやと哉

左の月落て。ことかまし。玉たすき又相應しても聞えず。

愚案にまかせて持になし侍る。

十二番

左(持)

親 元

清水ゆく松かね枕こけむしろなつは木陰にしく宿もなし

右

直 忠

瀧殿や消て夏とはしら淡に秋の心のわくいつみかな

左。する／＼ときこゆ。右又夏は消。秋の心のわくと侍る

も。すてかたくて。勝負をつけ侍らす。持にこそ。

十三番

左

春 清

風かよふしみつかもとの草の露なを涼しさになるゝ山かけ

右持

直 兼

中川やむすふ泉の跡とめていまもそのよにかへるなみかな

左。餘やすく侍り。右の中川の泉により。その世にかへる

浪さまよく侍りて。こゝろをよせ侍る。

十四番

左持

直 有

風をたに夏のものとて松かもとむすひそへたる水のすゝしさ

右

直 祐

涼しさは水さへすみて秋風のかよふか庭にむかふたき殿

左右さしたる風情もなし。持よく侍らむ。

十五番

左持

信 忠

すゝしさに袖うちふれて永日の暮るゝをしらぬ山の下水

右

有 員

うつりゆく日なみもはやし瀧殿に程なく落る月のみしか夜

これ又同前に侍る。

十六番

寄石戀

左持

元 盛

世のなかよ此身をしれば石の火のひかり待まを人そつれなき

右

桂 久

あひかたき石の鳥居の二はしらふたつの袖も龜井をそせく

左。石火の光まつま。電光の露なとは。ほとなきたとへに

や。石のかたは。そはにや成侍らむ。右又石の鳥居。本歌な

と侍るにや。それも鳥居計の上にて。はてたく侍り。龜井

など。ことおほくて。させる事もみえず。詮とすへき所な

し。持にこそ。

十七番

左

近 員

浪ならぬ身そあひかたき立ゐにも心をふかく沖のしら石

右持

明 猷

あふ事のかたきうらみのあまりてや思ひの山の石となるらむ

白石よりは。おもひの山の石により侍らん。結句石となり
けむよくこそ。

十八番

左

それと見よこひしなん世の後までも石にかく碑の空し我名を

右持

宗 伊

わたつみとなれる袂のしつく石うかふしほせもなき思ひかな

左の。石にかく碑。歌にはきゝならはす。きこそ侍らめ。う

らみなとには。身をすて。苔の下。三瀬川。後の世なと詠し

侍も。半は題による事にや。右の題にては。つねの石にて

難し逢事をねかはまほしくこそ。墓所の石よりも。しつく

石をとり侍らむ。

十九番

左

つれなさと思ふ心のあらそひはうちみたれ墓の石をみるにも

右持

直 祐

うき中よかゝる思ひにはかりあらは千引の石も輕しとや見ん

左の。おもふ心のあらそひ。人を思ふにあらそふへき事に

はあらす。いかにも人の心をととりてあひ見む事こそ。右

人の心のあひかたき事を。千引の石にたとへられ侍る事。

さも侍るへし。たゞ歌は。やす／＼として。姿よきを取侍

らむ。勝にこそ。

廿番

左

これそ此千引の石のうきなき人の心をいつちかもせむ

右持

良 祐

浪かゝる沖の白石さなからにしらぬ中のそての海かな

左の。いつちかもせむは。いかにとかせむの心歟。いひおほ

せられても聞えず。山にても猶うき時はいつちかもせむ

はよく侍り。人の心をいつちかもせむ如何。右勝へきにこ

そ。

廿一番

左持

かくて身の涙の水の玉かしはうかはぬえにやしつみはつへき

右

信 友

つらしとて身はおく山の石の上にすみ隔つとも忘れやはせむ

右。なみたの水の玉かしは。いかゝ侍らむ。藻にうつもるゝ

とこそ侍れ。なみたを海にもたとへ侍れは。きこそはあら

めと。作者の心に有へけれとも。それはちかひ侍り。右又人

のあはねはとて。樹下石上のすまゐ迄はけしからず。左右

持にこそ。

廿二番

左持

戀しなん我もくらへは後の世や石よりおもき罪とならまし

右

政 照

我なみた海となれとも人心ゆるきもやらぬ沖のしら石

此番さしても聞えず。同前に侍る。

廿三番

左持

白黒の石のあらそひしらは人我にはよはきこゝろともかな

右

直 俊

我中よ沖の白石しられぬをせめてはうつせ袖のうらなみ

左の白黒のあらそひ。おきの白石も耳なれ侍り。おなしほとにこそ。

廿四番

左持

重孝

せきかぬる袖にや見えむ石はしる瀧津心のあまる思ひは

右

正廣

水もらぬためしにかけよ玉かつら昔もなひく石のやま風

左。石はしる瀧なくもかなと。花の歌をこひにとりなされ侍る。いとやさしくこそ。勝侍るへし。

廿五番

左持

有員

いしなこをとる手より猶うら表見ゆる心のかはることの葉

右

直重

みよや人石もちあふ習をはありとしらす火の光哉

左右の初の五文字。そきせず。歌のさまも。同ほとにみ

ゆ。

廿六番

左

直兼

おもひ川なみたの淵の玉かしは逢瀬の浪にいつかうかはむ

右持

伊忠

うち出ていはやおもひみたれ碁の石の数々くたく心を

左の玉かしは。うかひかたし。心をくたくかたにより侍ら

ん。

廿七番

左持

策統

しらすりきうきも始めはさゝれ石やすく岩ほとなる思ひとは

右

いかてわれ手にとる石をかこみても心つよきは思ひかたまし

左。さゝれ石やすくいはほとなると侍り。一滴大海となる

たとひにや。右も其心顯れ侍り。すてかたくて勝負なし。よ

き持にや。

廿八番

左持

直定

いつまてとたえす我身をくたきても猶ひきかぬる石のかけ繩

右

直繁

我思ひ高野の山の石のむろその曉をまつちきりかな

右の歌は。釋教の題にやよく侍らん。左は申事侍らす。爲

レ勝。

廿九番

左持

有盛

かくはかり思ひあかるを石神のちかひにかけていのるなか哉

右

直有

あふ事をとへとつれなき石神のおもき心をいかゝたのまん

おもき石神よりは。かるくあかるをとり侍らん。

卅番

左持

直家

石はしる瀧津川よりはかりなきおもひの袖の波やまさらん

右

宗瑞

はかなさよ見るめも浪のおきの石に思ひあらはす袖の海かな

卅一番 名所關

左持

直重

むかしさへあれぬといひし不破の關思ひやらるゝ板ひさし哉

右

元盛

あふ坂や關のこなたの白川にまつこそむかへみちのくの山

左。第四句きゝよからず。右又。關のこなたの白川に。奥の

白川おもひ出たるにや。さしたる風情ともきこえず。持にこそ。

卅二番

左

正廣

關の名のもしにて國はおさまりぬ残るをあらせふはの山かせ

右勝

直忠

あふさかや御代の關守神心をきを杉のもとたちにして

左。關の題にて残るをあらせ。曲なき事にや。右のなをきをとり侍らむ。

卅三番

左

直繁

人の世はいく世かはりて浪なれむ月は昔も須磨の關守

右勝

政照

學ひえぬ心つくしの文字の關をろかなる身のいつかこえなむ

左。ふと心得かたくこそ。右は身にしられ侍りて。勝の字をつけ侍る。

卅四番

左勝

義直

あふさかの木の下遠きやすらひや聲のせきもる山郭公

右

信友

かり枕ねられぬ夢をいくたひかむすひかへぬる下紐の關

左。時鳥のきかまほしきに。聲の關もる。誠にさも有ぬへき

事や。右はかりねの夢みえずとて。下紐をむすひかへむもしらす。左のほとゝきすを聞侍らん。

卅五番

左持

明充

みたれつゝ又立なをるかるかやの關や世にふく風を知るらん

右

近員

春といひ秋とたち行程なきをなとかはとめぬ白川の關

左の。かるかやの關。なにともしられず。右又光陰を白川の關のとゝめん事も不審に侍り。勝負なくや。

卅六番

左

信忠

おもひやれ我身もおなしもる人のかゝるうき世に逢坂のせき

右勝

直祐

杉たてる色そさひしき逢坂や關路にかゝるゆふくれの雨

かゝるうき世にあへると侍る歌よりは。さひしく共夕暮の雨をとり侍らむ。

卅七番

左持

春清

見るからに心清見か關のとをやすくな越そ後の月かけ

右

直家

須磨の浦やもしほの煙風はらへなひくにくもる關の月影

左。關までにて戸はいらすともきこゆ。右の三の句。風はらへも。きゝにくゝ侍り。歌のさまもおなしほとにや。

卅八番

左持

桂久

音あらき不破の山風さよ更てひとり關もる弓はりの月

右 良祐

旅の空山口しるくるしきやまつ逢坂のせきの岩かと

左の弓張さしてもきこえず。右又關の岩かと。くるしからむ事も如何。同前に侍り。

卅九番

左持 明猷

和歌の浦に心をとめぬ人もなし紀の關守やいとまあるらむ

右 有眞

清見かたせき路の煙吹まよふ嵐やのほる富士の浮くも

左の下句。ふとこゝろ得かたし。いとまあるらむの詞も。ききよからず。右又關路のわつかなる煙。富士の浮くもとならむ事も。餘ことかましくきこゆ。持にや。

四十番

左持 親元

不破の山いく世の春をせきとめて岩ほにかゝる藤河の浪

右 直定

白波のたつたならねと關の名のなこそと聞は誰かこゆへき

左歌。よろしくきこゆ。右は近江の君の歌の姿。おもひいてられ侍り。左尤爲勝。

四十一番

左持 宗伊

都おもふ夜半のまぐらの山風や夢をなこそその關のせきもり

右 有盛

あるゝとも誰かいとはん人すまてひとり關もる不破のやま風

左。みやこをおもふ夢を通さぬなこそその關。さもこそ侍らめ。右の不破のせきのあるゝともたれかいとはむ。勿論の

清見かたらしほくもらて夜半の月よせくる浪の關のあら垣

右 重孝

事や侍らん。左ははるかにまさりてきこゆ。

四十二番

左持 直有

すまの浦關のたひ人とまるまで浪おりかくる夕嵐かな

右 直兼

玉はこの道のみちたる君か世に今逢坂のせきのせき守

左の歌。子細侍らす。又右も祝言なれば。すてかたくて勝負つけす侍り。

四十三番

左持 義春

逢坂や關路の月に空はれていふきにうつる風の浮雲

右 兼統

相坂やあふ人絶て關のとをすきの葉くらき夕ぐれの雨

左右のあふ坂。とりくゝに侍り。乍去杉のはくらき夕の雨よりも。いふきにうつる雲に心を引侍る。

四十四番

左 宗瑞

逢坂や關路さはらすはしり井の水も程なくすくる夕立

右持 直俊

法のみちもるや衣の關の戸をやすくはこえぬ遠の旅ひと

左はしりゐよりも。衣の關に心をそめ侍る。

四十五番

左持 伊忠

こはた山越るかち路のくるしきそもる人もなき關となるらん

右 重孝

清見かたらしほくもらて夜半の月よせくる浪の關のあら垣

右 重孝

左右の歌。とり／＼に侍る。又軸にて侍れは。勝負つけかた
く侍り。珍重々々。

判者

愚案點十首
正廣

作者

明充	勝一	負一	持三
直定	勝一	負一	持一
正廣	勝一	負三	持一
良祐	勝一	負一	持一
義春	勝三	負一	持一
信友	勝一	負一	持一
直重	勝一	負一	持三
有盛	勝一	負一	持一
義直	勝一	負一	持一
政照	勝一	負三	持二
直繁	勝一	負一	持二
直家	勝一	負一	持二
宗伊	勝一	負一	持一
直俊	勝一	負一	持一
伊忠	勝一	負一	持一
元盛	勝一	負一	持一
明猷	勝一	負一	持一
重孝	勝一	負一	持一
宗珊	勝一	負一	持一

近員	負一	持二
桂久	負一	持三
兼統	勝一	持二
親元	勝一	持一
直忠	勝一	持一
春清	勝一	持一
直兼	勝一	持一
直有	勝一	持一
直祐	勝一	持一
信忠	勝一	持一
有員	勝一	持一

了
右一帖者嵯川新右衛門尉親元以自筆之本不違一字令書寫

群書類從卷第二百十五

和歌部七十歌合卅六

前十五番歌合

公任卿撰

一番

紀貫之

櫻ちる木の下風は寒からて空にしられぬ雪ぞ降ける

凡河内躬恒

我やとの花みかてらに來る人はちりなん後そこひしかるへき

素性法師

いまこんといひし計に長月の有明の月を待出るかな

伊勢

ちりちらすきかまほしきを古郷の花みて歸る人もあはなん

在中將

世中に絶て櫻のなかりせは春の心はのとけからまし

遍昭僧正

木の露もとの雫や世中のをくれさきたつためしなるらん

壬生忠岑

春たつといふはかりにやみよしのゝ山も霞て今朝はみゆらん

大中臣能宣

千年までかきれる松もけふよりは君にひかれて萬代やへん

源公忠朝臣

行やらて山路暮しつ郭公今一聲のきかまほしさに

さ夜更てね覺さりせは郭公人傳に社きくへかりけれ
六番 堤中納言兼輔

人の親の心はやみにあらね共子を思ふみちにまよひぬる哉

土御門中納言敦忠

あふことの絶てしなくは中々に人をも身をもうらみさらまし

紀友則

夕されはさほのかはらの河風に友まとはして千鳥鳴也

藤原清正

天津風ふけ井の浦にゐる田鶴のなとか雲ゐにかへらさるへき

小野小町

色見えてうつろふ物は世中の人の心の花にそ有ける

清原元輔

秋の野の萩のにしきを我やとに鹿の音なからうつしてし哉

坂上是則

みよしのゝ山の白雪つもるらし古さと寒く成まさる也

藤原元眞

年毎に春のわかれをあはれとも人にをくるゝ人そしりける

藤原仲文

有明の月の光をまつほとにわかよのいたくふけにける哉

十番

後十五番歌合

またしらぬ古里人はけふまでにこんとたのめし我を待らん
輔 昭

十一番 琴の音に峯の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん
齋宮女御

岩はしの夜の契りも絶ぬへしあくるわひしきかつらきの神
小大君

十二番 なけきつゝ獨ぬるよのあくるまはいかに久しき物とかはしる
傳とのゝ母上

わすれしの行末まではかたけれとけふをかきりの命とも哉
帥とのゝ母上

十三番 やかすとも草はもえなん春日野をたゝ春の日に任せたらなん
源 重之

水の面にてる月なみをかそふれはこよひそ秋の最中成ける
源 順

十四番 かそふれは我身につもる年月ををくりむかふと何いそくらん
平兼盛

うくひすの驛なかりせは雪きえぬ山里いかて春をしらまし
中 務

十五番 ほのゝとあかしの浦の朝霧に鳴かくれ行舟をしそ思ふ
人 丸

和歌の浦に汐みちくれはかたをなみ芹へをさして田鶴鳴渡る
山邊赤人

一番 五月やみくらはし山の郭公おほつかなくも鳴わたるかな
實 方

限あれはけふぬきすてつふち衣はてなき物は涙也けり
道 信

二番 こよひきみいかなる里の月をみて都にたれを思ひいつらん
馬内侍

くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかに照せ山のはの月
和泉式部

三番 世中にあらましかはと思ふ人のなきはおほくも成にけるかな
藤原爲頼朝臣

夢ならて又もみるへき君ならはねられぬいをも歎かさらまし
相 如

四番 もろともに出すはこしと契りしをいかゝなりにし山のはの月
助 忠

君まつと山のは出て山の端の入まで月をななめつるかな
橋爲義朝臣

五番 こゝのへのうちまで照す月影にあれたる宿を思ひ社やれ
爲 政

行末のしるしはかりに残るへき松さへいたく老にけるかな
みちすみ

六番 引わかれ袂にかゝる菖蒲草おなしと野におひにしものを
齋院宰相

赤染衛門

我やとの松はしるしもなかりけり杉むらならは尋ねきなまし
七番 嘉時

夏の夜をまたせ／＼て郭公たゝ一聲もなき渡るかな
よしたゝ

わきもこかきませぬ宵の秋風は

八番 清少納言

よしさらはつらさは我に習ひけり頼めてこぬは誰かをしへし

いにしへのならの都の八重櫻けふこゝの重ににほひぬるかな
中宮大輔

九番 戒秀

かきつめしねたさもねたしもしほ草思はぬかたに烟たなひく

あまたみしとよのみそきの諸人の〔君しも物を思はする哉〕
寛祐

十番 兼隆

春のうちにちり積る共きよめせし花にけかるゝ宿といはせん

あし曳の山ほとゝきす里馴て〔たそかれ時に名のりすらしも〕
すけちか

十一番 爲基入道

詠むるに物思ふことのなくさむは月は浮世の外よりや行

さはへなす荒振神もをしなへてけふはなこしのはらへなり鬼
なかつふ

十二番 勝観

忍ふれはくるしかりけりしの薄あきのさかりに成やしなまし

八重むくらしけれ宿のさひしきに人社しらね秋はきにけり
惠慶

十三番 清胤僧都

君すまはとはまし物を津國のいく田の杜の秋の初風

観教法橋

水のうへに秋の山邊をうつしてははたはりひろに錦とそみる

十四番 四條中納言

春來てそ人もとひける山里は花こそ宿のあるし也けれ

あふ坂の關の岩かとふみならし山たちいつるきり原の駒
大宰貳高遠

十五番 花山院御製

木のもとを住家とすれはをのつから花みる人になりぬへき哉

世にふれは物思ふとしもなけれとも月に幾たひ詠めしつらん
中務卿具平親王

右前後十五番歌合依無類本不能校合

時代不同歌合

以古今。後撰。拾遺等作者爲左。以二後拾遺。金葉。詞花。千載。新古今等作者爲右。

作者

左方

柿本人麿
山邊赤人
中納言家持
小野篁
中納言行平
僧正遍昭
小野小町
在原業平
藤原敏行
伊勢
元良親王
素性法師
在原元方
延喜
平定文
中納言兼輔
紀友則
紀貫之
凡河內躬恒

右方

大納言經信
法性寺入道前關白太政大臣
藤原清輔朝臣
權中納言國信
皇太后宮大夫俊成
前大僧正慈圓
正三位家隆
西行法師
丹後
後京極攝政太政大臣
權中納言定家
修理大夫顯季
中院右大臣
後法性寺入道關白
大宰大貳重家
中納言俊忠
良暹法師
左京大夫顯輔
紫式部

壬生忠峯
參議等

大江千里

坂上是則

清原深養父

蟬丸

清慎公

權中納言敦忠

齊宮女御

右近

中務

源信明朝臣

謙德公

平兼盛

源順

右大將道綱母

大中臣能宣

清原元輔

源重之

高內侍

花山法皇

惠慶法師

會禰好忠

源道濟

藤原長能

藤原實方朝臣

源俊賴朝臣
一宮紀伊

參議雅經

俊惠法師

藤原範永朝臣

能因法師

崇德院

相摸

式子內親王

小式部內侍

花園左大臣

刑部卿範兼

白河院

藤原秀能

寂然法師

小侍從

祝部成仲

隆信朝臣

寂蓮法師

讚岐

後德大寺左大臣

藤原基俊

前中納言匡房

右近中將公衡

大藏卿有家
待賢門院堀川

藤原道信朝臣

大僧正行尊

中務卿具平親王

愚老

馬内侍

權中納言師時

赤染衛門

殿富門院大輔

泉式部

宮内卿

一番

左

柿本人麿

命（後略）

たつた河紅葉はなかるかみなひのみむろの山に時雨ふるらし

右

大納言經信

命（後略）

夕されはかとたのいなはをとつれてあしのまろやに秋風そ吹

二番

左

命（後略）

足引の山鳥のおのしたりおのなか／＼し夜をひとりかもねん

右

命（後略）

秋のよは衣さむしろかさねても月の光りにしくものそなき

三番

命（後略）

乙女子かそてふる山のみつかきの久しき世より思ひそめてき

左

命（後略）

おきつかせ吹にけらしな住吉の松のしつえをあらふ白浪

右

命（後略）

おきつかせ吹にけらしな住吉の松のしつえをあらふ白浪

命（後略）

おきつかせ吹にけらしな住吉の松のしつえをあらふ白浪

四番

命（後略）

おきつかせ吹にけらしな住吉の松のしつえをあらふ白浪

左

山邊赤人

命（後略）

あすからは若なつまんとしめし野に昨日もけふも雪は降つゝ

右

法性寺入道前關白太政大臣

命（後略）

連やくにつみかみのうらさひて古き宮こに月ひとりすむ

五番

左

命（後略）

も／＼しきの大宮人はいとまあれや櫻かさしてけふも暮しつ

右

命（後略）

おもひかねそなたのそらを詠むればたゝ山のはにかゝる白雲

六番

左

命（後略）

和歌の浦に汐みちくれはかたをなみ芦へをさしてたつ鳴渡る

右

命（後略）

れたの原こき出てみれば久方の雲ゐにまかふ興津白波

七番

左

命（後略）

中納言家持

右

命（後略）

藤原清輔

八番

命（後略）

たつた姫かさしのたまのをゝよはみ亂れにけりとみゆる白露

左

新古今歌上
かみなひの三室の山のくすかつら裏ふきかへす秋は來にけり

右

千載雜上
今よりは更行まてに月はみしそのことゝなく涙おちけり

九番

左

新古今冬
かさゝきのわたせる橋にをく霜の白きをみれば夜そ更にける

右

冬かれの森のくちはの霜の上にをちたる月の影のさやけさ

十番

左

小野篁

古今歌
わたの原八十嶋かけてこき出ぬと人にはつけよあまのつり舟

右

權中納言國信

新古今歌上
かすかのゝしたもえわたる草の上につれなくみゆる春の淡雪

十一番

左

古今歌下
思ひきやひなの別れに衰へてあまのなわたきいさりせんとは

右

金葉冬
なにことを待とはなしにあけられて今年もけふに成にける哉

十二番

左

新古今歌五
かすならはかゝらましやは世中にいと悲しきは賤のをたまき

右

新古今歌
山ちにてそほちにけりな白露のあかつきおきの木々の雪に

十三番

左

中納言行平

古今離別
立わかれいなはの山の峯におふるまつとしきかは今歸りこん

右

皇太后宮大夫俊成

新古今歌上
年くれし涙のつらゝとけにけりこけの袖にも春や立らん

十四番

左

古今離下
わくらはに訪人あらはすまの浦に藻鹽たれつゝわふと答へよ

右

新古今歌
立かへりまたもきてみむ松嶋やをしまのとまや浪にあらすな

十五番

左

後醍醐一
さかの山みゆきたえにしせり河のちよのふる道あとは有けり

右

千載雜中
世中よみちこそなけれ思ひいる山のおくにも鹿ぞ鳴なる

十六番

左

僧正遍昭

後撰六中

いそのかみふるのやまへの櫻花うへけんときを知人そなき

右

前大僧正慈圓

拾下第五

そむれともちらぬたもとに時雨きて猶色深き神な月かな

十七番

左

古今百集

みな人は花の衣に成ぬなりこけのたもとよかはきたにせよ

右

千載中

おほけなく浮世のたみにおほふかな我たつそまに墨染の袖

十八番

左

新古今百集

木の露もとのしつくや世の中のおくれさきたつためし成らむ

右

新古今百集

願はくはしはし蘭路にやすらひてかゝけやせましのりの燈火

十九番

左

小野小町

古今集下

花の色は移りにけりないたつらに我身よにふる詠めせしまに

右

正三位家隆

新古今集下

したもみちかつちる山の夕時雨ぬれてや鹿のひとり鳴らん

廿番

左

古今集五

色みえてうつろふものは世中の人の心の花にそ有ける

右

新古今集上

松のとををしあけかたの山風に雲もかゝらぬ月をみる哉

廿一番

左

後撰一

あまのすむ浦こく舟のかちをなみよをうみ渡る我そはかなき

右

新古今集二

ふしのねの煙もなをそ立のほる上へなきものは思ひ成けり

廿二番

左

古今集五

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身一つはもとの身にして

右

新古今集上

ふりつみしたかねのみ雪とけにけりきよたき河の水の白波

廿三番

左

古今集下

たかみそき夕つけ鳥そから衣たつたの山におりはへてなく

右

古今集

新古今集

秋しのや外山の里やしくるらむ生駒のたけに雲のかゝれる

廿四番

在原業平

西行法師

よみ人しらす

左

いとしく過行かたのこひしきにうら山しくも歸るなみかな

右

千載巻五
なけゝとて月やはものをおもはするかこちかほなる我涙かな

廿五番

左

藤原敏行

古今巻上
秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にそ驚ろかれぬる

右

丹 後

新古今巻上
わすれしなにはの秋のよはの空こと浦にすむ月はみるとも

廿六番

左

古今巻上
秋萩の花さきにけり高砂のをのへのはかは今や鳴らむ

右

新古今巻上
おほつかな宮こにすまぬ都鳥ことゝふ人にいかゝこたへし

廿七番

左

古今巻三
明ぬとてかへる道にはこきたれて雨も泪もふりそほちつゝ

右

新古今巻下
なにとなくきは涙そこほれぬるこけの袂にかよふ松かせ

廿八番

左

古今巻五
あひにあひて物思ふ比の我袖にやとる月さへぬるゝかほなる

右

新古今巻上
ふるさとのもとあらの小萩咲しよりよなゝ庭の月そ移ろふ

廿九番

左

古今巻五
三輪の山いかに待みむ年ふとも尋ぬる人もあらしとおもへは

右

新古今巻上
たくへくる松の嵐やたゆむらんおのへにかへるさを鹿の聲

卅番

左

後撰巻一
思ひ河たえす流るゝ水のあはのうたかた人にあはてきえめや

右

新古今巻二
もらすなよ雲ある峯のはつ時雨このはゝしたに色かはるとも

卅一番

左

後撰巻下
花の色はむかしなからにみし人の心のみこそうつろひにけれ

右

新古今巻上
さむしるやまつよの秋の風ふけて月をかたしくうちの橋姫

卅二番

伊 勢

後京極攝政太政大臣良經

元良親王

権中納言定家

左

巻頭第一
あふことは遠山とりのかり衣きてはかひなきねをのみそなく

右

新古今秋下
ひとりぬる山鳥のおのしたりおにしもをきまよふとこの月影

卅三番

左

(巻頭第五)
わひぬれは今ほたおなし難波なる身を盡してもあはむと思

右

新古今開四
きえわひぬうつろふ人の秋の色に身をこからの森の下露

卅四番

左

古今集上
我のみやあはれと思はん葎なくゆふかけのやまとてしこ

右

素性法師
修理大夫顯季

金巻秋
大井河いせきの昔のなかりせは紅葉をしけるわたりとやみむ

卅五番

左

古今集一
をとにのみ菊の白露よるはをきて寒は思ひにあへすけぬへし

右

所古今集
松かねにおはなかりしきよもすからかたしく袖に雪は降つゝ

卅六番

左

古今集四
今こんといひし計りに長月の有明の月を待出るかな

右

千載集二
嬉しくはのちの心を神もきけひくしめ縄のたえしと思ふ

卅七番

左

古今集下
霞たつ春のやまへはとをけれと吹來る風は花のかそする

右

千載集上
尋ね來てたおる櫻の朝露に花の袂のぬれぬひそなき

卅八番

左

古今集一
をと山をとにきゝつゝあふ坂の關のこなたにとしをふる哉

右

新古今集
ありすかはおなしなかれはかはらねとみしや昔の影ぞ忘れぬ

卅九番

左

古今集一
たちかへりあはれと思ふよそにても人に心を興津白なみ

右

金巻集上
あふことはいつとなきさの濱千鳥波のたちゐに音をのみそ鳴

卅番

左

延喜

足引の山郭公けふとてやあやめの草のねにたてゝなく

右

後法性寺入道關白

夕されはをのゝあさちふたまちりて心くたくる風の音かな

冊一番

左

むらさきの色に心はあらねともふかくそ人と思ひそめぬる

右

しのふるに心のひまはなけれ共なをもるものはなみた也けり

冊二番

左

はかなくもあけにけるかな朝露のをきての後そきえ増りける

右

なからへてかはる心をみるよりはあふに命をかへてましかは

冊三番

左

まくらより又しる人もなき戀を泪せきあへすもらしつるかな

右

をはつせの花のさかりを見わたせは霞にまかふ峯のしら雲

冊四番

左

後法性寺

右

昔せしわかかね言のかなしきはいかに契りしなこりなるらん

かたみとてみれば歎きのふかみ草になかゝの匂ひ也らん

冊五番

左

ありはてぬ命まつまの程たにもうきことしけくおもはすも哉

右

のちのよをなけく涙といひなしてしほりやせまし霰染の袖

冊六番

左

みしかよの更行まゝに高砂のみねの松風吹かとそきく

右

さらてたに露けきさかののへにきて昔のあとにしほれぬる哉

冊七番

左

あふさかのこのした露にぬれしより我衣手は今もかはかず

右

わか戀はあまのかるもに亂れつゝかはくときなき波の下草

冊八番

左

みかの原わきて流るゝ泉川いつみきとてか戀ひしかるらん

右

千載題上
岩おろすかたこそなけれいせの海のしほせにかゝる蟹の釣舟

卅九番

左

紀友則

古今題二
ゆふされは蟹よりけにもゆれとも光りみねはや人のつれなき

右

良遍法師

古今題一
たつねつる花も我身もおとろへて後の春ともえこそ契らね

五十番

左

古今題一
東路のさやのなか山なか／＼になにしかひとを思ひそめけん

右

後拾遺上
淋しさにやとを立出てなかむれはいつもおなし秋のゆふ暮

五十一番

左

(はな古今)

古今題二
したにのみこふるもくるし玉のをの絶て亂れん人なとかめそ

右

新古今全
今はとてねなましものを時雨つる空ともみえすすめる月かな

五十二番

左

紀貫之

古今題下
しら露も時雨もいたくもる山はしたは残らず色つきにけり

右

左京大夫顯輔

千載題上
かつらきやたかまの山の櫻花雲井のよそにみてやすきなん

五十三番

左

古今題別
むすぶての紫ににこる山の井のあかても人に分れぬるかな

右

今世題上
あふとみてうつゝのかひはなけれ共はかなき夢そ命也ける

五十四番

左

古今題一
吉野川岩波たかくゆく水のはやくそ人をおもひそめてし

右

千載題一
思へともいはての山に年をへてくちやはてなん谷のむれ木

五十五番

左

凡河内躬恒

後拾遺上
いつくとも春の光はわかなくにまたみよしのゝ山は雪ふる

右

紫式部

後拾遺上
みよしのは春のけしきにかすめとも結ばれたる雪の下草

五十六番

左

後拾遺秋
住吉の松を秋風吹からにこゑうちそふるおきつしらなみ

右

千載題別
なきよはる籬のむしもとめかたき秋のわかれや悲しかるらん

五十七番

左

後藤三
いせの海に鹽やくあまのふち衣なるとはすれとあはぬ君かな

右

新古今卷中
みし人のけふりとなりし夕へよりなもむつまじき鹽かまの浦

五十八番

左

吟道を讀
春たつといふはかりにやみよし野の山も霞てけさはみゆらん

右

壬生忠峯
源俊賴朝臣

金歌三
山櫻咲そめしより久方の雲ゐにみゆる瀧のしら糸

五十九番

左

後藤三
夢よりもはかなき物は夏の夜のかつきかたの別れ也けり

右

手鏡一
うかりける人を初瀬の山おろしよはけしかれとは祈らぬ物を

六十番

左

古今三
有明のつれなくみえし別れよりあかつきはかりうき物はなし

右

金歌三
思ひ草葉末にむすぶ白露のたま／＼きてはてにもたまらず

六十一番

左

後藤三
浅ちふのをのゝ篠原しのふれとあまりてなとか人の戀しき

右

新古今卷上
置露もしつ心なく秋風に亂れてさけるまのゝはき原

六十二番

左

後藤三
かけろふのみしはかりにや濱千鳥行衛もしらぬ道にまとはん

右

新古今多
浦風の吹あけにたてる濱千鳥波立くらしよはに鳴く也

六十三番

左

後藤三
東路のさのゝふなはしかけてのみおもひ渡るを知人そなき

右

金歌三
音にきくたかしの濱のあた浪はかけしや袖のぬれもこそすれ

六十四番

左

古今秋上
月みれはちゝに物こそ悲しけれ我みひとつの秋にはあらねと

右

新古今秋下
秋の夜の月にいくたひ詠めして物おもふことの身に積るらん

六十五番

左

參議等

一宮紀伊

大江千里

參議雅經

古今異曲
紅葉はを風にまかせてみるよりもはかなき物は命也けり

右

新古今上
花すゝき草の袂をかりそなく涙の露やをきところなき

六十六番

左

古今三
けさはしもおきつる方もしらさりつ思ひ出るを悲しかりける

右

新古今上
恨みしななにはのみつに立けふり心からやくあまのもしほ火

六十七番

左

古今冬
みよし野の山のしら雪つもるらしふる里寒く成まさる也

右

新古今上
春といへは霞にけりなきのふまてなみまにみえしあはち嶋山

六十八番

左

古今冬
朝ほらけ有明の月とみるまでに吉野の里にふれる白雪

右

千載歌
もしほ草しきつの浦のねさめには時雨にのみや袖はぬれける

六十九番

左

新古今上
をしがふす夏のゝ草のみちをなみしけき戀ちにまとふ比かな

右

千載四
思ひかね猶戀ちにそかへりぬるうらみは末もとをらさりけり

七十番

左

古今夏
夏のよはまたよひなから明ぬるを雲のいつこに月やとるらん

右

(詞花春)
散花もあはれとやみむいそのかみなりはつるまでおしむ心を

七十一番

左

古今下
光なきたにゝは春もよそなれはさきてとく散る物思ひもなし

右

後拾遺上
すむひともしなき山里の秋のよは月の光りもさひしかりけり

七十二番

左

新古今上
嬉しくは忘るゝ事もありなましつらきそなかきかたみ也ける

右

千載歌
あり明の月もしみつにやとりけり今宵はこえし逢坂の關

七十三番

左

後拾遺一
これやこのゆくもかへるも別れつゝ知もしらぬもあふ坂の關

右

能因法師

蟬 丸

新古今集

夕されはしほ風こしてみちのくのたの玉河千鳥鳴也
七十四番

左

新古今集下
世中はとてもかくてもありぬへし宮も薬屋もはてしなけれは

右

新古今集
命あれはことしの秋も月はみつわかれし人にあふよなきかな

七十五番

左

新古今集下
秋かせになひくあさちの末ことにをく白露のあはれよの中

右

後拾遺歌
みやこをは霞とともにたちしかと秋風そ吹く白河のせき

七十六番

左

後拾遺歌三
今さらに思ひいてしと忍ふるをこひしきにこそ忘れわひぬれ

右

千載春上
尋ねつる花のあたりに成にけりにほふにしろし春の山風

七十七番

左

拾遺歌一
人しれぬ思ひは年をへにけれと我のみしるはかひなかりけり

右

新古今集下
うたゝねはおきふく風におとろけと長き夢ちそさむる時なき

七十八番

左

拾遺歌一
あなこひしはつかに人を水の泡のきえ返る共しらせてしかな

右

詞花集上
せを速み岩にせかるゝたき川のわれても末にあはんとそ思ふ

七十九番

左

後拾遺歌
物おもふとすくる月日もしらぬまに今年もけふに成にける哉

右

後拾遺歌
五月雨はみつのみまきの眞菰草かりほす暇もあらしと思ふ

八十番

左

後拾遺歌五
いせの海のちひろの濱に拾ふとも今はなにてふかひか有へき

右

後拾遺歌二
諸共にいつかとくへきあふことのかた結ひなるよはのした紐

八十一番

左

拾遺歌一
身にしみて思ふ心の年ふれはつるに色にもいてぬへきかな

右

後拾遺歌四
恨みわひほさぬ袖たにある物を戀にくちななこそおしけれ

八十二番

左

齊宮女御

新古今集
袖にさへ秋の夕はしられけりきえしあさちかつゆをかけつゝ

右

式子内親王

新古今集上
眺めわひぬ秋よりほかの宿もかなのにも山にも月やすむらん

八十三番

左

新古今集三
なれ行は浮世なれはやすまの蜚のしほやき衣まとをなるらん

右

新古今集下
ちたひうつ砧のをとに夢さめて物おもふ袖の露そくたくる

八十四番

左

新古今集五
見る夢にうつゝのうさもわすられて思ひ慰むほとそはかなき

右

新古今集四
いきてよもあすまで人はつらからし此夕暮をとほとへかし

八十五番

左

後撰集下
おほかたの秋のそらたに悲しきに物思ひそふきのふけふかな

右

新古今集
思ひ出てたれをか人のたつねましうきにたへたる命ならすは

八十六番

左

後撰集六

あふことを待に月日はこゆるきの磯にいてゝや今はうらみん

後撰集三

しぬ計り歎きに社は歎きしかいきてとふへき身にしあらねは

八十七番

左

拾遺集四
わすらるゝ身をは思はすちかひてし人の命のおしくも有かな

右

金葉集上
大江山いくのゝ道のとをければまたふみもみす天のはしたて

八十八番

左

後撰集四
秋風の吹につけてもとはぬ哉おきのはならは音はしてまし

右

金葉集
ちらぬまは花をもみてもすきぬへき春より外に知人もかな

八十九番

左

後撰集五
ありしたにうかりし物をあかすて幾程そふるつらさなる覧

右

金葉集
春はおし人はこよひと頼むれは思ひわつらふけふのくれかな

九十番

拾遺集四

うきなからきえぬ物は身なりけり羨しきは水のあは哉

中 務

花園左大臣

〔後のイ〕

〔はイ〕

〔いつこにイ〕

覧

右

新古今體一
我戀はいまはいろにや出なまし軒のしのふも紅葉しにけり

九十一番

左

後拾遺下
あたらの月と花とをおなしくは心しれらん人にみせはや
(あはれイ) 源信明朝臣

右

新古今體
君か代にあへるはたれもうれしきを花は色にも出にける哉 刑部卿範兼

九十二番

左

新古今體
ほのくくと有明の月の月かけに紅葉吹おろす山おろしの風

右

千載體四
月待と人にはいひてなかわれはなくさめかたき夕暮の空

九十三番

左

新古今體
物をのみおもふね覺のまくらには涙かゝらぬ曉そなき

右

新古今體五
忘れゆくひとゆへ空を眺むれはたえくにごそ雲もみえけれ

九十四番

左

冷遺體五
哀ともいふへき人はおもほえて身のいたつらに也ぬへき哉

右

謙徳公
白河院

新古今體

庭の面は月もらぬまてなりにけり梢に夏のかけしけりつゝ

九十五番

左

新古今體三
かきりなく結ひをきつる草枕いつこのたひを思ひわすれん

右

後拾遺冬
大井河ふるきなかれを尋ねきて嵐の山の紅葉をそみる

九十六番

左

新古今體三
悲しきも哀れもたくひあるものを人にふるさぬことのはも哉
(多かるをイ)

右

後拾遺體一
あふさかのなをもたのまし戀すれと關のし水に袖はぬれけり
(ハイ)

九十七番

左

冷遺體
くれて行秋のかたみにをくものは我もとゆひの霜にそ有ける

右

平兼盛
藤原秀能

九十八番

左

冷遺體
たよりあらはいかて都につけやらむけふ白河の關はこえぬと
(ヘイ)

右

新古今體
露をたに今はかたみのふちころもあたにも袖を吹嵐かな

九十九番

左

拾遺集一
忍ふれといろにいてにけり我戀はものや思ふと人のとふまで

右

新古今集三
もしほやくあまのとまやの夕煙たつ名もくるし思ひたえなて

百番

左

源 順

拾遺集
春ふかみゐての河波立かへりみてこそゆかめ山ふきの花

右

寂然法師

千載集上
秋は來ぬ年もなかはに過ぬとや萩吹風のおとろかすらん

百一番

左

拾遺集
水の面にてる月なみをかそふれは今宵そ秋の寂申也ける

右

新古今集
けふくれぬ命もしかとおとろかす入相の鐘のこゑそかなしき

百二番

左

拾遺集
名をきけは昔なからの山なれとしくるゝ秋は色まさりけり

右

新古今集
背かすは孰れの下にか廻りあひて思ひけりとも人にしられん

百三番

左

拾遺集四
歎きつゝ獨りぬるよのあくるまはいかに久しき物とかはしる

右

小侍 從

新勅撰集下
いくめくりすき行あきにあひぬらんかはらぬ月の影を詠めて

百四番

左

新古今集四
たえぬるか影たにみえはとふへきを形見の水はみ草ゐにけり

右

新勅撰集三
雲となり雨となりても身にそはゝ空しき空をかたみとやみん

百五番

左

新古今集四
吹風につけてもとはんさゝかにのかよひし道は空にたゆとも

右

新古今集三
つらきをも恨みぬ我にならふなようきみをしらぬ人も社あれ

百六番

左

拾遺集
きのふまでよそに思ひしあやめ草けふ我宿の妻とみるかな

右

祝部 成仲

千載集下
立田山ふもとのさとは遠けれと嵐のつてに紅葉をそみる

百七番

左

御魚もり衛士のたくひのよるはもえ盡はきえつゝ物を社思へ

右

あふさかの關には人もなかりけり岩まの水のもるにまかせて

百八番

左

我ならぬ人に心をつくは山したにかよはむ道たにやなき

右

あけくれば昔をのみそしのふくさ葉末の露に袖ぬらしつゝ

百九番

左

契りきなかたみに袖をしほりつゝ末のまつ山波こさしとは

右

うきねするいなのみなとにきこゆなり鹿のねおろす峯の松風

百十番

左

大井河井堰の水のわくらはにけふは頼めしくれにやあるらん

右

たれとしもしらぬわかれの悲しきはまつらのおきを出る舟人

百十一番

左

うしとてもよをひたすらに厭はねは物思ひしらぬ身とや也南

右

われゆへの泪とたれもよそにみはあはれ成へき袖の上哉

百十二番

左

夏かりの玉江のあしをふみしたきむれゐる鳥の立空そなき

右

かつらきや高間のさくら咲にけり立田のおくにかゝる白雲

百十三番

左

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくたけて物を思ふ比哉

右

恨みわひまたしいまはの身なれ共思ひなれにし夕暮の空

百十四番

左

筑波山はやましけ山しけゝれと思ひいるにはさはらさりけり

右

淋しきにうきよをかへて忍はすはひとりきくへき松の風かは

百十五番

左

夢とのみおもひなれにし世中をなに今さらにおとるかすらん

右

讃岐

高内侍

新古今歌下
ちりかゝるもみちの色は深けれと渡れはにこる山河の水
百十六番

左
後合遺歌
獨ぬるひとや知るらむ秋のよをなかしとたれか君につけゝん
(つるい)

右

こふれともみぬめの浦のうき枕波にのみやは袖のぬれける
(はい)

百十七番

左

新古今歌三
忘れしの行末まではかたければけふをかきりの命とも哉

右

千載歌四
一よとてよかれし床のさむしろにやかても塵の積りぬるかな

百十八番

左

花山法皇

秋のよの月に心のあくかれて雲井にものを思ふころかな

右

後徳大寺左大臣

新古今歌
郭公鳴つるかたをなかわれはたゝ有明の月そのこれる

百十九番

左

後合遺歌
旅の空よはの煙とのほりなほあまのもしほひたくかとやみむ

右

新古今歌四
うき人の月はなにそのゆかりそと思ひなからもち眺めつゝ

百二十番

左

新古今歌三
朝ほらけをきつる霜のきえかへり暮待ほと袖をみせはや

右

千載歌五
はかなくもこんよをかねて契る哉二たひ同し身とはならしを
(はい)

百二十一番

左

新古今歌
我宿のそとにたてる櫓のはのしけみにすゝむ夏はきにけり

右

藤原其俊

金瓶歌
夏のよの月まつほとのでてすきみに岩もる清水いくむすひしつ
(はい)

百二十二番

左

於遺歌
やへむくらしけれる宿の淋しきに人こそみえね秋はきにけり

右

百二十三番

左

於遺歌
天の原空さへさえや渡るらむこほりとみゆる冬のよの月

右

新古今歌三
且みれば猶そ戀しきわきもこかゆつのつま櫛いつかさゝまし
(はい)

百二十四番

左

曾禰好忠

詞化能に
かりにくとうらみし人のたえにしを草はにつけて忍ぶ頃哉

右

前中納言匡房

後拾遺歌下
高砂の尾上の櫻咲にけりとやまの霞たゝすもあらなん

百二十五番

左

今讀秋
神なみのみむろつ山をけふみれは下草かけて色付にけり

右

金葉多
はしたかの白ふに色やまかふらんとかへる山に霞ふるなり

百二十六番

左

新古今秋下
入日さすさほの山へのはゝそはら曇らぬ雨とこのはふりつゝ

右

新古今秋
風寒みいせの濱おき分行は衣かりかね波になくなり

百二十七番

左

源道濟

金葉多
ぬれゝもなをかりゆかんはし鷹のうはけの雪を打拂ひつゝ

右

右近中將公衡

新古今冬
狩くらしかたのゝましはおりしきて淀の河せの月をみるかな

百二十八番

左

詞化能に
思ひかねわかれしのへをきてみればあさちか原に秋風そふく

右

千載歌二
ますかゝみ心もうつる物ならはさりと今のはあはれとやみん

百二十九番

左

後拾遺歌一
身をすてゝ深き淵にもいりぬへしそこの心のしらまほしきに

右

新古今冬
思ひねの我のみかよふ夢ちにもあひみて歸るあかつきそなき

百三十番

左

藤原長能

新古今秋上
日くらしの鳴く夕暮そうかりけるいつも盡せぬ思ひなれとも

右

大藏卿有家

新古今春上
朝日かけにほへる山の櫻花つれなくきえぬ雪かとそ見る

百三十一番

左

詞花多
あられ降かたのゝみのゝかり衣ぬれぬ宿かす人しなけれは

右

新古今雜中
久かたのあまつをとめか夏衣雲ゐにさらす布引の瀧

百三十二番

左

後拾遺歌四
我心かはらむ物かかはらやのしたゝくけふりしたむせひつゝ

右

新古今體四
物おもはてたゝおほかたの露にたにぬるれはぬるゝ秋の袂を

百三十三番

左

新古今體四
藤原實方朝臣
濃染のころもうき世の花さかりおりわすれてもおりてける哉

右

千載春上
待賢門院堀河
雪ふかきいはのかけみちあとたゆる芳野の里も春はきにけり

百三十四番

左

後拾遺體二
浦風になひきにけりな里のあまのたくものけふり心よはくも
(さほ)

右

千載體一
あらいその岩にくたくる波なれやつれなき人にかくる心は

百三十五番

左

關花體上
いかてかは思ひありともしらすへき室のやしまの煙ならては

右

千載體五
うき人を忍ふへしとは思ひきや我心さへなとかはるらん

百三十六番

左

新古今體下
藤原道信朝臣
秋はつるさよふけかたのつきみれは袖も残らす露をおきける

右

大僧正行章

新古今體上
春くれは袖の氷りもとけにけりもりくる月の宿るはかりに

百三十七番

左

冷遺體傷
かきりあればけふぬきすてつふち衣はてなきものは涙也けり

右

金葉體上
もろともにあはれと思へ山櫻花よりほかに知人もなし

百三十八番

左

後拾遺體二
明ぬれはくるゝ物とはしりなからなを恨めしき朝ほらけかな

右

金葉體上
草の庵をなに露けしと思ひけんもらぬいはやも袖はぬれけり

百三十九番

左

千載春下
命あらは又もあひみむ春なれとしのひかたくて暮すけふ哉
中務卿具平親王

愚老

新古今體下
櫻さく遠山鳥のしたりおのなかゝし日もあかぬ色哉

百四十番

左

新古今體上
夕暮はおき吹風の音まさるいまはたいかにね覺せられん

右

新古今體上
秋の露やたもとにいたくむすふらん長きよあかすやとる月哉

百四十一番

左

拾遺上
よにふれは物思ふとしもなけれ共月に幾たひなめしつらん

右

新古今四
袖の露もあらぬ色にそきえかへる移れはかはる眺めせしまに

百四十二番

左

千載多
ねさめしてたれかきくらむ此比の木葉にかゝるよはの時雨を

右

新勅書下
立かへり又やとはまし山風に花ちる里の人のこゝろを

百四十三番

左

後拾遺一
いかなれは知らぬにおふるうきぬなは苦しや心人しれすのみ

右

千載四
立歸る人をもなにか恨みましこひしさをたにとゝめさりせば

百四十四番

左

新古今三
あふことはこれやかきりの旅ならむ草の枕も霜かれにけり

右

新古今一
追風にやへの鹽路をこく舟のほのかにたにもあひみてしかな

百四十五番

詞花上 左

神な月有明の月の時雨るゝをまた我ならぬ人やみるらん

右

新古今春下
花もまたわかれん春を思ひ出よ咲ちるたひの心盡しを

百四十六番

左

後拾遺三
やすらはてねなまし物をさよふけてかたふく迄の月をみし哉

右

新勅書一
今はとてみさらむ秋の末までも思へはかなしよはの月かけ

百四十七番

左

新古今上
五月雨の空たにすめる月影に涙の雨のはるゝまもなし

右

後拾遺一
きえぬへき露の我身の置ところいつれののへの草は成らん

百四十八番

左

拾遺哀傷
くらきよりくらき道にそ入ぬへきはるかに照せ山ののはの月

右

新古今秋上
色かへぬ竹のはしるく月さえてつもらぬ雪をはらふ秋風

百四十九番

左

赤染衛門

殷富門院大輔

宮内卿

泉式部

宮内卿

宮内卿

宮内卿

宮内卿

宮内卿

宮内卿

宮内卿

もろともに苔の下にはくちすして埋もれぬるをみるそ悲しき

右

霜をまつまかきの菊の雪のまに置まよふ色や山のはの月

百五十番

左

物思へはさはの螢も我身よりあくかれ出る玉かとそみる

右

からにしき秋のかたみや龍田山ちりあへぬ枝にあらしく也

右時代不同歌合以百花庵宗固本校合

新時代不同歌合上

作者

左自萬葉集至金葉集
右自詞花集至續古今集

左

大納言族人

天智天皇

坂上郎女

惟喬親王

文屋康秀

大伴黑主

兼覽王

光孝天王

在原棟梁

源宗千朝臣

三條右大臣方公

藤原興風

天曆御門

太宰大貳高遠

壬生忠見

源公忠朝臣

祭主輔親

西宮左大臣高朝公

本院侍從

右

大納言忠良

光明寺攝政左大臣道家公

八條院高倉

惟明親王

正三位知家

鴨長明

鎌倉右大臣朝公

土御門院

民部卿成範

從三位賴政

西園寺太政大臣公經公

藤原信實朝臣

順德院

大納言通具

藤原隆祐朝臣家隆息

藤原光俊朝臣

法橋顯昭

雅成親王

新院弁内侍

小太付

藤原高光

藤原義孝

大納言公任

安法法師

清少納言

大納言隆房

俊成卿女

中納言典侍

前内大臣源家

源師光

大納言基良

一番

左

橋の花散さとの時鳥かたらひし、なかなぬ日もなし
(こゑ)
こゝにありてつくしやいつこ白雲の棚ひく山の西にあるらし
いさやこらかしゐの方に自妙の袖さへぬれて朝なつみてん

大納言旅人

右

あふち吹外面の木かけ露おちて五月雨はるゝ風わたる也
夕つくひさすや庵の柴の戸にさひしくも有か目くらしのこゑ
たのめ置しあさちか露に秋かけてこのはふりしく庭の通路
二番

大納言忠良

左

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手はつゆにぬれつゝ
梓弓ひきのゝつゝらすゑつゐにわか思ふ人にことのしけゝむ
朝倉や木のまるとのに我をればなのりをしつゝ行はたかこそ
有
光明寺攝政左大臣

天智天皇

音羽川瀧のみなかみ雪きえてあさひにいつる水のしら浪
いせ嶋やわか松はら見わたせはゆふしほかけて秋風そふく
いかにせん袖より外にもる山の下草かけて色に出なは
三番

左

こもりくの初瀬の山はいろつきぬ時雨の雨はふりにけらしも
しかのあまの釣にともせる漁火のほのかに人をみるよしも哉
鹽みては入ぬる磯の草なれや見らく少なくこふらくのおほき
有
八條院高倉

神なひのみむろの梢いかならんへての山も時雨ふるころ
曇れかしなかわるからにかなしきは月に覺ゆる人のおもかけ
いかゝふく身に入いろのかはる哉たのむる暮のまつ風のこゑ
四番

左

櫻花ちらはちらなんちらすとて故郷人のきてもみなく
夢かともなにか思はん浮世をはそむかきりけん程そくやしき
白雲のたえすたなひく峯にたにすめはすみぬるよに社有けれ
有
惟親王

左

鶯のなみたのつらうちとけてふる巢なから春をしるらん
み山邊のまつ梢を渡るなりあらしにやとる小男鹿のこゑ
さのみやは人の心にまかすへきわするゝ草のたねをしらはや
五番
文屋康秀

右

春の日の光りにあたる我なれとかしらの雪となるそわひしき
吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん
草深きかすみの谷にかけかくし照日の暮しけふにやはあらぬ
有
正三位知家
神無月しくゝ頃といふことはまなく木の葉のふれは成けり
むさしのは行末ちかくなりけり今夜そみつる山のはの月
あふ坂のゆふつけ鳥も我ことやこえ行人のあとに鳴らん

六番

左

大伴黒主

春雨のふるはなみたかさくら花散をおしまぬ人しなけれは
思ひ出てこひしきときは初鷹の鳴てわたると人は知らずや
鏡山いさ立よりてみてゆかかん年へぬる身は老やしぬると

右

鴨長明

なかむれは千々に物思ふ月に又我身ひとつの峯の松風
袖にしも月やとれとは契りをかす涙はしるやうつ山のこえ
まくらとていつれの草にちきるらん行をかきりの野への夕暮
七番

左

兼覽王

立田姫たむくる神のあれはこそ秋の木葉のぬさとちるらめ
雨やまぬ軒の玉みつかすしらすこひしき事のまさる頃かな
あし引の山したしけくはふ葛のうらみてこふる我としらすや

右

鎌倉右大臣

和田の原八重のしほちにとふ雁のつはさの波に秋風そふく
秋はいぬ風にこのはのちりはてゝ山さひしかる冬はきにけり
夕されはしほかせさむし波間よりみゆる小嶋に雪は降つゝ
八番

左

光孝天皇

君かため春の野にいてゝわかなつむ我ころもてに雪は降つゝ
逢すしてふる頃ほひのあまたあれははるけき空に詠をそする
君かせぬわか手枕は草なれや涙のつゆのよなゝそをく

右

土御門院

伊せの海の天の原なる朝霞そらに鹽やくけふりとそみる
みわたせは松もまはらに成にけり遠山さくら咲にけらしも

憂世にはかゝれとてこそ生れけめことはりしらぬ我なみた哉
九番

左

在原棟梁

春たてと花も匂はぬ山里はものうかるねにうくひすそなく
秋ののゝ草の袂か花すゝきほにいてゝまねく袖とみゆらん
わか戀の數にしとらは白妙のはまの眞砂はつきぬへら也

右

民部卿成範

古郷の花にむかしの事とはゝいくよの人のこゝろしらまし
あらし吹はゝその森をけさみれは木するより社冬はきにけれ
鳥へ山おもひやるこそ悲しけれひとりや苔の下にくつらん
十番

左

源宗千朝臣

常磐なる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり
山里は冬そさひしきまさりける人めも草もかれぬと思へは
東路のさやの中山なかゝにあひみて後そ戀しかりける

右

從三位頼政

太山木のその梢とも見えさりし櫻は花にあらはれにけり
住吉の松のこまよりなかわれは月落かゝるあはちしまやま
人はいさあかね夜ことにとゝめつる我心こそわれを待らめ
十一番

左

三條右大臣

秋ならてあふ事かたき女郎花あまのかはらにおひぬ物ゆへ
名にしおはゝ逢坂山のさねかつら人に知られてくるよしも哉
春ことに花はちるとも咲ぬへしまたあひかたき人のよそうき

右

西園寺太政大臣

高せさす六田の淀の柳はらみとりもふかく霞むはる哉

かつらきや花吹わたす春風にとたえもみえぬ糸の岩はし
なにと又まぐらのちりを拂ふらん習ひなき身のねやの秋風
十二番

左

藤原興風

いたつらにすくる月日はおもほえて花みて暮す春をすくなき
ちきりけん心そつらき七夕のとしに一たひあふはあふかは
たれをかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

右

藤原信實朝臣

くもれとは思はぬ物を秋の夜の月に涙のなとこほるらん
下おれの音のみ杉のしるしにて雪のそこなる三輪の山本
里遠みしほやく浦はみえわけてけふりにかゝるおきつ白なみ
十三番

左

天曆御門

今宵さへよそにやきかむわかため天の河原は渡るせもなし
ふるほともなくてきえぬる白雪は人によそへて悲しかりけり
ねられねは夢とも見えす春の夜を明しかねつる身社つられけり

右

順徳院

秋風にまたこそとはめ津の國の生田のもりの春の明ほの
いかばかり麓の里の時雨らん遠山うすくかゝるむら雲
百敷やふるき軒はの忍ふにも猶あまりあるむかし也けり
十四番

左

太宰大貳高遠

うちなひき春はきにけり青柳のかけふむ道に人のやするふ
しら雲のかゝれる山と見えつるはこほれて花の匂ふなりけり
浦風にもの思ふとしはなけれとも波のよる社ねられきりけれ

右

大納言通具

あはれ又いかに忍はん袖の露野はらのかせに秋はきにけり
霜こほる袖にも影はやとりけり露よりなれし有明の月
我戀はあふをかきりのたのみにたに行衛もしらぬ空のうき雲
十五番

左

壬生忠見

やかすとも草はもえなん春日のをたゝ春の日に任せたら南
さよふけてね覺さりせは時鳥人つてにこそ聞へかりけれ
戀すてふ我名はまたき立にけり人しれすこそ思ひそめしか

右

藤原隆祐朝臣

かきりあはれはかすまぬ浦の波間より心ときゆる蟹の釣舟
かつらきやたかまの雲をにほひにてまかひし花の色に移ろふ
けふは猶宮古も近しあふ坂の關のあなたに知人もかな
十六番

左

源公忠朝臣

とのもりのとものみやつこ心あらは此春はかり朝きよめすな
行やらて山路くらしつ時鳥いま一聲のきかまほしさに
萬代も猶こそあかね君かため思ふこゝろのかきりなければ

右

藤原光俊朝臣

時しらぬ身ともおもはし秋くれはたか袖よりも露けかりけり
月をみは同し空ともなくさまたなと古郷の戀しかるらん
いかにせん死なはともにと思ふ身におなし限りの命ならすは
十七番

左

祭主輔親

いつれをかわきておらまし山櫻こゝろうつらぬ花しなけれは
くも間より星あひのかけを見渡せはしつ心なき天の川なみ
程もなくこふる心はなになれやしらてたに社年はへにししか

右

法橋顯昭

水荳の岡のくす葉も色つきてけさうらかなし秋のはつ風
人しれぬなみたの川の水上やいはての山のたにの下みつ
たらちめやとまりて我を歎かましかはるに替る命也せは
十八番

左

西宮左大臣

うち忍ひなくとせしまに君こふる涙は色に出にける哉
目に添へて憂事のみも増る哉くれては慥て明けすもあらなん
さりともと思ふ心にひかされて今まで世にもふる我身かな
雅成親王

右

秋の田のをしね色つく今よりやねられぬ庵の夜寒成らん
月のいる梢はたかくあらはれて川霧ふかき遠のやまもと
うけ難き身のむくひさへ忘れられてなを先のよそ悲しかりける
十九番

左

本院侍従

身をうしと思ひしりぬる物ならはつらき心もなにかうらみむ
しる人や空になからむおもひいる心のそここのころならねと
にはたつみ行方しらぬ物思ひにはかなきあはのきえぬへき哉
新院弁内侍

右

雲井より跡ねさりせはほとゝきす初音も山のかひやなからむ
をく露は草葉のうへとおもひしに袖さへぬれて秋はきにけり
あちきなくなとしたもえに成ぬらんふしの煙も空にこそたて
二十番

左

小大君

ちるをこそあはれとみしか梅花はなや今年は人をしのはん
岩はしのよるの契りも絶ぬへしあくるわひしきかつらきの神

あるはなくなきは数そふ世間に哀れいつまであらむとすらん
大納言隆房

右

たまさかに秋の一夜を待てもあくるほとなき星合の空
うきなからみし面影のかはらぬやさすかになれし形見成らん
こひしなはうかれん玉よしはしたに我思ふ人の妻にとゝまれ
廿一番

左

藤原高光

かくはかりへかたくみゆる世の中に羨ましくもすめる月かな
神無月風にこのはのちる時はそこはかとなく物をかなしき
年をへて思ふ心のしるへにそ空もたよりの風はふきける
俊成卿女

右

ことはりの秋にはあらぬなみた哉月の桂もかはるひかりに
下もえに思ひきえなんけふりたに跡なき雲のはてそ悲しき
夢かとよ見し儂もちきりしも忘れすなから現ならねは
廿二番

左

藤原義孝

つらからは人にかたらん敷たへの枕かはして一夜ねにきと
君かためおしからさりし命さへなかくもかなと思ひけるかな
いつまでの命もしらぬ世中につらき歎きのやますも有哉
中納言典侍

右

冬さむみ忍ぶの山の谷みつはをとにはたてすさそこほるらん
ちかひてし命にかへて忘るゝはうき我ゆへに身をや捨らむ
身をさらぬうさを忘れてよの中に知られぬ山となに尋ぬらん
廿三番

左

大納言公任

春きてそ人も問ける山里は花こそ宿のあるしなりけれ

朝またきあらしの山のさむければ紅葉のにしききぬ人そなき
霜をかぬそてたにさゆる冬のよに鴨の上毛を思ひこそやれ

右

前内大臣

なめきて年にそへたる哀さも身にしられぬる春のよの月
松かけの入うみかけてしらすけのみとり吹こす秋の鹽風
草も木も時にあひける春雨にもれたる袖はなみた也けり
廿四番

左

安法法師

夏衣またひとへなるうたゝねに心してふけ秋のはつ風
世をそむく山のみなみの松かせに苔の衣や夜さむなるらん
天くたるあら人神の相生を思へはひさし住よしの松

右

源師光

山のはも空もひとつにみゆるかなこれやかすめる春の曙
わひ人の宿にはうへし櫻花ちれはなけきの數まさりけり
うきながら猶おしまるゝ命かな後の世とても頼みなければ
廿五番

左

清少納言

忘らるゝ身はことほりとしりなから思ひあへぬは涙なりけり
よしさらはつらさは我に習ひけり頼めてこぬは誰かをしへし
夜をこめて鳥のそらねははかるとも世に逢坂の關はゆるさし

右

大納言基良

春雨のあまねき御代のめくみとは思ふ物からぬるゝ袖かな
たらちねの心のやみをしる物はこをおもふ時のなみた也けり
ますかゝみしらぬ翁はみなれにき今更たとる面かけそうき

新時代不同歌合下

作者

左

右

一條院

弁乳母

中納言定頼

上東門院

三條院

大江嘉言

藤原惟成

源頼綱朝臣

堀川右大臣頼宗公

道命法師

伊勢大輔

津守國基

周防内侍

大貳三位

橘俊綱朝臣

小弁

中納言通俊

康資王母

樞大納言公實

瞻西上人

輔仁親王

一院

源具親朝臣

藻壁院少將

式乾門院御匣

守覺法親王

大僧正覺忠

從三位行能

道因法師

常磐井太政大臣實氏公

土御門院小宰相

右京大夫行家

寂超法師

平政村朝臣

土御門内大臣通親公

參議敦長

源家長

民部卿爲家

後久我太政大臣通光公

衣笠前内大臣家良公

僧正行意

中務卿親王

大納言成通

安嘉門院高倉

權僧正永縁

道助法親王

神祇伯顯仲

權中納言長方

上西門院兵衛

大納言爲氏

廿六番

左

一條院

くらきよの雨にたくひて散花を春のみそれと思ひつるかな
秋風の露のやとりに君をゝきてちりを出ぬる事そ悲しき

野へまで心ひとつは通へともわかみゆきとはしらすや有覽

右

一院

大かたの春のけしきにさそはれてしるへもまたぬ驚のこゑ
わすれしの言の葉なくは中々にとはぬ月日は恨さらまし
いはし水こかくれたりしいにしへを思ひいつれはすむ心哉

廿七番

左

弁乳母

時鳥みやまいつなる初こゑを何れの里のたれか聞らん
戀しさはつらさにかへてやみにしをなにゝ残りて物は悲しき
こひすとも涙の色のなかりせはしはしは人にしられさらまし

右

源具親朝臣

難波かたかすまぬ浪も霞けりうつるも曇おほる月よに
はれ曇るかけを都に先たてゝしくるとつくる山のはの月
今はとて思ひたゆへき眞木の戸をさゝぬや待ゝ習ひなるらん

廿八番

左

中納言定頼

朝ほらけらちの川霧たえゝにあらはれ渡るせゝのあしろ木

今よりは又さく花もなき物をいたくなをきそきくの上の露
興津風よはに吹くらしなにはかた曉かけて浪そこすなる

右

藻壁門院少將

たえゝにたな引雲のあらはれてまかひもはてぬ山櫻哉
をのか音につらき別のありとたに思ひもしらて鳥や鳴覽
待なれし夕のそらもかはれたゝ人の心のあらずなるよに

廿九番

左

上東門院

別ちをけにいかはかり歎らんきく人さへに袖はぬれけり
あふことも今はなきねの夢ならていつかは君を又はみるへき
思ひきやはかなくきえし袖の上の露を形見にかけむ物とは

右

式乾門院御匣

同じよにたのむ契のむなしくは身をかへてたに逢事もかな
すきにける昔も今のつらさにてうき思ひてになるゝ袖哉
過わひておもひ入なん奥山に猶うきとさきの行かたもかな

三十番

左

三條院

あし引の山のおなたに住人はまたてや秋の月をみる覽
心にもあらてこの世になからへは戀しかるへき夜半の月哉
古の近きまもりをこふるまにこれは忍ぶるしるし也けり

右

守覺法親王

たちぬるゝ山の雫も音たえて眞木の下葉にたるひしにけり
つれなさに今は思ひも絶なまし此よはかりの契り也せは
長らへて世にすむかひはなけれともうきにかへたる命也けり

三十一番

左

大江嘉言

秋のよの月ましかれて思ひやる心いくたひ山をこゆらん
忍びつゝやみなむよりは思ふ事ありけりとたに人に知らせむ
昔か代はちよに一たひゐるちりの白雲かゝる山となるまで

右

大僧正覺忠

ときはなる青葉の山も秋くれは色こそかへね淋しかりけり
神なつき木々のこの葉はちり果て庭にそ風の音は聞ゆる
今夜我をはすて山の麓にて月まぢわふと誰かしるへき
三十二番

左

藤原惟成

きのふかも霞ふりしかしからきの外山の霞はるめきにけり
しはしまてまたよはふかし長月の有明の月は人まとふ也
風ふけはむろのやしまの夕けふり心のそらにたちける哉

右

從三位行能

うつろへは人のこゝろそ跡もなき花のかたみの峯のしら雲
なからへてあるたに身にはつれなきに恨むる迄は人に聞れし
かきなかす言の葉をたに沈むなよ身こそかくても山川のみつ
三十三番

左

源頼綱朝臣

夏山のならの葉そよく夕暮はことしも秋の心ちこそすれ
夕日さすすその薄かたよりにまねくや秋を送るなるらむ
古の人さへけさはつらきかなあくれはなとか歸りそめけん

右

道因法師

晴くもる時雨はさためなき物をふりはてぬるは我身なりけり
鴨のゐるいり江のあしは霜かれてをのれのみ社青は也けれ
いつまでも身のうき事はかはらねと昔は老を歎きやはせし
三十四番

左

堀川右大臣

櫻花あかぬあまりに思ふかなちらすは人やおしまさまし
人よりも心のかきりなかつる月はたれともわかしのゆえ
あふまてとせめて命のおしければ戀こそ人のいのちなりけれ

右

常磐井太政大臣

分行はそれともみえずあさほらけ遠きそ春の霞也ける
湊川あき行水のいろそこきのこるやまなく時雨ふるらし
しりなから厭はぬ世こそ悲しけれわか偽つらき身を思ふとて
三十五番

左

道命法師

山里のかひこそなければとゝきす都の人もかくや待らむ
しほたるゝ我身のかたはつれなくてことうらに社燈立けれ
都にてなかつる月のもろともに旅の空にも出にける哉

右

土御門院小宰相

里わかすなけや五月の時鳥しのひし頃はうらみやはせし
はかなくて見えつる夢の倂をいかにねしよと又やしのはん
長き夜のね覺におもふ程はかりうき世をいとふ心なりせば
三十六番

左

伊勢大輔

古のならのみやこの八重櫻けふ九重にほひぬるかな
見るめこそあふみは海のかたからめ吹たにかよへ志賀の浦風
とねとも同じ都はたのまき哀雲井にへたてつるかな

右

右京大夫行家

あすかには衣うつなりたをやめの袖の秋かせ夜寒なるらし
なか月のつゝきの原の秋くさにことしはあまり置るつゆかな
よにもらは我心をやうたかはんまたしらせたる人もなければ

三十七番

左

津守國基

うす巖にかく玉章と見ゆるかなかすめる空に歸るかり金
あるしなきすまひに残るさくら花哀むかしの春やこひしき
鴨のゐる野澤の小田を打かへし種まきてけりしめはへてみゆ

右

寂超法師

古郷の宿もる月にことゝはん我をはしるやむかしすみきと
有明の月より外に誰をかは山路の友とちきりをくへき
朽はつる袖にはいかゝ包むへきむなしとける御法ならては

三十八番

左

周防内侍

春のよの夢はかりなる手牋にかひなくたゝむ名こそおしけれ
契りしにあらぬつらさもあふことのなきにはえ社恨さりけれ
住わひて我さへ軒のしのふ草忍ぶかたくしけき宿かな

右

平政村朝臣

宮城野の本のしたふかき夕露もなみたにまざる秋やなからん
月をこそ山のあなたもおしむなれ我といそかぬ郭公かな
ならはねとあふ夜も落る涙かなうきになれにし袖の名残に

三十九番

左

大貳三位

遙なるもろこしまても行ものは秋のね覺の心なりけり
うたかひし命はかりは有なから契りし中のたえぬへき哉
ありま山猪名のさゝ原風ふけはいてそよ人を忘れやはする

右

土御門内大臣

散つもる昔の下にもさくら花おしむ心や猶のこるらむ
あひみしは昔語のうつゝにてそのかね言を夢になせとや

朝ことの汀の氷ふみわけて君につかふる道そかしこき
四十番

左

橋俊綱朝臣

あふさかの關をや春のこえつらん音羽の山の今朝はかすめる
久かたの月すみわたる木からしにしくるゝ雨は木の葉也けり
みやこ人暮るれはいそく今よりは伏見の里の名をは頼まし

右

參議教長

わかなつむ袖こそみゆれ春日野の飛火の野への雪のむらきえ
よしさらは君に心を盡してんまたもこひしき人もこそあれ
三日月の又あり明になりぬるや浮世にめくるためし成らむ
四十一番

左

小弁

なきぬとも人にかたらし郭公たゝ忍ひねは我にきかせよ
うたゝねと思ひつるまに冬の夜の衛鳴まで更にける哉
思ひ知人もこそあれあちきなくつれなき戀に身をやかへてん

右

源家長

はつ時雨ふりさけみればあかねさす三笠の山は紅葉しにけり
けふは又しらぬ野原にゆきくれぬいつれの山か月は出らむ
藻しほ草かくともつきし君か代の數によみをくわかのうら波
四十二番

左

中納言通俊

もしほやく須磨のうら人打たえて厭ひやすらん五月雨のころ
とへかしなかつく藤の衣手になみたのかゝる秋のねさめを
情あらはいかはかりかは思はましつらきにたにもしのふ心を

右

民部卿爲家

天川遠きわたりになりにけりかたのゝみのゝ五月雨のころ

冬きては時雨の雲のたえまたに四方の木のはの降ぬ日そなき
をのつからあふを限りの命とて年月ふるもなみた也けり
四十三番

左

康資王母

紅のうす花さくらにほはすはみな白雲とみてやすきまし
東路のみちの冬草茂りあひて跡たにみえぬ忘水かな
榊はや立まふ袖のをひ風になひかぬ神もあらしと思ふ

右

後久我太政大臣

三嶋江や霜もまたひぬ苧の葉につのくむ程の春風そふく
雲のゐる遠山姫の花かつら霞をかけて吹あらしかな
いくめぐり空行月もへたてきぬ契りし中はよそのうき雲
四十四番

左

權大納言公實

朝戸あけて春の梢の雪みれば初花ともやいふへかるらん
とこととはに吹夕暮の風なれと秋たつ目こそ涼しかりけれ
麓をはうちの川きり立こめて雲井にみゆる朝日山かな

右

衣笠前内大臣

あさほらけ濱名の橋はとたえして霞をわたる春の旅人
夕されは露吹おとす秋かせに葉末かたよるをのゝしの原
うかりけるたかあふ事のならひより夕つけ鳥の音に別けん
四十五番

左

膳西上人

ちる花のなかるゝ水につもらぬもそれさへ雪の心ちこそすれ
いほりきすならの木陰にもる月のくもとと見れば時雨ふる也
法の爲になふ新にことよせてやかて浮よをこりそはてめる

右

僧正行意

山城の常磐の松の夕時雨そめぬみとり秋暮暮ぬる
ころも手に夕風さむしさゝ原やしくるゝ野へに宿はなくて
夜をこむるすゝの篠屋の朝戸出に山影くらき峯の松風
四十六番

左

輔仁親王

五月雨に入江のはしのうきぬれはおろす筏の心ちこそすれ
つなかねとなかれもやらす高瀬舟むすふ氷のとけぬかきり
いかにせん暮行としをしるへにて身を尋ねつゝ老はきにけり

右

中務卿親王

おほとものみつの濱松霞む也はやひのもとに春やきにけり
焼しほの煙も見えず月すみて難波のみ津に秋風そふく
晴かたき身の思ひこそうかりけれかすめる月も秋は待らん
四十七番

左

大納言成道

冬ふかくなりけらしな難波江の青葉ましらぬ苧の村立
人しれすくれ行としを惜むまに春といふ名の立ぬへき哉
悲しきはいひつくすへきかたもなし我心にて人をしらなむ

右

安嘉門院高倉

ひとりのみかたしく袖の手枕によかれぬものは涙なりけり
夢にたにかよはぬ中のしのふ山こゝろのおくを誰にとはまし
とはるゝにつけてそ人はつらかりし思ひ絶ては恨みやはする
四十八番

左

權僧正永縁

聞たひにめつらしければ時鳥いつも初音の心ちこそすれ
いかなれは秋はひかりの増るらむ同じみかさの山のはの月
まつ人の大空わたる月ならはぬるゝ袂に影は見てまし

右

道助法親王

白露の玉江のあしのよひくりに秋風ちかく行螢かな
萩の葉に風の音せぬ秋もあらは涙の外に月はみてまし
とゝめはやなかれてはやき年浪のよとまぬ水は楊もなし
四十九番

左

神祇伯顯仲

夏の夜の庭にふりしく白雪は月の入こそきゆる也けれ
五月雨に水まさるらし澤田川まきのつき橋うきぬ計に
物思ふといはぬはかりは忍ふともいかにかせまし袖の雫を

右

權中納言長方

あすか川せゝになみよる紅やかつらき山の木からしの風
これも又むくひあるらん先の世に我ゆへ君も物や思ひし
紀の國や由良の湊に拾ふてふたまさかにたにあひみてし哉
五十番

左

上西門院兵衛

かへりては身にそふ物としりながら暮行年を何したふ覽
なにせんにそらたのめとて恨けむ思ひたえたる暮も有けり
限りある道こそあらめこのよにて別るへしとは思はさらまし

右

大納言爲氏

乙女子かかさしの樓さきにけり袖ふる山にかゝるしら雲
いはて思ふ心ひとつの頼みこそ知られぬ中の命なりけれ
さりともと我あらましを頼まれて行木しらぬ身こそおしけれ

新時代不同歌合後。九條内大臣基家撰之云々。

右新時代不同歌合以百花庵宗固本校合

群書類從卷第二百十六

和歌部七十一歌合三十七

定家家隆兩卿撰歌合

一番

左

さとの海士のしほやき衣たち別れ馴れしもしらぬ春の雁かね

右

春もいまた色にはいてすむさし野やわかむらさきの雪の下草

二番

櫻かり霞の下にけふくれぬ一夜やかせはるのやまもり

このほとはおられぬ雲そかゝるらん尋ねもゆかし嶺の櫻木

三番

花の色に一はるまけよ歸る雁ことしこしちのそらたのめして

櫻はなさきぬる時はかつらきの山のすかたにかゝるしら雲

四番

名もしるし嶺のあらしも雪とふる山さくら戸の曙の空

けさみれば梢の花は散にけり風のしたなる庭のしら雪

五番

名取川春の目数はあらはれて花にそしつむせゝの埋木

高砂の山にも花やみつしほのあらはにみゆる松のはもなし

六番

ふみしたく淺香の沼の（なづい）した草にかつみたれ行忍ふもちすり

あしかもの跡も定めぬみつのえに猶すみかたき春や行みむ

七番

なきぬめり夕つけ鳥のしたり尾のをのれにも似ぬよはの短さ

秋はいまとほ山鳥のしたり尾のあまりておしき有明の月

八番

芦のやのかりねの床のふしのまもみしかく明る夏（なつ）のよなく

みしまえのにほのうきすも亂れ芦の末葉にかゝる五月雨の比

九番

打なひくしけみかしたのさゆり葉のしられぬ程に通ふ秋かせ

むは玉の闇のうつゝのうかひ舟つきのさかりや夢にみるへき

十番

秋とたに吹あへぬかせに色かはるいく田の森の露の下草

軒ちかき山下萩の聲たてゝ夕日かくれに秋かせそふく

十一番

須磨の海士のなれにし袖もしほたれて關吹こゆる秋の浦かせ

秋かせに山のは渡る村雨をこそともなく出る月かけ

十二番

なをさりの小野の淺茅にをく露の草葉に餘る秋の夕かせ(ふゆい)

花もはもしろく成行萩かえに村雨かゝる秋の夕くれ

十三番

蓬茅生の小野の篠原打なひき遠方人に秋かせそ吹

露はらふ袖吹かへす秋かせにうらさへ萩の色そ移ふ

十四番

うつりあへぬ色の千種にみたれつゝ風の上なる宮城の露

又やみむまたやみさらん白露の玉をさしける秋はきの花

十五番

詠つゝおもひしものをかすゝにむなしき空に秋夜月(このイ)

くれぬまに山のは遠く成てけり空より出る秋のよの月

十六番

昔たに猶故郷の秋の月しらすひかりのいくめぐりとも

有明の月のかつらのもみち葉を嶺に残してを鹿鳴也

十七番

川かせによわたる月の寒ければやそうち人も衣うつ也

ふけあらし雲の衣のきぬゝは月におしまぬ有明の空(あけ方三番)

十八番

伊駒山あらしも秋の色に吹手そめのいとよるそ悲しき

朝ひさす高ねのみ雪空晴てたちもおよはぬ富士の川きり

十九番

高砂の外にも秋はあるものを我夕くれと鹿はなく也

天川あきの一夜の契たにかたのに鹿のねをや鳴らん

廿番

夕つくひむかひの岡の薄紅葉またささひしき秋の色哉

さをしかのよはの草ふしあけぬれと歸る山なき武藏野の原

廿一番

小倉山しくるゝ比のあきなく昨日は薄きよものもみち葉

秋風はさてもや物のかなしきと萩の葉ならぬ夕暮も哉

廿二番

秋はいぬ夕日かくれの嶺の松よもの木のはの後もあひみん

神代より小倉の山のもみち葉はしたてる姫や染はしめ銀

廿三番

花すゝき草の袂もくちはてぬ馴て別し秋をこふとて

草のはにくらせる宵のきりゝす秋風ふきぬせむかたやなき

廿四番

浦かせやとはに浪こす濱松のねにあらはれて啼千鳥哉

よや寒き里は雲井のこからしに聲さへうすく衣うつ也

廿五番

志賀の浦や米も幾重いるたつの霜のさはまに雪ぞ降つゝ(うはけイ)

あしへ行鴨のはかひの夕霜をよそにもなかぬ小夜千鳥哉

廿六番

雪おれの竹の下道跡もなしあれにし後の深草の里

かへすとも雲の衣はうらもあらし一夜夢かせ嶺のこからし

廿七番

小初瀬や嶺のときは木吹きほりあらしに曇る雪のやまもと

さえのほるこしのしらねは冬の月雪のこほりも麓成けり

廿八番

高砂の尾上の鹿のなかぬ日も積りはてぬる松のしら雪

白妙のたなひく雲を吹分て雪にあまきる嶺の松かせ(ふせいで)

廿九番

しられしな千入の木のは焦るともしくるゝ雲に色しみえねは(ふい)

霜かゝる人の心のあさは野にたつみはこすけねさへくちめや
卅番

逢みての後の心をまつしれはつれなしと社えこそうらみね
なき名のみ夕つけ鳥の相坂にすてられてのみねをもなかはや
(たにイ)
たに五二集

卅一番

露時雨した草かけてもる山に色かすならぬ袖をみせはや
なきこふる袖にはいかゝ宿すへき曇りならはぬ秋のよの月

卅二番

俤はをしへし宿に先立てこたへぬかせの松に吹こゑ
曇れけふ人相の鐘も程遠したのめてかへる春の曙

卅三番

よとともに吹上の濱の鹽風になひく眞砂のくたけてそ思ふ
時過て小野の淺茅生立煙しりぬや今は思ひ有とも
(イイ)
(イイ)

卅四番

往のえの松のねたくやよる浪のよるとて歎く夢をたにみて
床は海まぐらは山となりぬへし涙もちりも積るうらみに

卅五番

芹のやに螢やまかふ海土やたくおもひも戀もよるはもえつゝ
我戀はまた末遠しはし戀のよるさへやすくいやはねられぬ
(イイ)

卅六番

白玉のをたえの橋の名もつらしくたけて落る袖の泪に
永きひのすかのあら野にかかる草のゆふてもたゆくとけぬ君哉
(イイ)

卅七番

忘れすはなれし袖もやこぼるらむねぬよの床の霜のさむしろ
おもひ川影みし水の薄水かさなるよはの月もうらめし

卅八番

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身も焦れつゝ
山川の紅葉にまじる水の淡の色にいてゝもぬるゝ袖かな
卅九番

誰もこのあはれみしかき玉のをの亂れて物を思はずも哉
千早振神のみむろのます鏡かけていくよのかけをみるらん
(イイ)
(イイ)

四十番

心をはつらき物とて別にしよはの俤なにしたふらむ
つくは山もあけぬ吹かせに人の心のひまそつれなき
(イイ)
(イイ)

四十一番

よもすから月にうれへてねをそなく命にむかふ物思ふとて
何となく我ゆへ馴し袖の上はあさ(かりける)と月やみるらむ
(イイ)
(イイ)

四十二番

なく涙やしほの泪それなから馴すは何の色かしのはむ
人心何につなかわ色變るまさきのつなのよるもたまらず
(イイ)
(イイ)

四十三番

せめて思ふいま一度の逢事はわたらむ川も契りなるへき
床はあれぬいたくな吹そ秋のかせめにみぬ人を夢にたにみむ
(イイ)
(イイ)

四十四番

命たにあらは逢よをまつら川かへらぬ浪もよとめとおもふ
はきの葉に末吹なひく秋風にたまらぬ露のくたけてそ思ふ
(イイ)
(イイ)

四十五番

やすらひに出ける方も白鳥のとは山松のねにのみそなく
はかなしなみつの濱まつをのつから(見えこし夢も浪の通路)
(イイ)
(イイ)

四十六番

忘れかひそれと思ひのたね絶て人をみぬめのうらみてそぬる
おもひ川まねなる中になかる也これにも渡せかさゝきのはし

四十七番

世中を思ひのきは忍ふ草いくよの宿とあれかはてけむ
谷川の朽木の橋の埋木も人にしられぬ道や絶なむ
四十八番

明るよの夕つけ鳥に立別れうらなみ遠く出る舟人
興津浪よする磯へのうき枕遠さかるなり鹽のみつらむ
四十九番

わか(さ)の浦やなきたるあまの浮標朽ねかひなき名たに残らて
春日山おとろの道も中絶てみをうちはしの秋の夕くれ
五十番

おもふ事むなしき夢の中絶にたゆとまたゆなつらき玉の緒
おきなさひ人なとかめそこのうちに昔をこふる露の毛衣

此歌合者。於後鳥羽院御遠所（さ）。御閑居之間定給。

右定家隆兩卿歌合雖有不審無類本不能校合

〔以二本校合了〕

閑窓撰歌合

建長三年閏九月盡

左方

東河禪撰

右方

西山隱侶撰

一番

左

眞木の戸をあけて夜深き梅かゝに春のねさめをとふ人もかな
薄壁門院少將

右

尙侍家中納言

二番

左

今はとて風吹山のさくら花うしといひても春をみるかな

右

をのか身の翅にかける玉章をやらてもみはや春のかりかね

三番

左

おもひ川いかれる比の五月雨にせかても水の淵となるらん

右

咲ぬれはかならず花のおりにとも頼めぬ人のまたれける哉

四番

左

草の葉の露も我身の上なれは袖のみほさぬ秋の夕くれ

右

今こそは歸たてゝなけ子規忍ひあまるや夕くれの空

十番

左

露しけ庭の淺茅生我ならぬ思ひもありと虫の鳴らん

なかむるにぬるゝ袂をうらみても身のとかならぬ秋の夕暮

右

おりたちて鹿はなけとも澤水の淺き心をつまや頼まむ

我ためとことさらに社わけすとも降つむ雪の上をたにとへ

六番

左

鳴むしのこゑの色にはあらねともうきはみにしむ秋の夕暮

跡おしむたかならはしの山ちとて積れる雪をとふ人のなき

右

さならてもなけかぬ時のあり顔に秋とやわきて物のかなしき

誰もみに積りて年の暮行は人の上さへけふはかなしき

七番

左

とふ人もあらしと思ふを三輪の山いかにまぢみむ秋の夜の月

をのつからとひこん人を思ひやる道もかなしく積る雪かな

右

かくはかり月を哀となかめすはいかに久しき秋のよならん

たのめしは今宵もいかなりぬらむ更ぬるものを山のはの月

八番

左

山里は嶺のあらしの絶す吹音をともにて月をみるかな

過來つる何の名残のおしさにかくれ行年を猶したふらん

右

物思ふ袖のみぬらす時雨哉よもの木の葉はなとかそむらん

たくひなき思ひの程もみえなましあさまの山の煙たゝすは

九番

左

月宿るをしまのとまやとふ人にみせはやと社あまもいふらめ

人しれぬ涙の色はかひもなしみせはやとたに思ひよはらは

右

衰にもめならふ色の草はみなかれての後に匂ふしらきく

おきて行人は待ける鳥の音をなとあやにくに我いとふらん

十五番

左

をのか音につらき別のありとたに思ひしらてや鳥のなくらん

右

夜さむなる哀有明の月影にいかにせむとかをき別るらん

十六番

左

あさき瀬やはしめなりけむ飛鳥川思ひそめてそ瀬と成ける

右

うたゝねにみ習ひにける夢をさへみもはてさせぬよはの風哉

十七番

左

思ひねのなみたなそへそよはの月曇るといはゝ人も社しれ

右

いつまてかたのめし事を命とも慰むほとゝ人にこひけむ

十八番

左

偽とおもひとられぬゆふへ社はかなきものゝかなしかりけれ

右

逢みけむ契そつらきよそにてはうしとも人の思はれやせし

十九番

左

有明の月はかたみとたのまれす暮まつまでのみにもそはねは

右

たくひなくほさぬ袖哉草も木も露うち拂ふかせはあるよに

廿番

左

右

こひしなはまよはぬ闇を思ふにも月はしはしのかたみ成けり

廿一番

左

色に出て袖のよそめはふりはてぬいかにをさへし涙なるらん

右

廿二番

左

俤をうき身にそへて戀しなは後のよまてのつらさをやみん

右

何とかは頼みわたらん吉野河はやくみえにし人のうきよを

廿三番

左

ひと筋に身をうき物と思ふ社人のつらさのあまり成けれ

右

跡絶て人こぬ宿のさひしさはもとめぬ山の奥かとおもふ

廿四番

左

すむあまも哀はしるや煙たつをのかしほやの夕くれの空

右

こひはよの常なりけれとみな人のみに始てはさそな悲しき

廿五番

左

さらぬたに夕暮つらき山里にとふ人かへる岩のかけはし

右

いかにして夢をさまさむ人のよに父むまるへき身とも頼ます
廿六番

左

少将内侍

久かたの天つみ空の朝霞たち社わたれ春やきぬらん

右

前攝政家民部卿

きてみすと人も恨みしいつくにもかく社花は盛りなるらめ
廿七番

左

みる人のうきにはよらぬ春の空かすめは月そおほろなりける

右

をのつから移ふ花に人とはゝすまの浦風わふとこたへよ
廿八番

左

いかにせむさならぬ事も思ふみにまして別の春の夕くれ

右

ありてよのはてしうければ花の爲うしろやすくそ風は吹ける
廿九番

左

はかなしな我心なる横の戸をさゝぬたのみに人はまたるゝ

右

身をなけく心に道はなき物をいつちいかにと思ひなるらん
卅番

左

山里は淋しきものとしりにけりきゝてもいとへ嶺の松風

右

よそにては思ふ計にみゆるかとうきみの上を人にとはゝや
卅一番

左

寂 西

草かれと思はゝみにもつみてましよそなる物はわかな也けり

右

眞 觀

よは春と誰もしるらし鶯のなきゝかせたる今朝の初音に
卅二番

左

吹かせをいはゝいはなむ櫻花散かふ時のはるの山もり

右

春かさてやみにしみをそ思ひしる霞める月のよはの哀に
卅三番

左

きてもみぬ故郷人のをそ櫻散残れりと猶や告まし

右

いとせめて物うく成ぬを鹿鳴山里いかて秋をすくさむ
卅四番

左

おもふよりいとゝいく野の道遠みまたふみもみす積る雪かな

右

いそのかみふるの山への秋の月いつれのよにか住はしめけむ
卅五番

左

とふ人のなきほとみゆる故郷の庭の白雪いく重なるらん

右

いつとなき松の風さへ秋のよは寢覺すれはやみにはしむらん

卅六番

左

しらせはやとはかり物を思ふ社ならはぬ戀のはしめ也けれ

右

けふも猶いかにそめんとしくるらん早紅葉にし山の木のはを

卅七番

左

煙たつ空にもしるや富士のねのもえつゝとはに思ひ有とは

右

わひ人の涙とともに神無月まなくしくるゝ空はいかにと

卅八番

左

我戀はなたかの浦のなひきもの心はよれとあふよしもなし

右

さひしきはよそにてもしれ朝夕にたく冬柴の煙りけふらす

卅九番

左

こひせしと月にややかてちかはまし曇る涙のうきにつけても

右

さゆれともこぼらぬものか水鳥のうかふの池の曉の空

四十番

左

待やする我やゆかむと思ふまにはるかにさ夜の更にける哉

右

過ぎつる月日のはての報ひとてまたそこしもけふに成ぬる

四十一番

左

せめて猶したにはなひけ夕煙もえて我名の空にたゝすは

右

いかなれはさても心の慰まで逢夜も袖のあやにぬるらむ

四十二番

左

秋風はいたくな吹そ今はとてこさらむ後の夕暮もうし

右

いかにせむよもとは思ふ夕ぐれの秋風吹は人そまたるゝ

四十三番

左

一こゑは聞もかくしつ曉のわかれはあまり鳥そ鳴なる

右

今はたゝさらぬ別になしはてゝまた逢みむとまたれすも哉

四十四番

左

あすしらぬ命に人をとひわひて秋の夜なく思ひける哉

右

戀しきをとてもかくても慰むる心のかみになかるらむ

四十五番

左

むは玉の夢はさめぬる床の上に猶俤のみえもするかな

右

をのつから年月へなはこひしさの限りありやと思ふ計そ

四十六番

右

をさふへき袖は昔に朽はてぬ我くろかみよ涙もらすな
こすはこす猶も頼まむ忘るとも忘れはてぬと我にきかすな
四十七番

左

忍ぶるにひとり／＼かあらはさは誰をたれとはいひも隠さむ
心かへする世なりとも人はこひ我つらからはさてもかひなし
四十八番

左

山のはに夜更て出る月よりもまち遠になるみの契りかな

右

かきりそと別れし時にいはぬ社おもへは人のなさけなりけれ
四十九番

左

こひ人の心は遠く成にけりわする計の月日ならねと

右

かくてよにあらはやとしも思はぬにそむきはてぬは何の心そ
五十番

左

わすられぬ物からつらき年月はいかなる中のへたてなるらん

右

よのつねと思へはいと／＼き事のやるかたもなく歎かるゝ哉

右閑窓撰歌合依無類本不能校合

三十六人大歌合

弘長二年九月

左方

三品親王家尊

入道前太政大臣實氏

關白前左大臣家經

前攝政左大臣忠實

前太政大臣公相

左大臣實雄

九條前右大臣忠家

前權僧正

沙彌綠空

前大納言資季

皇后宮大夫師繼

按察使顯朝

中納言爲氏

源具氏朝臣

法印實伊

沙彌寂西

院中納言

沙彌融覺

右方

前内大臣基家

衣笠前内大臣家員

沙彌顯惠

土御門院小宰相

權大納言通成

三品親王家小督

鷹司院帥

僧正隆弁

沙彌如舜

藤原基政

權律師公朝

平長時

侍從行家

藤原能清朝臣

素還法師

平政村朝臣

藻壁門院少將

沙彌眞觀

やまとうたは。我國のはなの春。たかきいやしき家々のことわ
さそなはり。しきしまの月の秋。しるしらぬ夜な／＼のもてあ
そひ物となれり。これによりて。みちをふかくわきまへしれる

むかしの人麿赤人のたくひより。近きころの定家家隆に及ま
て。難波津にたち出て。ふるき菅原のみつほをひろひ。つくは
山にわけ入て。しけきはやしの一枝をたおれり。すへて此道の
事。人の心まち／＼なるゆへに。海ありとみても。そこをさと
らす。山有とき／＼ても。おくをしらさるともからの。やはらか
なるつとめのてにしたかへるにははかられて。やすく道にい
れる思ひをなしつゝ。みをゆるせるたくひおほくきこゆれと。
實にはそま山にたてるふしきは。きれはことさらにかたく。神
代の空の雲は。あふけはいよく／＼たかきものなり。しかはあれ
とも。東路の遠山あらし。よをなひかし。和歌の浦。波まの月。
道をてらせるころなれは。關のひんかしの。かしこき事つてを
うけて。都のうちに。あつめしるせる事あり。則ける諸人の
かすをさためて。よめる歌。五首をつかふべきよしなり。然に
これをいなひ申さは。あらはれたる本意を失ひ。かくれたる恨
も有ぬへし。又しりかほにもてなさは。未得爲得。未證爲證
のつみもかさなるへければ。なましゐに。癡狗の地をおひ。粉
蠟の燈にたはふるゝたくひになすらひて。をの／＼三十一字
の妙なるをえらひつゝ。三十六人と名つけてつかふる事は。前
大納言公任卿しるしはしめたるより。すてにたひかさなれる
わさ成るへし。つら／＼今のいきをひをうか／＼みみるに。いつ
かたも。をのかさま／＼みかける中に。一番の左の歌。猶いひ
しらすくれたるすかたふるまひ。ふるきにはちさる所なり。
かの歌の山風たかくして。ことはの花は。雲の跡をつたへ。竹
のその露わかれて。心の色。むくさのたまをむすへり。爰に。か
しこかりし代々の跡に残りて。つたなきおいのつとめをまし
へつる事。さためて道のやつれをもあらはし。みのはちをもま

ねき侍らん。かつは家のかゝみ。影あれとも。一卷のたはふれ。
塵に曇る浦のもくす道くらければ。むそちのまよひ霧ふかし。
たとひふりにしことわさをとゝむといふとも。さらにあらた
なるなさけと。もちゐられかたかるへし。時に弘長二年長月の
ころ。筆を染てこれをしるしおはりぬ。

一番

左

はれかたきみの思ひ社悲しけれかすめる月も秋やまつらん
三品親王
前内大臣

右

明かたのあまの戸わたる月影にうき人さへや衣うつらん

左

焼すてしあともみえぬ夏草に今はたもえて行螢かな

右

秋草のかれはか下のきり／＼すいつまであかて人にきかれむ

左

たなはたの戀や積りて天の川まれなる中の淵と成らん。

右

まつ陰の入海かけてしらすけの湊ふきこす秋のしほかせ

左

遠さかる海士の小舟も哀なりゆらの湊の秋のゆふくれ

右

秋の雨に樹のはおつる夕ぐれは思ひすつるそ待にまされる

左

みですつる人やみるらん唐國のとら伏野への秋のよの月

右

山もとの末野の里のあけほのにまた人わけぬ雪をみるかな

左

日影さすかれ野の眞葛霜とけて過にし秋にかへる露哉

右

山人は出たる跡の秋の庵残れる鶴や夜半になくらん

左

何とかく色變るらんきにもあらす草にもあらぬ人のことのは

右

心なきいは木にをける露までも秋とはいかて思ひいるらん

左

逢事はいつにならへる心とてひとりぬるよの悲しかるらん

右

また宵のは山のほくしもえそめて朧まつたにいかて知せん

左

いとひても後をいかにと思ふ社猶よにとまる心なりけれ

右

世やはうき人やはずらき大方のみを思はぬは心なりけり

左

この里はすみた河原も程遠しいかなろ鳥に都とはまし

右

渡りする人も哀やまさるらんすみた河原のはるのあけほの

二番

左

分ゆけはそこともみえず朝ほらけ遠きそ春の霞成ける

右

みよしのゝ山のはかすむ春ことにみは新玉の年そふり行

入道前太政大臣
衣笠前内大臣
ぬるイ

左

いせのあまのたまものすそやまかふらん霞に遠き興つしら浪

右

年ことに後の春ともしらさりし花はいくたひ馴てみつらん

左

村雨に秋の露かる玉篠のみしかき夜はは曉もなし

右

さしも草さしもひまなき五月雨に伊吹の嶽のいかにもゆらん

左

吹かよふ音たにかはれ山城のときは森の秋のはつかせ

右

夕されは露吹おとす秋かせに末葉かたよる小野のしの原

左

置露も哀はかけよ春日野に残る古枝の秋萩の花

右

いせ嶋や鹽のひかたのみわたりにいそかすやとる秋のよの月

左

湊川秋行水の色そこき残る山なく時雨ふるらし

右

もみち葉を染てしくるゝ秋山におくてのをしねほしや佐らん

左

庵さす稻葉の雲も打なひき山田の原は時雨てそゆく

右

うかりける誰あふ事のならひより夕附鳥のねにわかるらん

左

しりなからいとはぬよ社悲しけれ我ためつらきと思ふとて

なぐイ

右 深き夜に人しらしとてしほりつゝ袖の泪を月にみえぬる

左

秋つはのすかたの國に跡たるゝ神のまもりは我君のため

右

いかにせむ曇る涙のます鏡うらみしよりそ影はたえにし

左

ふりぬとて何歎くらん君か代に老といふ物そみはさかへける

右

忍ひかね涙の玉の緒を絶てこひのみたれそ袖にみえゆく

三番

左

天河あさ瀬ふむまに七夕の待つる夜はも更やしぬらん

右

まくす原うら葉も白く亂れつゝ風のまゝなる秋の夕露

左

霜枯の野もせの草は我ことやみにふりはてゝしほれ佐らん

右

きえ残るためしも悲し春日山春のひかりにもるゝしら露

左

いかてかは唐土舟のほのかにも我こふらくをしらせそめまし

右

小男鹿も木のまの月の影みてや心つくしの妻をこふらん

左

梓弓はるかにとはぬ目數をも心つよくやうらみはてまし

右

岩におふるためしを何に頼けむつみにつれなきまつの色哉

左

みことのりうけてつたへし我心くもらぬ程は神そしるらん

右

蓮葉の露のうきよとしりなからにこりにしむは心なりけり

四番

左

鷹かねの翅にかくる芦原の露はまよはぬしほりなるらん

右

あすしらぬ我みなからも櫻花うつろふ色そけふは悲しき

左

かく計なこりおしくはみにそふる秋ともさらに何歎らん

右

我ためになく虫のねにあらねともね覺なればや悲しかるらん

左

待人はむなしきくれに何と又あしたゆくゝるさゝかにの糸

右

しらま弓いるさの山の夕霧に立かくれてや鹿のイはなくらん

左

おなしは浦にかきをけもしほ草はては煙も立ははなれし

右

みのうさを歎にあまる涙こそ忍ふにたへぬ色はみえけれ

左

いつまでか夜寒の衣ぬきかけて哀と民を思ひしりけむ

右

年をへてつらき心の眼をもみはてゝよはる玉のをもかな

五番

左

前太政大臣

たちかふるけふは卯月の始めとや神のみ室に櫛とるらん

右

權大納言通成

いく秋かかはらぬ影の月に又萬代かけて猶契るかな

左

よしさらは越路を旅といひなさむ秋は都にかへる雁かね

右

秋の夜は須磨の關守もりかへて月やゆきゝの人とゝむらん

左

すくもたく藻汐の煙なひけたゝ恨し末のしるへともみむ

右

よそにのみみつの濱松年をへてつれなき色にかへる浪哉

左

はかなくと思ひなくさむ心かなおなし世にふる頼みはかりに

右

をのつから日影もしらぬ谷河の岩まの氷いくへともなし

左

あらし吹嶺のさゝやの草枕かりねの夢はむすふともなし

右

千年ふるためしは今そしら雪のかさねて積る庭の松かえ

六番

左

左大臣

おきつかせ吹上の濱の白妙に猶すみのほる秋のよの月

右

三品親王家小督

いかにせん散にし花のおもかけを忘れんとすれば嶺の白雲

左

ときわかすいつも夕はあるものを秋しもなとか悲しかるらん

右

うたかひし命のうちに咲にけり哀なりけるやとの花かな

左

しはしたに猶立かへれまぐす原うら枯てゆく秋のわかれち

右

つらかりし時こそあらめあひみての後さへ物はなそや悲しき

左

まつ嶋やあまのもしほ木それならてこりぬ思ひに立煙かな

右

人を社つらしと思ふに涙さへなとうきたひにみを離るらん

左

いかなりし秋に涙の露そめてみはならはしと袖のぬるらむ

右

定めなくさても世にふる此頃の時雨のやとや我み成らん

七番

左

九條前右大臣

大空に吹くる風の匂ふかな雲のうへにもはなやさくらむ

右

鷹司院帥

昔しより移ふからに恨むるをくるしきよとや花の散らん

左

よの常のみより外なる秋ならはなへての露に袖はぬらさし

右

したもえやくるしかるらん鳴聲もきこえぬ虫のよはの思ひは

左

されはとていとひもはてぬよの中をうきたひ毎に何歎くらん

右

偽のまたれし事も今はなしそれたにいつと頼みをかねは

左

衰なり草のかけにもしら露のかゝるへしとは思はさりしを

右

秋かせは雲の塵をや拂ふらん空のかゝみの夜はの月かけ

左

何とてか詞にふたつわかるらんよきもあしきもひとつ心を

右

あかしした浪の音にやかよふらん浦より遠の岡の松かせ

八番

左

天地のほかなる山にのかれねはかくても花に物やおもはむ

右

富士のねは咲ける花の習まてけに時しらぬやまさくら哉

左

大河もみちのはしや秋をへて渡れとたえぬにしき成らん

右

うきをしる涙のとかといひなして袖よりかすむ春のよの月

左

物おもはていつれの年の秋までか露に袂のしられさりけん

右

秋きてもいはねの床のつれなきに涙色つく苔の袖かな

左

萩か葉にありける物を花ゆへに春もうかりし風のやとりは

右

いかにして涙は袖にとまるらん通ふ心はひまもなきみに

左

ともの浦のいそ(ふか)おにたてる室の木につなける舟の主は誰そも

右

なからへはしはしも月をみるへきに山のは近きみ社つらけれ

九番

左

春雨のあまねき御代のめくみとは頼む物からぬるゝ袖哉

右

難波かたかすまぬ浪もかすみけりうつるも曇る朧月夜に

左

山のはのつらさ計やのこるらん空より外にあくる月かけ

右

はれ曇る影を都にさきたてゝ時雨るとつくる山のはの月

左

物ことに忘れかたみをとゝめをきて涙のたゆむ時のまそなき

右

中くゝにまた頼まるゝ世なりけり變るへしとは契りやはせし

左

今は又みさへ朽木の袖山に何ことの葉をかきあつめまし

右

いまは又ちたてもまかふ時雨哉獨ふり行庭のまつかせ

左

今さらいたつらいに海士のいさり火たくなはの苦しき程を知人いなしそなき

右

ほのく／＼とあけのそほ舟こき歸り煙しらめる海士うらいのもしほ火
十番

左

前大納言資季

しめゆひしまかきやたはに成ぬらん花をもけなる庭の山吹

右

藤原基政

散るをうしと思ひし花そまたれける春くることに物忘して

左

あし曳の山下風のいつのまに音吹かへて秋はきぬらん

右

天河おなしかたのゝ女郎花秋と契りて誰をまつらん

左

獨ねはなかならひの秋の夜をあかしかねてや鹿も鳴らん

右

山里にいつしか人のまたるゝやすみはつましき心なるらん

左

夕しほや遠つひかたにみちぬらん鳴てちかつく友千鳥かな

右

いとへと思ひしらする世中をうきたひ毎に何うらむらん

左

白妙の我衣手をかたしきて獨やねなんいものにこひつゝ

右

みしよこそ思ひいてゝも忍はるれしらぬ昔のなとや戀しき

十一番

左

かく計くるゝ別をしたふとも思ひもしらて春やゆくらん

右

皇后宮大夫師繼
權律師公朝

左

をのかすむ越路の花はまたさかしいそかてかへれ春の鴈かね

右

またれつる時は五月に成にけり小田の早苗もいまいそくらし

左

五月雨のふりわけかみのイはかた過て井筒にあまる水のしら浪

右

としなみもさこそこゆらめ降雪の積る日數の末のまつ山

左

長月の菊のしら露淵とならはまかきの嶋は外にもとめし

右

おもひ侘うきおもかけやなくさむとみれは悲しき有明の月

左

春日野の野もりの鏡これやこのよそに三笠の山のはの月

右

かはらやの下にこかるゝ夕煙たえぬ思ひのありとたにみよ

左

浦人のあし火たくやのすゝけたるみには難波のことも物うし

右

霞めともまよはてかへる鴈かねはこそ越路や空にしろらん

左

一枝は折てかへらん山櫻花つとなからみぬ人のため

右

櫻花匂ふやいつこみよしのゝきき山きはに霞立らし

右

春霞かすむとみれは山のはの雲まも曇る夜はの月影

左

またみねは面影もなしにしかもまのゝかや原露みたるらん

右

しのひねと誰いひそめて郭公きくへき頃を又過すらむ

左

みことのり道にそむかぬゆへとてや海の外にも守りあるらん

右

吹からに雲もかゝらし紅葉する嵐の山はいつしらるらん

左

いかならん時かあらはにしらるへき國に報ゆる心ありとも

右

黒髪をてならすたひにいとふ哉衰いつかと思ひみたれて

十三番

左

をとめこかかさしの櫻咲にけり袖ふる山にかゝるしら雲

右

きてみよと何かは人につけやらん我宿にのみ月はすましを

左

今よりの衣かりかね秋かせに誰夜寒とかなきてきツイぬらん

右

時わかぬこしのしら根の雪をみて秋とはいかて廐のきぬらん

左

よそにきく我ねさめたになかき夜をあかすや賤か衣うつらん

右

あすかには衣うつなりたをやめか袖の秋かせ夜さむなるらし

左

山のはに更ていてたる月影のはつかにたにもいかでしらせん

右

長月のつゝきの原の草の葉にことしはいたくあまりイをける露哉

左

さりとともわかあらましに頼まれて行末しらぬみ社おしけれ

右

いか計身のあやまちの積るらん哀我よのありのすまひに

左

天津空なとて神代のはしめより春はかりたつ霞なるらん

右

梅の花それとみえねと折袖のぬるゝや雪のしるし成らん

左

涙にはさらてもぬるゝ我袖をしらてや秋の露はをくらむ

右

もしほやく煙は空に消ぬれと春とや月の猶かすむらん

左

忘るゝうき名を外にしられしと人まち顔にくらすころ哉

右

村雨のやかてはれぬるを山田のまさらぬ水に早苗とるなり

左

つらからはいかにせんとか行末の心もしらす思ひそむらむ

右

木の葉こそ風のさそへはもろからめなとか涙ヒイの秋は落らん

左

うかりける人の言の葉なけゝとてなと偽のある世成らむ

源具氏朝臣

藤原能清朝臣

右

何とかは人にも今はかたるへきみのうき程はよそにみゆらむ
十五番

左

法印實伊

みる人のなきか數そふ春毎に花もあたなる世をやしるらん

右

素還法師

おきつかせうきねの袖を吹かへし浦つたへ行秋の夜の月

左

ほたる飛きしの木陰や天河ほしのはやしの名にやたつらん

右

木の葉散かたのゝ原に秋くれて舟なかしたる天の川浪

左

冬河の淵ともなうてよとめるはいかにせをせく氷なるらむ

右

みよしのゝ瀧津はや瀬に澄月や冬も氷らぬ氷成らん

左

なからへてあるもつらきか爲なれはうきや我みの命成らむ

右

こぬ人をいくよの月にうらむらん我影にのみ枕ならへて

左

そむくへき浮世の中のことはりをしりてまふは心なりけり

右

もみち葉の色なる袖のみなと社心の秋のとまり成らめ

左

十六番

右

雲よりもよそに成行かつらきの高まの櫻あらし吹らし

左

沙彌寂西
平政村朝臣

なへて世の思ふか中の習には別ありとやはるも行らん

左

秋の野の尾花にまじる鹿のねは色にや妻を戀渡るらん

右

いつくより哀をかせのさそひきて萩の上葉の音と成らむ

左

手にならずかひこそなけれ梓弓ひけは中のみ遠さかりつゝ

右

あはてこそ戀をいのれと頼しか今はたなにか命なるへき

左

きぬゝの袂に分し月影は誰涙にかうつりはつらん

右

すてやらぬ心からにやいてさらん浮世の關はもる人もなし

左

里遠み鹽やく浦はみえわかて煙りにかへる沖津しらなみ

右

憂も猶さこそはあれとことはりを世に慰めてみそふりにける

左

十七番

院中納言

人にのみつらさはみえて吹風の心にかなふ山さくらかな

右

たえゝにたなひく雲はあらはれてまよひもはてぬ山櫻かな

左

冬寒み忍ふの山の谷水は音にもたてすさそ氷るらん

右

かへりみる程そ雲井の大江山いくのゝ道や末になりぬる

左

雲の外のイ
るらんイ

みる夢の覺てもさめす悲しきはいかにねしよの名残なるらん

右

あふ事のたえまかちなるつらさかと思ひし程の契りたになし

左

いとせめて待にたへたる我みそとしりてや人の難面かるらん

右

いかにせむ戀路の末に關すへてゆけとも遠き相坂のやま

左

ちかひてし命にかへて忘るゝはうき我からにみをやすつらむ

右

をのかねにつらき別のありとたに思ひも^{しらてや鳥のイ}しられて鳥や鳴らん

十八番

左

ななき目の杜のしめなれはくりかへしあかすかたらふ郭公哉

右

沙彌融覺
沙彌眞觀

あはれをはいづくにそふる影ならんつらき霞める春のよの月

左

しほれつる夜のまの露のひるまたに草葉やすめぬ秋の村雨

右

さほ姫の我袖ひとつ大空に有とや春の霞たつらん

左

月ならて夜用にさせるかゝり火も同しかつらの光成けり

右

月たにもかすみかへたる春の夜に山のはてらす花の色かな

左

かた岡の杜の木葉も色つきぬわたのをしね今やからまし

右

難波かた夕しほさしてあま衣すへまの山に秋かせそふく

左

あらしこす外山の嶺のときは木に雪けしくれてかゝる村雲

右

おもふ事けになくさむる月ならば苦の袂は秋やほさまし

左

さゝ波や遠さかり行にほの海は氷を浦のしほひ成ける

右

さりとても有はてぬよのはかなきになとしぬ計戀しかるらん

左

忘れねよ夢そといひしかね事をなとそのまゝに頼まさりけん

右

衣／＼にならはいかにと思ふより夜ふかく落る我涙かな

左

たらちねの親のみるよと祈りこし我かねことを神やうけけん

右

いかにせん死なはともにと思ふみのおなし限の哀ならすは

左

あら磯にこけむす計年へたる岩ほはいつの眞砂なるらん

右

今までもあるは思ひの外なれはみを歎くへきことはりもなし

左

みしめひく三輪の杉村ふりにけりこれや神代のしるし成らん

右

をこたらぬみにこそおもへ佳吉の神はまことに道まもりけり

右 三十六人大歌合以一本授合了

女房三十六人歌合

左

小野小町

花の色は移りにけりないたつらに我身よにふる詠めせしまに
思ひつゝぬれはや人のみえつ覽夢としりせはさめさらましを
いとせめて戀しき時はむは玉のよるの衣をかへしてそきる

右

式子内親王

詠れは衣手すゝし久方の天のかはらの秋のけつかせ
玉の緒と絶なはたえねなからへは忍ぶる事のよはりもそする
山ふかみ春ともみえぬ松の戸にたえゝかゝる雪の玉水

左

伊勢

としをへて花の鏡となる水は散かゝるをや曇るといふらん
あひにあひて物思ふ頃の我袖にやとる月さへぬるゝかほなる
おもひ川絶すなかるゝ水の淡のうたかた人にあはて消めや

右

宮内卿

うすくこき野への緑のわか草に跡まてみゆる雪のむらきえ
心あるをしまのあまの袂哉月やとれとはぬれぬものから
聞やいかにはの空なる風たにもまつに音するならひ有とは

左

中務

鶯の聲なかりせは雪消ぬ山里いかて春をしらまし
秋風の吹につけてもとはぬ哉萩のはなは音はしてまし
ありしたにうかりし物をあはすしていつくにはふる辛き成覽

右

周防内侍

夜をかされ待かね山の郭公雲のよそに一こゑそきく
契りしにあらぬつらさも違事のなきにはえ社恨みさりけれ

左

齋宮女御

春の夜の夢はかりなる手枕にかひなくたゝんなこそおしけれ
袖にさへ秋の夕はしられけりきえし淺茅か露をかけつゝ
なれ行も浮よなれはや須磨の海士のしほやき衣ままとを成らん
ぬる夢にうつゝのうさも忘れられて思ひなくさむ程そはかなき

右

俊成卿女

梅の花あかぬ色かも昔にておなじかたみの春のよの月
露はらふねさめは秋の昔にてみはてぬ夢に残るおもかけ
夢かとよみし面影も契りしも忘れすなからうつゝならねは

左

右近

大かたの秋の空たに悲しきに物思ひそふきのうけふかな
逢事をまつに月日はこゆるきの磯に出てや今はうらみむ
忘らるゝみをは思はすちかひてし人の命のおしくも有かな

右

待賢門院堀河

雪深き岩のかけ道跡たゆるよしのゝ里も春はきにけり
うき人を忍ふへしとはおもひきや我心さへなとかはらん
なかららん心もしらす黒かみの亂れてけさは物を社おもへ

左

右大將道綱母

都人ねてまつらめやほとゝきす今は山へをなきていつなり
吹風に付けてもとはんさゝかにの通ひし道は空にたゆとも
絶ぬるか影たにみえはとふへきをかたみの水はみくさるゝに鬼

右

宜秋門院丹後

吹拂ふ嵐の後の高ねより木の葉くもらて月や出らん
忘れしのことの葉いかに成ぬらんだのめし暮は秋風そ吹
何となくきけは涙そこほれける苔の袂にかよふ松かせ

左

馬内侍

時鳥しのふる物をかしは木のもりても聲のきこえぬる哉
逢事のこれやかきりのたひならん草の枕も霜かれにけり
こよひ君いかなる里の月をみて都にたれをおもひ出らん

嘉陽門院越前

沖つ風夜寒になれや田子の浦の海士のもしほ火焼まさるらん
夏引の手ひきの糸の年をへて絶ぬ思ひにむすほれつゝ
いく夜かは月を哀と詠めきて浪に折しくいせの濱荻

左

赤染衛門

神無月有明の空のしくるゝをまた我ならぬ人やみるらん
移ろはてしはし信田の杜をみよかへりもそするくすのうら風
いかにねてみえしなるらんうたゝねの夢より後は物を社思へ

右

二條院讃岐

よにふるはくるしき物を横のやにやすくも過る村しくれ哉
一夜とてよかれし床の小庭にやかてもちりのつもりぬる哉
散かゝる紅葉の色はふかけれとわたれはにこる山川の水

左

和泉式部

櫻色にそめし衣をぬきかへてやま郭公けふよりそまつ
物思へは澤の螢も我みよりりかくれいつる玉かとそ見る
くらきよりくらき道にそ入ぬへき遙にてらせ山のはの月

右

小侍從

いくめぐり過ぬる秋に逢ぬらむかはらぬ月の影をなかくて
つらきをも恨みぬ我にならふなよ浮みをしらぬ人も社あれ
待宵に更行かねの聲きけはあかぬ別の鳥はものかは

左

三條院女藏人左近

大井川柚山かせの寒ければたつ岩浪を雪かとそみる
七夕にかしつと思ひし逢事のその夜なき名の立にけるかな

浪ことに袖そぬれけるあやめ草心になたるねを求むとて

右

後鳥羽院下野

あふ人にとへと變らぬおなし名のいくかに成ぬむさしのゝ原
行末もうきよの中に何をかは昔はとては人にかたらむ
心していたくなきそきりくすかことかましき老のね覺に

左

紫式部

みよしのは春のけしきに霞めともむすほれたる雪の下草
めぐり逢てみしやそれとも分ぬまに雲かくれにしよはの月哉
みし人の煙となりし夕よりなそむつましきしほかまの浦

右

弁内侍

小山田にまかする水の浅み社袖はひつらめ早苗とるとて
逢までの命を人にちきらすはうきに堪てもえやは忍はん
置露は草葉の上と思ひしを袖さへぬれて秋はきにけり

左

小式部内侍

大江山いくのゝ道の遠ければまたふみもみすあまの橋たて
しぬ計敷きにこそは敷きしかいきてあふへきみにしあらねは
おもひ出て誰をか人の尋ねましうきに堪たる命ならすは

右

少將内侍

吹かせものときき花の都鳥治れる代のことやとはまし
しらせはやと計物を思ふ社ならはぬ戀のはしめなりけれ
恨みてもなきてもいかゝ唧たましし夜の月の辛さならては

左

伊勢大輔

いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重に匂ひぬるかな
別にしその目計はめぐりきて又もかへらぬ人そかなしき
はやくみし山の水の薄水打とけさまはかはらさりけり

右

殷富門院大輔

もらさばや思ふ心をさてのみはえそ山城のゐてのしからみ
何か厭ふよもなからへしさのみやはうきに堪たる命なるへき
今はとてみさん秋の末までも思へはかなし夜はの月かけ

左

清少納言

たよりあるかせも吹やと松嶋によせて久しきあまのはしたて
忘らるゝ身はことほりとしりながら思ひあへぬは涙成けり
よしさらはつらきは我に習ひけり頼めてこぬは誰かをしへし

右

土御門院小宰相

春は猶かすむにつけてふかき夜の哀をみする月の影哉
いかてまたあはてやみにし奥山の岩かき清水かけをたにみん
なかり夜のね覺に思ふ程計うきよをいとふこゝろ有せは

左

大貳三位

はるかなるもろこしまても行物は秋のね覺の心也けり
有馬山いなさゝ原かせふけはいてそよ人を忘れやはする
うたかひし命計は有なから契りし中の絶ぬへきかな

右

八條院高倉

一聲はおもひそあへぬ時鳥たそかれ時の雲のまよひに
いかゝ吹身にしむ色のかはるらんたのむる暮の松風の聲
我やとは小翁の山し近ければうきよをしかなかぬ目そなき

左

高内侍

曉の露は枕に置けるを草葉の上となにおもひけむ
獨ぬる人やしるらん秋の夜をなかしと誰かきみにつけゝむ
忘れしの行すゑまではかたけれとけふを限りの命ともかな

右

後嵯峨院中納言典侍

秋のよをこそともなく明ぬとは七夕つめや思ひしるらん
いつはりとおもはて人も契けむかはるならひのよ社つられ

人にのみつらさはみえて吹風の心になふ山さくら哉

左

一宮紀伊

浦かせに吹あけの濱のはま千鳥浪たちくらし夜はに鳴也
置露もしつこゝろなく秋かせにみたれて吹るまのゝ萩原
音にきく高師の濱のあた浪はかけしや袖のぬれも社すれ

右

式乾門院御匣

忘れぬ昔の秋を思ひねの夢をはのこせ庭の松かせ
みをさらぬおなし浮世とおもはすは岩ほの中も尋みてまし
同じよに頼む契りの空しくはうきみにかへてあふこともかな

左

相模

みわたせは浪のしからみかけてけり卯花さける玉川のみつ
うらみ侘ほさぬ袖たに有物を戀に朽なむ名こそおしけれ
もろともにつつかとくへき逢事のかた結びなる夜はの下紐

右

藻壁門院少將

さひしきは眞柴の烟そのまゝに霞をたのむ春の山さと
それをたに心のまゝの命とてやすくや戀にみをもかへてむ
をのか昔につらき別の有とたに思ひもしらて鳥やなくらむ

右女房三十六人歌合於柳堤市店得之依未求類本不能按合

群書類従卷第二百十七

御裳濯川歌合

和歌部七十二自歌合一

一番

左

右

作者 西行法師
判者 俊成卿

山家客人

野徑亭主

岩戸明しあまつみことのそのかみに櫻を誰かうへ初めけむ

神ち山月さやかなるちかひ有て天の下をはてらす成けり

豊あし原の國のならひととして。なにはつの歌は。人の心を
やはらくる中立と成にければ。是をよまさる人はなかる

へし。しかはあれとも。よしとはいかなるを云。あしとは
いつれを定むへしとは。我も人もしる所にあらざるもの

なり。そのゆへは。あをによし奈良のみやこのとき。えらひ
をかれたる萬葉集は。世もあかりひとの心をよひかたけ

れは。暫くをく。それよりこのかた。紀貫之。凡河内躬恒
等かえらへる所の古今集こそは。歌のもとへは仰へきこ

となるを。同集のうちのを。或ゑにかける女にたと
へ。しほめる花の匂ひのこるによそへ。或商人のよき衣を

きたるといひ。田夫の花のかけにやすめるかことしとい
へり。是等のこゝろをおもふに。撰集は。さま／＼の歌のす

かたをは。わかすそのすちにとりて。よろしきをとりにえら
へる成へし。彼ときより後。四條大納言公任卿。さま／＼
のうたの道をみかき。あるは。とをあまりいつゝかひの歌
を合。あるは三十あまり六つかひのうたをたゝかはしめ。
九しなの歌をさためたり。これすなはち。おほくは古今集
の内をうたを。あるは上か上の品にあげ。あるは下か下の
品にをけり。此等のたぐひは。疑心のむすほゝれぬへけ
れと。先達のこととはをよふ處にあらす。今の世の人は。歌の
よしあしをいはむにつけて。さかひに入さるほとに。しら
さるものなり。抑歌合といふものは。上古にはありけむを。
しるしつたへさりけるにや。亭子のみかとの御ときより。
しるしをかれたれと。あるときは。勝負をつけられす。あ
るおりは。勝負をはつけなから。判の詞はしるされす。村
上の御とき。天徳の歌合よりそ。判のことはかきしるされ
て後。永承。承暦の歌合。ならひに。私のいへにいたるまで。
勝負をつけしるすことになりたる。あるは佛事によせ
て結縁と稱し。或は靈社によせて。神感をかけてつかひを
むすひ。判をつけしむる間。かつは今の愚老にいたるまで。
かたのことく。古きあとをまねひつゝ。をよはぬこゝろに
まかせて。勝負をさたむること。すてに数なく成にけむ。つ

らつらこのことをおもふに。かつは此道の先賢のなきかけにも。みおもはれむこと。その耻かきりなし。いかにいはむや。住吉明神より始奉りて。照しみそなはずらんこと。そのおそれいくはくそや。しかるのみにあらず。齡かたふき。老にのそみて後け。朝に見ること。夕にわすれ。夜半の庭におもふこと。あかつきの枕にとまることなけれは。古き時の謠歌。今の世の作法。見ることきくこと。ひとつも心に殘事なし。よりてちかきとしより此かた。なかくこのことたちをはりにたれと。今上人圓位。壯年のむかしより。たかひにをのれをしれるによりて。二世のちきりをむすひをはりにき。各老にのそみて後。離居は山河を隔るといへとも。むかしの芳契は。且暮にわするることなし。そのうへ。これはよの歌合の儀にはあらざるよし。しゐてしめさるゝ趣をつたへ承によりて。例の物覺えぬひかことゝも。注し申へきなり。さおもふやうの事のつゐてには。哀におもひつゝけられ侍ることをとゝめかたくてなん。むかし天承長承の比ほひより。かくのことく此道にたつさひて。或時は。こやの山の花のもとにつらなり。ある時は。雲井の月の前に見なれしともゝ。むかしの夢にのみなりぬる世に。ひとの數にもあらず。桑の門のすて人と成なから。今まで世になからへて。かやうのすゝることを書付侍るにつけても。竹の窓に露しけく。苦の袂しほりあへかたく侍るを。かゝるもくつのみたれたることのはなから。かけまくもかしこき。神かせのつてに。みもすそ川のみきは。玉くしのはのかけにも。ちり侍らは。おほうち人の中にも。をのつから露の哀にかけられ侍らむや。

一番の一つかひ。左のうたは。春のさくらをおもふあまり。神代のことまでたとり。右歌は。天の下をてらす月をみて。神路山のちかひをしれるも。ともにかくきこゆ。持とすへし。

二番

左

神風に心やすくそまかせつる櫻の宮のはなのさかりを

右

さやかなる鶯の高ねの雲井より影やはらくる月よみのもり

左のさくら宮。右の月よみのもり。又勝劣なし。なを爲持。

三番

左

をしなへて花のさかりに成にけり山のはにかゝるしら雲

右

秋はたゝ今宵一夜のなゝりけりおなし雲の月はすめとも

左歌。うるはしく長高く見ゆ。右のうた。是も歌のすかたいとおかし。十五夜の月をめつるあまりに。今夜一よの名なりけりといへる。心ふかしといへとも。なを殘りの秋をすてむこといかゝときこゆ。左こともなくうるはし。勝と申へからむ。

四番

左

なへてならぬ四方の山への花は皆吉野よりこそ種はとりけめ

右

秋になれば雲のかけのさかふるは月の桂に枝やさすらむ
左右ともに。心有て聞ゆ。但左の初の句。右の中の五もし。

殊歎美のことはにあらすや侍らん。持なるへし。

五番

左

思ひかへす悟りやけふはなからまし花に染をく色なかりせば

右

身にしみて哀しらする風よりも月にそ秋の色はみえける

左の。さとりやけふはなからましといひ。右の。月にそ秋といへる心すかた。ともにおなし。又爲持。

六番

左

春をへて花の盛にあひきつゝおもひ出おほき我も也けり

右

浮身こそいとひなからも哀なれ月をなかめて年をへにける

左右歌。春秋月はことなりといへとも。歌の心はおなしす

ちなるを。思ひ出おほきといへるより。月を詠てとしをへ

にけるといひすてたる。今少まさり侍らむ。

七番

左

ねかはくは花のもとにて春しなむそのきさらきの望月の比

右

こむ世には心の中にあらはさむあてやみぬる月の光を

左の花の本にてといひ。右の來む世にはといへる。ともに

深にとりて。右は打まかせて宜歌の跡なり。左は。ねかはく

はとをきて。春しなむといへる。うるはしきすかたにはあ

らず。此跡にとりて。かみしもあひかなひ。いみしく聞ゆる

也。さりて。ふかき道にいらさらむ輩は。かくよまんとせ

は。かなはさることありぬへし。これは又。いたれるときのことなり。姿は雖レ不相似。なすらへて持とす。

八番

左

花にそむ心のいかで残けむ捨ててゝきと思ふわか身に

右

更にける我世のかけを思ふまに遙に月のかたふきにけり

右歌。いとおかし。但左歌。なをこともなく宜。かちとや申へき。

九番

左

よしの山こそしのしほりの道かへてまたみぬかたの花を尋ん

右

月を待高ねの雲ははれにけり心あるへき初しくれかな

去年のしをりといひ。たかねの雲はといへる。姿こゝろと

もにおかし。持とす。

十番

左

よし野山やかていてしと思ふ身を花ちりなはと人や待らん

右

ふりさけし人の心そしられる今夜みかさの月を詠て

今夜みかさのとをける詞は。優に聞ゆ。ふりさけしといへ

と。初の句や。いかにきこゆらむ。左歌。こともなく宜。勝

と申へからむ。

十一番

左

立かはる春をしれともみせかほに年をへたつる霞成けり

右

岩まとし氷も今朝は打とけて苔の下水道もとむらん

左歌。委心相叶てみゆ。但みせかほにといへる詞。我も人もみなよむことはなり。さはあるながら。猶歌合などには。

ひかふへきにやあらむ。かつは。歌のさまによるへし。右歌。心詞おかし。勝とや申へき。

十二番

左

色つゝむのへの霞のしたもえて心をそむる鶯のこゑ

右

とめこかし梅さかりなる我やとをうときも人は折にこそよれ
左右。春の歌。ともに艶なるにとりて。右は今少おかしき
さまにみゆる。左うた。詞いひとめぬさまながら。心なを
おかし。今少まさるとや申へからむ。

十三番

左

山かつのかた岡かけてしむるのゝさかひに立る玉のを柳

右

降つみし高ねのみ雪解にけり清瀧かはの水のしら波
左うた。さることありとみる心ちして。めつらしきさまな
り。すゑの句。をの字や少いかゝ。さもよみてはへるかと
よ。右うた。すかた面白みゆ。まさると申へし。

十四番

左

つく／＼と物思ひをれば郭公心にあまる聲聞ゆなり

右

うき世おもふわれかはあやなほとゝきす哀こまれる忍ねの聲
兩首のほとゝきす。ともに心こもりて。よき持なり。

十五番

左

鶯の古巢よりたつほとゝきすあるよりもこき聲の色哉

右

きかすともこゝをせにせむ郭公山たのはらの杉のむら立

古き歌合の例は。花をたつぬるにも。みるをまさるとし。ほとゝきすを待にも。きけるを勝とすることなれとも。是はたゝ。うたの勝負を申へきなり。あゝよりもこき。心おかしく聞えながら。又おり／＼人よめる成へし。山田の原のといへるすかた。凡俗及ひかたきに似たり。勝と申へし。

十六番

左

ほとゝきす深き峯より出にけり外山のすそに聲の落くる

右

五月雨の霽間もみえぬ雲路より山郭公鳴て過なり

右歌。難とすへき所なく。高く聞ゆ。左うた。ほとゝきすふかきみねよりいてゝ。外山のすそにこゑのおつらんほと。今まさしく心地して。めつらしくみゆ。左まさると申侍らむ。

十七番

左

哀いかに草はの露のこぼる覽秋風たちぬ宮城のゝ原

右

たなはたの今朝の別れの涙をほしほりやかぬる天のは衣
左右の初秋の歌。ともに曉なるへし。但右は。かやうの心
聞なれたるへし。左みやきのゝはら。おもひやれるこゝろ。
なをおかしく聞ゆ。まさるへくや。

十八番

左

大かたの露には何の成ぬらん袂にをくは涙なりけり

右

心なき身にも寢はしられけり鳴立澤の秋の夕暮

鳴立澤といへる。こゝろ幽玄に。すかたをよひかたし。但
左のうた。露には何のといへる詞。あさきに似て心殊ふか
し。勝と申へし。

十九番

左

あし曳の山陰なれはと思ふまに梢に告る日くらしの聲

右

山里の月待秋のゆふくれは門田のかせの音のみそする

左のうた。こすゑにつくるといへる。心ふかく。ゆへあり
て聞ゆ。但此まにといへる詞は。又人常によむことなれと。
なをおもふへくやとおほえ侍る。かやうの事は。人かへり
てわらふへきことなり。しかあれとも。一身思ふ所を。此
次に申出るなり。右歌は。難とすへき處なくはみえな
から。又よみつへきことにや。なを左末の句。心まさると申
へきなり。

廿番

左

長月の月のあり明のかけふけてすそのゝ原にをししか鳴也

右

月見はと契りをきてし古郷いとしの人もや今宵袖ぬらす覽

すそのゝはらといへる。心ふかくして。姿さひたり。但人
もや今宵といへる。詞をかさらすといへとも。哀殊にふか
し。右なをまさるへし。

廿一番

左

蜚夜さむに秋のなるまゝによはるか聲の遠さかり行

右

松にはふまさのはかつらちりにけりと山の秋は風すさふらん
左右ともに。すかたさひ。詞おかしく聞え侍り。右のまさ
のはや。少いかにぞ聞ゆれと。やまの秋はなといへる末の
句。優に侍れは。持と申へくや。

廿二番

左

霜さゆる庭の木のはをふみ分て月はみるやととふ人もかな

右

山河にひとりはなれて住をしの心しらるゝ波の上哉

右歌。いみしく艶にはきこゆれと。左歌。心すかた殊宜。勝。

廿三番

左

大原やひらの高ねのちかければ雪ふる里を思ひこそやれ

右

枯野うつむ雪に心をしらすればあたりの原に雉子鳴也

左歌は。たゝ詞にして哀ふかく。右は。こゝろこもりて姿

たけ有。なすらへて爲レ持。

廿四番

左

數ならぬ心のとかになしはてししらせてこそは身をも恨みめ

右

もらさてや心の底をくまれまし袖にせかるゝ涙なりせは
兩首の戀。共にこゝろふかしといへとも。右のうた。なを
よし有てきこゆ。まさるへくや。

廿五番

左

あやめつゝ人しるとてもいかゝせむ忍ひはつへき袂ならねは

右

たのめぬに君くやと待宵のまの更ゆかて只明なましかは
左。しのひはつへきなといへる末の句は。いとおかし。初
の五もしや。いかにそ聞ゆらむ。右歌。心ふかくやあらむ。
又勝とすへし。

廿六番

左

世をうしと思ひけるにそ成ぬへき吉野ゝおくへ深く入なは

右

斯る身をおほしたてけむたらちねの親さへつらき戀もする哉
左。よしのゝおくへ入。右の。親さへつらきの心。ともに
ふかくそきこゆ。大かたは。此いつこへと云への字は。こ
れ又ふるくもちかくも人よむことにはあれと。こひねか
ふへきにはあらざる也。是もおもふ所を。つゐてに申出る
なり。但歌のほと持とす。

廿七番

左

人はこて風のけしきも更ぬるに哀に鴈の音信て行

右

物おもへとかゝらぬ人も有ものをくやしかりける身の契り哉
左も。心ありておかしくはきこゆ。右歌宜。まさると申へ
し。

廿八番

左

なけゝとて月やは物をおもはするかこちかほなる我涙かな

右

しらさりし雲井のよそにみし月の影を袂にやとすへしとは
左右兩首。ともに心ふかく。姿優なり。よき持と申へし。

廿九番

左

あくかれしあまの河原と聞からにむかしの浪の袖にかゝれる

右

津の國の難波の春は夢なれやあしのかれはに風渡る也
ともに幽玄の跡なり。又爲レ持。

卅番

左

しけきのをいく一村に分なして更にむかしを忍ひかへさん

右

枝折せて猶山ふかく分いらむうきこときかぬ所有とや
左。こゝろことにふかし。右いとふ心またふかしなを可
レ爲レ持。

卅一番

左 曉の嵐にたくふ鐘の音を心の底にこたへてそ聞

右

よもすから鳥の音おもふ袖の上に雪は積^{ツキ}らて雨しは^{スミ}りけり

右歌。末の句なとおかし。但左歌。ことに甘心す。仍爲^レ勝。

卅二番

左

花咲し鶴の林のそのかみをよしのゝ山の雲にみる哉

右

風かほる花の林に依^ヨれて積^{ツキ}るつとめや雪の山みち

左。鶴林をよしのゝおくに察し。右。春風の花前に雪山を思へる。心すかた無^レ勝劣^ニ可^レ爲^レ持。

卅三番

左

驚の山思ひやるこそ遠けれと心にすむは有明の月

右

あらはさぬ我心をそ恨むへき月やはうときをは捨^スの山

二首。尺数のこゝろ。左は雲驚山をおもひ。右はをはすて山をひけり。天竺^{テンシク}如^ニ國^ニ雖^モ各^ノ別^ニ所^ノ詮^ハは。心月輪^{シンゲツリン}を觀^ミせり。

歌の品も又同心。仍なを爲^レ持。

卅四番

左

わか葉さすひらのゝ松は更にまた枝にやちよの數をそふ覽

右

澤邊よりす立はしむる鶴の子は松の枝にや移^ユり初覽

左歌は。ひらのゝ松にわかをはさしめたり。定てそのゆ

へありけんかし。右歌は。たゝ澤への鶴の子の。松にうつりそめたるは。悦のこゝろ。左には及かたくやと覺え侍れと。うたのほとは。なを持成へし。

卅五番

左

くもりなき鏡の上にゐる塵をめにたてゝみる世とおもはゝや

右

たのもしな君々にます折にあひて心の色を筆に染つる

左右ともに。由緒ありけむとはみえなから。左は。訴訟の

こゝろ有。右。聖朝にあへるにゝたり。仍右爲^レ勝。

卅六番

左

ふかく入て神ちのおくを尋れば又うへもなき峯の松風

右

流たえぬ波にや世をはおさむらん神風涼しみもすそのきし

左歌は。心詞ふかくして。愚意難^レ及。右歌も。神かせ久し

く。みもすそのきしに冷からんこと。勝劣の詞くはへかたし。仍持と申へし。

まことにや。此歌はしめに。もゝ枝の松と侍るは。愚詠たてまつるへきにやとて。

ふちなみもみもすそ川のすゑなれば

しつえもかけよ松の百枝に

副送二首

契りをさしちきりの上にそへをかむ

副送二首

わかのかうら地のあまのもしほ木

このみちのかたきさとりをおもふまに
蓮ひらはまたゝつねみよ

かへし

わかのうらにしほ木かさなる契りをは
かけるたくものあとにてそしる
さとりえて心のはなのひらけなは
たつねぬさきに色そゝむへき

表紙にかける歌

藤なみをみもすそ川にせきいれて
もゝえの松にかけよとそおもふ

此歌諸本闕今據古今著聞集附之

宮河歌合

作者 西行法師
判者 定家卿

一番

左

玉津嶋海人

萬代を山田の原のあや杉に風しきたてゝ聲よはふ也

右

三輪山老翁

流れ出て御跡たれますみつかきは宮川よりやわたらひのしめ

左右歌。義隔二凡俗。興入二幽玄。杉上之風聲。摸二柿本之露
詞。見二宮河之流。深二省海之底。短慮易レ迷。淺才難レ及者
歟。仍先爲レ持。

二番

左

くる春は峯に霞を先たてゝ谷のかけひをつたふなりけり

右

わきてけふ逢坂山のかすめるは立おくれたる春やこゆ覽

左。さきたつ霞に。谷の道の春をしり。右は。おくれたる春
を。關山のかすみにみる。詞はかはれるに似て。心はすて
におなしければ。峯に霞をとをきて。谷のかけひをといへ
る。よき歌にも。おほくよめることには侍れと。此右のう
たは。今少とゝこほる所なく。いひくたされ侍れは。まさ
るへくや。

三番

左

若な摘のへの霞そ哀なるむかしを遠く隔と思へは

右

わかななる春の野守に我なりてうきよを人につみしらせばや
右の歌も。詞たくみに。こゝろおかしくはみえ侍るを。す
ゑの句や。なへての歌には。なをいかにそ聞ゆらむ。むか
しをへたつるのへの霞は。あはれなるかたも。立まさり侍
らむ。

四番

左

古集うとく谷の鶯なりはては我やかはりて鳴んとす覽

右

色にしみ香もなつかしき梅かゝにおりしもあれや鶯の聲
右。對三紅梅之濃香。感三黃鳥之妙曲。左。聞新語之好音。

五番

左

雲にまかふ花の盛を思はせてかつ／＼霞むみよしのゝ山

右

ふかく入と花の咲なむおりこそあれともに尋ん山人もかな

左歌。こゝろ詞誠におかしくも侍るかな。花より先にはな

を思へる心も。おなしやうなるを。右の句は。なを艶に聞
侍れと。よしの山の春のけしきも。なをとると申かた
くや。

六番

左

としをへて侍も惜も山きくら花に心をつくす也けり

右

花を待心こそなをむかしなれ春にはうとく成にし物を

春にはうとく成といへる。哀には聞え侍れと。左もはな
をおもへるこゝろふかく。詞やすらかにいひ下されて侍
れは。又同ほとのことによ。

七番

左

山櫻かしらの花におりそへて限の春の家つとにせむ

右

花よりも命をそ猶おしむへき待つくへしと思ひやはせし

左。限の春のといひ。右の。命をそなをといへる。何も哀
ふかくは侍るを。かしらの。はなにとをける。此歌にとりて
は。さこそはとみゆれと。雪霜なとは。つねにきゝなれた
ることなるを。花といへるも有ことにはあれと。いかゝと
聞え侍るにや。大方は歌合のために。よみあつめられたる
に侍られは。かやらのことけ。しゐて申へきにはあらねと。
右のうた。耳にたつ所なきに付て。勝と申へし。

八番

左

おしまれぬ身たにも世には有ものをあなあやにくの花の心や

右

浮世にはとゝめをかしと春風のちらすは花をおしむ成けり

右。花を思ふあまりに。ちらすかせをうらみぬこゝろ。誠
ふかく侍へき上に。左の。あなあやにくのとをける。人常
によむことには侍れと。わさと艶なる言葉にはあらぬに
や。ちらすは花をなといへる。猶まさりはへらむ。

九番

左

世中を思へはなへてちる花のわかみをさてもいつちかはせん

右

花さへに世をうき草になりけり散をおしめはさそふ山水

有歌。心詞顯て。姿もいとおかしくみえ侍は。山水の花色

心もさそはれ侍り。左歌。世中をおもへはなへてといへるより。終りの句のすゑまで。句ことに思ひ入て。作者の心ふかくなやませる所侍れは。いかにもち侍らむ。

十番

左

風こしの峯のつゝきに咲花はいつさかりともなくや散らん

右

風もし花をもちらせいかにせん思ひ出れはあらまうきそよ左は。よのつねのうるはしき歌のさまなれと。有。風もしとをけるより。終の句の末まで。心詞たくみそ人のおよひかたきさまなれは。勝と申へし。

十一番

左

かそへねとこよひの月のけしきにて秋のなかはを空にしる哉

右

月のすむ淺茅にすたく螢露のをくにや夜をしる覽

仲秋三五夜天。歌のすかたたく。詞きよくして。二千里のほかも。眞に残るくまなからむと思ひやられ侍れは。淺茅か下のむしの音。月の光は同くひるにまかふとも。露のこと葉は。なを空に及かたくやはへらむ。

十二番

左

きよみかた興の岩こすしら波に光をかはす秋のよの月

右

月すみてふくる千鳥の聲すなり心くたくやすまの關守

清みかた。すまの浦。關の名所の様。左まさる。右おとるとは。まことに申かたく侍れと。姿につきては。なを岩こすなみによる心をおもへは。又夜ふかく關にとまりぬへく侍を。崇徳院の百首御製の中に。浦半のかせに空はれてと侍れは。近き世の事なれと。玉のこゑ久敷と、まりて。今はむかしといふばかり。時隔り侍にけれは。なを右の勝とや申へからん。

十三番

左

山かけにすまぬ心はいかなれやおしまれて入月も有世に

右

いつくとて哀ならすはなれとも荒たる宿そ月はさひしき左右の。こゝろすかた。うるはしくたりて。いつれと申かたけれと。あれたるやとそ月はさひしきと。いひはてたる。よろしくも侍る哉。

十四番

左

月の色に心をふかく淬ましや都をいてぬ我身なりせは

右

わたの原波にも月はいくれけり都の山を伺いとひけむ兩首歌。洛外の月色。海上之曉影。又しめてわきかたく侍れと。有。浪にも月はいへる。今少つよくきこえ侍らん。

十五番

左

世中のうきをもしらてすむ月の影は我みの心ちこそすれ

右

かくれなく藻に住むしはみゆれとも我からくもる秋のよの月
右歌。みるへき月をわれはたと云。古きころおもひい
てられて。くもるなみたもあはれふかく。藻にすむむし。
かくれぬ月の光も底清く侍れは。まさるとや申へき。

十六番

左

うき世には外なかりけり秋の月詠るまゝに物そかなしき

右

すつとなら浮世を厭ふしるしあらん我みは曇れ秋のよの月
月はうきよと云歌のことには付て。こゝろをおもへは。と
もに心ふかく見え侍れは。持とや申へからむ。

十七番

左

秋きぬと風にいはせてくちなしの色にそ浮る女郎花哉

右

花か枝に露のしら玉ぬきかけて折袖ぬらすをみなへしかな
左歌。かせにいはせて口なしのなといへる。いと宜はみえ
侍を。右歌のすかた心なを尤優なり。仍爲勝。

十八番

左

山里はあはれなりやと人とは、鹿の鳴ねを聞とこたへん

右

小倉山麓をこむる夕霧に立もらさるゝさほしかの聲

立もらさるゝさほしかの聲。きかぬ袂までつゆをく心ち
しはへれは。なを勝と申へし。

十九番

左

白雲をつはさにかけて行鷹の門田の面の友したふなり

右

鳥羽に書玉章の心ちして鷹なきわたる夕やみの空
からすはの玉章。跡なきことにはあらねとも。近き世より
人々このむことに侍へし。左歌。こゝろ詞。こひねかはれ
はへれは。勝と申へし。

廿番

左

秋しのや外山の里やしくるらんいこまの嶽に雲のかゝれる

右

なにとなく心をさへは盡すらむわかなけきにて暮る秋かは
心をさへはつくすらんなどいへる。ことはのよせありて。
ことなるとかなく侍れと。いこまのたけに雲をみて。外山
のさとまで時雨を思へる心。なをゆかしく聞え侍れは。左
の勝とや申へからむ。

廿一番

左

ますけおふる荒田に水をまかすれはうれしかほにも鳴蛙かな

右

水たゝふ入江のまこもかりかねてむなてに過る五月雨の比
左右のこゝろすかた。おなし様のことに侍へし。あら田に

水をといひ。むなにて過るといへる。何もいひしりて聞え侍は。よき持に侍り。

廿二番

左

ほとゝきす谷のまにゝ音信て哀にみゆる藤つゝしかな

右

人聞ぬふかき山へのほとゝきす鳴音もいかにさひしかる覽

左歌。面影ありて。優にこそ侍めれ。右歌も。鳴ねもいかに

なといへる。誠にさひてはきこゆれと。左の詞。谷のまに

まに。なをふかく思ひ入たる所侍れは。勝と申へし。

廿三番

左

しのをるあたりも涼し河社柳にかゝる波のしらゆふ

右

楸生てすくめとなれる陰なれや浪うつきしに風渡りつゝ

左右歌。波のけしき。納涼の心。わくへきところ侍らぬに

や。

廿四番

左

霜うつむむくらの下のきりゝす有かなきかの聲きこゆなり

右

をくら山ふもとの里に木葉ちれば梢にはるゝ月をみるかな

兩首歌。左。暮蘊霜底明。暗萎殘聲。右。寒夜月前望。黃葉落

色。意趣各宜。歌品是同。仍爲持。

廿五番

左

よしの山ふもとにふらぬ雪ならば花かとみてや尋いらまし

右

風寒てよすれはやかて氷つゝかへる波なきしかのから崎

右も。うるはしき様に宜侍れと。歸浪なきといへるより

は。花にまかふよしの雪。ふりてや聞え侍らむ。仍以左

爲勝。

廿六番

左

をしなへて物を思はぬ人にさへ心をつくるあきのはつかせ

右

たれ住て哀しるらん山里の雨降すきむゆふくれの空

左の秋風。右の夕雨。心かれこれにみたれて。又わきかた

く侍れは。持とや申へからむ。

廿七番

左

我こゝろさこそ都にうとからめ里のあまりになかゝりてける

右

ほとふれはおなし都のうちに覺束なきは問まほしきを

右歌。姿さひて。いと哀にも聞え侍るを。左なをとゝこほる

所なく。いひなかされて侍れは。まさるとや申へからむ。

廿八番

左

時雨かは山めぐりする心かないつまでとのみうちしほれつゝ

右

わかやとは山のあなたにある物を何とうき世をしらぬ心そ

しくれかはとをけることも。いつまでとのみしほれつゝ

といひはてたる木の匂も。なを左まさり侍らん。

廿九番

左

年月をいかて我身に送りけむ昨日の人もけふそなきよに

右

むかし思ふ庭に薪をつみをきてみしよにもにぬ年の暮哉

きのふの人もけふはなきよ。誠にさることゝ聞えて。いと

哀には侍るを。庭に薪をつみをきてとをける。定ておもへ

るところあらむと見侍るうへに。みし世にも似ぬとしの

くれかなといへるも。なを優にきこへはへれは。勝とや申

へからむ。

卅番

左

またれつる入相の鐘の音すなりあすもやあらは聞むとすらん

右

何ことにとまる心の有ければ更にしも又世のいとはしき

左の。かねの音にこゝろつきはてゝ。まさると申へきを。

右の歌。更にしも又といへり。まくへきうたの詞とはみえ

侍らねは。勝負又分かたぐや。

卅一番

左

なき人をかそふる秋のよもすからしほるゝ袖や鳥へのゝ露

右

はかなしやあたに命の露消てのへにや誰も送りをかれん

をくりをかれん哀もあさくみなさるゝには侍らねと。左

の下句。猶なかし夜の袖露もふかくをきまさる心地して

侍にや。仍爲レ勝。

卅二番

左

道かはるみゆきかなしきこよひ哉限りのたひとみるに付ても

右

松山の波になかれてこしふねのやかてむなく成にける哉

左右ともに。舊日之往事。故不_レ加_レ列。

卅三番

左

浮世とて月すますなることあらはいかにかすへきあめの下人

右

なからへて誰かは更に住とけむ月かくれにし浮世成けり

左。月をおもふあまりの心に侍めり。右。生滅無常しれる

詞のつゝき。又耳にたつ所侍らねは。侍と申へし。

卅四番

左

身をしれは人のとかとは思はぬに恨かほにもぬるゝ袖かな

右

中々になれぬ思ひのまゝならは恨はかりや身につもらまし

左も。心有様なれと。右なを優に聞え侍れは。勝と申へし。

卅五番

左

哀とてとふ人のなとなかる覽物思ふ宿の萩の上風

右

おもひしる人有明の世なりせはつきせす身をは恨さらまし

左歌。誠に宜みえ侍を。右の。人あり明のよなりせはとい

卅六番

へる。なをとると申かたくや。

左

逢とみしその世の夢のさめてあれな長き眠はうかるへけれど

右

哀々此世はよしやさも有はあれこむ世もかくや苦しかるへき

兩首の歌。こゝろともふかく。詞おひやかたきさまにみえ侍るを。右のこの世とをき。こん世といへる。ひとへに風情を先として。詞をいたはらすはみえ侍れと。かやうの難は。此歌合に取ては。すへて有ましきことに侍れは。なすらへて。又持とや申へからむ。

神風。宮河の歌合。勝劣しるしつくへきよし侍しことは。玉くしけ二とせあまりにも成ぬれは。かくれては。宮をまもる神の。ふかく見そなはさんことを恐れあらはれては。家につたはらむことのはに。あさき色を見えむことを。つゝむのみにあらず。わづかにみそもしあまりをつらぬれと。いまた六のすかたの繩をたにしらす。をのつから難波津の跡をならへとも。さらに。いつも八雲の行衛。くらくのみ侍るうへに。もろこしのむかしのときたにも。いく百とせのうちにや。詩人才子。文躰三度あらたまりにければ。まして。やまと詞のさたまれる所なき心交。いつれをあしよしといひ。いかなるをふかしあさしと思ひはかるへしとは。たれにしたかひて。なにをまことししるへきにもあらず。時により所につけ。このみ。よみし。ほめ。そしる。ならひにてそ有へき。しかるを此歌合は。わさとしくみおもひて。合つかはれたるにもあらず。たゝおほくのとし比。つもれることのはをひろひて。ならひぬへきふし。かよへるところと

ころ。思ひ合つゝ。左右にたてられて侍れは。ことの心暗に。歌のすかた高くして。空よりもはかりかたし。つもる哀はふかけれと。雪間の草のみしかき言葉。みたれてかきあらはさむかたもなく。おもふふししけれと。浪路のあしのうきたる心のみ。たゝよひて。うち出へきことも。おもひたかへられぬれは。春のあらたのかへし。思ひやみぬへくなりぬれと。ひしりのちきりをあふき奉ることも。此代ひとつのあたのよしみにあらず。佛の道に。さとりひけむあしたは。ひるかへす縁と。むすひをかむためにと思ひ。又は高きいやしき。そこら道をこのむともからをゝきて。よはひいまた三そちにをよはす。位猶いつゝのしなにしつみて。三笠山の雲のほかに。ひとり拾遺の名をはち。九重の月のもとに。久しく陸沈のうれへにくくたけたる。淺茅の本荳の下のちりの身を尋て。うらのほまゆふのかきなれる。あ。まさきのかつら。たえぬみちはかりをあはれみて。鈴鹿の關のふりはへ。八十瀬の波のたちかへりて思ゆゑあり。なをかならずつとめをけと侍しかは。宮河の清きなかれに。ちきりをむすひ。位山のとゝこほる道までも。御しるへや侍るとて。今き。後みむ人のあさけりをもしらす。むかしをあふき。古きを忍ふこゝろひとつにまかせて。かきつけ侍りぬるになん。君はまつらき世の夢はさめぬとも

てイ

おもひあはせむのちの春秋

かへし
春秋をきみおもひ出はわれはまた
月と花とをななめをかなむ

文治五年八月日書寫之。清書伊經朝臣云々。銘左大將殿。此本。烏丸殿御本申請也。

古今著聞集云

圓位上人。昔よりみつからかよみをきて侍歌を。撰出して。卅六番につかひて。御蒙濯川歌合と名付て。色々の色紙をつきて。慈鑱和尚に清書を申。俊成卿に判の詞をかゝせけり。又一卷をは。宮川歌合となつて。これもおなし番につかひて。定家卿の五位侍從にて侍けるとき判せさせけり。諸國修行の時も。おひに入て身をはなたさりけるを。家隆卿のいまたわかくて。坊城侍從とて。寂蓮か牟にて同宿したりけるに。尋行ていひけるは。圓位は往生の期すてに近付ぬ。此歌合は。愚詠をあつめたれとも。秘藏の物なり。末代に貴殿はかりの歌よみは有ましきなり。おもふ所侍れは。付屬したてまつるなりといひて。二卷の歌合をさつけゝり。けにもゆしくそさうしたりける。彼門非重代の身なれとも。よみくち世のおほえ人にすくれて。新古今の撰者にくはゝり。重代の達者定家卿につかひて。其名をのこせるいみしき事なり。まことにや後鳥羽院。はしめて歌の道御さた有ける比。後京極殿に申合まいらせられけるとき。彼殿奏せさせ給けるは。家隆は末代の人丸にて候也。彼か歌を。まなはせ給ふへしと。申させたまひける。これらをおもふに。上人の相せられける事思ひ合せられて。めてたくおほえ侍なり。彼二卷の歌合に。いづれ宰相局のもとに傳はりて侍にや。

右二歌合以古宮二本按合畢且抄出古今著聞集以備考證也

群書類從卷第二百十八

和歌部七十三 自歌合二

慈鎮和尚自歌合

大比叡十五番

小比叡十五番

聖眞子十五番

八王子十五番

客人十五番

十禪師十五番

三宮十五番

大比叡十五番 日吉社歌合

一番

左將

しかの浦や波まにかけをやとすかなわしのみ山のあり明の月

右

攝政

いにしへの鶴のはやしに散花の匂ひをよするしかの浦かせ

歌のみちは。あきつしまのならひ。日のもとと國のことわ

きとなりければ。此世にむまれぬるおとこ女。我國にあ

とをたれたまふ神ほけも。このみもてあそひ給ふなるへ

し。其中にも。いにしへより此道をおもへるともから。折

々に絶さるへし。いはゆる。あかりては。柿本人麿呂。山邊

赤人。それよりくたりては。在原業平朝臣。花山僧正并素性

二番

左將

法師。紀貫之。凡河内躬恒。忠岑等なり。歌のよしあしきをも。かやうの人々やおもひわくへかりけむ。今のよにはいかなるをよろしきといふへきそとも。しれる人はかたかるへし。しかるに今二百首の和歌を百番につかひて。七の御社の寶の御前に。おのゝ十五番にてたてまつり給ふことあり。よりてこのおとりまさりをするしたてまつるへきよし仰。かゝること。かつはかむことにことをよせ。且は結縁のためなり。しゐていなひ申さは。ほいなくもなりぬへく。かくれてのおもひもありぬへし。またしりかほにして申せは。既未得。謂レ得。未證謂レ證の罪。さりかたく成ぬへければ。神事といひ。結縁といひ。のかれかたきによりて。癡狗のつちくれをくひ。犂牛の尾をあひするかことし。おろかなる心。みしかき詞にまかせてしるし申へきなるへし。ねかはくは。和光同塵のあはれみにてらして。みそなはしゆるされむことをなむ。かしこみも申といへることしかり。抑。一番のつかひ。左。鶯の峯の秋の月光をやとし。右は。鶴の林の春の花匂ひをよせたる。兩方の本地。春秋の花月。いつれを勝と申かたきによりて。同じ品とす。

しかの浦にいつゝの色の波たてゝあまくだります古への跡

右

おほけなくうき世のたみにおほふかな我たつ袖のすみ染の袖

此右歌は。はしめの五文字より。心おほきにこもりて。末

の匂ひまで。いみしくおかしくは侍るを。左方。志賀のう

ら波の色。ことに身にしむこゝちして。いにしへのあと。

猶たちまさるへくや侍らん。

三番

左 立春

あさみとり春は霞のたつた山よはにや年もひとりこゆらん

右 月題

よしの山はつ春風のけさはまつ櫻かえたをいかゝとふらむ

左は。たつたの山のよはの霞。右は。よゝ野山の春風。とこ

ろさまも。歌のすかたも。ともに艶には侍るを。猶左の。よ

はにや年もといへる。まさると申へくや侍らむ。

四番

左 山ふかくすむころ花をみて

柴の戸に匂はむ花はさもあらはあれ眺てけりな恨めしのみや

右 すけののち花をみて

雲のうへの春こそ更にわすられね花はかすにも思ひいてしを

左のうたは。心かきりなくふかくこそみえ侍れ。右の歌。

是はむかしよめりけむ歌七首。結縁のためししたてま

つれと侍しうちの歌にこそ侍りけれ。此歌。ことなること

侍らす。たゝ花は数にもといふ末の匂ひにこそ。よろしく

おもひ給ひて。しるし奉りけるに侍れ。たゝいさゝかもか

きりたる所なく。申へきよし侍りしかは。末の匂ひはかり

は。すこしよろしきにや侍らむ。かへすゝも。かたはら
いたく侍り。

五番

左 更衣

散はてゝ花のかけなき木下にたつことやすき夏衣かな

右 卯花

このころは櫻か枝に雲はれて卯の花かきに月をみるかな

左は。かのみつねか春をおもはぬときたにもといふ歌を。

更衣にひきよせて。たつことやすき夏衣かなと侍り。誠に

おかしくこそ侍れ。右又。櫻かえたに雲はれて卯花垣に月

をみむこゝろ。いみしくみえ侍れは。いつれを勝と申かた

くなむ。

六番

左 秋の歌の中に

草木まで秋のあはれを忍へはや野にも山にも露こぼらん

右 同

野へことにくさの袂のしほるれは露にそみゆる秋の哀は

左右のうたの哀は。心すかたいつれとなく侍れと。しみて

吹も侍れは。右の歌の中に。しほるれはといひ。下旬に秋

のあはれはとはへりけるを。みたまへいたして。歌合にか

やうのことまでは。とかとせぬことも侍れと。是にことを

よせて。左まさると申へくやとそ。おほえ侍る。

七番

左 大宮のはし殿にて

照月の光とゝもになかれきておとさへすめる山川の水

右 月あかき大嶽をのほるとて

大たけの峯ふく風に霧はれてかゝみの山に月そくもらぬ
峯ふく風に霧はれてといひて。かゝみの山みわたされむ
暁と。誠にすかたもたかく侍るを。左の歌。光ともにな
かれきて。音さへすめる山河のけしき。かきりなくや侍ら
む。

八番

左持 月の歌の中に

月かけの入ぬるあとに思ふかなまよはんやみのゆくすゑの空
右 おなし

かへりてゝのちのやみちをてらさん心に宿る山のはの月
此左右のうた。又いりぬるあとにおもふかなといひ。心に
宿る山端の月と侍る。すかた心ともにふかくして。およひ
かたく侍り。よりて持と申へくや。

九番

左勝 冬のうたの中に

なかもわひぬたつたの里の神無月この葉ふみわけとふ人も哉
右 おなし

霜さゆる山田のくろのむら薄かる人なしに残るころかな
左のうた。立田のさとの神無月。まことに心ほそくおもひ
やられ侍り。この葉ふみ分といふこそ。古今にも侍るを。
圓位と申上人も。よみて侍りしか。これはたつたのさと。
めつらしくも侍れは。猶左まさりはへらむ。

十番

左勝 冬のうたの中に

難波かたまつのあらしに雲消て月の氷にをしそたつなる
右 千鳥

よさのうらひとりうきねのかち枕たゝ我ための友千とりかな
左。なにはかた。右よさのうら。所のありさま。ともにおか
しくはおもひやられ侍るを。猶月の氷にたつらんをしの
羽風。こゝろすかたいますこし艶にや侍らん。左の勝と申
へからん。

十一番

左持 初戀

君か宿の萩の上葉のいかならんけふきゝそむるこひのはつ風
右 寄風戀

心あらは吹すもあらなむよひくゝに人まつ宿の庭のまつ風。
左右歌。けふきゝそむる戀の初風。人待宿の庭のまつ風。
ともにすかた心かきりなくみえ侍り。いみしき持と侍へ
し。

十二番

左勝 述懐

よの中をいまはの心つくからにすきにしかたそいとゝ戀しき
右 同

よをいとふ心のふかくなるまゝに過る月日をうちかそへつゝ
兩首の述懐。いつれを勝と申かたく侍れと。おなしとのみ
いかゝとて。左のいまはの心。いま少し勝と申へくや侍ら
む。

十三番

左勝 無常

なかきよの夢のわかれと思へとも又此世にはあはんものかは
右 同

左右の無常心すかたともに。ありかたくこそみえ侍れ。
又このよにはといひ。人はいかにとおとろけはといへる。
いつれをかちと申かたく侍れと。猶左の歌。別の心哀はか
きりなく覺え侍るにや。よりて勝と申へくや。

十四番

左勝 報恩舍利講に

けふの法はわしの高根に出しひのかくれて後の光也けり

右 同

諸人のうつもれしなをうれしとや苔の下にもけふはみるらん
左の。わしの高根の歌。まことに及ひかたし。右の。苔の下
にもといへる。哀もかきりなくは侍るを。猶かくれての後の
光也けりと侍る。ことにめつらしく侍るにや。勝と申へ
くや。

十五番

左持 塵點本

ある塵のつもりてたくなる山のおくよりいてし月をみる哉

右 朱顯眞實

むねの月はけふのみそらをまつとてや四十の雲に雲隠れけん
左の塵點の山。右よそちの雲。ともに勝劣難れ分。おなし科
とす。

身のうさはひよしの山も雲やおほふ心の闇に

なをまよふらむ

小比叡十五番

一番

左持

やはらくるかけそ旒にくまそなきもとの光は峯にすめとも

右 攝政

あさ日さすそなたの空の光こそ山かけてらすあるし也けれ

左の歌。和光の影。ふもとにくまなく。右の歌。東方の光。
地主とあらはれますす心。共に無勝劣。おなし科とす。

二番

左勝 述懷 入道殿

をのつからちかひの塵をさとりえて人にすきたる恵をそまつ

右 同

まつのかとあとを思はぬ身也せはまことに家を出ましものを
右の。まことに家をといへるこゝろも。誠にさることに侍
れと。猶左のちかひの塵。ふかくや侍らむ。よりて勝とす
へし。

三番

左持 春の歌の中に

用兒のうらの波に霞の色さえて春のみなとのあり明の空

右 同 釋阿

又やみむかたのゝみのゝ櫻かり花の雪ちるはるのあけほの

此右の歌。又奉詮侍し内也。是は櫻かりと申ことを。人の
あしく申方の侍れは。ことのついでに申來らんとて。つか
ふまつられしうへに。すこしはよろしきにやと。おもふ給
へ侍りしを。此左のうた。波に霞の色さえて。春のみなと
にあり明の月と侍るこそ。いみしくおかしくみえ侍れ。ま
さると申さまほしく侍れと。かたのゝみのも。さすかにお
ほえ侍りて。おなし科にや侍るへからむ。

四番

左持 花の歌の中に
はな故にとひくる人の別までおもへはかなし春の山かせ

右 同

散る花のふる里とこそなりにけれ我がすむ宿の春の暮かた

左。とひくる人の別までといへる心。春の風のうらみ。まことにしかるへきことなり。右の歌。又末の句など。いとおかしくはみえ侍るを。なを左はすこしまさるへくや侍らむ。

五番

左持 郭公

郭公きゝつとやおもふさみたれに雲の外なる夜半の一こゑ

右 夏草(本ノマ)

ほとゝきすなく一こゑのよはなれは秋にはよひの有明の月

左右兩首。心ともにふかくして。勝劣不分明。持とすへし。

六番

左持 秋の歌の中に

身にとまるおもひを萩のうはゝにて此頃かなし夕暮の空

右 鹿の歌

むへしこそ此頃物はかなしけれ秋はかりきくさをしかの聲

兩方のこゝろ。いつれまさとおもひ分かたたく侍れと。猶左。おもひを萩のといへる心。まさるへくや侍らむ。

七番

左持

月の歌の中に

きよみかた月の光のさえぬれは波のうへにも霜はをきけり

右 同

うちよする波にあり明の月さえて秋やかなしきすまの關守

左。きよみかせき。右。須磨のせき。所のさまの。月の光も。あはれふへき方侍るにとりて。左。波のうへにも霜はをきけりといへる心。猶めつらしさもかきりなくみえ侍り。勝とすへし。

八番

左持

秋田

右

わきてなと庵もる袖のしほるらんいなはにかきる秋の風かは

右 秋の歌の中に

あはつのゝ尾花かもとに吹こめて風になみこす山おろしかな

此兩首。又さらに甲乙わかちかたく侍り。右尾花か下に吹こめてといへる心。ことにおかしく侍を。しむてのことに。

初の五文字や。すこしきゝへて侍らんとて。左のすかたこ

とは。はしめおはり。をろかなる所なきにやとて。猶左ま

さるへくや侍らむ。

九番

左持

冬の歌の中に

月をおもふ秋のなこりのゆふ暮に木陰吹はらふ山嵐のかせ

右 月あかりけるよ三位入道のもとへ(脱稿)

霜枯る籬のすゝき秋にうへておなしみそらの月をみるかな

右のうた。もとよりかきりなくおもふ給ひ侍しを。左。歌。木

陰吹はらふといへるこゝろ。又おとるへしともみえず。同

料とす。

十番

左持

寄雲戀

戀しぬる夜はのけふりの雲とならは君か宿にや分てしられん

右 同

雲さく夕のそらを君はよも我たくひとやなめさるらん
左右の戀。心ともに甚深にして。勝劣なくは侍れと。左の。
わきてしられんといへる末の句。猶まさり侍らむ。

十一番

左 連懷

ひとかたに思ひとりにし心には尙そむかるゝ身をいかにせん

右 同

おもはねとよをそむかんといふ人の同し數にや我もなりなん
兩首の連懷の心は。ともにふかく侍れと。右の歌。まさる
へくや侍らむ。

十二番

左 同

草の庵をいとひてもまたいかゝせん露の命のかゝるかきりは

右 同

みやこにも猶山里はありぬへし心と身とのひとつなりせは
左の歌。いとひても又いかゝせんなどいへる。こゝろすか
たおかしくは侍るを。右の。みやこにも猶山里はありぬへ
しといふ心。ことにめつらしもみえ侍り。右まさるへく
や。

十三番

左 やまひにわつらひけるころ

頼みにし我ふる里の普の下にいつしかくちむなこそおしけれ
右 同

よをいとふ心ふかきよしなとかたりしことをお
もひいてゝ圓位上人のもとへをくりける

世を厭ふしるしもなくてすきこしを君やあはれとみはの山本
此番。又ともにしかることに侍るを。右の。三輪の山本。

なをおかしくきこえ侍る。また右まさり侍らむ。

十四番

左 同 月の歌の中に

この本に月も光をやはらけて神さひわたるみねの松風
右 九月無動寺より報恩講をこなひて

さとりゆく雲は高根にはれにけりのとかにてらせ秋のよの月
右の。雲はたかねにといへるすかた心。およひかたくは侍
れと。左の。月のひかりをやらはらけてといへる嶺の松風。
猶身にしむ心ちし侍り。よりて左まさると申へくにや。

十五番

左 同 金剛界五部をよみける中に

今はうへに光もあらし望月とかきるとなればひときはの空

右 菩薩十度をよみける中に智恵波羅密を

これそさはうき身をやかて佛そと心えつへきこゝちこそすれ
右の。うきみをやかて佛そと侍るも。まことにたとくは侍
れと。なを左十五夜の月。うへなくや侍るへからむ。

深山河はやきしるしをた
のむとてたにのつらゝのなを
むすふらん

聖眞子十五番

一番

左 持

九品の玉のうてなの光こそ三のひしりのかけとなりけれ

右 同

道かへて此よにあとをたると哉おはりむかへん紫の雲
攝 政

左。玉臺光。右。紫雲色。難分之上。共に爲三神事。勝劣なくや侍らむ。よりて可レ爲レ持。

二番

左持

もろ人のねかひをみつのはま風に心すゝしきしての音哉

右

我かれかふその古へに吹かへせひしりのあとをほらふ谷風
左濱風。右谷風。ともに心もすゝしき。いにしへもまことに吹かへらんとみえ侍れば。おなししなとすへし。

三番

左 霞

春かすみふしの煙にやとかりていくへの山をへたてきぬらん

右勝 橋上霞

かつしかやむかしのまゝのつき橋を忘れすかゝる春霞かな
兩方の霞。左は。富士のけふりにやとかれる心。めつらしくみえ侍るを。右は。かつしかやまゝのつきはし。ことふりたるやうに侍るを。むかしのまゝのとつゝけるに。末の句もことふりすきこえて。右勝とす。

四番

左勝 花

よしの山猶しもおくに花さかは又あくかるゝ身とや也なん

右 同

おもふへしことし計となかめきてよそちの春の花になれぬる
左右の花。右は。はしめの句おかしくをかれ。よ々ちの春になれぬる心も。哀おほく侍るを。左の。なをしもおくにといへる心。ことにめつらしくも侍るにや。よりて左まさ

るへくや。

五番

左勝 五月雨

山里の雪にはあともいとはれきとへかし人の五月雨のころ

右 夏のうたとて 釋 阿

句ひくる花たちはなの袖のかに涙つゆけきうたゝねの夢
此右歌。七首のうち侍りけり。是はたゝうつゝとなく。むかしをしのふはかりに侍り。左雪にはあともといひて。とへかし人のなといへるすかた。ことにいみしくおかしく侍り。尤以レ左可レ爲レ勝。

六番

左勝 七夕

たなはたの心やそらにはれぬらん雪の衣に秋の初かせ

右 同

なかゝにやみなるへしと思ひけり秋の七日のほしあひの空
兩首七夕。すかた詞。ともにえんに侍るを。左の末の句。ことにおかしきまさるへしと申侍へし。

七番

左勝 古郷鹿

古さとの庭のあるしと成にけりのこりし野への棹鹿の聲

右 秋の歌の中に

移しうへしもの野へにそ歸りゆくあれて嬉しきませの内哉
左右の秋歌。ともにすかたおかしく。心ふかくは侍るを。猶残りしのへのさをしかのこゑ。おかしききこゆ。又以
レ左可レ爲レ勝。

八番

左 月のうたの中に

あり明の月のゆくゑをなかめてその寺のかねは聞へかりける

右 同

入ぬれとなみたの露に影とめて月はたもとに有明の空

兩首ありあけの月。又ともにおかしくは侍るを。右の月
はたもとにとあり明のそら。猶ありかたく侍るにや。より
て右歌勝へくや。

九番

左 冬のころ山さにて

冬かれの梢にあたる山風の又吹たひは雪のあまきる

右 同

み山本ののこりはてたる梢より猶しくるゝはあらし也けり

左歌。心詞幽玄の風舛也。但右歌。のこりはてたるといひ。
猶しくるゝはなといへる。すかた心ともによろしく聞え
侍り。まさるへくや侍らん。

十番

左 後朝戀

歸るさの月そかなしきまとろまでやかて有明を眺めしよりも

右 曉戀

あかつきの涙や空にたくふらん袖におちくるかねのをとかな
兩首の戀のすかた詞。無二勝劣は侍るを。右の。袖におち
くるかねのをとかなといへる心。猶かきりなく侍るへし。

又右爲勝。

十一番

左 持 述懷

世中をおもひつゝけてねをなけは心の月の袖にうつれる

右 同

いかにして今までよには有明のつきせぬものをいとふ心は
左の心月。右の有明。ともに心ふかくして。勝劣難分。同科
とすへし。

十二番

左 持 無常

とりへ山よはの煙のたつたひに人のおもひやいとゝそふらん

右 同行におもひける人うちつゝきはかなくなりけ
れはおもひいてゝ

古さとをこふる涙やひとりゆく友なき山の道芝の露

左右の歌。心すかた。又おなし科に侍へし。

十三番

左 七宮かくれ給ふて雲林院に後のわきなとしてか
へりてのち

かなしさを雲の林にとめしより涙の雨そはるゝまもなき

右 持 同周忌の日御はかにまいりて

そこはかと思ひ續けてきてみれば今年のけふも袖はぬれけり
左。雲の林に涙の雨なと。よせある風舛。おかしく侍るへ
し。右ことしのけふもといへるすかた。猶まさると申へく
や侍らむ。

十四番

左 持

秋のころ故内大臣のさかの墓所にて念佛おこな
ひけるに

右

山さとは袖の紅葉の色そきむかしをこふる秋の涙に
勸性法橋かくれてのち西山往生院にて如法經行
せんとてまかり入たりけるに

たつね入我たもとはは露おちて昔のあとに秋風を吹
兩首。左は。むかしをこふるあきのなみた。右は。むかし
のあとの秋風。ともに哀あさからす侍り。勝劣なかるへ
し。

十五番

左持 金剛界五部の中に蓮花部を
半尺のおなし光の迫いる赴字の蓮のむねにひらけん

右 妙法蓮花を

わしの山八とせの法をいかにして此花にしもたとへそめけむ
左の。きりくの字。右の。妙法蓮花。勝劣におよふへからす
や侍らむ。よりておなしなとす。

いかにみる西にこゝろは
かくれともなをたちかへる
しかのうらなみ

久雖レ顧ニ西土之蓮、轉可レ留ニ東湖之砌。故云。

八王寺十五番

一番

左持

山河の底にやたれもしつもらしちゝのてことに渡さゝりせは

右

攝政

枯はつる梢に花も咲ぬへし神のめくみの春の初かせ

左歌。下手の誓願の心。まことにたのもしく侍る事なり。
右歌。神のめくみの春の初風。又そのしるし。忽にみえぬ
へくおほえ侍る上。神事のつかひは。しみて勝劣あるへか
らずと侍るなり。

二番

左持

をしなへてひよしのかけは曇らぬに涙あやしき昨日けふかな

右

ねかはくはしはしやみちにやすらひてかゝけやせまし法の燈
此兩首こそ。まことになみたあやしきほとにおほえ侍れ。
おほかた歌合の判は。ことにほめす。ことに難せずとかや
そ。やうくしく申者は。申ことに侍れと。よろしきを不三
稱讃。無じ謂事也。右歌の心。又愚老か心願。やゝをこると
ころの趣なり。其心已に聖眞子の十五番のおくに申出侍
り。但左の。涙あやしきと侍る末の句。まさると申さすは。
いかゝとおほえ侍りて。勝と申へくや。

三番

左持

みせはやなしかの唐崎ふもとなるなからの山の春のけしきを

右

春の歌の中に

かほりくる花の春風身にしまて出こえくらす志賀の里人
左の。なからの山。右の。志賀の里人。ところのさま。おも
かけおかし。歌のすかたことはも無勝劣侍れは。おな
ししなとす。

四番

左持

空も海もひとつに霞波かなあまの釣舟かへるかりかね

右 歸雁

なみたをや霞の袖にかしつらむ春に別てかへるかり金
春にわかれてといへるすかた。まことにかすみの袖に。涙

かゝるらむとおほえ侍るを。左の。ひとつにかすむらん。
浪路眺望の心おもかけ。ことにおかしくや侍らん。

五番

左勝 夏歌よみける中に

曇るよの月にたとへん時鳥なかつてはれぬる 五月雨の空

右 夏夜

なつの夜の數にもいれし郭公きなかぬさきにあくるしのゝめ

左歌。月にたとへんといへる心。又ことにめつらしく侍るにや。勝と申へし。

六番

左勝 月の歌あまたよみける中に

みかつきのほのめきそむる高ねよりやかて秋なるそらの通路

右 海邊夕月

なにはかたみちくるしほを光にてあしへにやとる夕月夜哉

ほのめきそむるたかね。やかて秋のかよひちなるらんこと。これもことにおかしきこゆ。まさると申へし。

七番

左勝 雁

いかにせんふしみの里のあり明にたのむの雁の月になく也

右 秋の歌の中に

夕されは野への秋風身にしみてうつらなく也 深草のさと

此右の歌。崇徳院の御時の百首の中に侍り。これ又ことなることなく侍り。たゞ伊勢物語に。深草のさとの女のうつらとなりてといへることを。はしめてよみて侍しを。かの

院もよろしき御けしき侍りしはかりに。註し申て侍りしを。左の歌。ふしみの里の月になくらん田面の雁。いみし

くおかしくこそ侍れ。尤左勝侍るへし。

八番

左勝 秋のくれに

なかつ月もいくあり明になりぬらんあさちか霜のいとゝさえ行

右 秋霜を

紅葉はゝをのかそめたる色そかしよそけにをけるけさの霜哉

よそけにをくらむ霜も。まことにおかしく侍るを。左の歌いくあり明にといへる心。なを艶におほえ侍り。又左まさるへくや。

九番

左勝 冬の歌の中に

初せ山霜にことふるよはのかねもろくもさそふ風のをとかな

右 同

しなかとりのいななたひねのさゝ枕霞にたとる夢ちなりけり

いななたひねのさゝ枕。いみしくおかしく侍るを。初瀬山のよはの鐘を。もろくさそふらん風の音。所のさまも。たままさりてや侍らむ。

十番

左勝 寄關戀

人こふる我なかめよとおもひけりすまのせきやの右明の月

右 旅戀

東路のよはのね覺をかたらなん都の山にかゝる月かけ
須磨のせきやのありあけの月。歌のすかたも。所のさまも。艶に侍るへし。

十一番

左勝 海路

なむれは霞も月もはてそなき春と秋との波の通路

右 同

こきいてゝ今は興にもなりぬへし峯の松風聲よはる也

兩方の海路。心詞勝劣なくは侍るを。左の春の霞。秋の月。波ちさひしくなれたるほと。猶心ほそさまさとや中へからむ。

十二番

左 山家

人はなし嶺に松風まとに月しめえてすめる山の奥かな

右 同

岡のへの里のあるしをたつぬれば人はこたへす山おろしの風左の峯の松風。窓の月。山のおくのすみか。たのもしくは侍るを。右の岡のへは。さまでふかゝらす侍れと。人はこたへさらん。山おろしの身にしてみて。すこしはまさるへくや。

十三番

左 山里

山ふかみ淋しき宿の主とはなりおほせたる身にもあるかな

右 同

山里にとひくる人のことくさは此すまゐこそうらやましけれ二首の山居。左なりおほせたらん心もおかしく。右のとひくる人のことくさも。さそ中おもひけんと共に無二勝劣。可レ爲レ持。

十四番

左 百首歌の中に

人はみな哀もしらてやみなまし秋のゆふ暮春のあけほの

右 無常

よもきふにいつかをくへき露の身はけふの夕暮あすの明ほの左右の兩首。すかた詞おかしく侍れと。左の。あはれもしらてやみなましといふ心。なをまさるへくや侍らむ。

十五番

左 心念不空過

をしなへてむなしき空とおもひしにふち咲ぬれば紫の雲

右 内秘菩薩行

いにしへの鹿なくのへのいほりにも心の月は曇らさりけり左。心念不空過。右。内秘菩薩行。紫雲心月。詞よせおかし侍り。勝劣なかるへし。よりておなししなとす。

うくひすのえたのうつりにまよふかな
かれたる木たに花はさけとも

客人十五番

一番

左

數々にあはれふもとを頼むかなこしちの雪の深きちかひに

右 勝

攝政

こゝに又光をわけてやとすかなこしの白根や雪のふる郷左右ともに。こしちの雪によせて。弘誓のかきこゝろ。おかしく侍るを。右の。こしの白根や雪のふる郷は。すこしまさるへくや侍らむ。

二番

左

數ならぬみくつもすてすてらすこそ塵にまはしはる光也けれ

右勝

ふるき風をいかで御山にふかせまし葛のうらはの返すくも
右歌。心尙弘誓なり。深山古風定吹返侍らん。勝と申へく
や。

三番

左

花の歌あまたよみける中に
咲そむる花の梢をなかむれば雲になりゆくみよしの山

右勝 同

よしの山雲の岩ねにちる花はかせよりおつる瀧の白いと
兩首吉野山。左。雲になりゆくらんこゝろも。おかしく侍
るを。右。雲の岩根にちる花。かせよりおつらん瀧のしら
糸。ことにおもしろくや侍らん。

四番

左 同

松風になかめし秋は花ゆへにいとふへしとは思はさりしを
右

花さかり霜も時雨も露もなしひとりつらきは春の山風

左歌。時につけつゝ心もかはりゆく事。まことにあはれな
る物に侍り。山家秋は。桂の月すこくてらし。松風しつか
に吹をくりたり。まことに身をわくるこゝちこそし侍れ。
すへて春の風は。いとはしかるへし。左まさるへくや侍ら
む。

五番

左勝 夏の歌の中に

雲まよふ夕に秋をこめなから風もほにいてぬおきのうへ哉
右 同

夕まくれ野澤に夏を忘水けに秋ちかくとふほたる哉

左。夕にあきをこめなからといへる心。いとおかしく侍り。
右。又野澤に夏をわすれ水など。詞つゝきいつれを勝と申
かたし。持に侍へし。

六番

左 待月厭山

いとほしな山のはもなき波ちにもまたては月のいつる物かは

右勝 月の歌の中に

ゆめかとおとろく計はれにけり雲の衣をかへす月かけ
左。またても月のなといへるすかた。えんにこそ侍るめ
れ。右。雲の衣かへす心。なをおかしくや侍らむ。

七番

左勝 秋歌の中に

夜半にたくかひやか煙たちそひて朝霧ふかしをやまたのはら

右 同

もしをやくけふりも霧にうつもれぬすまの關屋の秋の夕暮
須磨の關屋は。すへて折につけてをろかならぬを。まして
秋の夕くれ。おもひやらるゝを。左。小山田のかひやの煙た
ちそふらん朝霧。心ほそくや侍らむ猶かちと申へくや。

此開闢

九番

左 雪の歌の中に

庭の雪に我あとつけて出づるをとはれにけりと人やみるらん
今朝みれば雪もつもりぬ浦なれや濱松かえの波につくまで
右勝 同

左。とはれにけりといへる。いとおかしくみえ侍り。右の。つもりの浦の松の雪。ところもさまも。猶おまかけおほえ侍りて。まさると申へくや。

十番

左持 戀の歌の中に

うちかへし思ふ心になくさめて戀にやとかる 我涙かな

右持

契戀

たゝたのめたとへは人の偽をかさねてこそは又もうらみめ
左右の戀。ともに心ふかくきこえ侍るを。なを左。戀に宿
かるらん末の句。めつらしくも侍るにや。まさるへくや侍
らむ。

十一番

左持

旅歌

東路やきよみかせきの月のよをかそへてこそは思ひたちしか

右持

同

契つゝ空ゆく月のゆく末を思ひもいてようつの山もり
兩方の旅の心。いづれをまさると申かたし。左。清見か關
の月の夜。まことにさこそかそへて。おもひたつへくとお
ほえ侍り。右うつやまもりに。月のゆくゑまでおもひ出
よと。まことにいはまほしかるへし。よりておなししなと
す。

十二番

左持 同

たひのよに又たひねして草枕ゆめのうちにも夢をみるかな
右持 百首歌の中に
いける身の浮世の波にたゝよひてくるしき海。の舟をしそ思ふ

左。夢のうちにゆめをみるらん心。おかしく侍るを。右
うきよの波にたゝよひてと侍るも。とりくにおほえ侍
れと。右末の句。あかしのうらの朝きり。思ひ出られて。お
はりの句の。心ことはこもりて。まさると申へくや。

十三番

左持 述懷

哀にも心のすむによせし身のやかて心の宿となりぬる

右持 同

せめて猶うきよにとまる身とならば心のうちに宿はさためむ
左右の述懷。ともに心ふかくはみえ侍るを。右うきよに
とまるといへるをろかなる心にも。所存侍るにやと申へ
し。

十四番

左持 同

さし離れ三笠の山をいてしより身をしる雨にぬれぬ日そなき

右持 同

法の門に心をいれておもふかなたゝうきよをは出へかりけり
左。三笠の山をはなれて身をしる雨にぬれ。右。法門に心
をいれて。うき世をいつへかりけりといへる心。ともにこ
とはもかなへり。同科とすへし。

十五番

左持 或住不退地

わしの山けふきく法のみちならてかへらぬやみに行人そなき
右 金剛界五部の中に金剛部を
たのもしなうきよの中のやふれやにひとりくたけぬ法の里人
兩方又勝劣なかるへし。

よるの鴉かた／＼おもふ籠のうちを。
かたちをわけてあわれともみよ

十禪師十五番

一番

左持

木の木のちりにましはる影ならば朝日待まのやみいかにせん

右

攝政

木のもとにうきよをてらす光こそくらき道にも有明の月

左。朝日まつまのやみに。切利天の御付喝たのもしく侍こ
と也。右また。くらき道にもあり明の月。すかた詞もおか
しく侍り。勝劣なかるへし。

二番

左持

我たのむ日吉のかけは奥山の柴の戸までもさゝさらめやは

右

山こもりして侍りけるころ驟動出来てのこりも
なく離山しけるにたゝひとりみて初雪のあした
尊圓法師かもとへ

いとゝしく昔のあとやたえなんと思ふもかなしけさの初雪

此左右の歌。もとより愚義難忍して。集に注入侍りし様に
こそおほえ侍れとて。更勝劣なかるへし。よりて猶おなし
しなとす。

三番

左持

梢には花のすかたをおもはせてまつ咲ものはうくひすの聲

右 同

花の色や猶こからまし匂ふ枝に山ほとゝきすすへてみたらは
兩首の花の色。左の鶯の聲まつさま。右は郭公すへんも。
おかしく侍るを。猶左の鶯のまつさく花ならん。ことごと
にめつらしく侍らんや。以れ左爲れ勝。

四番

左 殘春

山のはに匂ひし花の雲きえて春のひかけはあり明の月

右持 三月盡

紅に霞の袖もなりにけり春のわかれのくれかたの空
くれかたの空。かすみ色ふかき。ことに艶に侍るへし。仍
以れ右爲れ勝。

五番

左 夏の歌の中に

山かけや岩もる水の音さへて夏のほかなるひくらしのこゑ

右持 同

夏ふかき嶺の松かえ風こえて月影すゝし有明のやま
左。夏のほかなる日くらしの聲。いみしくおかしく侍るを。
右の有明の山。ことにありかたく聞ゆる。勝に侍るへし。

六番

左持 立秋

それもなをけふこそぬしの身にはしめ心より吹秋のはつ風

右 秋の歌よみける中に

人わかぬ萩のうは風吹ぬ也山風ならす秋の夕くれ
兩首の秋風。左心より吹。右山風ならす。更無勝劣。おな
ししなとす。

七番

左 月の歌の中に

秋のよの月のあたりのむら雲を拂ふとすれはおきのうはかせ

右勝 同

月かけの身にじむをとくなる物は光をわくる峯の松かせ

左。はらふとすれは萩の上風。いみしくおかしく侍るを。

光をわくらむ峯の松風。ことに身にしむ音とならむとお

ほえ侍れは。右なを可レ爲レ勝。

八番

左持 鹿

山里のあかつきかたの鹿の音はよはの哀のかきりなりけり

右

鹿の音をくるあらしにしられけり山のおくなる秋の哀は

兩首の鹿の聲。左の。よはの哀のかきり。右の山のおくの

あはれ。ともに無レ勝劣。

九番

左 冬のころ人のもとへつかはしける

ひきかへて淋しきみかく野への月こほらぬ露にやとりし物を

右勝

女御入内屏風に加茂の臨時祭かきたるところ

釋 阿

月さゆるみたらし川にかけはみえて水にすれる山あゆの袖

左。こほらぬ露にとといへる。いみしくおかしくこそ侍れ。

右又。屏風の歌のうちを。注し申て侍りけるなり。みたら

し川に月さえなとは。つねのことなるを。こほりにすれる

といへる心はかり。すこしおもかけおほえ侍る。よりに御

屏風の歌とりてたてまつれと侍りしにも。つたなき歌の

十番

左持 戀

玉つきのあしたになしと詠つゝゆふへの空にかり鳴わたる

右 同

わか戀は庭のむら萩うらかれて人をも身をも秋の夕暮

兩首の戀。左の玉つきの朝になかりける。夕の空の鴈書の

つらなりけんこゝろ。いみしくおかしく侍るを。右の歌。

ひとをも身をも秋の夕くれ。又其心深。同科也。

十一番

左勝 百首の中に

昔おもふ高津の宮のあとふりて難波の芦にかよふ松風

右 同

秋風にふしの煙のなひけるを待とる雲も空にきえぬる

右。難波のあしにかよふ松風。ことにさひてきこゆ。勝侍

らむ。

十二番

左 述懷

思ふへき我後のよはあるかなきかなければ社は此世にはすめ

右勝 同

世の間のうつゝの闇にみる夢のおとろく程はねてかさめてか

左右の述懷。ともにふかくはみえ侍れと。右おとろくほと

は。ねてかさめてかといへる。ことにおかしくきこゆ。ま

さると申へくや。

十三番

左 師

圖位上人横川より此たひ待入つることのむかし
すけし侍しその月日にあたりて侍ると申かへせ
しに

右

同行にちきれる人さきたちて大原にこもりける
に

世をいとふ心のそらの廣ければ入こともなき月もすみなん

左。月日のかけのめくりきてと侍る詞の露。いますこし岩
〔ボノノ〕あるやうにみえ侍り。

十四番

左

無常

我もいつけあらましかはとみし人を忍ふとすれはいとゝ添行

右 師

同

はかなさにかて耐まし是そ此よのことはりと思ひなさすは
左右ともに。すかた詞おかしく侍るを。おほくもといふ歌
なとも侍るを。右の歌。世のことはりといへる心。ことは
りしかるへし。めつらしくも侍るにや。勝と申へくや。

十五番

左 師

菩薩十度中檀波羅密

今は我山のはちかき月をたにおしむましとそおもひしりぬる

右

法師品

心すむ草の庵の法の水にうれしく月の影やすむらん

兩方。勝劣なく侍るにや。よりて持とすへし。なを歌のみ
ち。かやうにしりかほに申侍る事。かへす／＼かたはらい
たく侍れと。且は神樂をおそるゝによりて。所存かさねて

申のふへく侍るなり。おほかた歌は。かならずしもおかし
きよしをいひ。このことはりをいひきらんとせされと
て。もとより詠歌といひて。たゞよみあけたるにも。打詠
したるにも。なにとなくえんにも。幽玄にもきこゆること
のあるへし。よき歌になりぬれば。其詞すかたのほかに。
景氣のそひたるやうなることあるにや。たとへば。春の花
のあたりに。霞のたなひき。秋の月のまへに。鹿の聲をき
ゝ。かきねの梅に春風の匂ひ。みねのもみちに。時鳥のうち
そゝきなどするやうなること。うかひてそへるなり。つ
ねに申やうには侍れと。かの月やあらぬ春やむかしとい
ひ。結ふ手の筆ににこるなといへる。なにとなくめてたく
きこゆるなり。かやうなるすかたことはに。よみにせんと
おもへるうたは。ちかきよにはありかたきことなるを。こ
のちかきとしよ脱離りこのかた。見え侍る御百首にも。か
つはこの御歌合そ。誠にありかたき事とはみえ侍れ。すへ
てこのみちは。いみしくいはんとおもひ。ふるきものを
見つくさむとするにも。さらによらざるへし。且はたゝ前
世のちきりなるへし。すへて詩歌のみちも。大聖文珠の智
恵よりをこれることなれば。文珠の垂跡も。此みきりには
あとをたれ。社壇をならへておはしませは。此歌合をは。
いつれにもいかばかりもてあそひ。御納受侍らむすらん。
當來普賢如來も。ひかりをやはらけて。あまねくみそなは
すらむとそおほえ侍る。

うけかたきうき身なりとてまよはする
みのりの月のいりかたのそら

三宮十五番

一番

左勝

三の山散しく法の花みれは我ちからそとしたひきにけり

右

攝政

みな人のつねにしたかふちかひよりあまねく匂ふ法の花哉

左右。法花守護の心。ともに勝劣なかるへし。たゞし左。猶

三の山にちりしくらむ心。少しまさるへくや侍らん。

二番

左勝

わかたのむなゝの社のゆふたすきかけても六の道にかへすな

右

末をくめ我山河の水上にみのりの淵はあるとしらすや

左。七の社のゆふたすきかけてもむつのみちなといへる

心。ことにおかしくや侍らん。

三番

左 春の歌の中に

むさしの春の景色もしられけり垣根にめくむ草のゆかりは

右勝 同

霞しく松浦の沖にこきいてゝもろこしまての春をみる哉

左。かきねにめくむ草のゆかり。おかしくは侍るを。右ま

つらのおきに。もろこしまても春をみるらむ心。なをおよ

ひかたく侍へし。

四番

左勝

花の歌の中に

花はほよし野の山はみわの山春のしるしはたちまさるらん

右 同

雲は花はなは雲とてけふ過ぬ高ねはるけし春の夕暮

兩首のすかた心。ともにおかしきこえ侍るを。なをよし

のゝ山はみわの山といへるこゝろ。春のしるしまさるへ

くや侍らん。

五番

左勝 鵜河

鵜かひ舟あはれとみゆるものゝふのやそうち河の夕やみの空

右 家々納涼

宿からやすむけしきもかはるらん板井に清水庭に松風

右。納涼ともにすゝしからんとおほえ侍るを。左やそうち

河の夕やみ。歌のたけすかた。ことにみえ侍り。勝と申へ

くや侍らむ。

六番

左 草花

露むしもはれて哀はそふのへに萩こそよるの錦也けり

右勝 苺萱

ぬしあれと野となりにける籬かな小萱か下にうつら鳴也

左草花。萩こそよるのにしきといへる。おかしく侍るを。

野となりにけるといひて。をかやか下にうつらなく也と

侍るすかた心。なをふかくみえ侍り。勝と申へくや。

七番

左勝 秋の歌の中に

秋の野のすゝのしのやの夕暮も猶身におはぬすまむ也けり

右 月の歌の中に

おもひ出る心の末に月さえて深いある山のおくかな

左。しのや。右山のおく。ふかき心あらん。ともに淺からすみえ侍り。

八番

左 月の歌の中に

山のはにあかて入ぬる月かけは松のあらしにのこる也けり
右 月のあかまりけるよ三位入道のもとへ

もみちふく風のたよりに月落て霜にうらある庭の面かな

左右兩首。左。入ぬる月の松のあらしにのこる心。いみしくふかく侍るを。右もみち吹風に月落霜にうらある心。かきりなくおほゆ。可レ勝哉。

九番

左 時雨を

宵のまはもらぬ木葉に袖ぬれて時雨になりぬ曉の空

右 落葉を

しくれつる峯のむら雲はれのきて風よりふるは木葉也けり

風よりふるはといへる心。いみしくおかし侍り。但左の。

時雨になりぬと侍る曉のそら。猶ことにきこえ侍り。左ま

さり侍らん。

十番

左 尋戀

心こそ行衛もしらねみわの山杉の梢のゆふくれの空

右 戀の歌の中に

ふしのねもあさまの山もをのつからたえくこそ煙立なれ

兩首の戀。又ともに勝劣なくは侍るを。杉の梢の夕くれの

すかた。猶勝へくや。

十一番

左持 百首の中に

とく御法菊の白露夜はをきてつとめてきえんことをしと思ふ

右 菊を

うきよかなよはひのへても何かせんくますはくます菊の下露

兩首の菊の心。ともに無勝劣。おなし科とすへし。

十二番

左 迷懷

何ゆへに此世を深くいとふそと人のとへかしやすくこたへん

右 同

みな人の知かほにしてしらぬ哉かならずしぬるならひ有とは

左右の迷懷。又おかしくみえ侍れとも。猶右の末句。まさ

と申へし。

十三番

左 旅の歌

草枕かりねの夢に在るものはいてし都のあり明の月

右 同

かへりにはかさなる山の峯ことにとまる心をしほりにはせん

いてし都のあり明の月。まことに夢にもわすれかたくは

侍るへけれとも。とまる心をしほりにせんも。ことにめつ

らしく侍る。勝へし。

十四番

左持 百首の歌の中に

春も秋もふとはしかし夏かりのあしのまろやの雨の夕暮

右 旅歌の中に

夏かりのあしのかりねも哀也玉江の月のあけかたの空

此たひの歌。又玉江のあしをふみしたきといふ歌のち。

いともみえ侍らぬとおもひたまへて。玉江の月はよろしきにやとおもふ給へ侍りしを。芦のまろやのあめのゆふ暮と侍りけり。あり明の月にさらにおとるましく侍れは。おなしと申侍る。例のかたはらいたきことかきりなく侍り。

十五番

左 乘是寶車

今そしるけふの車に法の道は門よりほかにありける物を

右 不求自得

舟の中にとしつむ人を思ふにもとめてこそは猶えさりしか左門よりほか。右舟中。又無_二勝劣_一同科に侍るへし。

夢にまよふ心のやみもあはれかけて

かならずさそへにしにゆく月

此歌合者。判者俊成入道自筆。判書之正本也。以_二信定少納言_一令_レ書之。爲_二七卷_一。今貽。去建久初比。後京極攝政爲_二少納言_一之時。予詠歌中。撰_二定二百首_一。但百九十首也。爲_二歌合_一。七社各十五番。第一番有歌。各詠被_レ加_二番_一之。則令_二清書_一之給。又判者俊成卿所詠歌中。可_レ撰_二加七首_一之由相語間撰送_レ之。仍每社加_レ番之。則大宮四番右。二宮三番右。聖眞子五番右。八王子七番右。客人八番右。十禪師九番右。三宮十四番有歌等也。能書當世第一也。予本歌法施之餘。假_二世俗法樂_一。神國風俗尤爲_レ珍歟。講此法樂被_レ從珠取拾有_二沙汰_一。如岸送_レ之。今納_二七社寶殿_一畢。嚴親攝政後_二後_一等。緣_二又令_一一首給_二二宮第二番左歌是也_一。又判者。每條與書付_二一首詠歌_一者也。其後清書。家攝錄運。遂似來畢任_二天台座主_一。判者

入道又保_二九十算_一納受之至也。又其後。上皇令_レ好_二和歌道_一給之間。仁和寺御室守覺法親王等被_レ詠_二進百首_一。其中荐有_二和歌召_一。又予餘命及_二七旬_一之際。詠_二百首法樂_一。剩上皇令_レ撰_二新古今_一給之時。予所詠歌。被_レ撰_二入八十餘首_一。現存之人無_二此例_一歟。其新古今之後。所詠之百首七ケ度。其中歌定勝_レ於_二昔詠_一歟。仍各申請珍重清書等納_二神殿_一者也。三十餘年之後。承久三年五月雨之比。亂並_二于時天下不_一靜。後人勿_二嘲弄_一努々。

右慈鎮和尚自歌合以古寫一本按合

日吉社歌合

嘉祿元年十二月廿四日奉納之

九條三位入道知家自歌合

判者中納言入道定家

一番

春

左踏

天津空日かけや春をいそくらん霞まぬさきの雪のむらきえ

右

時しあれは袖ふりはへて自妙の雪も消あへすつむ若菜かな

兩首ともに。心詞よろしくきこえ侍るを。右は終句や。平

懷に侍らむ。仍以左爲勝。

二番

左

古里のみかきか原も今よりは春のうちとや霞こむらん

右踏

我ならぬ人もみるらむ若かきのあまりに匂ふ春の梅かえ

みかきかはらの春のうち。詞のよせありて優には侍れと。

あしかきのあまりに匂ふ春の梅。而影なをえんにや侍ら

むとて爲勝。

三番

左踏

吹風の袖のやとりの名残まで匂ひそ花のかゝみ也ける

右

今はまた雪とふりつゝ鏡山みしにはかはる花のかけかな

吹かせの袖のやとり。すかたことに美麗にきこえ侍はれ。

四番

左持

雪とふりつゝ鏡山も優に侍れと。猶左かつへくや侍らむ。

すかの根のなからの山にいつる日の行かた遠くかへるかり金

右

ちる花のみち行ふりの春風にあともとゝめすかへるかりかね

菅の根のなからの山。行かた遠く。ちる花のみちゆきふり。

あともとゝめぬ心。いつれとなくよろしくきこえ侍れは。

爲レ持。

五番

左〔持〕

山高みうつろふ花を吹風に空にきえ行峰のしら雪

右

おほかたの名こりはかりやつらからん花なき春の別れ也せは

此つかひ。又ともに艶におかしくきこえ侍れは。猶勝負申

かたくや。

六番

夏

時鳥猶さりとともまたれつゝなかねにあくる夜をかきぬらん

右踏

此里はこれそはつねの時鳥いつれの山に鳴ふるしけん

なかねにあくる心。ゆうに侍れと。右は音にあらはれ侍り

にければ。勝へきにや侍らん。

七番

左

村雨のすき行空のほとゝきす雲にとまらぬ遠の一こゑ

右踏

郭公しはしかたらへ柴の戸をあくるほとなき夜半の名残に
兩首ともにはしめおほりかなひて。いとよろしくきこえ
侍れと。あくるほとなき夜半のなこり。猶優にや侍らむ。
八番

左持

難波江のあしのうきねのみしか夜に枕定〔め〕す明る空かな

右

風にちる夜半のほたるの空にのみ思ひみたれて過る比かな
このつかひ。又ともによろしくきこえ侍れは。爲レ持。

九番

左持 秋

木の葉ちる秋のはしめを吹風に我さへ袖に露もとまらず

右

いつくにか枕さためん袖ぬらす露のひまなきをのゝ篠原

右の歌も。いとえんには侍れと。左猶こゝろにそむ色や。

まさり侍らん。

十番

左

いくかへり山した茂き葛の葉の世を秋風にうらみきぬらん

右持

草の原あさ行袖も色つきぬ衣するてふ花のさかりは

くすの葉の世を秋風。またいとおかしきこえ侍るを。い
くかへり山したしけきとつゝける所や。右の上下かなひ。

心詞たへなるにはおとりはへらむ。

十一番

左持

里人の秋のころもやいそくらん夜寒になりぬとこの山風

右

篠原や夕霧ふかき道のへに里はるかなる鐘〔かりい〕の一二
兩首また優美なり。爲レ持。

十二番

左持

すみのほる月にはるかに高砂の峯の木からし夜や更ぬらん

右

あつき弓いつるは山の月影にをくほとみゆる野への夕露

左右の秋月。景氣詞花。又いつれと申かたし。すへていと
よろしくも侍かな。

十三番

左持

はかなさを夢にみつゝも秋の夜の永きねふりのはてそ悲しき

右

山風に紅葉やふかくつもるらんねやもる月の影をすくなき

左。觀ニ世中如ニ夢。秋夜漏ニ長眠。右。風吹ニ紅葉。閉月罷ニ清
光。云レ彼云レ是。又足ニ握。仍爲レ勝。

十四番

左持 冬

秋の色に霜のふりはを吹かへし恨もはてぬ庭の木からし

右

瀧津瀬の音にもたてす米る夜を猶袖さえて夢そむすはぬ

吹かへす霜のふりは。うらみもはてす。音たてぬ瀧津瀬夢
そむすはぬ。心すかた又いと優にはきこえはれと。さの
みおなしことも興なかるへければ。以レ左爲レ勝。

十五番

左

おしますはふみわけつへき庭の雪を心つからに跡やたえなん

右時

月影のもりこしほとそつもありける尾上の松の雪の下道
兩首。また風情めつらしく。おかしくきこえ侍れと。雪の
色。月の影なを見ところおぼくや侍らむ。以_レ右爲_レ勝。

十六番

左時

朝な_レよそにやはみるますか_レみむかひの岡につもる白雪

右

暮ぬとて身はいそけともあら玉の春をはよそにつもる年かな
右は。そのかみひさしくしつみ侍しとしの暮ことに。なけ

きをそへはへりし身のうへに。ふかくおもひしられて侍
れと。左またはしめをはり。すかたことは。優にあはれに
きこえはへれは。猶爲_レ勝。

十七番

迷懷

左(持製)

時雨つゝ身をしる袖をほし侘ぬ神は日吉の名を頼めとも

右

うれしさをいかなる袖に包むらんうき涙のみ身にあまりつゝ
此つかひ。いつれと申かたし。神はひよしの名をたのむ心
のすゑ。なからふれは猶うれしきの身にあまる時に。なき
には侍らねは。自他感應かならすむなしからすこそ侍ら
め。只奉_レ任_三神明之加護_一。

十八番

左時

思ひ侘つもる泪のつかねをもたえすそいのるもりのしめ繩

右

あら玉のすこ竹かき折ふしに一かたならす世をやなけかん
(とのい)

たえすいのりをかくるもりのしめ繩。心も引かたく侍れ
は。爲_レ勝。

十九番

左時

玉櫛厘明たつ雲にしくれつゝ身のいたつらにぬれぬ日そなき

右

かくてのみ猶有明のつれなさに曉よりもうきわか身かな
兩首又可_レ謂_三秀逸_一。尤是足_三子稱_三讚神道_一矣。納受不_レ可
疑。

二十番

左

をのつから行末とてもたのまれす我世中にありてなければ

左時

思ふより露そとまらぬ小萩原みさらん後の秋の夕風
ひさしく七社の和光をあふく人。かならず二世の願望を
とくるならひなり。小萩原の行する。榮花さためてひらけ。
ことの葉の色々光あらはれて。長生久視の神流。靈驗炳焉
にはへるへし。

二十一番

左

思ふ事かなはてすくる身をしらて厭ふにおしき世をおしむ哉

右時

今はいかて衣の色を墨染のくらきにいらぬ道をたつねん
あふきこし日吉のひかりてらしみはいつれのやみかはる
けさるへき。有_レ惡。可_レ惡。

神徳餘身寮門明靜注之。

右日吉社歌合以百花庵宗固本書寫一按了

群書類從卷第二百十九

和歌部七十四自歌合三

後京極殿御自歌合

百番詞合 俊成卿判

一番 春

左 立春

あら玉の年や神代に歸るらんみもすそ川の春のはつかせ

右

みよし野は山もかすみてしら雪のふりにし里に春はきにけり

左の歌。みもすそ川のはるかせ。まことにつねの春にあらず。神代にやかへるらん。と覺え侍し。右の歌は。忠岑か。

いふばかりにやみよし野のといへる歌は。山もかすみて。といへるもの字。ことに心こもりておほえ侍しを。今又。

やまも霞と侍る。年來の所存に計會して。兩方勝負不分

明。なそらへて持と申へき也。

二番

左 餘寒

右

そらは猶霞もやらす風寒て雪けにくもる春の夜の月

此ころは谷の杉むら雪(さい)さえてかすみもしらぬ春の山かせ

左右の餘寒。心すかた共に玉の聲あるこゝちし侍るに。猶

かすみもやらす風さゆらん春のよの月。ことにやおほえ侍にや。仍勝と可レ申哉。

三番

左

文治六年女御入内の月次の屏風に住吉の松にか

すみのかゝれるかた書たるところに

なめやる遠里小野はほのかにてかすみに残る松の風哉

右

春の歌あまたよみける中に

氷みし水のしら波たち歸り清瀧川にはるかせそふく

右清瀧川の春風も。かみしも相應して見え侍れと。左の。すみよしの松かせ霞にのこるらん。ことにや侍らむ。仍左を勝と可レ申哉。

四番

左

春の歌あまたよみける中に

雲消てうち出るなみやこたふらんかすめる山の曉のかね

右

同

ねぬる夜の程なき夢そしられける春のまくらにのこる燈

左。かすめる山の曉の鐘。右の。ほとなき夢そしるらん。残

りのともし火。ともにほのかなる心。かたゝ移て。持にやと申へく候や侍らん。

五番

左 同

千里までけしきにこむる霞にもひとり春なき越のしら山

右 同

春はたゝおほろ月夜とみるへきを雪にてまなきこしの白山
(にイ) (くイ)

兩方の越のしら山。ひとり春なきといひ。雪にてまなきと侍り。又ともにおもひわきかたくは侍れと。猶雪にてまなからん春の月。ふかく身にしみて覺え侍らむ。

六番

左 春の歌の中に

はるの花は花ともいはし霞よりこほれてにほふ鶯のこゑ

右 梅をよめる

難波津に咲やむかしの梅花いまま春なるうら風そふく

左。霞よりこほれて匂ふらん鶯の聲。殊に艶に侍るにや。仍まさると申へし。

七番

左 花の歌讀ける中に

九重に花の盛になりぬれは雲そくもゐのしるしなりける

右 春の歌よみける中に

久かたの雲井にみえし伊駒山春はかすみの麓なりけり

春は霞のふもとなるらん。面影ありておかしく侍れと。猶九重の雲のしるしは。なへての山の櫻。およひかたくやと覺え侍れは。又左勝へくや侍らむ。

八番

左 歸鷹

今はとて山飛こゆるかりかねのなみた露けき花のうへかな

右、同

わするなよたのむの澤をたつかりもいなはの風の秋の夕くれ

此左右。又山とひこゆるらむ雁のなみたも。たのむの澤を立らんなはの風も。共に露かゝる心地し侍れは。わきかたくて。同じ程とや可レ申侍らん。

九番

左 春曙

みぬまて思ひのこさぬなためより昔にかすむ春の明ほの

右 同

ふるき跡そ霞はてぬる高圓の尾上の宮の春のあけほの

兩方の明ほの。むかしにかすむらんも。尾上の宮も。かたかた心あくかれて思ふ給へなから。猶見ぬよまて。おもひ残さぬ心ふかくや侍らん。仍左勝とや申侍らむ。

十番

左 花のうたあまたよみける中に

むかしたれかゝる櫻の花をうへてよしのを春の山となしけん

右 同

春はみなおなし櫻となりはてゝ雲こそなけれみよし野の山

左の歌。むかしたれと侍るより。吉野をはるの山と侍る心も。まことにおかしく侍るを。右のうた。雲社なけれといへる。猶めつらしく侍るにや。

十一番

左 春の歌とてよめる

あたら夜のかすみゆくさへおしき哉花と月との明かたの山

右 花の歌よみける中に

明わたる外山の梢はるくゝと霞そかほる遠の春風

此かすみそかほると。侍るも。遠の春風。袖にしむ心地し

て侍れと。左の。花と月との明かたのやま。たちまさり侍らん。

十二番

左

野遊

都人宿を霞のよそに見てきのふもけふも野へにくらしつ

右

中宮の女房宇治にて舟に乗てあそひ侍しに舟の中にて見る花といふこゝろを

麓ゆく舟路は花になりはてゝ浪に波そふ山おろしの風

左の。宿を霞のよそにみてといへる心。おかしく侍るを。右の波になみそふ山おろし。猶おもかけことに侍るにや。仍

右勝と申へし。

十三番

左

花の歌あまたよみける中に

右

みよし野は花の外さへ花なれや横たつ山のみねの白雲

はれくもるみねさたまたぬ白雲は風に雨きる櫻成けり

風にあまきるらむ櫻。みるやうには面影おほえ侍れと。左の花の外さへ花なるらんみねのしら雲。立まさりてや侍らむ。

十四番

左

泊瀬山おのへのかねの明かたに花よりしらむ横雲の空

右

花はみな霞のそこらうつろひて雲にいろつく小初瀬の山

左右のはつせ山花よりしらむ横雲の空も。おかしく侍れと。猶くもに色付らんを初せの山。心うつりて侍にや。

十五番

左

同

けふこすは庭にや跡のいとはれんとへかし人の花のさかりを

右

山里の人も梢に春くれて浅茅か原にはなはうつりぬ

左の歌。庭にや跡のと侍る。心すかた。いみしくおかしく侍るうへに。末の句なとも。猶まさり侍らむ。

十六番

左

よしの山花のふるさと跡たえてむなしき枝に春風そふく

右

高砂の尾上の花にはるくれて残りし松のまかひゆくかな

左の残る春。むなしき枝に春風。心ほそくも侍るを。右の残り松のまかひ行らむ心。なを勝て覺え侍にや。

十七番

左

おとろかす人相の鐘になかむればけふまてかすむ小初瀬の山

右

春やいまあふ坂こえて残るらんゆふつけ鳥の一こゑ(こゑすゑ)

此ゆふつけ鳥は。かの谷のうくひす一こゑをす。とよめりし面影のこりて。いみしき事にあれと。左の。けふまてかすむ小初瀬の山。まことにかんしむせられ侍る。左をまさると申へくや侍らん。

十八番

左

さほ姫のなれし衣をぬきかへて戀しかるへき春の袖かな

更衣

右 同

山のはも霞のころもなれく一夜の風にたちわかるなり

左のうた。さほひめになれく。春の袖の戀しからん事。

いみしく艶に。めつらしくも侍を。右の歌。山のはも霞の

ころも立別。又心ほそくも。かたく名殘覺え侍る。仍持

と申へくや。

十九番

左 郭公

うちもねす待よ更行ほとくす軒にかたふく月に鳴なり

右 同

橘の花ちるさとの庭の面に山ほとくすむかしをそとふ

花ちる里のほとくす。昔とふらん哀あさからす侍り。左

の軒にかたふく月に鳴らむ時鳥猶かきりなくや侍らん。

廿番

左 夏夜

うたねのゆめよりさきに明ぬ也山郭公一こゑのそら

右 夏のうたとてよめる

うちしめりあやめをかほる郭公なくや五月のあめの夕くれ

左の歌。うたねの夢よりさきにといひ。右。雨の夕くれ

と侍るすかた心勝劣已難分。尤爲二同等。

廿一番

左 菖蒲

小夜ころもこは身にしらぬにほひ哉あやめを結ふ夢の枕に

右 盧橘

行すゑに我袖のかや残るへき手つから植しのきの橘

あやめをむすふゆめのまくら。なつかしさもかきりなく

は侍なから。手つからうへし軒のたちはな。行末までのそ
ての香。哀つくしかたく侍るにや。

廿二番

左 夕立

入目さす外山の雲ははれにけり嵐に過るゆふたちの空

右 雨後夏月

夕立の風にわかれて行雲にをくれてのほる山のはの月

左の。あらしにすくる夕立のそら。右をくれてのほる山の

端の月。いみしくおかしく。勝劣難分。同等なるへし。

廿三番

左 女御入内月次屏風に山井に納涼したる所

山陰やいつる清水のさゝ波に秋をよすなるならの下かせ

右 納涼

かけふかき外面のならの夕すゝみ一木か本に秋風そふく

出る清水のさゝなみに。秋をよすらん檜の下風。誠に涼し

く聞え侍る。右の陰ふかゝらむ一木か本は。今少一かうに

涼しくや侍らん。

廿四番

左 舟中夏月

夏のをややかて明石の梶まくら浪にかたふく月をしそ思ふ

右 蟬

鳴せみの羽にをく露に秋かけて木陰涼しき夕立のこゑ

左の。やかて明石のといひ。波にかたふくといへる末の句

まておかしく侍を。又羽にをく露に秋かけてといへる心。

ことに艶に聞えて。勝劣難分侍。仍持とすへし。

廿五番

秋

左 初秋の心を

右 同

下草に露置そへて秋のくるけしきの森に日くらしのころ
袖にちる萩のうは葉の朝露になみたならはす秋の初かせ
左の歌下草にといへるより。すへて初終おろかなる所な
く侍るを。右の歌。袖にちるとをきて。涙ならはすといへる
末の句まで。いみしく艶に覺え侍れは。また勝劣難分見
え侍れと。さのみ持と申も。又無念に侍る上に。なみたな
らはす心。袖もしほる心地して侍る。今少可勝哉。

廿六番

左 秋夕

右 同

物おもはてかゝる露やは袖にをくなかめてけりな秋の夕くれ
何ゆへと思ひもわかぬ袂かなむなしき空のあきの夕くれ
此左右のつかひ。又かゝる露やはと侍る心姿。いみしくお
かしく侍を。猶むなしき空の秋の夕くれ。心つくしかた
や侍らん。勝と申へきにや。

廿七番

左 秋の歌あまたよみ侍る中に

右 同

暮かゝるむなしき空の秋をみて覺えすたまる袖の露かな
袖のうへはたゝ此ころの露をきて世をは恨す秋そ悲しき
左の。覺えすたまるといひ。右の世をは恨すと侍る末の句
など。まことに袖に露をきそふ心地し侍て。いつれをまさ
ると難し申侍れは。持と申へくや侍らむ。

廿八番

左 同

右

遙なるとこよはなれてなく雁の雲の衣に秋風そふく
みな人はせみのは衣ぬきかへて今は秋なる日くらしの聲
今は秋なるといへる心。いみしくおかしく侍るを。とこよ
はなれてなくらむかりの。くもの衣の秋風。今少身にしみ
て覺え侍るにや。

廿九番

左 同

右 同

足引の山かけならぬ夕暮にこのは色つく日くらしのころ
村雨はほとなくすきて日くらしのなく山陰のはきの下露
左の。山陰ならぬといへるひくらしの聲。けに色ある心地
し侍を。右の鳴山かけの萩の下つゆ。といひすてられ侍る。
猶そてにかゝる心地し侍りて。勝と可勝哉。

卅番

左 鶉

右 同

獨ふす芦の丸屋の下つゆに床をならへてうつらなくなり
秋ならはとはかりみまし我宿のまかきの野へは鶉ふすまで
左の歌。床をならへて鳴らん鶉。まことに歌さまおかしく
侍り。右のうた。籬の野邊はうつらふすまでと侍は。すへ
てかくは。人申かたく見え侍れは。尙勝と可勝哉。

卅一番

左 鹿

たくへくる松の嵐やたゆむらん尾上に歸るさをしかのころ

右 同

秋かせの尾上のまつにことゝへは人はこたへすきをしかの聲
左の。尾上にかへるといひ。右の人はこたえすと侍ることゝ
ろすかた。いつれをとりまさとと聲レ申。持に侍へし。

卅二番

左 秋のうたよみける中に

闇き夜の窓うつ雨にをとるけは軒端のまつに秋風そふく

右 野分

きのふまでよもきにとちし柴の戸も野分にはるゝ岡のへの里
左の。秋のうた。雨に野分のあした。又ともにおかしくの
みきこえ侍れは。分かつ侍れと。猶軒端の松に秋風そ吹。
といへる末の句。ことにまされると可レ申哉。

卅三番

左 月の歌あまたよみける中に

さらぬたにふくるはおしき秋の夜の月よりにしに残る白雲

右 同

月たにもなくさめかたき秋の夜の心もしらぬ松のかせかな
心もしらぬまつ（まつの）の風かなと侍る心。誠に難レ有見え侍る
を。左の月より西にといへる姿心。猶限なくみえ侍るにや。
仍左勝と可レ申にや。

卅四番

左 同

雲きゆる千里の外に空さむく月よりうつむあきのしら雪

右 秋田

山遠き門田の末は霧はれてほなみにしつむ有明のつき
此番も。山遠き門田の末は。なといへるわたりも。心詞い

みしくおかしくは侍を。又月よりうつむと侍るすかた心。
猶勝へくやと見え侍る也。

卅五番

左 初昇月

山かけの水にひかりもみちぬらん峯をはなるゝ秋のよの月
右 八月十五夜に人のもとより歌つかはしける返し

に

晴そめて又たなひかぬ雲までも思ひのまゝの山のはの月
此左右。心風情共勝劣なく侍。同等と申へし。

卅六番

左 月の歌よみける中に

袖の上に宿かす露のたまらすはたか雲（う）なる秋のよの月

右 同

秋よ又夢路はよそに成にけり夜わたる月の影にまかせて
是又兩方共に。心のふかさも姿のおかしさ。おなしく
はおほえ侍と。右の歌。尙かきりなく侍。勝とや申へから
ん。

卅七番

左 同

秋そかし今夜はかりのね覺かは心つくすなありあけの月

右 同

槇の戸をさゝて有明になりぬるをいく夜（あ）の月ととふ人もなし
左の歌。あきそかしと。をかれて侍より。末の句まで。いみ
しく覺侍を。右の歌。いく夜の月といへる心姿。尙まさと
とや申侍らん。

卅八番

左 擣衣

かへるへき越の旅人まちわひて都の月にころもうつなり

右 同

ひとりねの夜寒にはなれる月見れは時しもあれや衣うつ聲
左彼匡房卿。寡妾擣衣臣南。樓月浪久人未歸。と書る句
など。思ひ出られて。いみしく見え侍る。右の時しもあれ
やと侍る心。限なく侍り。猶左まさるへきにや。

卅九番

左

秋の歌あまたよみける中に
片岡の麓のいなは末さはき月よりおつるみねのあきかせ

右 同

とけてねぬ鹿の音悲し小萩原露ふき結ふ太山おろしに
此左右。又月より落るといひ。鹿の音悲しといへるすかた
心。ともに勝劣難レ分侍り。仍持と申へし。

四十番

左

女御入内月次屏風に相坂關の駒迎書たるところ
あつまよりけふ相坂のせきこえて都にいつる望月のこま

右 同屏風に仙家に菊咲たる所

君か代に匂ふ山路のしらきくはいくたひ露のぬれてほす覽
左の歌。都に出ると侍末の句など。いみしくおかしく侍る
を。初の五文字や。すこし慥にや聞ゆらんと覺え侍るを。
右のうた。いくたひ露のと侍る心限なく。祝の心の上に。
艶にも聞え侍れは。右可レ勝や侍らむ。

四十一番

左

月の歌よみける中に
村雲のしくれてすくる梢より嵐にはるゝやまのはのつき

右 秋のうた讀ける中に

見る月の山よりやまにうつりきぬねぬ夜のはての曉の空

左の。あらしにはるゝ山の端の月。人もあくかるゝ様に覺
え侍るを。又右の。ねぬ夜のはての曉のそら。すかた心。い
かにかくのことく侍るにか。右の歌。猶むねにあまる心地
し侍る。

四十二番

左

萬をよめる
宇津の山こえしむかしの跡ふりてつたのかれはに秋風そふく

右

秋のうたあまたよみける中に
まのゝ浦の波まの月を氷にて尾花かすゑにのこるあきかせ
おはなかつゑに残るらん秋かせ。おかしく侍るを。左の
萬の枯葉に吹らん秋風。いみしくおもひやられ侍。勝と可
レ申や。

四十三番

左

秋霜
霜むすふ秋のすゑ野の小笹はら風には露のこほれしものを

右

月の歌あまたよみける中に
秋のいろはては枯野と成ぬれと月は霜こそひかりなりけれ
霜むすふといへるより末句まで。いみしくおかしく見え
侍るを。月はしもこそと侍る姿心。猶かきりなく覺え侍。
ひか覺えを申にや侍らん。

四十四番

左

暮秋
しけき野は虫の音なから霜かれてむかしの薄いまも一むら

右 同

立田姫いまはの比の秋風にしくれをいそくひとの袖かな

左の歌。むしのねなから霜かれてと侍る上の句。右の歌。

時雨をいそく人のそて哉といへる下の句。兩方共に。勝劣なく思侍れは。仍持と申へし。

四十五番

左 初冬の心を

月やとす露のよすかにあきくれて憑めし庭はかれ野成けり

右

見し秋をなに、殘さん草の原ひとつにかはる野邊のけしきに

露のよすかに秋くれてと侍る。いみしくありかたく見え侍るを。何に殘さむ草のはらと。いへるはたはり。殊に聞え侍る。心今少し勝と申へく哉。

四十六番

左 田家時雨

おしねつむ山田の庭は秋過て袖を時雨にほさぬころ哉

右 庭霜

故郷のはらはぬ庭に跡たえて木のはや霜の下に朽らむ

左の袖をしくれにといひ。右の。この葉や霜のといへる。共に勝劣難し分。持と申へくや侍らん。

四十七番

左 冬の比宇治にまかりてよみ侍る

秋のいろの今は殘らぬ梢より山風おつるうちのかはなみ

右 冬のうたあまたよみける中に

夜もすから氷れる露を光にて庭の木のはにやとる月影

山風落るうちの川なみ。猶まさりてや侍らん。

四十八番

左 同

なかれよる谷の岩まの紅葉はに小川の水の末そわかるゝ

右 同

木の葉ちりて後にぞ思ふおく山の松には風もときは成けり

小川の水と侍るも。寔におかしく侍るを。右の木のは散てと云。まつには風もと侍る。めつらしさも限なく侍るにや。

四十九番

左 同

片岡のまさ木の下は色付ぬ山のおくにはあられふるころ

右 雲

風寒みけふもみその古郷はよしのゝ山の雪氣成けり

けふもみそのふるさとはといへる。古今のうた覺えて。いみしくおかしくは侍るを。左の山のおくにはあられ降

ころと侍る末の句。猶殊に覺え侍る。勝と可レ申哉侍覽。

五十番

左 冬の歌あまたよみける中に

照月の影にまかせて小夜ちとりかたふくかたに浦つたふ也

右 同

風さむし友なし千鳥今夜なけ我も岩ねに衣かたしく

左のうた。かたふくかたに浦つたふ也と侍る。ことに聞え侍る。又勝と申へきや。

五十一番

左 同

おほふへき袖こそなけれ世中にまつしき民の寒きよなく

右 同

枕にもそてにも涙つらゝゐてむすはぬ夢をとふあらし哉
左の心ことはすかた。限なく覺え侍り。右の。むすはぬ夢
をと侍る。猶たくひなくみえ侍るにや。

五十二番

左 寒松

清水もる谷の戸ほそもちはてゝ氷をたゝく峯のまつかせ

右 女御入内泥繪屏風に池上の冰書たる所

池水に寒る光をたよりにて冰は月のむすふなりけり

左の歌。氷をたゝく峯の松かせ。姿心猶有かたくみえ侍る。

五十三番

左 冬の歌あまたよみける中に

消かへり岩まにまよふ水の淡のしはし宿かるうすこほり哉

右 袋をよみ侍る

寒る夜におしのふすまをかたしきて袖の氷を拂ひかねつゝ

袖の氷を拂かねつゝと侍るも。哉におかしく覺え侍るを。

猶しはし宿かる薄氷か。見るやうに覺え侍りて。可勝や

侍らん。

五十四番

左 冬の歌あまたよみける中に

うす雲を峯に風の吹ためて月のなこりを雪にみる哉

右 雪中山居

雪おれのみねの椎柴ひろふとて跡見せそむる冬の山里

跡みせそむる冬のやまと。又殊におかしくは見え侍り。

俱左の歌の。月のなこりを雪にみる哉とは。いかにもえ中

かたくや侍らん。

五十五番

左 冬朝

雲深きみねの朝日のいかならむ横の戸しらむ雪のひかりに

右 冬のうたあまたよみける中に

淋しさはいつもなかめ物なれと雲まの峯の雪の明ほの

左の。くもふかきといひ。横の戸しらむと侍る冬の朝。ま

ことにおもかけあまりておほえ侍にや。

五十六番

左 同

しもとゆふかつらき山のいかならん都も雪はまなくときなし

右 歳暮歌よみける中に

雪つもる梢に雲はへたつれと花にちかつくみよし野の山

左。しもとゆふかつらき山。おかしく侍るを。花にちかつ

く三吉野の山。猶ことに覺え侍る。

五十七番

左 歳暮

山川のこほりもしらぬ年なみの流るゝかけはよとむ日そなき

右 同

石上ふる野の小さく霜をへて一夜はかりに残るとしかな

左の。氷もしらぬ年なみ。右。ふる野の小菰霜をへてと侍

る。共に勝劣なく見え侍る持とすへし。

五十八番

左 戀

忍戀のこゝろを
しのふるにまけぬと人や思ふらんち忘れてはななく心を

右 同

人とはいかにいひてかなかめまし君かあたりの夕ぐれの空
君かあたりの夕暮の空。餘情猶つくししかたくや。

五十九番

左 同

もらすなよ雲ゐる峯の初時雨この葉はしたに色かはるとも

右 戀の歌あまたよみける中に

たかためそ契らぬ夜半をふし侘てなかもはてつる有明の月

左の木のほゝ下にといへる心。殊に色ふかく覺え侍る。

六十番

左 同

物おもふ唯ひとりねのさむしろにあたりの塵よくよ積りぬ

右 逢戀

夢や猶たゝおもひねに見し事の床も枕もおもかはりせて

左の歌の。さむしろに。右のうたの床もまくらもと侍こゝ

ろすかた。共に勝劣なかるへし。同等とすへし。

六十一番

左 後朝戀

今はとて涙のうみに梶をたえおきそわつらふ今朝の舟人

右 寄雲戀

曉の風にわかるゝ横雲を起行そてのたくひとそ見る

左泪の海。かの袂衣と申物語なんと。おもひ出られて。殊

に艶に覺え侍。まさると申へきや。

六十二番

左 戀の歌あまたよみける中に

今こんと竹々ことになかむれは月やおそき長月の末

右 同

朽ぬへき袖の半をしほりても馴にし月や影はなれなん

月やはをそきと侍る末の句。殊に侍にや。又左勝と可申

哉。

六十三番

左 同

見し人の袖にうきにし我玉のやかてむなしき身とやならなむ

右 遇不逢戀

忘るなよとはかりいひて別にしその曉やかきりなるらむ

兩首共に甚深。可レ爲三同等。

六十四番

左 戀心を

秋の夜のかりねのはても白露に影みし人やよひのいな妻

右 待戀

蓬生の末葉の露の消かへり猶此よにとまたんものかは

影みし人のよひのいなつま。今少猶まさりてや侍らん。

六十五番

左 戀心を

よせかへる荒礫なみのしき浪にまなく時なくぬるゝ袖かな

右 旅戀

枕にもあとにも露の玉ちりて獨おきあるさよのなかやま

あらいそなみのよそひ。寔にまさり侍らんとは。思ふ給へ

なから。露の玉ちるらんさよの中山。心ほそくや侍らむ。

六十六番

左 戀のうたあまたよみける中に

涙せく袖におもひやまさるらんなかむる空も色かはるまで

右

吹風も物やおもふととひかほにうちなかむれは松の一こゑ

泪せくと侍るより。なかむる空も色かはるらん心。猶ふか

くや侍るへからん。勝と申へく候や。

六十七番

左 尋戀

たつねつる山路にさよは更にけり杉の梢にありあけのつき

右 祈戀

いく夜われ波にしほれて貴船川そてに玉ちる物おもふらん

左。杉のこすゑに有明の月。いみしくおかしく侍を。右の

貴舟川袖に玉ちるらん心。かた／＼心もみたれて。いみしく侍。持と申へく哉侍らむ。

六十八番

左 寄川戀

吉野川早きなかれをせく岩の難面中にみやくたくらむ

右 舊戀

末までといひしはかりに淺茅はらやいまも別も朽や果なむ

はやきなかれをせく岩のといへるすかた心。けに身をく

たく心地し侍を。又末までといひしはかりにと。いへるあ

さちか原も。しほるゝ心地し侍とも。さのみ持とのみもい

かにと。しゐて思ふ給へれば。猶よしの川ふかくもや侍ら

ん。

六十九番

左 遇不逢戀

うつろひし心の花に春くれて人も梢にあきかせそふく

右 寄風戀

いつもきくものとや人のおもふらんこぬたくれの松かせの聲

此つかひ。又心の花にといひ。物とや人のなといへる心。

をの／＼えんにして。勝劣又難し分。仍持とすへし。

七十番

左 夜戀

見し人のねくたれ髪の面影になみたかきやるさよのたまくら

右 顯戀

袖のなみむねのけふりは誰もみよ君かうき名の立そ悲しき

涙かきやるさ夜の手枕。殊に艶にみえ侍。まさると申へき

や。

七十一番

左 寄海戀

よさの海のおきつ鹽風うらにふけまつなりけりと人に聞せん

右 寄松戀

思ひかねうちぬる宵も有なまし吹たにすさめ庭の松かせ

左。よさのうみまつ成りけりといへる心。殊におかしく侍

るを。右うちぬるよひもといひ。吹たにすさめと侍るすか

た。猶有かたく見え侍にや。勝と可申哉侍らん。

七十二番

左 寄關戀

古郷にみし倂もうつるらん不破のせきやの板まもる月

右 寄海人戀

鹽風の吹こす海人のとま庇したにおもひのくゆるころ哉

吹こすあまのといひさし。すかた詞。いみしくおかしく侍

を。左の。みしおもかけもうつるらん板間もる月。猶かき

りなく覺え侍り。

七十三番

左 別戀

忘れしの契りをたのむ別かなそら行月の末をかそへて

右 舟中戀

浮舟のたよりもしらぬ浪路にもみし面影のたえぬ日そなき
 此番勝劣分かく見え侍り。大方は申も恐れ侍共。歌はよ
 そへ。其よりえんなる所の名なんと侍らねと。左のわすれ
 しのといひ。右は。たよりもしらぬ波路にもなんといへる
 姿詞つかひ。何となく。えむにも優にもきこえ侍るを。世
 の人は心えす侍なるへし。いつかたも。おとると申かたし。
 持とすへし。

七十四番 祝

左 今上一品宮生れ給ひての其夜人々かはらけとり
 て侍りしに

光そふ雲井の月を三笠山ち代のはしめそ今夜のみかは
 (なほ)

右 女御入内月次屏風に更衣をよめる

けふよりは千世をかさねんはしめとて先一重なる夏衣かな
 此左右勝劣わきまへかたく侍へし。但雲の月を三笠山
 といひ。今夜のみかはと侍る末の句まで。殊に有かたくや
 侍らん。

七十五番 神祇

左 公卿勅使にてありけるに

神風やみもすそ川のそのかみに契りしことの末をたかふな
 右 春日御社

水上にたのみはかけきさほ川のすゑのふちなみ波にくたすな
 兩方のうた。みもすそ川のそのかみ。さほ川の藤浪。とも
 に末の句たかふへからす。兩社の御めくみ。御神もさため
 て。勝劣なくそ。見そなはしおはしまし侍らん。

七十六番

左 公卿勅使にてくたり歸て後よめる

すゝか川八十瀬しらなみわけ過て神路の山の春をみし哉
 右 昔熊野へまいりし事をおもひ出てよめる

まれになる跡をたつねしくまの山みし昔より憑そめてき
 神路山春。熊野山希なる跡。是又いつれとなく覺ゆ。めく
 みも久しく侍らん。又勝劣なかるへし。

七十七番

左 月の歌よみける中に

朝日さす春日のみねの空はれて其名かりなる秋のよの月

右 神祇の歌よみける中に住よしの社を

宮居せし年もつもの浦さひて神代おほゆる松の風哉
 春日岑。津守浦。是又神靈に可任侍。

七十八番 旅

左 公卿勅使に伊勢へくたされける道にて

春なる三上のたけをめにかけていく瀬わたりぬやすの川なみ
 右 物へまかりけるに天川といふ所を過ければ

むかしきく天の川原に尋きて跡なき水をなかも計そ
 やすの川なみ。天の川原。是もともに勝劣申かたく見え侍
 り。持とすへし。

七十九番

左 旅のうたよみける中に

岩かねの苔のさころも露けきにあらぬ衣をしけるしら雲
 (しら雲)

右 同

また人のむすひすてける野邊の草ならふ枕とみるかひそなき
 結ひすてける野への草も。いみしくおかしく侍れと。猶若
 のさむしる露けかるらんに。あらぬ衣しくらむしら雲は。

立まさりてや侍らむ。

八十番

左 海路曉別

忘るなよいまはの月をかたみにて波にわかるゝあまの友ふね

右 月の歌あまたよみける中に

むしあけのせとの鹽干のあけかたに浪の月さへ遠さかるかな

左の。今はの月をかたみにて波にわかるゝ友船。右の。む

しあけのせとの明かたに波の月さへ遠さかるらんほと。

さらに。いづれおろかにと思はれす侍。又同等とすへし。

八十一番

左 海路秋望

行ふねの跡のしらなみ消つきてうすきり残る須磨の明ほの

右 旅のこゝろを

あしからの關ちこえ行しのゝめに一むら霞む浮嶋の原

須磨の明ほの。所さまは。いみしく思ひやられ侍と。猶一

村かすむらんうきしまの原。まさると申へくや侍らむ。

八十二番

左 同

もろともにいてし空こそ忘れね都の山のありあけの月

右 須磨の關をよめる

すまの關ふけ行なみの浮沈ともなふ月そ浦つたひぬる

左の。都の山の有明の月。右の。深行波のうき枕。ともにむ

かしの袖にも。かはきかたくみえ侍れは。同等に侍へし。

八十三番

左 月の歌よみける中に

清見かた波のちさとも雲消ていはしく袖によする月かけ

右 旅のこゝろを

きよみかたひとりいそねの秋の夜に月もあらしの比そ悲しき

左右の清見かた。月もあらしのと侍るも。けにさる方には

侍れと。猶岩しくそてによすらん月影。かきりなく侍ら

む。

八十四番

左 同

出しよりあれましくおもふ古郷にねやもる月を誰とみるらん

右 同

忘れすは都の夢やをくるらん月は雲をうつつの山こえ

月は雲井をなと侍る。うつつの山越。猶以心ほそくや侍ら

む。

八十五番

左 花のうたよみける中に

しおらせてよしのゝ花や尋ねまじやかてと思ふ心ありせは

右 同

哀なる花の木陰のたひねかな嶺のかすみのころもかさねて

峯の霞の衣かさねて。花のかけ。ことに艶にや侍らん。

八十六番

左 秋の歌よみける中に

住しらぬむかしの人のかまてあらしにこむる夕暮のそら

右 山家の歌よみける中に

まつ人のしるへ計りのしおらせは歸り出へき身とやしらん

しるへはかりの枝折も。まことに心おかしく侍るを。左

の。あらしにこむる夕ぐれ空。心ことは猶ふかく侍れは。

勝と申へくや侍らむ。

八十七番

左 風破曉夢

見る夢はみやまおろしに絶はて、月は軒はの松にかゝりぬ

右 月の歌あまたよみける中に

うき世いとふ心のやみのしるへ哉我思ふかたにありあけの月

左の心。いみしくみえ侍るを。右歌。我おもふかたに有明

の月と侍末の句。猶ことにや侍らん。右勝と申へくや侍らむ。

八十八番

左 山家のこゝろを

此さとは雲の八重たつ峯なれや麓にしつむとりの一こゑ

右

またしらぬ山よりやまにうつりきぬ跡なきくもの跡を尋ねて

雲の八重たつといひ。鳥の一聲。いみしく見え侍るを。山

より山にといひ。あとなき雲の跡をたつねての心。猶まさるへくや侍らん。

八十九番

左 山家の歌よみける中に

麓までおなし笹原あともなしみ山の庵のつゆの下道

右 野亭

我宿はのちのさゝ原かきわけてうちぬる下にたえぬしら露

深山のいほの露の下道。うちぬる下に絶ぬしら露。兩方共

に。いみしくおかしく見え侍。持とすへし。

九十番

左 山家

四方の山くもしくみねに跡とちてうき世をきかぬ風の音哉

右 同

瀧のをと松のひゝきのけはしきにつれなくあかす岩枕かな

左の雲しくみねにあとちてといへる姿心。ふかく侍を。

右の。つれなくあかすいは枕。いかにかく侍けるにや。猶まさりてや侍らむ。

九十一番

左

座主無動寺に侍ける頃十首むかし歌つかはしける返事の中に

なかき夜の更行月をなかもてもちかつく闇をしる人そなき

右 述懐

月のすむ都はむかしまとひ出ぬいく世かくらき道にめくらむ

左の歌。ふけ行月をなかもてもと侍。ことに有かたく見え

侍り。左勝と可レ申哉侍らん。

九十二番

左

月の歌あまたよみける中に

わか宿はをは捨山にすみかへて都のあとを月やもるらむ

右 古郷のこゝろを

ふる里はあさちか末になりはて、月に残れる人のおもかけ

月にのこれる面影。まことに有かたく侍れと。左の都の跡

を月やもるらんと侍るこゝろ。すみかへてとをかれて侍ること。限なく侍るにや。猶勝と申侍へきにや。

九十三番

左

述懐こゝろを

右 無常

我なから心のはてをしらぬかな捨かたき世の又いとはしき
後のよは明るともしらぬ夢のうちを現かほにも明くらすかな

左。心のはてをしらぬ哉と侍。おかしく侍を。右のうつゝかほにもといへる心。又さる事ときこえ侍れは。同程と申へく哉。

九十四番

左 山家の歌よみける中に

終おもふすまひかなしき山陰に玉ゆらかゝるあさかほの露

右 無常うたよみける中に

鳥部山（うべさん）いくよの人のけふりまできえ行末はひとつしら雲

右。とりへ山の烟。まことにあはれつきせすは侍るを。左

の山かけに玉ゆらかゝるらん朝かほの露。猶袂にかゝる心ちし侍にや。

九十五番

左 述懐の歌よみける中に

埋れぬ後のなきけやとめさらんなすことなくて此世くれなは

右

うきよかなひとり岩屋のおくにすむ苔の袂も猶しほるなり

苔の袂も猶しほる事。誠おもひ知られ侍る事にて。かきりなく覺え侍り。

九十六番

左 故内大臣かくれ給ひて後夢にみえ給ひしかは

みし夢の春の別れの悲しきはなかねふりのさむときくまで

右 定家朝臣の母の思ひにてこもり侍りけるに三月

盡の日忌あけ侍ればつかはしける

春かすみ霞し空のなこりさへけふをかきりの別れ也けり

左右の歌。ともにおもひわきかたく見え侍るうへに。かのことの春の夢は。またさめすのみみえ侍り。心いよくめ

てたく侍り。いづれをまさると申かたく成侍りぬ。

九十七番

左 百首歌よみて無勤寺座主のもとへつかはしける

和歌の浦のちきりもしほ草しつむ心をすくへとそ思ふ

右

三位入道のもとへ消息して侍ける返事に成家朝

臣沈淪のことなとありておくに秋の時捨てし谷

の埋木を嬉しくもとふ松の風かなと侍る返しに

君そとふかひなきころの松のかせ我しも春をよそに聞かな

左の歌。契りもふかしもしほ草と侍る。心ことは相叶ひて

侍を。右の歌の本歌。すてし谷の埋木をと申狀。直はおそれと覺え侍しかは。かひなき比の松かせに。心のとけき我しも春をと侍心。いみしく有かたく覺え給へられ侍る事にて。猶まさる心ちし侍るなるへし。

九十八番

左

尺教 毗梨那波羅蜜 朝夕に三世のほとけにつかふれは心をあらふやまかはのみつ

右 禪波羅蜜

心をはこゝろのそこにおさめをきてちりもうこかぬ床の上哉

右。ちりもうこかぬ床の上。誠にしかりと覺え侍るを。猶

左の。心をあらふ山川の水。かの泉飛雨洗聲夢といへる詩

の心を思ひ出られて。文の心の上。姿詞もおかしく侍るに

や。仍左勝と可レ申哉侍らん。

九十九番

左

十界の歌よみける中に 夢のよに月日はかなく明くれてまたは得難き身をいかにせむ

右 綠覺

おく山にひとりうき世はさとりてき常なき色を風にまかせて
常なき色を風にまかせてと侍る。猶いみしくみえ侍る。

百番

左 佛

くらかりし雲はさながら晴つきて又上もなくすめる月かな

右 菩薩

秋の月もはては一夜のへたてにてかつく影を残るくまなき
かつく影と侍。誠に十四五夜の月のたとへ。いくはく
のへたてなく見え侍るを。左の雲はさながら晴つきてと
云。上もなくと侍。佛菩薩の位。寔にいかはとて。左勝侍
らん。

三品禪門者。當世之貴老。我道之師匠也。仍爲其芳命。
以愚詠之所結卷也。素隔柿木之塵。定類梧臺之石。努英
及外見。

于時建久九年仲夏二日

結ひをくことは露のいかなれはさのみは玉の聲ゆらくらんは
依仰乍恐注付之

老比丘釋阿生年八十五

玉ならぬことはも君にみかゝれてとまらん代々の光とそなる
凡歌合判詞。自天德二始。于今不絶。然而上古末代不
レ有レ比類一哉。

貞和五年七月十二日。於今小路宿書寫之。

五條禪門各判之詞書加。

右後京極殿御自歌合以月清集校合

定家

群書類從卷第二百廿

和歌部七十五 自歌合四

後鳥羽院御自歌合

嘉祿二年四月廿二(イ)日
家隆卿賜之判進云々

一番

左 初春

谷風に山のしづくもとけにけりけふより春の立やしぬらん

右 おなし

うちなひき石間の水も氷とけ行もなやまぬ春の山川

左 谷風と侍るより。句ことのつゝき。誠にとゝこぼるところなくめつらしく。こと葉はふるきさま。たけ有て。秀逸のすかたかきりなく見え侍るにや。春のたちぬる心も。いかてむかしよりよみのこし侍りけむ。

右 又えんにやさしく。思ひわきかたくはみえ侍れとも。左 猶上下句をはりも。今すこしにほひありて見え侍れは。しづくにぬるゝ春。たちまさるとも申侍るへきにや。

二番

左 鶯

鶯のなく音を春にたくへつゝかへりて花をさそふ春哉

右 落花

をはつせや宿やはわかむ吹匂ふ風のうへ行花の白雲
左 彼風のたよりにたくへてそといへる歌をひきかへて。

三番

左 暮春

よし野河せかはや春のやすらはむおられぬ水の花のうたかた

右 おなし

さほ姫の春の別れの涙とや露さへかゝるきしの藤なみ
せかはや春のとて。末におられぬ水のはなのうたかた。心
こと葉めつらしく有かたく侍にや。佐保姫の春のわかれ
の涙。きしの藤波にもをきそふらん心も。やさしくすてか
たく侍れと。なをうたのたけ。よし野川せきとめかたく侍
るへし。

四番

左 睦郭公

過ぬるか有明の峯の郭公もの思ふとてもいとひやはせぬ

右 海邊霧

難波かたいそへの浪の音すみて夕霧よする秋のしほかせ
先夏と秋のうたは。ともによろしきにとりても。秋の歌は

まさる事にて侍れと。有明のみねのほとゝきすは。物おもふとてもなと。心すかた又いかに侍へしとおほえ侍らす。夏山にとをけるは。猶何となく。なへて景氣もすくなく侍けんかし。夕霧よする秋のしほ風。又いかにも物にまかせかたくみえ侍り。持と申へきにや。

五番

左 月

月かけもうき身からとやかこつらん人をはわかぬ袖の涙に

右 萩

古郷のもとあらの小萩いく秋があるしよそなる花匂ふ蘭

此番。又心詞とりくゝに。いつれいかにと申わきかたく侍り。人をはわかぬと侍る。こゝろ深くいひしりて。誠に有かたく聞え侍るへし。又あるしよそなるはなにほふらん。詞をかさり。心をもとめたるさまにて。是ひとつのすかたにて侍るうへに。こそ秋比こゝろあくかれ侍しまゝに。ふるき玉の砌を。遠くたつねまいりて侍しかは。花のいろ

露もかはらす思ひ出られ侍れは。をとるとも申かたく侍へし。

六番

左 鴈

初かりのつらきすまゐの夕霜ををのれ鳴つゝ涙とふらん

右 雨後月

大かたの空も涙もかきあへぬ月かけぬらす秋のむら雨

初鴈のつらきすまゐと。つゝきたるすかたこと葉。まことにたくみにきこえ侍るうへに。をのれ啼つゝなみたとふらんと。一句にあたの言葉なく。あはれに聞え侍るに。月

かけぬらす秋のむら雨。まためつらしくえんに有かたく見え侍れは。わきかたく侍るへし。

七番

左 山時雨

露しくれもる山かけのうす紅葉下草かけて秋そ枯ゆく

右 菊

なからへてみるはうけれと白菊の離れかたきは此世なりけり下卿かけてかれ行らむ。もる山の秋のしくれ。三室の山にも色まさり侍るにや。たゝしみるはうけれと白菊のとて。はなれかたきなど。心こと葉すかた。菊の露もすてに袖にうつろひて。かきりなくなしくきこえ侍れは。をしてまさと申侍也。

八番

左 海邊時雨

わたつみの波の花をは染かねて八十嶋遠く雲そしくるゝ

右 雛

さらぬたに老は涙もたえぬ身にまたく時雨と物思ふころなみの花をはそめかねて。八十嶋とをくしくるらん雲ころことはたけ。かきりなく秀逸にこそ侍るめれ。又老はなみたのたえぬ身にまたくしくれと物思ふころ。これは愚老かこゝろのうち。あひかよひて。時雨袖をあらそひ侍れは。尤可レ爲レ持也。

九番

左 戀

人はよもかゝる深の色はあらし身の習ひにそつれなかるらん
右 待戀

うつゝにもたのめぬ人の佛に名のみはふかぬ庭の松風

人はよもかゝるなみたのつき。身のならひにそつれな
かるむ。まことにあはれに。をよひかたくみえ侍るほと
に。たのめぬ人のおもかけになのみはふかぬといへる。こ
ころもふかく。なをありかたく見え侍れは。(下調)

十番

左 法文

をしなへてむなしき空のうす緑まよへはふかき四方のむら雲

右

新調

袖のうへにあたにむすひし白露やうらなる玉のしるへ成らん

左右の法文。いかにも心をよひかたく被_レ注付。ふかきさ
とりも。猶まよひ侍りぬれと。まよへはふかきよものむら
雲。末句すこしまさると申侍るへきにや。大かたはかくえ
らひつかはれ侍りにける。秀逸ともは。みしかき心いよい
よをよひかたくて。わきまへ申やられす侍れと。さのみ持
とのみつけ侍らんも。おそれ思ひ給ふゆへに。せうくし
るし申旨。一向更に不_レ可_レ被_レ用之事也。

皆以異様。其上卒爾之間。撰定僻事多歟。事宜物不_レ過_二兩
三首_一也。其中。法文歌雖_レ無_二指事_一。若得_二其意_一候者。爲_二出
離至要_一也。

左歌心者。

法性の空。念來清淨なれとも。妄思の雲おほひぬれは。正
因佛性ありともしらす。このことはりをしらは。佛にな
ることかたし。一即一微塵の中に。法界ことくおさま
る。況卅一字のあひたに。實相のことはりきはまれり。

右歌心者。

或。一切諸法悉是佛性といひ。或。一色一香無_レ非_二中道_一と
釋すれば。霜露のあたなる思ひも。色にめて。香にふける
も。皆是佛法。しかしなから中道乃理なり。しかれば袖の
上の露をみても。此思ひをなさば。衣の裏の珠。たちまち
にあらはるへき因縁也。あなかしこ。

建保四年十月十三日終功筆。

遺老藤原朝臣定家_判

以_二三樂院書寫之本_一又寫_レ之。加_二一按_一畢。

永正七年三月日

右後鳥羽院御自歌合一卷以濱田侯秘藏古鈔本書寫畢

定家卿自歌合

予少年のむかしより。暮齡のいまにいたるまで。前後詠する所の和歌。つもりて箱のうちにみてり。しかれとも言葉の因縁となりて。更身後の資糧にあらず。因レ茲いま聊減罪生善のはかり事をめくらさむかために。愚詠の中より四十八首の歌をぬき出て。一卷の歌合とす。其形を畫圖にうつして。左右にわか。道俗ことなりといへとも。愚身これひとつなり。うたの數四十八にきたむる事は。かの彌陀の本願になすらへて。攝取不捨のちかひなとたのむ故なり。子孫のためにして。是をしるす。外人のために。これなとしるさす。ななき世のかたみに用ひて。反古にしよする事なかれと云事しかり。

四十八首歌合

定家

一番

左 早春梅
春さむき梢は雪にうつもれてさかぬもまかふ軒の梅か枝

右 海邊霞

浦人のあしわけを舟こき出てさはるかたなくかすむ春哉

二番

左 浦霞

蠻人のたつる烟は見えわけて霞そ春のもしほやきける

右 花似雪

時しらぬ花の雪降此ころはよしのも富士の山と見えけり

三番

左 古寺花

かつらきやとよらの櫻咲にけりかすみの西にかゝるしら雲

右 山路旅行

すゑにみし雲を心に分とめて花にきたむる春の山越

左 同題

尋入山ちやふくなりぬらん跡より送るはなの下風

右 山家花

山まとをさひしき物と思ひしは花みぬほとん心なりけり

五番

左 海上春望

遠しまの一本の松にゐる雲をはなかとみてや歸る雁かね

右 河落花

大井河みきはもしろく花ちれは春も枯たるあしの村立

六番

左 春夜雨

おほろなるならひをかこつ春のよの雨さへかすむ有明のはて

右 三月盡

名残なく心もつきてかなしきは今を限りの入相の鐘

七番

左 河邊早夏

難波江や蘆の軒はのひまをなみふかぬにしける夏はきにけり

右 杜郭公

みちのへの杜のこすゑの郭公またぬになる雨のたそかれ

八番

左 水郷夏望

夏なからこゆると見えて月影の涼しく下るうちの川舟

右 夏草

庭しけき草葉の下の道たえてとはぬ人めは夏もかれけり
九番

左 夕立

夕立のむかはむかたは峯晴て日かけ分たる遠山の色

右 納涼

しけりそふ庭の木かけの夕露にみさりし秋をさそふかせかな
十番

左 初秋

はつ秋の雲間のやまの雨そゝきはるれはすゝし三日月のかけ

右 月南風

むら雲の月にわかるゝ山かつらかけはなれてもすめる月哉

十一番

左 風吹月

吹かへすあらしにさよや更ぬらん雲にちかひてすめる月影

右 故郷月

あれわたる軒の板まの影もりて月さへこけの衣きてけり

十二番

左 山路月

深き夜の山路の月のをくらすはつらかりぬへき旅のそらかな

右 同題

をのつから山ちの末にわけ出て月にむかへは明る空かな

十三番

左 海邊月

月の行かきりもさらにしら浪のまねきもとめぬまつらさよ姫

右 同題

いさりひの烟きよみの浦風に月より外はよる波もなし

十四番

左 八月十五夜

さやかなる秋もこよひの中空に雲をはみせぬ月の影かな

右 九月十三夜

うき事をわすれてそみる秋の月なみたのひまやこよひ成らん

十五番

左 海邊擗衣

衣うつらの笥やに秋ふけてよさむに成ぬ八重の鹽風

右 暮秋露

ゆく秋の尾花か袖は月もなしをのれそ残る露のほのゝゝ

十六番

左 冬山月

風こしの峯たちのほるうき雲を時雨のうへや月のかけはし

右 山初雪

里まてはをくらぬ雲のと絶にて遠山はかりみゆる初雪

十七番

左 行路雪

行なやみあらしに宿をかるもかく猪なのゝ雪のさむき夕暮

右 旅宿雪

旅人のかりねの床に雪つみてたいひと夜なる冬こもり哉

十八番

左 海邊雪

跡おしむならひもしらし降雪のつもらぬなみにかよふ舟人

右 窓雪

くれ竹の窓のひまもる山風に人もあつめぬ雪のさむけさ
十九番

左 初逢戀

いつはりに過しは夢の日數にてこよひそむかふ袖の倂

右 旅宿戀

草枕一夜のなこり跡たえて明るをいそく夢の山越

二十番

左 寄月戀

うらみ住おもひたえにしその比の月にむかへはうかむ倂

右 月前述懷

靜なる心のうちのあらましにいくたひかみしさらしなの月

廿一番

左 夕待戀

まつほとはなくさむ事も有へきに涙ゆるさぬ我ゆふへかな

右 述懷

野も山もくるしきまては尋ぬへき誰にうき世の外をとほまし

廿二番

左 冬戀

雲そうき色にはみせぬわか袖もしくると人にしらせぬる哉

右 山路

いかにしてこゆへき道の末なれば雲にひとしき山のみゆらん

廿三番

左 曉別戀

しはしとまとまりかたしや啼鳥のわかれを告るこゑの里

右 山家

世中のうかりし宿をおもふには深きも浅き山の奥かな

廿四番

左 社頭鐘

今はとてもよふす鐘の男山神代の月の明方のそら

右 社頭松

神かきにみつのくらゐやをくるらん雲の風のかよふ松かな

爲家卿自筆之以本書寫畢。

文龜二年臘月念二日

玄國在判

右定家卿卅八首自歌合一卷以瀨田侯秘藏 鈔本書寫畢

家隆卿百番自歌合

一番 春

左

あら玉の年もかはらて古郷の雪のうちにも春は來にけり

仁和寺宮五十首建久元年

右

冬なから花散そらのかすめるは雲のこなたに春やきぬらん

二番

左

今日もなを雪は降つゝ春霞立るやいつこ若なつみてむ

院百首初度正治三年八月

右

朝水たかため分て此河のむかひの野へに若菜つむらん

内大臣家百首建保三年九月

三番

左

谷川のうち出る波も聲たてつ鶯さそへ春の山風

院百首初度

右

春に今あふ坂山のいはし水木かくれ出る鶯のこゑ

兼勝四天王院障子建久元年

四番

左

おほかたの空のけしきはかすめとも月影さゆる春のよの霜

私建久六年

右

はし姫の霞の衣ぬきをうすみまたさむしろの宇治の山風

三宮十五首

五番

左

梅かゝにむかしをとへは春の月こたへぬ影を袖にうつれる

院百首初度建久八年

右

幾里か月のひかりも匂ふらん梅さく山の峰の春風

私春十首建久五年

六番

左

住人もうつれはかはる古郷のむかしに匂ふ窓の梅かえ

私百首建久八年

右

おもふとちそこともしらす行暮ぬ花のやとかせ野への鶯

左大將家歌合建久五年

七番

左

朝ほらけとふ火かくれの生駒山それともみえす春の霞に

院百首建久四年

右

志賀の浦やしらゆふ花の浪の上に霞を分て春風そ吹

内裏百首名所建久三年

八番

左

霞たつ末の松山ほのくと浪にはなるゝ横雲のそら

左大將家歌合建久五年

右

ときしあれば櫻とぞ思ふ春風の吹上の濱に立る白波

内裏百首名所

九番

左

此ほとはおられぬ雲そかゝるらたつねもゆかし山の櫻木

院百首

右

人傳に咲とはきかし櫻花よし野の山に日數こゆとも

内大臣家百首

十番

左

歸る雁秋こし數はしらねとも寢覺の空に聲そすくなき

院百首

右

私百首

なかもれは曇るともなき春のよの月にかすみて歸る鷹かね
十一番

左

内大臣家百首 建保三年

うつしうふる齡は老ぬ八重櫻しらぬ命の春そ稀なる

右

院百首

さくら花咲ぬる時は葛城の山のすかたにかゝる白雲

十二番

左

内裏詩歌合 建曆二年

櫻色の霞のま袖露をおもみうらみぬ山そ宿の明ほの

右

院百首

あけ置し山櫻戸もとちてけりをのれ雲なる春のさかりけ

十三番

左

仁和寺宮五十首 建久六年

この程はしるもしらぬも玉鐙の行かふ袖は花の香そする

右

内裏歌合 建久四年 壬午六月

泊瀬山うつろはんとや櫻花色かはり行峯のしら雲

十四番

左

院五十首 正治三年

さくら花夢かうつゝかしら雲のたえてつれなき峯の春風

右

内大臣家百首

櫻花おもふもつらし風の上にありかきためぬちりのまかひは

十五番

左

今朝みれは初瀬の檜はら雪白し峯の櫻に風吹らし

右

院百首

さくら狩かた野の雉子妻こひて鳴やうつらふ花の下草

十六番

左

院百首

よし野川岸の山吹咲にけり峯のさくらは散はてぬらん

右

仁和寺宮五十首

暮て行やよひの空をなかもれは霞にまかふ有明の月

十七番

左

内大臣家百首

昨日かも濡つゝ折し花の色にけふさへしゐて村雨そふる

右

仁和寺宮十五首

夏衣春にをくれてさく花のかをたに匂へおなしかたみに

十八番

左

院五十首

郭公まつとせしまに我宿の池の藤なみうつろひにけり

右

私 詠 建久五年

いかにせんこぬ夜あまたの郭公またしとおもへは村雨のそら

十九番

左

院百首 (御歌) 建久五年

五月雨の雲のあなたはいたつらに人もなかもめ月やすむらん

右

同

むは玉のやみのうつゝの鶉飼舟月のさかりや夢もみゆへき

廿番

左

寂勝四天王院障子

短夜のまたふしなれぬ芦の屋のつまもあらはに明るしのゝめ

右

同

あかなくにやすらへ空の子規夏くはゝれる年もまれ也

廿一番

左

院百首

おもひあれやたか白妙の夏衣日も夕かほの花の下草

右

松むしもまた音つれぬ淺茅屋に野中の杜の日くらしの聲

廿二番

左

内裏百首名所

夏引の糸もてをれる永き日のみもすそ川は千代もすむらん

右

御秋する八十氏人の夏衣河かせすゝし秋や立なん

廿三番

左

私百首

昨日たにとはんと思ひし津の國の生田の杜に秋はきにけり

右

明ぬなり衣手さむし菅原や伏見の里の秋の初風

廿四番

左

歌合イ
院百首建久三年

玉ほこの道もやとりもしら露に風の吹しくをのゝ篠原

右

内裏五十首歌合建久三年

をとめ子か袖ふる山の玉かつらみたれてなひく秋の白露

廿五番

左

内大臣家百首

袖の色もひとつに成ぬ萩原や遠かた人とよそにたにみし

右

内裏秋十首

啼わたる鴈の涙をこきませて本あらの萩に秋風そ吹

廿六番

左

院百首

花すゝきほむけの糸のかたよりにくるれは野へに秋風そふく

右

攝政家詩歌合建仁三年

月清み有明の霜の萩か枝に白きをみれば嵐なりけり

左

水無瀬殿秋十首建保三年

秋風はさてもや物のかなしきと萩の葉ならぬ夕暮も哉

右

のき近き山のした萩に聲立て夕日かくれに秋風そ吹

左

水無瀬殿秋十首

かへる山いつはた秋と思ひこし雲ゐの鴈も今やあひみん

右

仁和寺五十首

秋の夜は窓うつ雨に明やうて雲ゐに鴈の聲そ過ぬる

左

水無瀬殿秋十首

妻かくす矢野の神山立まよひけふへの霧に鹿や啼蘭

右

内裏百首名所

須磨の浦に秋やくあまの初鹽の烟に霧の色はそめゆく

左

院百首

くれぬまに山のは遠く成にけり空より出る秋のよの月

右

私百首

さらしなやをは捨山の高根よりあらしを分て出る月かけ

左

私月百首

なかめつと思ふもさひし久かたの月のみやこの明かたの空

右

水無瀬殿秋十首

限あれば明なむとする鐘のをとになを長き夜の月そ残れる

卅二番

左

同

すまの疊のまとをの衣夜やさむき浦風なから月もたまらず

右

和歌所歌合建久元年

鶏の海や月の光もうつろへは浪の花にも秋は見えけり

卅三番

左

内大臣家百首

をとめ子か玉ものすそにみつしほの光をよする浦の月かけ

右

二百五十首建久元年

しら雲はよそにもみえず葛城やたかまの月に嵐吹らし

卅四番

左

内裏十首

深草や竹の葉山の夕きりに人こそ見えね鶉鳴也

右

水無瀬殿秋十首

はし鷹のはつかり衣露わけて野草の萩の色そうつろふ

卅五番

左

内裏秋十首

忍ひわひて小のしの原をく露にあまりてたれを松虫の聲

右

水無瀬殿秋十首

有明のつれなくみえし淺茅生にをのれも名のみ松むしの聲

卅六番

左

仁和寺宮五十首

むしの音もななき夜あかぬ古郷に猶思ひそふ松風ぞ吹

右

内大臣家百首

山里ははた織虫のかた糸のよるさへやすくれられきりけり
卅七番

左

内大臣家百首

川上のゆつはの村のうす紅葉した草かけて露や染らん

右

和歌所歌合

下紅葉かつ散山の夕しくれぬれてやひとり鹿の鳴らん

卅八番

左

千五百番歌合建仁元年

をくら山西こそ秋と尋ぬれば入目にまかふ岑のもみちは

右

栗田宮歌合寛元四年

色かはる今や木の葉のうへにをく霜といふへのかつらきの山

卅九番

左

内裏歌合

手向山紅葉のにしきぬさはあれと猶月影のかくるしらゆふ

右

内裏仁二年

いつるより心もつきす木からしの下吹はらふ山のはの月

卅番

左

内裏歌合建久三年

月影もすめはすみけり白雲のたえすたなひく峯のこからし

右

西行二見百首

さえ渡る光を霜にまかへてや月にうつろふしら菊の花

卅一番

左

内大臣家百首

長月の十日あまりのみかの原河なみ清くすめる月かけ

右

私百首

秋ふくる月の光に夜やさむき衣うつなりさらしなの里

冊二番

左

世にふれは賤のをた巻はては又月にいくたひ衣うつらん

三宮十五首

右

古郷や冬はあすかの河風にいたつらならすうつ衣哉

院百首

冊三番

左

露しくれもる山かけの下紅葉ぬるともおらむ秋のかたみに

千五百番歌合

右

月かけの露のやとりになにしきてわかれにたへぬ秋の空哉

私百首

冊四番

左

もみち葉を萩の錦に敷かへて今は時雨の山田もる庵

内大臣家百首

右

露霜とうつろふ袖もくちぬへし篠わくるのゝ冬のかよひち

同

冊五番

左

なかめつゝ幾度袖に曇るらん時雨にふくる有明の月

和歌所建仁三年

右

鶴のわたすやいつこ夕霜の雲ゐにしろき峯の梯

内裏歌合建保五年

冊六番

左

みそれふるは山か下のをそ紅葉一むら見ゆる冬の夕暮

院百首

右

立田川もみち葉とつるうす米わたらはそれも中や絶なん

院二十首建暦三年

冊七番

左

故里の庭の日かけもさえくれて桐の落葉に震ふる也

私百首

右

夕つく日さすかにうつる柴の戸に霞吹まく山嵐のかせ

千五百番歌合

冊八番

左

あしへ行鴨のはかひの夕霜をよそにはなかなぬさよ千鳥哉

内大臣家百首

右

まつ人のゆきゝの岡もしら雪のあすさへふらは跡や絶なん

同

冊九番

左

草の原出しし人は音もせてあらぬ外山の松の雪折

内裏十首

右

和田のはら八十嶋しろく降雪のあまきる浪にまかふ釣船

内裏七首建保五年

冊十番

左

みよし野の薛の下葉のかれしよりは山もみ雪ふらぬ日はなし

或處五十首

右

明わたる雲まの星の光まで山のはさし峯の白雪

仁和寺宮五十首

冊十一番

左

しかの浦や遠さかり行浪まより水て出る有明の月

攝政家歌合正治元年

右

さしのほるこしのしらねの冬の月雪は氷の施なりけり

或處十首久保九年

冊十二番

左

私百首

谷川の音は此ほとたえはてゝ水に残る峯の松風

右

三宮十五首

たか嶋やみほの袖山跡たえてこほりし雪も深き冬かな

左

最勝四天王院障子

けぬかうへに降りけみ雪白川の關のこなたに春もこそたて

右

千五百番歌合

雪のうちにつゐにもみちぬ松の葉のつれなき山も暮る年かな

左

院百首

とりとむる物とはなしに行雲のことしもはやく暮る空かな

右

内大臣家百首

むかふへき春の名残の末のかけ身にあらたまの年もすくなし

左

私百首

いたつらに人はしらてや暮すらんけふこそ我を思ひそむとも

右

三宮十五首

しらすへき煙も雲にうつもれぬあさまのたけの夕くれの空

左

千五百番歌合

自浪の入江にまかふ初草のはつかにみえし人そ悲しき

右

内大臣家百首

我袖は色に出ぬへしかくれぬの初瀬の山も打時雨つゝ

左

或處五十首

是も又いかなるえにか契りけんつゝむほたるの袖にうきぬる

右 院百首

いかにせん深山かくれの秋の草しけさまされは露そ置そふ

左

同

山河に風のかけたるしからみの色に出てもぬるゝ袖かな

右

或處五十首

よし野川岩とかしはのをのれのみつれなき色も波はかけつゝ

左

内大臣家百首

葛城や高まの山にさすしめのよそにのみやは戀んと思ひし

右

或處

契置し千木のかたそきむなしくは行合のまの霜と消なむ

左

内大臣家百首

時過てをのゝ淺茅に立けふりしりぬや今も思ひ有とは

右

同

長きねのすかのあら野にかかる草のゆふてもたゆくとれぬ君哉

左

院百首

よそにたにみぬめの浦にすむ蜚の袖にたまらぬ玉やひろはん

右

私戀百首

海人のすむ里のしるへに立けふりこと浦風に誰なひくらん

左

三宮五十首

思ひ川みをはやなから水のあはの消てもあはん浪のまも哉

右 東路のきのゝ船はしきのみやはつらき心をかけて頼ん
六十三番 左 戀百首 院二(三)十首

なかめてもうらみぬ袖はいかならん雲路の浪にあくる月影
右 院庚申建保五年四月

おもひかね積れはおふる月をみてつれなき人に年はへにけり
六十四番 左 戀百首

たれか世につれなき種をまきもくの檜原の山の色もかはらす
右 院百首

床はあれぬいたくな吹そ秋風のめにみぬ人^{をイ}を夢にたに見ん
六十五番 左 同

山川の紅葉にまじる水のおはの色に出ても消やわたらん
右 万名所清輔名所

おきて行袖のみぬれてあさかしはぬるや川邊の夢にたに見す
六十六番 左 院百首

くもれけふ入あひの鐘もほと遠したのめて歸る春の曙
右 院百首初

今はたゝ待しと思ふよひ^{にイ}のふくるもつらき鐘の音哉
六十七番 左 戀百首

夕暮のわか魂はおもひやる袖の中にやいりなやむらん
右 院百首

あふとみてことそともなく明にけりはかなの夢の忘れ形見や
六十八番 左 内大臣家百首

つくは山やまもあせねと吹風に人の心のひまそつれなき
右 左大將家歌合百首

おもひかねなかわれは又夕日さす軒はの山^{をイ}の松もうらめし
六十九番 左 内大臣家百首

千はや振神の三室のます鏡かけて幾代のかけを戀らん
右 或人五十首

大方のくるゝまつまも定めなきたまのをよはみ戀つゝそふる
七十番 左 内裏歌合建保四年

人こゝろあら磯なみにおりかねてよそにやねなん伊勢の濱菰
右 内裏歌合名所

しく涙ひとりやねなん袖のうちさはく湊はよる船もなし
七十一番 左 三宮十五首

もろこしもちかの浦半の夜の夢思はぬ中そ遠つ舟人
右 歌百首

心から我身こす浪うきしつみうらみてそふる八重の鹽風
七十二番 左 戀百首名所

伊勢の海の蜚のまてかたまでしはし恨に浪のひまはななくとも
右 内裏百首名所
うちわたす濱名の橋の入しほにたなゝし小船誰をこふらん

七十三番

左

おもひいる身は深草の秋の露たのめし末や木枯の風

右

院百首

七十四番

左

風吹は峯にわかるゝ雲をたに有し名残のかたみとも見よ

右

同

富士の根の烟もなをそ立のほるうへなき物は思ひなりけり

左

私百首

わするなよ今はの心かはるともなれし其夜の有明の月

右

院百首

何となく我ゆへぬれし袖の上にあさかりけりと月やみるらん

左

内大臣家百首

岩の上に波こすあへの嶋つ鳥うき名に満て戀つゝそふる

右

院百首

池にすむをし明かたの空の月袖の氷になく／＼そみる

左

同

さめやする今やとみえし秋の夜の夢路かたしくさよの手枕

右

内裏百首名處

逢事はぬるをたのみの夢路にてをたえの橋に月そ深行

七十八番

左

思ひ川かけみし水のうす氷かさなるよはの月もうらめし

右

同

音にのみきくのはま松下葉さへうつろふ頃の人はたのまし

左

内裏百首名所

たゝたのめ時雨も露もをく霜のあはての杜の秋の夕ぐれ

右

大輔百首又治三年

まてとやはこゝにたのめし鶉なくいは田の小のゝ秋の夕暮

左

私百首

今こむとたのめてとはぬ秋のよの明るもしらぬ松虫のこゑ

右

和歌建久元年

さても猶とはれぬ秋のゆふは山雲吹風も峯にみゆらん

左

院百首

有乳山矢田のゝあさち色つきぬ人の心の峯の淡雪

右

同

しらさりきこしの菅原あれはてゝ折にもあはぬ思ひ有とも

左

同

霜かるゝ人の心のあさは野に立みは小菅根さへくちめや

右

戀百首

さりともと待こし物をあら玉のとしの三とせの冬の夕暮

左

千五百番歌合

思ひ出よ誰かねことの末ならん昨日の雲のあとの山風

右

人こゝろ何につなかむ色かはる正木のつなのよるもたまらず

左

雜

院百首

もろこしの空もひとつに雲消てたれかみかさの山のはの月

右

私百首

濱松のこすゑの風に年ふりて月にさひたる鶴の一聲

左

同

紅葉はにうつもれてこそ立田河ふるきみゆきの跡は見えけり

右

或處

さゝ浪やおほつの宮のみや木守しらすみし夜の空の月影

左

院百首

瀧の音松のあらしも馴ぬれはうちぬるほと夢は見せけり

右

和歌所三首

その山と契らぬ月も秋風もすゝむる袖に露こほれつゝ

左

和歌所三首建久元年

古郷に聞し嵐の聲もにす忘れぬ人をさやの中山

右

和歌所六首

旅ねする夢路はゆるせうつの山關とはきかす守人もなし

左

仁和寺宮五十首

野邊の露浦半の波をかこちても行衛もしらぬ袖の月かけ

月もし米ふみわけ玉しまの此河上に宿はたつねん

右

八十九番

左

内裏詩歌合

たかしまやかちのゝ原に宿とへはけふやはゆかん遠の白雲

右

同

たゝくれぬ關の戸さゝぬ比なれは月にも越んあしからの山

左

院五十首

あけは又こゆへき山の峯なれや空行月の末の白雲

右

院詩歌合

秋風の袖に吹まく峯の雲を翹にかけて鷹もなく也

左

内裏歌合七首

さえくらすさやの中山なかゝにこれより冬の奥もまさらし

右

内大臣家百首

もみちする雲の林も時雨なり我そわひ人たのむかけなし

左

春日社歌合元元年

春日山谷のむれ木くちぬとも君につけこせ峯の松風

右

内裏詩歌合

春日山おとろの道も中たえぬ身をうちはしの秋の夕暮

左

二見百首

いつかわれ苔の袂に露をきてしらぬ山ちの月をみるへき

右

内裏三首建暦二年

高砂の尾上の松の夕しくれかくてふり行身をやつくさん
九十四番

左 元久三年三月

かなしきの昨日の夢にくらふれはうつろふ花もけふの山風

右 内大臣家百首

和歌の浦や立うは浪の跡をたちおきをふかめて見し人そなき

九十五番

左 元久三年三月

玉きはる命は誰もなきものを忘れぬ心思ひかへして

右 承久四年夏

きのふ見し跡なき山のおとゝては入相の鐘に雲そかゝりし

九十六番

左 三宮十五首

なさけ有此頃の世の数に入てうき身のはても人や忍はん

右 私百首

うきなからみし世は猶も忍れて聞は懸しきむかし也けり

九十七番

左 内大臣家百首

おもふかた山は富士のね年をへて我身の雪そふりまさり行

右 同

今日もうし昨日もつらし飛鳥河みのいたつらに月日かそへて

九十八番

左 和歌所述懷三首

和歌の浦や沖つ汐あひに浮ひ出る哀れ我身のよるへしらせよ

右 最勝四天王院障子

君か代にあふくま川の埋木も氷の下に春をまちけり

九十九番

左 内裏十首

おもひきや御世のはしめの秋の霜ふりて雲の月をみるとは

右 和歌處述懷三首

おほかたの秋のねさめの長き夜も君をそ祈る身を思ふとて

百番

左 内裏十首

なかきよの月のみゆきの影なれは雲の竹の末もたはます

右 内裏十首

君か代の千とせも秋そあらはるゝ四方の時雨にのこる松か枝

寛元三年五月廿九日以入道二品家隆卿自筆本一書二寫之。

合點者。京極黃門禪門也。

此一帖。依仰兩卿歌風書寫。以不捨離身軀。然而園城寺佛

地。院僧都。於此道多年爲同友之間。任競望奉許書

寫。拙者年來歌道工夫不出一此一帖者也。若有通愚意

輩。尤可翫握而已。

文安二年七月三日

千松末葉正徹判

有家隆卿百番自歌合以猪苗代謙誼藏本書寫畢

隆祐朝臣百番自歌合

一番 春

左 立春

春の日の名にあらはるゝ山よりや空も長閑に霞そむらん

右 同題

春日社百首中 九條前内大臣家百首中

もろこしも同じしみ空のかすみてや吉野の里に春はきぬらむ

二番

左 早春

あつさ弓春しきぬれは足曳の山のあらしも聲よはる也

右 殘氷

私 會 九條前内大臣家百首

あなし河水つれなし卷向の檜原やいまた曇らさるらん

三番

左 春歌中

例しとや千世のふる木のこの本に老そふ松をけふはひくらん

右 子日

祝部忠成日吉社會 十禪師社會

春の野に残る小松のおほかれはひかても千世の陰そまたるゝ

四番

左 浦鶯

鶯の春にきなけは難波津にうらはの浪もさくや此花

右 鶯

春日社百首

谷深きふるす出ても鶯のなを光なき宿に啼也

五番

左 殘雪

常盤木の陰にかくるゝ山里はまたふるとしの春の白雪

十禪師社會

右 同題

春日社百首

春も猶とはぬ人めはかれはてゝ垣ねの雪そ友を待ける

左 若菜

同 百首

宮古まで飛火の野守つけねとも若菜つみにとけふそ出ける

右 朝若草

九條前内大臣家百首

朝またきまたうらわかき草の原おもへは秋の露もほとなし

七番

左 霞

春日社百首

しほかまや昔の烟あともなし霞はすゑに立かはれとも

右 原上霞

いにしへの霞の袖や立かへりみかきか原の猶しほるらん

八番

左 春歌中に

入道大政大臣家住吉社三十首會

暮かゝる霞のうちの山のはを人にしられて出る月かけ

右 同題

右大弁光俊朝臣古今詞百首

此頃はかすみの袖やむすふ手の雪ににこる山の井の水

九番

左 河上霞

千首中 設所三十六人柳歌に被入

あさ日山うつろふ影もかすみつゝ遠さかり行宇治の川浪

右 春湊月

湊入の月のみ舟もさはりおほみ昔間の波にかすむ比哉

十番

左 霞五首中

大殿百首御會

難波人かすみの下にかくしほをしはしたき見て春や知らん

右 棧路春雨

九條前内大臣家百首

天原かすまぬ空の雨にたに人やはみえし峯のかけはし
十一番

左 梅

春日社百首

幾かすみめにみぬ里をしる物は風のつてなる春の梅かえ

右 野宿梅

九條前内大臣家百首

誰をかも知人にして梅のはなかりねの野へに匂ひそめけん

十二番

左 柳

春日社百首

吹風に木の下はらふ玉柳いとはぬ春の朝きよめ哉

右 田邊柳

八幡宮若宮會

小山田のきしの柳も打はへて引しめ繩にかけそあらそふ

十三番

左 歸雁

春日社百首

定めなき花の都のちきり哉行ては歸る春の鷹かね

右 春歌中

光俊朝臣古今詞百首

龜風にあひみんことはいのちとも契らてかへる春のかりかね

十四番

左 河歸雁

同家百首

時わかぬ川瀬の波の花にさへわかれて歸る春の鷹かね

右 花有遅速

九條前内大臣家百首

つれもなきかたへの櫻待わひて春やをそきと花や咲らん

十五番

左 尋山花

前但馬守家長朝臣會

花とみて山ちは末になりぬれとまた偽の岑の白雲

右 春山朝

住吉社會

よし野山松も二たひ埋もれぬ花咲つもる雪の朝けに

十六番

左 花歌五首中

大殿百首

山さくらおられぬ岑もなかりけり雲の衣の花染のそて

右 春歌中

侍從中納言爲家百首會

こゆるきの磯山さくら咲しより沖津なみまにとまる舟人

十七番

左 曉花

私 會

山櫻有明の月にうつろはゝつれなき色にちらすもあらなん

右 落花未遍

九條前内大臣家百首

春風のいかに吹はか山櫻散もちらぬも盛なるらん

十八番

左 花歌中

或處會

春の嵐吹にけらしなかつらきや高まの櫻雪と降まで

右 庭落花

今朝までは木々に見えつる花の色を雪に吹なす庭の春風

十九番

左 春歌中

光俊朝臣古今詞百首

いかにせんやよひの末の山風にさらぬわかれのみよしの花

右 同題

同百首

しるしらすうきて思ひのみえつらん花散山のむら雲の空

廿番

左 水邊藤

九條前内大臣家百首

しらすりきやとの藤波影みえてせき入し水を春の物とは

右 歎冬

春日社百首

うつり行やよひの末に咲そめてちらぬもつらき山吹の花

廿一番 夏

左 更衣

同社百首

あけたては花の色かもすて衣うすき契やかたみ成らん

右 夕卯花

或所會

夕月夜うつろひまかふかひもなし袖にかけ見ぬ庭の卯花

廿二番

左 郭公

待えてもうはの空なるあま雲のよそにのみ鳴時鳥哉

右

侍従中納言爲家百首

なけしはし涙をからは郭公うき身ひとつの袖を尋て

廿三番

左 古宅郭公

九條前内大臣家百首

里はあれて聞人かはる時鳥同じ昔をいかゝさたむる

右 故郷郭公

私會

故里と思ひなすてそほとゝきすなれも昔の聲はかはらし

廿四番

左 山五月雨

少将兼輔朝臣百首會

蜚小船はつせの山の名もしるし檜原かみおの五月雨のそら

右 閑庭五月雨

光俊朝臣當座會

五月雨のたえまも見えず暮る日は曇るにつけてとふ人もなし

廿五番

左 瀧五月雨

まより分れておつる瀧津せもひとつに成ぬ五月雨の頃

右

五月雨に岩きりとをし行とたにあまりてみえぬ水の白波

廿六番

左 早苗

春日社百首

是曳の山田もる庵はあれにしを又いつのまに早苗とるらん

右 照射

明かたは木々の雫やたまるらんは山のともし影そしほるゝ

廿七番

左 蓮

春日社百首

蓮葉の花のかゝみに成比はうき世の外の影もみゆらん

右 氷室

同百首

氷室山木のまもりくる夏の日の氷によはる影そ寒けき

廿八番

左 深山泉

九條前内大臣家百首

世にすまぬみ山かくれの庵まで板井の水をはらふ比哉

右 夏歌中

光俊朝臣古今詞百首

宮古にもあかてやむすふ泉河てる日に雲の衣かせ山

廿九番

左 蚊遣火

春日社百首

蚊遣火をふせやの床に立をきてすゝみに出る庭の松風

右 鵲螢

九條前内大臣家百首

鵲ひゝくいらこ崎の波まにもこたへぬ玉は螢なりけり

卅番

左 螢

春日社百首

秋ちかき袖師の浦に波わけてかけもつゝます飛螢哉

右 行路夏草

御宇御會

暮かゝる草の葉山を限にて秋のみちかき武藏のゝ原

三十一番

左 秋

大段百首

吹風もけふ立なれて初瀬女かゆふはなかくる秋の河波

右 同題

春日社百首

秋はけきたつをた巻のつかのまも今はた露のひまやなからん
卅二番

左 早秋

光俊朝臣會

今朝みれは露のみしけき淺茅生に風も吹あへす秋はきにけり
右 同題

九條前内大臣家百首

初秋の雲行風はいたつらにくるれは出ぬやまのはの月
卅三番

左 秋歌中

祝部忠成日吉社會

吹はらふまかきの萩の夕露を袂にのこす秋の初風
右 同

光俊朝臣古今詞百首

夕暮は月まつとても物そ思ふ雲のはたての秋の山の端
卅四番

左 同題

同百首

天川あふせもしるしわかうへは露置そめてき夜更にけり
右 名所七夕

九條前内大臣家百首

たよりある關の清水にやとりても年にまれなる星合の空
卅五番

左 霧

春日社百首

夕日さす峯のこすゑはあらはれて麓の霧に逢人そなき
右 遠村秋夕

九條前内大臣家百首

ゆふ日さす遠山本の里みえて薄吹しく野への秋風
卅六番

左 月

春日社百首

来てらす三笠の山にすむ月のかゝみをかけて神は知らん
右 同題

日吉社百首

空晴て行ともみえぬ秋風を光になしてすめる月かな
卅七番

左 原秋月

或處歌合

久方の月より外の影もなし露の下なる小の、篠原
右 月歌中

九條前内大臣家九月十三夜會

色まさる月のかつらや吹風の散もおしまぬ秋の紅葉は
卅八番

左 松宿月

同百首

里遠き月みんとて契をかぬ草の枕に松風そ吹
右 秋苑月

同百首

山賤のそのふをかけてかこつとも月はいやしき色なかりけり
卅九番

左 月

住江釣殿に書付侍りける

すみはてゝ遠里小野を行月の猶めにかゝる波の上かな
右 又同所

漕わたるあし分小船おなし江にことそともなく月そ更行
卅番

左 閑山月

九條前内大臣家百首

むかし思ふ人たにあらし更科やをは捨山に月はすむとも
右 陶迎

春日社百首

またれつる關に水こふほとなれや大宮人に望月の駒
卅一番

左 穩歌中

光俊朝臣古今詞百首

久かたの天の河原にたゝぬ日はまれなる比の秋の夕霧
右 薄

春日社百首

風吹はまのゝ入江の花すゝきなひくや浪のかへる成らむ

冊二番

左 女郎花

同 百首

女郎花露おもけなる花の枝に心もしらぬ野への秋風

右 蘭

同 百首

玉鈴のゆきゝの野への旅人に匂ひをきする藤袴かな

冊三番

左 萩

同 百首

末たはに野路のしの原なひけとも猶摩しるき萩の上風

右 山中秋花

九條前内大臣家御會

冊四番

左 初鴈

春日社百首

はつかりの音に立そむる夕へより物思ふやとの秋も悲しき

右 虫

同 百首

かよひくる秋の枕のきりくす籬の露や夜寒成らん

冊五番

左 杜鵑

私 會

秋山のふもとの杜に啼鴈は神たにうけぬ物やかなしき

右

泊瀬山おなし尾上に立しかも更る枕は聲そ近つく

冊六番

左 秋歌中

光俊朝臣古今詞百首

野わけより軒端のひまに中絶てあはすは何をさゝかにの糸

右 同題

同 百首

我宿の軒はの木葉そめしよりたつ日はきかし四方の山風

冊七番

左 紅葉五十首の中

大殿百首

晴くもり幾度空にしくれてかしのたの杜をそめつくすらん

右 水郷紅葉

九條前内大臣家百首

秋の日もなからの山の紅葉はゝおほつの里のかさし成けり

冊八番

左 旅泊紅葉

私 會

もみち葉のうきねの浪にかけみえて夕日もとまる秋の山木

右 同題

同 百首

うきねする浦半に近き山なれと幾しほまては木の葉そむらん

冊九番

左 擣衣五首中

大殿百首中

衣うつよそのね覺の秋風も月みよとてや袖にふくらん

右 同題

春日社百首

大かたのよを秋はつるしるへしてよのまやすます打衣成

五十番

左 橋邊菊

九條前内大臣家百首

かさゝきもわたさぬ橋のあたりまでほしか川への白菊の花

右 暮秋

同 百首

ね覺して月みしよりも行秋のわかれそ千々に物は悲しき

五十一番 冬

左 初冬

春日社百首

をのつから残る梢の秋の色もけさは淋しき神無月哉

右 同題

九條前内大臣家百首

木からしのかはれる色はなけれとも神無月とや吹まさるらん

五十二番

左 落葉見松

少將兼輔朝臣百首

立田山木の葉の後にはあらはれて松こそ冬のはしめ成けれ

右 旅時雨

よそになる宮古の空にめぐりあはし時雨の山も袖やほさまし

五十三番

左 冬歌中

祝部忠成日吉會に

霜枯の露の菊の花かたみめならふ色もみえぬ比哉

右 霜

春日社百首

みつきの岡のやかたは人はなしといはぬ霜の幾夜をくらん

五十四番

左 落葉

私 會

山下風につもる木の葉や散ぬらん庭もまはらに降時雨かな

右 網代

春日社百首

惜みこし秋は留らて網代木にまたぬ木のはのよらぬ日もなき

五十五番

左 冬歌中

光俊朝臣古今詞百首

駒とめてえそ水かはぬさゝのくま日のくま河に氷とちつゝ

右 濱霞

私 會

おきつなみ波吹上の濱千鳥玉かあらぬか霞よす也

五十六番

左 冬川

吉備津彦社歌合中

立田川木の葉の色をせきとめて氷そ秋のかたみ成ける

右 河水

或處會

さす棹の雪ににこる大井河となせの瀧はしからみもなし

五十七番

左 炭竈

春日社百首

炭かまの烟の下もいたつらに淋しきたへぬ小野の山里

右 日々鷹狩

光俊朝臣會

限りあれば鳥立すなく成にけりたゆむ日もなき御狩野の原

五十八番

左 氷

熊野社百首

山河に數かきとめぬをし鳥の跡つけそむるうす氷かな

右

大蔵百首

山河の氷る夜ことにすみかへて床もさためぬをしのひとりね

五十九番

左 冬歌中

光俊朝臣當座會

冬かれの苜まの水にある鳥の水そ今は床になしける

右 氷

春日社百首

石はしる瀧津岩なみ行末をあらそひかねて氷る冬哉

六十番

左 岸千鳥

九條前内大臣家百首

住よしの岸による波よ／＼は鳴や千鳥の人めくらん

右 同題

私 會

浪よする岸に生てふ川竹の夜半もあらはに立千鳥哉

六十一番

左 海邊冬鶴

九條前内大臣家百首

藻かり船よるへもしらすあるかひの波にもたつの聲さく也

右 雪歌中に

熊野社百首

降雪をしきつの浦の友千鳥波の上にも跡はつけゝり

六十二番

左 庭雪積

或處會

人とはぬ軒はの松にふる雪の道を残してつる日もかな

右 水路新雪

九條前内大臣百首

奥山の木のはのうへに降雪を落くる水のすゑにみる哉
六十三番

左 雪歌中

大殿百首

枝かはすたえまもみえず常磐山ちらぬ木の葉とふれる白雪

右 雪

春日社百首

うつもれて終にもみちぬ松とたに忘る計にふれる白雪

六十四番

左 冬歌中

光俊朝臣古今詞百首

よし野山今こん年の花よりもまたも降りしけ峯の白雪

右

熊野社百首

かきくもり渡間の煙うつめとも雪をも人のみやはとかめぬ

六十五番

左 曉雪

光俊朝臣會

さえわたる有明の月の山のはに入影みえて積るしら雪

右 嶺樹深雪

九條前内大臣家百首

雪折の音たに今はたえにけりうつもれはつる岑の松はら

六十六番

戀

左 初戀

春日社百首

またれつゝ恨むるまではなけれともしらぬもつらき心也けり

右 初逢戀

同百首

逢事はけつおのかゝみ影たえぬ遠山鳥の音にやたつらん

六十七番

左 春戀歌中

九條前内大臣家百首

山吹の花色ころもきしかたはいはて過しもあらはれにけり

右 逢不遇戀

春日社百首

あひみてしいもせの山の玉かつらくるゝ夜ことに戀つゝそる

六十八番

左 寄山戀

九條前内大臣家百首

祈つゝけふは幾日もこもり江の初瀬の檜原さてもつれなし

右 同題

同百首

物思ふ身こそあさまの夕けふり都なからにみやはとかめぬ

六十九番

左 絶戀

或處歌合署名

なひきこし煙をよそに吹なして涙もよふす袖の浦風

右 戀歌中

或處會

今も又かたみにけたぬ煙にも思ひや富士のねにあまるらん

七十番

左 戀歌中

侍從中納言家百首

ましてしはし烟の下になからへてむろの八嶋も人はすみけり

右 思

春日社百首

したにもえうへは霞てかはらやの人たにしらぬ身の思ひ哉

七十一番

左 秋戀

九條前内大臣家百首

吹風に鳴やうつらの床あれてさそひとりねの秋は悲しき

右 旅戀

春日社百首

草枕あたのかりねの枕にもつらき心や行めくるらん

七十二番

左 寄山戀

九條前内大臣家百首

夢にたに音信たゆる夜なは袖の泪や床の山守

右 不逢戀

大殿百首

いかにせん逢にしかへぬ月日へて徒にのみ身はよはりつゝ

七十三番

左 戀歌中

光俊朝臣古今詞百首

雲はらふ風そたよりのしるへとて思ふかたより月を待かな

右 逢不遇戀

或處會

をのつから思ひ出てはなかつともくもらぬ袖に月や待らん

七十四番

左 後朝戀

春日社百首

歸るさのかたみとたにもたのまれすわか身にかへぬ有明の月

右 同題

大殿百首

佛のかたみとたにもやすらはておなしわかれの有明の月

七十五番

左 戀歌中

光俊朝臣後撰集詞百首

河嶋のまつ心はしらねとも難面みえて年は經にけり

右 怨戀

大殿百首

風吹はとはに浪こす石見かたかたふく月もぬるゝ顔なる

七十六番

左 戀歌中

光俊朝臣會

枯はつる人の契の淺茅原しのにしめゆふ軒の立花

右

七十七番

左 寄弓戀

大殿御歌合

梓弓いく田の川に身を捨て名をのみおしむあとそはかなき

右 不逢戀

春日社百首

戀をのみしなのゝまゝ徒に心計はひくかひもなし

七十八番

左 寄玉戀

大殿御歌合

人こゝろよのうきよりも憂度の袖にそひるふ瀧の白玉

右 後朝戀

或處會

暮ぬとて待し夜比の白露はわかるゝ袖の淵と成ける

七十九番

左 戀歌中

光俊朝臣古今詞百首

うへにみぬ思ひの色の下染はたへす忍ふの山の口なし

右 同題

或處會

うくつらく人の心を秋の田のいねてふことはかりになしてよ

八十番

左 久祈戀

或處會

かけて思ふ心のしめはくちねとも神たにうけぬ年はへにけり

右 寄山戀

九條前内大臣家百首

我身とて山の岩木にあらはこそ憂もつらきもさてはすくさめ

八十一番

左 雜

十禪師社百首

しらま弓はるかにみゆる波まより春日にまかふあけのそほ舟

右 旅

或處會

あつさゆみ幾山越てはるゝと暮行峯やとまり成らん

八十二番

左 旅五首中

大殿百首

旅人の苔のさむしろ敷しのひしらぬ別に露そこほるゝ

右 雜歌中

光俊朝臣古今詞百首

とはれははれぬ雲井にわふとたに都に誰か思ひ知へき

八十三番

左 浦煙

吹風に烟や遠くなひくらん里なき風もしほやきけり

右 眺望

熊野社百首

おほつかないつれの山にかゝるらん波の上なる空の浮雲
八十四番

左 同題五首中

大殿百首

かきりあればかすまぬ浦の浪まより心ときゆる蜚の釣舟

右 同題中

同百首

見渡せばみおの浦半の夕なきに猶波かくる興津嶋山

八十五番

左 山家

人しれす我身ひとつの山里は世のうきことも聞えさりけり

右 苔

十禪師社百首

踏わくる道たに深き苔の下に誰うつもれて朽果にけり

八十六番

左 山家燈

九條前内大臣家百首

山里は明行空もあけやらて雲に残れる窓の灯

右 山家五首中

大殿百首

うきたひの心は深き山もあらし是より奥に住かはるとも

八十七番

左 名所述懷五首中

九條前内大臣家百首

世中の人にしらるゝ山なれば吉野の奥も猶やいとはん

右 同中

難波かた芦まにやとる月はなをしつむとみるも光有けり

八十八番

左 懷舊

春日社百首

和歌の浦や過にし御代の變らすは庵のもくすも顯れなまし

右 同題

或所會

世の中に思ひけてとも和歌の浦や身を慰むるあまのもしほ火
八十九番

左 花浮水

同 會

身をすつる誰あらましも難面てさそふ水あらは花を流るゝ

右 述懷

春日社百首

かれやあらぬ藤の末葉のかひもなくまた紫の衣ならねは

九十番

左 同題五首中

大殿百首

慰さめし秋のねさめのあらましと思ひそよはる年のへぬれは

右 懷舊

秀能入道身まかりて一品經すゝめ侍し

つゐてに

もしほひにあらぬ烟になりはてゝ見しは昔のわかのうら人

九十一番

左 寄名所述懷五首中

九條前内大臣家百首

をのつから人にひかるゝ時やあると眞弓の岡に宿やからまし

右 述懷五首中

大殿百首

くらゐ山ふもとはかりの道をたになを分かつかゝる白雲

九十二番

左 曉

春日社百首

世中に猶あり明のうき身をやつれなきものゝ月はみるらん

右 名所述懷五首中

九條前内大臣家百首

風吹はさやの中山なか空にかゝるかたなくまよふ白雲

九十三番

左 谷餘花

父の思ひに侍し年の百首に

花もまた春にをくれて物や思ふことし卯月の谷隱つゝ

右 海初秋

九條前内大臣家御會天王寺に侍しに

難波かたあしのかりねにみし夢の猶覺やらぬ秋の初かせ
九十四番

左 述懷 熊野社百首

藤衣かはる袂の墨染にやかてうき世をいとひ果はや

右 橋 春日社百首

知しらすうき世を渡る人はみななからの橋のためしなりけり

九十五番

左

此世にはよしこととはし角田川すみえぬかたの鳥の名もうし

右 河邊鳥 同百首

大井川おりゐる鷺の立跡を淺瀬としりてわたるかち人

九十六番

左 夢 春日社百首

はかなしやさめても夢の世中をうちふす程と思ひけるかな

右 孟陋盆 光俊朝臣當座會

なき人の此世にかへる倂の哀ふけゆく秋のとし火

九十七番

左 松 春日社百首

小倉山峯のもみちの散しより梢の風は松に吹也

右 竹 同百首

竹の葉に衣をかけしにしへの人の心のなき世成けり

九十八番

左 春朝鶴 九條前内大臣家百首

わかぬ浦や行末かけて出る日に聲ものときき春のあしたつ

右 春雨 春日社百首

人しれぬ山の草木も春雨に神の恵を空に知けり

九十九番

左 述懷 承久以前或所御會

君か代を松につけてそ春日山藤の末葉も花は咲へき

右 郭公 進北野社

待こともかゝらん物は郭公今そ北野の空に鳴なる

百番

左 祝五首中 大駁百首子時閏九月

行するの千世のあまりもしら菊の秋くれかゝる色そ久しき

右 神祇歌中 住吉社を

神のます春日山ちの四の海の波風あらき時のまもなし

已上二百首中白點或云。朱點京極中納言入夢。墨點故人語。

右隆祐朝臣百番自歌合以猪苗代謙誼藏本書寫畢

群書類從卷第二百廿一

和歌部七十六自歌合五

永福門院百番御自歌合

一番

左

春とたに思ひもあへぬけさの朝け山の霞ははや立に鳧

右

朝風は外面の竹に吹あれて山の霞も春寒き比

二番

左

外山には霞たな引むへしこそ野澤の雪も下消にけれ

右

なきさゆる夜半の雪けのうすくもり晴行月も又霞ぬる

三番

左

峯の霞ふもとの草のうす緑野山をかけて春めきに鳧

右

木々の心花ちかゝらし昨日けふ世はうすくもり春雨そふる

四番

左

折かさす道行人のけしきにて世はみな花の盛をそしる

右

入あひのこゑする山の陰くれて花の木の間に出にけり

五番

左

花のうへにしはしうつろふ夕附日入ともなしに影消にけり

右

何となき草の花さく野への春雲にひはりの聲ものとけき

六番

左

窓の梅のかほりなつかし朝明に聞なから聞鶯の聲

右

あくかるゝ心なからやさそはれん梅咲軒のはるの夕かせ

七番

左

遠近の霞の色はふかけれと岸の柳そ淺みとりなる

右

霞わたり長閑き暮に河きしの柳一もと春風そふく

八番

左

さえかへる風を寒み足引の山のさくらも咲やかねぬる

右

遠近の鶯の音ものとかにて花の咲そふ宿の夕暮
九番

左

一木つゝつきて咲なん我宿の花は見るほど久しかるへき

右

春ことにかはらぬ物か梅の匂ひ櫻かいろにうつるこゝろは
十番

左

峯のかすみ麓の花に鳥々こゑ野山のはるは夕なりけり

右

夕暮の霞につゝむ山本の花とけふりの里のむら／＼
十一番

左

夕月日軒はの影はうつり消て花のうへにそはし残れる

右

何となく庭の梢はかすみふけて入かた晴る山のはの月
十二番

左

詠やるかすみの遠のはるの暮柳さくらの色そこもれる

右

枝かはす柳か末はなひけとも盛のはなは風もよきけり
十三番

左

吹はらふ山の嵐はけしきにおつる櫻はのとけかりけり

右

ちるとなみ花おちすきふ夕暮の風ゆるき日の二月の空
十四番

左

あひ思はてうたて散ゆく花にしも何あちきなく心そむらん

右

あやにくに吹たつ風のつらき哉あすまでよものけふの櫻に
十五番

左

残なく散しく庭の花の雪えたにをかへせ春のゆふ風

右

峯つゝきくれて吹たつ山風にさかぬ野へまで花そ散しく
十六番

左

瀧津せやいはもと白くよる花は流るとすれと又かへる也

右

流やらぬ花のしら浪立かへり春をとゝむる山川の水
十七番

左

明かたき秋の寢覺もかくやありし草の庵のよはの春雨

右

何となく寢覺の袂しほりわひをし明る空もよはの春雨
十八番

左

歸さの道もやまよふ夕暮のかすむ雲井にきゆる雁かね

右

入かたの月影かすむ山のはに歸る雁さへほのかなるこゑ

十九番

左

此ころよ井手のわたりもかくやらん山吹咲てかはつ鳴也

右

打いつる浪さへ色にうつろひぬ井手の川瀬の山吹の比

廿番

左

ゆく春をしたひかねてそ聞ゆなる青葉のなかの鶯の聲

右

岩かくれ咲るつゝしの人しれす残れる春の色もめつらし

廿一番

左

神まつる卯月になれや榊葉にみしめはへたるあけの玉垣

右

ほととぎすこゑも高根のよこ雲になき捨てゆく曙の空

廿二番

左

卯の花の垣ねの月のうす雲に山ほととぎすひと聲そ鳴

右

月雪の色にそまかふ卯の花のかきねつゝきのたそかれの宿

廿三番

左

さなへなひく外面の小田のむら雨に山時鳥こゑおとすなり

右

檜の葉にむら雨かゝる山陰のくるゝ雲間に郭公なく

廿四番

左

小山田のさなへの色はすゝしくて岡へこくらき杉の一村

右

山本のけふりの色も消はてぬ遠里むらの五月雨の比

廿五番

左

五月雨のふるやの軒の糸水のくる人もなき暮そ淋しき

右

五月雨のはるゝ雲間の宵の月軒のあまりの影そすくなき

廿六番

左

夕立の雲も残らず空晴てすたれをのほる宵の月影

右

風の音もすゝしくそよく呉竹のふしうきよはの月の影哉

廿七番

左

みしか夜はさし入月の影をこめて枕の山ははや明にけり

右

雨はるゝ梢の青葉いろそひて吹たつ風は露はらふなり

廿八番

左

なく蟬のこゑさへすゝし吹風にむら雨まじる山のゆふかけ

右

旅人のあまた立よる夕木陰山川きよみすゝみ涼しも

廿九番

左

夜の雨に竹の葉末はなひき伏て朝けの窓の風の涼しさ

右
出そむる尾花もはきも色そこき露の籬のけさの曙

夏深き草のしけみのしけくのみ思ふおもひは道もとをらす

世五番
更る夜の月と虫とは何なれや光もこゑもひとつにそすむ

谷ふかき庵の軒のまつ風秋よりさきに秋をきく哉

右
みちのへや垣根の虫も聲更て月より外に行人もなし

吹かせも今宵はすゝし御板する川瀬の浪に秋やさきたつ

世六番
庭白く月〔の〕出ぬる宵のまの草の葉かくれきりくす鳴

いつしかと聞に心そ愁そむる萩のうへわたる秋のはつ風

左
虫のこゑ露の光もさよ更て霧にしめれる野への月影

何もなくかはるとなしの色さひて松も檜原も秋は見えけり

世七番
きかしみしかけそふ比の月の色にねさめ秋なる萩の上かせ

ひこほしのあふ夜をちかく思ふより我さへ空に詠をそする

右
秋の夜の月は心にすみけるを雲井にのみと何おもひけん

天の川としのわたりを待よりもけふのくるゝは猶や久しき

世八番
雨風は暮にや見ぬる大空の雲間に早き夜半の月影

秋草の花のひもとく比しもあれ吹なむすひそ野への夕風

右
村雲にかくれ顯れゆく月のはれも曇りも秋そ悲しき

宮城野やちくさのうへの秋の風なひくそ花のすかた成ける

世九番
秋風のひゞきは峯にさよ更て影遠くなる入かたの月

おきて見る朝けの藤露しけし小萩かすゑの花になる比

左
秋風のひゞきは峯にさよ更て影遠くなる入かたの月

おきて見る朝けの藤露しけし小萩かすゑの花になる比

右
秋風のひゞきは峯にさよ更て影遠くなる入かたの月

このまより月はたえ／＼庭にもりて軒端にさはく夜半の松風
四十番

左

月にみかく露の光も清くしてよな／＼涼し竹の秋風

右

更行はまきのお山に霧はれて月影清し宇治の川浪

四十一番

左

露繁き草葉のうへは靜にて下には虫の聲そみたるゝ

右

宵過て月また遅き山のはの雲にひかれる秋の稻妻

四十二番

左

はる／＼とわたるや雁のこゑ遠し雲に色ある西の山のは

右

やへきりのたつ山本のはる／＼と田面におつる秋の雁かね

四十三番

左

末高き籬の花はかたふきて露おちつゝく雨の夕暮

右

何となく寝覺の袖もうるほひぬ明やらぬ窓の秋のよの雨

四十四番

左

うす霧の朝けの梢いろさひて虫の音残る森の下草

右

露しけき草のうへより明そめて霧の山へそしはし夜深き

四十五番

左

秋風の梢をはらふ夕暮の雲にはつるゝみか月のかけ

右

夕附日いはねの苔に影きえて岡の柳は秋風そふく

四十六番

左

其いろとさゝぬ夕の悲しきはおはな風に薄雲の空

右

さま／＼にうき世をおもふ夕暮のそとと草葉といつれ露けし

四十七番

左

をしなへて紅葉はちかく成にけり夕日の山の秋のゆふくれ

右

時雨つゝ秋すさましき岡のへの尾花にまじる櫨の一本

四十八番

左

打はらふ袖にも秋そすさましき露霜かゝる山の下道

右

嵐吹岡への秋はさむくして柞のもみち散そめぬなり

四十九番

左

何となき山の木のはは落すさひ時雨るゝ暮の秋そ悲しき

右

もろくなる桐のかれ葉は庭に落て嵐にまじる村雨の音

五十番

左

とめかたき日數の秋をおもふよの月たに空をいそかさならん

右

色残る花の籬はまた秋をはや霜しろしけさの朝明

五十一番

左

浮雲は軒はの峯をこえかゝりしはし時雨て又過ぬなり

右

枯ておつる木の葉の上にかゝれはや時雨の音ももろく聞ゆる

五十二番

左

さやかなる光もぬれてみゆる哉時雨の後の庭の月影

右

月のすかた猶有明の村雲に一そゝきする時雨をそ見る

五十三番

左

もみ葉をさそひておろす山風にいく木の錦庭に敷らん

右

一はらひ勵しくおろす夕暮のあらしの末を木のはにそみる

五十四番

左

朝日さす野原のをさゝ霜消て露としもなき光をそみる

右

山本はまた霧くらき曙のすそ野は霜の色にしらめる

五十五番

左

窓たゝく嵐にさやく吳竹のよことに雪をあすやとそ待

右

村鳥の羽音してたつ朝明の汀のあしも雪降にけり

左

雪の色にやゝしらみ行山のはの梢にきゆる有明の月

右

朝戸明の軒はに近く聞ゆる梢のからす雪ふかきこゑ

左

宵のまゝ雪はひとへの色ながら薄雲晴て月そさやけき

右

雲はるゝ月は梢に更過て積りもそはぬ夜半の薄雪

左

遠近の里のわたりそ靜なるかよひ絶たる雪の夕くれ

右

浦風や雪の白浪吹はれてしはし霞める遠しまの松

左

むらゝに小松ましかる冬枯の野へすきまき夕暮の雨

右

寒き雨はかれ野の原に降しめて山松風の音たにもせず

左

六十番

右

解やらぬ池の汀のあさ水こぼれるほとゝつもる雪哉

左

右
とちわたる氷のひきを行なやみ常よりほそき山川の水
六十一番

左
降雪にしらぬ程に交る雨の暮ゆく軒に雪をたてぬる

右
くもる夜の庭はむら／＼霞にてまかきの竹は風はらふなり
六十二番

左
天乙女そてふる夜はの風さむみ月を雲井におもひやる哉

右
あれぬ日の夕の空は長閑にて柳のすゑも春近く見ゆ
六十三番

左
包むかた人めも常に忘るゝを世にもそめるのことよせもなし

右
此暮につゝむ泪はとゝめかねぬをさふる袖の下とをるまで
六十四番

左
あやしくも心のうちそ亂れ行物おもふ身とはならしと思ふに
さ集

右
とにかくに晴ぬ思ひにむきそめて憂より先に物の悲しき
六十五番

左
逢ことはなきさによするしき浪の頻にぬるゝ袖を見せはや
右

いつまでも命をかけて待へきになからへかたくなるそ悲しき
六十六番

左
芦間わくる湊の小舟とにかくに障やすさをこりす待哉

右
いつとしもたのめぬ暮の玉章に解ぬにおとるつらさ社そへ
六十七番

左
何となく今宵さへこそ待れけれあかぬきのふの心ならひに

右
またやもしと頼む心の今日さへよけき別きとおもふ物から
六十八番

左
空しくはおもひはつへき今宵ともしらてや人のたゝ明すらん

右
つゝに今宵こすしもならん後に社つらき人とは思ひはてなめ
六十九番

左
後をともし頼ぬ中のたまさかにあふ夜は時のうつらすもかな

右
たまさかに逢はひと夜の時のまにうひも恨もいかにほるけん
(こ歌)
七十番

左
馴しかたの哀はかりは捨すとも又逢見すは何にかはせん
右
思ひ過す其おり／＼の心をもいつあひ見てかかゝりしもせん

七十一番

左

つゝみ暮す涙をゆるす時にして月をさたかにみるよはそなき

右

泪にも餘りて人のつらきよは慰にみし月さへもうし

七十二番

左

いつまてか行衛きためぬ浮雲のうきて立ゐに物を思はん

右

大かたは頼むへくしもなき人のうからぬにこそ思ひ侘ぬれ

七十三番

左

よはの残り契りかたやの疑ひにまた深しともえこそいはれぬ

右

別てもまた夜は深き鳥のねを獨なこりの床に聞かな

七十四番

左

思ひし一ふしをたに見せかぬる心よはさそ我なからうき

右

有しよりも哀はそひてみしよりもうさは増るに思ひかねぬる

七十五番

左

宵々の夢の行衛のあやしきよ我おもひ寝かひとの心か

右

思ふてふことのはなくは今更に人のこゝろにまよはさらまし

七十六番

左

をのつからおなし月をは詠ともおもふ思ひは我にしもにし

右

人戀る心はつねにあくかれてふると計の世にはいつまて

七十七番

左

うれしかりし昨日の暮の契こそけふはつらさの數に成けれ

右

かけて待し月日を何に歎けん後も頼まぬ歸るさの道

七十八番

左

おなし世を頼むかたにはあらねとも馴し名残を忘れかねぬる

右

かはさすは夜比かさなるから衣かへすも身をそうらむる

七十九番

左

其折をかきるとは猶おもはぬをいかなるふしにいつ替けん

右

日數とは哀いつまてかそへけんいく年月の中のへたてを

八十番

左

戀やまぬ身はことはりにかへれ共忘るゝ人のうさはゆるさす

右

限そと命をかけてかこてとも厭ふひとには其かひもなし

八十一番

左

おもひ馴し我心こそ哀なれ頼まぬものを夕暮の空

右

憂はてをつれなやありてとはかりにむかふ夕そたへす悲しき

八十二番

左

契けりまぢけり哀其時のことのは残る水莖のあと

右

うかりしも哀なりしもあらぬ世の今になりてはみなぞ戀しき

八十三番

左

山松の梢の空のしらむまゝにかへにきえ行間の月かけ

右

ひゝきつる松の嵐の音もせず月さしのほる夕暮の山

八十四番

左

月も入簾も聲やむ明くれの空しつかなる星の影哉

右

里遠く八こゑの鳥は音つれて月すみ清き有明の空

八十五番

左

月にはや遠鳥かけに傾きぬしはしとゝめよ須磨の關守

右

大空の月よ何とて常ならんさしもすみうき此世とおもふに

八十六番

左

山川のたゝ一筋のなかれこそあまたの瀧に落わかれけれ

右

しつみはてぬ入日は浪のうへにして鹽干に清き磯の松原

八十七番

左

峯ふかき嵐の音と聞ほとに谷の松にぞ吹おろしぬる

右

谷川の底のひゝきにかよふ也高き梢のまつかせの音

八十八番

左

聞しほるねさめの窓は夜ふかくて楨の葉くらき曉の雨

右

山風の吹わたるかと聞ほとに檜原に雨のかゝる成けり

八十九番

左

濡まさる草葉の色にしられけりそゝくも見えぬ夕暮の雨

右

おく山の檜原かうへに雨落て雲ぬる谷に鳥かへるなり

九十番

左

夕暮の山きは清く雨はれて雲おりかゝる杉のむらたち

右

たちみたれ風に浮ゆく雨雲に半いろこきゆふくれの山

九十一番

左

風たちてむらゝわたる雨雲の晴る方より星出にけり

右

別ゆく雲の絶間の見えてしも更に降そふ夕暮の雨
九十二番

左

山あひにおりしつまれる白雲のしはしと見ればはや消にけり

右

暮はつる嵐の底にこたふなり宿とふ山の入相のかね

九十三番

左

折しもあれ遠里けふり絶はてゝ夕のなかも哀そふらん

右

うちむれて麓にくたる山人のゆくさきくるゝ野への夕霧

九十四番

左

竹の編戸かこふともなき柴の垣物はかなけの賤か家居や

右

山里の軒はに近き椎柴のしゐてうき世にいつまでかへん

九十五番

左

山水の流を見ても住人のこゝろの塵をすゝけとそ思ふ

右

なかれての末をも何か頼むへき飛鳥の川のあすしらぬよに

九十六番

左

旅衣たつより袖は泪にてむすふまくらも野への夕露

右

ひにそへて都の空を隔てまさる昨日の宿はけふのふる里

九十七番

左

はしめなく迷ひ初ける長き夜の夢を此たひいかて覺さん

右

心をも何かとゝめん露の命しはしをくまのかりの宿に

九十八番

左

昔とは遠きをのみは何かいはん近き昨日もけふはむかしを

右

こし方を忍ふ泪の玉くしけふたゝひあはぬ時そ悲しき

九十九番

左

人のうへのはかなき事を聞にしも身は行末のよゝのかねこと

右

日のまへに見聞しひとのなき數をかそへて我もいつまで

百番

左

日にそへてうきふししけみ呉竹の世にへかたくも成まさる哉

右

手すさひにつけをく墨も行末は誰かあはれと水莖の跡

右永福門院百番御自歌合以紫苗代謙庭本書寫校合了

慈照院殿御自歌合

一番

左

いつる日の影こそ霞め足引の山のあなたも春や立らん

右

天津風けさはのとかに吹ぬなりをとめの袖も春や知らん

左歌。立春紅光出^二扶桑^一ほと。春從^レ東來ことをおもひやり。右歌は。解^レ米東風至時。天津乙女の袖も春を弁とはへる。共卷頭の歌。勝負難^二定申^一可^レ爲^レ持歟。

二番

左

神代より霞わたれる春の色をおもふも遠し天の浮橋

右

仙人のすみかやいつく立ぬはぬ霞の衣をりかけてけり

左。神代よりとあるよりすゑの句。天のうきはしまて。心もことはも及ひかたく聞ゆ。右又たちぬはぬ霞の衣。龍門にまうて、讀侍しにもをとらす侍れと。猶左の天の浮橋には。かけてもをよひかたくや侍らん。

三番

左

明やらぬよさの浦波をとほして入うみくらくたつ霞哉

右

心なき海士のなかもはをしてるや難波江かすむ浦の曙

よさの浦。難波江。霞のたち所。いつれ深しあさしとも。わ

四番

左

長岡やおちほひろひし跡とめて春は田つらに若なをそ摘

右

谷川やうち出し波のはなも又いはねにかへる春風そ吹

左。おちほひろふときかませはといへる歌を。わかなにとりなされたる心おかし。右とくる米のひまことにと侍る事を思ひて。根にかへるはなと。いはんとのたくみ。おもしろく侍り。但落穂など。歌合となりては。さのみ褒美のことはにはあらさるへし。仍右の勝とす。

五番

左

天地のひらけ初にし時よりや梅はたへなる香に匂ひけん

右

咲みちて匂ふもふかし紅の色にとられぬ庭の梅か枝

梅のはなを賞するあまり。天地開闢の時までおもひやるこゝろ限なし。源氏物語の紅梅の巻に。香なんしろき梅にはをとれるといふるを。いとかしこくとりならへても。咲ける哉と侍るやらん。心も詞も艶に聞え侍れは。右の勝にこそ。

六番

左

立田川きしの柳のいとほて春けみとりの水くゝるなり

右

志賀の浦や米とけにし浪のうへに遠さかり行春の雁金

左。唐紅に水くゝるとはと侍る心を。翠柳の糸にひきむすはれたる。尤めつらし。右は遠さかりゆく志賀の浦なみとあるを。歸雁にとりなされぬる姿もよろしくはへれは。持にて侍へし。

七番

左

うつし植る庭の一本の花にさへおほふはかりの袖やなからん

右

誰か世よりあたる色に咲そめて花に心を盡し來ぬらん

大空にとよめる歌を。わつかなる庭の花にたに。おほふ袖なきことをうらむる心おかし。誰か世よりと。いひいたされたるより。末の句にいたるまで。理りかなひて。こひ願へるさま也。これも。いつれまさと申かたぐや。

八番

左

春の池のかゝみの影に降雪は汀の花や老木なるらん

右

ちりかゝる花のかゝみの山櫻さゝ波くもる浦風そふく

左は。鏡のかけに見ゆる雪と波とを。なけきといへることはおもひ。右は。ちりかゝるをやくもるといふらんと侍る歌をとらる。共に古今集よりいつ。兩首のかゝみに心うつりて。是非にまとひはへれと。右は猶下句たけある心ちし侍る。

九番

左

衰身のさかりにかへる春もかな散にし花そ又も咲ける

右

いはねふ山路は花にうつもれて梢そ苔の色に成ぬる

左は。壯年の時を。又さくはなにむかひてうらやみ。右は。少年の春を。いはねの花をふみて。おもひいつる心やはへるへき。詞はかはれるに似て。歌のさまひとしき歟。

十番

左

うちなひく松はうら葉にうつもれて風にかゝれる春の藤浪

右

春をへて藤さきかゝる松かえや顯れやらぬ浪の埋木

左右の松。みなうつもれて。藤浪のみかゝれる風情。おなしさまにみえたり。

十一番

左

櫻色の袖とや今朝もいひなさんたゝひとへなる花もこそあれ

右

名のみして花染ならぬ櫻麻の袖をもけさは立やかふらん

右の櫻麻の袖。めつらしきさまには侍れと。左のたゝひとへなる花もこそあれと侍る下句なとままりて聞ゆ。

十二番

左

花ちりし軒はの櫻あさ露に猶うとまれぬわか縁哉

右

身にはまた近きまもりに袖ふれしおり忘れぬ軒の橘

左歌。猶うとまれぬと侍ること。郭公の古歌に。思ふ物か

らとあるは。うとまれぬるといふ詞なるへし。源氏物語の。
やまとなてしこはうとまれすといへる心にや。此若みと
りもさを聞え侍る。心いとおかし。右歌。右大將辭し申さ
れて。いくはくもなくてよませ給へるよし。うけ給りしこ
となり。こと葉の花も。袖のかも。まかふへくも侍らす。勝
たるへし。

十三番

左

待はうきならひ知てや郭公妻とふ暮にねをもらすらん

右

宿ちかくなけほとゝきす我爲にもらす初音とおもふ計に
郭公のうた。むかしより數なくつもりはへりて。さまゝの
風情もつきにたるに。此左右の郭公。いつれもめつらし
く聞え侍り。

十四番

左

けふこそは引て袖にもかくれぬにおふる菖蒲の長きねながら

右

眞管おふる沼江にましろあやめ草引てや長きねをくらへまし
左右の菖蒲のなかきね。いつれもひとしくはへるにとり
て。右は興ある風情のみなり。左は。けふこそはとて。ひき
て袖にもかくれとあるわたり。やすらかにいひくたされ
て。歌のさまよろし。

十五番

左

つきてふる日數やいくか庭の面は薄をしなみ五月雨の比

右

山川のせゝ行波もいはこすけ末はや下にさみたれの比
すゝきをしなみ。ふれる白雪を。五月雨の露をもきかたに
おもひよせられたる。めつらしき心にも侍かな。瀬々行波
もいはこすけなど。よくつゝける秀句には侍れと。左は。
なをおかしき所も。まさり侍らんかし。

十六番

左

山ひこのよそにこたふる聲す也谷の戸たゝくよはの水鶏に

右

露をかぬもとあらの小萩夏深み風にはあらて花を社まで
左。谷のとたゝく水鶏に。山ひこのこたふるこゝろ。よろ
しくきこえ侍り。右もとあらの小萩露をもみの歌をと
りて。いく世の春をまつ白雪と。定家卿よみ侍りしをこ
そ。めつらしく思ひはへりしに。露をかぬと置くより。花
をこそまでと。いひとちめられたる。いとおかし。露なき
夏の萩もみる心地し侍り。尤勝侍るへし。

十七番

左

丈夫かするわさならし棹鹿のよるはすからに見ゆる照射は

右

いにしへの高津の宮の氷室よりそなへ初つるためしとやなる
ますらおかするわさならしとて。鹿のよるはすからなと。
古歌をは。かやうにこそ。とるへき事にて侍れ。右ことな
ることなければ。左の勝とす。

十八番

左 浮雲や月まつ山にかゝらまし入目をあとにはるゝ夕立

右

夏そなき高根の雪を見るに冬きくに秋ある富士の川風

右 見るに冬。きくに秋あるなど。こと葉をかさらすして。

心をさきとせられけり。此卦。一の姿にておかしく見ゆ。

左 上下の句に文字あること。ふるき歌合に。なきよりは

かにそや聞え侍るなともいへるか。しかはあれと。入目を

あとに暗る夕立の雲。月まつ山になど。よろしく見えは

れは。以左爲勝。

十九番

左

七夕にかしつる夜の衣を今朝かへすらん天の川風

右

契こそおなし例よ天川のうき木は龜のうき木ならねと

左 牛女にさまゝの物をかす事ある中にも。よるの衣便

あり。けさ返らん天の川風。首尾かなひてきこゆ。右 天川

のうき木。常のことに侍れと。又如一眼之龜。浮木孔の如

來の金言を。稀なるためしに引よせられぬるも。おかしく

侍れは。強無差別歟。

廿番

左

あまの川わたれと錦中たえぬ紅葉の橋はいく代かけけん

右

七夕のめぐりあふ日は七事としをつむとも盡しと思ふ

左 天河のもみちの橋。立田川の紅葉の錦。二首の歌をと

られたる心こと葉よろし。右 力車に七事とある事を。七夕によせられたる。誠おかしく見え侍れと。中たえぬも

廿一番

左

けふはまた咲残りふる里のあすかさかりの秋萩の花

右

小車のにしきとそ見る古里の庭は蓬かもとあらの萩

左右ともに。故郷の萩なるにとりて。左は古里のあすか盛

のなど。こまやかにいひくたされて。詞もいみしうおかし。

右は小車の錦と見ゆる萩に。蓬の轉するを見て。車輪をつ

くれることをおもはれたる。心こと葉及び難くは侍れと。

左の萩は。なを色まさり行心地し侍るなり。

廿二番

左

置まよふ野原の露に亂あひて尾花か袖も萩かはな摺

右

身にそしむ末葉さやきて散露のしのゝめ深夜半の秋風

左 尾花か袖もはきか花すりなと。風情もあまり。詞もよ

しありておかし。但右しのゝめふかき夜半の秋かせ。事も

なく感氣ありて。誠に身にしむはかりなれは。勝と申へく

や。

廿三番

左

咲花はさなからむせるあはつのゝ露もたかはす見ゆる色哉

右

紫のねすりならねと藤はかまわくれは露をくたく袖哉

花色如_レ蒸_レ栗。俗呼_二女郎_一と。順か作れる詞を。むせる栗

津野の露もたかはすと侍る。いとおかしくも侍る哉。又紫のねすりならねと。蘭にくたくる露も。めつらしく侍れは。

爲_レ持。

廿四番

左

詠わふる夕は山のおくもなし秋にうき身のかくれかもかな

右

なく虫のさせもか露や寒からし枕の壁にこゑのうらむる

左。憂_二秋夕_一於深山之幽居。右聞_二暗菴_一於寒更之敗壁。共に

有_二秋景之感_一。豈決_二雌雄_一乎。

廿五番

左

またしとは思はぬ物か棹鹿の來ぬ夜あまたの妻こひの聲

右

心あらはもるや山田のひたすらにいとひははてし棹鹿のこゑ

左は古歌によりてよろし。右は心あたらしくておかし。猶又持にて侍らんかし。

廿六番

左

あま人の袖しの浦のうつせ貝ひろふばかりにすめる月哉

右

此ころの夜をへて色そまさり行時雨はそめぬ月の桂も

海士人の袖しのうらに貝拾ふはかりの月かけ。まさしく見る心地して。おかしく侍るに。時雨は染ぬ月の桂。望以

前清光返_レ夜まさるへき心よろし。尤可_レ爲_レ勝。

廿七番

左

八重たちし雲は嵐にきえはて、横川の峯の月そさやけき

右

朽残る軒の板まもさもあらはあれあれすは月の影ももらしを

右は中三句。興ありて聞え侍れと。左横川の峯。雲のやへたつ山。みくなれて侍るを。月には猶心やすみましまし。

勝へきにこそ。

廿八番

左

海士人はよなく夢やうとはまの波かけ衣うち明すらん

右

見し花の色を残して白妙の衣うつなり夕かほのやと

左。よくいひくたされて。姿もよろしく侍れと。右源氏物語の夕かほの巻に。白妙の衣うつきぬたの音とはへるを。

花の色によそへられたるもおかしければ。勝にや。

廿九番

左

常盤木も下葉色つく秋山は時雨にもるゝ一本もなし

右

露霜の色とるきゝは紅の筆の林とよそに見えけり

左。露にも時雨にも。つれなき常盤木。あき深くなるまゝに。下葉いろつく事。眼前のことはり。さる躰にておかし

く侍り。右。紅の筆は。ふんてといはんために。つゞけはへる詞にや。もみちにより。色とるによそへられたるは。見

所ある心地し侍れと。時雨にもるゝ一本もなしなど。いさ
さかまさり侍るへし。

卅番

左

したひこし昨日の秋やふゆならん春の名にたつ神無月哉

右

吹風もはけしくなれば山櫻花よりもろく散紅葉かな

左。十月を小春といへるにつきて。秋を冬。ふゆを春にな
されたる作意。短慮のをよふ所にあらす。右。吹かせもは
けしくなれば。山櫻花よりもろしなど。何となきさまに聞
え侍れと。飛花にふるゝ風は。目をへてゆるく。落葉に吹
あらしは。昨日よりはけしくなるへき心。人のおもひよる
ましき事なるへし。いづれもめつらしくおぼえ侍れと。右
なをまさるとや申へからん。

卅一番

左

日影さす庭の草はゝかつとけて霜の花にも露は置けり

右

をく霜をはらふと見ゆる袖もなし野への尾花の冬かれの比

右の尾花。難とすへき所もなくは侍れと。左の霜のはなに
も露はおきけり。いみしうおかしくはへるにや。

卅二番

左

山の井の曉かけて結ふ手の攀もやかてこぼる比かな

右

水上はなを流れけり谷川の氷のうへをこゆる白浪

左。山寺の後夜。閼伽水のしつく氷こゝろさひて。さる事
ときこえ侍り。右。氷をこゆる白浪。日影も及はぬ谷川な
との景氣。今見る心ちし侍りておかし。但かみと。うへと
の事。心は聊かはりはへるは。古くも如^レ此のこと多く侍
るめれと。わさと歌合のために。沈みおもひて讀れたる歌
ならは。いかにそやと思ふひともしや侍らん。うたのさまめ
つらしく侍れは。まつ持なとにても侍れかし。

卅三番

左

月残る浦はの波の東雲に面影みえてたつ千鳥哉

右

夕霧に友まとはしていもかしまたみに千鳥こゑを恨むる

左右の千鳥。左は残月のしのゝめの面影。右は妹か鳥。か
たみのうらのけしき。歌のすかた優にして。又勝負申かた
し。

卅四番

左

今朝ははいつくの山も埋もれてめつらしけなき富士の白雪

右

越路にはしるしにさせる椿ならて竹の末はも見えぬ雪哉

右もさる。舩には侍れと。左のふしの雪。まつ古歌のこと葉
をもとゝして。春夏秋の詠にかはりて。麓の群山の雪ゆへ。
めつらしけなきとはへるこそ。いとめつらしく見え侍れ。

卅五番

左

下くゝるひをも有らし鴉鳥の名におふ海の末の網代木

右

山陰や曉いつる炭軍こほりにきしる音のさむけさ
左。下くゝるひを。にほ島によそへられて。名におふう
みの末。田上といふ所まで。おもひやられける心。いとお
かし。右。文集に。賣炭翁曉駕炭軍一轍氷とはへるにや。
天の寒からん事をねかふといへるも。かなひて見え侍れ
と。左は勝るなるへし。

廿六番

左

難面さのむくひを知らてかこつこそ戀のうき世の迷ひ成けれ

右

程へてもとはぬおりにや武藏鎧かくしもつらく思ひ侘けん
右。武藏あふみ。ふる事にてよろしくは侍るを。左戀の浮
世。まよひの中の迷ひをなけく心。おかしくや。

廿七番

左

いく年そ祈る契はかたそきの行あひ見んもしらぬ憂身に

右

我命人のこゝろもあすしらぬ世にゆく末を契るはかなさ

左。祈るちきりはかたそきなど。いひしりて優美にはへり。
右わか命ひとの心もあすしらぬなど。戀のおもひの切な
るのみにあらず。大かた浮世のことはりを。うるはしくい
ひくたされたる。うたの心こと葉。かくおもふさまには。
ありかたき物をとそおほえ侍る。尤可レ爲レ勝。

廿八番

左

まつ人は思ひたえたる雨の音のをやむも流石ねられきりけり

右

徒に更ゆく月の影もうしいひしはかりの有明の空
右。いひしはかりに長月のと。いへるをとりて。かけもう
しなど。浅きにて深し。左おもひたえたる雨の夜なから。
をやむをたゝならすきく心。哀におかし。以レ左爲レ勝。

廿九番

左

いかにせん身をうきかたにいひしほる袖はみとりの浅き契を

右

とはゝやな逢と見えつる夢のうら人も心のかよひけるかと
左。身をうきかたにいひしほるなど。浅位を恨しこゝろに
や。よろし。右すゑの句に。かよひけるかとはへるまで。首
尾よく聞えて。おかしく侍れば。勝負なし。

四十番

左

けふはまつ思ふはかりの色見せて心のおくをいひは盡さし

右

かされても猶夢とのみたとる哉返しなれにし夜の衣は

左右歌。詞はあらぬさまなれとも。邂逅に逢戀の心なるへ
し。おもひのふかさもはかりかたく侍り。又爲レ持。

四十一番

左

つらき哉曾我の河原にかる草のつかのまもなく思ひ亂て

右

問はやな伊勢をの海人もかく計からぬみるめに袖は濡やと

左歌。ますけよき曾我の河原と。萬葉集にはへるやらん。
増戀のこゝろにてよろし。凡此歌合。題をのせられすして。
つかはれたり。題を見侍らは。思ひめくらされたる所も。
心をなやまされるほともみえて。おかしくそ侍へき。右
歌。いせをのあま。源氏物語の心もかよひて。こと葉つか
ひも。優にきこえ侍れと。左は。なをつよき所はへる歟。

四十二番

左

年をへてつらき心のたねしあれは君におふてふ松かひもなし

右

我かたに忘るゝ草の種もかな人のつらさもしらぬ計に

左之松。右之密。共以レ種爲レ詮。歌躰又等同也。不レ及レ論二
勝劣一歟。

四十三番

左

忘れぬうき身はなれぬ面影や人のこゝぬ形見なるらん

右

さやかなる影は其夜のかたみかはよしとゝ曇れ袖のうへの月
左。こと葉もなたらかにいひ下されて。よろしくはへり。
右又心ふかくて。よしあるさまに聞ゆ。又持にや。

四十四番

左

さほ川の流にはあらぬみかさ山深くそ頼む神のちかひを

右

住吉のまつに神代のこととへはふるき梢に風そこたふる
右の歌。ふるき梢に風そこたふる。たけ高くさひて。なら

ひなく見え侍り。左歌の。さほ川三笠山なと拙老の判者。
おとると申かたき旨はへり。

四十五番

左

あひそふる親のまもりもなき身には關もる人も哀とをみよ

右

釣舟そをのか浦々かへるなる明石も須磨もくるゝ浪ちに

小野のちふるか母の。心はかりはと。よみ侍りしことをお
もひて。親のまもりもなき身にはと侍る。うちみるより老
涙をもよほし侍る。あかしも須磨もをのか浦々と。いへる
古歌をとりて。くるゝなみちにと置かへられたる。いとお
かし。遠望も思ひやられはへれと。左の旅の心。あはれ
もふかく聞え侍れは。勝とや申へからん。

四十六番

左

柏木のかけしめはへてこゝにしも住や葉もりの神なひの杜

右

賤の男かたきゝを老のさかこえて歸る山路はさそなくなるしき
神なひの杜。おいのさか。おなし品にや侍らん。

四十七番

左

行末をかねて定むる人はみなあすしらぬ世を知らぬとそ見る

右

程もなく煙のすゑは立きえて雲をかたみの空そ悲しき
左。まよひの凡夫の有増。一として。はかなからすといふ
ことなきことはり。卅一字に盡はへる。和歌の道の不思議

に侍るもの哉。右きた山等持院にて。舊日哀傷の御歌かく
れなかりし事にこそ。尤可_レ爲_レ勝。

四十八番

左

いつかさてたえぬ願ひもこく船のよるへ待見んやとの池水

右

憂ことも定めなき世の理りを思ひしらすは猶やなけかん

左歌。非_二凡俗之言詞_一。右歌。不_レ可_レ及_二比量_一二歟。

四十九番

左

法の道まよふへしやは二なく三なきのみか一たになし

右

ことのはのほかに出たる法の道誰にかとはん誰かこたへん

左歌。方便品に。唯有一乘法。無二亦無三とはへるを。ひと

つたになしと侍る。おほつかなし。智者大師の。一諦尙無。

諸諦安有むと。尺せられけるなと申。さやうのことにや。

又禪六祖偈に。本來無一物なとの事歟。右歌。ことの葉の

外にいてたる法の道。禪錄に。教外別傳なといへる心にや。

ともに其意深して。淺才難_レ弁。故不_レ加_レ判。

五十番

左

いく代さて下葉のちりの積りけんあま雲かゝるみねの松か枝

右

かの見ゆる松に千とせの陰しめて池邊にたてたるたつの諸こゑ

左は古今集の序をひきて。あま雲たな引峯の松を思ひ。右

は拾遺集の歌をとりて。池邊のつるを見る。いづれもゆへ

ありて。うたのさま。祝言にかなへり。なすらへて爲_レ持。
此歌合。准后より給ひて。判詞しるし付へきよし仰らる。
是よりさきにも。えなんいなひ申さす。たひく勝負をし
るし奉りしかと。わつかに三十一字をつらぬる事たに。誠
には。其さかひにいらさる身に。如何なるをよし。い
づれをあしと定め申へきなれば。たひく辭し申しかと。
重ねての嚴命によりて。かたのことくしるし奉るなるへ
し。凡たけ姿。こゝろ詞。よのつねならす見え侍り。名をか
くされたる中にも。まかひなき御歌ともあまた有。おほつ
かなくおもひながら。詞をかたのやうに。書付はへりぬる
ところに。悉みつからの御歌を。おほしいつるにしたかひ
て。つかはれたるよし聞え侍るに。いよくあさましく。
みたりなる事ともを。いかにかせましとおもひ侍れと。既
にしるしおほりぬる事なれば。ちからなく返し奉るなる
へし。

榮雅上

右慈照院殿御自歌合以百花庵宗固本按合

堯孝法印自歌合

判者冷泉爲廣卿

一番 遠山朝雪

左 右

みよし野や明ゆく雪の山のはに面影残る月の色哉

右

すたれましく風もやつけしめもはるに明たつ山の峯の白雪

右歌。題により。捨さる文字はへれと。これは。いつれも捨

かたくこそ。明ゆく雪の山の端に面影残る月の色かなと。

月の雪にのこりたる心。よろしく侍うへに。朝の字顯さて。

心におほめかせる。六百番歌合に。冬朝といへる題にて。

寂蓮法師やらん。なかめやる衣手寒し有明の月より残る

峯のしら雪と詠せるを。判者。冬朝はかくこそと褒美しは

へる。月よりのこるといへる様にこそ侍らねと。朝心は面

影おもひ出られて。よろしきやうに侍るを。遠心少し幽に

やと。ふと覺はへるを。たち歸りみ侍れは。随分こゝろに

籠侍て。作者粉骨せると。おかしきやうなるを。三吉野や

とをけるや。古は。まゝかやうにも侍れと。其詞の餘情な

くては無詮歟。右歌。香爐峯雪撥し簾看とやらんいへる詩

の心さしにて。めつらかならずや。めもはるといへる説々

侍れと。是は遠歟。但春に用ひ侍て。雪を花の心になし。告

しも。はるをつけしにやと覺えはへれと。さやうにはいか

かそや。たゝ明たつ山のみねの白雪をつけしかたにては。

つけしもこゝにとりては。少し心よからす侍るうへ。明立

二番

左 右

白雲のはれまもおなし色なから朝風寒き雪の遠山

右

おきいつる昨日の暮の雨ならし外山をうつむ雪の白雲

左。白雲の色をゆきに残り侍りて。晴まもおなし色なから

なといへる。心なきにもあらず。右きのふの暮の雨は。今朝

又雪のしら雲となりたるとをしはかられて。心こと葉お

かしきやうなるを。打まかせては。昨日のくれの雨ならし。

外山をうつむ今朝の雪の白雲はと。言くたすへきを。おき

出しと昨日の事をいへる。無三其詮うへ。詞のつゝきやう。

宰予などか雲寝すこして。夕暮におきいてしやうにや。朝

遠などの文字あらはさぬを随分とおもへるにや。しかは

あれと。題の字をあらはさぬは。題によるへき事にこそ。

此題などは。顯はさんこといともくるしからずや。殊に歌

合のうたにとりては。口傳故實等不レ可レ勝レ計者歟。おそ

らくは。誰をか恥侍らんとおもへ給へるは。例ふまゝ管

龜のたとへにや。亦左かちはへれかし。

三番

左 右

朝戸あけて都に遠し山里はさそな軒はの峯の白雪

右

都には朝な／＼にまつ雪をいく／＼かはらふ比良の山かせ

さそな軒はの峯のしら雪。いく／＼か拂ふ比良の山風。いつ

れも大かたなひらかなるやうにや。兩首の雪の淺深難_レ分
者也。

四番

左持

山鳥のおのへの雪のあきほらけ向ふ鏡の影そくもらぬ

右

朝かゝみ手にとる計おとろくや雪に望める窓の遠山

兩首源氏物語の浮舟卷やらんに。山は鏡をかけたるやう
にと侍る。雪のことを。左は。やまのりのおのかゝみのか
たにとりなして。曇らぬといひ。右は白髪のかたへことよ
せて。おとろくと侍り。いづれも心あるやうにや。又可_レ爲
レ持。

五番

左

明わたる雪の光にうつもれて影うすくなる山のはの月

右持

降つもる雪のひかりに影きえて月も明ゆく遠の山のは
左。遠朝等の心。右。朝のこゝろ。いづれも。一番の左のこ
とく。さも侍ぬへし。然ゆきのひかりにうつもれて。雪の
光に影きえてと侍る。同し姿にはへるを。ゆきのひかりに

月の影うつもれてといはんこと。すこしいかにそや。影き
えては勝へきにこそ。

六番

左

依戀祈身

神もなを哀はしるや我せこか來へき宵そとかけし頼は

右持

身のとかとおもひ知らすやかはかりは祈らし物を神も耻かし
左歌。衣通姫のうたをとりたる計にて。題の心いとおほつ
かなくや。右おかしく聞えはへり。尤勝侍らん。

七番

左

なからへは逢ことやあらんと計に惜からぬ身を猶祈る哉

右持

なからへて有はといのる心こそ行末頼む契り成けれ
左右の。なからへこと。左は。第二句をはしめて。題の心あ
まりに幼稚にや。右は雌雄をわかつほとにもこそ聞えは
へれ。勝へきにこそ。

八番

左持

なひかした神のいさむる道ならば迷ふ戀ゆへ身を祈るとも

右

うき身さへ思ふ事とて神もしれ逢見んまての世を歎とは
右第二句。おもふことと計あるへきをとて。と文字をそへ
てはいかゝそや。左下句はかりに題を顯せる。無念には侍
れと。神のいさむる道ならば。迷戀ゆへなといへる。まさ
るへき歟。

九番

左

祈てもとはれす獨月日へはあるにくるしき命ならまし

右持

定めなき身はうき中とみしめ繩くりかへし猶祈きにけり
左。此題にとりては。祈てもといへる。若命を祈心か。命と

いはぬまては。何事を祈とも聞えず侍るか。右も。いつくを賞すへき程の事にては侍らねと。大方難きにつきて。勝も社し侍らんすらめ。

十番

左勝

つれもなき人の心のすへをたに見るやとなく祈る玉のを

右

逢まてはつらき身ながら長かれと祈ても其かひやなからん左歌。結句。此題にとりては。我玉の緒を祈るところ聞え侍らんすれと。一首したて。我思ふ人のたまのををも。なかく祈たる心にもなるへくや。右歌。初五文字。よくも首尾相應せぬうへなくと。此題には聞えはへらんか。身をなかくれと祈るも。玉の緒をなかくれといのるやうにはなくや。左の勝と申へし。

和歌の浦や
ことはのなみの
明くれは
玉によるなほ
泣てたに
四十今はた
道なれは
夏は五月雨
音にしたへ
とおもふからに
かりの世に

風のすかたを
世とともに
陸にしつめる
よそにのみ
哀しられん
過ゆけと
春ははなさへ
袖にふり
冬はかしらも
ゆく末も
拾んもさすか

つたへても
たちさましらて
身にしあれは
きくの池水
人もなみ
まとふ心の
はつかしみ
秋はをしかの
ゆきならん
なにを頼むの
たらちねの

なけきの森を

かくなはに

此ひと巻の

繰ませて

分つへしとの

井名野なる

ゆく水莖の

よしといひあしと分つ、和歌の浦や短き棹の舟路くるしも

ぼたしにて

思ひみたるゝ

二十歌や

しかまの里の

ことの葉は

篠の一ふし

みちにまかしつ

かくしつゝのみ

折しもあれ

錦ぬのを

かちまけを

さすかにえやは

なきことを

右堯孝法印自歌合以流布印本按合

道堅法師自歌合

一番

左 初春待花

雪のうちに思ひしよりも春の色を待えて遅き山櫻哉

右 山路尋花

山風の春さむけなりけふはまつ都の花に歸りてや見ん

左歌。舊年より花をおもへる心ふかきうへに。世の中のならひ。またるゝ事のわりなさは。期にのそみての心いられも。さることに侍るを。よくいひかなへられて。おかしく聞えはへり。右歌。都のはなに歸りてや見ん。尤其興侍るを。第二句やあまりやすらかにいひくたさむとて。少し平懷のやうにも聞え侍らん。左猶まさると定申侍るへし。

二番

左 山花未過

深からぬ春に先たつ花もあれと猶面影は岑のしら雲

右 朝見花

梢より色つく露の袖かけて花にすゝしき庭の朝風

庭の朝かせよりも。峯の白雲は。面影はるかに立まさりてや侍らん。

三番

左 満村花

いひしらぬ片山本の家櫻うへても誰か花は見つらん

右 故郷花

咲花のけふのあるしに身をなして思ふも悲しふる郷の春

四番

左 田家花

庵さす苗代かきに折そへていふかひもなき花の枝哉

右 古寺花

世のうさも又やあひ見ん初瀬山新し道は花そ降しく左。苗代垣の花の枝け。遼興ありといへとも。少し俗に近くて。いふかひなくや侍らん。右の。はつせ山は。心も。こ

五番

左 花似雪

梢にてうつろふまでは見し花の色にあとなき庭の白雪

右 河邊花

暮ゆけはたゝ春かせの音羽川をとにきゝても花そ悲しき花の雪は。をのつから見馴たる跡も侍ぬへし。此春風の音こそ。身にしみて聞えはへるに。末の句。水分山をみれば悲しもとといへる古風さへ。かよひきたれる心地して。かなしきのこと葉も。此歌なとにて。誠におかしく侍りけり。

六番

左 深山花

馴ぬれば深山の花もおもふらんあはれ浮世の春やいかにと

右 暮山花

えもいはすきすかに花の宿なくは歸らんとせしを山の端の月

左歌。山本の家櫻。まことに心あるさまに見え侍るを。右の歌。けふのあるしに身をなして思ふも悲しといへる。故郷の春のあはれは。猶こゝろもふかく。詞も艶に聞えて。感涙禁しかたくこそはへれ。

左歌。心有さまに見え侍り。右歌。誠にえもいはすおもしろき風情にはへるを。此初五文字こそ。眞實言語同斷のくらゐに。言語道斷とも述出すへき所なくや侍らん。彼はなにくらせる木のまより侍としもなき山のはの月も。こもいはぬ心は。此暮山のほな。おなし詠に侍るへきにや。なを此歌にとりては。えもいはぬといはすともにと侍らん。是らはおまりの事にはへるうへ。證議のこゝろあさき。はも見えぬ。く。斟酌は申詞に侍れとも。かゝる吹毛の難を申はへら。何はかりの事をか。短慮の初一念をし。し出し侍る也。作者さもあること。領解あるへきやらん。おぼつかなくこそ侍れ。しからは此番。なすらへて持に定申へし。

七番

左 古溪花

花ゆへや風のつらさも浮世とて又すみすてん谷の下庵

右 關路花

春よた。霞の關の朝ほらけ花にとゝめしこゝろのみかは左右ともに。艶にはへるにとりて。左は風のつらさも花のためなるうき世とて。谷の庵をすみかへん事を思へり。右は霞の關の春のけしきは。花の色ならでも。心とまれるよしをいへり。しからははなをおもふ志の。深さあさゝにとりて左をまさると申へし。

八番

左 霧中花

春風の朝たつ岑に思ひをきし花のゆくゑもいかゝ成らん

右 湖上花

朝霞さゝ浪ちりて行水の海ふく風も花の香とする朝たつ嶺におもひをきけん霧中花の遠情不し淺ははれと。右朝霞さゝ浪ちりてとをけるより。海ふく風も花の香とする。いへる終句まで。とゝこほる所なくて。白玉の盤に。徑寸の珠の落らんも。かはかりあさやかに。いさきよくは侍らしかし。是を寛平以往の秀歌にも。などか立ならひ侍らざらんと。いろく。感情に堪すはへり。

九番

左 橋下花

わすれすや花に露ちる夕暮も紅葉の橋の秋の村雨

右 花下送日

吉野より外にはいてす日數へておなし陰なる花は見ね共左。唯有別時今不忘。暮煙秋雨過楓橋とやらん侍る。杜牧の詩の心をおもへるにや。歌からよけにみえ侍り。右。吉野の一境。千樹の遅速に來往して。他山の春を尋るに及はさる趣。非無其興一賦。所謂もろこしの楓橋。日の本の吉野。いづれを劣り。いづれをまさるともわきまへ難きこそ。

十番

左 庭上落花

月そとふ庭のまつかせ心せよわかためにこそ花もおしまね

右 暮春惜花

今はとてうつろふ花の木かくれにあるをみるたに春風そ吹右。暮春の殘花に對して。有を見るたに。はるかせそ吹。さもうつくしけにもつゝけられぬる物哉。彼秋やは人のといへる本歌にも。いたく劣り侍らしと見給ふるは。古今集

の撰者に對して。空おそろしき申詞にもや侍らん。返す返す心肝にそみて覺えはへり。左歌。心ふかくもひ入たる所。短慮の及へきにあらすといへとも。此右のうたにかへるや。不運の天賦（災イ）にても侍らん。但忠岑を合手にては。負てもたとかおもひ出ならさるへき。

十一番

左 初秋月

思ふにも限そしらぬ今よりの秋に心は月のゆくすゑ

右 月前草花

月はなをあかぬ物哉萩に露尾花に風のなひく夕暮

左歌。とこほる所なくいひくたして。事もなく。かへすかへす希ふへきやうに侍り。右の草花。あまりに事好みたるさまにて。心みたればへり。左の方人に侍るへし。

十二番

左 雨後月

雨落し桐の廣葉の露の上に心もをかす宿る月哉

右 松間月

伏見山松より遠の河かせに波も聞えて月そ更ゆく
桐の廣はの雨の後。まつより遠の波の聲。月のしかり。とりとりにて。勝劣を定かたし。

十三番

左 山家月

なに事のうきをもいはぬ山にても月見る秋は心こそあれ

右 月菊竹風

袖の露やもろくはならん呉竹の葉分の月に秋風ぞ吹
兩方心ふかきにとりて。左は詞をいたはらす。たちむかへるやうにいひ顯はし。右は。ことはやさしく。姿艶に云さ

したる所有。誠に上に立んも下にたゝんも。かたはらの定は。かたきことにこそはへれ。

十四番

左 野徑月

里とをく野は成にけり長き夜の月のゆくゑをとふとせしまに

右 澤邊月

澄影もふかき江にこそよるの月みくさ隠れの秋の澤水

水草かくれの秋の澤水。おもひ入たるこゝろあさからす
おかしく侍るを。遊子猶行らん遠野原の月。あはれ捨かたき世にしらぬ心地こそすれと侍る。源氏物語の歌さまも。空に通ひて。此月のゆくゑ。殘（残）にやさしく。見所おほくこそ侍れ。

十五番

左 月前開雁

契りあれや必秋の夜をかさね月たにすめは鴈も鳴なり

右 海上月

秋深くなるとの海のはや汐に落ゆく月のよとむ瀬もかな
左右。長高く姿きよらにて。いづれも短才の商量分別しかたく侍れとも。猶左は。めつらしき方やとて勝とす。

十六番

左 月照瀧水

あかなくに何をか月のくまの川清きをみかく瀧の白玉

右 杜間月

夕露のもりのしめ纏くるしくも思ふ木の間の月にかゝれる
左右の月。瀧のしら玉は。殊に金玉のひかりあさやかなるにつきて。杜のしめ纏少しくまある心ちして侍る。いかゝ。
十七番

左 月前秋風
雲霧も及はぬ月のうへまては誰をいさめて秋風のふく

右 江上月

哀なり夜なく鶴の聲ひとつすめる古江の水の月影
左は餘情たくひなく。右は。有心舛を存せり。たとひ楊雄
か論つくりても。此優劣にいたりては。定めす侍らん。

十八番

左 月前虫

露のまとみるもはかなし鳴虫の命のすゑの蓬生の月

右 月前聞鹿

月にこそ泪のこされなく鹿のひとりある暮は忍ひても見つ

左は。尋常の事ながら。命の末の蓬生の月。例の及ふへき
やうにも侍らぬにや。右ひとり有くれを忍ひ過して。月の
前にたへさらなく鹿の泪のほとも。聞ひとの心の中も。
さこそとをしはかられて。感興ふかく社覺え侍れ。

十九番

左 旅泊月

浪風も今朝の舟出にさはらすはかゝる所の月をみましや

右 月前草露

消さらは花にも契れ朝風の青葉にをる露の月影

左。旅泊のこゝろめつらしくとりなされはへる。憂もうれ
しきといふ心は。かゝる所の事にや。またなく哀なるもの
と。いひけん須磨の寢覺も。思ひよそへられぬる詞つき。
不可思議の秀句にこそ侍けれ。右。消さらは花にも契れな
と。いへるわたり。心もことはも艶に侍るを。青葉におも
る露の月影で。當世の歌よみの口つきにて。おもしろさ過
て不慮憂もはへらん。かゝる所の月。返すくとりみま

ほしく。このもしくこそ。愚意には存しおもひ給ふれ。

二十番

左 菊籬月

白菊の籬の月の霜をきていかなる色に心うつらん

右 暮秋月

別では又もこん夜の秋の月残るね覺そ猶たのまれぬ

右は無常の觀心など。興ふかけに聞え侍れは。文字言句
を。わつらはすに及はすとも。末の句など。己達のやうに
聞え侍り。左。尋常の歌さまにとりて。やすらかにうつく
しくて。こん世の秋の月よりも。まつうつるふ心の深きは。
是も慚愧のひとつにこそ侍らめ。

廿一番

左 寄雲戀

うはの空に思ひたちしは契にもあらぬ身ながら迷ふ浮雲

右 寄風戀

おもひいらは便なるへき山風をはけしとのみも歎つる哉

左右の雲風。視聽の及ふ所。さして勝負も侍らすや。

廿二番

左 寄雨戀

あさましや曇るはかりの心をもはらはん袖のかゝる村雨

右 寄草戀

知めやは思ふあたりの草にこそきえん露とは身を歎くとも

此番。右は常に見なれぬる心詞にも侍らん。左は猶こゝろ
あるさまにやとて勝とす。

廿三番

左 寄木戀

もらしても色なかるへき言の葉や花さかぬ木の陰にくらさん

右 寄鳥戀

我ねをもなすは終に庭鳥のこは時しらぬ物や思はん
右。短慮少し思ひ分侍らぬ所有ににたり。先左を勝と申へし。

廿四番

左 寄風戀

淺からず契し暮の松をたに問すはあらしいか、吹らん

右 寄船戀

契こそ遠つ海原ゆく船のほのかなりしもあかぬ名残よ

左右。いづれも拔群の秀逸。とり／＼のすかたこと葉に侍るを。右歌。結句そ。此歌にとりて。今少しよはく聞えはへれとも。事からゆへ／＼しく見え侍り。猶持にても侍へし。

廿五番

左 寄琴戀

おもへず歎きくはゝることほりも只わひ人の宿にこそあれ

右 寄衣戀

いとほるゝ身はいとひても墨染の衣の糸のみたれてそ思なけきくはゝる衣の糸の亂れ。いづれも歌から上科には侍らず。よき程の持とす。

抑此一帖は。道堅禪師の獨吟の五十首を。左右に分て。拙夫に證議つかうまつるへきよし。令せられ侍りし。凡一身の所詠をもちて。兩方のつかひを定しむることは。昔も今も。さためて其跡はへるにや。されと。うちおほゆるには。御裳濯河の歌合とて。五條三品の判者たるを始として。同く宮河のなみ立つき。中川水堊の跡を残せるに。世のもてあそひとなれりける。是皆圓位上人の歷苦欣淨の。ほから

かなる胸中より。みかき出せる玉の光にて。誠に無價の寶に侍へし。今彼堅師は。俗をはなるゝ事既に九かへり。見性を三昧として。偏に片岡山のひしりの跡を尋ぬといへとも。猶難波津のかしこき道を忘れずして。柿本。山邊の餘情も。樹下石上の禪定も。誠に今の世の西上人なるへし。其詠歌にをきて。まさしき判者を思ふに。世にかたかるへき事にや。いはゆる累代碩學の家によりき。當時英才の輩にもとめんは。猶そのかみの家を忘れず。道をもおもへるに似たるへし。たゝ久しく己を知る契計に。一はしをしるしつけんは。何事のそしりかはとて。強て至愚の所にいたれるも。毘慮の心上は。凡下の一念を超さる理りにもかなふにや侍らん。中々いなみ申さんは。身の程をはかりしり。其うへは物のかたはしにもたくへるに似たり。又はなへての歌合とて。人我の執情をあらそひ。彼此の雌雄を論せはこそあらめ。忽然念起の一句を述侍らんは。そしるともいかるへからず。譽とても悦へからず。只一枝微笑の儀に擬して。一筆褒貶のことはをくはふるのみなり。時に明應六の年しはすのはしめの八日。是をしるす。

正六位上凡河内俊恒

右道堅法師自歌合也。件本從二親王之御方一申出書寫畢。彼本後柏原院勅筆也。未_レ遂_二一_一校者也。

于時永祿十二曆夏六月上八日

正五位下行左近衛權少將源通勝

右道堅法師自歌合以百花庵宗固本校合

群書類従卷第二百廿二

和歌部七十七自歌合六

豊原統秋自歌合

一番 春

左 鶯羽河

春きぬと岩波高し鶯羽河はやくも氷とけやしぬらむ

右 玉嶋河

河かせにゐてこす浪の玉嶋やえたにもぬける青柳の露

をしなへてとくる水の初花やかすみのさきの春をみす覧

二番

左 高砂

松にふく風のしらへも春なからきしそむかし高砂の山

右 春日野

かすかのやかきりしられぬ春の色をねにあらはして鶯そなく

峯の雪消ていくかの空ならむ松も檜原も杉もいろく

三番

左 三輪山

雪きててかすむはかりや三輪の山春をしへししるし成らん

右 葛城山

春はなをはふきあまたに咲花の雲こそかゝれかつらきの山

はふき多き中にいつれを春の色にかけて葛の契をくらむ

四番

左 手向山

おもふにも神やはうけし手向山ぬさとちりゆくはなの心は

右 伊勢海

いせの海のちひろは沖のかすみにてみるめかひある春の濱風

咲もあへすうたて跡なく散花をとりやふりぬる

五番

左 志賀浦

さゝ浪や國津神代のおもかけにかすみてのこる浦のはま松

右 三嶋江

三嶋江の芦のわかはの露の上にたれしめをきて月やとすらん

しのゝめの霞色こき軒はより鶯の音のらうたけになく

六番

左 鹽竈浦

こく舟のつなてくるしき鹽かまも春にうらみぬ浦の明ほの

右 宇津山

夢にたにあひみぬ花の春なからしけるやうつゝうつの山越

月もこゝ波もたゝこゝてらすころにほてる匂ひ空霞ゆく

七番

左 芦屋里

暮るまで下たく煙むすほゝれはれぬあしやの春雨の空

右 吹上濱

うらわかみをのゝ淺茅生なひくめり春風よはし吹上の濱

ちらて花常盤の色は佳の江にへにける松をしる人にせよ

八番

左 湯等三崎

かちをたえゆらのみさきの春の目にかすみをしのかの沖の舟人

右 忍山

紅にふり出て花は咲ころをいかてしのふのやまほとゝきす

しかすかにのとけき春もふくをとや山は嵐の松の下庵

九番

左 水無瀬河

春の色をそこにくかめてみた瀬河夕日にかすむ山のはのそら

右 田籠浦

いかにせむたこの浦波たゝぬ目にこひしかるへきあすの春哉

みちとせになるてふ色をせき入てかほるなかれの花の盃

十番

左 末松山

けふはまた春のわかれの名にさへやたちこゆる波の末の松山

右 大浦

おほ涯のまつとせしまの春もいまうらみてかへる浪の夕暮

葦草をかくもたへしのへの色にまとゐせし夜の露の曙

十一番

左 大井河

大井河水の縁も夏木立しければかけのふかきころかな

右 信太杜

うつろはむ秋を心にこめなからしけるしのたのもりの下草

茂りそふ軒はにくらき竹の葉のよな／＼月を忍ふころ哉

十二番

左 猪名野

さゝ分るゐなのゝ月のやとりさへ見る程なくてあくるよは哉

右 御裳濯河

神風やみもすそ河のゆふすゝみ松ももゝ枝のかけひたすなり

夢やよそにふす程なしと過つ覽すゝむ枕のみしか夜の月

十三番

左 伊香保沼

あやめ草時過る身のした根をはいかほの沼のいかてしられん

右 天香具山

白妙にあさゐる雲もゆふかけて夏おもしろき天のかく山

おき出て眺むる空のしのゝめに螢は薄くとひきえてゆく

十四番

左 大江山

大江山雲吹風も峯こえて木陰すゝしきゆふ立の露

右 難波江

夏かりのなにはのあしをさす棹のをにもちかき秋をしる哉

我妹子かきてもとふやとかたまては叩く水鶏に白む宿哉

十五番

左 美豆御牧

まこも草ゆふ手をたゆみ夏の日のめくるやおおきみつの里人

右 松浦山

沖つ風吹夕暮はまつらかたなつなきやまの名にしおふらん

松風に月ふけゆけは羅綺の上にかさなる霜の袂すゝしも

十六番 秋

左 瀨山

秋といへばやかと哀もこもり江のはつせのひはら色は替らて

右 龍田山

秋のくることや侘しきたつた姫たゝなをさりの色はそめしと

花の色や露のしからみせきもあへす麴て移ふまのゝ萩原

十七番

左 須磨浦

いつはあれと須磨のしほ焼なれをしそ哀と思ふ秋のうら浪

右 宮城野

さをしかの涙にまかふしら露も色にそめゆく宮城野の原

すかる鳴まかきも淋しのへ近くあれたる里の木々の下風

十八番

左 水葉岡

水くきの岡の木葉の秋風をいつとかまたむ鷹の玉つき

右 小倉山

風わたるふもとの尾花みねの松秋はをくらの山そかなしき

臙けの春の色をはなにかせむみなから花のむさしのゝ原

十九番

左 宇治河

河風によそのきぬたの音なからねぬよしらるゝうちの山かけ

右 常盤杜

染そめすぬるゝを色の横の葉にはれぬときはのもりの秋霧

いてふねの櫓をす浪ににたる哉空とふ雁のむれて鳴聲

二十番

左 三宝山

神垣やみむろの山のくすかつら靡くを見れば露のしらゆふ

右 高圓野

高圓の野への秋風ふくことに萩の下葉の夜寒をそしる

操返し過こしかたも後の世もつきせぬ露のゆふ暮の袖

二十一番

左 伊駒山

いこま山木すゑこり行今よりや時雨るゝ秋もよそにみゆ覽

右 生田池

秋ふかきいくたの池のいくたひか空もしくれの森の下陰

稻妻は雲に光りて田面にはひたひく聲のかすかなる空

二十二番

左 淨見關

清みかた關路の秋もやゝふけぬ山もとさむきいさり火の影

右 武藏野

むらさきの一もとあらの萩ちればなへてうつるふ武藏のゝ原

夜をのこす霧のうちなる月影にかはりて高く日の登る空

二十三番

左 伊吹山

なかめしとさしもいふきの外山より暮れはおしき秋の色哉

右 佐良科里

慰めて月たにすまぬ秋ならは誰かはとはむさらしなのさと

かねくの千種の中に一本の類ひなき色やりうたんの花

二十四番

左 白河關

月かけもいく有明にめくりきてけふしら河のせきの秋風

右 野嶋崎

打よする浪さへ色のひとつにてかるゝ野しまの秋のはつ霜
なくよりもみゝにたゝりて庭近くよるゝ虫の冷然の聲

二十五番

左 明石浦

うら風にあかしのとなみ霧はれてたくもの煙衰にそたつ

右 阿武隈河

歸こむわか世もしらすあふくまやうきとし浪の秋のわかれち

亂あひて聞も色そふ袖なれやかさすも道のちらす匂ひに

二十六番

左 清瀧河

見るまゝに山分衣たちかへて冬やきぬらむきよたきのなみ

右 小鹽山

をしほ山ふたはの松もとしふりぬいくよなれてか時雨降らん

眺むれは峯さたかにも匂ふ日の曇る程なくしくれ行かけ

二十七番

左 住吉浦

今朝みれはゆきあひの霜の夜や寒き猶神さふる岸の姫まつ

右 片野

降雪のけふは昨日の道かへてあとなきかたのみかりならまし

木からしにとくは生田の杜の露なれこし秋をしのふ袖哉

二十八番

左 田饗嶋

旅にしてぬるゝ田饗の宿なからからすはきかし夜半の時雨を

右 有乳山

都には時雨ふるらし風の音もけさはあらちのみねのしら雲

友鶴のもろこゑになく庭の松よるの嵐に霜はさえつゝ

二十九番

左 浮嶋原

時しらぬ山とし高くふる雪に松もはかへぬうきしまかはら

右 安達原

もみちせしあたちのまゆみちりしより夕日を寒み霞ふるなり

程もなく年はきはまるしはす哉らうを盡して過る月日の

三十番

左 因幡山

よと雲もたえゝ峯に立わかれあくるいなはのやまの白雪

右 鏡山

いつの間に暮ゆく年の鏡山五十地にかゝるときをうつして

ひゝきあふ瀧の音してりうもんの松風とをくくもる雪哉

三十一番

左 伏見里

あはれともいはて年ふる里の名の伏見の夢にたれをまつらん

右 霞浦

おもふかたありてやなひく鹽けふりはては霞のうら風そふく

思あれはもえつゝとはにふしのねのかゝる煙をたゝぬ苦しき

三十二番

左 石瀬杜

いかにして岩瀬にそめむ初時雨もりての色はさもあらはあれ

右 筑波山

橘のした吹風やつくは山かりねのゆめのよはのうつり香

つれなきに悔しと思ひ果もせてやますや人を又慕はまし

三十三番

左 袖浦

身をつくしくちぬしるしを思ふにもかけてそつらき袖の浦波

右 釜田池

わかおもひ釜田の池におふといふねぬなはたちて逢夜なき哉

身よいかにも君くやとのみ待しよのけふも空しき妬うれた

三十四番

左 高師濱

人しれすふけ行夜半による波の高しの濱の松そかなしき

右 阿波手杜

いまそしるあはてのもりの秋風よ木葉ふりしく契なりとは

あはて身はきゆとも人の必とせめては後の世をし契らは

三十五番

左 志香須香渡

思ひ沈む淵はありともしかすかの渡りし瀬をは忘れやはする

右 濱名橋

かけて思ふ濱名の橋にみつ鹽のなといやましに遠さかるらん

はかなくもまけてそ慕ふ中絶て悲しかるへき契と思ふに

三十六番

左 磯間浦

さよふけぬなれも磯間の浦千鳥つまとふかたに鳴て行らむ

右 守山

つゆ雪やまの山もりもる山のやます心のしたにそめつゝ

夜も更ぬきけは河風千鳥なく問へき人はすますなる身に

三十七番

左 佐野舟橋

なる神のとゝろくよりもかなしきは親さへさけしさのゝ舟橋

右 安積治

いるさまにあやめも分すかつみるも安積の沼のえに社有けれ

またさらんえにしもあならしられてけし教へり宿し身を返しけん

三十八番

左 松嶋

緒断橋

右

しるやいかにけたぬ思ひも陸奥のをたえの橋にかよふ物とは

空ことをこらす神をも佛をもさしてをちかへしかゝ頼まん

三十九番

左 三熊野浦

三熊野の浦にかさなる濱ゆふのいふにもあまる袖をみせはや

右 鳴海浦

たかかたになるみのうらのほまひさきひさしや

夕暮と深く契るもひとかたにさため難さよ君はつれなし

四十番

左 二見浦

二見かた磯なましろうつせみの身につまゝれて哀とそみる

右 名取河

つゐにさてあはてくちぬる名取河ためしもしらぬ袖の埋木

文をたにたゝに返してみもいれす先は思ふにけしからぬ哉

四十一番 雑

左 芳野河

よしの河千世にひとたひすむあれと渡時なき御代を知らな

右 鈴鹿河

あま衣世にしほたれし鈴鹿河すゝめむ浪のよるへしらせよ

世の憂に忍ふにたえぬ遅れきて隠れん岩の奥問たにあれ

四十二番

左 勝 不土山

降雪も半に消て時しるやけふみな月の不二のしは山

右 還山

來るといへと秋も南にかへるやま春とて鷹の行もとまらず

笛竹の調へは代々にたえずてふ風も其音を知かしとき

四十三番

左 海橋立

今みるも下て神やわたしけむ松に入目のあまのはし立

右 勝 飛鳥河

飛鳥かせ吹にもあらていたつらに七瀬すきたる跡をしと思ふ

哀にも過行世かな河水もかはれはふちの瀬になかれつゝ

四十四番

左 鳥羽

時雨ゆく鳥羽山松はつれなくて木すへ色つく深草の里

右 勝 辰市

あけぬまもをのれさたち辰の市やかへる夕も人の世の中

旅はたゝつゆしも寒き野山をも家ちとたのむ契かなしも

四十五番

左 吹飯浦

袖添ふ友よる千鳥こゑすなり小夜も更井の浦のしほかせ

右 勝 布引瀧

山姫や染し木の葉をこきませてさらしもあへぬ布引の瀧

玉きはる極めもしらすふへき世を必遠くしめむとや思ふ

四十六番

左 長柄橋

むかしたにしろしはかりの橋はしらあとも長柄の苜のむら立

右 勝 玉河里

かりねしてかへす衣はうすくともおもふゆめかせたま河の里

行年の巡り巡るやをのつから身に積りきて昔といふらん

四十七番

左 生浦

櫻あさのおふの恨を人とはゝ世にまつことのなしと答へよ

右 勝 佐夜中山

かひかれはまた朝霧のはれぬまになかゝあくる佐夜の中山

臂をまけて樂む方に利なりせは貧しき道も苦しからしな

四十八番

左 勝 嵯峨野

おもひやる昔もさらになかしきは秋のさかのゝ夜はの松風

右 角太河

暮ぬともきゝてわたらむすみた河かたりも出し都鳥かも

いひかめるはたかい計り理をせめてかた人するも近くやはある

四十九番

左 勝 志賀麻市

うることもなくて年ふるしかまかち心の色は道にそむれと

右 和歌浦

音をそなく翅みしかき老の鶴のたつかた知らぬ若の浦ちに

しるや君神の定めしまこと人かみしもやすし千代も絶しな

五十番

左 勝 逢坂關

立かへり代に逢坂のさねかつらくるしとのみはなに思ひけむ

右 御津濱

舟とめて三津の濱松なみこしに幾代の人かむかしとふらむ
學ひつゝよゝにかくなり藻鹽草ねは心とか盡ぬものから

右五十番歌合。毘王也。麗金也。叩以ニ其詞ニ難レ論ニ雌雄。只
爲來命之不二推止。纒紵折句。杳冠等和歌ニ述ニ其意。狂變
不レ足ニ成量。舊供ニ一莞ニ而已。

明應庚申曆孟陽廿二日書之

御判

右豐原統秋自歌合以發苗代謬議本書寫校合了

十市遠忠自歌合

兵部少輔中原遠忠

一番

左 立春

天下いつくはありとも春はまつはなのみやこに立やきぬらん
右

あふ坂やせき吹こえてあらたまの音羽の山のけさの春風
左。天下いつくはありともと侍るは。みちのくはいつくは
あれといへる心にや。はしめ五もしことしくして。
艶にもきこえずや侍らん 右あらたまのをとは山。めつら
しきやうにおほゆ。萬葉に。あら玉とをきて。としの心にも
ちゆる歌侍るにや。そのすかたなるへし。はなのみやこの
色香すてかたおほえて。左爲レ勝。

二番

左 初春

けふといへは千さとをにかけて新玉の年のを長く春はきにけり
右

春のくる色にみえても朝かすみまたたちやらすやま風を吹
左。としのをなかく春やきぬらん。祝の心にて。よろしく侍
り 右あさかすみ山かせにてきえむには。何かは色に見ゆ
らむときこゆ。以レ左爲レ勝。

三番

左 梅

梅かかを外にもしたふ人やあるとあらしにかへすまとの曙

右 夜梅

春のよにやとの梅かえはな開はところもさらす風かほるなり
左右ともにむめのにほひもふかくきこえ侍れと。あらし
にかへすいかゝ。ところもさらす。たゝ詞なれば。きゝにく
く侍り。仍爲侍。

四番

左 残雪

みるまゝに春たつそらのしるしとや霞に消る峯のしら雪

右 雪中鶯

さえかへりきりなき山もふるゆきにむせふはかりの鶯の聲

左の歌。かすみにきゆるみねのしらゆき。いとよろしく侍
り。右ふる雪にむせふはかりのうくひすのこゑ。ゆかしく
きこゆ。咽霧山鶯鳴尙少といへる詩の心なるへし。きり
なきやま。いさゝかおもふへくやあらむ。降雪にむせふも
興ありてきこえ侍れと。霞にきゆる。下の句。すかた心おか
しくきこゆれば。以左爲勝。

五番

左 霞

立なるゝ軒はの山もほの／＼と霞にとをきあさほらけかな

右

すまのうらなみよりしらむ春のよは霞める山になを残つゝ
左歌。軒はの山かすみにとをくなるよしよろしきに。はし
めの五もしおほつかなくきこゆ。右の歌。なみちよりしら
みて。かすめるやまは。あけかねたるけしき。おもしろう
きこゆ。結句なをのこりつゝ。おほつかなきやうにあらむ
かし。なすらへて可爲侍。

六番

左 浦霞

春の夜は霞むそなかめたましくしけふたみのうらの明やらす共

右 霞隔遠樹

あさかすみ松のあらしにかつ消てへたつともなき春の遠山
左。ななめとはかりは。古來なむあることにや。右。朝かす
みをけるより。すなをにして。たちまさるへくや。可爲
勝。

七番

左 禁中花

花のみやなかもやらむ雲の上の春をはしらぬ身の行衛にも

右 夕待花

をはつせやまたるゝはなの峯の雲あやめもわかした暮の春
左。禁中花をおもへる心。やさしく侍らむを。右下句。あや
めもわかしたゆふ暮の春。ことはたくみにしてこゝろふか
し。左右のはなの爲侍。さしたる難にはあらねと。花はる
は病同病にや。うた合にきらひ侍れはいかゝ。

八番

左 歸鴈

はな鳥の色香やまさる行鴈のとこ世の春を我やとはまし

右 谷歸鴈

影うつす谷の小河のこほれるもとけ行なみにかへるかりかね
左。花鳥の色香は。いろ音とありたきにや。右とけゆく
みにかへるかりかね。よろしく侍れは。以右爲勝。

左 去雁遙

雁かへる行衛をみればしら雲のかさなる嶺のあとのほるかせ

右 歸鴈清雲

春風にかすむつはさはふき淺て見さりしくもやかりの行らむ

左 首尾とゝのほりて幽玄なるへし。但是も同病にや。右、

見さりしくもやかりのゆくらむ。心えかたきこゆ。左可

レ爲勝。

十番

左 曉歸鴈

有明の月はつれなき春の夜になにとてかりものこらさるらむ

右 雲雀

春風にふかれてあかる山もとのかすむかきりに雲雀なくなり

左。有明の月はつれなきと侍る。あかつきはかりといへる

歌の心も。けさやかに見えて。よろしく侍るに。なにとて

は。むけにたゝ詞ならん。右こしの句。吹れてあかるおほ

つかなし。月のひかり。なをまさるにやあらんかし。

十一番

左 暮春

聞からにゆふつけ鳥も聲そへておのへのかねにしたふ春かな

右

ゆく春をしたひわひてはあかつきに心つきぬるかねの音哉

左右ともに。暮春の心。おなしすかたなれば。可レ爲持。

十二番

左 藤

咲かゝる藤江のうらに立なみのむらさきくたく水のほるかせ

右 卯花

卯の花のめすく開へき色に出てくるゝかきねの露とみえつる

左。むらさきくたく。おほつかなし。萬葉には。しろたへの

ふち江のうらに。いさりするとあれは。しろきふちと。よみ

ならひたるに。むらさきくたくは。あかひたるやうにきこ

ゆ。萬葉の後。むらさきとよめる證歌もあるらめと。ふし

んなきにあらす。右さしたるなむなし。ふち江のむらさき。

證歌あらは。とゝのほりて。すかた侍れは。可レ爲勝。若作

例なくは可レ爲持。

十三番

左 郭公

ほとゝきすまちかね山の明かたにつらき雲まのひとこゑの空

右 夜郭公

あしひきの山ほとゝきす小夜ふけて月よりおつるひと聲の空

まちなかねやまのくも間のひとこゑ。いとえむにおかしく

きこえて。すてかたく侍れと。月よりおつるひと聲のそら。

すかた詞たくひなくきこえ侍り。つらきくもまは。はるか

におとりたれば。もつとも右可レ爲勝。

十四番

左 曉郭公

夏草のことしけき世もわするゝにまたも寐さめをとへ郭公

右 山家郭公

ほとゝきすなればしらしな山さとにすみうき身をも慰むる聲

左。ことしけき世も。ものく(本ノマ、)にとありたくや。忘る

るにと侍るは。おろかなるやうにきこゆ。右。山里にすみ

うきをもなくさむる聲。切におもふこゝろ。左にはまさり

侍らむ。

十五番

左 奏

朝夕日うつるあふひの影すゝしみとりのすたれ色をそへつゝ

右 曉螢

露しけくぼたるみたるゝ夏の夜のあけかたすゝし庭の草村

朝ゆふ日きゝなれす侍れは。みゝにたちてきこゆ。右つゆしけくぼたるみたるゝ。ひかりありてきこゆれは。可_レ爲_レ勝。

十六番

左 五月雨

雲とつる峯のいほりのいかならんふもとの里もさみたれの比

右 夕立

入日さし夕立はるゝ山もとの木すゑの露にせみのもろこゑ

左。さしたるなむなし。右。入日さし夕立はるゝより。木すゑの露にせみのもろ聲。くたゝしくきこゆ。左可_レ爲_レ勝。

十七番

左 夕納涼

なかめやる夕波すゝしあはち湯あはとはきえぬ日影なからに

右 早秋露

風もまた吹あへぬ秋の夕よりむくらにふかきやとのしらつゆ

左。源氏物語に。あはと見るあはちのしまといへる心にや。右むくらにふかきやとのしらつゆ。おかしくきこゆ。よりの字や心ゆかす侍らむ。以_レ左爲_レ勝。

十八番

左 岡邊薄

しろ妙におかへの尾はなみえしより夕を秋のよそになしつる

右 女郎花

いつれ我ちきりむすはんおみなへし千草の花に亂あひても、

左。ゆふへは秋のよそになしつる。いと心得かたし。右をみなへし。ちくさの花にみたれあひたる。おもしろく侍れは。色まさるへくなむ。

十九番

左 萩

みやき野の秋のけしきや庭もせに萩さかりなる露の夕風

右 萩

うき秋の露もかけしと夕されははらふやおきの風そよくらん

左。秋のけしきや庭もせは。よろしくきこゆ。はきさかりなる。いさゝか平懷なるやうにや。右うき秋のつゆをかけし

なと。よろしく侍るに。かせそよくらむは。こゝろえぬやうにおほゆ。みやきのけしきは。かちにて侍らん。

二十番

左 月

うす霧に山もとこめしゆふ月夜さやけき外の影も有けり

右

しはしみむはらひなはてそ秋の夜の月にさはらぬみねの白雲

左。さやけきほかのかけもありけり。めつらしくおほゆ。右はらひなはてそと侍れは。かせといふことのあるへきに

きこゆ。左の歌。まさるへくなむ。

二十一番

左 湖月

おほひえや傾ふく月の木のまよりうみ半はある影をしそ思ふ

右 浦月

くむしほに影をうつせは秋のよの月にそなるゝちかの浦人

左。かたふく月ののこるかけ。湖上のなかはかけ残るよし。
おかしく侍り。うみなかはあるや。あまりたしかなるやう
にて。みゝにたち侍らん。右さしたるふせいなし。ちかの
うら人。そのたよりなきやうにみゆ。なすらへて可_レ爲_レ持。
二十二番

左 山月

またやみむ木のはみたれてる月にくれなゐくたく秋の山風

右 名所月

所から折からむへもあらしふくふしのたかねの秋の夜の月

左。くれなゐくたくめつらしく侍り。たゝし。題山月を本
意としてあるへきに。紅葉全篇あるやうにきこゆ。右ふし
の高根の秋のよの月。そのなもたかく聞ゆ。可_レ爲_レ勝。
二十三番

二十三番

左 月前鹿

山のはに入まてみつる月影をなれもあかすやをしかなくらむ

右 夕鹿

山かけや霧のまかきをふみわけて夕暮ふかくそよく鹿〔の〕音

左。首尾なたらかにいひくたされて。よろしく侍り。右結
句。そよく鹿の音とはてたるすかた。頗甘心せず。なれも
あかすやをしかなくらむ。優にきこゆれは。可_レ爲_レ勝。
二十四番

二十四番

左 河霧

朝日さし水上はれて河竹のなかれのすゑにきりのひとむら

右 橋衣

衣うつかたのゝ里の秋かせにやゝ明わたるよとのかはなみ
左。河竹のなかれのすゑ。さためて本歌侍りなむ。老毫。萬

見しことも聞しことも忘れ侍れは。只今分別しかたし。お
よそ。かはたけは禁中のことなれば。さためてそのよしあ
るへし。世にためしなき名をやなかさむとありしは。當家
〔の〕こと歟。しかれとも。よもその歌をは。本歌にはとられ
しとおほゆ。右これも前段申かことく。五もしはかりに衣
うつとありて。其四句は。名所の景氣はかりにや。此番は。
判者の未練ゆへ。勝負さためす侍りなむ。

二十五番

左 叢虫

をく露も秋のおもひや深草のうつらの床にむしも侘つゝ

右 紅葉

春はなをはなのかたみとなかむとも紅葉にきえね峯の白雲
左右ともに。おなしほとすかたなれば。持といふへきに
や。

二十六番

左 夕雪

はらはしなきのゝわたりの夕暮にやとなき雪や袖をとふらむ

右 杉雪

ふく風につもりもやらて山姫の雪をめぐらすての綾すき

左。さのゝわたりに家もあらなくといへる歌をおもへ
るにや。右。雪をめぐらすは。回雪の曲の心にや。左右とも
に。あさきこゝろをもつてはかりかたし。また可_レ爲_レ持。
二十七番

二十七番

左 炭竈

よこ雲に立わかれ行すみかまのけふりのすゑもをのゝ細道
右 水鳥

人の世もかくあらまほし難波江やよしあしわかすうかふ水鳥
左。けふりのすゑもをのゝほそみち。めつらしくおかしく
きこゆ。右。よしあしわかすうかふ水鳥。をとりにきこゆ。
以_レ左爲_レ勝。

二十八番

左 忍戀

おもひわひかたしく床のきり／＼す我忍音を何ととふらむ

右 忍久戀

ひと今聞ふりぬらんとし月を身にかそへきて忍ふくるしさ

左。かたしく床のきり／＼すわかしのひ音をとふらむ。あ
はれに心ふかく侍り。右。ふりぬらんは。何ことを聞ふりぬ
らむ。おほつかなきやうに侍り。左爲_レ勝。

二十九番

左 不逢戀

身にはまたならはぬものをかねの聲鳥のなく音をいとふ別も

右 厭戀

神かけしあかひもいはす松浦舟をひてをいそくひとの心よ

左右ともに。神妙たるへし。持にや侍らむ。

三十番

左 戀雲

朝ゆふになかめなれにししら雲の空たのめなる中をしそ思ふ

右 恨鐘戀

かねの音のとかにやはなさむ宵々はこぬ人ゆへにつきぬ恨を

左右ともに。すかた幽玄にきこゆ。また持にや。

三十一番

左 寄野戀

逢ふことや遠き野もせの秋のかせ人の心のすゑにふくらむ

右 寄埋木戀

くねたゝ戀にうき身の名とり河しつみもはてぬせゝの埋木

左。あふことやとあるより。毎句つゝきて。尤おかしく侍
り。右しつみもはてぬせゝのむれ木。難なく侍れと。こ
とふりたるやうにきこゆ。人の心のすゑに吹らむは。身に
しみておほゆ。尤可_レ勝。

三十二番

左 故郷戀

故郷の露わけなれし袖の上にむかしかたりの月そやとれる

右 山路

太山ちやそこともしらぬ雲鳥の立ゐを友と行なやみつゝ

左。露わけなれしそてに。むかしの月のやとらむ。よく
きこゆ。戀の心もあるにこそ侍るめれと。たしかに侍らす。

右。雲鳥のたちゐを友とゆきなやみつゝ。やまの心のきさそ
と。をしはかられてよろしく侍り。持にや侍らむ。

三十三番

左 旅

旅ころもかたしく袖の露かけてかりかね寒しさよの中山

右

夢そうきなに中々に故郷をさやにも見けむさ夜の中山

左。かりかねさむしさよの中山。ことはたしかにて心かす
かなり。右さやかにも見けむさよの中山。おかしく侍るに
や。かりかねも聞すてかたく侍れと。夢そうきといへるよ
り。なか／＼にふるさとさやにも見けむ。なをまさりてき
こゆ。右爲_レ勝。

三十四番

左 砌下松

ひたたくみをよはしものを庭の松おのれとなせる千枝の姿は

右 名所浦

あはちかたふく月にほのくとおかしの浦をいつるとも舟

左 ひとくみは古語なるへし。松の千枝におもひ出され

ける。まことにたくみにや侍らむ。右 柿本の詠をさなか

らおもへるにや。すなをに侍れは。ひとくみは自侍るへし。

三十五番

左 蕭寺

かゝけはやもろこしまても名の高きはつせのてらの法の灯

右 尺敦

さま／＼の法はありともひとすちに我はたのめむ彌陀の教を

左 はつせのてら。もろこしへきこえたること縁起に侍れ

は。さもよみ侍らむかし。右さま／＼の法ありともといへ

るこゝろ。諸教所讃彰在彌陀。故以三西方二而爲二一準と

いへる尺のこゝろに。すこしもたかけず。左は。はつせの

觀自在。右は。安養無量壽なれば。いづれをまさり。いづれ

をとりと。まためかたければ。爲レ持。

三十六番

左 懷舊

何とかく身に立かへるむかしそもつらき浮世に物わすれて

右 神祇祝

世の中はふるの神杉すなをにて立さかゆへきすゑいのるかな

左 懷舊のこゝろ身におほえて。ひとしほ袖もぬるゝはか

りなり。すかた心たくひなくきこえ侍り。右ふるの神杉。すなをにて侍るは。世をいのるこゝろ甘心す。聖人の詞。舉レ直錯諸枉一則民服といへり。いづれを勝。いづれを負とさためかたくや侍らん。又爲レ持。

右十市遠思自歌合依無類本不能校合

細川左京大夫自歌合

一番

左 早春

春の色に世はそめなしてさほ姫の四方におほふや廣はたの袖

右 朝霞

久かたの天の岩戸の明るよりいつる日影もかずむそらかな

左の歌。四方の色春にそめなして。さほひめの袖ひろくおほふらむ風情たけ高く。もつとも優美に侍る。右。久かたの

のをけるより。古風を存せりとはいえ侍れと。世のつね見る心ちして侍れは。左にをよひかたくや。

二番

左 谷鶯

さえかへる峰のあらしの咲落てはつ音わひしき谷の鶯

右 歸鷹

花はまつ南の枝に咲ものをこしちにはなとかへるかりかね

左のうた。さえかへるとは。春いたりて陽和の氣すてにおほえてのち。さらに餘寒のかへり来るをいふなるへし。初音わひしきうくひすには。たゞ春寒や相叶へからむ。右。

南の枝の花をみて。北にかへる鷹をあやめる心なきにし

もあらず。但隨陽のかりとて。山は南を陽といひ。水は北を

陽といふことはりにて。南北去來する鳥に侍れは。うたか

ふへきに非ずやあらむ。されとも。やまとうたのならひ。かくのみこそいひなすことにて侍れ。いかさまにもなすら

三番

へて。もちとすへし。

左 軒梅

軒端よりひと花落る春風のほひもさそな梅のよそほひ

右 窓梅

春といへとまた咲わひぬ梅のはなまなふる窓の月や寒けき

左は。青陽公主の容色をしのひ。右は。孫武御史官宇をおもへり。ともに唐のふることとなるにとりて。含章簷下の粧は

まさるへし。爲勝。

四番

左 待花

まちわひて打ぬる夢に咲はなのさかりほとなきかねの聲哉

右 遠尋花

いつはりのよそめのはなに行暮て雲に宿かるみねのかりふし

左。はなをおもへる心。つらゆきか。夢のうちににもはなそ散けるといひつるも。おもひよそへられて。あはれふかく

侍るに。さかりほとなきかねのこゑかな。ことに身にしみてきこえ侍るを。右又よそめのはなに行暮て。くもにやと

からんありさまは。かの。たかやとの雲のなかに暮ぬらむといへるおもかけも。さなからめのまへにたちそふ心地して。いつれもすてかたく侍れは。よき持とこそさため

侍れ。

五番

左 風前花

春風に移ふはなの心さへさそふにつれていつちゆくらむ

右 雨後花

雨はるゝ雲のかへしのかせ落てちる露にほふ花の下陰
此番。くものかへしよりも。うつろふはなのほるかせは。色

六番

あるやうにこそとて。以_レ左爲_レ勝。

左

萬蒲

賤のめか萬蒲もひくやむまはなるけふのひおりの眞弓のみかは

右

杜若

名にし白かほやか沼のかほよ花おらては流石いかてすきまし
左。ひおりのまゆみ。つよきところあるにこそ。右の

とてなかにつきて。左のあやめ。心ひくかたあり。可_レ爲_レ勝。

七番

左

人傳時鳥

時鳥今宵なきつと語る人のことのはやまつ初音ならまし

右

曉水鷄

今ははや明方ちかき横の戸をまたてくゐなのなになくくらむ
左の歌。心あるさまなから。右はとゝこほるところなく。
やすらかにいひくたして。もつともよろし。勝にこそ。

八番

左

水邊如秋

すゝみとる小河の岸の柳陰ちらてもうかふあきのいろかな

右

納涼忘夏

所から松かけすゝしすみよしの岸には夏もわすれくさかな
左の歌。初の五字。この比つねに人々よむこと侍るにや。

よろしき歌のうちには。いたくみなれさる心地して。管見
の所存甘心せられす侍り。右歌首尾相叶て。珍重に侍り。

九番

左 野草露

秋ふかき露をわけ行むさしのやすへの尾花やゆきのした草

右

濱秋風

月影も眞砂地遠き秋風にさなから雪をふき上の濱
右のむさし野。右の吹上のはま。心言葉ともに佳境にいた
れるうちに。すゑのおはな。ゆきの下草。ふかくおもひ入
たる所あるに似たり。勝ると申へし。

十番

左

野月

宮城野や露吹亂す秋風にしつ心なき萩の上の月

右

深山月

そはつたひ岩ほの苔の露ふかみ月ふみわけて行山路哉
左は。源氏物かたりのうたをおもへり。下の句。ことに優
美に見え侍るを。右の歌。月ふみわけて行やまかな。風舳
ことからさひて。あはれに侍れは。まさるといふへきにや。

十一番

左

海上月

浦遠み浪より出る月影にくもちのすゑもつゝく海原

右

船中月

みしまえや若間の小舟さすきほに月もくたけて

左は。滄海の眺望。きはまりなしといへとも。右。みしまえ
の若間の月。こまやかに見所ありとおほえ侍るはいかゝ。

十二番

左

鶉

あけまきはうしひきかへる夕くれのみちの

右

虫

折しもあれ寝さめもかなし虫の音の物おもへとは鳴ぬ物から

左。夕陽の野村見る心ちして侍り。右又夜ふかき寝さめのむしのこゑ。感慨淺からず。いづれもことに下句神妙に見す侍り。よき持也。

十三番

左 霧間廊

けにしのふ玉つさならしゆふ霧にすかたも見えぬ初鷹の聲

右 夜鹿

よそなからおもふもさそな小山川のいほねぬ床の小男鹿の聲
兩方の歌。ともにことなる事なしといへとも。右のうたは。民間の勞苦をおもひしれる心さし。もつともしかるへし。仍爲勝。

十四番

左 時雨

夕附日さすかに色そかはりける時雨にたてるかたをかの松

右 朝雪

降出し雪は夜の間に積りはて空もしつかにのこる 在明
右。夜の雪つもりはて。晨の月空しつかなる景氣。感情あさからすといへとも。時雨にたてる片岡の松。夕附日さすやをかのといへる。古今集の餘風。猶見所ありとて爲勝。

十五番

左 河千鳥

玉川や風もゐてこすゆふなみにやゝこゑさむき友ちとり哉

右 池水鳥

ゐるかもの上毛の霜も氷るらむ有明さむき庭のいけ水

此水鳥。やゝこゑ寒き。あり明さむき。雌雄わきかたきにや十六番

左 江寒芦

難波江やなみもさむき水の面に雪こそなひけ見えぬ芦の葉

右 雪中早梅

冬さむみ咲心さしの色そへて雪をもむめの數にこそみれ

左結句。見えぬ芦の葉とまれるや。たけ有てきこえさるむ。右第二句。いさゝかなかきやうにきこえ侍れと。よく

よくおもひたまふるに。心さしふかくそめてしといへる歌をおもへるにやあらむ。ゆきをもむめの數にこそ見れ。はなをふかくめてぬる心さし。いかてか賞翫せさるへきとて。爲勝。

十七番

左 寄草戀

ひとしれぬ心を種にしふ草みたれてしけるおもひ成けり

右 不言戀

いかにせむ心の下のゆふけふりむせふおもひにする月日を左歌。下句すこし平懷なるやうにや。右の夕けふり。はるかにたちまさるにこそ侍らめ。

十八番

左 寄草戀

まつかひもあらし吹也三輪の山 色も杉立るかと

右 不逢戀

限りそと聞ても人のつれなくは今ひときはのつらさならまし此右歌。心詞いひしりてあはれすくなからず。戀のうたは。かくこそあらまほしくはへりけれ。かへすくもおかし

くも。優麗にも侍るものかな。左の。杉たてるかと。せひを
えらふにをよはす。右の勝とす。

十九番

左 寄露戀

つれもなき人に見せはや淺ちふのけぬへき露を身に宿しつゝ

右 被厭戀

數ならぬ身をし忘れてともすれば人のつらさのなけかるゝ哉

左。すかたやさしく。詞えむに侍り。右まけて侍れかし。

二十番

左 寄雨戀

けにやさし身をしる雨の身をしらて思もたへて袖やほさまし

右 初逢戀

とけ初し夜半の下ひもけさは又後の世までやむすひをくへき

左。身をしる雨の身をしらては。詞のつゝきめつらかにて。

ふりぬるあめともきこえず。また左の勝とすへし。

二十一番

左 寄衣戀

あさき色は契りもすきさよ衣うらむらさきのねすり成けり

右 後朝戀

うつゝとおもはぬけさの手まくらに夢かとすれは

左。うらむらさきのねすりなりけり。古體其興は侍り。右。

うつり香も幽玄に侍れは。なすらへて持とすへきや。

二十二番

左 寄枕戀

うちもねすなみたの床に明す夜は枕にたにもうとき成けり

右 恨戀

まくすはら人の心の秋ふけて露けきかせのそてのゆふくれ

左歌。うときなりけりといひはてたるそ。今すこし心をつ

けて。いひのへたくもやおほえ侍る。右の歌。袖の夕暮

やあしからされとも。新造のやうにおほえ侍るは。僻見に

こそ侍らむ。いかさま兩方とも。いさゝかおもふ所ある

につきて。また持にさため申す。

二十三番

左 寄鏡戀

山鳥の尾ろの鏡のをろかにも見まくほしきや人のおもかけ

右 絶久戀

聞もうしをたえの橋のなをかけて逢ぬ年ふる身のたくひそと

左。尾ろのかゝみのうちむきたる歌のさまに見え侍り。

右。をたえのはしの名をかこてる戀の心便に侍れとも。歌

の科同なるへし。

二十四番

左 曉鷄

さらぬたに旅ねものうき曉に八聲の鳥のなかつとも哉

右 夕鐘

峰のてらくも間にみゆる軒端よりあらしにをくる入あひの聲

左歌。晨鷄再啼殘月沒。征馬速行人出など。ふるき詩に

も作て。旅寐の物うきには。あしたをいそく心よのつねな

るを。八聲のとりのなかつともかなとは。いかにいへるに

かと。すこしはおほつかなく侍れとも。またはさもこそ侍

らめ。右の入あひのこゑ。聞なれぬ心ちして侍れは。また

持とすへし。

二十五番

左 山家

人とはぬ山里さひしゆふくれのかけひの水にしとゝおりゐて

右 田家

賤かずむ田つらのかきはまはらにてはにふの窓に残る燈火

左。京極黃門の歌。人とはぬ冬の山路のさひしきにかきねのそはにしとゝおりゐてと侍る。初の五文字も。相かはらて。いかゝとおほえ侍り。はにふのともしひ。ひかりありと見え侍れは。爲_レ勝。

二十六番

左 旅泊船

鵬をも友寝の舟とたのむかな月にあかしのなみ枕して

右 霧中夢

古里を夢にみるかとやほかゆく濱のはまゆふまくら重て

左。月にあかしの浪まくらして。秀逸の跡に侍れは。尤可_レ爲_レ勝。

二十七番

左 迷懷

よしやさは世のうきふしも恨しな愚なる身のとかなしつゝ

右 懷舊

むかしとてさのみ忍はしくたり行今をならひにおもふ後の世右の歌。くたりゆくよのすゑををしはかりて。むかしをしゐて忍ふへからざる趣。さる事には侍れと。唐太宗も。魏徵か仁義をすゝめしによりてこそ。貞觀の太平。つゐにむかしにも立歸りけれ。此歌の心は。褒德葬かやあさきに似たる。無念に侍らむ。左歌。をろかなる身を觀して。世のうきことを恨さるは。知恵ふかくことはりかなひて。歌から

もことにいひしりて。尤しかるへし。仍勝とさため申なり。

二十八番

左 古寺

いさきよき水をむすひて古寺の林に歸るすみそめの袖

右 尺教

あさましといふそはかなき佛をも知らぬ心の法にやはあらぬ此番。右は向上の一路。凡慮の境界をはなれぬれば。採菓汲水の淨業も。およふへきみちならすとて。以_レ右爲_レ勝。

二十九番

左 神祇

朝日影天てる神のちかひにはすくなるみちを守るとそきく

右 社頭

あふけたゝそのます鎧神樂にかけてくもらぬ神の誓を兩首の神のちかひ。左は。朝日影あまてるとおけるより。風舂うるはしくたゝしく侍り。勝ると申へし。

三十番

左 慶賀

竹のはの千世もうけつゝもろ人のことふきそへてめくる盃

右 祝言

みちとせになるてふもゝを_□君かみましにたてまつらまし左歌。宜城の竹葉衆人のことふき。いとめてたきふしに侍るを。右歌。瑤池の仙桃。たひかさねてたてまつるへきよし。かきりなき追算侍るへし。ともにすてかたきによつてしはらく勝負をさためす。

そも〳歌合といふ事。仁和天徳のそのかみより。ちかく今の

世にいたるまで。おほやけわたくしにつきて。その數おほき中に。ひとりの歌を左右にわちつかへる事は。圓位ひしり御裳濯宮川歌合や。はしめとも申へからむ。また判者ももちあふかるゝことは。吳竹の世々をへて。しきしまのみちのひしりたる中にも。五條三品のみ古今に獨歩して。世これをゆるせるにや。彼の上人のふた川歌あはせは。代々のもてあそひ。家々のまぐらことゝなれる事もおほく。三位禪門父子の判の詞に。色をそへけるにこそ。おほよそ。やまとうたは。わつかなるかなの四十七字を出すして。よろつのことをいひあらはすに。ひとの心せきしなれば。をのかしもおもふにまかせて。風躰といひ。心言葉といひ。このむところまちゝなりといへとも。まことの伴境にいたる事は。かたきわさになむ侍るなる。されはいづれをよしと。いづれをあしとも。十日の見る所一字の褒貶にをよひかたきものなるをや。爰に一夜の雪の。つとめて扶風源君一卷ををくり給て。判のことほくはふへきよし侍りし。つたなき翁の身におはさるは。あき人のよき衣にもすすきたるへし。たちまちにかへしをくり侍らむにもすすかにて。まつかたはらをたにと。ひらき見たまふに。錦色々に玉聲々なり。むさしあふみさしも名高き武將の家をうけて。政をたすけ民をはくくみ。もろゝのこゝとわさしけきいとま。かるきをき。肥たるに穰うちて。世の中のたのしみ榮をこりならひ。さるはちかきとしころとなりては。あつさゆみひきゝに。かりこものみたれしけくて。ふかくそのみちにたち添ふへき人ひとたに。あさか山の春をわすれ。銀波津の冬こもりはてぬるに。いつのいとまに。かくまてたくみ吟し。おもひめくらされけむ。帷帳の中に千里のはかりことは。六義のうへにもおよほしけるにや。此勝

事を決せむことは。なへてのちからたるへきにもあらされは。いよゝふてをなけすて侍りしかとも。いなふねのいなともいはてかたく。たゝこのつきはかりかと。たひゝのもよほし侍れは。かたいたのすちなきふしともかきつけ侍る。もとより窓の雪にうとく。野への露のたとゝしき心のまよひ。ことの葉もつゝかす。かたはらいいたき事に侍れとも。まめやかに樵談童謡になすらへて。かたへのそしりをかへりみさるになむ。

右者常恒入道故細川左京大夫以三自歌一番左右。判詞逍遙院内府禪公被三書付二者也。

天文二十四年四月七日

判

右細川左京大夫自歌合以百花庵宗固本書寫校合

群書類從卷第二百廿三

和歌部七十八 詩歌合上

元久詩歌合

題

水郷春望

山路秋行

作者

詩

攝政太政大臣
良德

良輔

資實
中納言

長策朝臣
藏人頭左中辨

在高朝臣

賴範朝臣

宗業朝臣

爲長朝臣

盛經

宗行

成信

信定

歌

前上總介藤原朝臣家隆

左衛門督源朝臣通光

前大僧正慈圓

大藏卿藤原朝臣有家

沙彌蓮性

左近衛權中將藤原朝臣定家

兵庫頭源朝臣家長

大納言局

散位藤原朝臣保季

左近衛少將藤原朝臣雅經

女房丹後

宮内權少輔藤原朝臣行能

左近衛權少將源朝臣具親

散位藤原朝臣業清

孝範

家宣

行長

宗親

親經左大辨

水郷春望

一番

左勝

土俗地低春草底。

海仙樓遠曙雲間。

右

橋姫の朝けの袖やまかふらん霞もしろき宇治の河波

二番

左勝

沙村遙隔烟霞境。

水澤半吞花柳山。

右

にほのうみのかすみ吹行春風に浪もいくよの志賀の花園

三番

左

渭北晚霞消二雁陣。

江南春柳隔二漁郷。

右勝

通光

良輔

攝政

家隆

攝政

家隆

鴨長明

左近衛權中將藤原朝臣良平

左衛門少尉藤原朝臣秀能

俊成卿女

左馬頭藤原朝臣親定

知製也

三嶋江や霜もまたひぬ荳のはにつのくむ程の春風そふく
四番

左持

良 輔

百花亭外胡天遠。

右

通 光

さと人の玉もの袖やせく春の霞そよとむゐてのしからみ

五番

左持

資 實

海燕翅低花嶼遠。

右

僧 正

しかの浦の浪よりかすむ明ほのに山ふきおろす春の松かせ

六番

左

資 實

潯陽春色連二鍾地。

右

僧 正

難波江の荳の枯葉の春風に秋みし露の袖にこほるゝ

七番

左持

長 兼

風頭松動客帆遠。

右

有 家

見すしらす誰すむ方そ漁火のほのゝ明る春の夜の月

八番

左持

在 高

江縣月清天又水。

右

有 家

志賀の浦にひらの山おろし吹ぬらん花と散かふ春のさゝ浪

九番

左持

海岸孤松雲外見。

右

蓮 性

かつらのや河そひ柳浪かけて梅津ははやく春めきに鬼

十番

左持

意留二何處一放遊客。 樂在二其中一漁釣人。

右

蓮 性

いつくとも霞なかれてみえぬかな高せの淀のあけほのゝ空

十一番

左持

長 兼

千程春浪驛船路。 一穗暮烟潮戸堤。

右

定 家

あしろ木に櫻こきませ行春のいさよふ浪もえやはとゝむる

十二番

左持

長 兼

遠雁消レ霞湖月上。 驚鷄拍レ水海雲低。

右

定 家

みや木守なきさの霞たなひきて昔もとをきしかの花その

十三番

左持

在 高

沙村漁税輪二霞色。 浪驛棹歌和二鳥聲一

右持

家 長

隔つるまきのを山もたえゝに霞なかるゝ宇治の川浪
十四番

青草湖遙舟一雙。

紅挑浦遠路千程

右

在高家長

久かたの中なる河は名のみして春は霞におほなる空

左持

頼範

雨展渚蒲裙帶葉。

風翻江柳麴塵波

右

大納言局

しかのうらのさゝなみしろく成行は長良の花に風や吹らん

左

頼範

烟村酒旆穿花見。

夜岸漁舟篝火過。

右持

大納言局

いく千世もたえぬみなせの水の面に長閑にすめる春夜の月

左持

宗業

杭酒酌花遊客盃。

湓魚輪税釣郎船。

右

保季

河上はまた横雲のうすみと浪よりかすむ淀の明ほの

左持

宗業

江心晚浪清浮月。

湖上春山青倚天。

右

保季

消かねし芦間の雪も渚よりけふ三嶋江の春の一しほ

左

爲長

朝來海對薺猶短。

浪去汀松花不_レ留。

右持

雅經

かすむよりみとりはふかしまこも生るみつの御牧の春の河風

左持

爲長

春徑草青湖北岸。

曉江月白郡西樓。

右

雅經

かた敷のかすみ吹みたる春風になをさむしろの宇治の橋姫

左持

盛經

極浦風和遙度_レ岸。

迴塘柳嬾催無_レ塵。

右

丹後

しかの浦や打出しなみの花の上に猶色そふる春の山かせ

左持

盛經

霞光爛々江村夕。

草色青々湖水春。

右

丹後

わかすまぬ方もひとつに霞みけり芦屋の里をいかてとはまし

左

宗行

松縣花芳輪_レ酒地。

浮梁風暖賣_レ茶人。

右

行能

音羽川花のしからみ春かけて岩間に色を水のしら浪

左

宗行

錢塘湖上曉霞薄。

錦水橋邊宿草春。

右 行 能

春はこれいく霞ともしら浪の跡もつきぬるしかの夕暮
廿五番

左 成 信

渭北烟青斜岸草。 湖東雲白遠山花。

右 具 親

芦の葉のまたうら若き津の國の小屋の隔はかすみ也けり
廿六番

左 成 信

龍文水淨遙連溪。 壓氣樓高牛入霞。

右 具 親

石上ふる河のへの柳かけめくみもあへぬ春のいろかな
廿七番

左 信 定

長河浸月烟波遠。 孤嶋帶花雲樹低。

右 業 清

あさつみや雲のをちかたかすむ也花かあらぬか志賀のうら浪
廿八番

左 信 定

江岸晴沙青爲草。 湖田春水白無畦。

右 業 清

峯の雲汀のなみに立なれて春にそ契る宇治の橋姫
廿九番

左 孝 範

鯉舳鴈歸波月白。 蘇州柳暗水烟青。

右 長 明

今日もまたおなし霞や深みとりかひある春のあとを尋て
三十番

左 孝 範

江南春樹千莖齊。 湖上晚船一葉萍。

右 長 明

雲雀たつみつの上野になかむれは霞なかるゝ淀の河なみ
三十一番

左 家 宣

春山斜繞湖三面。 夜泊先聞潮一聲。

右 良 平

里わかす花咲ぬれは浪まよりみゆる小嶋も雲かくれつゝ
三十二番

左 家 宣

岸勢半添堤柳力。 郡圖初記海花名。

右 良 平

春の夜のあけのそほ船ほのゝと幾山本をかすみきぬらん
三十三番

左 行 長

海隅求泊雲無跡。 湖上停船月作隣。

右 秀 能

詠れは袖にかけゝり春の夜のおほろ月よのすまの浦なみ
三十四番

左 行 長

楊柳一村江懸綠。 烟霞萬里水郷春。

右 秀 能

夕つくよ鹽みちくらし難波江の苜のわか葉を越る白浪

三十五番

左持

長堤草樓展^ニ草毯。

斜岸柳絲宛^ニ迴塵。

宗親

右

昔まで哀をみする津の國の難波の沖の春の明ほの

三十六番

左持

渡口呼^レ舟霞隔夕。

潭心成^レ字鴈歸辰。

宗親

右

春ふかき心のなみに雲消て霞そなひくしかの浦風

三十七番

左

湖南湖北山千里。

潮去潮來浪幾重。

親經

右

みわたせば山本かすむ水無瀬河夕は秋となに思ひけむ

三十八番

左

風縁杭州春柳岸。

烟青吳郡暮江松。

親經

右

志賀の浦のおほろ月よの名残とて曇も果ぬ明ほの、空

山路秋行

一番

左

樂庵無^レ蹤村葉浦。

樵蘇有^レ路峽烟閑。

親經

右

ときは山秋を忍ひて獨ゆく袖の色より鹿や鳴らん

二番

左持

雲歸^ニ巖岫^ニ共^レ誰宿。月自家山^ニ送^レ我來。

親經

右

旅ころもけふみかの原露なれぬ宿かせ山の秋の夕くれ

三番

左持

眼疲胡雁參^レ雲翅。腸斷巴猿叫^レ月聲。

宗親

右

吹みたるやま下風の露の間に秋の哀を送る月かけ

四番

左

碧潤過來猶碧潤。

紅林行盡又紅林。

宗親

右

心さへうつりもゆくか龍田山こすゑに秋の色をたつねて

五番

左

鳥路烟均河漢上。

龍門水冷洛陽西。

行長

右

かつら木やよそに思ひし峯の雲を袂に分る秋の夕くれ

六番

左

行人隨^レ月過^ニ鐘岫^一。旅客與^レ雲宿^ニ碧山^一。

行長

右

しをりしてつらき山とはきかさき只此ころの秋のゆふ暮

七番

左持

雁陣過^レ林風初遠。

鹿蹄踏^レ葉雨聲幽。

家宣

右

露おもき山わけ衣吹かへて浦になれたる秋かせのこゑ

良平

八番

左持

卷舒深洞白雲夕。

寄領空山蘿月秋。

家宣

右

みちすから友なふ月も影たえぬふけやしぬらんさよの中山

良平

九番

左持

林館題^レ書紅葉紙。

廢扉同^レ宿碧蘿帷。

孝範

右

外山より野への朝霧分かへて雲のいくへに日くらしのこゑ

長明

十番

左

二路路僻秋雲色。

八字山垂曉月眉。

孝範

右

袖にしも月かゝれとは契をかす涙はしるやうつ山のこゑ

長明

十一番

左持

鳥一聲秋霧暗。

峽猿群宿暮雲閑。

信定

右

かた岡の外山か末の淺茅生に夕日かくれの松むしのこゑ

業清

十二番

左持

信定

秦吳路遠月猶月。

巴蜀境移山又山。

右

太山路の木の下露にぬれゆけは袖にそうつる有明の月

業清

十三番

左持

落葉霜深人事少。

荒榛露亂鹿蹤多。

具親

十四番

左持

幽情薊北千山月。

行色巴南一嶂雲。

成信

右

夜半になをこゆる名のみや立田山月のさかりの在明の比

具親

十五番

左

黛色露來連岫曉。

鈴聲嵐去故關秋。

宗行

右持

外山より雲ゐる峯に宿とへは秋をこたへて嵐ふく也

行能

十六番

左持

黔陽月滿行人路。

隴上風閑遠戍樓。

宗行

右

あすもこむ契を松にしをりしてけふはいなはの峯の秋風

行能

十七番

左

雲暗曉埋樵客跡。

月晴夜照旅人夢。

盛經

右時 丹 後
月をなを雲のよそにそをくりける山路の秋はさをしかの聲
十八番

左 盛 經
巖扉露滿苔痕白。 山館蟬鳴木葉紅。

右勝

丹 後
あし曳の山路わけける苔の袖わかをく露そ色は有ける
十九番

左

爲 長
蟬聲滿耳商風急。 猿叫斷腸巴月閑。

右

雅 經
立ぬるゝ木の下露に啼鹿の聲きく時の山のゆふ暮
廿番

左

爲 長
寒雨聞鐘暮寺。 白雲假路過秋山。

右勝

雅 經
吹なるゝ風の音もたつ田山秋の時雨にまかふ袖哉
廿一番

左勝

宗 業
樵衣更薄嶺風響。 鞭袖屢霜山雨音。

右

保 季
みよし野のすゝ分る袖の秋の露はらはしとても嵐ふく也
廿二番

左持

宗 業
虚犯埋蹤秋露谷。 羈雌覓宿夕陽林。

右

保 季
保 季

ゆくものかたのめし月は霧こめてしかたにまかふ岩のかけ道
廿三番

左

頼 範
旅店酒醒嵐拂面。 樵谿草悴露霜衣。

右勝

大納言局
鹿そなく岩ふむ峯の苔の上に思ひも分すふる時雨哉
廿四番

左勝

頼 範
石梯峯遠踏雲過。 巖洞霧開帶月飯。

右

大納言局
分きつる跡はいくへの霧こめて今行末もさよの中山
廿五番

左

在 高
峽猿一叫旅人思。 雲鴈幾行遊子心。

右勝

家 長
しるへせよ山とひこゆる秋の鷹跡なき嶺の八重の白雲
廿六番

左

在 高
道すから檜原嶺の葉露おちてみ山かなしき松風のをと
廿七番

右

家 長
長 兼

左

定 家
宮古にも今や衣をうつの山夕霜はらふつたの下みち

右

定 家

左

定 家

右

定 家

廿八番

左

長策

右

定家

夕つくよ木のまのかけも初雁の鳴や雲ゐのみねの梯

左

右

蓮性

うす紅葉花にをとらぬ梢かな春と思ひし志賀の山越

左

右

蓮性

うつの山分行鳥の下露に物思ふ袖そいとゝしほるゝ

左

右

有家

かこたしな時雨もる山の秋の露ぬれぬ習ひのたもと也とも

左

右

有家

三吉野の横たつ山の秋風に衣手うすし道ふかくして

三十三番

左

資實

右

僧正

太山路やいつより秋の色ならんみさりし雲の夕くれの空

左

資實

右

僧正

立田山秋ゆく人の袖をみよ木々の梢は時雨さりけり

左

良輔

右

通光

鴈のくる山の夕霧わけ過てしのに衣の露そこほるゝ

左

良輔

右

通光

しるへせよ吉野のおくの秋の月誰かは爰を又尋ぬへき

左

攝政

右

家隆

秋風の袖に吹まく峯の雲をつはさにかけて雁も鳴なり

左

攝政

右

家 隆

時雨ゆく山路も木のはうつろひぬ衣手かなし秋のたひ人

右詩歌合以弘文院藏本校合了

内裏詩歌合

建保元年
二月廿六日

題

山中花夕

野外秋望

作者

左

右

右中弁藤原範時朝臣

權右中弁平經高朝臣

式部權大輔爲長卿

大宰權帥資實卿

參議範朝卿

從三位賴範卿

右中將源通方朝臣

左少弁藤原家宣

左近將監藤原教實

中宮大進藤原兼隆

治部大將藤原知長

右衛門權少尉藤原家光

勘解由次官平棟基

一番 山中花夕

左 好鳥林深凌レ雪宿。

右 輦

いほしめて山のかひあるみよし野の花より出る月をみるかな

飯橋路滑負レ春行。

右中弁藤原範時朝臣

播磨守藤原範基朝臣

播磨守藤原範基朝臣

勘解由次官平宗宣

權大納言良平卿

侍從定家卿

女房 從三位家衡卿

女房

女房

左衛門權少尉藤原康光

左近少將藤原爲家

左近將監藤原宗時

左兵衛權少尉源維長

丹後守藤原範宗

二番

左持下

桃溪浪洗斜陽影。

梅嶺風芳欲_レ夜聲。

右

吉野山こけのさむしろしきのひ今夜はこゝに花のしたふし

三番

左持

煙霞林遠暮雲掛。

桃李蹊深春日垂。

權右中辨平經高朝臣

右

はつせ山花の梢にこもる也雨うちそふる入あひのかね

四番

左持中

松柏風曠青寂莫。

峯巒花満白參差。

右

あらしより花は袂に匂ひきて霞にこゆるしかの夕暮

五番

左

一口遊_レ春歸帶_レ月。

双雲爲_レ雪老眠_レ花。

式部權大輔爲長朝臣

右

春といへはしるもしらぬもみ山へに答へぬ花にたそかれの空

六番

左

烟霞洞裏旅人宿。

錦繡谷西居士家。

右持

雲かへす嵐もしらすうつり行きくらの山の雨の夕くれ

七番

左持上

山郭風煙多_ト柳。

溪門桃李少從_レ松。

右

しくれせし色はにほはすからにしき立田のみねの花の夕かせ

八番

左持上

嶺霞臺岳八千丈。

花雨巫山十二重。

右

さくらかり霞の下にけふ暮ぬ一夜やかかせ春の山かせ

九番

左持中

禁艶共飯樵客路。

就粧欲_レ宿隱_レ偏家。

參議範朝卿

右

みよし野や花に宿とふ夕暮の雲はにほはぬ春の山かせ

十番

左

暗風拂_レ風零_二春露_一。

斜日映_レ林混_二晚霞_一。

右持

かつらきや高間の櫻春ふけて夕ゐる雲の跡そさひしき

十一番

左持下

嶺梅遠近隨_レ嵐靄。

野杏淺深柔_レ燭分。

右

暮ぬるか山陰さひし夕月よ花にほのめくみよし野の

十二番

左持中

大宰權帥資實卿

侍從定家

女房御製

從三位賴範卿

從三位家衡卿

與レ鳥歸レ林期ニ曉月。爲レ花借レ宿入ニ春雲。

右

みよしのやいくへ霞を分つらむ花にくれ行春の山みち
十三番

左勝

霞中問レ雪訪ニ松戸。塵外愛レ山坐ニ石棧。

右

さひしさはたゝ大かたの眺めかは花にくらせるしかの山こえ
十四番

左勝

溪竹夕鶯藏レ霧宿。嶺林春月出レ花昇。

右

山ふかみ峯の木のまをたとりきて花に暮ぬる夕月よ哉
十五番

左持中

雲色飯レ溪憑レ柳宿。月光銜レ嶺出レ花遲。

右

とまるへき宿は櫻にかり衣ひも夕くれの山のはるかせ
十六番

左持下

春山霧白鶯高囀。青嶂霞紅松獨遣。

右

歸るさの家路はくれぬ山さくら人たのめなる花の下かけ
十七番

左

唯是春山應レト宿。

縦草西日欲ニ何之。

左近將監藤原教實

右勝

左衛門權少尉藤原康光
にほひくる風のしるへをしたひつゝひとりみ山の花の夕暮

左(偏調)

樵夫歌返殘花夕。巫女夢芳行雨時。

右

たつねつゝかすみを分て峯のはなにほひそ深き春の夕かせ
十九番

左勝

藍溪霞暖鶯聲出。松洞日暝鶴睡閑。

右

けふもまた花ゆへくらす袖の上に山かせおとす入あひのかね
廿番

左勝

與レ月相期占ニ綠水。爲レ花一夜宿ニ春山。

右

吉野山花にや宿をかり衣くれ行空の入あひのかね
廿一番

左持下

雪飛樵客漸飯地。月伴隱倫獨往春。治部大輔藤原知長

右

高砂の尾上に春のかせたちて櫻をわくる入あひのかね
廿二番

左

雲宿ニ洞中ニ雖レ隔レ曉。風來ニ溪北ニ僅傳レ句。

右勝

うはの空花とは風そしるへする夕日にかすむみねの白雲
廿三番

左持

蘿月東昇群樹杪

松嵐北送一溪花。

右衛門權少尉藤原家光

右持

よしの山こほりし雲も春風につもるも花のゆきくれの空
廿四番

左持

春望錦繡合間露。

夕拜蓬萊洞裏霞。

右持

はなれや水わけ山の夕まくれ雲に波たつをちの春かせ
廿五番

左持下

雨來柳色疊合露。

霞底桃顔醉和春。

勘解由次官平棟基

右持

さくら花木の下かけは暮やられてにほふ山ちの袖の夕つゆ
廿六番

左持

客路送暮新月影。

樵衣惟復暖風辰。

右持

しほりせしたつきもしらぬ山櫻花にやとかせゆふくれのくも
一番

野外秋望

左持

松蓋雨時應宿客。

芦花風處似招人。

範朝卿

右持

袖にをく朝けの露のほしもあへす霧にわけ行秋の旅人

女房

二番

左持上

山西霽薄斜陽透。

林下鹿鳴落葉頻。

右持

淺茅生やのへのあはれも白露のふかきは秋のならひ也けり
三番

左持上

隼撃林梢飛鳥少。

馬嘶原上遺徒多。

資實卿

右持

むら雨の玉ぬきとめぬ秋かせにいく野かくたく萩の上の露
四番

左持上

殷夢夜靜甘霖雨。

軒樂秋深落葉波。

右持

朝な／＼草の袂はうつろひぬかりのなみたもをちのしの原
五番

左持

白鷺双飛秋澤雪。

紅梢半出暮山雲。

爲長卿

右持

むさしのやみちある時はめもはるになひく草葉を秋風そふく
六番

左持

風生村柳多三黃落。

月透野松帶三翠氣。

右持

なかめやるいくのゝ原に霧はれてかきりもしらぬ秋の色哉
七番

左 寒水澤長芦兩岸。
秋花經細草千程。

右 勝

女 房

あさち原分行末もしら露の袖にふきこす野への秋風
八番

左 勝

仰雲連野遠鴻滅。
爽籟興林睡鹿驚。

右

宮城野やこ萩か下もうら枯て露のかたみの秋かせそふく
九番

左 (朝陽)

頼 範 卿

秋露草深聚鹿苑。
夕陽煙細隱倫棲。

右

家 衡 朝 臣

むさし野やなかめの末のはてそなきお花吹こす秋の夕かせ
十番

左 持上

月浮二水面一寒花白。
霧斷二山腰一遠雁低。

右

みやき野やなかむる末は霧こめて秋風そふくさをしかの聲
十一番

左 持中

寒野鹿蹊穿レ霧見。
暮山雁陣與レ雲斜。

右

範 基 朝 臣

なかめやるふるのゝをのこ萩はら露も昔にかはらさり鬼
十二番

左 持下

梧楸雨深群梢色。
蓼渾露芳百草花。

右

野原より秋のあはれはしらせけり萩ふく風のたよりたつねて
十三番

左 持下

嵐陰慘烈林閑暮。
野色青黃錦繡秋。

右

女 房

わけきつる野への錦の袖の色もあらへはふかき萩の下つゆ
十四番

左 勝

雲樹影斜村北路。
月花望遠郡西樓。

右

つゆにたにわきてはなれし萩原や末こすかせは袖にふく也
十五番

左

林霧興來城樹僻。
稼雲荀盡野西園。

右

宗 宣

むさし野や分行方はしら雲のとたゆる笠のはつかりのこゑ
十六番

左 勝

紫蘭露琢東昇月。
紅葉嵐高西繞山。

右

ほのかなるお花か末はきりこめてなかめにつゝくまのゝ秋風
十七番

左 持上

蘭錦露馥風千畝。
木葉秋紅霜一村。

兼 隆

右 爲 家

夕されは露ふきむすふ秋風にみたれてなひくをのゝ萩はら
十八番

左持下

林宴親朋琴倚石。 野遊索意酒盈樽。

右

から衣すそのゝはらの夕霧にいくかしほれぬ萩の花すり
十九番

左

嵐來易施三間寺。 霧霽初看萬項田。

右時

有明の雲ふきはらふ秋かせにひとりしくるゝいはしろの松
二十番

左

遠樹梢紅冬已近。 寒雲山霽月孤懸。

右

むら雨の露のかこともうらかれてをのゝ草ふし秋かせそふく
廿一番

左持下

遠樹半晴虹影淡。 平蕪雨過鹿蹄荒。

右

藤袴香をなつかしみきてみれはゆかりの色も武藏野の原
廿二番

左持下

郡端曉露蕙蘭悴。 原上秋風鷹隼揚。

右

身にそしむ千草にうつる露よりも色なき霧の野邊の曙
廿三番

左持下

秋雲歸洞寒阜靜。 白霧隔涯遠水深。

右

風わたる野へには秋の色みえてくもちはるかにほつかりの聲
廿四番

左持下

野外徑幽霜後草。 村南地僻夕陽林。

右

つゆふかき野へのかるかや秋風に思ひみたるゝさを鹿の聲
廿五番

左

三危露結添二虫怨。 一片嵐過和二鹿聲。

右時

さを鹿のをのかすむのゝ萩の上に鷹のなみたの露そあらそふ
廿六番

左

歸燕遙飛雲靜色。 敗蘭更臥月明程。

右時

夕月よ月ふくかせにかよふなり野はらにすたく松虫のこゑ

右得古寫一本書寫以横田茂語本按合了

棟 基

範宗朝臣

藤教實

藤康光

群書類從卷第二百廿四

和歌部七十九詩歌合中

現存卅六人詩歌 建治二年

屏風詩歌

甲帖

早春詞

遷鶯谷雪猶殘_レ色。

彭蠡湖鴻欲_レ反聲。

梅

咲なはとまたれし梅の花の香にこぬ人たのむ春の山里

陶潛

歸休彭澤秋三菊。

生計廬山春五松。

寄社祝

かくしこそかもの社のゆ

かつらかみおさまれば下も亂れね

初冬山寺即事

仙鶴伴_レ行紅葉路。

僧龍送_レ老白雲山。

秋歌

まささちるみやまの秋の夕時雨そこはかとなくぬる袖哉

秋暮水郷中

海樹風聲徐向_レ北。

江村雲物任_二斜陽_一。

戀

今出河院近衛

思ひせく袖より落る瀧つせはいつの人まの涙なるらん

釋中即事

雪月三年懷_レ十夢。

烟嵐萬里望_レ鄉魂。

擣衣

衣うつ音にそしるき秋風に人をたのまぬ宿のけしきは

羈中感懷

雲浮胡塞遠人路。

溟濛江州司馬衫。

月前廬橘

月かけもたか袖の香としのいて花橘の木のまなるらん

北野聖廟

廟樹爲_レ隣孤客淚。

紅於花色一脆_二於花_一。

秋述懷

秋をへてかきなるとしの數よりも涙之老のしるし成ける

江上夏望好

雲浪夕香菱藕市。

風花春過綺羅船。

松間花

高砂のおのへの花に埋れて下葉と見ゆる松の色哉

觀心念佛

是心是佛雖_レ非_レ外。 上品上生暫望_レ西。 勸修寺檢校僧正 眞雲公

住山之時詠歌

我山をすみかとすれば都さへかへりて旅と成ぬへき哉

乙帖

龜

月照二青桐一猿叫嶺。
風吹二紅葉一鹿鳴林。

青蓮院僧正實立
曲阜殿下康平

懷舊

過にけるむかしも今のつらさにてうき思ひ出にぬる、袖哉

山中秋興

麻徑月殘猿叫曙

窓窓琴罷鶴心閑。

河月

龜のおのたきつ川浪玉ちりて千代の數みる秋のよの月

山中秋興

楚嶺霧深秋景色。

嵩山月冷舊樓臺。

鶯

鶯ものうからてや吹かせの枝をならさぬ花に鳴覽

春日即事

野烟春暗草三徑。

林雨暮芳花一村。

大峯修行之時

雲かゝるおほくの峯を越つれと猶末遠しいはのかけみち

春日山望

畫堂春淺曉溪水。

飢閑霞深鳥路梯。

於菟根本宮詠

尋入山路はるけくなりけり嵐の音のすみかはるまで

春日山望

一梯齊煨花蘭路。

千障雪消竹外山。

早苗

小山田にまかする水の浅みこそ袖はひつらめきなへとるとて

尺黃萬祖餘慶

非唯思父祖餘慶。

天永帝師五代孫。

參詣日吉社路次之詠

ゆきゝにはたのむかけそと立よりて五十過ぬるしかの濱松

春日山望

春柳黛深春澗水。

晚樵歌遠白雲梯。

夏戀

夏の夜と何か恨んいつとてもあふ人からにあかぬならひは

殿庭夏景清

瓊砌前頭晨露色。

玉池南面颯風聲。

秋曙

秋風にたなひく雲の隙みえて山のはしるき曙の空

丙帖

初冬於禪林寺上方即事

影園古殿殘更燭。

聲暗禪林半夜鐘。

山路落花

誰ゆへにあくかれそめし山路とて我をはよそに花のちるらん

秋日山寺言志

有レ山有レ水眼前興。

不レ厭不レ求世上心。

花契還年

花みてものとけかりけり幾千代と限もしらぬ春の心は

羈旅秋行

林外楚山霜葉色。

竹中巴路晚蟬聲。

院弁内侍

菅二一品良白鶴

法印良覺

藏人頭左大弁經長朝臣

左武衛大將軍實冬

右大弁兼賴朝臣

左近中將爲世朝臣

前博陸殿下

座主宮

花山院前内府

中納言

堀河亞相其

其

月歌

憂にのみ袖をやぬらす秋の月心すむにも涙おちけり

水郷秋望

梶都暮潮吞三浦樹一

花山院相長相長長源納言責

秋戀

秋山の松の木末の村しくれつれなき中はふるかひもなし

夏日即事

夕忘暑氣嚴果砌。

德大寺納言ハ季

暮天聞鴈

秋はたゝをのれなきてやかしかねの夕の空の哀しるらん

仙家秋興

地勢花陽明月洞

中院納言具

冬歌

明る夜の外山吹こす木からしに時雨てつたふ峯の浮雲

鄉村秋景暮

月傾渭上三峯望。

菅三品在

山家雪

山里け雪の中こそささひしけれさらぬ月日も人とはねと

法印尊海

江上春望

百花橋北春風浦。

藤三品在

山花

雲かゝる山とはかねてまかひけり千代に一たひ散花も哉

法印實伊

暮秋於山家言志

綠蕪塙外殘秋水。

東宮學士資兼

紅葉門前薄暮山。

寄菊久戀

つもりなは袖にも淵と成やせん涙はきくの露ならねとも

丁帖

秋日山家言志

鳥聲日暮溪雲底。

暮秋

なからへてきても幾たひおしむらん身にかへつへき秋の別を

贈答

四句鬘白鏡中雪。

早秋

足引の山下かせのいつのまに音吹かへて秋のきぬらん

冬日於水郷即事

魚檻枕寒嵐後夢。

早秋

めにみるといふたにあるをいかめしく身にしむ夕を次の初風

閑居偶吟

秋心成宗屬閑素。

後朝戀

をのかねにつらき別の有とたに思ひもしらて鳥のなく蘭

山家偶吟

溪鴻翅冷秋霜席。

秋夕風

吹かせもわきて身にしむ時そとは誰ならはしの秋の夕暮

釋箋

廟樹秋風明不冷。

青雲衣重禁閑郷。

左京大夫隆增朝臣

前曲阜殿下家經

大相國通雅

戸部伊頭尙書伊

二條入道資亞相

姉小路前納言忠方

入道相公

藤納言資直

藻壁門院少將

九條入道二品羽林

富小路入道納言公雄

散位基長朝臣

野山花

一條新三品院讀

けふも又おなし山路を尋きて昨日はさかぬ花をみる哉

秋夜旅懷

文章博士在匡朝臣

長慶二十湓江月。

歸夢一夜洛陽秋。

清月

法印實圓

敷たへのとこの浦わの浪枕やとるや月のうきねなるらん

夏

竹聲生れ枕清風簾。

松影落し盃明月廊。

寄夢戀

散位範資朝臣

逢とみはさても思ひのなくさまでほかなき夢は猶そかなしき

秋日言志

沙彌寂明伊僧入道

夷陵月白第三宿。

沙彌景靜宗氏入道

秋歌

彭澤菊黃重九秋。

秋の野に行ふもしらてなく鹿はあふを限と妻やこふらん

沙彌圓意

此詩歌者。建治二年春閏三月。關東相州時宗。所被結構

之屏風詩歌也。圖作者伊信入道。詩者藤中納言資宣撰之。

歌者右大弁入道眞觀撰之也。以當世能書一令書二色紙

形一云々。

五十四番詩歌合 康永二年

詩 勝十三 點十七

御製

參議藤原朝臣隆職

沙彌眞乘

藏人頭右京大夫藤原朝臣國俊

右大辨藤原朝臣藤長

散位藤原朝臣有範

大學頭紀朝臣行親

藏人春宮大進藤原朝臣俊冬

法印玄惠

歌 勝廿 點十八

女房

永福門院內侍

前權大納言藤原朝臣實明女

散位藤原朝臣親行

徵安門院小宰相

沙彌覺

一條

右近衛中將藤原朝臣定宗

勝一 持四 負一

勝一 持二 負三

勝一 持二 負四

勝一 持二 負三

勝一 持二 負四

勝一 持二 負三

勝一 持二 負四

勝一 持二 負二

勝四 持二

勝五 持一

勝一 持二

勝一 持二 負一

勝一 持一 負一

勝一 持一

勝一 持一

勝一 持一

勝一 持一

勝一 持一

勝一 持一

勝一 持一

勝一 持一

勝一 持一 負一

三條

勝二 負一

參議源朝臣重資

勝一 持二

左大臣藤原朝臣

勝一 持二

徽安門院一條

勝三 持一

宣光門院新右衛門督

勝二 持一

權中納言藤原朝臣公蔭

持三 負三

五位藤原朝臣爲名

持二 負一

坊門

持一 負二

永福門院右衛門督

持一 負一

講師

判者

讀師

判者

一番 山家春興

左持

御製

桃花流水洞中天。

不記煙霞多少年。

滿目風光塵世外。

等閑逢着是神仙。

右

女房

嶺の花麓の柳をしこめてたゝ我宿の物にそ有ける

二番

左持

沙彌真乘

竹外午鷄閑夢回。

孤筇双履踏莓苔。

微風時載二函香過。

似報二前山花已開。

右 沙彌兼覺

霞しくふもとの里は明やうて軒端の山の花そしらめる

三番

左持

散位藤原朝臣有範

山鶯啼破午窓夢。閑掩二柴門二春晝長。

是處有花人不_レ到。知_レ非_二塵世利名場_一。

右

左大臣藤原朝臣

峯の霞谷の鶯わかやとの外にもとめて春そしらるゝ

四番

法印玄惠

路接桃源傍水濱。煙霞鑲處絶無_レ隣。

惜哉九陌紅塵客。不_レ見山中一段春。

右

坊門

山高み我いほりにて見渡せは麓をめくる花の白雲

五番

藏人春宮大進藤原朝臣俊冬

幽處元來竹徑深。屋頭山色碧千尋。

浮花浪藥未_二曾發_一。春到_二梅邊_一先盞簪。

右

散位藤原朝臣爲名

深山邊や我すむ庵の近ければかへるさしらて花にくらしつ

六番

參議藤原朝臣隆職

花色不_レ孤雲有_レ隣。紅塵無_レ到碧桃春。

一瓢貯得可肥水。還耻人間食肉人。

右持

散位藤原朝臣親行

山深き宿にはおしきなさけ哉咲匂ふ花に鶯の聲

七番

左

幽處曾無_二浮世事_一。
遊絲百尺飄_二天外_一。

右

藏人頭右京大夫藤原朝臣國俊
浩歌日々に到_二花間_一。
不_レ及_二山翁心緒閑_一。

一條

山風や猶もうき世の色にうつす心そあはれよしなき
八番

左

柴門曾不_レ似_二人家_一。
誰識_二前溪奇絶景_一。

右

右大辨藤原朝臣藤長
綠水青山左右遮。
夜深淡月屬_二梨花_一。

參議源朝臣重資

よそにのみうき世の風を聞なして心もちらぬ山陰のはな
九番

左

亂雲堆裏閑田地。
不_レ識_二黃鸝棲_二柳底_一。

右

孤客半_{案イ}夜雲半家。
一聲啼破滿山霞。

宣光門院新右衛門督

さすか猶けな鶯の春はかり時を忘れぬ山かけの宿
十番

左

蓑杖芒鞋清晝長。
更憑_二机上_二讀_二周易_一。

右

歸來猶是_{不_二計陽_一}。
岩背梅供_二一_{案イ}癡香_一。

前權大納言藤原朝臣實明女

なにかとふうきをいとふ山里に花に人めはまたれぬものを
十一番

左

法印玄惠

遊人結_レ隊爲_レ花來。

更想陽春三月。

右

まつとなき人めはるはみやまへや花鶯の宿の櫓に
十二番

左

人蹤不_レ到_二滿溪雪_一。

誰識梅邊一段意。

右

山深み春はよそなる柴の戸に花と柳の色そあまれる
十三番

左

有_レ客問_レ余庵内事。

日前春水春山綠。

右

誰かしらん深山の庵の花さかり塵の外なる春の情を
十四番

左

此地風流別有_レ天。

不_レ聞一樣俗人眼。

右

をちこちの花を一つに吹よせて風いとはれぬ山陰の庭
十五番

獨携_二蓑杖_一澗邊立。

也折_二山花_一挿_二烏帽_一。

左

藏人頭右京大夫藤原朝臣

落絮粉々逐水流。

猶抱_二柴扉_一不_レ開。

移居別處自雲堆。

永福門院右衛門督

御製

岩下草廬自掩門。

水清淺也月黃昏。

永福門院内侍

笑而不_レ答倚_二欄干_一。

豈以_二世情_一作_二此看_一。

權中納言藤原朝臣公蔭

右大辨藤原朝臣藤長

煙霞深鎖絶_二紅塵_一。

花柳形容物外春。

三條

有勝

右近衛中將藤原朝臣定宗
花にあかぬなかめのみかは山陰やかすむ軒はの春夜の月
十六番

左持

鳴禽舞蝶意相得。
既覺幽栖風味厚。

素藥丹葩眼自明。
莫言春不入柴荆。

沙彌眞乘

右

徽安門院小宰相
くるとあくひととりみやまの花さかり都の人に告ややまし
十七番

左

杏花村落路三叉。
村外炊煙斷還續。

遊杖徘徊日已斜。
定知幽處有人家。

散位藤原朝臣有範

右勝

徽安門院一條
靜なるなかも更に山かけや軒はの花のゆふへ曙
十八番

左勝

杜鵑聲裏落花底。
不是人間勸業地。

藏人春宮大進藤原朝臣俊冬
岩下柴門掩夕陽。
煙霞痼疾入膏肓。

藏人春宮大進藤原朝臣俊冬

右

五條
山かけや軒端の松のたえまより村々みゆる花の白雲
十九番

左勝

幽思不窮
深殿无人簾影斜。
不堪半夜朦朧月。

等閑把撥弄琵琶。
亦是空庭寂寞花。

玄惠

右

坊門
あはれ身をいかなる谷にしつめても深き思のそこはみえしな
十六番

廿番

左

清殿縦有同天景。
和雨引來多少恨。

不似心情舊日時。
梧桐庭院夜遅々。

國俊朝臣

右勝

一條
憂そかしつらきそかしと思ふうへに何そ哀をさましかぬらん
廿一番

左

銷瘦愁顔情對鏡。
傍人但見淚痕濕。

日高強起拂峨眉。
不識中心是恨誰。

有範朝臣

右勝

徽安門院一條
契こそ人にもよらめ思ひさます心よなとか我にかなはぬ
廿二番

左

烟柳陰々鎖畫樓。
等閑相對臺頭鏡。

幽閑數盡五更籌。
不似寫容只寫愁。

隆職卿

右勝

實明卿女
同し世を厭ふも悲し身をかへてめぐりあふよの頼みはかりに
廿三番

左勝

滿階梧葉月徘徊。
別殿霓裳天未曙。

繡戸爲誰終夜開。
不容雲雨到陽臺。

御製

右

内侍
あはれ此つきぬ思ひもはれすして絶すは後の世までかなしな
廿四番

左

藤原藤長朝臣

他日玉顏驚二幾人。

還憐憔悴百憂身。

女房

長門獨掩春風底。

花落鳥聲亦一掣。

右持

三條

あらぬ世のへたても悲し思ひあまりきえん命はおしからね共
廿五番

左持

俊冬

九十春風關未歸。

愁看微雨燕雙飛。

黃金錯買相如賦。

爭奈恩情再得歸。

右持

爲名朝臣

夢の世の人のうきせに涙河又後までの身をやしつめむ
廿六番

左持

行親朝臣

燈前半夜數行泪。

漏盡五湖三峽深。

人在關山千里外。

迴文難寫此愁心。

右持

公蔭卿

うき中よいとひしたふもむくひならはかくて幾世の契成らん
廿七番

左持

眞乘

樹底流芳如昨日。

秋風拂檻落紅渠。

錦機不識葉間字。

南風渾无雲背書。

右持

小宰相

ある世こそ名をも忍はぬ戀しぬる今は限をいかでしらせん
廿八番

左持

御製

終夜忍聞宮漏起。

朝來慵畫翠娥眉。

鏡中縱有玉顏在。

惟是君恩非舊時。

右持

女房

人はつらく我は哀に成にけりおもひの底よいつかはるへき
廿九番

左持

藤長朝臣

簾幕陰々白日長。

羅裙猶自有幽香。

右持

重資卿

白雲の行かたもなき物おもひに又むかはるゝ夕暮の空
卅番

左持

國俊朝臣

花落鳥啼深掩門。

疎鐘寂寞亦黃昏。

恩情空去絃歌絕。

獨對春風一拭淚痕。

右持

定宗朝臣

戀しなは煙となりてうき人に後の世までもたちやそはまし
卅一番

左持

隆職卿

一封消息告來期。

竊拭泪痕畫翠眉。

鐘韻喚回孤枕夢。

始知事々出相思。

右持

親行朝臣

こひよはる命のきはの恨をは身をしかへてもいはむと思ふ
卅二番

左持

有範朝臣

獨對殘燈宮漏長。

忍聽歌吹在昭陽。

右持

左大臣

衣裳不レ要薰蘭麝。

篋裏空餘御賜香。

涙のみせきこそかへせことのはにいふへき程の思ひならねは

卅三番

左助

潁襲仙衣曾不_レ蕭。
紗窓獨坐天將_レ暮。

朝々只禮玉晨君。
忍出_二瑤階_一看_二碧雲_一。

玄 惠

右

しつむとも君をみるめの浦ならは千尋のそこも尋ねきらめや
卅四番

左助

泪眼曾情_レ開_二曉鏡_一。
眉光有_レ恨无_二人見_一。

玉顔自笑比_二寒鴉_一。
空對_二深宮_一落月斜。

俊 冬

右

終にわれ戀しぬとたにきかれはや深き思ひのしらるはかりに
卅五番

左

花落黃昏金鎖合。
當初宮裏玉顔色。

春風不管太無情。
爲_二二日思_一誤_二二生_一。

行親朝臣

右助

なるまゝに我思ひすむ心より人のあはれはけたれてそゆく
卅六番

左

昏鐘聲絶碧雲合。
庭樹清風羅帳月。

空鎖長門獨坐時。
悄然自數_二曉籌移_一。

眞 乘

右助

戀よはる命はかくてつきぬともおもひはよゝに猶やのこらん
卅七番

左

海邊眺望

有範朝臣

豔淡孤舟煙霧裏。

滿江風景渾堪_レ畫。

漁篋未_レ脱雨初晴。
但不_レ應_レ摸_二欸乃聲_一。

左大臣

沖つかせまた吹たえぬ朝なきの浦より遠にみつの松原
卅八番

右助

海門落日抹_二平沙_一。
江上晚來風浪急。

隔_二浦炊煙_一一兩家。
白鷗驚起入_二蘆花_一。

國俊朝臣

右

海原やまた夜をのこす浪のうへにかたふく月を遙にそみる
卅九番

左持

天涯地角只蒼茫。
堪_レ咲雲霄千古恨。

便是漁翁自得_レ場。
銀潮捲起浸_二斜陽_一。

御 製

右

はるかなる沖よりしらむあかしかた浪にたなひく横雲の空
四十番

左

淑浦潮生浸_二碧空_一。
漁翁唱入_二蘆花_一去。

花欄倚遍夕陽中。
驚起暮天沙上鴻。

眞 乘

右助

漣出しとまりやいつこ山のはもみえすなるみの浦のをちかた
四十一番

左助

碧波心上白鷗前。

推出漁家一釣船。

玄 惠

萬里蓬瀛休_二遠覓_一。

風喚絶處是神仙。

右

右衛門督

村千鳥飛かふ沖の末の松風しつかなる浪の遠かた

四十二番

左

俊冬

輝波清海門瀾

此景无邊千占意

右

五條

あら磯の松のしつえにかゝる也汐みつ浦の沖の白浪

四十三番

左

隆職卿

蒼波萬里夕陽前

鷗鷺清興生計足

右

實明卿女

夕附日しつむ浪路は未晴てまちかき松のかけそくれぬる

四十四番

左

藤長朝臣

日暖漁舟葉々

風波不起江大靜

右

重資卿

しつみつる人目に浪を染られてしははくれぬ浦のをちかた

四十五番

左

行親朝臣

滄波徹底陰入影

惟有輝波江上月

右

新右衛門督

浪の上は色こくみゆる曙に縁もうすきをちの山端

四十六番

左持

御製

無限長江天外流

箇中不覺身漂泊

右

内侍

見渡せば行かふ舟の末消て夕日は浪に入かと思ふ

四十七番

左持

隆職卿

數聲漁笛遠相聞

煙景無邊教孰管

右

親行朝臣

入やらぬ夕日は浪にかゝりて沖こく舟も數そみえゆく

四十八番

左

眞乗

白鷗浩蕩自忘機

應向蓬萊一覽中詩思上

右持

小宰相

松浦かたなきたる朝の浪の上にやまとしまねの眼をそみる

四十九番

左持

國俊朝臣

四邊渺々失西東

千里滄波天地濶

右

定宗朝臣

をくるはしはし浪まにほのみえて先たつ舟そ末消てゆく

五十番

左持

行親朝臣

瘦鷗斜歇煙靄底

滿船載得无邊景

數峯掩映夕陽中

萬里長江一笛風

右

遠かたやしらすにならふ濱松のそれよりみゆる沖のつり舟
五十一番

左

閑放ニ客船ニ離レ曉浦ニ
時驟ニ遠景起推レ蓬、
淡煙簇々曙光外
半是漁家半是松。
有範朝臣

右

村々にまぢかき松は木くらくて有明白き浪の遠かた
五十二番
徽安門院一條

左

雲影水光相照明。
晚來江上渾渾々々。
山容難レ見秋壘末。
似有ニ天邊一點青。
藤長朝臣

右

みわたせばあまのこりたくもしほ木の煙にかすむ松の村立
五十三番
三條

左

蘆花蘋葉白鷗前。
十里漁村一抹烟。
山在ニ他州ニ清未了。
孤雲飛處亦長天。
俊冬

右

いつくともおほえぬ山はかすかにて夕日晴たる浪の遠かた
五十四番
爲名朝臣

左

沙嶼松低瀾滿處。
海門山近月昇時。
幽人相對更愁絶。
難レ寫ニ畫圖ニ難レ入レ詩。
玄惠

右

なかむれはゆきかふ舟もかすかなり浪こす末の松のたえまを
坊門
（はに）

詩歌合

權律師守通

一番

左持

春寒未レ減舊巢雪。

音頼相和新柳風。

右

雪殘る深山のさとは鶯のなく音はかりに春やきぬらん
周詩和語雖ニ詞異ニ宿雪早鶯應ニ興同。

二番

左持

蘆花滴レ浪晚流急。

松月入レ江春水深。

右

春くればひまこそなけれあしのやの軒より落る雪の玉水
雪消る軒の玉水たえすとも入江の波や立まさるらん

三番

左持

月中桂一朶誰切。

春夜直千金尙微。

右

こけ衣とくる水に袖ぬれてしらぬ涙にやとる月かけ
風舩不レ宜雙袖月。夜情難レ離萬金春。

四番

左

門前門後花無數。
門前門後花無數。
心閑則拂ニ拭塵埃。

右持

我宿は人こそとはね山櫻花もうき世の春やのかれし

我心すめはいつくもかはらねと猶山ふかく花や春ねん

五番 松上藤

左持

濃粧葉大夫名裏

紫髯懸三千丈雲間

右

ふちの花さきそめしより紫の浪こそかゝれたこの浦まつ

高低難定倚松葉深淺如何浸岸波

六番

左持

點來露作細字

閑去春看黃菊花

右

幾程とおもはて見はや暮て行春のなこりの山吹の花

憶秋新菊未來色送節晚花將去粧

七番

左持

但愁美景盡斯地

不識風光去誰家

右

あらましの末もたのまぬ老か身はこれや限の春そ暮行

老らくの名残より猶行かたもしらぬ別の春をしそおもふ

八番

左持

陰深終日暮山色

煙暗昨朝遠樹霞

右

花にみしおなし梢のおもかけも忘るはかりにしける比哉

いつかたも言葉の花の色そなきおなし緑に茂き夏山

九番

高野山參詣之時聞郭公詠曰

左

等持室靜月前曲

八葉繁高雲外聲

右持

曉をなれもまつと時鳥にかの山のおくになくらん

八葉形縱摸佛位五更聲定感入心

十番

左

一時春後花初發

五月雨中子並低

右持

かくはかりかはり行世にたち花のにほひそ猶も昔成ける

むかしこそ猶しのはるれ橘の匂ふ軒端の雨の中にも

十一番

左持

影暗藏船波上蓋

露滋盛玉水中盤

右

秋かけて波も玉こそ池水のはすのうきはに結ふ白露

綠蓋玉盤皆可愛素秋白露太尋常

十二番

左持

風前尙在紅燈影

野外先看白露秋

右

しら露の玉江のあしのよもすから光かはしてとふ登哉

左詩似弱最初句右詠太非第四詞

十三番

左持

早秋夕

纖光招夜孤峯月

疎韻生昏一葉風

右

色みえぬ梢のかせも吹かへて一葉かつちる秋のゆふ暮

和歌相似連歌躰。漢句不_レ珍兩句情。

十四番 左 七夕後朝

星室雲衣霜_二曉露_一

右

漢河風櫓過_二秋波_一

たなはたのちきる一夜の秋風にほさて別るゝ天の羽衣

露ほさぬ袖よりも猶たかせさす棹の雫やぬれまさるらん

十五番 左 山家秋興

境遙嵐送樵夫路。

右

山靜月臨隱客窓。

あらしふく軒端の山の朝霧にみえぬ杪の露そしくるゝ

霧帳暗然梢不_レ寤。月窓皎潔桂分明。

十六番 左 月潭幽興

遠水冷光浮_二玉鏡_一

右

長波雲影碎_二金鈎_一

月ゆへに煙いとはぬあま人ももしほやかてや衣うつらん

碣磔能_レ辨漁家恨。鏡影如何遠水情。

十七番 左 山路月

洞庭不_レ拂秋霜上。

右

林徑無_レ蹤夜雪中。

とまゐるべき麓のさつを行過てこゆる山路の月をこそ見れ

詩詞可_レ案末三字。歌意猶佳凡一篇。

十八番 左 仙家菊

左

如何仙穆長生術。

右

可_レ愧凡襲一旦榮。

うつろはて幾萬代かにはふ覽山路にのこる秋の白菊

いつかたもおなじ山路の菊なれと匂ひ久しき萬代の秋

十九番 左 雪中掃衣

尋_レ聲遙歩孤村月。

右

聞_レ響始知遠塞雲。

さとしらぬ山ちの木の秋かせにすむ人ありと衣うつなり

和漢雨簫雖_二詠異_一杵砧一樣似_二聲同_一

廿番 左 初冬幽居

舊苔幽洞自然席。

落葉閑居近日薪。

右

朝な_レ木の葉をたのむわひ人の薪はよるの嵐也けり

分かねぬおなじみ山の里人の拾ふこのはの色もかはらて

廿一番 左 寒草

寒臺尖立霜閑葦。

雪菊纔開秋後花。

右

かけるふのをの、淺茅の冬枯に有かなきかの霜の下舛

霜花艷色最堪_レ賞。雪菊芬芳其任_レ他。

廿二番 左 雪中山水望

樵客荷_レ花薪尙重。

漁人歌_レ月艇遲歸。

右

吹おろす比良の嵐に埋れて麓の浦も峯のしら雪

湖心山頂尋常興。樵客漁人勝絕情。

廿三番 水鳥

左

翻風浦荻拂三霜羽

折浪洲蘆打三凍翅

右

さゆる夜は名のみなつみの河風を偽なりとかもや鳴らん

なつみ川難波入江はかれとも同じよさむとかもや啼覽

廿四番 茂暮

左

四時屏草盡無日。

一夜燈花漸會春。

右

よみにのみ思ひし春も老らくの身にこそかるゝ年の暮哉

老質愁腸難レ議レ恨。燈花屏草最應レ憐。

廿五番 舊里尋友

左

猷窓談昔竹無レ意。陶室尋蹤柳不レ言。

右

尋くる我より外はをのつから月も友なき秋の故里

友なれや雲井のよその月よりもなれて年ふる窓の吳竹

廿六番 於湖寺即事

左

漁村閑レ歐寒水叫。

閑室觀レ心秋月光。

右

さゝ波や海かけてすむ我やとは庭までよするにほの浦船

兩首是非猶匣レ決。一朝風俗可レ同科。

廿七番 老人

向レ鏡始驚雙鬢雪。

計レ年可レ覺兩眉霜。

右

何ことを思ひ出てかなくさまむ老て忘るゝ昔なりせば

あきらけき鏡の中のかけよりも心に浮ぶ世々のいにしへ

廿八番 於千里濱即事

左

海面千里無二涯岸。

白浪金波衝二碧天。

風上片帆何處去。

不レ知眼境夕陽前。

右

磯こゆる月の出沙の濱風にめくる浦路は秋の山もと

夕陽斜影雖二甚薄。夜月清輝難二尙覃。

廿九番 自歌合就被下竹園御筆歌御判詠曰

左

山鶯清韻校無レ物。

月苑恩光載有レ餘。

右

今そしるをよはぬ山の高ねにも八雲のみちのかゝるためしを

詞花可レ賞八雲色。言葉難レ比一月光。

卅番

左

陰晴在レ月大虛臆。

松竹唱レ風一字言。

右

忘るなといひしあふきの風までも思へはおなしいきの松原

たとへける法の心を思ふには扇も月もかはらさるらん

右守遍詩歌合以堅田侯秘藏後花園院宸翰本書寫以弘文院

本據合畢

群書類從卷第二百廿五

和歌部八十詩歌合下

文安詩歌合

題

野外秋望

仙家見菊

松聲入琴

作者

詩

前内大臣公名

權大納言教房卿

右近中将定兼朝臣

大外記業忠朝臣

權右少辨教秀

侍從重輔

歌

權大納言通淳卿

參議重永卿

左中將持爲朝臣

左近中将俊朝臣

左近少將爲富

近衛局親院

内大臣實隆

參議在豐卿

左中將俊秀朝臣

右少辨親長

前和泉守經清

日向守中原康富

前權大納言資廣卿

僧正賴信

左近中将雅親朝臣

侍從爲季朝臣

左近少將季春

定衡法師

判者

太政大臣後醍醐寺殿下輔良

一番 野外秋望

左

迢々秋色霽難成。

殘雨半合西曉日。

右

むこか崎まつみえ初て霧晴るいなの小笹あき風そ吹

詩歌合といふものは。上古にもありけんを。しるし傳へさ

りけるにや。中比建仁(主佛門)の攝政(良基)。此道を下に廣め

侍し後。元久(同じ)の上皇(養局羽)そのしるしを上へのま

しましけり。然るに今やまこと葉は。神のすさめ給ふ道

なるによりて。我國にありとしある人。是にたつさはらさ

るはすくなかるへし。からの歌なん。さかひをへたてたる

ことわさなるゆへにや。韻ををき聲をさること。猶まなひ

かたかりける。そのはしめをいへは。大津皇子の詩賦を作

りしより。詞人才子風をしたひ塵をつきて。民業ひとたひ

あらたまりけるとなん。その後弘仁(嵯峨)のみかとのおほ

ん世にや。求法の沙門。留學の儒士。もろこし船のつなて

蔓草寒烟鎖三故城。

野多樵牧少人行。

近衛局

重輔

をとき。しらぬ波路をしのきつゝ。おさをかさね。語をならひける。かれは元和のはしめにあたりけるにや。白樂天元徽之か詩の。時に盛なりけるをならひつたへて歸りにける。其舛ひとへに。やまこと葉にちかゝりければ。たやすくわが國の俗を化せしにや。しかはあれと。元白を學ぶ者は。こと葉つまひらかに。心たしかなるを本とせり。よく其旨をえたらんはしらす。あしうせは。俗なる語。俗なる意をのかれすやあらん。唐土のむかしの時。いく百とせのうちとかや。文舛三たび改るといへり。是故に我國の歌も。萬葉のすかたは。三代集に移り。また後拾遺にあらたまり。新古今にいたりて。大に變しけるにや。歌すてにかくのことし。詩の道また是におなしかるへし。今のよに詩をまなひんともからは。唐の李杜。宋の蘇黃をこひねかはんのみなん。時の好むといふ。世のことはりにも叶侍らんものを。そもく世に人なくやはあるへきを。愚なる身に判者のやうなること葉をのしつくへきよし侍ることは。たとへはみしかき翅をのへて。大空をかけり。いやしきうつはものをもて。わたつ海をくみはかるにおなしけれと。いつくしき命のかれかたきばかりに。後のあさけりをしらぬなるへし。左の詩は。つたなきこと葉に侍りけり。第二句など。ふるき詩に二字こそかはり侍れ。あまりなるにや侍らん。右歌。秋風晴天野草海樹之景。瞻望眼穿感慨心切なりといへとも。初五文字。をき所いさゝか不三庶幾二にや。よのつねの歌合の例になそらへて。しはらく持とや申へからむ。

二番

左

孤筇立盡仗秋風。
月湧星垂杳何處。

前内大臣

右

水色山光一望中。
數行過鴈字橫空。

資廣卿

しら露も千種の花の色にみえてうつろひ渡る秋ののへ哉
左。水色一望にきはまり。右は花の色露のひかり。ちくさにみえまかふ。をよそ勝負を論するに。すこふる是非にまよひぬ。しかれとも。左は野外のこゝろ。猶不分明にや。右は題の文字たしかなるにつきて。一旦判者の心も。秋の野邊にうつろひ侍るにやあらん。

三番

左

行盡京塵芳草紅。
山叢錦綉江羅帶。

在豐卿

携筇野外立西風。
萬里雲天一目中。

右

雲はるゝ岩田のをのゝ秋風に山のはみえて月ささやけき
唐律の詩は。いかにも三四句一意にひてしかるへきにや。山錦江羅の勝景をすて。忽渺茫たる萬里の雲。天に目をあそはしむへきことは。いかゝと覺え侍り。また岩田の小野の秋風に山の端みえて月さやかなる風情は。いつくののへにてもいふへきにや。うすくこき柞ののみちに。山路しくれて月影のうつろひ侍らんや猶見所は侍らむ。

僧正禪信

四番

左

斜日村春秋色濃。
詩情不減當春好。

俊秀朝臣

回頭野外屢臨風。
處々楓林霜葉紅。

右

雅親朝臣

誰か今なめすてゝはさしすきのくるすのをのに眞萩散ころ
左、第三の句の富春は 山の名にや。短慮及ひかたし。右く
るすのをのゝ眞萩。萬葉の古風をおもへり。勝へきにくそ。
但なかめといふものゝ。別にあるやうによむことは。うけ
られすと。五條の三品は申侍るとかや。

五番

左

教秀

野亭一望景無邊。
鴉背夕陽踈樹烟。
眼界秋光多所適。
奚囊裏底幾詩篇。

右

爲季朝臣

いつくともみえず草はのはてそなき露も玉ぬくむさしのゝ原
見えず草葉のと侍ることのはのつゝき。いかにそや聞え侍
る。鴉背夕陽踈樹煙。なにとなく物さひしき心ちす。勝へ
きにこそ。

六番

左

業忠真人

枕蓼扶我出柴扉。
秦樹城邊天共遠。
野草秋深露面衣。
回頭一雁入雲飛。

右

季春

むさしのや露もはてなき秋草に雲さへかゝるゆく末の空
左の四七。右の五七。野草のとも玉をつらぬく思ひをな
せり。たゝし雲さへかゝる行すゑの空。武藏野の遠望さる
ことなれとも。さへのはなを心もとなきにや。左の秦
樹城邊天共遠といへる。身は野田の向屋に居ながら。眼は
魏闕の青雲を望む心。いさゝか勝り侍らん。

七番

左

内大臣

醉帽吟第一望寛。
汀煙斷處蘆花白。
蕭條野徑覺秋闌。
村雨殘邊楓葉丹。

右

通淳卿

ことに出ていかゝいはれのをのつから眺めもわかぬ秋の色哉
左の後聯。唐詩に紙をへたて侍り。歌などは。錦の袴を着
たるとや申侍らん。右に。ことにいてゝいはぬはかりのこ
とは。何はかりのことそや。おもひわかれぬさましたり。
汀烟村雨。見所おほく侍るにや。

八番

左

經清

秋聲穩色易黄昏。
望眼轉迷平野外。
一陣霜鴻落遠村。
疎煙細草役吟魂。

右

爲富

野へははや花の錦ををりはへて色なる聲に虫も鳴めり
左右の二首。野外の秋色を詠せるのみにあらず。霜鴻草虫
の秋聲をさへあらそへり。いつれまさり。いつれをとれる
といふことをしらす。

九番

左

教房卿

山光野色帶秋陰。
滿目蕭條霜露底。
蘭悴菊衰看不禁。
斜陽暖處草虫吟。

右

雅永卿

みるからにあはれそこもる霧立てをしか妻こふのへの夕暮
左。露下草虫認殘陽暖處一分。續切々之吟。右。霧中鹿感二

薄暮時節一分。求三助々之友。不三題秋色之染。又知三秋聲之斷腸。事雖三多端。可レ謂三同科。

十番

左

定兼朝臣

野外望中月上時、
青山處々秋風暮。

閑移三吟杖。步遅々。
回首猶看天一涯。

右

持爲朝臣

おはなししく山の裾野による浪。この葉さそひて舟なかすらん
三五同側聲をは。きらふへき事とこそうけたまはれ。望の
字は平聲にて。瞻望。想望。相望など。つかひ侍る外は。お
ほく側聲に用ひ侍り。又一涯は。天畔一方之絶岸也。或故
人之所居而望之。舊里之所。在而思之。今無其山。頻回
首非無其疑。一者上哉。又山のすそのによる波は。尾花の
浪間やと心得侍るに。風とも時雨とも申侍らて。木の葉さ
そふへきこと。おほつかなく覺え侍り。舟なかしたるも。
かの伊勢のあまのこと葉思ひ出られ侍れば。あななちに
このみ用ゆへきことにあらざるをや。よつてなそらへて
持とす。

十一番

左

親長

霧雲相簾近斜陽。
呦呦吟疊情更切。

桧外登臨秋景傷。
孤村楓樹幾新霜。

右

有俊朝臣

いりぬへき山のはみえぬむさしのは月の光もはてなかりけり
左起句。いささか物ふかくみ侍り。右いりぬへきの五文
字も優ならざるに似たり。およそ日月の二輪は。蘇迷盧

の牛腹に居して四天下を照す。雲のうへははてなきとい
はむも。いまめかしき心地し侍り。うちかへして。月の光
ゆへに。むさしのまて。はてなきなと。は。はてあるへき
にとりては。さもありぬへきにや。いかさま此つかひも。
持にてや侍らん。

十二番

左

中原康富

遙野望遠烟靄中。
不レ知何處孤村樹。

長吟支杖倚三秋風。
山外斜陽錦繡紅。

右

定衡法師

さをしかの朝たつ野へに置霜もまた跡みせぬ有明の月
左。村樹之斜日疑レ晒三紅錦。右。野經之殘月似レ錦三白霜。彼
者。綺麗之格也。此者。幽玄之思ひあり。但吟杖綺風之句法。
すてに度かさなりをはりぬ。又朝たつ鹿の跡。またみぬこ
とを恨とすへきにあらす。一得一失。非レ勝非レ劣。

十三番

左

前内大臣

山中物色惟三蓬來。
吟倚三蘆邊一欲レ盈レ把。

冒レ雨黃花點々開。
風前似レ待白衣來。

右

僧正釋信

さき句ふ蓬かしまの秋のきくおいせぬ色にちよやかさねん
惟蓬萊の惟字。もし竟の字なとにてや有へき。下の句は。
幽潜か故事のみにして。蓬萊の物色を出されぬ事いか。
はしめより。あやしみ。かつうたかへる本意にや。たかひ
侍らん。右の歌。よもきか嶋の秋の菊とすへられ侍る理運
に。彼嶋にこの花あるへきやうに聞え侍り。證歌などの侍

るにや。山路の菊はおなし仙家といひながら。いさゝか差異あるへき事こそおぼし侍れ。

十四番

左

教房卿

秋深洞口投_レ英來。

色似_二桃花_一無_レ數開。

應_レ浮王母紫霞盃。

右

雅親朝臣

山人はいつかうへけん露のまにうつろふとさへみえぬ白きく左詩。桃花菊は。史正忠が菊譜に。雜色の中に出侍り。それを桃花のかたへとりなし侍りて。瑤池の宴になすらへて。王母が酒盃にうかへむことを思へり。今までは。此外いまたみえ侍らぬにや。右の歌。山路の菊の露のまをかこちよせられ侍る。此題にとりては。先料當せる本歌にや。但うつろふとさへみえぬとよまれ侍る。眼前にもきくは久しくてうつろふなれは。あなかにしも是によりて。山人のうへけんことをうたかふへきにあらざるをや。いつか千年をわれはへにけん。うちらはふにも千世は經ぬへし。かやうに侍りてこそ。かの壺中に天地をかくし。橋裏に山川をそけたて。千劫を一念に發し。世を半日に送る露のまのことはりも。あらはれ侍れ。是はいかさま。左の勝にや侍らん。

十五番

左

經清

仙人愛_レ菊口雲鄉。

洞裏秋風滿_レ架香。

下流自_レ此及_二南陽_一。

右

通淳卿

たちぬはぬ衣の袖も色やそふ山路のきくの露の光に白雲郷は。菊の色に映しては見え侍れと。あなかし庶幾すへきにあらざるをや。下流自_レ此などは。誠にいひおぼせ侍れ。たちぬはぬ衣の袖。かの龍門のむかしの跡。俊賴朝臣の詠なとおもひ出られておかしきこえ侍り。光と色とこそかさなりて。いかにそや聞え侍れと。南陽の下流に。この仙家たちをくるへきにあらされは。又持とや申へからん。

十六番

左

重輔

一飲_二霜潭_一秋浸_レ霞。

隨_レ流忽_レ到_二地仙家_一。

不_レ爲_レ看_レ基爲_レ見_二花_一。

右

雅永卿

山人の跡はむかしに朽しをのゝえならぬ色をのこすしら菊左右ともに。霜柯の故事を詠せるにとりて。二十八字は例のつたなき言葉に侍りけり。ことなる風情も侍らぬうへ。朽しをのゝえならぬ色とつゝけられ侍る。まことにいひしれる躰に聞え侍れば。右勝へきこと不能_二左右_一をや。十七番

左

内大臣

玉花榮々滿_二仙庭_一。

雪彩氷姿晚節馨。

幽室不_レ知秋幾度。

右

資廣卿

四の時ともみゐるてふ山人のすみかもこゝにしら菊の花左詩。玉花雪彩氷姿なとこそ。おなしやうなることのかさなりて聞え侍れ。右歌の。四の時ともみゐらんこと。い

はゆる瑤草琪樹などのことは。さもや侍らん。菊花といは
んからに。うたかふ詞をも残さす。うちまかせて春秋にわ
たりて。みるへきやうに讀侍らんことこそ。おほつかなく
覺え侍れ。秋なきときやさかさらむ。又老せぬ秋の久しか
る(り)懸ぬへくなとは。各別の意にや。とまれかくまれ。是
は左勝へきにや。

十八番

左

業忠眞人

洞門深鎖菊花鮮。
白々黃々何所レ似。

一種秋香屬ニ地仙一。
雲閣鶴護半籬前。

右

持爲朝臣

袖かゝる鶴のつはさも白菊のにほひやうつす秋の山人
右歌。初の五文字こそ。いさゝかさゝへて聞え侍れ。鶴の
つはさもしら菊のにほひやうつすなとは。あしからす侍
るにや。雲閣鶴護半籬前。これまた捨かたく侍れは。いつ
れと申かたくや。

十九番

左

在豐卿

九日賞遊仙子家。
一枝聊挿ニ滿頭ニ去。

菊籬風露十分加。
可レ作人間不老花。

右

近衛局

をのゝえはさもあらはあれ幾秋も花は朽せし庭の白菊
一枝を滿頭にさしはさむこと。いかゝと覺え侍り。又は花
は。しほむかるゝとこそ申ならはし侍れ。花は朽せしも。
おほつかなく侍れと。かやうのことは。いつれもことなる
難には侍らぬにや。又爲レ持。

二十番

左

俊秀朝臣

一叢黃菊數枝香。
惟見寒英傲ニ奇色一。

經紗仙居秋滿レ庭。
爲レ君欲ニ好制ニ類齡一。

右

爲富

をのゝへもこゝにや朽じ咲匂ふ山路の菊に露をかさねて
左第四句。いひもおほせぬやうに聞え侍り。右をのゝえも
こゝにやくちし。めつらしからす侍れとも。難なきにつき
て。勝へきにこそ。

二十一番

左

中原康富

娟々黃菊弄ニ秋光一。
花制ニ類齡ニ金滿レ地。

洞裏神仙却老方。
又知甘谷在ニ南陽一。

右

有俊朝臣

をのゝえの朽るためしや白菊の花に半の目を暮しても
左。金滿地の三字。あまりたことはに聞え侍り。右は謬
入ニ仙家ニ爲ニ半日客一といふ心にや。いさゝかまされるに
や侍らん。

二十二番

左

親長

紫艷半開龜色斜。
佳辰好備群賢宴。

叢生冒レ雨地仙家。
霜階鋪金籬却花。

右

定衡法師

山人のすめるも菊の陰なれば花みて千世の秋を契らん
左。地仙家に群賢の宴をひらき。右山人のすみに千とせ
の契をむすへり。ことはいづれも聞え侍れと。ことに

おかしきふしもましり侍らぬにや。

二十三番

左

定策朝臣

仙地菊苗花正開。

金英點々見奇哉。

從レ今籬畔重陽後。

戲蝶遊蜂更不來。

右

爲季朝臣

やま人の老せぬ友と契をく秋も千とせのそか菊の花

仙地菊苗とはかりいひては、仙家の意なを不足なるへき

にや。菊苗に花のひらかむことも。早速なるとや申侍らん。

又そか菊は。そかひにみゆるといへる説にとりをかれ侍

るにや。もし承和の黄菊にとりては。山人の老せぬ友とち

きるへきことも。心もとなく侍り。しはらくなすらへて持

と申侍るへし。

二十四番

左

教房卿

隱逸之冬仙砌秋。

金英玉蕊露香浮。

籬邊分得南陽水。

采々好レ醫衰疾憂。

右

季春

老らくのくへき道なき山ふかみ千世の影くむ菊の下水

左。菊は花の隱逸也といへる。茂叔か説を思へり。右おい

らくのこむとしりせはと讀る。翁か歌をとれり。いづれも

心ありて聞え侍るへきを。衰疾憂といへること葉。あまり

に物ふかく聞え侍り。くへき道なきも。さしきためたるや

うに侍り。所詮此南陽の菊水。みしかきみつくきをもて。

ふかさ淺き波はかりかたくな侍れ

二十五番

松聲入琴

左

内大臣

屋有ニ青松一膝有レ琴。

半梢落月夜沈々。

清風自續離鸞曲。

下レ指何勞絃上音。

右

雅永卿

青海の浪のをすけてひく琴にまかふみとりの松かかせそ吹

左。屋有ニ青松一膝有レ琴といふより。落句にいたるまで。す

るするとそのことはり聞え侍り。右。波の緒すけてなど。

古歌のこと葉たよりありてきこゆ。抑青海波の曲は。箏に

こそ侍れ。まことの琴には。いかゝと申かたくや侍らん。

されとも大和うたの道には。箏と琴とのわけめまでをは

申侍らす。ともに。ことゝのみ云ならはしたる事なれば。

それまでのことは。入ほかなる難にや侍るへき。左右とも

に。優なるにつきて。勝負を申さすや侍らむ。

二十六番

左

親長

松入ニ焦桐一雅操清。

冷然洗レ耳玉徽聲。

知音誰効鐘期趣。

古意一彈山月明。

右

雅親朝臣

おりにあふ秋のしらへの松風を待とる琴の音こそわかれね

左。松入ニ焦桐一四字の造語。わざと事つくりていひ出され

侍れと。風とも聲とも侍らては。いさゝか物とをくや侍ら

ん。右初の五文字すこふる結構の跡にや。待とる琴の音と

いへるわたり。かの物語のおもかけふと思ひ出られ侍り

て。いさゝかまささうと申へからん。

二十七番

左

俊秀朝臣

百尺烟梢潤翠陰。
曲中別鶴難分處。

清風吹管夜沈々。
何是松聲似琴琴。

右

季 春

松風聲ひかるゝ琴のをと絶すやちよの友となるらん
左事因句に。はしめて題の字をあらはれ侍るあまりに
こけさけたるにや。但ことによりて。かゝる卦もあるへき
にこそ。右ちよの友と松風をよせられ侍れば。琴の祝言。
あなかにや。なすらへて持と申侍るへし。

二十八番

左

重 輔

松無非指又非弦。
此曲虛堂明月夜。

下指松聲弦上傳。
似聞別鶴更無眠。

右

持爲朝臣

まつ風もうつまぬ雪のしらへより月にすゝむる宿のつま琴
左前聯に同字の疊出せること葉きはまる意。せめてのあ
まりによしなしことをも申侍るかな。古律の卦にこそか
かることも侍るなれ。右の雪のしらへ。白雪の詞相者家と
や。左無下にまけ侍りぬへし。

二十九番

左

業忠真人

松杪風生入古琴。
如今四海知音少。

不勞下指趣尤深。
獨許榮榮處主心。

右

僧正禪信

をく露の玉のをことのしらへにもかよひなれぬる峰の松風
おほよそ賢人君子の道は。知音をえたるをもて。えたりと
す。今の世に知音なきときは。簫笛殘編の中にむかひて。

千載の人を友として。一時のおもひをやるこそ。詩の意は
よのつねのことなれと。たゞ此一句感慨たもとをうるほ
すはかり也。右歌初五文字。あまりたること葉と聞え侍る。
又齊宮女御のよみたまへる歌に。心ことはいたくもかは
り侍らぬにや。是をあしと申せば。古歌をそしるに似たれ
は。しはらく持とすへくや。

三十番

左

致房卿

知音誰與二子期同。
贏得松風在簷下。

壁上時横響下桐。
聲々吹入七絃中。

右

通淳卿

影なひく松の風よりひゝきてかはらぬことの音をや添らん
右の歌の平頭病。歌合に深くとかむる事も侍れと。おもき
難には侍らぬにや。そのうへ。かけなひく。由緒ありけに
聞え侍るを。無下にまけにつけ侍らんも。いかゝと覺え侍
る。左の詩とても。さまで秀逸に侍らねは。旁また同し科
とや申へからん。

三十一番

左

定兼朝臣

溪邊緩歩宿松陰。
流水高山曲終後。

永夜無人彈玉琴。
微風陣々入清音。

右

資廣卿

ひく琴のおなししらへにかよふらしねやにも近き松風の聲
左廿八字。右三十一字。和漢雖殊。勝劣是同。

三十二番

左

中原康富

一曲琉璃下指還。

松風爲入五絃吹。

高山流水無今古。

未必知音三子期。

右

爲富朝臣

ことの音も軒端の松もさよ更ておなししらへに秋風そふく

かの五絃を舜の琴にや。文武の二絃を加へて後は。七絃

といふにこそ。高山流水。伯牙五絃とや申へき。七絃とや

申へき。軒端の松も小夜ふけて。聞にくきまては侍らねと。

こと葉のつゝきいかにそやおほえ侍る。是も又持と申侍らん。

三十三番

左

前内大臣

三尺焦桐爨下薪。

高堂應是動三梁塵。

聯々吹自三指端一起。

萬壑松聲漉月頻。

右

爲季朝臣

ひく琴のいと雲わにひくなり聲うち添る庭の松かせ

動三梁塵一は。虞公か歌のことにや。琴の音にもためしあり

や。おほつかなし。こゑそふる松風は一律たかく聞え侍る。

三十四番

左

經清

後夜沈々風滿し林。

虛堂明月好彈琴。

不知松簷飯二何處

添得朱絃一曲音。

右

定衡法師

軒ちかく通ふしらへやひくことのしたひにこもる松風のこゑ

左。添得朱絃一曲音。右したひにこもる松かせのこゑ。宮

三十五番

商清濁相同。得失是非何弁哉。

左

軒下松聲軟似琴。

流泉高漲月西沈。

天然妙曲難操手。

吹起秋風大雅音。

右

有俊朝臣

をのつからひく琴の音に松風のかよふやおなししらへ成らん

龜操の操。もし琴操之義に侍らは。側聲にてこそ侍らめ。

右のことの音も。ことの外たよはく聞え侍るにや。

三十六番

左

教秀

古松遶屋度三秋風。

一曲宣音焦尾桐。

清夜沈々吹入指。

無絃却在三有絃中。

右

近衛局

ことのをのたえぬ千年のためしにや通ひなれぬる松風のこゑ

左。焦尾桐蔡邕か琴。すてに耳にみち侍り。右の歌。廿七番

の祝詞と。大同小異なり。ことに終篇なるによりて。勝劣

決せずや侍らむ。

格先生有餘地三聊筆三蕪詞云。

わかのうらにからるをすてふいて舟の

またよしあしにわけまよふかな

右一卷。短筆のつたなきうへ。老眼の恨をさへ添侍れは。旁斟

酌を存せざるにはあらねと。尊命のもたしかたきによりて。あ

やしき鳥の跡を遣し侍るなり。正本にては寫し侍れと。定めて

烏鴛馬のあやまり多かるへし。

釋有瑠

文明十五年二月廿二日

詩歌合

文明十四年九月廿八日

一番

山中紅葉

左

從一位源通秀

楓葉霜頻九月天。

吟詩遙想楚山邊。

殘紅吹亂松杉外。

一抹斜陽錦樣鮮。

右

女房

色かはる麓のましはわけ捨てなをめにかくる峯のもみち葉

二番

左

釋永崇

染不成乾秋色荒。

滿山紅葉夜來霜。

聖朝自有太平象。

楓上又看栖鳳凰。

右

無品親王

わけ入は山はもみちの色も今なを奥深き霧のうち哉

三番

左

權大納言藤原教秀

曉霜染葉景住哉。

一抹斜陽對錦開。

不識秋光幾千樹。

吟隨流水上巖隈。

右

式部卿邦高親王

小倉山みゆきふりにし秋も猶わすれぬ色に出るもみち葉

四番

左

釋等貴

獨憐楓樹倚山隈。

霜後空閑錦繡堆。

紅葉勝花亦何益。

停車人少徑無媒。

右

入道親王道永

山ふかみたる紅葉のにしきにてたかふる里にきてかへる覽

五番

左

權大納言藤原高清

滿林無處不霜楓。

我錦深紅又淺紅。

此地却疑裂吳楚。

染成葉々照山中。

右

入道前左大臣女

しくれ行山のもみち葉われも又心をそめて目かすふる頃

六番

左

釋景管

行入溪腰小徑斜。

楓林紅處兩三家。

山禽日暮停車語。

似道花時無此花。

右

前内大臣

山陰はくるはやしの小車も心とめよとかさるもみち葉

七番

左

大藏卿藤原經茂

昨夜清霜染出不。

滿山葉々着紅稠。

有誰能縮得斯地。

移作五雲天上秋。

右

按祭使藤原親長

くる人もみえぬいとかの山なれと秋とや木々の錦をるらん

八番

左

權中納言藤原廣光

幽徑秋荒霜色深。

滿山楓樹映松陰。

吟遊多是停車處。

葉々紅繼夕照林。

右

從二位藤原教國

染かへて時雨るゝ木々は山あめの藍より深き千しほとそみる

九番

左

權中納言藤原實隆

殘樹^{々々}秋光^一
一鳥^不鳴霜^底。
吟步^忘歸石^逕長。

右

吟步^忘歸石^逕長。
回^レ頭木^末欲^二斜陽^一。

參議侍從藤原政爲

山深^くわくる心の色^{より}も千しははうすき紅葉^とやみん
十番

左

釋承英

青女^染成楓^樹紅。
遊人^不到^三叉路^一。

右

滿山^{落日}繡屏風。
葉々^勝花嵐翠中。

參議左中將藤原季經

時雨^{つゝ}日影^もみえぬ奥山^におのれのみてる木々^のもみち葉
十一番

左

藏人神祇少副卜部兼致

浮嵐雨^過較添^風。
落日^無邊堪^レ畫處^一。

右

染得^{山々}秋色紅。
霜^幾雲錦小屏風。

參議藤原基綱

夜をこめてたつ秋霧^のあさしめり紅葉^も奥も深き山哉
十二番

左

散位菅原和長

詩景楓^詠吟更佳。
秋山^變作^二春山^一否。

右

逕攀^二鰲路^一坐停^車。
葉々^紅深霜後花。

松ひとりさめたる色や小倉山ふかき紅葉^のけちめみすらん
十三番

左

釋景管

秋正^閑時寒更忙。
祇將^二鸚鵡^一啄^二殘粒^一。

田村月色夜蒼々。

添^二得曉紅^一霜有^レ香。

右 女房
もるいほに賤かかけほすいねかての夜寒の嵐かつふせく也
十四番

左

大藏卿藤原經茂

田村秋^閑一間廬。
白首老農^養袂短。

右

風扣^二柴扉^一寒雨疎。
此時豈耐^レ荷^二犁鋤^一。

もりあかす山田の庵に露霜のよ寒や賤をおとろかすらん
十五番

左

釋承英

八九田家村路傍。
秋天平野人歸後。

右

風吹^二把酒^一映^二斜陽^一。
寒雁飛邊足^二稻梁^一。

もる人の夜寒もさそな岡のへや稻葉色つき霜まよふころ
十六番

左

式部卿邦高親王

幾村桑松曉霜乾。
葉自打^レ窓窓自葉。

右

田水邊^門秋山閑。
碓聲響^レ月不^レ堪^レ寒。

庵近くかりの泪もしくれきで稻葉の雲のあき寒きころ
十七番

左

入道親王道永

自^二艱苦^一至^レ秋閑。
縣吏^隣民租不^レ重。

右

遺穗在^レ田相共歡。
妻兒衣破豈憂^レ寒。

庵ある、秋の山田をかりそめにとふたに寒き袖の夕かせ
入道前左大臣女

十八番

左

東作西收歲漸閑。
稻梁刈盡秋風夕。

田翁佳處露薄々。
想是吾廬次第寒。

權中納言藤原廣光

右

もる庵のよ寒もたへしかりのよの露のたのみに心かけすは
前内大臣

左

桑拓斜連茅屋荒。
郎隨遠戍衣未□。

村々黃落覺秋忙。
碣杵聲哀幾夜霜。

右

吹をともしこか山田をもる庵の霜にこたふる袖の秋風
按察使藤原親長

二十番

左

寂々田村秋已閑。
老農夢曉綠簑底。

數間草舍月西殘。
不_レ耐_二五更風露寒_一。

右

秋さむき山田の庵の荒まくもをしねかけほしかこふ頃哉
從二位藤原教國

二十一番

左

今杓昔橋堯舜氏。
夜寒如此田家底。

稻梁秋老不_二全貧_一。
又被_二鳥聲催_二着新_一。

右

日數たつ秋やひくらしよもすから門田の鳴子音を寒けき
參議侍從藤原政爲

二十二番

左

權中納言藤原高清

收斂未_レ終秋色深。

近手租重衣猶薄。

右

もるしつやよ寒成らん秋風の霜ふき結ふ小田のかり庵
參議左中將藤原季經

二十三番

左

禾黍吹_レ寒霜露滋。
家々不_二宜黎民樂_一。

右

鹿の音も時雨て寒き小山田にねられぬまゝの庵やもるらん
參議藤原基綱

(二十四番)

左

田家漏鼓易_二蒼昏_一。
茅舍竹籬聞_二好語_一。

右

夕されは稻葉の雲のした庵に時雨て寒き小田のあきかせ
右衛門督藤原爲廣

二十五番 鶴伴仙齡

左

有_レ雄傲々刷_二翅翎_一。
一鳴記得千年後。

右

馴てみん後はわか身も仙人のすみかに契る千世の友鶴
女房

二十六番

左

一雙白鶴自_二蓬壺_一。
月落_二松梢_一夜將_レ半。

從一位源通秀

丹頂霜毛又在呼。
夢醒聲似_二祝_二皇國_一。

右

無品親王

仙人にともなふ鶴も君かへむ千世を雲井にまつ契るらし
二十七番

左

釋永崇

鶴自千年松萬年。
人間咫尺仙宮隔。
一斐何時上^レ天。

右

式部卿邦高親王

をのつから馴て千とせやふるたつすむ仙人も松陰にして
二十八番

左

權大納言藤原教秀

鶴自^二蓬萊^一來^二九阜^一。
爲^レ君似^レ祝^二無疆壽^一。
草言三萬里波^レ。
松頂霜寒清唳高。

右

入道親王道永

千世ふへきためしもさそな仙人のすみかになるゝ鶴のもろ聲
二十九番

左

散位菅原和長

洞裏喬松半掩^レ庭。
千年色似^二猷^一君壽^一。
枝猶垂^レ碧鶴垂^レ翎。
正伴^二仙衣^一共制^レ齡。

右

入道前左大臣女

千世に又ちよや重ねん仙人に馴て年ふる鶴の毛衣
三十番

左

權大納言藤原高清

仙鶴袋玄松獨^レ青。
清遊佳興奏^レ琴後。
不知深洞幾秋螢。
白日飛昇共制^レ齡。

右

前内大臣

いく千世そなるゝ雲の友鶴もすむ仙人もおなしはひは

卅一番

左

藏人神祇少副卜部兼致

一隻高狎蓬^二嶋^一天。
玄衣丹頂伴^二飛仙^一。
莫^レ喚^二雲丹^一隨^二彭祖^一。
猶欠^二蟠桃^一着^二千年^一。

右

按察使藤原親長

仙人のよはひ契らはあしたつも雲井にかきれ君にゆつりて
卅二番

左

釋承英

仙鶴聲緣^二天上^一聞。
青松界破縞衣雪。
千年祝壽伴^二吾君^一。
飛入^二蓬萊宮裏雲^一。

右

從二位藤原教國

あまかけるつはさをかりて仙人の身をもまかする千世の友鶴
卅三番

左

釋景菅

只尺蓬萊擁^二五雲^一。
夜深宴罷未^二飛去^一。
玉簫聲裡鶴成^レ群。
永以^二仙齡^一欲^レ壽^二君^一。

右

參議侍從藤原政爲

ちよの聲かよふや雲の仙人のすみかに鶴そよはひへにける
卅四番

左

大藏卿藤原經茂

神仙遊處鶴相隨。
也識吾皇千歲壽。
共約^二長生^一不^レ用^レ騎。
霜毛霜羽立^二丹墀^一。

右

參議左中將藤原季經

諸共に千とせや契る白妙の鶴のけちかくなるゝやま
卅五番

左

權中納言藤原實隆

一雙白鶴^二青天^一
借問年々^二幾日^一

不^レ識駕來何處仙。
幾回看盡海成田。

右

參議藤原基綱

雲よりよそにかへらてをのゝ柄の朽し所を契る鶴かな
廿六番

左

權中納言藤原廣光

三珠樹在鶴群邊。
只尺蓬萊不^二飛去^一

丹頂綺衣終日眠。
遐齡相伴幾千年。

右

右衛門督藤原爲廣

おいらくになしとこたふや仙人の門もつるの萬代のこゑ

詩歌合

文明十五年正月十三日

一番 雪中鶯

左

關白

春天灑^レ雪未^二吹晴^一。
從^レ是東風送^レ寒去。

更刷^二金衣^一正月鶯。
花中百轉管絃聲。

無^二指註^一之由申^レ之。

右

女房

鶯の雪にこつたふ羽風にや咲あへぬ梅も花そちるらん
をのゝ殊勝のよし申^レ之。

二番

左

左大臣

滿庭殘雪樹梢傾。
恰似^二嵩山呼^一萬歲。

出^レ谷嬌鶯金羽輕。
新年先報雨三聲。

雪中之意頗不^レ足歟。

右

無品親王

木々はいま花かとみえて降雪に初音や早きはるの鶯
ことなる難なし。

三番

左

內大臣

餘寒谷々雪堆々。
寄^レ語東風吹着意。

一曲未^レ歌春未^レ回。
金衣猶宿去年梅。

各申^二宜之由^一

右

式部卿親王

春をあさみまつ咲雪の花のえにうつる匂ひや鶯のこゑ
各優美之由申^レ之。

四番

左

東風吹_レ雪洒_二前欄_一
似_レ報春皇呈_二上瑞_一

出_レ谷雛鶯不_レ怯_レ寒。
一聲高奏萬年歡。

同 山

各宜之由申_レ之。

右

鳴ひらく聲のにほひもうつもれて雪ふみ散す枝の鶯
はしめの五文字。きゝよからさるか。

前關白太政大臣

五番

左

舊雪未_レ晴今雪吹。
綿蠻聲澁_二喬橋曉_一。

何關洛下聽_二黃鸝_一。
強半春寒花可_レ遲。

宗 山

各申_二殊勝之由_一。

右

咲とみえて匂はぬ雪の花のえにをのれ色ある鶯のこゑ
一同に殊勝の由を申。

一位殿

六番

左

一兩聲鶯飛雪吹。
綿蠻奏處寒猶重。

遷喬先領_二上林枝_一。
風似暮春花落時。

從一位通秀

宜之由申_レ之。

右

雪はなをこそより花の梅かえに色ねを添てきゐる鶯
大かたよろしく侍る歟。

天台座主尊應

七番

左

權大納言敦秀

微雪吹晴初聽_二鶯_一。 又知春滿九重城。
東風料峭遷喬處。 幽谷寒殘歌未_レ成。

一二之句。與三四之句。意頗相違歟。

右

春あさみ聲またおいぬ鶯もこつたふ枝の雪やいたゝく
第二句第五句。不_二庶幾_一之由各申_レ之。

八番

左

春雪吹晴景更宜。 上林頃刻似_二華時_一。
不_レ知黃鳥忘_レ寒否。 百轉曲新瓊樹枝。

各申_二宜之由_一。

右

うちはふくをのか羽風も寒からし梢の雪にきゐる鶯
いひしりて。優美にきこえ侍り。

九番

左

諸峯吹雪霽光清。 吟裡隔_二簾聞_二嫩鶯_一。
天弄_二餘寒_一春已淺。 梅花紅處兩三聲。

宜之由申_レ之。

右

筵にぬふ花はまたきに降雪をはらふも春と鶯のなく
無_レ得無_レ失。

十番

左

東風吹_レ雪曉婆娑。 黃鳥聲中寒更多。
似_レ報_二梅花春信早_一。 玉埃散處語將_レ和。

大藏卿經茂

信之字末レ隠歟。

右

右大臣

梢にはまたきにほはぬ白雪の花ふみちらし鶯そなく

ことなる事なし。

十一番

左

臘雪殘時春雪添。

嫩鶯不レ怯金衣薄。

各申宜之由。

右

我家のそのゝくれ竹雪折にやとりをとひて鶯そ鳴

無別事一歟。

十二番

左

幽谷春遲雪作堆。

綿蠻若効二鄭陽律。

各宜之由申レ之。

右

下おれもかさなる竹のかけ深み雪のふるすに鶯そなく

ことなる難なし。

十三番

左

餘寧春深雪繼レ空。

凍損金衣都不レ議。

燕南之字不レ足歟。

右

鶯路却從二水底一過。
燕南誤作落花風。

參議基綱

沙彌宋世

花とみてこつたふをのか羽ふきにも散くる雪に鶯そ鳴

無下可二難申一事。

十四番

左

雪自二披垣一連二野橋。

餘寒料峭花間路。

各申殊勝之由。

右

ふる雪にぬれぬものから鶯のまつかけしむる梅の花かき

第二句おもひたく侍る歟。

十五番

左

季後雪深花自遲。

餘寒不レ鎖一聲曉。

各殊勝之由申レ之。

右

降そふるけさはわかしな鶯のをのかすたちし松の白雪

一二句不ニ甘心一侍り。

十六番

左

十日東風吹、雪殘。

金衣漸暖宮花底。

申二殊勝之由。

右

谷水はいと、氷りし雪の中に獨なかるゝうくひすの聲

歌の姿宜侍り。但第二句。おもひたく侍り。

蘭坡

横川

桃源

曉鶯聲濕晚鶯乾。
和氣入レ歌春不レ寒。

右衛門督爲廣

十七番

左

梅花蘼落雪飛晨。

窓掩餘寒聽彷彿。

一同申_二宜之由_一。

周麟

上有_二黃鶯_一轉近_レ人。

一聲如_レ鶻一聲春。

左近少將藤原雅俊

下折のねくらの竹の鶯やよふかき雪に出てなく覽

よろしくきこえ侍り。

十八番

左

尋常正月聽_二喧鶯_一。

一夜東風變_二春啼_一。

宜之由申_レ之。

周全

無_レ奈餘寒雪未_レ晴。

隔_レ花彷彿管絃聲。

右

花はまた雪にこもりて梅かえに鳴音ひらくる春の鶯

ことなる難なし。

散位源尚氏

十九番

左

風送_二餘寒_一雪較吹。

爲_レ梅偏有_二護_レ花意_一。

宜之由申_レ之。

藏人神祇少副卜部兼致

朝來_二黃鳥_一出_レ幽時。

凍損金衣總不_レ知。

右

鶯のこみをねくらのしるしにて春を埋ぬ雪の村竹

ことなる難なし。

左衛門大尉藤原政行

二十番

左

秀才菅原和長

春正來時暖正輕。

爲_レ花似_レ報_二餘寒重_一。

申_二宜之由_一。

霏々微雪隔_二宮鶯_一。

飛入_二梅邊_一不_レ惜_レ聲。

沙彌宗伊

梅か枝にきみつゝ鳴や降雪の笠やとりする鶯の聲

よろしく侍り。

二十一番 江畔柳

楊柳毵々翠掃_レ空。

市橋烟水人如_レ織。

無_二殊事_一之由申_レ之。

江邊無_二日不_二春風_一。

舟在_二二十絲萬縷中_一。

横川

右

かけうつる入江の水のうき草も浮かとみれは靡く青柳

見るやうの舳にてよろしく侍り。

權大納言義尚

二十二番

左

維_二舟江畔_一欲_二斜陽_一。

從_レ是籠烟恩雨日。

宜之由申_レ之。

弱柳千條映_レ水長。

絲々吹亂染_二鶯黃_一。

權中納言廣光

右

風わたる岸の柳もふるきえにみとりなみよる春やへぬ覽

無_二殊難_一之由申_レ之。

左衛門大尉藤原政行

二十三番

左

江邊楊柳拂_二魚梁_一。

影浸_二千條羅帶水_一。

沙際春濃透_二曉陽_一。

穀紋染出_二小鶯黃_一。

參議基綱

穀教之字重複。

右

右大臣

かもめゐる江川の水のかけなからねふる姿や青柳の糸
第三句。不_レ得_二其意_一。又ねふる心には。糸の字なくとも侍
りなん。

二十四番

左

權大納言高清

江柳絲々先識_レ春。
東風他日絮_レ飛後。

麴塵浮處綠猶新。
可_レ作青萍漾_二水濱_一。

申_二宜_一之由。

右

前左近中將敦國

かもめゐる人江の浪はのとかにて靡く柳もねふるとそみる
ことなる難なし。

二十五番

左

權中納言實隆

垂柳陰々江水流。
往還路熟釣魚叟。

風枝裊處好維_レ舟。
屢見榮枯春又秋。

宜_二之由申_レ之。

右

沙彌宗伊

鶯のゐる入江の柳うらなひき緑の水に春風そ吹
風鉢よろしく侍り。

二十六番

左

桃源

鴨綠江東柳已絲。
祇今行樂離人少。

金鰲繫_レ馬雨晴時。
不_レ向_二春風一折_一中一枝_上。

申_二殊勝之由_一。

右

式部卿親王

をのつから緑かはらて幾春をふるえの水に靡く柳そ
ことなる事なくきこえ侍り。

二十七番

左

藏人神祇少副卜部兼致

楊柳依々江水邊。
晴梢欲_レ月晚潮落。

春風收處淡_二於烟_一。
人倚_二翠陰_一先繫_レ船。

申_二宜_一之由。

右

參議政爲

浪かすむ入江をとをみ青柳の緑のまゆはきたかにもなし
初五文字。思ひたく侍り。

二十八番

左

周麟

楊柳陰中日漸遲。
波心倒蘸千條影。

正今春色度_レ江時。
可_レ有_二遊魚疑_二釣絲_一。

尤申_二宜_一之由。

右

前大僧正増運

青柳のなひく入江は釣人のいてぬ隙たに糸やたるらむ
さしたる事なし。

二十九番

左

秀才菅原和長

一般春色柳條肥。
萬縷染成鴨頭綠。

烟暗江邊村舍屋。
晚來可_レ繫_二釣船_一歸_上。

雖_二肥之字不_レ穩。宜_二之由申_レ之。

右

前關白太政大臣

朝しめる柳の糸はそれなから露の玉えにかけ靡くなり

五文字不_レ宜哉。又江のたよりもなし。玉江の柳も作例如何。

三十番

左

水暖水消春満_レ江。

依々楊柳繞_二江亭_一。

周 全

官橋路與_二野橋_一接。

雨露無_レ私一樣青。

尤宜。

右

はる風の入江をかけて吹からにうら浪ゆらく玉柳かな

按察使親長

よろしく侍り。

三十一番

左

江前_二晴景_一望無_レ邊。

柳色青_二水接_レ天。

左近大將冬良

最愛春風繫_レ舟處。

幾絲染出萬條烟。

雖_レ宜幾絲萬條重疊。

右

さそふ水あれともゆかぬうき草は入えの岸の柳かけかも

一位殿

本歌の心。よろしく侍り。

三十二番

左

微暖入_レ江水始浮。

數株柳色映_二新流_一。

蘭 坡

絲々吹亂東風岸。

欲_レ爲_二春遊_一暫繫_レ舟。

尤宜之由申_レ之。

右

かつきするあまも入その夕波に柳の髪の亂れあひつゝ

女 房

尤委よろしく詞たくみにきこえ侍り。

三十三番

左

日暖水消春不_レ遲。

江頭楊柳萬條垂。

權大納言教秀

青々影落白波上。

應是天公染出絲。

申_二宜之由_一。

鹽やかぬ入江に靡く青柳やをのれ煙を春はみすらん

右衛門督爲廣

ことなる事なし。

三十四番

左

千條柳色好_二風光_一。

短々長々江水傍。

宗 山

染不_レ成_二乾烟雨晚_一。

半如_二鴨綠_一半鵝黃。

尤宜。

右

あし火たく難波の小屋の朝烟かけて入江に靡く青柳

天台座主尊應

朝の字おもひたく侍り。

三十五番

左

江面風收新柳連。

清波浸_レ綠半含_二煙_一。

從一位通秀

晚來迴棹囊衣各。

猶愛_二垂絲_一繫_二釣船_一。

無難之由申_レ之。

右

影うつる入江のなみのかたよりに靡く玉もや青柳のいと

散位源尚氏

無_二指事_一。

三十六番

左

同 山

江畔春温柳色鮮。
漁鄉何似宦橋曉。

千絲萬縷鎖青烟。
不繫金狔一只繫船。

申宜之由一

右

無品親王

影しあればつなくを舟のおなしえに靡くつなてや青柳の糸

無難。優美に侍り。

三十七番

左

内大臣

江畔柳條籠暖烟。
漁翁罷釣維舟去。

鴨頭油緑水如天。
萬縷鳧風斜日前。

宜之由申之。

右

入道左大臣

浪こゆるあしの若葉はみしかきに靡く入江の青柳のいと

平頭之病いか。

三十八番

左

大藏卿經茂

萬株新柳掃神清。
滿岸春風吹短艇。

烟色相連一水涯。
釣絲垂處動青絲。

無難之由申之。

右

權中納言永繼

影ひたす入江の水も青柳のおなし緑になひく色哉

各申優美之由。

左

左大臣

薄暮江村隔彩霞。
遺賢應詔太平日。

柳條風暖未吹華。
影似釣絲抱水涯。

申宜之由。

右

左近少將藤原雅俊

舟つなく入江の岸の青柳やつなてにはあらぬ糸をそふらん

よろしく侍り。

四十番

左

關白

千條楊柳繞江頭。
春水涵絲釣磯暮。

鴨綠鵝黃弄暖烟。
却疑漁客有拋釣。

無難之由申之。

右

沙彌宋世

えにあらふ春の錦やはつるらんみとりに染る青柳の糸

たくみにめつらしく聞え侍り。

四十一番

左

内大臣

雲隔山家一天一方。
危梯元不畏來往。

谿分燕尾嶺羊腸。
蜀客猶堪蜀道長。

申宜之由一

右

無品親王

世を渡るうきにかへても山深く誰かふみゝる谷のかけ橋

よろしく聞え侍り。

四十二番

左

關白

人家深住白雲隈。
日暮歸樵攀嶮去。

雪盡高梯滑似苔。
檐頭斜挿數枝梅。

尤殊勝之由申之。

右

式部卿親王

すむ人の心ほそさも白雲に一すち残る峯のかけはし
殊勝之由申レ之。

四十三番 左
樵夫不レ渡々陽後。
樵夫不レ渡々陽後。
宜之由申レ之。

百尺高梯入二翠微一。
雨餘苔滑客來稀。
樵中納言實隆

右大臣

柴のとのかりにすむ身も有へつゝ渡り馴たる峯のかけ橋

ことなる事なし。

四十四番 左
周 麟

一家松火隔二深山一。

只許樵夫共往還。

尤申二宜之由一。

參議政爲

世中をわたりかねつゝすてし身も今住なるゝ山の梯

すみなるゝ山の梯のつゝきいかゝ。

四十五番 左
大藏卿經茂

何歲幽居ト此山一。

一梯高跨白雲間。

人路二虹蜺背上還。

尤宜。

左衛門大尉藤原政行

君か代にいてゝつかへは朽ぬへし山のかけ橋人もわたらて

祝言の心。よろし。

四十六番 左
横 川

雲不レ可レ梯山可レ梯。

竹籬茅舍路高低。

斷岸蒼蘚吾知處。

蜀雨斜懸險棧西。

各殊勝之由申レ之。

右

世を渡る身をのかれてものかれぬはつま木に迷ふ峯のかけ橋

ことなる事なし。

四十七番 左
關 白

元是青雲不レ可レ梯。

溪山深處ト二幽棲一。

苔封二小徑一無二入過一。

暗水聲中日久西。

申二宜之由一。

右

山深くおなし心に住人のかよひ路なれや谷のかけはし

同前。

四十八番 左
桃 源

路入二山村一斜日紅。

人家隔二岸往來同。

躡レ雲不レ覺危梯滑。

窮谷深林王化中。

尤殊勝。

右

庵しむる谷のかけはし朽にけり都のつての猶やたえなん

やさしく聞え待り。

秀才菅原和長

山家寂々掩_二松風_一、
數尺危梯蒼_レ茂、
路自_二白雲深處_一通、
樵夫恰似_レ度_二青虹_一、

申_二宜之由_一但青字不_レ穩。

右

右衛門督爲廣

捨し世の路にあやうくならはすは渡りやかねん衆の梯
をの_レよろしきよしを申。

五十番

左

周全

數椽茅屋四無_レ隣、
今日山中亦王化、

青壁梯危苔色新、
樵歌一曲太平春、

宜之由申_レ之。

右

前左近中將敦國

さても猶渡りやかめる浮世をはかけ離れたる谷のかけ橋
難なくよろし。

五十一番

左

參議基綱

二三茅屋客過_レ稀、
徑歷_二林西_一斷還續、

苔鎖_二危梯_一傍翠微、
行々認到小深扉、

無_レ難之由申_レ之。

右

沙彌宗伊

由里はをのつからなる石の橋松の柱も苔そかゝれる
ことなる難なし。

五十二番

左

藏人神祇少副卜部兼致

誰移_二茅舍_一住_二山中_一、
啼鳥一聲人不_レ到、

苔鎖_二石梯_一無_二路通_一、
蕭條日夜度_二松風_一、

尤宜。

右

按察使親長

捨はつる身ををく山のかけ橋はうき世に渡る道を残すな
よろしきよしを申。

五十三番

左

宗山

重山複水兩三家、
數尺高梯何所_レ似、
尤宜之由申_レ之、
風送_二樵歌_一路更賒、
長虹影落夕陽斜、

右

前大僧正増運

由里になれて通ふもあやうしや水のこゑふむ谷の梯
水のこゑふむなとめつらかに侍り。

五十四番

左

權大納言教秀

山巔民屋與_レ雲齊、
聖代微_レ賢無_二隱士_一、
無_レ難之由申_レ之、
突兀高巖百尺梯、
探_レ春巖客屢攀躋、

右

散位源尚氏

明わたる松のとほそは雨すきて雲こそかゝれみねの梯
ことなる難なし。

五十五番

左

同山

小路崎嶇繞_二翠微_一、
料知樵客攀_レ雲去、
危梯高處踏_二殘輝_一、
上有_二梅花_一半出_レ扉、

右

天台座主尊應

我庵はあまとふ雲を袖にかけ鳥の聲ふむ峯のかけはし
姿逸興には侍れとも。第三句。第五句。懸字。梯子。いかゝ。

左

路入二蹊限二歩々迷。
山前山后踏二梯上。

樵歌聲遠夕陽西。
誰伴二白雲二安二舊栖。

左近大將冬良

無レ難之由申レ之。

右

出深みわけ入ひとの便さへなをあと絶る谷のかけはし
句のつゝきなといひしりて宜侍り。

權大納言義尙

五十七番

左

巖際松深目易レ嘆。
行人斜有二過レ梯影。

踏レ之幽徑隔レ溪分。
若是非レ衣定白雲。

權中納言廣光

三四句不レ穩。

右

やま深く我住まゝの通路にわたすも細きたにの梯
大かたよろしきにや。

左近少將藤原雅俊

五十八番

左

窈窕層巒簇二淡烟。
高歌一曲飯樵晚。

青松夾レ路遠相連。
家在二石梯流水邊。

左大臣

無二殊難二之由申之。

右

谷かけの庵の路はたえにしを誰かよふらんみねの掛はし
平頭之病いかゝ。

女房

五十九番

左

棧路猶高背路斜。
夢魂疑入二劔門一去。

千山深處有二人家。
月暗青螺一抹霞。

權大納言高清

尤宜之由申之。

右

山ふかみとひくる人の音はせて松風わたるみねのかけはし
ことよろしくきこえ侍り。

權中納言永繼

六十番

左

茅屋蕭條一徑微。
蒼苔路險無二入過。

古梯幾尺向二柴扉。
只看斜陽樵士歸。

從一位通秀

雖レ宜人與二樵士二不レ穩。

右

山里はいたゝの橋のけたよりも細きをたのむそはのかけはし
めつらしく殊勝に侍り。

沙彌宋世

題

雪中驚

江畔柳

山家梯

作者

左方

關白近衛政家公

左大臣西園寺實遠公

内大臣徳大寺實淳公

同山天龍寺住持院主武家連校勘寺首位而文詞癸卯三月
二十四日夢云々即兒蘇州寺僧也時驚覺此偈賦

宗山

從一位通秀

權大納言敦秀

權大納言高清

左近大將冬良

大藏卿經茂

權中納言廣光

權中納言實隆

參議基綱

關坡文明七年乙未十一月廿四日堂文明七年乙未十一月廿四日寺文明七年乙未十一月廿四日院文明七年乙未十一月廿四日

橫川文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

桃源文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

周麟文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

周全文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

歲人神祇少副卜部兼致

秀才菅原和長

右方

女房後土御門院

無品親王後泊原院

式部卿親王伏見邦高

前關白太政大臣二條持通公

一位殿文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

天台座主文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

前大僧正增運文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

權大納言義尙文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

入道左大臣文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

右大臣文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

按察使親長

權中納言永繼

沙彌宋世文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

前左近中將敦國

參議政爲

右衛門督爲廣

左近少將藤原雅俊

散位源尙氏文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

左衛門大尉藤原政行文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

沙彌宗伊文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

讀師

左權大納言高清

右從一位通秀文明七年乙未十二月廿四日堂文明七年乙未十二月廿四日寺文明七年乙未十二月廿四日院文明七年乙未十二月廿四日

講師

左秀才菅原和長

右散位源尙氏

判者 衆議

文明十五年正月十三日

群書類從卷第二百二十六

和歌部八十一物合

寛平菊合

題菊

左方占手の菊は。殿上童に立君を。女につくりて。花におもてをかささせてもたせたり。いま九本をはすはまをつくりてそしたる。そのすはまのさまは。思ひやるへし。面白き所の名をつけつゝ。きくにはゆひつたり。

占手 山城皆瀬菊

うちつけに皆瀬は匂まされるはおる人からか花のかけかも

二番 嵯峨大澤池菊是よりはず

一もとおもひし菊を大澤のいけのそこにもたれかうへけむ

三番 紫野菊

名にしおへは花さへにほふ紫の一もときくに置るはつ霜

四番 大井戸難瀬菊しろかねをよりて事にあらはれたり

瀧つせはたけふばかり音なせそきく人もなき思ひもそます

五番 攝津國田蓼嶋菊さくの下に女の道のちてを

たみのをいまはもとめし立かへり花の雪にぬれむと思へは

六番 奈良樟河菊

千鳥なくさほの川邊をとめくれは水底よりそさける花かな

七番 和泉吹屋菊

けふくくと霜をきまさる冬はたゝ花うつろふと恨みにゆかん

八番 紀伊國吹上濱菊

秋かせのふきあけにたてる白菊は花あらぬか浪のよするか

九番 伊勢國綱代濱菊

磯にさくあしろのをきく鹽かひにたまそとらんなみの下草

十番 逢坂關菊

此花にはなつきぬらし關かはのたえすもみよとおれる菊の葉

右方。これも殿上童ちこ藤原重時。あはの守ひろしけかむ

すこかみて。きくともおほすへきすはまを。いとおほきにつくりて。ひとつにうへたれは。もていつるにところせけ

れは。をしあはせては。ひとつになる(す)へく(て)。かまへて

わりて和をつけて。ひとたひにをしあはせて。いたさんと

かまへたるを。左方の。一もとつゝ出すにおとろきて。た

ひたひにいたしければ。あはせはてたれは。いとおもしろ

き所ひとつなれと。あはするほとはわれて。いとかたはな

り。

占手歌

山ふかみいりにしみをそいたつらにきくの匂と色つきにける

のむからに親子の中もわかれすときく谷水をひにてなかせり

今はとくるまかけてしにはなれは匂草葉もおひ茂りけり

皇のよろつ代までしきをりとはたまひしたねをうへしきく也
菊の水齡をのへすあらませはさともあらさすけふあらましや

かくはかり雲の上高くかけゝれけ翔る鳥たにあらしと思ふ
ぬれてほす山路のきくの露のまにいつか千年を我はへにけん
秋はてゝ冬はとなり成ぬとてけかぬは花をにほひくはふる
萬代をきくのたねとやまきそめて花みること祈りきにけん
花みつゝ人待ときは白たへのそてかとのみそあやまたれける

右寛平菊合以甲斐權守季鷹藏本書寫以百花庵宗固屋代弘
賢藏本按合畢

上東門院菊合和歌

一番

左

長きよのためしにうふる八重の花付すゑとをく君のみそ見む

右

紫の匂ひことなる八重の花はつしもよりやわきてをくらむ

二番

左

めもかれすみつゝくらさんしら菊の花より後の花しなけれは

右

うすくこくうつろふ色はをく霜にみなしら菊とみえわたる哉

三番

左

ひころへてうつろひまさる菊の花幾夜の霜をふるにか有らん

右

もろ人の心を花になす物はうつろふきくのさかりなりけり

四番

左

さく花のたくひ有とそ思ひける色々にほふきくのまかきを

右

千世ふへき君かまかきの菊みてそ花の中にもひさしかりける

五番

左

みるまゝに色のまさるはきくの花ちよまてさけと霜を置らし

右

朝霜におきつゝみれは菊のはなよのまゝににほひこそませ

中納言内侍

少納言内侍

伊勢大輔

伊與中納言

大輔

弁乳母

中納言内侍

小弁

五節

六番

左

月影のてりそふ菊はうつろへる上にもしものをくかとそ見る

右

あかすみるかひも有かななかきよのためしにさける白菊の花

七番

左

たちならふ色なき物はむらさきにうつろふ菊の花にそ有ける

右

月影に霜をきまかふしら菊のかをたつねすはいかておらまし

八番

左

月かけにむらさきふかき菊の上はいく霜をきてそめし匂ひそ

右

菊の花うつろふ色をみてのみそ思ふことなき身とはなりぬる

九番

左

よな／＼の霜に色ます菊のはなけふのためとや思ひをきけん

右

月かけの風に亂るゝむらきくはなひく方にそ色をかへける

十番

左

こむらさきやしほ染たる菊の花うつろふ色とたれかみるらん

右

にほふ色のこなたは深き菊のはなまさるかたにや霜も置らん

右以木村孔恭藏本書寫畢

朱雀院女郎花合

亭子院の御門おりぬさせ給ふて。またのとし。きさきとみかとの。せさせ給ふをみなへし合なり。

一番

左

草かれの秋過ぬへきをみなへし匂ゆへにやまつみえぬらん

右

あらかねの土の下にて秋まちてけふのうらてにあふ女郎花

二番

左

秋のゝに女郎花みんとさしはへてぬれにし袖や花とみゆらん

右

(古左大臣)をみなへし秋のゝ風にうちなひきこゝろ一つを誰によすらん

三番

左

秋ことにききわくれとも女郎花けふまつ程の名に社有けれ

右

さやかにもけさはみえすやをみなへし霧の籬にたち隠れつゝ

四番

左

をみなへしたてるの里をうち過てうらみん露にぬれや渡らん

右

白露のをけるあしたのをみなへし花にも葉にも玉そかゝれる

五番

左

秋風のふきそめしよりをみなへし色ふかくのみ見ゆる野へ哉

右

かくおらん秋にしあはゝをみなへし移ろふ色は忘れやはせぬ

六番

左

長きよをたれたのみけん女郎花人まつむしの枝ことになく

右

古事人のみむことやくるしき女郎花秋霧にのみたちかくるらむ

七番

左

とりてみははかなからんやをみなへし袖につゝめる白露の玉

右

古風上明女郎花ふき過てくる秋風はめにはみえぬとかこそしるけれ

八番

左

久かたの月人おとこをみなへしこの秋はかりうつろふなゆめ

右

舊撰風中よみ人しらす秋の野の露にをかるゝをみなへしはらふ人なみぬれや渡らん

九番

左

仇なれと名に耻たてれをみなへしなと秋のゝに思ひそめけむ

右

をみなへし移ろふ秋の程をなみねさし移しておしむけふかな
十番

左

うつらすは冬ともわかし女郎花ときはの枝にさきかゝらなむ

右

移しうへてけふみるからに女郎花さか野の冬はことし忘れよ

十一番

左

女郎花この秋までそまたるへき露をもぬきて玉とまとはせ

右

君によりのへをはなれしをみなへしおなし心に秋をとゝめよ

花は右をとり。歌は左かちけり。

右一卷以屋代弘賢藏本書寫畢

内裏詠合康保三年(簡起曆)八月十五夜大盤所にて前裁合せたまふ

題

詠人

左繪所 右作物所 二壺にわきてうへたり

左

君か爲花うへそむとつけねともちよまつ虫の音にそきこゆる

右

心してことしは匂へをみなへしさかぬはなそと人はいへとも

御製

花をのみみるたにあるをのとなる月さへそへる秋にまる哉

右大將藤原師尹朝臣

の花も色々つきよとて野へのためしのかひも有けり

右衛門督藤原朝成朝臣

さきにほふ花のあたりの常よりもさやけかりける秋のよの月

右京大夫源博延朝臣

野も山も心あるらしこよひより松のちとせを君にゆつりて

右近中将源博雅朝臣

いつもさく花とはみれと白露のをきてかひあるけふと社みれ

頭中将源延光朝臣

色も香もこよひはまされ秋の花のとけき月のかけにみえつゝ

右中弁源保光朝臣

夜もすから月の光のさやけきにみれともあかぬ花のかけかも

近江介藤原國光朝臣

月影のいたらぬにはも今よひ社さやけかりけれ花のしら露

左京大夫藤原兼家朝臣

右兵衛督藤原忠尹朝臣

池水にかけのとなる花みれはちるまつほとのためしき哉

ちゝの色の花のくさゝ月影ににほひそまさんよろつ代の秋

ちゝの秋かはらぬ花の匂ひをは月のひかりによるさへそみる

讃岐權介藤原清遠朝臣

月かけに残らぬ花の色はみな秋のにはからおへるなるへし

左近藏人少將濟時朝臣

女郎花くらふの山のたねなれは人にこえたる色そみえける

右近藏人少將藤原爲光

年をへて咲けむよりも女郎花けふよりことに匂ひまさん

東宮學士大江喬光

月影のさやかならずは秋ふかみちくさにほふ花を見ましや

衛門佐藤原

花も色も秋のよふかき月影に君か千とせをまつむしのころ

大和守藤原安親

秋の花かさゝすにほふよろつ代をのとけき月の影にみるかな

右兵衛佐源時中

うつろはぬさかの色にて女郎花いくらばかりの秋をにほはん

散位藤原高遠

女郎花にほへとあたに思はぬにのとけき月の影にかくれむ

紀伊守紀文利

万代の秋にとにほふ花の色も心のとかに見ゆる月かな

式部丞藤原共政

花の色もことしはことに匂ひけりのとけき秋の月の影ゆへ

水の面に月さへすめる秋のよにのときき花のかけをみるかな
右衛門周源のふまさ

吹風に思ひもよせし花すゝき君になひくとけふよりはしれ
主殿助藤原爲光

うへてける花の匂ひのかひもあるかさやけき月に下枝みゆれは
李助藤原永頼

もゝしきに萬の花をうつし植てやちよの秋のためしにそみる
藤原ときよ

九重に咲みたれたる花みれはちとせの秋は色もかはらし
大江通雅

九重にほひそめぬるをみなへし行ききまでもみゆるつき哉
右近の命婦

秋の夜の花の色々みゆるかな月のかつらも雲のうへにて
介の命婦

野邊よりはいかにか思花の色も月のかつらもにほひくらへて
兵庫藏人

秋のよの月のひかりのひとつにて草々にほふ花のおりかな
小貳の藏人

秋の夜の月と花とをみるほとに鳴そふるかなすゝむしのこゑ
兵衛の藏人

秋の空すめるこよひの月なれば花のひもとくかけも見えけり
大不の藏人

月影のうすきこきをもてらす夜はいかてか花の色にわかまし
衛門の藏人

秋のよのつねよりあかき月影はのとかに花の色を見よとか
はりまの藏人

右根合以木村孔恭藏本書寫一校畢

東三條院瞿麥合

七月七日皇太后宮に。なてしこあはせゝさせ給ふ。左頭少輔のななし。やまの井の中將おほま。右頭少將のおもと。

四位の少將たちよ。装束は。左のとうは。くれなゐのあやのひとへかさね。なてしこのうすものゝほせなか。うすものちすりのも。あかいろに。ふたあゐのをりものゝからきぬ。方人。なてしこのあやのひとへかさね。ふたあゐのからきぬ。いろすりのも。すはまおまへにかきいづる。わらは四人。こきひとへかさねのあこめ。うすものゝふたあゐかさねのかさみ。綾のうへのはかまきたり。みきは。あをいろすはうかさね。方人は。くち葉なとなり。こひ(下開)

左のすはまちいさきませゆひて。なてしこふたもととはかりうへたるにゆひつきたる。

なてしこのけふは心を通はしていかにかすらんひこほしの空時のまにかすと思へと七夕にかつおしまるゝなてしこの花すはまのつるのくひにゆひつきたる。

かすしらぬまさこをふめるあしたつは齡を君に譲るとそみるるりのつほにはなさしたるたいのしきものにあしてにてぬへる。

なてしこの花のかけさす河へには緑の色も見えずそ有けるおなしすはまのなてしこにつけゝる。

七夕やわきてそむらんてしこの花のこなたは色のまされるむしのこにつけたる。

松虫のしきりに聲のきこゆるは千とせかさぬる心なりけり

みきのすはまませゆひて。なてしこおほくうへたり。そのませにはひたるいもつるの葉に。

かねもり

萬つよにみるともあかむ色なれや我まきなるなてしこの花このすはまのこゝろはにみつてにて。

よしのふ

とこなつの花もみきはに咲ぬれはあきまで色は深くみえけりかねもり

久くも匂ふへきかなあきなれとなをとこなつの花といひつゝたなはたひこほし。くものうへにあり。又つりしたるかたなどあり。すはまのすさきにみつてにて。

よしのふ

ちきりけん心そなかきたなはたのきてはうちふすところ夏の花ちむのいはほ。くろほうをつちにて。なてしこうへたるにゆひつけゐる。

よしのふ

よゝをへて色もかはらぬなてしこもけふの爲にそ匂ましけるとなんありける。これをうちみる人々。をのかひきゝこころこゝろ。いひつくとてまたあり。

左

右

かちわたりけふそしつへき天河常よりことにみきはをとれる天の河みきはことなくまさる哉いかにしつらんかさゝきの橋

右一卷以百花庵宗固藏本書寫以小野高潔所持本校合畢

後冷泉院根合

永承六年五月五日。内裏に菖蒲の根合ありけり。此事。去三月晦日。堪能の上達部一兩。殿上人等をめして。弓の勝負ありけり。又雞合も有けり。その勝負なきによりて。菖蒲を合て勝負を決せられる也。御裝束永承四年十月日歌合の儀のことし。中宮。皇后宮。みなさふらはせ給ふ。内大臣。民部卿。長家。按察大納言。信家。小野宮中納言。兼頼。左衛門督。隆國。侍從中納言。信長。二條中納言。俊家。中宮大夫。經輔。左宰相中將。能長。三位中將。俊房。三位少將。忠家。卿など。まいり給ひけり。左右の方人。夕に及てまいりけり。まづ御殿に油を供す。そのうち左右の文臺をたつ。たかさ四尺なりけり。南庇の座の東間に。東面の書本ノマに。かきたつ。洲濱をつくりて銀の松をうへたり。又おなしきつる龜をすへたり。沈香をもて岩石をつくりてたてたり。その間に銀のやり水をなかし。其前に机をたてゝ。その上に書一卷を。く。像眼をもて紙として。色紙形を摸して。各和歌五首をかく。銀をのへて表紙として。採色あをくみとりなり。虎魄を軸として銀をひもとす。洲濱にうちしきあり。あをき色のうすものを。洲の邊にをけり。かすさしの洲のうへにもをけり。又藥玉五流。わかねて洲の上にをく。方の人々。東の縁のうへに候。次かすさしの洲濱をたつ。藏人これをかきて。文臺の東にをく。石たてゝ。小松をうへたり。菖蒲をつくりて。かすさしの物とす。次に又。藏人右方の文臺をかきたつ。方二尺はかりなる。其上に太鼓臺をたてゝ。其上に太鼓をたつ。其前に蝶舞の童六人

をつくりたてゝ。其根の上にをの／＼和歌をかく。みな銀をも
てつくれり。又藥玉。ななき根をわかれて洲濱の邊にをく。藥
玉みな金銀にてつくれり。方の人西の簀子に候。次籌判のすは
まをたつ。藏人一人是をかきて。文臺の西のかたにをく。洲濱
に竹臺の舂をつくりて。竹をうへて。かすさしの物とす。その
のち仰によりて。公卿を分て左右とす。左方の公卿。相引て御
前の簀をへて。東にわたりて座につく。内大臣師方卿。兼頼卿。
信長卿。經輔卿。俊房卿也。左頭之弁經家朝臣。右馬頭中將資
綱朝臣。すゝみて文臺の下に候。このあひたに。左右のかすさ
しの童。各一人その所に候。伴童二人隆國卿の子息也。みな殿
上に候けり。頭弁經家朝臣良基朝臣をめす。頭中將資綱朝臣基
家朝臣をめす。左右相分て御前に候。經家朝臣。ななき根をと
りて良基朝臣にさつて。南のひさしにのへをかしむ。右又か
くのことし。其長短をあらそふ。左根一丈一尺。右根一丈一尺。
仍右勝にけり。又二三番おなしくこれをくらふ。各一丈なりけ
り。但右方すこしまりたりけるによりて。勝にさためられけ
り。三番をかきりとしてとゝめられぬ。次和歌五首をよむ。左
講師長方朝臣。讀師經家朝臣。右講師隆資朝臣。讀師資綱朝臣。
なり。判者内大臣。題萬蒲。時鳥。早苗。戀。祝なり。をの／＼よ
みをはりて。しりそきて本座に歸着。次管絃の御調度を置。和
琴民部卿。準二位中納言。琵琶經家朝臣。笙基家朝臣。笛筆兼隆
俊。唱歌資仲朝臣。子調子の後内大臣。御氣色によりて。笏をさ
して。御笛をとりて御座の下にすゝみて。是を奉る。主上御ふ
えをとらせおはしまして後。拍子奉仕せらるへきよし。内大臣
に仰らる。大臣仰をうけ給りて。座に歸りつきて。安名尊をと
なふ。律曲のをはりに諸卿に御衣をたまはす。各退出今度殿上

人の録はなかりけるとかや。

殿上根合 永承六年五月五日

題

葛蒲 時鳥 早苗 祝 戀

作者

左方

左馬頭源經信朝臣
權左中辨藤原資行
藏人修理亮藤原隆資
式部大輔藤原國成朝臣
相模
持一 持一 持一 持一 持一 持一 持一 持一 持一 持一

右方

右近中將源顯房
右近中將資綱朝臣
右近中將源經俊
少納言源信房
良邊法師
持一 持一 持一 持一 持一 持一 持一 持一 持一 持一

一番 萬蒲

左持

萬代にかはらぬものは五月雨の雪にかほるあやめなりけり

右持

つくま江の底の深きはよそなからひける萬蒲のねにてしる哉

二番 時鳥

左持

權左中辨藤原資行

ほとゝきすたゝ一聲に過ぬれは又まつ人になりぬへきかな
右 右近中將顯房

うたゝねの夢にやあらん杜鵑またともきかて過ぬなる哉

三番 左 早苗 藏人修理亮藤原隆資

五月雨に日はくれぬめり里遠み山田の早苗とりもはてぬに

右 少納言源信房

小乙女の山田のしみにおりたちていそけや早苗むろの早わせ

四番 左 戀 相 模

うらみわひほさぬ袖たにある物を戀に朽なん名こそおしけれ

右 左 近中將源經俊

下もゆるなけきをたにもしらせはやたく火の影の暫し計りに

五番 左 式部大輔藤原國成朝臣

秋のそらいつる月日のさやかにもよろつ代すめるくもの上哉

右 右近中將資綱朝臣

春日山枝さしそむる松の葉は君か千とせの數にそありける

此本。曾祖父入道中納言家卿。筆蹟也。可レ謂證本一而已。

此本。曾祖父入道中納言家卿。筆蹟也。可レ謂證本一而已。

此一帖。依レ仰以三古證本不レ違二字一書寫畢。

于時延德二年三月十七日 無品勝仁親王

以三右御本不レ違二字一書寫畢。 沙門彦胤

右一帖。或人依三所望一令三書寫一按合畢。

右中將源博高

右一卷以横田茂語藏本書寫以屋代弘賢所持京極黃門眞跡

摸寫本按合畢

右中將源博高

摸寫本按合畢

郁芳門院根合

寛治(興河)七年五月五日辛巳。朝間天晴小雨下。午後頗得レ晴。今日新女院女房之根合也。未刻。左右方人參集東泉殿。(左方西御所。右方東屋)。但右方儀式不レ知之。右方念人二位宰相中將(經皇右大弁(通稱)兩貫首(季仲宗通)以下來會之後。源大納言(雅)清二書方和歌。書後從二御所一召二大納言一。聞右中無二清書之人一由。仍遣三此大納言一也。此間左方人々儀定云。此歌。若有二風聞一者如何。然者講席之間可レ奏三此山一賦。西時。左方人々。乘レ船進二御前。是開水之中門道其路也。(船頗輕。輕上葺三菖蒲。本院侍四人。着二布衣一爲二船差。其裝束青狩衣紅梅袴。白單衣也。所書繪。)二位中將着二直衣一乘三此船。(殿上人皆着二直衣。此中伊與守顯季朝臣。左少弁重資。兵衛佐房遠。衣冠。)吹二雙調。次歌二席田一爲二參音聲。(笙左近府生時之。拍子下官。頭少將付歌。刑部卿顯仲朝臣今日可レ吹笙也。俄稱三所勞由二不三參仕一也。後聞二得右方之女房語。申三所勞之由一不レ參云々。仍察乘時之一人今吹笙也。顯仲朝臣所爲奇恠也。)乘燭之程進三前庭。昇レ從三寢殿東階。先左方之六位等供レ燭。(公卿之座上下二本。又切燈臺一本立二講師之圓座前。右方如レ此。右方人未三參進。前公卿相分左右一被レ候。左方(內大臣民部卿經。源大納言雅。治部卿俊。左衛門督家。中納言中將忠。右大弁通。新宰相中將仲。右方(右大臣。判者中宮大夫師。新大納言宗。右衛門督藤中納言。左大弁匡。三位侍從能。又左右女房。此前打三出簾側。于時左方早三立文臺。(左少弁重資先取二打敷。自二簀子一進二御前。殿之。六位二人昇文臺一立之。文臺調度之鏡宮也。入レ鏡有臺。橫鏡杜舩。)續色紙一

齋院女房云藤原君

右不讀題
たつのゐるいはかきぬまのあやめ草ちよまてひかむ君か例に
判者令_レ奏給云。左右共比類興爲_レ持。

左先告

二位宰相中將經貞

あやめ草ひくてもたゆく長きねのいかて淺香の沼におひけん

右

實持

君か代の長き例にひけとてやよとのあやめのねさしそめけん
左方有大弁被_レ申云。右之之歌偏_ニあやめと讀ては無_ニ草字_一。
是あやめは。本她之名也。此草依_レ似_ニ彼判者_一あやめ草と云
なり。不_レ具_ニ草ノ之時_一は偏她也。如何。右方判者被_レ申云。以_ニ
萬蒲_一あやめと云。古來常事也。尤今始めて不_レ可_レ有_ニ此難_一。
者。而左方人々私相云。判者已有_レ心云_ニ右方_一可_レ陳。左右若
有_レ暫已爲_レ持。左方歌。事外すくれたり。爲_ニ大慶_一。凡一題
二首之時頗歌也。詞中相替を以_レ撰入爲_レ興。而右方之歌共
難之詞也。已無_レ興。判者被_レ申云。左方は。歌躰頗有_ニ一興_一。
右方は事已_ニ寄程爲_レ持_一。有_ニ何難_一哉。

左
二番郭公左先讀題并歌

堀河殿

二聲となとかきなかめ杜鵑さこそみしかき夏のよならめ
右
右兵衛督雅俊

なかすとてうちもふされすほととぎす聲待人もねかた
左方之歌詞興是。爲_レ勝。

左

大貳

一聲をまたれく_レてほととぎすいくかといふに今夜なくらん
右先讀依_ニ前舞負也_一

左大弁匡房

卷_ニ銀表紙瑠璃軸_一。書_ニ和歌_一萬蒲五筋入_ニ此宮_一。以_ニ茵爲_ニ打敷_一。
金銀紫檀沈等顯皆用_レ之。次方殿上人進_ニ簀子_一候。_二位宰相中
將被_レ加_ニ左方公卿座_一。次右方人參進。先右中弁師賴朝臣。右少
將俊忠朝臣。二人取_ニ紙燭_一前行。童女二人取_ニ交臺之机帳_一與_ニ茵
進_ニ御前_一置之。_二交臺_一是比机帳之帷也。色紙形書_ニ和歌_一有_ニ懸
角_一。納_ニ萬蒲根_一也。地敷建爲_ニ地敷_一。是又金銀也。以_ニ藥玉_一懸_ニ
机帳上_一。童女并方殿上人等候。簀子敷。次殿下召_ニ講讀師等_一
之間_二此間_一講讀師等朝服中衣。左方之念人中納言中將。進令_レ奏給云。
先日籌判燈臺之風流。如_レ此事皆以_ニ可_一停止_ニ之山被_レ仰下_一了。
今右方已有_ニ童女_一者。此事不_レ可_レ有者。再三被_レ奏。時刻推遷之
後有_レ仰。被_レ追_ニ入童女_一。左方頗有_ニ吹氣_一。次左右講讀師進_ニ御
前_一。左讀師頭弁季仲朝臣。講師宗忠。右讀師顯賴朝臣。講師左少
將能俊朝臣。午時漸卷_ニ上中央之間御簾_一。上皇御覽。殿下自_ニ御
簾中_一出。令_レ候。同間之西柱邊給。已入_ニ幽興_一也。次合_レ根。_二頭
弁取_ニ出根_一。左少將忠教進_ニ御前_一立_ニ講師之前_一。左方根一丈六尺
計。根之上有_ニ藥玉之花枝_一。次右方師賴朝臣。與_ニ能俊朝臣_一置_ニ
御前_一。八九尺計。無_ニ藥玉_一爲_レ負。次右方。依_ニ負方_一又進_ニ根六
七尺許_一。根上有_ニ萬蒲葉_一。次左方根一丈三四尺許。重左勝。次又
右進_ニ銀根_一。于時中納言中將令_レ奏給云。作_レ銀大奇怪也。不_レ可_レ
合。雖_レ然有_レ仰。右方進_ニ銀根_一有_ニ論無_ニ勝負_一。三番根依_ニ永承
六年殿上之根合例_一。左方合_レ根之人。講讀師之外。左少將忠敦勤
レ之。而右方次合_ニ和歌_一。先左方讀師被_レ不_レ然如何。若失歟。和歌
之書卷講師讀上之。先讀_ニ題目_一。あやめ。_二不讀_ニ一番云事_一。次歌。
一番

左

左少將忠教

なかきねそ遙にみゆるあやめ草ひくへき末を千とせと思へは

左方申云。右方之歌詞未聞知。已如_二梵語。無_二通事_一者。何知_二其儀_一哉。有_レ判判者爲_レ持。左方之人々甚有_二腹立色_一。一定勝歌。推被_レ爲_レ持事之故也。

三番 五月雨

左

右大弁通俊

もしほやくすまの浦人うちたえていとひやすらん五月雨の空

右先讀_二題并歌_一

小別 當右大臣殿

五月雨にかさとり山はこえしかしはな色衣かへりもはする

判者令_レ奏給云。右方之歌頗有_レ情。爲_レ勝。

左先讀

二位宰相中將

五月雨のひましなければそはたれて山田は水に任せてそみる

右

典侍

常よりもはれせぬとしの五月雨にあまのかはらも水や増れる

判者云。左方そはたれてと云詞。無_二指事_一。右方河原水出。

已是似_二洪水_一。さみたれの歌不_レ讀_二洪水_一。其詞意停滯。爲_レ持。

四番

祝

左先讀_二題歌_一

宰相典侍内大臣殿

住吉の松の久しさひさしくと神にそいのる君か御代をは

右

小別 當右大臣殿

萬代はまかしたるへし石清水なかなかれを君によそへて

判者云。左右共神詞爲_レ持。

左

頭中將

行末も久しきことのためしには君かよはひの数そかそへむ

右

安藝

よろつ代を君にゆつらむためとてや苦むす君に松もおひけん

是又爲_レ持。

五番

戀

左先讀_二題歌_一

伊豫守顯季

戀後

さりともと思ふはかりやわか戀の命をかくるたのみなるらん

右

小別 當左兵衛督俊賢

思ひ餘りさてもやしはし慰むと只なをさりに頼めやはせぬ

左方申云。右方之歌詞中に無_二戀字_一。已思之歌也。如何。右方

申云。昔天徳之歌合之中に。あふことのたえてしなくは中

中に人をも身をもうらみさらまし者。此歌無_二戀字_一。左方

申云。然者此證歌彼時負也。右方申云。尤不_レ然。勝之歌也。

左大弁頗有_レ論。判者云。件歌勝負不_二極覺_一。只今不_レ可_レ披_二

見彼歌合_一者。左方重申云。去承暦殿上之歌合。左之戀歌云。

わたつみにみるめもとむるあまたにもちひろのそこにい

らぬものかは。此歌依已爲_レ負。彼時判者已今日之判者也。

如何。而推爲_レ持。左方大憂也。

左先讀

大貳

衣手はなみたにぬれぬくれなゐのやしほは戀の染る也けり

右

内周防掌侍

戀わひてなかむる空のうき雲や我したもえの煙りなる覽

未_レ判之前。左右之念人起_レ座。判者被_レ奏云。前例此番慥無_二

勝負_一。不_レ被_レ判之後聞。右相府語_レ人云。左右人之中子強

已相分。今日好爲_レ持。尤自平_二小案_一也。仍頗判之間無_レ興。

左勝一首。右勝一首。持七首。未_レ判一首。但左方根も勝也。

子時許事了。人々退出。事了後たつとて。

堀河殿

あやめ草えもいはぬまのなかきねはかくるたもとそ豊也ける

右方に あきとのによみかけたまふに。かへしなし。

左方サキ

上達部

衛 重重盛清重重光

左方交臺。右中宮重盛朝臣

女房扇十枚。以上人朝之五人。事了後。破子大盤取不レ居二衛重一。

右方交臺。丹後守季胤破子同人。

童女裝束色。近江守爲家朝臣

扇和歌撰者。左方大井通俊 右方左大臣臣也。

源大納言實朝依レ仰清書左右之歌。小書通并二番一本歌(常歌)也。先

傳也。

寢殿重二母屋御簾一自二中央間二左右敷置公卿之座。同簀子敷置二

置二枚二殿上人座

女房方人

左

春日殿故參議時無之女也左頭

宰相典侍阿宗朝臣女

堀川殿故大宮右大臣女

大夫常朝朝臣女

大貳故通朝臣女

内美乃故隆朝臣女

院備前有室朝臣女

常陸故實朝臣女

阿波故中親之女

宮備前常陸守兼俊女

右

三條殿故中納能李繼女左頭

大納言常左大臣女

小別當左長隆曾俊實女

安藝故忠俊朝臣女

典侍故源家女

宮美乃國男女

伊與源義國朝臣女

院常陸朝臣朝臣女

若狭故藤基朝臣女

少輔源家并女

已上十人之中。上藤五人。是皆院中之英華也。仍所レ被二撰

定也。但御匣殿一人不レ入。是當時右府之女。右兵衛督雅俊同母之弟也。爲二第一之上藤之上。是又外戚也。依レ爲二貴重人二不レ入。云々。

左方殿上人。各小舍人童令二裝束一。舊曆衣彩紅袴(皇服)衣葛蒲云々。

右方。不焚。

備中守仲實朝臣女子根合歌康和二年五月五日

題

葛蒲根

艾

棟

盧橘

石竹

歌人

左

右

周防掌侍

俊賴朝臣

上總君

仲實朝臣

大宮甲斐君

顯仲朝臣

藤波

隆源阿闍梨

判者

一番 葛蒲根

左持

周防掌侍

あやめ草なかき例に引はかりまたかゝるねはあらしと思ふ

右

俊賴朝臣

みかきも衛士のたまえにおり立て引はあやめのねも遙なり

左 右歌讀揚詠講已畢座客相語云和歌合事評ニ定優劣ニ可

レ備ニ後談也而依レ無判者ニ雖難レ定我非不レ弁ニ歌趣ニ

者雖難ニ定我理一任ニ參足ニ三三二拾ニ德失懸觀之所ニ違

相續ニ略言ニ耳唯懸思當座之興一解中後輩之願上矣

あやめの歌は。いつれも引ところありて。おかしうよまれ

たり。左は。歌からあしくもなけれど。こしの文字うかれ

たるやうになんみゆる。右歌にさせるなんは見えず。然は

あれとも。これ文字つゝきいかにや。いはまほしきとそ方
方申。又すへらきにそへ奉れる歌は。まけぬ事となんいひ
ならはしたれとも。内裏の事にあらす。よもきの門させる
屋なれば。さまで。さるへきにもあらす。おほよそ。左も右
も見所あるやうになん。人々申すめれば。持となとや申へ
からん。

二番 艾

左持

上總君

あたにをく蓬か露もけふにあへは藥の玉とぬきそとめける

右

實盛

万代をこめたるそのよもきをそ人のおいせぬ藥にはひく

左右ともに歌とおほゆ。右方人云。左の歌に。露をさらへた

懸して。よもきの心なんすくなきといふ。右の歌に。よろ

つ代をこめたるそのよめる。さる事の有にや覺束なし。

老せぬくすりにはよもきをやはひくらむと。左人論す。こ

れもかれも。父の心なんたしかならぬ。つてに聞は。昔人

今日のあかつきに。鳥のこゑにともなひて。そのよもきの

人のかたに。いたるをとりて。とにあて。おにをさくる

藥とすといへり。それをまなひて。いまにつたへたり。し

かあるを。左の歌によて。おかしうふるまはせたと。

まことすくなし。

右歌は。然よめるかと覺しけれど。すゑかなはねは。ひと

しかるへくとなん見給ふめる。

三番 棟

左

大宮甲斐君

尋ぬとしてしるもしらぬもけふみれば戀しき人にあふち成けり

右

隆源阿闍梨

五月きてけふにあふちの花なれや年のをたえず玉にしけぬく
左歌。させる心をくれたり。右の歌からも。きよけなれは
まさる。

四番

盧橘

左

藤波

匂ひつる花橘のゆかりには風のけしきもなつかしき哉

右

仲實朝臣

五月やみそこともしらす吹風に花たちはなのほふなるかな
左歌の。五文字のはてなん。すきぬることのやうなる。ま
ま匂ひつるといひて。風のけしきとすゑによまれたるは。
おなし風の心なんすると右人云。右の歌に。風なんあまた
かたより吹くるいかゝと。左人論する方さたまりて。吹風
をたに。定めなき風し吹すは花すゝきと。伊衡一條大納言
歌合により。これは五月やみの空。そこともしらぬに。
よる吹くる風に。はなたちはなの匂ふか。難あるましと論
する爭論有。興詞林花鮮なり。たかひに論する事みないは
れなきにあらず。但し左の歌。あたらしきけそをくれたれ
とも。いとおかし。右歌は。もしつゝきなとや。いますこし
きよけならんとそ見給ふめる。

五番

石竹

左

上總君

なへてさく色とやほみる我宿のからなてしこの花の匂ひは

右

顯仲朝臣

手もたけく我しめゆひし撫子の花には露もよきてをかなん
なてしこの露け。たゝ儼なる物にこそいひならはしたる

を。露なをきそとよまれたるなん。あなたふせいに思ひ給
ふ。左の歌の。なへてといふ文字は。むかし歌合にゆるさ
ぬ事なれと。歌おもてあしからねは。すこしまさるへきに
こそ。

右根合以木村孔恭藏本書寫一校畢

圓融院扇合

宮の御方に。うへおはしまして。らこ(亂勢)とらせ給ひて。かたせ給へる。かちわさ。六月十六日にうへせさせ給ふ。梅つほにわたらせ給へるに。殿上人中少將をはしめて。とりつゝきまいる。南は。御すたれより外にあげて。袖くちともとりいる。したんのをきくちしけるらてんの御宮に。縛扇十枚入させ給ひて。からのうすものゝすはこのすこのさい。てにつゝみて。おなし(紫むらこイ)のくみして。白かねを桔梗をみなへしの枝に造りて付させ給へり。白かねこかねのこものしたに。からの羅をある色に染て。ひとへにてはれるも。ぬへるも。あしてにて。

君か代をまつふく風にたくへてそかへす千年のためし也けりる殿しろかねをは。まつ萩のかたに色とりて。からの羅を淺みとりにしてはれり。それにあしてにてぬへるなんめりき。澤に住たつの羽かせに涼しきは君か千とせをあふき成へししたのほねに。あか色のをり物に。二藍にかさねて。はれるにぬへる。

秋來ぬと風の音にもあふきつゝそらを袂にしらんとそ思ふあを色にすはうかさねて。織ものにあしてに書ける。めつらしき聲ならなくに時鳥こゝらの年をあかすも有哉あか色の扇に。すみよしのかたを繪にかきて。あしてにかける。

住吉の松のかせをしこめたれはあふきの風のいつかたえせん七月七日。宮。うへの御つほねにのほらせ給ひて。御まけ

わさせさせ給。ものとも藤つほより殿上人あまたして。うへの大盤所にまいる。沈の御箱とれる四位の少將時なか。中納言正清白かねのひけこに。しろかねのなつめいれて。をみなへしの枝にかねをつくりてつけたり。次にたゝこものゝえた。いとおかしくて。手ことにとりてまいる。ひはりこさまく(イ)にまきゑしたるふたに。かきたるあしての歌。

天河岩こすなみのたちゐして秋のなぬかのけふをしを思ふ今かたつた。

そよみなく君をはみれと七夕のけふ待えたる心ちこそすれをきくちしたる沈の宮に。かちのこものにしきをりたてにして。ひあふき十枚。いとめつらかなるさまして入たり。白かねの扇のさまなどになしてしたるにも。(なゝイ)あふきのさまは。こよなくおかし。このおなしむらこのくみしてゆひて。白かねの五葉につけたり。その枝に人はたのやうにて。をしつけたる歌ませ(イ)させ給ひたる比。夏とおほしくて。

住の江に浪のうつまてとおもひしは松吹かせのなこりなり鬼はこのこゝろ葉にあしてうた。

中務

天河あふきの風に霧はれて空すみわたるかさゝきはし又白かねをたいにして。すぎ宮にむすひて。二藍のうすものゝしきものして。かはほり十入たり。さまともいとおかし。ひとへは。金のほねに。くちはの本。ひとかさねは。くさのかたをぬひたり。それをまたかなにかける。

右大將六人遣

何なれやあふきのかせもわきも子か衣の袖に秋しきぬれは
沈のほねにくちはのをり物を張て。それに例の扇の歌か
くやうに。かなにをりつけたり。そのうた。

藤原中納言爲光

天津風あふくともゆめ霧たつなこはたなはたのをれる錦そ
又白かねを沈のかたに色とりて。二藍のすそこなるうす
ものゝかされて。まなかなにて綴つけたり。いとゆふへう
ゝにかさねたり。

にイ

天河かはへ涼しきたなはたのあふきの風をなやかさまし
また白かねの宮のこゝろ葉に。白き糸してあしてにぬへ
る。

能宣

草も木も思ふことあらし万代は君かあふきの風になひきて
そのはこのつゝみものは。ふたあみのすそこのうすもの
の。おなしむらこのくみしてゆひて。しろかねを。はきの
花のえたにつくりつけたり。かくて目のおましにて。か
んたちめあまたまいりたまひて。夜ひとよ御あそひあり。

彈正宮琴房

兵衛督

博雅朝臣よこふ

源宰相忠清

四位少將時中

すへていとおかし。下のかたにめしうと。樂所の人さふら
ひて。いとおもしろし。夜うちふけ行ほと。左大弁保光朝
臣かはらけとりて。

年ことにいのる中にもたなはたのこよひはことに心あらなん
あふくまにいとまもあらし七夕の萬代をさへいのらせやせん

内大臣兼通

中納言爲光朝臣

源宰相忠清朝臣

左兵衛督濟時朝臣

まれにあふ心のうちはたなはたのけふより後の袖を露けき

なと有程に。曉かたに成ぬ。御あそひはてゝ。かんたちめ殿
上人なとに物かつけさせ給ふ。左兵衛督石川をうたひて。
箏をいとおかしくひき。時なかをたてゝ舞す。いりあやに。
やかてかつけものとりてかつく。ふたまのみすすこしあ
けて。みやの人々袖くちさまゝにてかつく。

右一卷以屋代弘賢藏本書寫以横田茂語所持本校合畢

堀河院艶書合

内にて殿上の人々歌よむときこゆるに宮つかへ人のもとにけさうのうたよみてやれとおほせことにて

大納言公實

思ひあまりいかでもらさむおく山のいはかきこむる谷の下水

周防内侍

いかなれは音にのみきく山河のあききにしもは心よすらん

おなし大納言くれなゐのうすやうにてたてふみに

年ふともいはてくちぬる埋木のしたの心はふりぬ戀かな

筑前 前樂堂主母

ふかゝらし水無瀬の河のむれ木は下の戀路に年ふりぬ共

源中納言國信

逢ことやこよひくとおもふまにそらわすれして月日へに鬼

院大進

綾筵をとるまでも戀すしてまたきに床を忘るへしやは

左大辨

流れ出るしづくに袖は朽はてゝをさふる方もなきそ悲しき

女御殿ゆり花

をく綱のうけもひかれぬ物ゆへに何かはあまの袖のくつらむ

宰相中將忠教

思ひわひ戀路にまよふしるへには涙はかりそさきに立ける

返しくれなるの七重かさねに下繪にあしてかきてかれのきく(ちん)やうのえたにつけたり。

前齋院紀伊

戀路をはふみたに見しと思ふ身になにかはかゝる涙成らん
また おなし宰相

つらさには思ひたえなんとおもへともかなはぬものは涙成鬼

かへし 殿肥後

うけひかぬ海士の小舟のつなて縄たゆとて何かくるしかる賢

刑部卿俊實

なこの海の浦へにおふる濱つゝらたえま苦しき物をこそ思へ

四條宮甲斐

濱つゝらたえま／＼を敷かせてくるしと思ふも我こゝろそは

左京大夫俊頼

かすならて世に住の江のみをつくしいつを待ともなき身成鬼

中宮上總

流れても逢瀬はたえし住の江の身を盡してもくちはてゝなん

俊忠中將

人しれぬ思ひありそのはま風に波のよるこそいはまほしけれ

一宮紀伊

音にきくたかしの濱のあた浪はかけしや袖のぬれもこそすれ

四位中將師時

忍ふれと物思ふ人はうき雲の空に戀する名をのみそたつ

女院安藝君

こひすともいかでか空になはたてし忍ふる程は袖につゝまで

後五月二日。おもひく／＼にみならすやうにした繪して

そ。御かへしはめてたくかさりたりける。

又同し月の七日にありつる女房のもとに戀の歌よみて
まいらすへきよしおほせられければ。七日ときこえて
まいらす。

筑前

郭公まつにつけてもさゝかにのいつれの世にかしるきとそ思
かへし

大納言

しるしありてこぬよもあれや郭公なか／＼かけしくもの振舞

中宮上總

つらしともいさやいかは石清水あふせまたきにたゆる心は

返し

世々ふとも絶しとそ思ふ神かきのいはねをくゝる水の心は

肥後君

思ひやれとはて程ふる五月雨にひとりやともの袖のしつくを

返し

中納言

よとゝもにさてのみこそはすくしゝか思ひしりぬや袖の雫を

女御殿ゆり花

きてなれしたもとは人にみせてましつらき涙の色のかはらは

かへし

左兵衛佐

忍ふ草しのふる程のよかれにはなにゝ心も袖もぬるらむ

周防内侍

人しれぬ袖を露けきあふことはかれのみ増る山のした草

かへし

宰相中將

おく山のしたかけ草はかれやする軒はにのみはをのれ成つゝ

一宮紀伊

恨かねさよの衣を人しれすおもひかへせとなくさまぬかな

かへし

美作守

ひたすらにき夜の衣にことよせてうらなき人を恨さらなむ

前齋院一の君

たまさかに相坂山のまぐすはらまたうらわかし恨はてしな

返し

刑部卿

夏山の下はふくすのうらわかみまたきに露の心をくらむ

四條宮甲斐

うきなから人をつらしとしりぬれはことほりなくも落る涙か

かへし

左京権大夫

かりそめのたえまをさへや恨むへきことはりなきは涙成けり

小大進

つらきをは思ひいれしと思へとも身をしる雨のところせき哉

返し

權中納言俊忠

思はずにふりそふ雨のなけきをはみ笠の山をさしてちかはむ

紀の君

逢瀬をは流れてとこそたのめしかいかにとたにも音なしの瀧

返し

權少將師時

すみ侘る名を流さしとつゝむまにしはしよとむそ音なしの瀧

七日權少將かからしめてたかりけりとそ。

殿上の人々あらましことよみける

くにさね

思ひ侘しなむとなしになけく覽後の世にしもあはし物ゆへ

とおもひ給ふて。今までなからへ給ふるも。いとわひし

や。

たゝのり

人しれす落る涙にしほれつゝ戀にそ袖のかはかさりける

いはてはえこそ。

刑部卿

さらぬたに涙のかるゝわか袖をかなぬらしそ道芝のつゆ

物いとをしと思はぬ心あり。はかなくて。つねよりも。立か

へるそらなくこそ。

としたゝ

新物
三嶋江のかりそめにたにまこも草ゆふてもあまる戀もする哉
は(そい)うつなみの。

もろとき

思ひ侘しほたれぬれはあまの住あしの丸やのけふりとそなる
おほろけにやは。

ためかた

人しれぬ戀は年月へぬれとも打出るけふをはしめにやする
いかにさは。

藏人いへとき

玉たれのこすのまとをく見てしより君に心をかけぬ目そなき

藏人まさかぬ

心こそ思へはつらき物なれや心とものをおもふとおもへは
いまはわか身そうらめしく。

正子内親王繪合

永承五年
四月廿六日

やよひのとうかあまりのゆふくれに。つきかけみすにうつる
をりしも。ひとあまたさふらひて。ものかたりのついでに。たれ
とはなくいひあはせし。はるのひのつれ／＼にくらすよりは。
つねならぬいとみことを。おまへにこらむせさせはや。むかし
よりきこゆる花あはせなとは。ちりてふるきねにかへりぬれ
は。にほひこひしく。草あはせとかは。たつねてもとのところ
かへしやれは。なこりうるさし。さておくらか歌林とかいふ
るより。古萬葉集までは。こゝろもおよはず。古今後撰こそ。あ
をやきのいとくりかへしみれともあかす。もみちのにしき。そ
めいたすこゝろもふかきいろなれとて。左右にをさためつて
驚く。うたゑにかくは。よのつねのことなれは。たいよみひとを
かくへきなり。ことはをとれは。うたはかきにくゝ。うたをえ
るには。ことはあらはれず。かみのこゝろにはめてらるとも。
人のそしりをはのかれたし。いにしへのうたのふかきにそ
へても。いまのこと葉のあさくともあらむは。(きかましちたらん
驚く) 以下。めつらしくやとて。うたみつをそへたり。つらはけり。驚く
以下。鶴。うの花。月。ほととぎす。こそあるへきほとなれと。おほ
とのうたあはせのたいなれは。つるにかへたるなり。女房廿
人を。十人つゝとりわけて。かく人を(各繪かく人を驚く) 以下。つて
つてにたつぬるほとに。うつきのなかはにもなりぬれは。あふ
ひのさかりにひきかゝりて。もろ人いとまなき廿六日に。そら
のけしきくもりなきに。寢殿のひむかしおもてのもやひさし
を。かむたちめのおほむさにしたり。源大納言(時馬)殿。小野宮の

中納言(實中)。左衛門督(實國)。新中納言(俊家)。中宮權大夫(實朝)。右大弁(實長)。左大弁(實通)。三位侍從(實季)。殿上人は。くらへむまのさためしける目なれは。そのところより右のとうの中將(金綱)。つき／＼八人許ひきつれて。まいりたまへり。みすのうちに。は。きたみなみるわきて。左なてしこかさね。右ふちかさね(のきみをなんり侍る尊)。左かねのすきはこにこゝろはして。かねのうの花

きためもやりたまはぬに。殿上人いとみことさためそむるひなるをかちまけは。いみあることになむと。はへりしかは。けにこのゑとも。おほろけにては。見さためかたきことのさまなれはとて。たゝこなたかなたにみたまふ。なか／＼かちまけあらむよりは。みたれをかしくそ。ておもしろかりけり(實朝を以下)みはてたまふて。

左。をのゝみやの中納言。あたらしきうたよみたまふ。

鶴

萬代のかけをならへて鶴のすむふちえの浦は松をこたかきこゝろはへあり。すかたかきりをかしきはしるく。

右。新中納言よみたまふ。

葉かへせぬ松のねくらにむれみつゝ千年を君にみなゆつる哉つゝきなとはおかしときこゆるに。ひたりのひと／＼はかへとあるをなむ。いひなしたまふやうありける。

うの花

左

(後拾遺) みたせはなみのしからみかけてけりうの花さける玉河の里したゝかにきこゆれと。

右

(同伊勢大納言) うの花のさける盛はしらなみのたつたの河のみせきとそみるすゑいまめかしくこゝろありなとはへるは。ゆかぬことにそ。

つき。

左

將。右兵衛佐。かた／＼のさうしとりて。よみあはするほとに。ひたりのかたより頭弁。人々七八人くしてまいりたまへり。かたかたるわしくなりて。一二番かむたちめのおほむなかに。

やとことにかはらぬものは山のはの月をなかむる心なりけりゑのさまをかしくおもひあるやうなりなと。ほめたまふ

に。
右

山のはのかゝらましかは池水にいれとも月はかくれさり鬼
なへてならずや。つゝみもなうほめたまふ。とうの弁みま
さかのかみなと。あまりなるまできこゆ。かくてわたとの
にうつりたまふまゝに。はやくよりふりにけるやりみつ
なれと。こよひあたらしくたていしなとをほめたまふ。か
わらけあまたたひ(數々)になりて。おほむことなとは。はゝ
からせたまへは。大納言との。ふちせとなくこゑとはへり
しに。あまたうちくはへたま(船)しも。おもひふかうきこえ
はへりしほとに。ひきてものゝむまにや。ともしひのかけ
にみゆるけ。ひさかたのつきけならねと。めとまりはへり
しか。かゝることはかたはらいたけと。ゆくすゑもとき
はのまつこのことのはをかきとゝめすは。ちよへむつるの
ふるきあと。たつねまほしきこともやあるとてなむ。

右正子内親王繪合以世尊寺行經卿眞跡摹本書寫假名遣等
雖不審多不敢私改以古今著聞集校合畢

小野宮右衛門督家歌合

精本載在續篇十
五輯上故從省略

同家歌合

左 代イ なそなのりひとたのめなるもの

おほよそにかたはむとはたのめつゝ山時鳥なつくよもなし
右 なそをりものゝさまく

をりものゝあやめもしらすあやめ草さ月の浪や立てきすらん
左 なそ都のほかに水くむところ

すへらきの都の月は見なれにきあかたの井戸に水や汲らむ
右 なそうれしき物のくるしき

あひみるはうれしきものと思へとも人めの關は誰かもあるへき
左 なそあけてかひなきもの

いはと山あけてみれともかひもなし有明の月はなのみ也けり
右 なそふかきはあさき。あさきはふかきもの

執れともわきそかねつるあすからは深さ淺さの定めなければ

群書類從卷第二百二十七

和歌部八十二

顯昭陳狀

春上

元日宴

左顯昭

むつきたつつけふのまとゐや百敷の豊の明の始なるらん

右方申云。むつきたつ。きゝなれすおほゆ。

左方陳云。此五文字。万葉より出たり。

判云。左方む月立とをけるは。右方殊とかめ可レ申とも覺侍らす。万葉にも誠にむつきたちなとよめるやうに覺侍り。但し万葉集より出たり共。歌合の時は無_二左右_一證據とすへしとも覺侍らす。彼集は聞にくきことも有ぬへし。山田朝臣の鼻のうへをほれとも云。酒のみてゑひなきするにあにしかめやもなとは。とり出かたかるへし。されは優なることをとるへき也とそ故人申侍し。又彼集の時までは歌病をさらす。必しも歌合の時は不_レ爲_レ例歟。是は此歌の事にしもあらず。凡申置侍る也。又とよのあかり。宣命に豊明(豊)樂とかきたるとけ見え侍めり。歌の風体にてそ左右侍へき。歌の意趣常の習ひは。まとゐと云ては梓弓を引よせ。とよのあかりなとよまん時は。くもりなき世なとそ詠ならひたる。毎事より所なきに侍へし。

顯昭陳申云。考_二万葉集_一云(第五)。太宰帥大伴卿家宴梅花

歌。

む月たち春のきたらはかくしこそ梅をかさして樂しきをつめ

久米朝臣廣麴歌

十八

陸月たつ春の初にかくしつゝあひしゑみてはときしけめやも

今接。此むつき立のことは。こはくおそろしかるへきにあらす。

春宴尤可_二引用_一か。鼻のうへをほれと云。ゑひなきすなと云る

詞にたくふへきにあらす。又万葉集歌は。大神朝臣興守報囃

池田朝臣歌云。佛つくるあかにたらすはみつたまる池田のあ

そか鼻のうへをほれ。而今判詞に山田朝臣とかゝれ侍。相違

萬葉二侍如何。故六條左京大夫顯朝申されしは。先親修理大夫

顯子に万葉を讀侍し時云。万葉はたゝ和歌の體にて納_二箱中_一

て可_レ持。常披見して好讀へからす。和歌損する者也云々。又後

日俊頼朝臣同様に諷諫仕き。但此兩人。共に万葉の詞を取て

よく詠せる人也。然は此誠極不_レ重也。若心得ず讀は。あしさま

になるへきか。其たくひおほかり云々。尤可_二用意_一事歟。但今の

む月立の詞は。強に其誠に及へからざるにや。又まとゐといは

は梓弓にかけ。豊の明には曇なしとよすへき事。さもいはれて

侍。後拾遺云。

うらやましいるみともかな梓弓ふしみの里の花のまとゐに

但かならずしも不_レ然歟。古今集に。

上
おもふとちまとあせる夜は唐錦たゞましくおしき物にそ有ける
又古歌云。

柳葉のかをかくはしみとめくれは大宮人そまとあせりける
また此歌合三月三日題に。

ちる花をけふのまといの光にて波間にめくる春の盃
とよませ給へる御歌は。梓弓によらねとも。判詞にはことによ
ろしく聞え侍り。爲勝とこそかゝれ侍めれ。歌さまによらは
ちから及はす侍。又とよの明に曇なしとそへよむ常のこと也。
後拾遺云。

まことにや空になき名の立ぬらん豊の明のくもりなき世に
但さらぬ歌も侍めり。催馬樂袁山歌。

袁山のしゝにおひたる玉柏とよのあかりにあふかたのしき
六帖に黒主か歌。

みの山にしけり榮るかみ榊豊の明にあふそうれしき
近は。仲實朝臣か五節歌にも。

乙女子か袖ふり初しをみ衣豊のあかりに絶せさりけり
今按に。和歌は風情にひかれてよりくる所を。ともかくも詠侍

れは。必ずしも。其詞のすちをよみとをさぬ事のみおほく侍め
り。就中元日宴初て被出て侍題なり。それに付て。豊明の初
と云ことを詮にて。讀のせて侍歌なれば。まとゐの秀句も。豊の
明のそへ詞も。可讀ひまは侍らさりき。いはんや。しら波の立
よるとよみ。夏引のいとをしなとそへよむ事は。次の事とこそ。
ふるき人も申侍れ。古今六義の中に。なそらへ歌に。君にけ
さ朝の霜のおきていなはこひしきことに消や渡らん。これそ
其すちの心はへにて侍。その一様にて。其外の外を難すへきに
あらずや。偏執の義とや。世人かたむき侍らんすらん。抑當には

五節のみこそ。豊明とは詠ならはして侍を。日本紀には宴の
字をとよのあかりとよみ。古語拾遺には。神樂のおこりに付て。

宴樂と書て。とよのあかりとよみ侍うへに。元日の節會の宣命
に。とよの明きこしめす日とかけり。所謂本朝月令云。延暦八年

正月一日祿法命詔之。今日正月朔の豊明開召日在也。又雪も零
て時も寒く在故。是以御酒を会へ。惠良支退豆奈良卒被賜と

宣。是のみならず。白馬踏歌。重陽新骨。是等の節會ことに。皆
とよのあかりと書り。或は豊明。或は豊樂と書り。されはとよ

のあかりとは節會を申也。評定以前此愚歌事披露仕て。僻事詠
たりと云沙汰侍けり。評定の座にも。右方人々此事一切不知案

内と侍しかは。宣命の證をは出申侍にき。其後落居して侍にこ
そ。めつら敷讀りなど。感歎せらるゝ人も侍けるよし承及侍を。

とよのあかりとは。宣命に豊明豊樂と書たりとは。見え侍めり
と侍も。とよのあかりと云文字の沙汰のやうに聞え侍り。打任

ては。以新骨會一號豊樂宴一と書て。侍事有。其故に五節の節會
をこそ。豊明とは申ならはしたれと。皆節會を豊の明といへり。

元日節會に付て。さまゝの風情とも讀れたるの中に。別にもと
めたる所なく。豊のあかりのはしめとは。うるせく思よりて侍

は。少々ふしはゆるされ侍なんとこそ思ひたまふるに。まと
ゐにつけ。とよのあかりの詞にかゝりて。さまゝの吹毛の難

義付られて侍こそ。かへりては有興て思給侍れ。

餘寒

左顯

昭

しからきの外山は雪も消にしを冬をのこすや谷の夕かせ

右方申云。左方歌無難。

判云。左しからきのなといへるより上句は。たけ有て聞え侍る
を。谷の夕風としもさしたるこそ。朝は今少もさゆらん物を。是

はた、谷の風と云へかりけるか。文字のたらはて。夕を添て夕しもやと聞え侍るにこそ。さらば。た、谷の岩陰と云へかりけるにや。

顯昭陳申云。餘寒と云題にては。朝にも暮にも。夜にても晝にても。其心たにあらはさても侍なん。猶朝の寒事は。常の事も。春風は。春の空なから。さすがに冬の名残覺ゆるうへに。萬葉集（第十）に。戀つゝもいなはかき分家居せ（下）はともしくもあらし秋の夕風と侍る。よまほしき詞にて詠也。谷風と云に。文字のたらねはとて詠せたるに侍らす。此万葉の歌ならては。ふるく夕かせとはいとも詠侍らす。但谷の岩陰とよみたらんも。とかは侍らし。餘にさしつめてや侍らん。此歌にとりて。谷の夕かせと谷の岩陰といつれまされりなと。世人に問合せられ侍へし。同様ならは作者とかなし。和歌才學とは是等にて侍へき也。

若草

右信 定

霜をきし去年の枯葉の残るませにそれ共見えぬ春の若草

左方申云。右歌腰の六文字きゝにくゝや。

判云。こそのかれはの残るませにそれとも見えぬ春の若草といへる。いとおかしくこそ侍めれ。五文字六七文字は常事なり。始て不及難歟。抑左方人。腰句何句を稱申哉。稱「腰句」は。四

韻詩第三對句也。和歌に有「稱」腰折事上は。中五字と。下七々離別せるを云也。是等未得の故也。又云。世間和歌腰句何所乎。中五字計は。腰胸不分明事也。中五字を爲「腰者」。殊外に上六寸也。和歌式に。准八病蜂腰鶴膝なと申事は。また同字有「三歌蜂腰」。同字有「四歌鶴膝」なとゝこそ申めれ。腰句たゝ。韵詞の謂也。

是非「歌事」雖爲「無益」。時時如「此」謂置者。此道亂逆也。仍所「咎申」也。

顯昭陳申云。此番左右雖「非」愚詠。以「第三句」。稱「腰句」事。爲「左方難」之故。評定之時。定申歟。仍所「陳申」也。考「參議」演成卿式云。查「舛」有七。中亦有「頭無」尾。腰已上爲「頭」。第三句爲「腰」。腰以下爲「尾」。四五等句是也。又「雜舛」有「十」。中六頭古腰新。以「古事」。陳「發句」。以「新意」。陳「三句」。是爲「雅麗」也。以「古事」。陳「於初句」。故曰「頭古」。陳「新意」者於「三句」。是故曰「腰新」。七頭新腰古。以「新意」。陳「發句」。以「古事」。陳「三句」。云「八頭古腰古」。第一句陳「於故事」。爲「頭」。第三句陳「於故事」。爲「腰」。頭並腰陳「於故事」。故曰「頭古腰古」。已上件式略注「進之」。然者左方人「以」第三句。稱「腰句」。已存「式文」。可「謂」道之興隆。何爲「道亂逆」乎。以「第三句」。稱「腰之時」。上六寸之條爲「和歌之本舛」歟。何始改「其姿」乎。

同題

左顯 昭

あれぬれはなはたつ駒をいかにして繋きとむらんのへの初草

右方申云。左方歌。詞花集俊惠歌云。

まこも草つのくみ渡る澤邊には繋かぬ駒も放れさりけり其心同じきうへに。なはたつをふしにしたる。それも耳に立様也。

判云。左歌。俊惠法師歌に相似之由。右方申云。かやうの心は。さらても常事也。但平貞文か歌に。拾遺に。たゝにはよらて春駒のつなひきするそなはたつとときと詠せるは。女によせて名立といへる也。是は偏に繩を斷と云る。尤凡なるにや。

顯昭陳申云。考「萬葉」（第廿）云。

うまやなるなはたつ駒のをくるなへ妹がいひしをゝきて
かなしも。此歌を思ひて。貞文か女によせて。名は立と詠
せる成へし。たとひ万葉集の歌をしらすとも。風情自然に
相叶歟。然は万葉集の本歌を思ひてよまん時は。女によせ
て名は立といはすとも。たゞ繩を斷駒とよめらん無レ失
歟。何をさへて尤凡也と可レ被レ定手。万葉の詞何ぞ可レ凡
乎。又俊惠歌。つなかぬ駒はなれず。今按は繫留らんと云
り。つなく詞頗かよへる事也。強此歌の宗とのふしとは不
レ存也。

春中

野遊

左顯 昭

若菜つむ野邊をしみれはたか取の翁もむへそたはれあひける
右申云。左歌打任せては。竹とりとこそ。申なれたるを。た
かととりといへる。させる證のあるか。

陳云。たかととり。竹とり。兩様に万葉點したり。隨又堀川院
百首に。師時卿歌にも。たかととりとよめり。

判曰。左歌竹取翁事。たかたけは兩様に申成へし。然るに此
翁にとりて。たかととりと云けりと云證據そ有へきを。万葉には。
たゝ詞に。昔有_二老翁_一號曰_二竹取翁_一也。此翁季春之月登_二岳本_一
遠望。忽值_二華美九箇女子_一。百嬌無_レ儔花容無_レ止。觀之といへり。此
事を今野遊歌に詠せる。可_レ非_二無_二由緒_一。但万葉集に兩様に點
したる由。左方人中云々。彼集は源順か和せる後。假名は付來る
也。而彼順か點本于_レ今難_レ傳。たかたけは。以_二誰人點_一可_レ爲_二
指南_一哉。師時卿說以同然也。隨件翁并九女子等歌中無_二竹字_一。
只詞計也者。順定不_レ加點歟。凡兩樣稱之條は。たけは普通之

說也。たかは笠字を陽唐韵にもたかむらと號て侍める。然は
打任せては。たけよろしきにや。但何れにても。此歌の風躰こ
となる事なきうへに。翁もむへそなと云る。委詞非_レ可_二庶幾_一
歟。

顯昭陳云。万葉集竹取翁事。たか取たけ取兩說也。万葉にも
兩點侍り。但堀川院百首懷舊題に。中納言師時卿の歌に。春
をかにのほりてみけんたかとりこのここのこらのこらを
しそおもふとよまれて侍れは。堀川院御前にて令_レ講御歌
に。彼人たかととりとよまれて。別の難も聞え侍られは。其
說に付て詠せる由申畢。たけとりとは詞計にて。彼卿の歌
程の證據もきこえず。又證歌もえいたされねは。如_二只今_一
は勝頼さし侍るへし。たけとりとよまれたらん人にこそ。
證據も尋申さまほしく侍れ。可_レ有_二影迹_一。但判詞には。万
葉は順か和せる後。假名は付たれば。和歌計こそ和した
れ。竹取は詞也。兩說の點不_レ可_レ有_二之由侍る如何。順万葉
の歌計を訓して。詞を不_レ訓とは誰人の定侍りけるそ。
詩歌文書詞にも作者の名にも不_レ審あれば。勘讀常事也。萬
葉中已有様に文筆尤可_レ被_二點置_一也。所_レ謂無常悲歎等の
詩四首并序。松浦の仙媛。佐用磯面。大伴熊凝。反憂情。梧桐
日本琴歌等序九首。櫻兒。櫻兒。草持娘子。竹取。浦嶋子。荒
雄。苅城王。石川女郎贈大伴田主。婦人獻_二新田部親王_一歌。
井不_レ知_二姓名_一の人々歌の傳は十六通。贈答之帖十三通。
沈病自哀文。教諭の文。鎮懷石の記等三通。已上皆有_二點本_一。
又順たとひ詞をよますとも。後人詞に假名付ましと云儀
やは侍へき。又順か自筆に點したる本を見たると申さは
こそは。于_レ今難_レ傳とも侍らめ。又順か自筆の本も。世に

侍らんもかたからず。村上御時年紀不_レ幾。只見及はぬにてこそ侍れ。大形は如_レ此書籍。家々重書等も炎上の爲に。空煙滅しぬる事こそ悲しく侍れ。以後自筆本不_レ侍とも。移_レ點の本侍は同事也。内外傳書籍も此定也。翻譯三藏の眞筆も。制作論師之正本も。世に不_レ留事侍れと。展轉書寫の功によりて。點本も世にあれば。其に付て受習して。智惠をひらき侍也。又故師時卿の説同前也とは。いかに侍にか難_レ心得_レ彼卿たかとりとあしく被_レ詠て侍らは。それに増りたらん人の。慥にたけとりと詠たらん事を出してこそ。たかとりと讀るをは捨られ侍らめ。哀只万葉に兩説あなれば。何れにても有なんとて侍らはや。他證の慥にたけとりとよめるはなくて。万葉の兩説をは不_レ被_レ用の間。煩はしくこそ聞侍れ。詞計にてなすことは始終通りかたく侍は。これは若かくや姫の物語に付るゝか。其は別事也。又故人の申されしは。万葉に順かよみ殘したる歌の中に。少少匡房卿敦道因なども。讀加へたるよし侍き。それも順かわるきにあらず。五千餘首の短歌長歌等を讀解ほとに。事繁して自然に讀落せる也。後人必しも順にまさるへきにはあらねとも。かれかよみ置たる歌ともに。才學付て。讀添たるにこそ侍めれ。愚なる心にもさよと見ゆる事とも侍者なり。

雲雀

左顯 昭

はる日には空にのみこそあかるめれ雲雀の床は荒やしぬらん
右申云。上五文字。中五文字ともに聞にくし。

列云。初五文字。實に不_レ宜敷。凡は雲雀の子細。をのれか心ならす空にあかりて。床をあらしなとするにはあらざるへし。春

に成ぬれば芝生なとに子をうみ置て。夜はあたゝめ。春日のうらゝかなければ。空に(鶯)あかりて是を見くたし。またおりのほりなともする物に侍也。されは床を荒しやしつらんかと云へからぬ事なるへし。

顯昭陳申云。先右方難に。上中五字ともに聞にくしとある。人の心不同なれば。さも思はれなん。とかめ不_レ可_レ申。但初の句に春日と讀る古語也。万葉(第十九)に。うらゝにてれる春日に雲雀あかり心かなしもひとりし思へは。此歌などをおもひて詠侍りけるにや。又後撰に。

春下

春日さす藤のうら葉のうらとけて君し思はゝ我も頼まなかやうにも詠置て侍れは。初句の春日。あなちにとかなくや。第三句はさきの歌にもひはりあかりと侍り。大かた雲雀をはあかるとよみ。水鶏をはたゝくと讀。鳴をは羽かくとのみ詠習はして。鳴なとは打任せては讀ぬ事なれば。第三句とかなし。此難はきはめたる小事也。不_レ及_レ沙汰一敷。されと判者も。實事をたゝし。力を入て被_レ難て侍れは。存る所を申侍る也。やまと歌の習ひは。風情を先として。實儀をたゝさぬ事おほし。春は空にのみあかりて見ゆれば。雲雀の床やあるらんと讀る。あらましことは。さのみこそ侍れ。さのみ實事をたゝさは。子を見くたさんれうに空にあかるとの給せたることも。さやは思ひ侍らん。雲雀の心も知かたし。草むらにあらん子を見くたさんれうならは。餘りに空につきて。あからても侍れかし。古今歌に。

青柳をかた糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花かき
是も鶯實に梅のはな笠をぬはねとも。にせことにぬはす

るなり。

春たてと花も匂はぬ山里は物うかるねに鶯を鳴

是も花さかぬ山里とて。鶯よも物うけにも鳴侍らし。やよ

やまで山時鳥ことつてん我世中に住わひぬとよ。世中わ

ひしとて郭公にことつてせんことも有かたし。又誰にこ

とつてもすへきにか。秋くれはのもせに虫のをりみたる

聲のあやを誰かきするらん。はた織と云むしに付て。こゑ

のあやを人にきする也。實をたゝきは正躰なかるへし。

水鳥の下やすからぬ思ひにはあたりの水もこほらさり鬼

みつとりの下やすからぬまでは。いはれたり。水の氷せぬ

程の思ひは難し知。かやうに心なき鳥獸にも。人のふるま

ひ思ふ心を付て詠來れる也。はしめておとろくへからす。

又和歌には判口おほし。

我せこはたまにもかもある時鳥聲さへぬきて手に任せゆかん

戀徒て音をのみ鳴は敷妙の杜の下に螢を釣する

おもほへす袖に涙のさはく哉唐船のよりしはかりに

然は。和歌に法令難するは口惜事とそ。法性寺殿は常に仰

られ候由傳承侍りし。

春曙

此世には心とめしとおもふ間に詠そはてぬ春の明ほの

右方申云。春の曙とをく。いさゝか無念也。題に春曙と出

なほ可し思也。

判云。右方人曙無念之由申。不し可し然歟。題は結題を多はまは

す文字の可有やとこそ申なれ。況乎春曙なとは。あらはにい

はさらん。かへりて不知三子細に似たるへき事也。於歌は。ま

にの詞。實に不足に聞え侍也。右をこそまさと申侍らめ。顯

昭陳申云。判詞にまにの詞。誠に不足に聞え侍如何。宜歌

ともに多讀れて侍めり。拾遺に。

白波のうちやかへすと思ふ間に濱の眞砂の數をすもれる

此御歌は。やかて腰句に。思ふ間にと。如し今をかせ給へり。

後撰集に。

こふるまに年の暮なはなき人の別やいとゝ遠く成らん

古今集に。

惜らん人の心をしらぬまに秋の時雨と身そふりにける

後撰集に。

物思ふと過る月日をしらぬ間に今年もけふに成ぬとか聞

同集に。

名のみして逢ことなみの繁き間にいっか玉をも螢もかつかん

但年來諸撰集にいれる故に。此まにの詞を。不足の詞共知

侍らさりけること。我なからもいとゝ口惜侍り。同詞なれ

と人に隨歌によりて。わろく聞ゆることも侍哉覽。金葉集

に。

春

こそみしに色も替らず咲にけり花こそ物は思はさりけれ

此歌は。後三條院うせさせ給て。諒闇の年。圓宗寺の花を

みて讀り。世人も宜と申ければ。後拾遺の時。通俊卿の許に

參して。まかり入侍らはやと望申けるに。彼卿度々詠て。

宣けれと。花こそと云詞の置やうこそ心ゆかねと侍けれ

は。物も申さて立侍にけり。侍共のゐあひて侍ける所によ

りて申けるやう。四條大納言殿御歌に。

春きてそ人も問ける山里は花こそ宿のあるし成けれ

と讀給へる歌は。彼大納言殿の第一の秀歌とこそ申侍に。

春の下

蛙

左顯 昭

花こそと云詞は。只同所に置いて侍を撰集承はらせ給はかり(な)にては。いかにかゝる僻事をは仰らるゝに。此一にて万こそをしはかれ給へとて出侍にけり。同詞なれと。人によりわろく成は。定れる事なれば。初て可レ申にあらず。

山吹の匂ふ井手をはよそにかひやか下も蛙なく也

右申云。かひやかした。春よまれたるいか。朝霞かひやか下に鳴かはつと云本歌は。万葉の秋部にこそ入たれ。朝霞とをけるは春にかきらす。秋も霞よめる事。万葉集にもおほく見ゆる歟。陳云。蛙の題。ふるき撰集にも。歌合にも。近世も皆春題に詠也。かひやか下に鳴かはつと讀るに付て。蛙の題にかひやよまん事。有ニ何難ニ乎。又難云。かひやを春よまん事を疑申也。又陳云。かひやと云こと。様々の儀有。其中に。田舎にこかふ屋をかひやと云。其下に蛙こをくはんために。おほくあつまる也。土民も是をかひやと云なりと申き。其儀不レ可違。右又難云。此儀ならは。こをかふ事は四月よりの事也。然は猶春に不寄也。又陳云。かひやは。つくりつれば。いつもさてをく物なれば。春もなつ事も。かはつ其下に鳴てん。こをかふ事。又三月にも皆する事也。然は不レ可レ有ニ相違ニ歟。

判口。左歌かひやか下に蛙鳴事は。打任たることを。かひやか下もといへるもの字。こと新しく聞ゆ。又かひやも。春よめらんやなど。これらをたにおほつかなく承る程に。此左右の問答の狀

こそ。勿論の事と見え侍れ。先かひやか下の歌は。萬葉に二首見え侍をこそ。指南とはすへきことにて侍れ。其歌一首は(分)朝霞かひやか下に鳴蛙聲たにきかはわれこひめやも。是第十卷秋歌内也。今一首は(分)十六朝霞かひやか下に鳴蛙忍ひつゝありとつけんこもかも。同第十六卷内也。此等の歌の心は山田の庵に田を守子等。本の住宅を離居して山中に令レ居之間。蛙の聲を聞て。別居のなくさめとせる心。相聞の歌也。又かひやと云心は。彼庵の下に。火をくゆるらかし。煙をおほからしめて。或令レ拂ニ染蚊。或令レ去ニ猿鹿一也。然は於ニ政施一者。縦雖有ニ兩義。至三子煙炎一者可レ爲ニ一決一者。而近古之輩出ニ異說ニ云。河のよとみに木を入ひたして。樛と稱は舊事也。其上に屋を構たるを。かひやと云也と云々。是尙謬說也。而今問答には。春時田舎に蠶をかふ屋を稱ニ飼屋一也。其所蛙聚來食レ蠶也云々。此儀不レ足レ云歟。蠶飼の屋をは蠶室とそ申侍。是則俊賴朝臣の書て侍る物にも。玉箒のことを云る所に。春初子日。玉箒をもて蠶室をかき拂ひ祝初る也と云り。凡蠶飼の比は。正月初子日。午年生ける女子をかひめと稱して。蠶室をかき拂ひ祝ひ初る也。次二月午日。始て蠶の胤を出して。暖日にあたゝめしめて。三月午日。初て桑につく。四五月まゆをひく時とすと云々。如レ此土民所ニ貴重ニ之蠶室之内。何無ニ其用。蛙を令ニ聚入ニ云々。可レ令レ施ニ與蠶ニ乎。況蠶養之家中。全不レ可レ驅。潺湲更不レ可レ滿。池沼蛙何因可レ令ニ寄住ニ乎。凡蝦蟇は。本自荒所ニ水邊に寄住者也。然は晋惠帝。養を聞しも華林園と云り。橘清友か蛙を詠せしも。ゐての里をさせり。漢家本朝養之鳴所。皆田園水澤也。先万葉集の歌は。山中の田の庵香火屋か下。蛙鳴事尤相當也。朝霞と云るも。夜煙の淵際に聳たる。朝霞の山の腰にめくれるに不レ異。

仍被歌等尤相叶者也。右方人蠶桑春時之條は不_レ可_二難中_一歟。た_レ飼屋を可_二難中_一事也。左方申旨何土民之境風乎。尤可_レ有_二停止_一之義也。

寄煙戀

右寂 蓮

山田もるかひやか下の煙こそこかれもやらぬたくひなりけれ
左申云。かひやに山田もるといはいんいか。陳云。かひやと
云は。鹿火屋と万葉にかけり。其上に山田に鹿を寄_レせし
れうに。紙なとくさき物ともをとりてやくを。雨にぬらさ
しれうに。舍を作り覆也。是をかひやと云と。土民も申き。
已万葉集の書様に相叶たり。又難申云。堀川院百首水歌に。
春宮大夫ふしつけによみ。敦睦も蚊火の部に入たり。先達
の所存かくのことし。万葉に鹿火香火と書て無_二定儀_一。飼
と云文字を訓せん料に。如_レ斯書歟。一片に鹿火とは不_レ可_レ
定歟。又陳云。先達も慥證をひかれは難_二信受_一歟。又朝霞
と定てつ_レけたるも。鹿火の烟などの。つとめて霞わたり
たるに似たるをよめるにや。又人丸集に。かね山かひや
か下に鳴蛙とよめり。然は山田に可_レ讀と見えたり。
判云。有。かひやか下の煙は。兩方問答に見えて侍へし。此歌難
陳米_レ及_レ承し。先に春季の歌にや。蛙の所にかひやの事は委
しく記申侍にき。かしこく。今の問答にいと無_二相違_一申侍
りにけり。但此有方。戀はこかるゝこそ常の事なれ。こかれも
やらぬやいかゝと覺侍れと。かひの事所存にいとまたかはす
侍めり。

顯昭陳申云。先此かひやか下に。鳴蛙とよめる歌は。判者
前春の蛙の歌時。如_レ被_二注出_一。万葉に一首侍り。共に朝霞
かひ屋か下に啼蛙と讀て。かひやとは何事を云とも見え

侍らす。然者今の愚詠にも手をいたして。その事ともよみ
あらはし侍らす。只古詩歌のおもむき。蛙の鳴を待て。歎
冬の咲とも見えたり。又山吹はむねと井手に詠ならはし。
又蛙をもゐてになかせなとして侍れは。歎冬の匂ふ井手
ならねとも。かひやか下もかはつなくと歌によみて侍也。
其古歌に。

澤水に蛙なく也山吹のうつろふ影や底にみゆらん
蛙なく神なひ河にかけみえて今や吹らん山吹の花
なかく行蛙鳴也足引の山吹の花匂ふへらなり
歎冬詩

養得昔令_レ扶_二雀病_一。開來本是侍蛙鳴。而今寄煙戀の右歌
に。山田守かひやか下の烟と讀り。已是秋歌の心也。仍兩
方かひやの事可_レ申の由。評定の時一々勘得たる義は侍ら
ねは。古義共を少々出申。一には公實卿堀川院百首。氷の
うたに。ますらをかもふしつかふなふしつけしかひやか
下は氷しにけり。是はふしつけにかひやと云事侍るか。ふ
しつけとは。江川のぬるみに柴を切付て。魚をつとへて。
是を取。其上に庵を構て。田の庵などの様に。葦葦などを
打かけて下をくもらせ。又上より來ぬる鳥をふせき。くひ
物を打散して魚をかふかゆへに。其屋を飼屋と云と。田舎
土民等あまた申せり。奴誰かかひや。彼かかひやとて。所
を定て有とそ申。万葉集に。かひやか下になく蛙とよめる
は。おほつかなきに。春宮大夫の。ふしつけしかひやか下
とよまれぬれば。土民か説に相叶へり。定て其子細を體に
聞てこそはよまれ侍りけめ。非_レ可_レ疑。古き遺戸などをも
上にうかけたり。或は上の覆はなくて。下には板敷のや

うに。竹柴小なとをすのこの様にあみて。其上に藁こもなとを敷て。まはりには填の様にすを立て。其上にくひ物を置て。魚ともをあつむ。其廣は一間ばかりも有。其より廣も有。扨を付けて。陸なる木なとに結付て。魚集りぬらんと息ふ時に。集りて引あけてとる。それをば。やなと名付て。やなひくと申事も有と申。又かの屋をは。或はかく屋とも云。或はかふやともいひ。或はかやともいふ。所に付て。構様もかはり。其名も不同也。されとおほやうは。かひ屋の儀なり。常にふしつけとて。略てするは。たゞ柴竹などを岸近き所のよとみの便有に切つて。魚をあつめて。すを立まはしてとるなり。念比なるとおほしきそ。所に枕打立て。それにしからみかきなとして侍める。其を見さらん人の。かひやの様をも不_レ知。かひ屋と云名をも不知して。疑おもはんは。尤理りに侍り。猶々所々の土民に尋聞てそ。實とも信せられ侍らん。

一には敦隆か類聚萬葉集には。このかひやか下の歌二首と。并に(万十)(新古今)足曳の山田もるをの(庵)おくかひの下こかれて(う)や我戀をらん(う)此歌と已上三首をは。蚊遣火の歌に入たり。然らば此かひやと申は。鹿火屋と云。香火屋とは書たれ共。ともに蚊火屋と存たりと心得られては侍り。敦隆も博覧の者にて。万葉集よく()料簡して部類すはかりなれは。廣く尋勘(へ)てこそは。蚊火とも定侍り。肥後大進忠兼と申侍し歌讀は。通宗(家)朝臣か外孫隆源阿闍梨か外甥也。和歌の才覺たて侍りき。小童にて侍りし時。かひ屋なとそと尋侍しかば。蚊火屋也と答侍りき。其上に尋云。蚊遣火は賤か庭なとになつる物也。

その賤の屋を。別にかひやといはん事いかゝと申侍しかば。山田などの虚の邊にたつれば。それか下に蛙の鳴を。蚊火屋か下に鳴蛙とはよめるなりと申侍き。但万葉に。鹿火とも書。香火とも書たるは。彼集は正字を書ぬ事も有。或は一所には正字を書共。又別(う)にはあて字を書事もあれば。大事ならずと申侍しは。偏にこの敦隆か類聚万葉の心にて侍り。其時は此書を不_レ見侍しかば。偏に忠兼か義と存して罷過をはりぬ。此儀も。さまてのとかはなけれ共。猶春宮大夫ふしつけの儀に違侍歟。一には田舎に蠶養すとして別の屋を作りて。人も不_レ居して。春に成て。こかひをする屋をは。こやと申國も有。又かひやとも申。こかひする故也。かひ屋か下とは。其屋の下か。それも蛙鳴てんやと尋侍しかば。其下にてみせせゝなきなともあれば。蛙住て鳴事一定也。且は蠶の落たるを食し侍りと。土民等申侍し上に。又和歌道に心得たる人の。山陰道のかたへ下向して侍けるに。慥に其かひ屋を見たるよし申侍き。然は万葉のかひ屋は。件のかかひの屋をよみてはや侍らんと申侍しも。是猶ふしつけのかひ屋には不_レ可_レい及歟。此等の儀を少々書上侍しを。本舂所執のふしつけの義をは略して偏に此かひやの儀を旨として。委被三注載之間。判者も力を入(れ)て委被難て侍。已_レ以本意相違也。尤遺恨事也。於_レ今者田舎蠶養之次第甚以無益歟。但判者詞に。蠶養屋中に遣水の池を湛て。蠶を令_レ栖て。蛙をくはすと侍そ。利口と作_レ申。以外沙汰にて侍る。側女か所爲物狂の至歟。たゝわさとならねと。屋中軒邊にみせせゝなきなとに。蛙鳴し事不_レ可_レ難歟。又蛙の鳴所は。田圃水澤と被_レ定たる勿論

也。されと又後撰には。我宿にあひやとりして鳴蛙。夜に
なればや物はかなしきと。詠て侍める。況人も居さん蠶
屋に。蛙の鳴ん事は打任せたる事也。漢家の花林園。山城
の井手里まで不_レ可_レ被_レ尋。抑此等之義外にめつらしく出
來は。右方歌の鹿火屋の儀也。判者も被_レ同申たり。尤心に
くし。其判詞に。山田の庵に田を守_レる_レ子等。本の住宅を離
居して。山中に令_レ居之間。蛙の聲を聞て別居のなくさめ
とせる心。相聞の歌也。又かひ屋と云心は。彼いほの下に
火をくゆらし。烟を多からしめて。或令_レ拂_二衆蚊_一。若は令_レ
去_二三餘鹿_一也。然者於_二于蚊鹿者_一。縱有_二三兩儀_一。至_二于炎烟_一
者可_レ爲_二一決_一矣。云々。今按此義已爲_二金言_一。年來蒙霧且
以散之處。猶所_レ殘云々。疑不_レ可_レ不_レ決。山田廬下に火を
くゆらして拂_レ蚊は。已敦隆か蚊火の儀にこそ侍なれ。然
者只其定にて可_レ侍を。鹿火屋と書ける文字に付て。くゆ
らかす火に兼て令_レ去_二三餘鹿_一と侍條いか_レ侍へかん。其料
に蚊鹿はたとひ有_二三兩說_一。共とは被_レ書歟。蚊鹿相兼之義一
宜_二云_一。兩端極以不_レ被_二三庶幾_一侍り。又蚊火の山田のくろに
くゆらんによりて鹿難_レ去歟。狩人の山に鹿をあさふと
て。よひより立こめて方々に火を焼て。を_レとさけひをを
をは。あくむといふ。それにこそ鹿はおそれて。いつちへ
もはたらかぬを。鹿のたちと見ゆるほに。夜明て案内者
鹿をおこして。便にしたかひて射付侍なれ。蚊遣火のくゆ
らんに。鹿は_レかりをなして。立去ん事不_レ可_レ侍。只蚊火
屋といひて。鹿火屋と書たるは。文字をとかく書替る事。
万葉の習ひとて。敦隆の儀の定にて侍らんは。煩なくて宜
侍なん物を。又山田のくろにくゆらん夜の煙の。山腰潤際

にたな引まはりて。朝の空に霞と見えん事甚不_レ可_レ有事
也。炭竈もえは野火の煙なとこそ空にたな引て。霞にはま
かひ侍らめ。又蚊火は夜こそくゆり侍らんすなれ。後朝にた
なひかんする烟の。霞と見えむを思ひて。かねて朝霞とつ
つけよまん事は。次第あたり侍らす。さらは蚊火屋の朝か
すみとそ侍_二申_一へき。又朝かすみかひやか下に鳴蛙。とつ
つくる事は。蛙のなく朝の。打かすみたる景氣也。朝の霞
は夏も秋もよめり。万葉の習也。秋相聞歌には。秋の田の
ほの上にきりあふ朝霞いつくの方に我戀をらん。夏雜の
歌には_二第十朝霞_一たな引野へに足曳の山時鳥いつか來なか
ん。此等かひの烟なられ共。朝霞とよめり。又此朝霞かひや
か下の歌二首か内。第十卷の歌は。秋の相聞に入。相聞の
歌は。いかなる題にも。戀の心によせて詠する。常のこと
也。必しも山田守らんするもの_レ本宅を離れて。山中に居
て蛙の聲を聞て。心戀る故に詠し侍るへきにあらす。又山
田守はかりの賤は。歌によまんことかたくや。彼玄賓僧都
の南都を去て。備中國にて山田守て世をわたるとて。山田
もるそうつの身こそかなしけれ秋はてぬれはとふ人もな
し。とよめるは別事也。然はさきにも出して侍る第十卷蚊
火歌には。山田もるをををくかひのといふ歌は。これも
寄物陳思とかけり。田守か自詠にはあらざるへし。上には
山田もるを_レあけ。下に我戀を置は。よむ人の詞の定に置
るなり。相聞の蚊火歌。只同事也。又此歌寄_レ蝦事也。又此
歌の心は。戀しき人の聲をたにきかは。かくは戀さるへし
といふ也。朝霞かひやか下に鳴蛙とは。聲といはんれうな
り。されは蛙のこゑを聞て。戀を戀るにはあらす。次の歌

も鳴蛙の音もせぬ忍心也。それかやうに我戀忍心を思ふひとに掛はやと讀る。此等相聞の心也。又十卷に詠露中に。秋田守かりいほつくり我をれば衣手寒し露を置ける。此歌我をればとよみたるは。賤か詠する共可し思。されと今の人も田家歌を詠には。皆我山田を守。なるこひき。ひたうちてこそは讀ことも侍れ。賤かよめる共難し定。又かひやか下に鳴蛙とは。打任せたる事を。かひやか下といへるもの字。こと新敷聞ゆと侍る如何。かひやか下に鳴蛙と云歌は。万葉に二首計也。それすら猶上三句は同事也。下二句は又同舛の戀の歌なれば。ひとつ歌の末句。詞のすこしかはりたればとて。別の卷にかけるかとも可し申。井手の蛙の歌こそ。かく打任せたる事にて。いにしへ今の歌おほく侍れ。仍井手の蛙に對して。かひやか下も蛙なけりと詠して侍り。又右方作者の義は。かひやとは。鹿火屋と万葉に書り。其上に山田に鹿をよせしれうに。かみなとくさき物ともをとりて焼を。雨にぬらさしれうに。家を作り覆を。かひやと土民も申きと被書たる。然は判者の被し書儀とは大きにたかへり。判者の儀は。かひやとは山田の鹿也。いほにて田をもるに。蚊火をたて、蚊を拂。又其火にて鹿をも令し去と侍り。其屋の義也(イロ)。相違也。又かひも是鹿火と云とれり。判者は蚊火と鹿火と相兼られたり。鹿火と云方はさるかたに似たり。蚊火といふ方はたかへり。屋の儀は大に違を。今の問答に。いとも無相違之様に。かしこく申侍りにけりと被し書たる如何。大かたは。一門の儀は。一筋にとをりて侍らはこそ。心にくも侍らめ。又如判者之儀蚊と鹿と相兼は。かひやの聲をはいかゝさ

し侍るへき。蚊ならは上聲也。鹿ならは平聲也。評定の座に。右作者も蚊鹿混雜しけに侍しを。此定に難を仕侍りき。其問答は不被し注載之如何。又付右方作者之義。大和國土民等折々相尋之處に。秋田邊に鹿毛などを焼て。鹿をよせしとましなふ事侍れと。其火に鹿の恐れてよらぬ程のこ侍らすと。申あひて侍如何。國々にかはれりといはぬ上には。いよ／＼不審也。又此かひやか下に鳴蛙と侍歌には。秋にしも蛙の歌あまた侍り。秋部歌中に。

寄蛙

万十
みよし野のいは本さらす鳴蛙むへもなきけり川の瀬ことに

同
神なひの山下とよみ行水に蛙なく也秋といはんとや
草枕旅に物思ふ我きけはゆふかたまけて鳴蛙かも

詠川

同
暮さらす蛙鳴也みわ川の清き瀬の音きけはかなしも

此歌共。皆以第十卷秋雜の歌に入たり。神なひの歌の外は。秋とよめる詞なけれと。惣して蛙を秋の相聞に入たるも。かひ屋か下にはあらず。蛙の故也。又第十卷を第壹卷と書れたること。あやまてるか。又秋相聞歌の中に。

寄蛙

朝霞かひやか下に鳴蛙(如明)

又寄鹿

万十新體三
樟鹿の朝たつ小野の草わかみかくろへかねて人にしらるな
樟鹿のをの草ふしちしるく我とはさるに人のしるらし

今按に。たきの鹿火屋か下の歌。鹿の火をよみたらは。此次にわ／＼寄鹿歌の中に尤可に入加一賦。題も寄蛙と書。たゝ

鹿の義なければこそ。別に蛙の歌には入て侍らめ。又右方作者云。人丸歌に。こかね山かひ屋か下に鳴蛙とあれば。山に山田は便あり。ふしつけの義にあるへからすと云難侍りき。陳云。世間流布の人丸集は。不レ慥之由存侍り。其故は人丸歌。萬葉集に□餘首入たり。先其歌。大旨皆入ての上に。万葉の外の歌共をは可三入侍一也。而万葉集歌は殘かちに侍めり。それはさる事にて。年來人丸集數十本窺見侍りしに。一本にてもこかね山の歌入たる本不三見給一。又下句はいかに侍にか。證文に被レ引計にては。なと一首なからは不レ被三書載二乎。慥可レ承也。其故は万葉集に。金^{カネ}山^{ヤマ}舌^{シタ}日^ヒ下^{カサダ}になく鳥の聲たにきけはなとなける、と云歌あり侍イ。初五文字の句を。或はかな山のと讀。或は秋山とよめり。此歌をかひ屋か下と書。鳴鳥をなく蛙と書なしたるにや。かゝるためしおほかり。万葉集歌をは。すゑくにとかく書なしたる也。たとひ所見せはくて。こかね山の歌。人丸か集に侍らん本を見及す侍にても。猶此歌は難三信受一歟。又可レ注にても。山には山川ある常のこと也。河にはふしつくる事あれば。ふしつけのかひや便侍り。山田はある所こそ侍れ。こかね山は何所に侍そや。彼山を尋て。山田にこそ山河はなし共可レ被レ定事なれ。是は責ての儀に侍り。此こかね山の歌甚以不審也。前にも申侍様に。春宮大夫。堀川院御前にて。令レ講給百首に被レ詠て。別に僻事と云難有共聞侍らす侍れは。ふし付のかひ屋。慥の儀にて可レ侍。且彼すゑくの閑院の一家。大臣公卿を初て。當世迄に此道の繁昌も絶る事も侍らねは。此事も定而習ひ傳られても侍らん。彼詠を背て。諸の非據の儀を申さ

ん事も。尤可レ耻事なり。かうまで委可レ申にも侍らぬを。左右南方此かひ屋を詠して。人々の異儀も水火也。判者も殊に力を入(レ)て沙汰侍れは。存事を申たる間。筆跡きはめて見苦侍らん歟。所詮ふしつけのかひ屋と。秋の山田の鹿の火の屋とを。慥に可レ被三尋明一侍歟。異議相論は。末代共なく和歌興隆以外侍。尤可レ興事也。

夏上

夏草

左顯 昭

夏くさの野嶋か藨の朝露をわけてそきつる萩のはのすり
右方申云。無三別難一。

判云。左歌の終の句に。萩のはのすりと云ならは。はしめにはた、野しまかさきを分つる計にてあるへきを。初に夏草のとをける。重疊して聞ゆ。

顯昭陳申云。考三万葉集一云。詠三夏草一歌。

夏草の露分衣きもせぬに我衣手のひる時もなき
此比の戀のしけく夏草のかりそくれ共おいしくかこと
人ことは夏野の草のしけく共いとも我としたつさはりねは
夏草をは。か様に詠て。其草とさせる事も侍らす。たゝ夏の野へに。をしなへてしけく成行草をよめる也。天曆歌合にも。夏草題一番侍り。

左

忠 見

夏草の中を露けみかき分てかる人なしに茂るのへ哉

右

兼 盛

夏深く成そしにけるおほあらしの森の下草なへて人かる
此等の歌も。其草とさせる事なし。然は今之歌も。萩のは

のすり計を。夏草とは頼侍らぬ上に。万葉に人丸歌に。
玉藻かるとしまを過て夏草の野嶋か崎に船ちかつきぬ
と侍れは。本歌のまゝに。やかて夏草の野嶋か崎とつゝけ
て侍也。萩を夏草とよみて侍らはこそ。初句の夏くさと萩
のはのすりとは。重疊し侍らめ。又古歌に。
夏くさのしけみにましろ姫ゆりのしられぬ戀は苦しかりけり
此歌は。ひめゆりも夏草なれと。夏草とはなへての事にて。
姫ゆりをは別によめり。今の歌も。夏草の野嶋か崎は。惣
しての事にて。萩のはのすりをは別によめる也。夏くさの
中にも。夏花咲秋花咲草もあれと。別に其名を不顯詠侍る
也。又春草 秋草。冬草なども讀る。同事也。

春草を馬くひ山をこえくれはかりのつかひは宿りすく也
春草の茂き我戀おほうみにかた行浪のちへに積りぬ
神さふときかすはあらす秋草の結びし紐をとかは悲しも
我またぬ年はきぬれと冬草のかれぬる人は音信もせぬ
前栽の草も。春もえて夏茂り。秋花咲。冬霜かるれはとて。
其名をさして讀侍らは。古歌の讀様にも可二違侍一也。

夏夜

顯昭

みしか夜も鳥より後そ明やらぬ老のね覺に物思ふみは
有申云。短夜と云五文字心ゆかす。又鳥より後も事たらず。
陳云。みしかよの更行まゝに共置。又なくやさ月のみしか
よ共云て。上にも下にも置たるは。皆優にこそ聞ゆれ。
判云。老のね覺思ひしられ侍り。

顯昭陳申云。此歌評定の夜。有方より或人の難にて。短夜
をよめるきゝつかすと侍しかは万葉集に人丸歌。
時鳥鳴やさ月のみしか夜も獨しぬれは明しかねつも

と申歌を出し申に。同人云。それは第三句に置たれは。あ
しくも聞えず。初句にては猶心ゆかすと侍し時。後撰に夏
夜深養父か琴ひくを聞て。

兼輔中納言

短夜の更行まゝに高砂の嶺の松風吹かこそ思ふ
と申歌は。初句によめり。如何と申侍しかは。大略閉口。
其事世に聞て。先第三句の證歌を出して。それは腰句なれ
はといはせて。後に初句の證歌を出す。おそろしき事也
と人々申と承ること。其次第さもおもはず侍しを。たゞ自
然事也。此評定には先初句を出し。第三をは後に被書て
侍めり。其夜申次第には相違せり。何事か侍らんや。又鳥
より後にの詞。古今に鳥よりさきにとよめる。たゞ同事也。
前後のことはつゝき。いかにても侍なん。

夏下

蟬

左顯昭

ゆふま山松のはかせに打添て蟬のなくねも嶺渡る也
有申云。はかせは鳥にこそ打任せたる事にてあれ。

判云。左の松の葉風は。實にすこしは。いかにそ聞え侍れと。必
しも鳥にのみやは有へからん。竹のは風。萩のはかせ常の事也。
但松吹風にうちそへてなにては。なと侍らざりけるにか。

顯昭陳申云。松吹風とよむ人も侍なん。さは侍れと。此歌
にては少ことうるはしき心地のし侍しかは。松のはかせ
とつかふまつる也。は風は鳥にこそあれ。松にては少はい
かにそや聞ゆなれと侍こそ。いかゝと聞侍れ。俊賴朝臣住
吉にてよめる歌に。

住吉のしき津の浦に旅ねして松の葉風にめを覺しつる
此歌はいかにそ聞えぬは。ぬしからか歌からか。思なしに
や。かゝる歌のふるまひ。目前作りたてらるゝ上手の歌な
れは。おもはるゝやう侍りけん。猶思ひ給ふる也。時の
人鳥にこそ。はかせはよめと不難侍けるにや。

秋上

鶉

左顯 昭

鶉の子を手にすへねと鶉なくあはつの原に今日もくらしつ
右申云。左歌無別難。

判云。左歌催馬樂の。たかの子の歌の心をよまは。たゝ手にも
すへ侍れかし。是は手には居ねと云て。あはつの原にけふも
暮しつとは。鶉をとらはやとのみ思ひくらせるにや侍らん。又
風鉢も無下に。たゝ詞にや侍らん。

顯昭陳申云。催馬樂の鶉子歌云。

たかの子はまるにたはらん。手にすへてあはつの原の見
くるすのめくりの鶉からせんや。とうたへり。此歌を思ひ
て詠して侍けるにや。此歌のまゝに。鶉の子を手に居て。
粟津の原に鶉かりくらさんと。詠る人も侍なん。今歌は。万
葉集の。鶉鳴いはれの野邊の秋萩を思ふ人とも見つるけ
ふ哉。と讀るよりことおこりて。鶉をは和歌に殊外興し讀
る也。古郷港茅生野邊の萩原。もしは深草の里なとになか
せつれば。何にもまさりて哀をもよほし。身にしめ心もす
むよしを。古き人も詠せり。近俊賴朝臣歌にも。鶉鳴まの
の入江の濱風に尾花浪よる秋の夕暮。とよめる歌も。勝た
る事共をよめり。是則万葉集のいはれのゝへの歌の鉢也。

然は催馬樂の心にては。たかの子を手にすへてこそ。あは
つの原に鶉狩して。日をは暮すへきに。たゝ狩せんとても
こねは。鶉の子を手にすへねと。鶉の聲を身にしめて。粟
津の原を過もやらず。日をくらす心をつかうまつれり。古
歌の心を思ひながら。か様に讀かへたる歌の風情。始而不
可二申盡一歟。而を催馬樂の心にたかひたれは。たゝ鶉と
らはやと思暮すかと云推量は。いかゝ侍へからん。網なく
ては淵なのそきそと云世俗の諺侍るめり。鶉をもたすし
て。鶉をとらはやと思ひくらさん事。いとゝはかなかる
へし。是則兎を取んとて。株を守りけんたとへに同しかる
へし。今より後は。鶉の音を心にしむる事は。思ひあら
ためて。偏に鶉とらはやとのみ心に入て。歌を詠すへき
か。和歌の風情は。折にしたかひ。志にまかせて。蘭菊のみ
をほしきまゝに讀きたれるにや。彼長能道濟か鶉狩の歌
にて心得ぬへし。長能歌に。

道濟歌に。

ぬれ／＼も猶かりゆかん簑鶉の上毛の雪を打拂ひつゝ
前の歌は。狩衣の霞にぬれん事をたに數て。宿かるへきを
もむきを讀り。後の歌は。かき暮し降雪に。鶉かりもとゝま
りぬへけれと。なをぬれ／＼かりゆかんと云事を顯せり。
只各風情のより來る所。一興をもよほさす云事なし。日
のあたゝかなるに付て。水のつめたきを怪むへからず。魚
の浪をくゝるを見て。鳥の雲をかけるを疑ふへからさる
かとし。

野分

左顯 昭

萩かえをしからむ鹿もあらかりし風のねたさに猶しかすけり
右申云。あらかりし風と云たらんにて。野分の心有なんや。
陳申云。野分歌ふるくはいと見えす。あらかりし風の後より
りなと。讀たるに付てよめる。

判云。左歌猶しかすけりなといへる。古風の躰にやとみゆるを。
上句より風のねたさまでは。只近き歌の躰也。布衣の人。靴を
着したらん心地し侍る。

顯昭陣申云。先右方の難に。あらかりし風と計にて。野分
の心難しと云沙汰侍しこそ。返々口惜侍しか。金葉集に
侍るかとよ。野分したりけるに。いかゝなと音信たりける
人の。その後又をとせさりければ。

相 摸

あらかりし風の後より晋せぬは蜘蛛手にすかく糸にや有劔
又史記曰。暴風雷雨云々。暴風をはのわきの風と訓せり。
乙侍従か始て野分をあらかりし風と詠せる。暴風の本文
に相叶へり。珍重と可レ云賦。右方尋甚以遺恨云々。又しか
すけりは万葉の詞なれば。古風の躰と侍るは可レ然。但猶
しかさりけりと云詞をつゝめて云なしたれば。あなかに
に手かけかたかるへきにあらす。又みれとあかすけり
もあり。見れとあかさりけりと云也。物にそ有けると云を。
物にさりけるなと云るかとし。況万葉の詞とて。みな古
躰と定はつへきにあらす。彼集の歌の終句をみれば。
うつろひにけり さ夜ふけにけり 花さきにけり
かなしかりけり 鳴わたるなり 見るよしもかな
ぬれにけるかな 見つるけふかな 戀もする哉
おもほゆるかな ほとゝきすかな 人にしらるな

思ひそめけん 年そへにける 袖そぬれける
すきてゆくらん いこそねられね はやかへりこん
いまそくやしき うくひすの聲 戀しかりけり
上句は。おそろしけに。こはきやうに侍れと。第五句は。此
頃の歌にとりても。ことになひやかに。やはらかなる詞に
ても侍れは。是を古風とて。上四句はちかき歌の躰なるを。
第五句ふりたると云難もいかゝ。

又古今集校レ撰候時は。万葉の歌をは。古語とこそ侍れ。
古今に素性法師の歌に。

時鳥鳴聲聞はあちきなくぬし定らぬ戀せらるはた
而万葉集歌に。

みよし野の山下風の寒けきにはたやこよひも我獨ねん
万葉の古語に。はたと讀たれと。古今の上四句は今の躰な
り。又元方歌。

秋の夜の月の光しあければくらまの山も越ぬへら也
へらなり古語なれと。他句普通詞也。小野篁卿歌に。

なく涙雨とぶらなんわたり川水増りなは歸りくるかに
万葉集歌云。

秋田もるかり庵も未たこほれぬに雁金寒し霜をかぬかに
面白き尾花なやきそ古草に新草ましろおひはおふるかに
足引の小山田つくる戀す其つなたにはへよもると知かね
橋の林をうへん時鳥つねに冬まですみ渡るかね
此かねと。かにとは同詞也。万葉の歌式。皆古語不レ然。今
篁卿詠存ニ其様一歟。又濱成卿式。雜躰歌の姿を出すに。頭
古腰新。頭腰古なと云り。されは一首中に上下句。古き新
き詞も心も相ましはれる。あしからぬ事にや。今の歌布衣

人童靴たらん心地すと侍ることは。古人内々歌合などに初句わろくて。むね腰の句あしからすよき歌をぬの袴に水干を着て。烏帽子かゝけたりなど。評判判者侍りき。されは此詞おもしろくめつらしとも。おとろき侍らす。又ゆゆしききすつきぬる歌哉ともいたみ侍らす。是より後にこそは。五句なから古語をとり集て。一首なから今様のすかたにのみは。つらね侍らめ。古き上手の歌。必しもさしもみえ侍らす。古歌合判詞に。かゝる難も侍らす。堂令高危瓦有松。と云詩をは。法華經の四文字に。文集の三文字を切繼たる類(ろく)也とこそ感し侍けれ。釋尊の説に居易か筆をは。きりつくそとは。そしりは聞え侍らす。まして和歌の新古相交の條は。あなちになし可禁歟。

秋中

鳴

左顯 昭

こも枕たか瀬の淀にたつ鳴の羽音もそゝやあはれかく也
右方難云。神樂にしきつきほるといへるを。鳴と了簡して。こも枕には引よせたる歟。

判云。左歌こも枕の事。右方人中て侍めり。そゝやは初の秋の夕の萩の歌にたに。不レ被二甘心一侍を。鳴の羽音には。よる所なかるへし。

顯昭陳申云。神樂のこも枕のうたに。

こも枕高せの淀にたかにへ人そしきつきほる。あみおろし。さてさしのほる。とうたへり。此歌に付按に。實には魚鳥ともにたつることにて。鳴の聲(へい)と云こと侍なれば。鳴つきのほると云は。鳴とるをはつくと申也。次に網お

ろして。さてさしのほるとは。魚をとる所也。網をはおろし。さてと云物をは。さてさしのほると云也。但敷つきのほるとこそうたへ。鳴つきのほるとは。うたはすと侍る。實に覺束なく侍り。而神樂。催馬樂。風俗。雜藝等には。必しも文字のまゝ詞のまゝにもうたはぬ事おほし。或はあかりて云へき詞をも。さかりて云。さかりたる文字をあけてうたふ事も有。又にこりてうたふへきもしを澄て云。すみて云へき詞をも。にこりてもうたふは常の事也。聲明にも聲にひかれて。本軀の文字には違たる事多ければ。此神樂のふりも。敷つきのほるとて同事歟。若は鳴つきのほると。實事をうたは。うたひにくゝて。敷つきのほるとは。謠よきふしに成事もや侍ん。神樂の家の人に被二問侍一へし。さらずはたゝ昔より。さ様にうたひつれは。只實儀をあらはさぬ事も侍らん。況敷つきのほるとは。何を敷つきのほり侍にか。下あみ。おろしあみと云網を。しきつきほるといは。敷網と云物はきこゆれと。つきのほるとは申さぬにや。又古語に付て。しきりと心うるにても。つくと云詞は。網に不レ叶とそ承には。たゝ鳴つきのほると心得て。敷つきのほると謠ふは。鳴をうたひなしたると申さんは歌の詞讀には相叶歟。此事は先年。或所の歌合に。或者此こも枕の歌に付て。鳴の定に讀て侍し時。今度の難の定に。敷つきとこそうたへ。鳴とは聞えずと云難侍き。其に付て彼歌の詞の續不レ得心侍れは。且はいかゝ人々も侍とて仕て侍るに。右方難おもしろう侍り。本意相叶へり。此上に委了簡侍て。一方に可レ被二定侍事也。抑神樂の薦枕。高瀬の淀とうたへる事は。よし有と承しかと。それ迄は沙汰

侍へき事ならねは。委は申侍らす。

廣澤池眺望

左顯 昭

廣澤の池さへ渡る月影は都までしく氷なりけり
判云廣澤の池さへ渡るとも都までしく氷とみえん事いか。

顯昭陳申云。此題の心は。月前眺望をよませ給んれうに。
遍昭寺にて明月を詠しむるに。廣澤池と嵯峨野と。ひとつ
にをしなへて。雪にうつもれる氷を敷けり。長安城をはる
かに望に。岡山の立隔たるもなくして。澄渡るけしき。實に
秦何之(？)一千餘里。漂々氷敷(？)と見えたり。是則廣澤
の池。さへ渡る月の都までしく氷と見ゆるにあらすや。
たゝ空すむ月を望て。氷にまかふるも常事也。況池にかけ
て氷と見えむ事は。いよゝあまりの心有と申へき歟。此
條うはの空に申さんはよしなし。月の夜に彼所に行向ひ
て。都の巽さまへ詠やられて。いはれ有よしの沙汰は侍へ
き也。池上をてらす月なれと。それを本体にて都迄は詠や
る也。鳳凰池上月。送我過三商山一と被作たるをは。池に
澄む月は。いかて山路をは。送らんそとや難し侍候へき。如
レ此難たち侍らは詩歌の風情は。みなうせ侍なんす。

秋下

荒

左顯 昭

見るに猶すまゝほしきは色々に薦はふ小屋のよめ成けり
右申云。小屋と讀る。攝津國のこやならては。より所なし。
又たゝ小屋ならは。さやうにもよめるにや。
左陳云。只小屋をこやと云。常の事也。

判云。攝津國の小屋ならて。たゝ小屋をもよめらん事。常の事

とこそ覺侍らね。證歌あるにても。此歌の小屋より所なくや。
顯昭陳申云。攝津國のこやと云所によせれと。小屋をはこ
やとこそ。外にても詠て侍めれ。懽成證歌をめされは。万
葉に。

久堅の羽生の小屋に小雨降床さへぬれぬ身にそへ我妹
と此歌こそ。津の國のこやならて。小屋をこやとよ見て侍
る證歌よ。をち方のあかしのこやと點したる本も侍れと。
是は一定に小屋也。より所は賤のこやは八重葎いふせく
とち。竹のすかきふしにくして。あなかにすまゝほしか
るましきに。色々の薦のはひかゝれる柴の庵の。いみしく
作り添たらん。都のさるへき人の家居よりも。すまゝほし
くおほえんこそは。山家の小屋のより所にては侍らめ。又
衛士のひたきやをも。本文には古屋と云と云り。すへてち
いさきやは小屋と云か。

九月九日

左顯 昭

わけきつる情のみかはそか菊の色もてはやす白妙の袖

右方申云。そか菊の儀不レ審。

左陳云。承知菊也。承和は黃菊を好。仍黃菊を云也。

右重申云。万葉にそかひと云るは。おひすかひの心也。さ
れは岸などにおひすかひに咲たる菊を云歟。

判云。左歌情のみかはと云。此歌に取てあしからざるへし。そ
か菊承知の菊のよしは。近古より申事なるへし。俊賴朝臣も黃
なる一本菊にて可レ有なと云て侍めり。

又右方疑申。万葉集にそかひと云る事にやと申も非レ無レ其理。
顯昭陳申云。そかきくは黃菊と存て仕けり。

文選曰。陶潛九月九日。無レ酒立三菊籬前。大保王弘令三白衣

使^レ賜^レ酒云々。今日黃菊晚。無^レ復白衣來^ニ云々。今按。文選には。黃菊ともいはれとも。百詠文に黃花と侍れは。其定に詠して侍也。評定の刻御尋侍時。古義に或黃菊。或一本菊と侍り。但其中には。黃菊と申儀宜歟。李綱朝臣も非^レ緋非^レ歟冬^ニを可^レ謂^ニ承和菊^一と書り。又古記云。帝の御裝束を。注に承和色の御袴を奉ると云事も侍と承る。又或人の詩にも。付^ニ黃菊^一て承知の遺跡など作られたり。そか菊は承和を云なしたるへし。或はそは菊とも云り。一本菊の義猶不^レ審。況や黃菊の一本菊と取合たる儀は。責てのわりなき義也。殊難^レ用歟。又此菊の事。万葉古今後撰。三代集に無^ニ其歌^一古家集などにも讀る事なし。只拾遺計に初て出たり。かのみゆる池邊に立るそか菊のしけみさえたの色にてこらさ。此歌につけて後人まゝ是を詠。而右方人申云。万葉にそかひと云詞あり。おひすかひと云詞なり。是は池岸などにおひすかひに立る菊歟云々。其評定の座にて難申云々。

きゝすくなく。ひろく不^レ見故歟。此儀一切不^レ聞及^ニ一侍。但考^ニ万葉^一そかひとよめる歌あまた侍。且於三五^ニ可^レ推^ニ其旨^一侍。

なほの浦を背向に見ゆるに奥の嶋漕まふ船に釣をすらしもむこの浦を漕まふを舟あは嶋を背向にみつゝとももしき小舟大君のみことかしこみおほの浦をそかひに見つゝ都へ上る今按に。此等の歌。背向と書てそかひとよめり。或はそむきとよみ。或はせなかとよめり。彼浦をうしろさまにみなす心也。おひすかひと聞えず。菊は池邊に數本もたゝは。おひすかひなり共申てん。一浦をさしてはいかゝおひすか

ひに見るとも申へき。中にも勅命のおそろしさに。おほの浦をもうしろさまにて。都へのほりぬとよめるに。本國の方を別さる心はきこゆる也。おひすかひとては無^レ詮か。

冬上

寒

左顯昭

宇津の山々越くれはみそれふり袖ほしかねつ哀このたひ

右申云。左歌無^ニ指難^一。

判云。左歌袖ほしかねつ哀此たひなといへる。さひては聞え侍れと。うつつの山こそより所なくや侍らん。伊勢物語などに。うつつの山へのうつゝにもなと云る所にも。みそれふり共見えす。其故なきならは。みそれ降ぬへからん山も。あはれ此たひといはん所もおほく侍らんかし。宇津の山故なくは無^レ詮やあらん。

顯昭陳申云。誠寒所もわかすふる物なれば。何の野山海川にても讀たらんに。憚侍へからす。雨雪の降。霜露のをかんに。たゝ同し事也。但旅によせて讀んに取ては。伊勢物語に。するかの國宇津の山に至りて入なんとするに。道はいとくらく心ほそきに。薦かへてしけり。物心ほそう。すするなるめを見る事と思ふに。修行者あひたり。かゝる道には。いかゝいますと云をみれば見し人也けり。京にその人のもとにとて。文をかきてつく。

駿河なるうつつの山邊の現にも夢にも人にあはぬ也けりとよめる。此事のありさま。實に倅に立て。心ほそく物かなしければ。彼山路をとり分て詠て侍也。あつまちの山路には。相坂。不破關。二村。たかし。宇津山。あしから。此等み

な詠ならはせり。思ひかけぬ所の歌にも讀ぬを取出て詠て侍らはこそ。聞つかぬ難のよせとも侍らめ。彼物語には宇津山と云につきて。現にも夢にもと添たり。今の歌は彼山の心ほそきかたを。霧にひきよせて侍は。此難不レ可侍。さる歌侍はとて。あなちちにうつ山の邊のうつゝにもとよまは。無下に古歌になり侍へし。又美ふる所を尋侍るに。万葉に少々あり。

みそれふり板間風吹寒き夜にはた野にこよひ我獨ねん美ふるとをつ大浦による浪やたとひよる共憎からなくに美ふりあられ松原住吉のをとひ娘とみれとあかぬかもいや姫のをのれ神さひ青雲のたな引ひすら美そほふる如レ此等の歌は。はたの。とを津大浦。松原。いやひめにのみ美をは可レ詠歎如何。其外は何處にてよむとも。みそれより所なしと云難は。たゝ同し事也。又伊勢物語にも。宇津の山邊の現にもなと云る所にも。美ふれりとも見えすと侍る如何。彼物語によめる歌枕。花を詠。月をもよめるに付て。役人必しもその跡を尋て不レ詠哉。伊勢物語に春日里にて女に遣はす歌。

春日野の若紫のすり衣忍ふの亂かきりしられす
古今に春日祭の使しけるに。物見ける女に遣はす歌。
春日野の雲間を分ておひ出くる草のはつかに見えし君鴨
同集に。題しらす。

誰みそきゆふ付鳥かから衣立山の山におりはへてなく
伊勢物語に。立田山を越る人を思ひやりて。
風吹は興津しら波立田山夜半にや君か獨越らん
同物語に。布引の瀧にて。

我世をはけふかあすかとまつかひの涙の瀧と孰れ高けん
同物語に。富士の山をみて。

時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこ班に雪の降らん
同物語に。

信濃なる淺間の嶽に立烟をちこち人のみやとはかめぬ
此等の歌に付て思ふに。伊勢物語の宇津山にて歌よむ所に。みそれふる共見えぬに。左歌彼山にて美をよめる。させるよしなしと侍如何。

野行幸

左顯 昭

大原や野へのみゆきに所えて空とるけふのましらふの鷹
右申云。所えて歌に聞なれす。

判云。左歌ことくしけには侍れと。有レ疑事こそ侍めれ。大原やとをきつれと。をしほの山と云てこそ。大原野とは聞ゆれ。をしほとつゝけすしては。大原やおほろの清水とも。せか井の水とも云て。大原やとは置也。其大原は。叡山の施野行幸例全不レ聞。小塩山にこそ。野行幸の例は侍事なれ。せか井の水のかたには。鳥はなく共あそひにゆかんなとこそ聞え侍れ。ましらふの鷹もそらとるへからさるにや。

顯昭陳申云。平城より平安にうつされ給て後。野行幸ならせ給へる所々は。紫野。嵯峨野。芹河野。大原野等也。而野行幸と侍題に。大原や野への行幸と仕るをは。野もなく鷹狩もせず。大原野行幸もならさらん。炭やく北の大原かと申疑は不レ可侍歟。延喜六年十二月五日御鷹狩逍遙のため。大原野にこそ。野行幸は侍しか。伴度中山の山口入せ給ふ程に。しらふと申御鷹。いつしか鳥をそら取て御輿の鳳の上に參居て侍けるに。暮日は漸山端に近つきて。峯の

紅葉所々錦をさらせり。鶯の色白妙にて。雉の上毛は紺青をのへたり。其時しも雪打散て。折ふし取集たる御狩の興也と記したる事。心にしめて。所えて空取ましらふの鶯とも詠侍也。小塩山とつゝけぬは。叡山の麓の大原とや。人思はんすらんとて。野への御狩に。あなち無用の小塩山をも讀へからさる事也。二條の後の大原野行啓に。在五中將詠云。

大原やをしほの山もけふこそは神代の事もおもひ出らめ是は尤をしほ山とつゝけたり。心のうちに昔を思出事有て。神代のことにかけて。彼山にわか心を付る也。又藤氏の人を祝ふとて。貫之かよめる。

大原や小塩の山の小松原はや木高かれ千世のかけみん是又藤氏の氏神に祈て。をしほ山の小松によせたり。但後拾遺云。三條院御時。大嘗會御禊など過ての頃。雪の降侍けるに。大原に住侍ける少將井の尼のもとに遣しける。

伊勢大輔

代にとよむ豊の禊をよそに聞て小塩の山のみ幸をやみし返し
少將井尼

小塩山梢もみえず降つみしそやすへらきのみゆき成らんこのうたのことはに。おほはらにすみけるとかけるは。北の大原なり。しかるに。をしほ山をよめる。あやしきこと也。伊勢大輔重代のうたよみなれは。小塩山大原野に有とこそぞ侍けり。又辭事を詠たらんに。通俊卿よも勅撰に入られ侍らした。大原や小塩の山とつゝけ置たれは。小塩の山をかけて讀るにや。若又彼尼大原野に住けるを。只大原と書たるかと疑ふ人も侍れと。それはさも覺侍らず。

彼集の内に良逓法師。大原に籠居ぬと書るも北大原也。又彼尼をは大原殿と號すと。後拾遺の目錄にも記せり。所の名をは。かやうにかよはして讀にや。後撰集に。

菅原や伏見の暮に見渡せば霞にまかふ。小泊瀬の山是は大和の菅原伏見也。又古今にも。

いさこゝに我世はへなん菅原や伏見の里の荒まくもおしか様によめるに。後撰の詞に云。菅原おほいまうち君の家に侍ける女に。男よはひ侍けるか。中絶て後。又とふらひて侍ければ。

菅原や伏見の里の荒しよりかよひし人の跡もたえにき此歌は。菅原と申に付て。平安城の菅原の家を。大和の定に。伏見の里のあれしよりと讀うつせり。是は和歌の習なり。炭やく北の大原をは。大原山と讀ならはせり。後拾遺に。

和泉式部
藤原國房

こりつみてまきの炭焼けをぬるみ大原山の雪の村消又良逓法師のもとへつかはす。
清原元輔

小松原大原山のたねなれは千とせはこゝに任せてそみむ是はをしほ山を大原山と讀て。藤氏の人を祈也。これこそ小塩山の種なれはと讀へけれども。大原野の社に寄て。大原山とよめり。をしほの社と不申故也。されと。大原や小塩の山といはねと。大原や野への御幸と讀て。鷹狩して侍れは。一定大原野の鷹狩の行幸と存て侍を。叡山の麓に成侍らん無詮方一事也。國々に同名の歌枕おほかれと。よみ

様にしたかひて。そこ／＼と思ひわかし侍る也。たこの浦と云所あまた侍れと。浪しけく立と云つれば。駿河としり。藤花を詠つれば。越中のふせの湖としれり。いさりのあまによせつれば。丹後のよさの海と定侍る也。大原と云所は。山城に兩所侍り。近江にも侍れと。夫は歌にもよまねは不レ及三沙汰敷。北大原は炭竈をむねとせり。おほろの清水をよめり。南の大原野は大原野社を旨とせり。行幸ならせ給へり。藤氏后宮の行啓も侍り。大原やをしほの山とよめるも。神にかけ松によせて。藤氏の氏神を崇也。大原野とて。野邊の鷹狩を旨とする事。宇多野交野にも勝れたり。仍野行幸もならせ給ふ。小塩山とつゝけねはと云難は。世人能々可レ被案敷。鷹狩の時は。をしほ山の詞。必しも不レ可レ入とそ思ひ給ふる。

冬下

冬朝

左顯 昭

山里はあき川渡るこまの音に潤々の氷のほとをしるかな

右方申云。無三指難。

判云。左歌山里はと置く。冬の朝にてたにあらは。いつくにてもあるへきを。是は河郷敷。水村敷にてそ可レ侍。又朝心あき川わたる計にや。

顯昭陳申云。實に冬の朝の心たにあらは。花の都にても。ひなの族にても。所はきらひ侍らし。よしなき山家にかゝり侍けるにこそ。又山家にて便有事にも侍なん。但朝川渡ると云に付て。河郷敷水村敷と侍そ不定に侍ける。山家川有へからすとは。誰か定侍にか。山家は山近き民の栖。

寒松

左顯 昭

芳野山すゝのかりねに霜さえて松風はやし更ぬこの夜は

左右ともに無三指難。申旨ゆゝしけ也

判云。よし野山すゝのかりねにといへる。岑をとるそみかくたもすゝをいほりともし。木の根を枕ともこそし侍らめ。是はたゝすゝをかりたるはかりにて。打敷てふしたるにや。又松風はやしも。優にしも聞えさるにや。

顯昭陳申云。すゝのかりねは。かりそめふしにすゝをからんするにそへてよみ侍る也。

後拾遺に。

こも枕かり初にてもあかさはや入江の芦の一夜計りを

伊勢大輔

万葉集に。

三嶋江の入江の薦をかりにこそ我をは人の思ひたりけれ
如_レ斯も詠侍れは。たゝ是かり初とそふる心也。又すゝを
かりしかん事。なとか侍らざらん。山伏必しもすゝをかり
ては。いほりのみさすと不_レ可_レ定。雨雪のふらざらんには。
たゝひた地にふさんよりは。すゝをかり敷て。其上に丸ね
もし侍へし。

神風や伊勢の濱荻折ふせて旅ねやすらん荒き濱へに
印南野の淺茅をしなみさねし夜のけ長くあれは家路忍はる
濱荻を折ふせ。淺茅をおしなひかしてもねて侍り。山伏も
かりねは同じ事也。すゝはさすかに淺茅よりは。こはこは
しけれは。かりしかん事便侍る歟。

又万葉に。

倭には聞ゆらんかもおほか野のさゝかり敷て庵せりと
なと詠て侍る事も有。すてにさゝかりしけり。いかにもす
すかりしかん事同事歟。しかれは。よし野山のすゝのかり
ね。あなかちに不_二僻事_一歟。

椎柴

左顯 昭

山人の便なりとも岡へなる椎のこやてはおらすもあらなん

右申云。こやておしみて何にかすへき。

判云。しゐのこやては。たゝしゐ柴といはんにまさりても不
レ聞にや。

顯昭申云。万葉集に。

をそはやも猶社待むかつをの椎のこやてのあひは違はし
とよめり。先椎のこやては何そと尋侍ての上の事なり。右
方よりをしてみて。何にかすへきと侍るも。椎のこやて椎柴

と云んに増りても聞えずと侍るも。万葉集の椎のこやて
の心には。不_レ叶事にや侍らん。不審。抑春曙と云題には。
春曙とよめりとて無念と。右方より被_レ申。椎柴と云題に
はしゐのこやてとつかふまつれるを。椎柴と可_レ詠と判者
いましめられたり。進退きはまりて失_二計畧_一歟。自今以後
題を給りて。何様に可_二存侍_一乎。古今集見給ふるに。そへ
にとてとすれはかゝり_{（かく脱題）}すれはあないひしらすあ
ふささるさにとよみ侍けん人の心をも。今こそ思ひしり
侍ぬれ。

一本云。
右借_三請參議藤原元長筆跡本_二于時永正五年九月上旬之比令_二
書寫_レ之_一訖。

城南男山隱士 宗勝在判

右顯昭陳狀以宮繁一清藏本書寫以横田茂語本校合畢

蓮性陳狀

畏て申上候十首御歌合(後略)。よにゆかしくおほえ候へと。いまた見及候はぬに。一日或人つたへ聞候とて。おろくかたり候し中に。蓮性番六首まで勝とらけ給り候へは。且面目身にあまりて悦承候。四首の負更にいたむところにあらす。但判のおもむき定めて。ひかこと承て侍りつらめと。いさゝかおほつかなき事ともつゝりしるし申候。

十番左

春は今と渡りくらしゝ天の原雲井遙に今朝はかすめる霞の歌に。今と今朝と判者(實家)難申て候なる。誠にさりかたきあやまりにて候。老のほれおもひしられ候へとも。建保内裏百首御歌合に。西園寺入道相國(公朝)

爪木こる山路は今や絶ぬらん里たにふかき今朝のしら雪

判者定家卿不_レ難_レ之可_レ爲_レ勝之由定申。其上此歌。已に新勅撰に撰入られて候にこそ。おほかたけきを今朝と書て。今の字同しと難候はん。あまりある事にや。かく申候へは。五月雨とて月とも詠し。時雨とて時とはよむまじきにて候にや。それはさる事にて。けきを必今朝とかゝさる事も候はん。日本紀には明且と書て。けさとよみて候にや。今度の御歌合の判の詞には。日本紀までも勘載られたるよし聞え候へは。今申上候明且の字も。定て存知の事にてこそ候らめとおほえ候。又延喜聖代には。菅家新撰萬葉を撰奉られ候。彼集には。朝の字はかりをけさとよみて候。北野の聖廟。さためて御ひかことなく候らめと。仰て信をとり候。但万葉には。今朝今且なと書たる本も候へは。これにつきて難し申され候らん。のかるゝ所なく候へとも。万

葉も文字つかひ。卷ことにかはりたる事にて。眞名書。假名書。或は義をもつてこれをよませ。或は字をもつてこれを釋したるものにて候なとゝそ先達申傳へたる事にて候へは。件集の漢字につきて。歌の難有へきにて候はゝ。つるかもなとの詞を。鶴鴨の字を書て候へは。若此鳥を題に得て詠し候はん時は。彼字は病にて有へきにや候らん。すへて漢字のかよひたるを難とし候事。誠にふるくもなきにはさふらはす。沙汰有事にて候歟。これは不の字の事にて候にこそ。ちかくもすなはち建保内裏撰歌合に。

時しらぬ富士のしは山しはしたにけたぬ思ひにたつ煙かな定家卿判には。此歌のぬの字を難申たるかとおほえ候。しかるを今の御歌合に。判者忍戀の詠にはいはておもふとて。下句にしらしなと候なるを不_レ言。不_レ知。此字にてこそ候らめ。ふるき難を用られ候はゝ。是も又おほつかなき所なきにしも候はす。猶もし今と今朝とはかり難に定められ候へきならは。爲教朝臣今度すなはち花の歌に。

今朝よりは雲こそほへ芳野山たかねの櫻今やさくらん此字を詠し候よし聞えて候。かれは誠にこゝろのやみに。何のあやめもわきかたく候らんと。かへすゝ餘所まで哀れとこそおほゆる事にて候へは。彼を用是を捨候。皆其謂ふかく候にや。凡歌を奉らしめて。さかしをろかなりとしろしめされ候らん。いにしへにたちかへり候御代に。いつしか老か病を顯し候ぬる事。たかかならず。身ひとつの道のかるゝ所なくおもひ給ひ候。右歌(全野)さほひめの霞の衣袖さえてと讀て候なる。判にも。すなはち近頃おほくなりて。目にたゝすとかやは候なれば。今しるし申上へきに候はねとも。元仁(後醍醐)の比九條前内

大臣。人々に三十首をよませらるゝ事候き。其中に前藤大納言。

春たてと霞の衣さむからしましたひとへなる嶺の白雲
家長朝臣

さほ姫の四方の霞のうす衣またうならぬ春風そふく

かく兩人よみて。心詞かはらすおほえ候にや。霞の衣は。古今

集より出たる物にて候へは。今もとり用ひ候はん事。難有へき

に候はねと。早春餘寒などの心相交り候なん。歌は此兩首に異

へからす候にや。寛元二年（後醍醐）にて候しやらん。光俊入道卷

經（首）とて。人々に百首歌よまする事の候しにも。爲氏。さほ

ひめの霞の衣とつゝけて詠たるとおほえ候。今は無下にふる

衣とこそ見え候へ。霞の衣うはきになり候へしともおほえ候

はす。かつは千五百番歌合に。顯昭。吾妻路の雪にうち出て見

渡せは浪にたゞよふ浮嶋か原。定家卿判云。左歌。雪にうち出

てといへる。浪にもことよりておかしく侍れと。少おもひ出ら

るゝ事は侍る。作者は見及はさる事もや侍らん。建仁二年（土御門）

左大將家百首。
あしからの關路こえ行明ほのに一むらかすむ浮嶋か原

正治二年内大臣家歌合に。

駒なへて打出の濱を見渡せは朝日にさほくしかの浦浪

雖然昨今事。徐遲近述聽。打出見渡詞。東路眺望心。大略相同。

此兩首歟。此判詞を見給ふにも。いよゝめなれ候なん事は。

作者はあやまりてつかうまつりて候とも。證義のまへにはつ

へき事と聞え候にや。
山花の右歌。みよしのゝ奥。誠に山はさふらふらめと。ためしな

みよしのゝ奥。誠に山はさふらふらめと。ためしな

らすや候らん。横谷瀧梯路など申候らん題とても。吉野の奥と

よみては候ぬへきやらん。先達おほくかやうの事。秘事口傳に

て申旨とも候中にも。定家卿殊更わきまへ申事にて候き。天象

地儀のたくひをは題にあらはし。詞字の題をは。こゝろをめく

らして可レ詠など。末座までも申をしふる事。うけ給りをき

候き。今判者此旨をこそ存知候らめ。他人へ教訓の趣と。賢息

に口決の旨とは。かはりめは殊にしりかたく候へとも。或所の

歌合に。深山花。たつねきて一木か末を見るからに。奥ゆかし

きは三吉野の花。判者。左改舉二百仞之嶺。只望一樹之梢。名所

之風景已失本意。又三十一字之中。山字無之。題字中山尤可二

詠載一候也。これは定家卿判に如此候。いかてか今彼家を傳て。

其跡をまもらす候へきや。おなし歌合。海邊月。

興津風ふけゆく空はをのつから雲もまかはぬ浦の月かけ

判云。興津かせ浦の月。さためて題には侍らめと。愚意猶いさ

さか湖海のかはりめ有てや。海邊には被用侍らん。山字なき

難證據をしるし申ぬる上に。沖津風浦の月まではすへきに

も候はねとも。しをりといふに山の聞えて侍れはとにや。判詞

に候なれは。枝折にて山のたしかなるへき理。いさゝかおほつ

かなく候。古歌には。

武士のいつさ入江にしをりするとやゝとりのむやゝの關

俊成卿歌に。

枝折するならの下葉にちる露のはらゝと社ねはななれけれ

かくもよみて候めれは。一筋に山のこゝろにとるへしともお

ほえ候はす。隨て古今六帖と申候集には。題をつくして候にも。

枝折をは木の部に入たるとおほえ候。山の類には見えぬ事

にて候。沖浦なとこそ海にて候へとも。猶湖をわくへしと判した

る事にて候へは。かやうにわたり候らん事は。一方につきて定むましきにやとおもひ給ひ候。海邊月の番は。たまゝ愚詠の勝にて候なれば。右歌の事。とかく申へきにて候はねと。今しるし申上候判のことくにて候は。浦こく舟はかりにては。誠に志賀の浦の俣もかよひぬへきと。すみまざるこゝろ聞なれど。さはかりにて。さゝへたる難をは。引こめられ候にこそ。

井六番

郭公愚詠の難に。下句きかぬほとは。いかに有へきにかと聞ゆる所なと候とかや。是又尤いはれて候。但上句を序分にて。下句意趣をのへ候事。定まれるならひにて候。今もむかしも歌おほくこそ候めれ。かつは此御歌合に。俊成卿女。逢不遇戀。

わけし夜の契りも消て悲しきはとへと答へぬ道芝の露とよまれて候なる。是もわけし夜と打開候とは。何をわけたるとも聞わかれ候はねと。道芝の露とよみて候にこそ。ことはりし聞ゆる事にて候へ。かやうの事は歌の習ひにてこそ候に。ひとへに毛を吹て疵をもとめられ候事も。おもてになく難の候ぬにやと。こゝろをとりせらるゝ方も候にこそ。比興におほえ候へ。右歌。五月雨のふりにし友とかたうへはとよみて候なる。まことに候は。洞院攝政家五首。題百首。家長朝臣五月雨のふることゝもを語り出て長閑なる夜の友そうれしき心詞いともかはらずや候らん。今の作者共むつひ浅からぬ中にて。猶ふるきを忍て。歌を和たる贈答とも申へく候らん。千五百番歌合に。

秋山に時雨はすきぬ神無月木の葉そ冬のはしめとはふる定家卿判云。右歌神無月に時雨ふらぬやうに聞え侍と。木葉そ冬のこといはんためは。さも侍るとか。又或歌合に。紅葉満山。たえゝに時雨し山の雲なれとそめも残さぬ四方の紅葉は

家隆卿判云。左歌よろしきさまに聞え侍れと。時雨し山といへる。紅葉のさかりにこそは。時雨もことに侍らめ。今は時雨もせぬやうにや聞え侍らん。時雨ると侍へきにやと候めり。此歌は。五月雨のふりにし友とよみて候。此兩判の詞にて候は。六月の郭公ともや聞え候ぬらん。但五月雨。卅日をかきらぬ事にて候へは。晴間にこそは來たる郭公にても候らめなと。了簡せらるゝ方も候へと。さては又五月と見ゆる詞。此外にはあらはれず候へは。旁題のこゝろたしかならずこそ思ひ給ひ候へ。忍久戀(八十八番)右歌。

戀をのみしつか庵のかやむしろ敷忍ふまに年そへにける判詞に。俊頼歌おもひ出され侍とも。詞つゝきよろしと候なる。此歌の本意は。しき忍ふを詮と見え候につきては。めつらしきふしなくや候らん。後鳥羽院。建仁元年八月十五夜御歌合に。田家見月。土御門内大臣

稻庭かり田の面に月すめはしき忍ふへき袖の露かは後京極攝政家六百番歌合に。寄席戀。兼宗卿

憂身ゆへわかるゝ床のさむしろに敷忍ひてもかひやなからん東山入道攝政家。嘉禎二年戀十首歌合に同題。定家卿。

吾妻野の露のかりねのかやむしろ見ゆらん消て敷忍ふとは親季卿

扱もなを敷忍ふてふいなむしろ川そひ柳浪はこすとも家隆卿

くちねたゝ人やあやめんあや庭をになるまでは敷忍へとも成實卿

あやむしろ涙の露のたてぬきに誰をりそめて敷忍ふらん此歌合には。運性も敷忍ふと仕て候き。此外にもおほく見え候

とこそ。又或所歌合に。

くれて猶史行空をまつ嶋や月はをしまのあけほの、空
此歌を定家卿判に。空を松嶋や月はをしまのこゝろ。仙洞にて
かゝる歌見侍りき。作者大藏卿有家にや候らん。かやうに少是
をふしと見ゆるをは。見及はれ侍らすとも。後に出候はんは難
に侍へしとこそ。判して侍めれ。今しるし申上候ぬる敷忍ふの
歌ともは。此判はかの趣には相違せず候にや。かやうにめなれ
たるふしをのみ賞翫せられさふらは。只櫻ちる木の下風と
のみ詠て候は。やすくや候へき。凡かやうの證據歌は。昔今
の歌合におほく見ゆる事にて候へとも。他人の判をはしるし
申ても。今判者指南とすへからす候へは。多く定家卿の判はか
りを書のせ候。抑盛宿嵐の愚詠。上下句のはしめの同字のあや
まり。ともかくも申に及はす候。判者すゝみて是を勝と定申候
にける。身のふかくは顯れ候ぬと。判者の情はありかたきほと
にこそ。おほゆる事にてさふらへと。かやうの難を判にのせ候
なる事は。同難あまた番に見え候。歌合に始の歌をまつ難して
後の判をはそれにゆつり候とこそうけ給候に。今度の御歌合
には。爲氏月の歌に。同字を上下に詠て候よしうけ給候へは。
末の番の愚詠にはしめて見とかめられ候けるも。かれは例の
こゝろのやみの故にや候らん。誠に此難は。上にとかめたる事
にて候へは。露塵のかるゝ所なく候へと。蓮性か番にのみ。か
やうの事ともをのみ申注せられ候も。子細なとをわきまふま
しき者とおもはれ候にこそ。尤そのいはれ候。大方はかたしけ
なく。勅を承て。判者にそなはり候はん人は。其家をもおも
ひ。此道を執して。私有へきにて候はねは。直き心をさきとす
るよし。今も見え候にこそ。只蓮性が歌にあたりて。自然と見

出さるゝ難にてさふらめは。老のつたなきをのみ歎きお
もひ給ひ候。さりながら爲氏。爲教等朝臣。今の老の心にな
ひて。父の卿の所存はそむきけるにこそ。身の冥かも悦ひおも
ひ給ふ事にて候へ。餘所の人も。おもひゆるす方もや候らん
と。ほこらしき迄おほえ候。誠に道を守る神明も。かきりなき
事にて候けりとは。いよゝ仰かれ候まゝには。涙もをさえか
たくこそおほえ候へ。二代撰者の得によりてなど。奥書にのせ
られて候なれと。今しるし申彼父祖の歌は。父卿判には。こと
なる事のみ候にや。これらの子細こゝろにこめて候はんも。妄
念のもとゝ罷成候は。よしなき方も候ぬへくおもひ給ひ
候間。返々恐懼ながら。書あつめ候ぬるに。是も皆老老のあま
り。ひかことのみこそ候らめ。披露ゆめゝあるましき御事
に候。判者もれうけ給候は。定て老の恥もいよゝ顯れさふ
らひぬと。いたみおほえ候へと。此道をおこしをこなはせおほ
しまし候御時にあひ候ぬれば。かやうに申候事も。又ふるき跡
なきに候はねは。道にふけるこゝろさしはかりにひかれて。は
かりをわすれぬるに候。此やうをは心得。御披露の後は。ひ
きやふらるへく候。あなかしこ。

實治二年九月 仙洞御歌合披露之後。入道正三位知家
卿(蓮性通件)以三此狀二就大藏卿定嗣卿一院奏之云々。

十番

早春霞

左

蓮性

春は今と渡りくらし天の原雲井はるかにけさは霞める

右時

下野

さほ姫の霞の衣袖さえて立とはみれと春そすくなき
廿三番

山花

左

蓮性

尋ねきて今そしめゆふ玉たすき雲ゐる山のはつ櫻花

右勝

下野

みよしのゝ奥まで花にさそはれぬかへらん道の枝折たにせて

廿六番

五月時鳥

左

蓮性

時鳥いかてあやめに引そへてなかるゝねをも玉にぬかまし

右勝

下野

五月雨のふりにし友と語らへはなれもこととふほとゝきす哉

四十九番

初秋風

左勝

蓮性

天の川河かせ涼しとをつまのいつかとまちし秋やきぬらん

右

下野

いつも吹めに見ぬ風の秋といへは身に入色のいかてそふらむ

六十二番

海邊月

左勝

蓮性

海原やなたの塩ひの眞砂地にきよき月夜のさもそさやけき

右

下野

更行は浦こく船の音までもさもすみ渡るよはの月かな

七十五番

野雪

左勝

蓮性

下折のみなふしはらいやしきに間もなくも雪の猶積るらし

右

下野

木の下露にや増るみやきのゝみかさとりあへぬ雪の深さは

八十八番

忍冬戀

左

蓮性

すかのねの忍ひに結ふ下紐のとけすやこひん年はへぬとも

右勝

下野

戀をのみしつか庵のかやむしろ敷忍ふ間に年そへにける

百一番

逢不逢戀

左勝

蓮性

たのめてもこぬ偽にふけしよをなかくや人のわすれ果ぬる

右

下野

驚かす人しなけれは今はたゝ見しは夢かと誰にとはまし

百十四番

旅宿嵐

左勝

蓮性

岩かねの枕のあらしきらてたにいねかてなるを心してふけ

右

下野

行くれて一夜宿かる松かねに何とあらしの床はらふらん

百廿七番

社頭祝

左勝

蓮性

うこきなき山松かねの岩清水すむへき千世の影そ久しき

右

下野

千年へむ流もしるし岩清水にこりなき世の末もあらはに

右蓮性陳狀以古寫二本及御歌合校合畢

松林竹雄

小林正直 校

知念武雄

昭和五年六月二十日印刷

昭和五年六月廿五日發行

發行者

太田藤四郎

東京府西巢鴨町大字巢鴨
續群書類從完成會代表者
千五百七十番地

印刷者

今井鐵次郎

東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地

印刷所

太洋社第三工場

東京市京橋區南小田原町二丁目十二番地

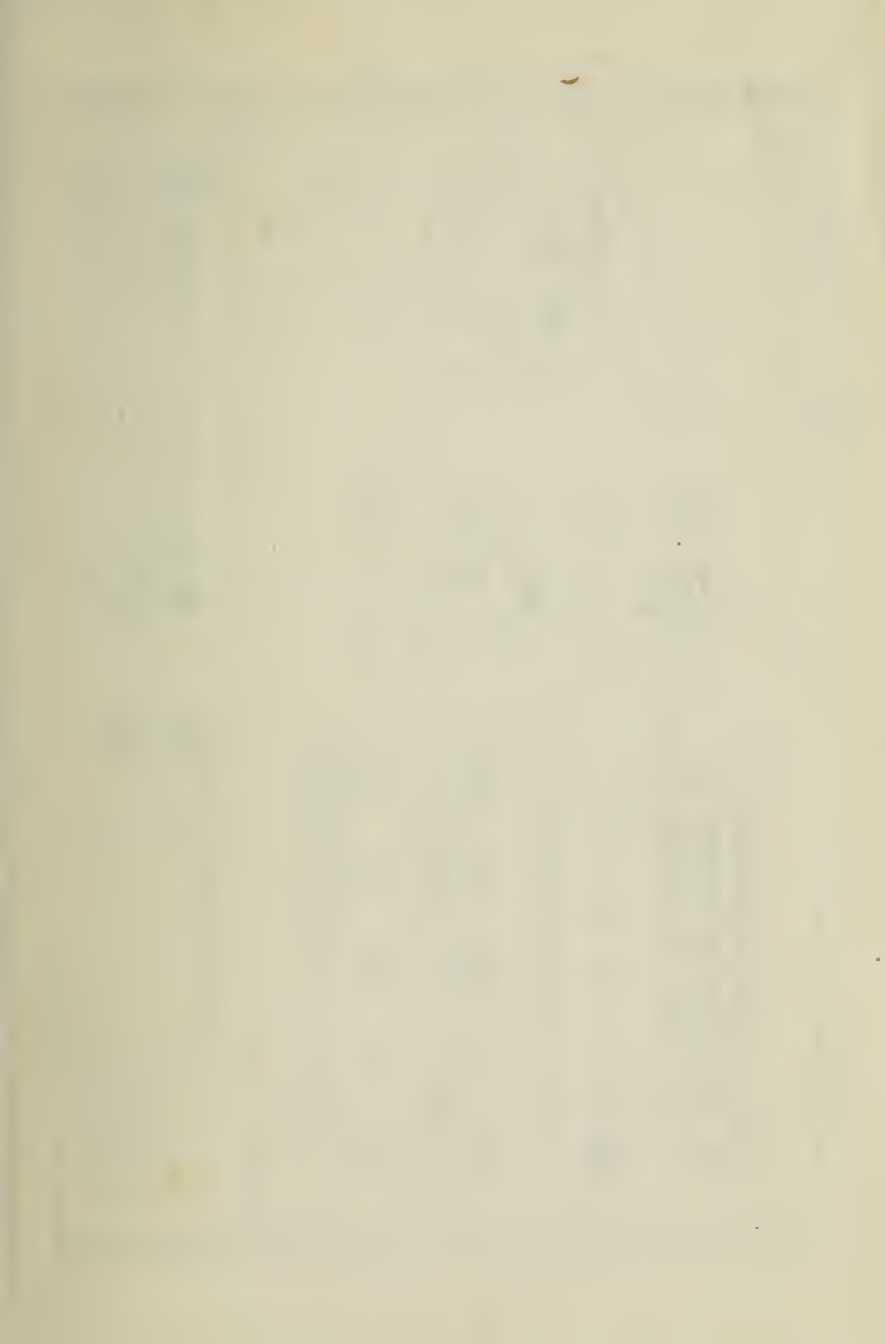
不許
複製

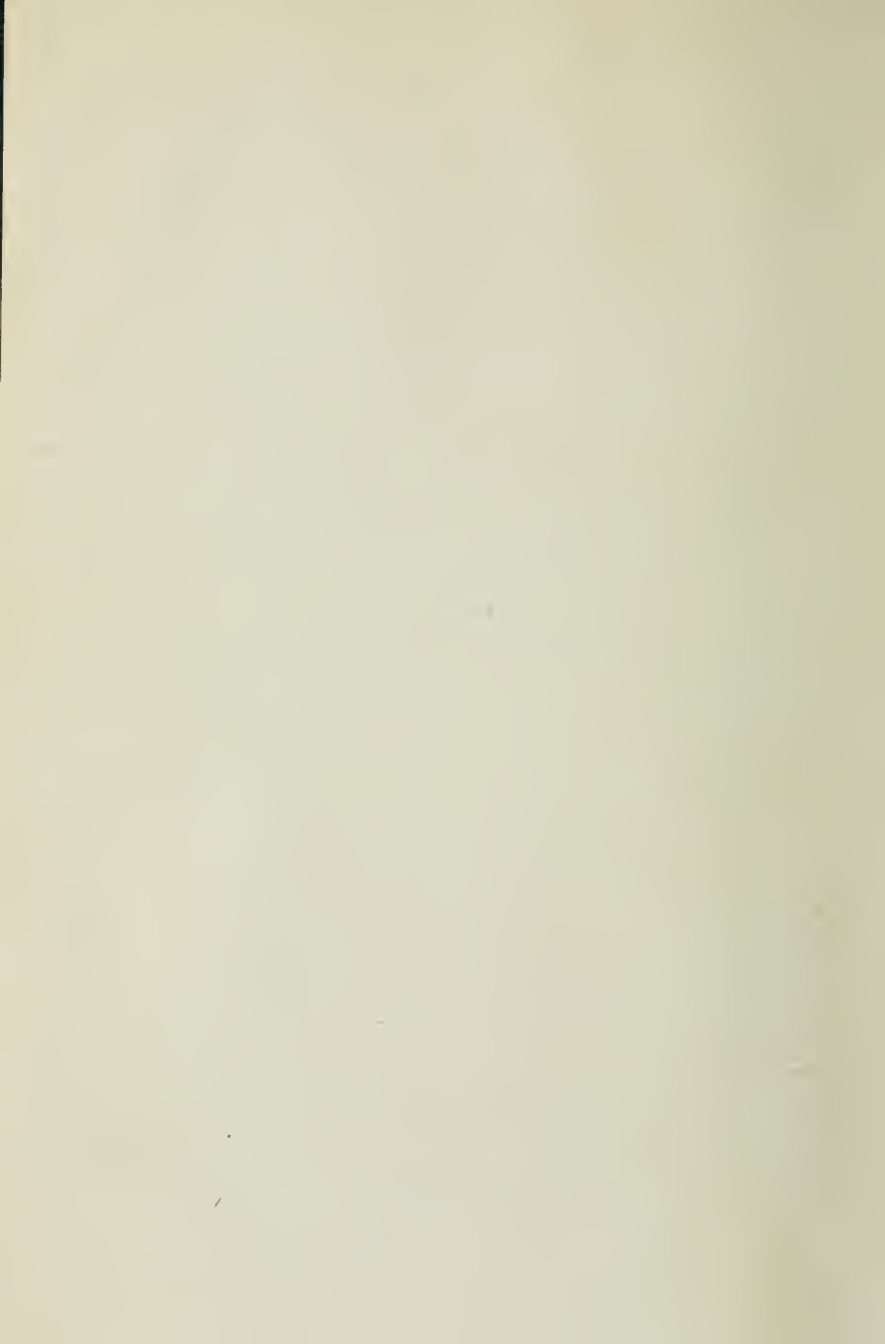
發行所

續群書類從完成會

東京府西巢鴨町大字巢鴨二千五百七十番地

振替東京六二六〇七電話穴塚〇七一八





EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 02964 7831